生田春月全集

第七巻

感想集（1）

新潮社

大正十年六月（處女講演のために名古屋に赴きたる時）

目次

感想集（I）

片隅の幸福

涙ながらに麵麭（パン）を食べ
辛（つ）らい夜毎を床の上に
泣き明かしたことのない人は
おまへ達天の力を知りはせぬ！

ゲエテ

自分自身について

一

こゝに記されるものは、ある奇異なる人間の、同時にまた平凡でもある人間の心の祕密である、ある孤獨な詩人の內生活の記錄である。彼はこれらの言葉を聲高く述べることを敢てしないであらう。それは街上の說教でもない、主義の宣傳でもない、それはたゞ私語にすぎない。口より耳へと、それは囁かれなければならぬ。でないと風に吹き去られてしまふ程に微かな弱々しい聲をもて語られるからである。だが然し、この祕密らしい囁きの中には、世の謙遜な人達、純潔な人達、眞實な人達の胸に共鳴する何物かゞ存するに違ひないと信ずる。著者はこの中に自分の熱烈な渇望に生きて來たその短かつた早春の日より、その生の晩春の落花を踏んで、自足の敎に思ひ耽る今日に到るまでの、その心の種々相を集めたいと思ふ。

著者はまたこの中で片隅の幸福を說かうとした、幸福が常に片隅に存することを。そしてまた、常に片隅に生きて來た自分の過去を物語らうとした。著者は決して幸福な人ではない、然し幸福を捉へ得る鍵をその手に握り得たことは信じてゐる。これ等の半ば思辨的な、半ば感傷的な聲は、これ等の過去十年間の散文は、彼の過去の詩の註釋として、あの甘い暗さと、寂しい樂しさとの世界に親しみのある『靈魂の秋』『感傷の春』二つの詩集の讀者諸君にはとりわけ興味あるものと思ふが、またすべての幸福を求めてゐる人、美しい生活を愛する人、眞實に生きんと欲する人にも、全く無意味なもの、無關心に値するものだとは考へられない。

もとよりこの小さな若い未熟な著作者は、彼は飽くなき野心の狼ではない、曾つて文壇の視聽を集めんが爲めに何

等の努力もしたことはない、詩壇の片隅に漸く顏を出した、かの十八歳の少年の日より今日まで十年の短かからぬ年月を、常にその片隅から引出されないで靜かにひとりで歌つて來た、弱い心が時には寂寥に泣いたとしても、自分を見詰めてゐることによつて十分滿足してゐられたからだ。縱橫の社交の手腕をふるつて文學者間に或種の印象を與へるとか、突飛な試みによつて讀書界の視聽を聳動するとかいふ事は、この內氣な人間の堪へるところではなかつた。さればその彼が片隅の幸福を說くことは決して不當のことではあり得ないであらう。いかなる場合にも、市場で叫ぶ香具師とはなりたくない彼は、群衆の注意を喚起せんが爲めに、あらゆる奇語と手品と約束との魔力を用ゐることを敢てしないけれども、この人生の華やかな廣間の一隅に小さな謙遜な輪をつくつて、靜かにしめやかな物語を交したいとは、その不斷に熱望してゐるところである。それゆゑ、この第一の散文集より以後に、私によつてなされる小說風の物語や、身上話や、打明話や、議論や獨白やは、毫も文壇的野心のための努力といふ誹を受くべきものではない。孤獨を愛する詩人は同時に自己の孤獨を尊重してくれる懇篤な友人を求めて、それ等の人々と子供のやうな樂しい打ちとけた群れをつくりたいとの欲望を抑へ得ないからである。

二

世にはただ自傳家（Autobiographist）としてのみ存在し得る一種の著作家がある。彼の畢世の大作はただ憫れむべき失敗の作たるに過ぎないであらう。彼にはただ自らの小さな喜びと悲しみとを自らの口によつて語る外の才能は與へられてゐない。彼は永遠に一個の小抒情詩人たるに止まる。彼は決してシェクスピアたるを得ない、ゲエテたるを得ない。彼はその最大に發展した場合にも常にハイネであり、ヴェルレエヌである。そして、若し運命が彼に最上の幸運を與へたならば、彼は十分なる名聲を享受し、文壇の花形とさへもなるかも知れない、が、實際に於ては唯だ純情眞實

なる第二流の主觀詩人たるに過ぎないであらう。若しまた、悲運を與へられたならば、彼は涙の中に溺れて、自らの嗚咽によつて窒息してしまふであらう。よしその涙の海の中から彼の小さな魂が死骸として浮んで來ることがあつても、それは散文の、韻文の小さなその自傳のあはれむべき斷片に過ぎないであらう。それはワイルドの "De Profundis" の如く、ジョオジ・ギッシングの『ヘンリイ・ライクロフトの私記』の如く不朽の名品であるかも知れない、がその場合に於ても、讀者はその作者に對して親しみの情は感じても畏敬の念を覺えることはあるまい、否、場合によつては憐憫をさへ感ずることがあるかも知れない。卽ち、彼等は尊敬せられずして愛せられる側の作者に屬する。ワイルドの如き普通愛せられる作者とは思はれないかも知れない、然し私は數年前その "De Profundis" が『獄中記』と題して初めて邦譯せられた時、秋雨の蕭々と降りしきる半日の間、甘い悲しみをもつて讀み耽つたあとで、日記にかう書き記したのを覺えてゐる。『今日ワイルドの獄中記を讀む。いといたく身にしみぬ。彼もまた愛すべかりき』と。そして、そして私もまたかやうな著作者である。私はいつともなくこの悲しい、然しその悲しい中に慰めもあり、誇りもある自覺に到達した。それは決して昨日今日のことではない。あらゆる場合に不運であつた私も、ただこの自分の天分の認識に於てのみは幸運であつた。これは親切な先輩の指示があつたからでもあらうが、それよりもより以上に、私が常に自己の內心の聲にのみ耳を傾けて、文壇的の功名心をはじめ、あらゆる不純な誘惑を避けて來たからである。かうして私は自己の道を失つたやうに思つた時にも、根本の自己を失ふやうなことはなかつた。私の友には私が畏敬せられないことは容易に首肯出來よう。それと共に彼は私にある愛情を感ずるかも知れない。若し私が愛せられることを確信してゐるとすれば蟲がよすぎる。然し、尠くとも私と氣質（テンペラメント）の相似てゐる人々だけは、私のかうした片隅の幸福を樂しんで、この小さな運命に滿足して行かうとする心を愛してくれるかと思ふ、それだけでいいのではないか。

Shakespeare on us, Milton for us, Burns with us. といふ句がブラウニングにあるさうだが、この難解な句の意味はよ

くわからなくとも、私も著作者には拙くとも二種類あると思ふ。一段高いところに立つて教へ導かうとする人と、その群れの一人として、苦樂を共にする人とである。そして私は勿論後者である。私は甚だ無能の代辯者であらう しかもなほ一個の代辯者たるを失はない。元來、すべての詩人、すべての藝術家は、それぞれの度に應じて人類の代表者である。私といへども、なほいくらかの人々を代表する。それらの人々にとつては、私もなほ價値ある著作者たるを失はない。そして私はどんな人々を代表してゐるであらうか? それをここに斷言することは恐らく無用の業であらう。それはこの文章の間に既に暗示されてゐるであらうし、ここに集められた文章の內容が自からそれを示すであらうから。

三

文學者と俳優とはその同じく公衆の前に立つことに於て一致してゐる。俳優は普通美しい粉飾を凝らして公衆の前に立つのであるけれども、文學者は常に赤裸々の姿で公衆の前に立たなければならない。これは多少可笑しく響くかも知れないが、文學者が俳優より尊いのは、他の何事よりも後者が常に他人に扮するに反して、前者が常に自己を物語ることに存するとさへも言ひ得られよう、俳優といへども結局自己を表現するに過ぎないといふ學者的の考究はあるのだけれども。文學者は公衆に直接面接する事は無く、それは稀れなる例外であるから、この故に彼は容易にその衣裳を脱し得るのだとも考へられるが、自分の裸體を鏡面に見るのに羞恥を覺えるといふやうなことは、精神上に於てより多くあり得るし、自己の內奥の祕密を直視することが太陽を直視するよりも困難なことは人の知るところである、かくて我々はともすれば顧みて他を言ふの人となる。けれども我々は常に素顏でゐなければならない。我々は人生の俳優であつてはならないからだ。

然るに、こゝに極めてシャイな、若くは、否それ故に、プラウドな文學者がある。彼はすべての大膽なる告白を破廉恥だと考へる。ルソオが『懺悔錄』を書いたのを、そのあらゆる失錯よりも一層赦しがたいことのやうにさへ考へる。そして彼自身は最後の一瞬まで假面を脫しようとはせず、時に二重の假面をさへかぶる。例へばプロスペエ・メリメエの如きがそれである。して見ると、最も厚顏無恥な人間が最も率直であり得るわけである。だが、私はそれが逆に言ひ得られると思ふ、そしてその逆の事實が原則ではないかと思ふ。私自身の經驗によれば、公衆の前で最も大膽な人が厚顏なのではない。多くの場合、それは正反對である。內氣な臆病な人間の手に執られる時、ペンは實に雄辯に大膽に語りはしないか？　いづれにしても著作者にはたしかにかうした二種類がある。そしてそれは各の氣質の相違である。その優劣は敢て問題とする必要はない。

さて、さうして私はそのいづれに屬するか？　私は、昔からジァン・ジァックの好きな私は、勿論、自分の「靈魂の祕密」を示すことを、敢て辭するものではない。私はすつぱだかで公衆の前に立つ。いかなる衣裳も私の心の裸體を蔽うてはならぬ。ズボンの破れ目からちらちらその肌をのぞかせるが如きは、娼婦の行ひに類する卑しむべきことである。私はハイネと共に、「蔽ひものは魂から落ちる。そして汝はその美しい裸形を眺め得る。そこには一つのしみもない、ただ傷がある。ああ！　ただ傷がある！」が言へたらばと願つてゐる。私は自分の美點のみならず、弱點をも、自分の弱さも愚かさも、醜惡も背德も(若しそれらしいものが少しでもあらば)殘らずさらけ出してしまひたい。憚るところなくすべてを言ひたい。自分を淸めるのはただこの方法の外にないからである。そこで、私と讀者との關係はよそ行きのしかつめらしいものでなく、極めてうちとけた intime なものとなり得るであらう。これは更に喜ばしいことである。然し、こゝにはその腹藏なさが十分だとは言へない。今後私は專らそれに心がけて行きたい。稠人環視の間で行住坐臥し得るものは最も幸福な人である、そしてその爲めに彼の魂が洗ひ淸められ、彼の生活が美化せられ、彼

に存する悪い部分が消滅するならば、その人は二重に幸福であらう。（大正八年六月ある機會に）

碎かれたる魂

寶石は一度び碎かれるとまた何等の價値ももたぬ。然し、人の魂は一度び碎かれなければ、或は二度び三度び碎かれなければ、ただ動物の魂たるに過ぎない。碎かれたる魂は磨かれたる寶石にまさる。悲しげに見えるものは常に美しい、碎かれたる魂の持主は常に悲しげに見える。

×

人間のあらゆる不幸の中には言ふべからざる魅力がひそんでゐる。それは既に美しい詩である。恐らくは肥滿した赭顏の實業家に象徵され得べき幸福なる世俗の幸福ほど散文的なものはない。それはその最も豪奢華麗の色彩をもつて輝くとき、最も堪へがたいものとなる。散文的ならぬ幸福はただ不幸なる幸福の外にはない、片隅の幸福の外にはない。片隅には常に美しいものがひそんでゐる。淸らかな花は草かげに身を潛めてゐる。碎かれたる魂は片隅を愛するのである。

×

魂が碎かれる時、嗚咽の聲が胸をふるはせる、それは悲痛の絕叫となつて發しさへもするだらう。だが、それはやがて靜かになる、敬虔な沈默がそのあとに來る。それからまた、更によりよい場合には、かのラオコオンの像の如くに、何の叫びをも嘆息をも發しない、靜かにそれは碎かれてしまふ。

×

不幸なる人々の沈默ほど意味深いものはない。何等の愁訴も悲嘆もないところに、最も大きな苦痛がある。饒舌な苦痛はすでに悲劇的な尊嚴を失つてゐる。沈默の中にのみ悲壯の美は存するのだ。

×

私はあの高貴な羅馬皇帝の私生涯を想ふときほどに、沈靜な悲哀の慰藉を感ずることはない。この精神的にも皇帝の尊嚴を身に帶びてゐた人は、マアカス・オーレリアスは、基督やソクラテスの壯烈な殉難にもまして私の心を深い感動に誘ふ。それはかの二人の偉大な殉教者の一生のやうな光彩を有してはゐないであらう。然し、浮薄淫佚なファウスティナの良人として、無能無識なルシウス・ヴエルウスの共同執政官として、羅馬末期の難局に身を處したこの高貴な人の日常生活の殉難は、それゆゑに、その地味なものであるが故に、一層我々にとつて親しいものではなかつたであらうか?

ただ然しマアカス・オーレリアスは片隅の人ではなかつた。彼は皇帝であつた。そして或る論者は、この一事をもつて彼の不幸を二倍に見ようとした位である。たしかにこの皇帝は生涯、人に知られない片隅を索めてゐたに相違ない。人の師表に立つといふことは、德行あるストイックの哲學者にとつて、よりよき試練だとは思はれたらう、自分に與へられた拍車として、天の恩寵に感謝したい氣持をすら起させたであらう。然し、彼は決して自分が皇帝である事を世俗的な意味で喜んだとは思はれない。

×

私をして言はしむれば名聲を求めるのは不幸を求めるのである。完全な地上の幸福は完全な孤獨に伴ふ。そして名譽な地位はその高ければ高いほどそれだけ孤獨の喜びを蠶食してしまふ。人が全く無名である場合、彼は十分に自己のものであり得る、けれども、名譽の高くなるにつれて、人はそれだけ他人に隷屬することになる、それだけ個人と

しての自由を失ふこととなる。實際、我々が世に名士と呼ばれるやうな、何處へ行つても他人の注目から免れること が出來ない、その一言一行は果て知れぬ批評を惹起する、そしてその人の時間はその大部分を他人のために捧げられ なければならない、さうした人になつたならばそれは、果して一般に想像せられてゐるやうに幸福なものであらうか？

人が知名になるとき、それが偉大な人々でない限り、常に非常な誘惑と戰はなければならぬことを覺悟しなければ ならぬ。その人は屢々、自分の魂を汚すやうな危險に身をさらされる。その高所に安全に身を保つことは隨分苦しい事 である。勿論、他人のために働くといふ事は賞讃すべき事であり、また人が生存してゐる限り爲さねばならゐ義務で もある。また他人に注目せられてゐると感ずれば人はおのづから自分を善くして行くであらう。然し、それだけの力 の無い人が、さうした地位に置かれたならばそれは悲劇と言はなければならぬ。彼は僞善の徒となり、矯飾の徒とな る。しかも人は名譽を求めて倦むことを知らない。他人の評判の奴隷となつて自分の生活を失ふことを悔いない。あ あ、なぜ人は自分に相應した地位に滿足することが出來ないのであらうか？

×

私の想像にしてあやまたなければ、マアカス・オーレリアスは悲しさうな表情を有してゐたに相違ない。常に微笑を 含んで快活な面持をしてゐたとしても、その微笑の底には悲しみの滓が淀んでゐたに違ひない。そして若し果してさ うとすれば、それ故にストイックの哲人がどうして何等かの非難に値しなければならないか！　德行の人の幸福は世俗 の標準をもつて測ることは出來ない。「個人的な幸福は深い性質の人にあつては常に多少の憂ひと結合してゐる」とへ エゲルは言つてゐるさうであるが、全く、人が利己的な、世俗的な、そして物質的な幸福に醉うてゐる時、その顏は 輝いてゐるに違ひない。然し、德行ある人はそれとは違ふ。その人にとつては自分の個人的な幸福は一種の罪惡のや うに思はれるであらう。彼にはより高い幸福がふさはしいのである。高貴な人にあつては、その悲しげに見えると

いふことは、その人が不幸な人だといふ反證にはならない。そしてより高い幸福は――それは happiness(ハッピイネス) に對して blessedness(ブレストネス) と云つてもよい――碎かれたる魂にのみ與へられる。魂が碎かれれば碎かれる程、人は美しい德行の人となるのである。

私はマアカス・オーレリアスの莊嚴な憂愁に充ちた顏を夢みてゐる。

×

私の心は常に卑しく濁つてゐる。私は容易に幸福に輝く顏を或る反感なしに見ることが出來ない。よしその幸福がいかに愚かなる幸福であるにせよ、私はそれを喜んでやらなければならぬ筈である。少くともさうした反感なくして進んで憫れんでこれを見なくてはならぬと私は深く自分を戒める。ああ、私がその幸福を喜び得る人は、この世界にあまりに少ない、しかも私は世界に幸福を齎(もたら)さんことを願つてゐる――ああ、これは何といふ矛盾であらう。私は自分のこの矛盾を恥ぢる。

然し、然し、私のいふ幸福は世間の人の云ふ幸福であらうか？ 美しい衣服(きもの)を纏ひ、寶石を指に輝かし、壯大な邸宅にすまひ、自動車によつて出入し、美妓を擁し、骨董を弄(もてあそ)ぶやうな幸福であらうか？

いや、私の幸福はそれとは違ふ。私はさうした幸福の空しさに堪へられない、それは砂上の樓閣に過ぎない、運命の一波動は容易にそれを顚覆せしめるであらう。いかなる世俗の榮華といへども、死は一たまりもなく打碎いてしまふ。運命によつて、死によつて打ちほろぼされてしまふ幸福は、いかばかりあはれむべきものであらう。私はそれを時流の形容詞を用ゐて安價な幸福と呼ぶ。そして世上、幸福の名を以て呼ばれるものは多くはそれである。然し、我我の求むべきものは、かうした安價な幸福であつてはならない。

×

ゲエテは「人間の最上の幸福はたゞ人格あるのみ」と歌つた。多くの感嘆に堪へないゲエテの箴言のうちでも、この語ぐらゐ私の頭腦に銘記せられてゐるものはない。我々は我々の賤しんでゐる陋劣な人間のいかなる成功、いかなる勝利に對しても、常に憐憫をもつてのぞむことが出來る。彼の人格にして卑劣取るに足らないものであつたならば、彼の幸福に何の羨むべきものがあらう。これに反して、純潔な人々、德行ある人々、高貴なる人々の悲運には、羨むべきいかに多くの理由が存するであらうか!

×

あらゆる不幸と苦痛と――然して幸福がある! 私は敢てから叫ぶ。

涙の中に樂しみがある、苦痛の底にまことの歡喜がある。涙の中の慰めを知る人は多い、然し苦痛の中に歡喜を汲み取る人が幾何あるか。若しあらば私はその人の前に跪きたい。その人こそは地上の最も敬虔な人である。神を求むる人、神に近づきつつある人である。

然して生田春月よ、汝は? 汝賢しげに口をきく汝は? 此時、私哀れなる私は、をののく胸とあからめる顏とをもつて、醜い姿を人のかげに隱して嘆ずるであらう。

「ああ、私はドリイマアだ!」

×

女のやうな、すべてのものを愛する少女のやうな軟かい心をもつて私は平和を愛する。私は市街の兩側に桃や櫻の木を植ゑつけ、公園には美しい女やすぐれた詩人の石像をあまた建て、あらゆる藝術をもつて人の世を飾りたいと思ふ。詩をもつて、繪をもつて、彫刻をもつて、とりわけ一番すぐれた藝術なる德をもつて、人の世を飾りたいと思ふ。

私はすべての人を愛し、すべての人を抱擁したいと思ふ。人の心の美しさ、性善の喜びに感謝の涙を注ぎたいと思

ふ。私はすべての人の生活の努力を限りない敬虔の眼をもつて眺めずにはゐられない。
初めて人を戀ふ少女のやうな心をもつて私は人生を愛する。私はこの世界を自分の夢想(ドリイム)の舞臺として、絶えざる陶醉に生の讃歌をうたはずにはゐられない。神のなさけぶかい手が我々を導いてゐることを感じて、有情無情のあらゆる被造物に、溫かい接吻を送り、美しさ限り知られぬ天地の調和を感得して、セント・フランシスの一人の弟子ででもあるやうな晴れやかな曇りのない心持で、太陽を讃美したいと思ふ。
このとき、私は最も多く自分自身に醉ふ。これが私の中の處女である。爽かな春風のそよぎの中に、天地の榮光に圍繞されて、私の處女性(ヴァジニティ)はをどり狂ふ。少女の夢は何といふ美しい可憐なものであらう! だが然し、それは碎かれやすい。それは未だ碎かれない魂の舞踏である、そしてその舞踏は容易に破碎の原因となるものである。謂つて見れば、それは碎かれるための準備時代なのである。自分の不幸を嘆じてゐるものは眞に不幸になる。碎かれたる魂の喜びを歌つてゐる者は魂を碎かれる。だが、私は幾度運命のむごい打擊を受けても、どうかしてこの處女の心を失ひたくないと思ふ。

×

私は戰ひを欲する。私はあらゆる人の中の最も狂暴なる者でありたい。私はロベスピエエルを夢みる。私はネロやヘンリイ八世やイワン暴帝等の血を脈管に感ずる。けれども、世上、誰か暴君でなかつたものがあらう! 世間へ出てよく屈してゐる人も、その家庭に於て專政君主の非道を行ふことは我々の周圍に屢々見受けるところである。現に私のなくなつた父の如き、さうした人であつた。また他人に對して、自分の妻や子に對してすらも全然謙遜な人は、或ひは自分自身に對して殘忍を極めるのではなからうか?
私はあらゆる不德と僞善と——とりわけ僞善を見るとき、私の血の頭上に逆行するのを覺える。私はただ戰ひがあ

るのみだと叫ぶ。この時、私は聊かの寛容も知らない。德の偶像崇拜者マキシミリアン・ロベスピエエルよ、ああ、汝もこのやうであつたか？　私のこの憎惡、呪詛の熱憤の中には、いかばかりの暴君の狂暴がひそんでゐるであらうか？ただ私の狂暴は私の心裡の外には出ない、それは、自分ながら滑稽に思ふやうに、たか〴〵原稿紙のうへ以上に出ない。そして私のこの憎惡、呪詛は最も多く自分自身に向けられ、最も多くの戰ひは自分自身に向つて戰はれる。私は自分自身に對して殘酷なその人々の一人なのであらうか？

此の機會を利用して一個のコンフェッションをすれば私には狂に近い憎惡心がある。私は實に復讐の子である。曾て、ダンテは自分を流竄に處した敵黨を賞讚する者があると、それが女子供であつても、石をも投げつけん許りの勢ひだつたと云ふ。こんなところに千古の天才を例に引いて來るのはまことに烏滸がましい次第だが、その必要があつての事である。私は實にダンテを楯に取つてこの復讐心を辯解し來つたのである。

ダンテの天分なくしてダンテの惡德をもつ、これは神樣の皮肉だ。ハイネの云つたやうに、神樣は誰よりも皮肉屋である。內田魯庵氏よりも、正宗白鳥氏よりも、將たまたハイネ自身よりも、更に更に大なるイロニケルである。

ダンテの崇拜者、傳記者等は、かうした復讐心をこの大詩人の爲めに惜しんだ。然し、私は今意見を異にする。すべての惡いものから善いものが生れる、──私も私の復讐心をいいものの芽だと思ふ、少くとも此の心から何等かの善いものを生まうと思ふ。ダンテにあつては『神曲』地獄篇の悽慘な場面が生れた。私にあつてはまだそのいいものが何であるか分らぬ。恐らくは此の心を無くする事であらうか？　さうだ、それは間違ひのないところだが、その外に何か？──

×

凡ての人は戸を叩く、されど開かれたる戸はあらず。

凡ての人は皆求む、されど與ふる人はあらず。
我等は叫ぶ、來れ、來りて我を救へと、
されど來るものあらざるなり、來りて救ふものあらざるなり。
今は實にその時である。(恐らくは空しく求める時である)賢しげに口きく者も、愚かしく口きく者も、博學者も、無學者も、君子も、小人も、凡て期待の眼を輝かしてゐる、願望の手を擧げてゐる。彼等は各その求めるものを求めてゐる、――超人を求めてゐる。神を求めてゐる。或は未だ名付けがたい者を求めてゐる。然して誰か「我は汝の求むる者なり」と云つて、彼等の熱い渴望の上に下つたか?――星は永久にベツレヘムの上に輝かないか?
私は既に凡ての求める聲に飽いた。然し與へられるまでは求めなければならぬ。これが我等の運命である。(大正三年四月二十六日)

新生活の夢

「もつといい生活を! もつと高い、もつと美しい生活を!」とは、我々の不斷の渴望である。この現在あるがままのやうな生活は、到底堪へることの出來ないものである。最早何等の氣力をも有たない、磨滅し盡した老人でない限り、誰か「もつといい生活を!」と欲はないものがあらう。
この現實生活ほど――その日その日のわづらはしい、退屈な生活よりも、醜惡な、無味乾燥な、厭惡すべきものはない。されば、我々は常に新生活の夢を抱いてゐる。そこでは外部の事情のみならず、我々自身が一變して、より高貴な、より美しいものとなるべき新生活は、まことに深くも我々の魂を魅し去る。「生活を一變しなければならぬ」と

は、常に常に哀れなる日常生活の奴隷の抱いてゐる Sollen である。そして又、その生活を一變し得ると信ずることは彼等の希望であり、慰藉である。我々靑年の前途に横はつてゐる地平線の彼方には、ある未だ照らさなかつた光が眠つてゐる。我々の希求は、常にその光にかかつてゐる。そして我々靑年ほど、自分といふものに不滿を感じてゐるものはない。我々は自分の周圍に滿足しないと同じ程度に、自分の內部にも滿足してゐない。靑年は殆んど例外なしに厭世家(ペシミスト)である。これは彼等が人生をよく知つてゐる爲めであるといふよりは、彼等があまりに純潔である爲めに外ならない。

かやうに純潔な靑年に取つて、日常生活よりも恐ろしいものが何處に見出せるであらうか？ 其處には我々の夢想を片つぱしから打壞さうとする現實が支配してゐる。其處では人は決して韻文で語ることをしない。其處では金貨が人を支配してゐる。其處ではいかなる哲學者も詩人も、最も空虛な皮肉屋をしても、巧みに乘ぜしむるの隙をこしらへずにはゐられない。其處には私がここに書くことの出來ないやうなあらゆる善からぬこと、美しからぬこと、恥づべきこと、悲しむべきことが堂々として行はれてゐる。其處は慘澹たる戰場である。ストラッグル・フオア・エキジステンスの、殆んど目にも見えない戰線である。其處では一のヒロイックな事件、一の悲壯劇の代りに、十の散文的な小さなうるさい出來事がある。ごたごたがある、煩雜がある、茶番がある。それを一々處理して行くことが我等の精根を疲らしてしまふ。

生活するといふことは——他人の豐かな麵麭を喰ふことではなくして、自分の儲け得た乏しい麵麭を喰ふといふことは、まことに重い終身の勞役である。そして、ひとりこの事が日常生活の脊髓をなしてゐる。額に汗して自ら贏ち得た麵麭を喰ふことなくして、容易に他人の妥協を責め、他人の不純を罵り得る「眞面目」な理想家達は、まことに氣樂な人々である。けれども、さう迄氣樂でない身分の人間にとつては、罪人が罪人を罵ることが出來ないやうに、そ

んなにも容易に人を咎めることが出來ない。こんなに、我々の生活はみじめに淀んでゐるのである。

ああ、人はいかに久しい以前から、空を飛ばうともくろんだことであらう。小鳥を羨んだ歌は多くの詩人によつて歌はれ、多くの俗謠に織り込まれてゐる。人間は既に已に地を這ふことに飽きた。私は子供の時、夕やけの眞赤な西の空を眺めて、あの鳥が飛んで行つて消えてしまつたあたりには、どんなに善い處があるだらうと思つたことを憶えてゐる。その時のやうに、今も私は新しい生活にあこがれてゐる。其處では舊いものが凡て滅びて、新しい生々したものが出て來る、其處では私もこの世に有用な人物になれる、其處ではありとも知れぬこの渾沌たる「自己」をしつかり摑むことが出來る、其處では自分の一切の醜さや、賤しさが失はれて、一瞬の感激の狀態が不斷の狀態となる。其處では自分は新しく生れた赤兒である。其處ではすべてが美しく正しいであらう。卽ち、我々の夢想する新生活は美しい理想鄉(ユートピア)に外ならない。

けれども、今日舊い生活が終つて、明日から新しい生活が始まると云ふべきものではない。既にワイルドも「ダンテを愛好するあまりに新生活と呼ぶけれども、それはもとより新しい生活ではなくて、發展し進化して來た舊い生活の續きに過ぎない」との意味を“De Profundis”の中に書いてゐる。また何人もこのことは熟知してゐる筈である。けれどもさうは考へたくないのである。人間は一足飛びを常に欲してゐる。それは人間の怠惰な卑怯な性質を最もよく現はすものかも知れない。だが我々は怠惰であつてはならない。卑怯であつてはならない。一步一步のたど〳〵しい步み、一日一日の努力を外にして我々のより善くより美しくなつて行く方法は決してあり得ないのだ。

されば此の最も散文的な現前の日常生活を蔑視してはならない。それは最も尊いものである。我々はその中にあつて、日每に甚だ僅か宛(あて)ながら、舊生活を破壞し、新生活を建設して行くことが出來るのである。今華やかな悲壯劇の主人公として傳はつてゐる多くの偉大なる人々と、その生活の日にあつては、地味な日常生活の主人公であつたのだ。

偉大なる人々の偉大なるは、彼等が散文的な生活によく堪へて、しかもその魂を俗塵に委ねなかつたからである。

（大正七年）

女性の心『女性の悲しみ』改題

「栗の花！　栗の花！　塵芥が集つて穗になつたやうな栗の花！　おまへはそれでも花なんだね。なぜそんなに醜く生れたんだらう。おまへもやはり不仕合だね。私のやうに……

灰色に煙つた空から、しとしとと降る絹絲のやうな雨が、おまへの身體を傳はつて、ポトリポトリと地べたに落ちてゐる。丁度、私の涙のやうに……

オオ、おまへは泣いてゐるのだね――さうでせう、さうでせう。おまへには、溫かい、そして甘いキスをしてくれる、あの美しい蝶々が一寸だつてとまつてくれないのだものね。醜く生れた私とおなじやうに……

さうした寂しい時がすぎて、やがて實を結んでも、ただ一羽だつて啄んでくれる小鳥があるだらうか、鬼のやうなあの恐ろしい恐ろしい實を……

お泣き、お泣き！　醜い私といつしよにお泣き！

泣いて、泣いて、おまへの醜い身體が爛れはてて溶けてしまふまで……ね、かはいさうな栗の花！」

ある少女はかう言つて嘆いた。この短い文章に籠つてゐる悲しみを私は何と言はう。かのバイロン卿のやうな、莊嚴な調子で、世を憤り、永遠の懷疑に惱み、運命を呪ふ男子の慟哭とても、かうした女性の嘆きより痛切だとは、私には思はれない。それは曾て詩人が海軍の軍人の肩章(エポレット)にたとへて愛した花だ。それはまた私の好きな花でもある。そ

の花に少女は自分をたとへて悲しんでゐる。

醜婦！　ああ、私はこの一語に含まれてゐる無量の悲しみを、殆んど想像する事さへ出來ない。いや、私はこの一語を發するごとに、どれ位の努力を要したであらう。それは私の有するデリカシイを、無殘に蹂躙する言葉ではないか。曾て私はある女性通によつて敎へられた。女性はどんなに踏みつけられても、傷つけられても我慢する、その代り彼女の容貌だけは尊重してやらなければならないと。まつたく、容貌は女性にとつて、その全部である、彼女がひとり恍惚として、鏡の中を見入つてゐるその自己滿足の微笑を、想像する時、鏡を愛することの出來ない女性の存在は、どんなに私の心を痛ましめるであらう！　街頭を歩いてゐる時、女性は常に男性の眼を意識してゐる。見られることは女性の喜びである。女性は攻擊せられたがつてゐる、愛せられたがつてゐる。私の心を無限の興味に誘ふかの看板娘の心理は、またすべての女性の心理に外ならない、そして今もし愛せられることに絕望してゐる女性があつたとしたならば？——

女性に取つて、彼女が異性の心を惹き付けるだけの容貌を有しないといふことは、全く致命的な不運である。それは男性が力を有しない、即ち、才能や、思慮や、意志や、勇氣を有しないといふ事よりも、更に悲劇的な運命である。併も多くの男子は、その美しくないといふ事によつて、彼女を憫笑する。況んやその不運にどうして同情する雅量を有しようぞ。人間はその反省を加へない時、著しく意地惡である。そして多くの人間は反省することを知らないのだ。

今若しかりに、私が隻脚有たなかつたとしたならどうであらう？　それが他人に何の迷惑を及ぼすでせうか？　けれども人は嘲らずには措かない。私のやうな男子ならまだいいとして、若し美しい若い女が、隻脚有たなかつたら、そしてあの木の杖を腋の下にささへて、古ぼけた癈兵のやうにして、歩いて行かなければならぬとしたならば？　それは悲劇である、その悲劇はその著しい事に於て、恐らく希臘悲劇の多くのそれにも劣らないとさへ言ひたい位だ。

然し、その人はなほ幸福である、若い美しい女性でさへあつたならば！　その人はなほ拗からぬ若い男子をしてあはれさ、いとしさ、氣の毒さを感じさせるであらうから。だが、それが美しい人であつたならば？　私はもう何も言ひたくない位だ。美しい人でない時、その人が兩脚を有つてゐたとしても、ああ、それが何であらう、何であらう！

　私は年少の頃より、あらゆる不平等といふことに本能的の憎惡を抱いてゐた。これが私をしてソシアリズムに熱烈なる同感を抱かしめるに至つた第一の原因である。私は幼い眼をもつて、周圍を眺めて、彼處に宏壯な邸宅を構へて豪奢の足らざるをこれ恐れてゐるかのやうに見える富豪があり、此處に其日の食にも窮してゐる貧家のあることを不思議に思はずにはゐられなかつた、憤らずにはゐられなかつた。これは勿論、私の家が破産し、零落して、私がいろいろな逆境に堪へなければならなかつたといふ不幸に基因してゐるかも知れない。

　私は十七の歳に東京に出た。そしてその當座は柏木にあつた自分の部屋から、夜毎、四谷麴町の方へ散歩するのを樂しみとしてゐた。來るべき生活の不安を忘れようと努めながら、そして麴町のある小さな古本屋の店頭で、木下尙江氏の『飢渴』といふ本を見付けた、そして私はどんな熱心と感憤とをもつてこの書に讀み耽つたことであらう。それは渴いた土に水を灌いだやうなものであつた。そしてその時から私の胸の底には、ある一つの感情が深く深く根を下ろしてしまつたのであつた。

　けれども私の視點はだんだんと貧富、富の不平均といふやうな社會上の不平等、卽ちなほ滅却し得る可能性を有するさうした不平等よりもより以上に及ぶやうになつた。私は先天的に人間に與へられる例へば才能の高下、容貌の美醜などと云ふやうな人力の奈何ともしがたい宿命的な不平等――卽ち人の運命――といふものを考へずにはゐられなくなつた。そしてソシアリズムはこの問題に對しては全く沒交涉である、これは最早社會問題ではない、これは旣に

形而上學の問題である。これは無益な思辨の外に施すべき術を知らないところの問題である。そしていかに探索しても、私はこの現象の滿足な解釋を佛家の所謂因果の敎への外に見出し得なかつた。そしてそれが果して何の慰めにならう。それ故かうした無益な問題に思ひ耽るのは、それはまだいいとして、その爲めに悲嘆するのは決して賢いことではないと思ふやうになつた。人は自分の運命に滿足してゐなければならない。あきらめは人生の旅に最も必要な糧である。すべての幸福學は畢竟あきらめの學問の外の何ものであらう？ すべての宗敎はあきらめの敎の外の何ものであらう？ それゆゑ自分の貧しい境遇を片端な才能とに長い間無益な嘆息と愚痴とを洩らしてゐた私も、つひにこの愚痴を棄て去つた。そして今はこの不利益な事情とこの餘りに小さな才能とのもとに、出來るだけの努力をしようと決心したのであつた。

そこで私が今、この栗の花の少女に言はうとする言葉は自ら明らかである。あなたのその涙は私の感動し易い心をふるはせます、私はこの哀しい詩のやうな文學をどんな同情をもつて讀んだでせう。私はあなたのやうな少女を澤山知つてゐます。しかも彼等はなほ鏡を愛してゐる、彼等は「私は美人ぢやないけれどそんなに醜い方ぢやないわ、これでも誰々さんよりはましだわ」と思つてゐる。それなのに、あなたは何といふ謙遜な人なのでせう、あなたは餘りに自己卑下をしてゐるのぢやないでせうか？ 私はむしろ醜いと自分を思つてゐる少女ほど、世に美しいものはないとさへ思ふのです。だが、あなたはどんなに不幸であつても、決してそれを長い間悲しんでばかりゐてはいけません。丁度私が自分の貧乏な事と才能の缺けてゐる事とを運命だとあきらめて、その制限された範圍内で出來るだけの努力をしようと決心したやうに、あなたもその容貌に滿足して、その中に幸福を見出さなくてはなりません。一體、美といふものは主觀的なものです、あなたはまだ愛情に絶望するのは早すぎる。それに若しまたあなたが美しい心をおもちでしたら、あなたの容貌も自ら美しい輝きを放つに違ひありません。そして誠ある人はあなたを愛せずにゐられな

いでせう。だからあなたは自分の心を益々美しくすることに努力しなければなりません。それがあなたの美しくなる唯一の道ですと。私はこの言葉をその少女に送つてやらうと思ふ。

人間の顔はその魂の象徴に外ならない。「美しい容貌を有する人の心は必ず美しい」といふ意味をかの女性の誘惑者として聞えてゐるもとの自然派の一文學者は言つた。それはその通りである。ただ私と彼とは美の觀念が違ふ。勿論彼の方が多數の味方を得るであらう、人間の本能は世俗的な美の認識に於て鋭い眼を持つ、殊に女性の容貌の美醜の判定は一瞬を以て定まる。私はそれを必ずしも惡いとは言はない。ただ彼等が肉的の美を求めるのに反して、私が精神的の美を求めるのだと斷言するのは抑も傲慢に聞えるであらうか？　又は滑稽にしか聞えないであらうか？　アリオストオの描いたやうな鼻の長さが何寸で、額の幅が何寸と寸尺を測つて造られたやうな女性が人の心を動かさない事は古人も既に言つてゐる。そして容貌のある缺點が容易にチヤアムになり得るのも人のよく知るところである。ロダンに至つては子守女のやうな日本の小娘の花子やまた阿弗利加の土人にさへも美を見出した。彼に取つては醜は存在しないのである。ところで私は必ずしもロダンと同じ見方をするわけではない。けれども私は單に容貌の上に限らず、實に長い以前から、一般的に本質の美、より高い美、卽ち靈の美を求めて止まなかつた。私はそれについていろいろ書きたい事がある。

だが私は美學者ではないから、この問題が學問的の推究に移らなければならぬのならば、もうこれで切り上げなければならぬ。

×

特殊な女性の悲しみから、私の心は一般的な女性の悲しみに移る。

「つまれけりすてられにけりふまれけりすぐせつたなき名もあらぬ花」とある女詩人は歌つた。

「脆きものよ汝の名は女なり」とシェクスピアは言つた。

モォパッサンの『女の一生』を讀むまでもなく、可憐の少女が卑しむべき無情な男子に誘惑せられ、飜弄せられて、いたましい最期を遂げた實例は、我々の一々記憶しきれない位聞いてゐるところだ。

女性の生れながらにして授けられてゐる悲しい運命を思ふとき、私は言ひがたい憂鬱にとらはれる。

女性は自分の生れた家を棄てて行かなければならない。そして彼女の迎へられる家が彼女の生涯を限定する。彼女の夫が彼女の全運命である。そして屢々夫の變ることとは、決して幸福なこととは云へない。

勿論すべての女性が、不幸な生涯を送るものだとは、詩人的な考へとしても、あまりに獨斷すぎる。氏なくして玉の輿といふ俗諺は女性の幸福の讃歌であるやうに見える。玉の輿の眞に幸福なものかどうかは疑問だが、それはたしかに尠からぬ貧家の美婦の夢想であるのは事實であらう。またそんな特殊の例は擧げないとしても、良家の令嬢の、良家に嫁して、良妻賢母となり、家庭の圓滿を樂しんでゐる人も、隨分我々の目に觸れるところだ。

然し、私は女性がその夫と、その夫の家とによつて、全く違つたものとされるといふ事に、根本的の女性の悲哀を感ずる、彼女自身がそれを意識するとしないとは別である。

「女とは弱し悲ししいと脆しいかなる人にいだかるるらむ」といふ歌を私は作つたことがある。この歌の中には私のさうした感情が含まれてゐるのだ。するとこの歌を見たある厚顏な男は、「いかなる人をだますらんと、言つた方が本當でせう」と言つた。

勿論、或る場合には、それも本當だ。然し、この場合に於ても、女性は許されなければならぬ。國際間に於て、弱國の唯一の自己防衞の手段は、外交上の詭計にある。即ち手管にある。そしていかなる女性か手管を有しないものであらう。娼婦が男子を害ふ場合に於ても、彼女がまづ運命によつて害はれてゐることを考へる必要がある。かの厚顏

な男よりも、より皮肉により厚顏に言へば、女性があらゆる男性の愛を受け得るといふ事は、即ち娼婦があらゆる男子に對する第一の强味は、また實にその第一の弱味でなくて何であらう。

だが、これは正に男子の感情だ。個性を無二のものと信ずる男子の感情だ。女性の順應性はその保護色であり、その幸福であるかも知れないものを。

私は曾て女性の喜び、女性の悲しみを歌ふ詩人とならうと、自分に誓つたことを憶えてゐる。また事實『少女のうたへる歌』『人妻のうたへる』『ある女の一生』のやうな詩を作つた。私はゲエテのやうな女性通(フラウエンケンネル)ではない、が、私は女性的な心情(ハート)を有つてゐる、これは一面恥しく思つてはゐたが、「女性(フラウエン)の愛(リーベ)と(ウント)生活と(レエベン)」の詩人アデルベルト・フオン・シャミソオを羨む理由をもたぬのを誇りともしてゐた。ワイニンゲルは自分に於て有益な一例を見出し得るであらうなどと、心ひそかに考へることに快樂をさへ感じてゐた。けれども、私は今日、自分が自分の想像以上に男性であることに氣が付いて來た。思ふにどんな人でも、その靑年時代の初めに當つては、その實際より以上に、女性的に感じられるに違ひない。

ただ孤獨を絕對的に幸福の第一の條件だと考へてゐる私は、女性をあはれまずにゐられないことがある。即ち、女性は絕對に孤獨であり得ない。男性が女性なしに健康を保つことは可能である。女性が男性なくして健全であり得ない。かの美文家ミシェレエは「一人でゐる女は一目(め)で分る。道を步くのにも人通りの多いやうなところでは、いかにも晴れやかな輕々としたエレガントな風をして步いてゐるが、人通りの稀な寂しいところへ來ると、人目が無いと思つて安心して、その張りつめた氣をゆるめて、反抗的な心持がぐつたりとゆるんで、悲しさうな寂しさうな萎れた風を見せる。大抵はそんな年でなくとも色が褪めたやうになつてゐて、少し瘦せて、少し顏色が惡い。かうした女をまた生々した女にするのには、ほんの少しの望みと、三ヶ月の靜かな幸福とさへあればそれで十分だ」と言つてゐる。面

白い觀察だ。三十近くになるまで獨身で通して來た女性を見ると、大抵荒んで、ひねくれて、妙にひからびて、理窟ぼくなつてゐないのはない。彼女は謂はば無益に生きてゐるのだ。とさへ云ひたい位である。

だが結婚した日本の婦人は、更に氣の毒ではなからうか？　彼女はあの忌むべき家族制度のために、どれ位苦しまなければならないであらう。多くの妻は結婚當座の喜びすら味ふことが出來ないでしまふのだ。彼女もまた無益に結婚したのではないか。

然し、私の感情が女性の悲しみを強調する間に、私の理智は女性の喜びを看取することを忘れない。我々男子は、女性の感ずる極めて些細な事柄についての喜びに全く沒交渉である。彼女はその些細なもののために、幸福の日にあつても不幸を感じ、不幸にあつてもその不幸を忘れることが出來るであらう。そして我々男性は、女性の喜びにあづからないと共に、またその悲しみにもあづからない。女性の書いた心理學はない。女性の心理は、我々男性にはつひに窺ひ知ることの出來ない世界である。世の多くの女性の藝術家が、つひに男子の模倣者で終るのは寂しい事である。どうか女性が男性の鏡以上のものであることを、その人達が示してくれればいいと思ふ。（大正七年？）

ソニヤの愛

マグダラのマリヤの罪はゆるされる、なぜと言つて、彼女は眞に愛したから、肉のけがれは靈のけがれに比して何でもない。本當に何でもないことだ。

女性よ、おんみはただ愛しさへすればよい。愛するといふことを外にして、女性の生きる道はないのだから、愛することを知らぬ女王と、愛することを知つてゐる淫賣婦と――賢い人は決してその選擇をあやまることはない。

ソニヤよ、ソニヤ・マルメラドフアよ！　私の聲はおまへに呼びかけるとき、遺憾なく詩人の聲となる。そしてまた私はその感激を敢て恥としない。おまへの黄色な鑑札は公明正大である。（多くの女は無鑑札である。然り多くの人妻は）それは羅馬法王の贖罪狀より効能があるに違ひない。それは天國へのパスとなる。然し、そんなことはどうでもよろしい、天國や贖罪狀は私には用はないから。そんなものよりも私はおまへの愛をより多く讃美せずにはゐられない。ソニヤよ、靜かなソニヤよ！

曾て私は非常な感激をもつて「一人の女性は一人の男性を救ふ義務がある、一人の女性は一人の男性を救ふ義務がある。この義務の遂行を結婚と呼ぶ」と書いた。

今では、私はその眞理を信じてゐる。そして、その感激の言葉を書いた折りの、自分の純粋な氣持を考へて、涙ぐましい心持になる。

　　涙は戀のなかうどなり、
　　軟かになりし心に愛は沁み入る。
　　幸福の與へし戀は不幸に破らる。
　　されど悲しみの結びし戀は喜びに破れじ
　　ああ破船の後ただ二人殘りし男と女との戀！
　　破られたる船に海水はたのしく押し入る、
　　やぶられたる胸に愛はたのしく忍び入る。

と歌つたのも、その心持である。

涙によつて結ばれた戀でなくては、私の心を惹き付けなかつた。私はただ、不幸な境遇にゐる女性をのみ愛した。

あの女性が悲しい境遇に置かれてゐるといふことが、直に私には魅力となつたのであつた。

かうした感憤から私は家庭を持つた、また心血を注いでドストエフスキイの、あの名篇の飜譯をも始めた。けれど、小夢想家の夢想は何たる脆いものであつたらう！　仕事にも生活にもデスイリュウジョンは來なければならなかつた――人生は不幸の讃美者により多くの不幸を味はせた。そして運命は其處で意地の惡い微笑を浮べたかも知れぬ。

私はだんだんに懷疑的になつた。私はつひに絶望を樂しむニヒリストになつた。マキアヹリは、ド・ラ・ロシフコオは、ニイチエはその時私の心を誘つた。私は自分の夢想を嘲つた、自分の單純な心を嗤つた。私は惡魔の讃美歌をうたひ、力卽ち善を唱へ、君主道德の說に渇仰した。

けれども私のこのかよわい少女のやうな心は、かうした殘忍酷薄な哲學に堪へられない。ニイチエが自分のあまりにおとなし過ぎる性格に對する反抗として、自己叛逆として創出した彼の哲學は意味の深いものに違ひない。だが、癒やしがたい自分の性格に對する無益の反抗が何にならう。それよりは自分の性格に從つて自分の心の流れに身をまかせて行け！

かうして長い彷徨はつひに私を正しい道へ導き出した。今日、私は自分の弱さを恥かしく思ふ。私の絶望はあまりに早かつた、こんなに弱い心をもちながら、そんなに大膽に叫んだ人間は全く笑ふべき道化者と言はねばならない。苦痛が多ければ多いほど、我々は幸福に近づくのだ、なぜならば、眞の幸福は苦痛を經た上でなければ求め得られないからだ。この絶えず繰返してゐた自分の言葉の本當の意味を私は漸くにして悟つた。

かうして私は再びソニャの愛にかへる。今こそ私は眞にラスコリニコフではないか、自分の思想の幻影にあやつられて自分の夢想を殺したもの！　彼は今こそソニャによつて救はれなければならぬ。

そして今こそ私は纔にドストエフスキイを理解することが出來る。單純なドストエフスキイアンは可憐愛すべきで

はあらう、が、滑稽の感は免れない。人間の心は神と惡魔との戰場だ。この言葉の本當の深い意味がわからないうちは、ドストエフスキイに感激することは空虛である。

ただ、私たちに私たちのソニャの缺けてゐないことを！（大正八年）

幸福の住む處　『片隅の幸福』改題

こゝには幸福が住んでゐる。

日が一ぱいうららかに當つてゐる窓の外に張出された一枚板の上が二人には此上もない花壇であつた。緣日の夜など、二人手をとつて散步した歸りに、植木屋と暫く押問答をしたあげくに買つて來た、シネラリヤ、ヒヤシンス、アネモネ、さうした紅や紫の草花の幾鉢かゞ若い二人の朝夕を慰めた。その窓の外を步いて行く人は、その窓の中の樂しい生活をたやすく想像してあやまたないであらう。そして「こゝには幸福が住んでゐる」と考へて通り過ぎることであらう。

それは間違ひではない。こゝには幸福が住んでゐる。

だが、幸福といふものは窓の外から見ることの出來るものではない。窓の外から見るとき、どんな不幸も幸福に見えるかも知れない、またその反對に、どんな幸福も不幸のやうに思はれるかも知れない。フランソア・コペエの短篇に二人の靑年がレストオランで酒をくみながら、樂しさうに燈火のついてゐる向うの高い窓を眺めやつて、いろ／＼と幸福な人の幸福な生活を想像し合つてゐたが、その窓の中には實際は、一人の老朽した音樂家が凡てに絕望して、縊死しようとしてゐたのだといふ筋の作があるといふことだが、それはまことによく窓の外からの想像の不確かな事を

言ひ盡してゐると思ふ。然し、私の知つてゐるこの二人はたしかに幸福な人たちである、彼等自身はさう感じてゐるかどうか知らないけれど。

私ははじめ此の幸福な若い二人の生活をこゝに如實に描き出して、そして私自身幸福と呼ぶものゝ本當の姿を我が讀者に示したいと考へてゐた。が、結局それは無意味な企てに過ぎないとさとつて、そんな徒勞をしまいと決心した。なぜと言へば、小說作家としての私の未熟な手腕は、私の心がそれを見て感ずることを讀者にも感じさせるほどに的確な描寫をなし得る見込みはまづ無いと思ふから、あべこべに二人をひどく不幸な人間だと感じさせでもすると、それこそ大變で、折角の骨折も何にもならなくなつてしまふ、よしまたそれが成功しても、その生活の餘りに平凡なために大變つまらなく思はれる虞れがあるからだ。しかも丁度その平凡なところに彼等の幸福は存するのである。それで私は簡單に、この二人が僅かなもので滿足して、敢て多くを求めない人々であるといふ事を言ふだけで滿足しようと思ふ。實際、足るを知るといふ事を措いては、つひに幸福は見出しがたいのである。私がこれまで讀んだあらゆる幸福に關する古人の說は、すべてこの點に於て一致してゐる。「幸福とはその望むところのものを何でも有してゐるといふことではなくして、運命の與へないところのものはこれを望まないといふ點にある」といふ古詩人の言葉は動かすべからざる千古の斷案である。足ることを知らない人は、どんなに幸運の中にあつても幸福ではない、そしてつひにその幸運をも取逃してしまふであらう。「幸福と玻璃盃とは丁度その最も美しく輝くときに碎けてしまふ」我々が幸運の神の寵兒であるならば、決してそれに甘えてはならない、おとなしく、ひかへ目にひかへ目にとしてゐなければならない。これは幸福の兒のための金言である。

×

いかなる人にとつても幸福は常に他人のところにある。それを自分のところに見出すことは最もむづかしい技術で

ある。そして人の一生はこの技術の修業の間に空しく終つてしまふ。しかも幸福を求めて人は生きて行く。幸福は恐らく人生終局の目的である。あらゆる學藝はたゞ幸福學の一分科にすぎないとさへも言ひ得られよう。

幸福といふ言葉はどんなに空しい響をもつてゐるであらう。人間は絶えず倦むことなく幸福、幸福と叫んでゐる、だが誰が果して幸福とは一體どんなものであらうか？幸福の正體を我々に示す事が出來たらうか？「幸福といふ言葉は憂鬱な調子を帶びてゐる。これが幸福だと言つて、人がこの言葉を口にする時には、それは既に逃げてゐる。だから幸福といふものは元來たゞ無意識の中にのみ存するのだ」といふ言葉は果して誤つてゐるであらうか？私も曾つて『靈魂の秋』の自序に於て）「しかし、幸福とは抑も何ものであらう？幸福とは掬べば消ゆる泡であらうか？近づいて見ると消えてしまふ蜃氣樓であらうか？いな、幸福は空しい夢ではない。たゞ人間が幸福なるべく餘りに賢くなるのである、或は幸福の中にあつて幸福い感じない程に愚かなのである。幸福の中にあつて幸福に氣のつかない人間は、失はれたる樂園の爲めに嘆く人間である。見よ、凡ての子供は幸福を有つてゐる、最も不幸な者にも子供の時代はある」と書いた。「すべての幸福は、すべての光明は kindisch（子供らしい）なものである。無智無經驗、子供の有する凡ての心的狀態の中にのみ——あゝ、幸福はある！光明はある！」とも書いた。それは今でも間違ひではないと信じてゐる、

實際、私が今、かうして幸福の問題に思ひ耽るのは、私が幸福な人間だからではない。勿論、私が自分を不幸だと感じてゐるからである。「私も一度幸福だつた日があるだらうか？」あるとき私はかう自分に問うて見たことさへある。

幸福は長い間自分には大變緣の遠いものだと思はれた。いやむしろ、幸福は私には全然閉された寶の藏であるやうに思はれた。そして私は幾度といふことなく、遠い昔の日のことを心に喚び返して見た。昔は私もたしかに幸福であ

つた。幸福とか不幸とかいふ事が一向念頭にのぼらなかつた少年の時分は言ふ迄もなく、自分は不幸だ、不幸な人間だと、繰返し繰返し自分に說得してゐた二十歳前後の私もまた幸福であつたやうに思はれる。時とすると、自分自身を不幸に感じてゐた理由さへわからないやうに思はれる。

どんな苦痛な生活もどんな悲痛な經驗も、過ぎ去つて見れば美しいものになる。

×

ひとり寂しい心持で、この寂しさを語るべき友人があつたならば、私の手をとつてその胸に押し當てたまゝ默つて私の顏をぢつと眺めながらにつこりしてくれる一人の女性があつたならばなどと考へながら、春の夜の公園の瓦斯の光もほの暗い花かげを、默つてぼんやり步いてゐると、不意に後から柔かい手が自分の手を取つたのにびつくり振向くと、夜目にもその眼の熱い輝きの感じられるその若い女學生は、「あら、御免なさい、わたし水野さんかと思つて……」といかにもびつくりしたやうに言つて、ついと急ぎ足に行つてしまふ。若しそんな事を本當に經驗したならば、その時にはどんな氣持がするであらうか？　しかも、幸福が私の扉を叩くのもそれと同じわけなのである。こゝぞ目當ての家と思つて、幸福は力強くノックする、そして自分がカムイン（お入り）を言ふとき、「おや、間違へた、こゝは違つてゐる」とかう呟きながら幸福は行つてしまふのだ。それは私には稀らしい經驗ではなかつた。せめて幸福が下らぬ間違ひなんかして、一寸でも立寄つてくれなければいい。さうすれば、これほどの失望と苦悶とを經驗せずにすむであらうに！

かうして私はだんだんに、幸福といふものを自分と全く緣のないものだと思ひあきらめて來た。そしてたまに何かいゝ事が來ても、それが何かの間違ひのやうな氣がして當惑する、そして、今に一層大きな不幸が來る前兆ではあるまいかと疑つて、不安に胸をかき亂される。現在の幸福をナイーヴに喜ぶことなどは私には出來なかつた。

だがこれは間違つてゐる。私もまた幸福の鍵を握つてゐるのだ。幸福を何か外から來るものゝやうに思ふのは大變な間違ひである。「幸福は容易な事がらではない。それを我々の心の裡に見出すことは甚だ困難である。それを其他のところに見出すことは不可能である」とシャンフォオルは言つてゐる。幸福は或るきまつた形を具へてゐるものではない、幸福は勿論主觀的なものである。甲が幸福とするところは、乙が幸福とするところではない。けれども自分に滿足するものには、直ぐに幸福は與へられる。あまりに大きな望をもつものは、何處へ行つても自分を不幸だと思ふ。

ゲエテが言つたやうに

おまへは先きへ先きへと行かうとするのか？
見ろ、幸福はつい目の前にあるではないか
ただそれをひツつかまへる術さへ學べばよい
幸福はいつでも手もとにあるのだから

である。幸福は現在自分の心の中にあるのだ。その外の何處にもない。

私は片隅にゐる人間が好きだ。名もなく譽れもなく、目立たぬやうに、謙遜な生活を送つてゐるそれ等の人々が好きだ。それ等の人々こそ本當の幸福を知つてゐる、たとひその生計はどんなに貧しからうとも。私はどんなに古い時代からどんなに年少の時分から、それ等の人々の爲めの詩人とならうと思ひ定めてゐたことであらう。ドストエフスキイは何よりもその『貧しき人々』の作家であることによつて私を惹き付けた。私は今でもよく覺えてゐる、故瀨沼夏葉女史の筆によつてある雜誌に譯載せられたあの小說の女主人公の日記を讀んだ時の感情を！　それからまた巴里の小市民の喜びと悲しみとの詩人であつたフランソア・コペエの短篇は、いかばかり私をチヤアムしたであらう。

それは靜かな人々である。その生活は草かげに音もなく流れて行く。彼等は人生の片隅で滿足してゐる。この世の舞臺に於て自分に割當てられた役割を——それはどんな端役であらうとも——甘んじて演じて行くのである。私はそれ等の人々よりも、より尊敬すべき人々を知らない。それ等の人々は、あきらめが人間に一番大切な敎養であることを知つてゐる。そこからは恐らく死は飛躍ではなくして、激變ではなくして、おのづからなる推移であらう。生と死との境目は薄くぼかされてゐるであらう。

私もさうである、事實私もさうした生活をして來た、また一層さうありたく願つてゐる。もとよりこれは私の本意ではなかつた、私もはじめは非常な野心家であつた。私は初めから內閣總理大臣にならうとか、陸軍大將にならうとか考へはしなかつたが、でも私には大きな野心があつた、それが何であるかは讀者の容易に推察せられるところであらう。けれども今日私はそのために勞することをやめた、そしてたゞ自分の心の滿足のためばかりに働かうと思ふ。野心に、虛榮心に驅られるのは他人に隷屬するに外ならない。本當に生きようと思ふものは現前の仕事の中に生き甲斐を見出さなくてはならない。それが自分のために生きることなのだから。

世に大きな幸福といふものはあり得ない。本當の幸福は常に小さなものである。自分の生活にいろ〳〵な意味での制限を置いて、その制限の中で靜かにおとなしく生きて行く、自分に與へられた仕事を出來るだけ忠實に仕上げて行く、——これが幸福だ。人生の片隅に滿足する時、失はれた心の平和は再びかへつて來るに違ひない。これが靜かな人々の賢い人々の生き方である。

幸福は常に片隅にある。

室内旅行

×

或は仕事に疲れた夕暮の部屋の中で、或はいつともなく時候の變つてゐる壕端の並木道で、或は眠られぬ夜の床の中で、或は心の寂寥を慰めようとて、書棚の奥から探り出して、塵をはらつて讀んで行く曾ての愛讀書であつた物語の半ばに、過ぎ去つた日の數限りない面影が、うれしい悲しい一場の光景が――それは曾てあのやうにも私の心を迷はせもし、人知れぬ涙、ことさらめいた熱い溜息、心を腐らすやうな消沈、瞳を輝かした喜び、其他のあらゆる靑春の悲しさと希望と絶望との火のやうな感情を私の心に起させた――その切なる記念、寂しくはかない靑春の名殘が、あれこれと變り變りに疲れた心に蘇ることがある。それはあだかも、古い寺院を訪れて、そこの由緒ある寶物を眺め、年代記の厚い册子を手に觸れるがままに繰りひろげて見るかのやうである。そして私は今、それを寂しい疲れ果てた神經的の微笑をもつて迎へるのである。

人生は大きな賭博である。我々は自分の幸福を賭け、自分の生命を懸ける。勝たないものは負けたのである。そして私の賽の目はいつも私の思はくを裏切つた。私は敗北に馴れた。もういくら負けたとて悲しまない、勝つた人をも羨まない。ただ寂しいあきらめの微笑を浮べて、片隅に引込んで、烈しい盛んな勝負を眺めてゐるのだ。そして私は生命懸けの賭博者の運命を憐れむ、憐れむことによつて自ら慰める。そして私はもはや自分の運命の爲めには嘆かない。止むに止まれぬ人間のみじめさ、負けても負けても次の勝負に望を懸けて、絶えず昨日に欺かれ、絶えず明日の日に慰められて、自分がいかに情ない存在であるか、運命といふいたづら小僧の手に首をちぎられたり、腸を引つぱ

り出されたりする蜻蛉や蛙と同じはかないものだかといふ事も知らないこの人間といふ哀れな、此の宇宙の世間知らず、無限界のお坊ちやんを可哀さうに思ふ。けれども、さうかとて、私はすつかり賭博場を立離れたわけではない。この人生といふ賭博場の法則は極めて嚴重である、勝逃げすることは許されないと共に、負けた者といへども最後の血の一滴までも投出さないうちは、立去り得ないやうになつてゐる。此の中に入るといふ事は、そんなに恐ろしいことである。

私も賭博を止めようと思つた。最後のどんづまりに生命を懸けるよりも、今ここに持つてゐるものをすつかり思ひ切りよく投げ出してしまはうと思つた。けれども人生の勸工場に一たんまぎれ込んだ者は、たとへ途中でいやになつたとても、やつぱり後から來る者に押され押されしながら、出口までぐるぐる廻つて行かなければならない。もとの入口に引き返さうとすれば、向うから來る人にぶつ突かる虞れがあるばかりでなく、それは奇怪なことでもあり、また甚だ困難な事でもある。それよりはやつぱり前へ進んだ方がましだ。その爲め止むを得ず出口まで堪へ忍んで行つた人はいかに多數であつたらう。殆んど凡ての人はさうであつたかも知れない。

かやうに浮々と何の考へもなしに生を樂しんでゐたその最後の日と離れて、いつとも知れず生存を重荷と思ふ時期に入つた人には、あきらめの寂しい微笑を口邊に湛へて、靜かに音もなく片隅に生きるやうになつた人にとつては、今は昔の幼かつた日の思出のみが唯一の慰めである。思出は我々の追ひ出されないですむ唯一の樂園であると言つたジアン・パウルの言葉を私はいつも意味深く想ひ出す。人はみた等しく樂園に生れ、成年に達すると共にその樂園を追はれてしまふ。アダムとイヴとに象徵せられてゐる人類の運命を、人はみな其れ自身の上に繰返すのである。かくて人はこの思出の樂園にその安住の地を求めるの外はない。過去は美しい面紗である。心なく見すごして來た風景もなほ美しい絕景となる。藝術家が亂雜な實生活の中から題材を選び出して來て、それを巧みに詩化するやうに、時ほど

んな苦しい經驗をも美しい夢にする。時は偉大なる藝術家である。

私もまた、今日この樂しい思出に耽る。私の前には絶えず半生の閲歴の斷片が、あだかも展覽會に於ける一々の畫幅の如く、またスクリンの上のフイルムの如く、目前を通過する。これらの思出は、貧しい私がただ一つ集め得た寶である。あだかも男爵なにがし氏がその無限の財寶をもつて買ひ集めたあの富裕な畫廊にも似てゐる。私は私の名畫と駄作とを、運命の荒くれた手に引き攫はれて行く途中で、子供が野道の草花を手折りして行くやうに、だんだんと拾ひ集めて行つたのである。ただなにがし男爵と私との相違は、男爵の樂しみは畫を集めるにあつて、眺めるのに無いのに反し、私のは集めるのになくして、眺めるのにあるといふ點にあるであらう。さらば、今日もまたこの寂しい狹い小部屋の中に閉ぢこもつて、私の記憶の畫廊をひとり眺めて行かう。（ある年のある日）

×

クサキエ・ド・メエトルの『室內旅行』は、私の愛讀書の一つである。私は時々この小さな書物を取出しては、あの日この日をところどころ拾ひ讀みをする。私もまた室內旅行者なのだ。

一體、私ほど旅行好きな人間はない。そして私ほど旅行をしない人間はない。これは單に私が出不精の男だからといふだけからではない。旅行はしたい、然し不愉快な旅行はしたくない。そして今日に於ては、旅行は不愉快を伴ひ勝である。美しい自然は到るところに我々を抱擁してくれる。然し、どんな樂しげな野邊だとて、そのまま野宿するわけには行かない。旅人の宿る場處は旅館の外にない。そして、その旅館は人間によつて經營されてゐるものである。其處では、旅人は一個の人格として認められるわけにはゆかない。金錢がすべての標準である、尺度である。宿屋の番頭は一目で客の懷中を見透してしまふ。我々貧乏な文學者が、其處で厚遇せられないといふ事は、今更言ふ迄もないことである、あまり都人士の赴かない敦厚な土地ならばまた格別であるが、私はその金で自分の價値を定められる

ことが不愉快である。それに私の病的に鋭敏な神經、極端な內氣さ、いかなる境遇の辛酸も、年齡もこれを奪ひ得ぬ世なれぬ氣持、これが私をどんな場合にもひかへ目にし、消極的にし、引込み思案にする。そこで自から出不精になつてしまふ。

思へば私は、少年時代から、どんなにか世の中を敷居高く暮して來たことだらう。この世が晴れがましく、片隅にこつそり隱れるやうにして逃つて來たことであらう。快活な世馴れた人々の樣を眩しく眺めて來たことであらう。これは十三歲の折り、實家が破產して以來、日蔭の草のやうにいぢけて瘦せ細つてひよろひよろ育つて來た境遇の所爲でもあらう。が、やつぱり生れ付きの性格なのだと思ふ。ラフカディオ・ヘルニー小泉八雲先生は、隨分いろんな苦しい境遇を經て來た人であるにも拘はらず、一生世なれぬやうなところを持つてゐられたといふことである。あんなに子供のやうな心をもつて人生に對することの出來た人は、確かにさうであつたらう。そして私なども、もつとわるいところをもつた人間ではありながら、やはり何だかそんなたちらしく思はれる。一時は自分でどうかしてゐるのではなからうか、極端な神經衰弱か、それともいつそ狂氣の一種なのではあるまいかとさへ疑つたこともある位だ。そんなわけであるから、愉快に旅行の出來る筈はない。そこで私は今やメエトルの如く、一個の室內旅行者である。

此頃名聲ある靑年作家で、その書齋に揭げてあるトルストイ、ドストエフスキイ、ストリンドベリイ等の文豪の肖像から肖像へと巡禮することを述べてゐた人がある。これも一種の室內旅行である。然し、私の室內旅行はそんな敬虔な巡禮ではなくして、主として自由な讀書と空想と囘想とから成立つてゐる。

嘗て日本地圖を展げて、北海道の端から臺灣の端まで隈なく眺めやつては、いろいろ歷史上の事實や、風土の特徵を考へ、その空氣を想像しては、時の移るのも忘れてゐたこともある。かうした空想の旅行を樂しむためには、旅行案內の類を愛讀したことさへある。それからこれは糊口上の止むを得ざる必要から出たことではあるが、堺利彥氏の

賣文社の仕事をしてゐた時分、旅行案内の編纂をしたことがある。當人少しも旅行をしないでゐて、旅行案内をこしらへる――こんなユウモラスな話はない。が、然し世の中のことは、兎角かうしたものなのだ。そして、そこが面白いところかも知れぬ。ところで、そんなつまらぬ仕事も、私には樂しみでないことはなかつた。

專ら讀書に耽つてゐた時代は隨分長く續いた。その時分私は、同じく讀書家なる友人にやる手紙に、「讀書もまた一つの經驗である。一つの新しい書物は、一つの新しい世界である」と書いた。詩人や文學者に取つては、別に珍らしいことでも變つたことでも無いが、私も子供の時から本が何よりも好きだつた。中の間の戸棚をそつと開けて、小さな行李に一杯詰め込んである五錢白銅の一つをそつと盜み出して、――この十一歲の少年の罪は何たる可愛いものだつたらう――巖谷小波山人の日本お伽噺を買ひに本屋に走つた時分から、また夏の夜などに、赤門通りや廣小路を散步して、歸りに南江堂や、南山堂に寄つて、レクラム本を一二册宛買つて歸るのを樂しみにしてゐた二十一二歲の時分から、讀書にも飽きて、乏しい財布をはたいて、ボチエリや、ロセツテイや、バアン・ジョンスなどの畫集を買つて來る今日に至るまで、書物は常に私の唯一の慰藉者であつた。

我々は最も親しい友達と談る時でさへ、折々氣まづい思ひをしなければならない。書物だとそんなことはない。厭になればいつでも閉ぢてしまふことが出來る。私はこゝで長い書物の讚美が書きたいとさへ思ふ。けれども同時に私は結局書物も人を倦ませてしまふことを知つてゐる。あんまり澤山書物を讀むのは、舊約聖書にもあるやうに、「多く學べば身體疲る」で、ただ疲勞と――そして一層惡いことには、獨創性の失喪とを結果するにすぎない。

そこで私はうつらうつらと何の爲す事もなく、無益な空想と回想とに耽る事が多くなつた。とても實現されない事を空想して何になると、プラクティカルな臀に水をさゝれる事もあるが、實現されないからこそ空想で樂しむのだと、勇ましくそれに抗辯して、私は空想上のきれぎれな樂しい閱歷を倦む事もなく繰返す。けれどもその空想は、私の場合

にあつては、より多く回想の上に築かれる。それは謂つて見ると、自分の生涯のやり直しである、自分の過去の改築である。昔爲すべくして爲さなかつた事を爲し、うまくやるべくしてまづくやつた事をうまくやり直して見るのである。そしてそのひまには、依然として旅行したい旅行したいと呟きながら、ぼんやり机の前にすわつて、卷煙草をつてはお茶を飮んですごす日が多いといふ有樣だ。

然し、私が生れてから少しも旅行したことのない人間だと思ふと間違ひである。田山花袋氏のやうな旅行家として名高い人は別として、普通の文學者に比べれば、その行程に於ては、敢て遜色のある方とは言へないであらう。第一裏日本の片隅に生れた田舍漢が、かうして東京に住んでゐるだけによつても、彼が隨分長い間、汽車に乘つたことはすぐ考へられよう。だが、私は單に汽車に乘つただけではなかつた。私の少年時代は、流浪の中に過されたのだ。私は玄海灘を六度越え、瀬戸内海を三度通つた。裏日本の海岸も、舞鶴以南はすつかり通つた。朝鮮も南の方だけではあるが、かなり彼方へ行つたり此方へ行つたりした。それにも拘はらず、私はまだ殆んど一度も旅行らしい旅行はしたことがないと斷言し得る。私のかうした旅行は、常に一身上の激變を伴つてゐた。ある土地にちやんとした住居を有してゐて、他の土地へ遊びに出かけるのが旅行であるとすれば、私がある土地へ出かける時には、私は已に前の土地を全く見棄てなければならなかつたのだから、即ち、これは旅行ではなくして、流浪である。放浪である。

この十年の流浪はたしかに私を疲らせた。未だ少年にして、私は自分の心の疲勞をしみ〴〵感ぜずにはゐられなかつた。私はこんなにまだ二十代の身をもつて、自分の少年時代を回顧する時、そのあまりに遠い昔のやうに思はれるのに、不思議な驚きと焦慮をさへ覺える。そして、それは全く無理のないことのやうに考へられる。私の十年は、恐らく他の平穩な生活をして來た人の三十年にも相當するであらう。それゆゑ、私の少年時代はとりわけ懷しく感ぜられるのかも知れない。そしてこれがまた私をして回想の樂しさに耽らせる所以でもあらう。

だが、この室内旅行はもう澤山だ。もう懸命に働かなければならぬ時が來てゐる。夢想よりも勞働だ。そして過去の訂正はまだ未來によつてのみなし得られるといふ事を、この夢想者は今はつきりと自覺したのである。（大正七年の或日）

×

ミレエの『アンジェラス』ほど誰にも知られてゐる繪はなからう。私はこれと今ひとつ、同じ人の『落穗拾ひ』とを私の机の横の壁に掲げた。

「この繪をかけてからあなたが精出して働いて下さるようになつたのね」と家のものは言つた。

働かうといふ氣持が旺盛になつたからこそ、あの勞働の讃歌とも云ふべき敬虔な繪を掲げたのであるが、實際、私は今働くことより外に自分の爲すべきことを知らない。以前とても、働かないでゐたわけではない、働かなければ食へない身分だから、一日も筆を手にとらないでゐたことはない。が、こんなに仕事に身が入つてはゐなかつた。いやいやに、機械的に仕事にかかつたことが多い。もつとも、私はどんな事務的な仕事でも、感興に乘らなければ出來ないたちなので、絶對にいやな仕事はこれまで決してしたことはない。それが私の生活の豐富さを樂しむことの出來なかつた一つの原因でもある。けれども、これ程働くといふことが愉快に思へるやうになつたのには、自分でも驚いてゐる。

だが、かうして仕事仕事といふのが、少々氣がさしもする。自分のしてゐる仕事がつまらないものだからと云ふよりは、第一に、それが肉體的の勞働でないからである。勿論、精神的の勞働を無價値だと思ふのではないが、たゞ私は昔から藝術を愛し尊んでゐるくせに、どういふものか、何かもつと直接的な仕事はないかといつも考へてゐた。數年前に、『幼稚な言葉』と題して、友人のO君へ宛てた手紙の一節に擬してかういふ文章を書いた。

僕はこのごろ小說を書いたり、高遠な眞理を談じたりする程馬鹿らしい事はないと思ふやうになつた。もつともつと、直接的な男らしい仕事をしなくてはならぬやうに感ずる。つまりドストエフスキイではまどろつこしいのである。もつと人間はつまらなくとも、もつと仕事は小さくつても、かの無名の殉教者のやうな仕事でなければ滿足出來ないやうな氣がするのだ。所詮、僕などは、たとへば海を埋める時の石ころの一つにすぎないのだ。

この言葉はその前にドストエフスキイに對する無限の感激があるので、一層目に立つて見えた。それは全く幼稚な言葉であつた。それゆゑ先輩の二三の人から、その矛盾を指摘されたり、教訓されたりした。その時には、その先輩の言葉も、私は內心不服であつたものだ。けれども今私は、その執拗な空想をも棄ててしまつた。自分の今やつてゐる事が、やつぱり自分には一番適してゐるのだ。そしてそれをやつて行くのが、自分の此世に生れて來た唯一の意義である事を、はじめて心から悟つたのである。(大正八年三月)

忘却

花火は瞬間に消えてしまふ。それをこしらへるのには、どれだけの勞力を要したか知れないのだ。それが一發の爆聲と共に、空中にさんらんたる蜃氣樓を描いたかと思ふと、またもとの闇にかへつてしまふ。あとには何一つ殘らない。ただ人の目にかすかな幻影を殘すのみだが、それすら間もなく消えてしまふ。人間の一生もそれに似てはゐないか。偉人や天才の生涯といへども、より長く輝く花火にすぎぬのではないか。

忘却! 私はこれを人生の最も神聖な事物の一つに數へる。すべては過ぎて行く、すべては忘れられてしまふ。今日私がこのやうに愛してゐる花や、鳥や、音樂や、白い柔かな手やは、明日は記憶の中におぼろに色褪せて、明後日

はもはやあとかたもなくなつてゐるであらう。その一つの接吻のためには、最後の血の一滴をも惜しむまいと思つたほど、あんなにも熱望してゐた女性の面影も、一度び遠く離れては、水を失つた花のやうに枯れ萎んで、あいらしいその姿もただただ夢のやうに思はれる。影繪の影を見るよりもはかなく、うすれる月を見るよりも悲しく、いつとも知れず、何の感じもなくなつてしまふ生の面影よ。去る者日に疎しといふありふれた言葉は人生のはかなさをまことによく現してゐる。

今若しも昔の人がその全過去を脊負うて我々の目の前に現れるやうなことでもあれば、世に忘れられた流行唄をいま一度び耳にするやうな懷しさと、あはれさとが、靜かになつた胸を暫くはかき亂すであらうが、路傍の人の冷かな眼付を交はすとき、それすら顔をそむけてしまふ。過ぎ去つたものは永遠に忘却の中に眠つてゐる方がよい。神聖な忘却の手はいかなるものをも美しい哀愁の面紗で包んでしまふからである。そして私の生涯も、私のこの熱い嘆き、抑へ難い感動も、永遠の闇の搖籃に寢入らせて貰へたならば、私は幸福であらう。

小さな星との親しみ 『昔の星に』改題

星よ、おまへ達は輝いてゐるね。人間が見てゐようが見てゐまいが、おまへ達は奥深げに祕密らしく輝いてゐる。曾つて、ベツレヘムの厩の上に輝いたといふのは、おまへ達のうちのどれであつたか？　その榮光の星は、それは今私の小さな家の上にも輝いてゐるのだらう。

星よ、我々の夜の世界しか見ないおまへ達は、人間の暗黒面に最もよく精通してゐるだらう。おまへ達は人間といふ不思議な生物に對して、驚きあきれてゐるかも知れない。けれども、おまへ達がどうして人間の罪惡に感染する

であらう、それにしてはおまへ達は人間からあまりに遠ざかつてゐる。おまへ達はこの地獄のやうな地上を憐憫の眼で見てゐるに違ひない、なぜと云つて、おまへ達の眼はいかにも悲しさうに顫へてゐるではないか。人間が他の人間の祕密に於て、暗面に於て見出す喜びはおまへ達には殆んど理解が出來ないであらう。

私はおまへ達と談るのが好きだ。おまへ達は靜かな傾聽者だ。風は我々の言葉を吹きはらふ。雨は我々の私語を妨げる。然し星よ、おまへ達だけは意味深げに頷いて聽いてくれる、十歳になる女の兒の怜悧さうな瞳をぢつと据ゑて聽くやうに。人間の中で常に傾聽者である私は、おまへ達を私の傾聽者に選ぶ。人間の中で常に傍觀者である私は、おまへ達を私の傍觀者に選ぶ。あゝ我が溫情ある無言の批評家よ、私はおまへ達にだけ私の心の底を打ち明けたい。

然し星よ、私はいかに長い間おまへ達を忘れてゐたであらう！　あゝ、曾つてこの時分ほど、私の魂が塵にまみれてゐたことない。

いかに孤獨の好きな私だとて、いつも家にばかり引つこんではゐないのに、なぜ私は空を仰ぐことをしなかつたらう？　街頭の夜の散歩に、氣の毒なみじめなまた卑しい人間の生活に目をふさぎたがつてゐる私が、なぜ空を仰ぐことをしなかつたであらう？　二階家の建てこんだ都會の一隅に横つてゐても、我が小さな住居の窓からわづかに五尺四方の空を望むことは出來たのに、なぜ私はなによりも大好きな空なるやさしい我が同胞に挨拶することをしなかつたであらう？　さうだ、私は空が私の上に横つてゐるのを忘れてゐたのだ！　それが曾つて天文學者になることの出來ない自分の境遇を悲しんだ私であつたのだ！

「空を見たまへ、實に廣いものぢやないか、この廣い空の下で、つまらんことをくよ／＼思つてどうする？」と言つて勵ましてくれた、熱心な求道者があつたＳＭ君の言葉に心の底から動かされた私であつたのだ！

星よ、今宵私は再びおまへ達を想ひ起した。そしておまへ達と共に私の昔日の夢想を想ひ起した。地上のつまらな

けれども太陽よ、汝は私を引き止める、私は汝をつひに離れることは出來ない、汝なしにすますことは出來ない。私は汝を仰ぎ見ずにはゐられない。それは宛かも殘酷な少女を呪ひながらも、なほその魅力から脱し得ない青年のやうである。

太陽よ、人間の眼は曾つて汝を正視することが出來なかつた、さやうに私は人生を正視することが出來なかつた。汝はあまりに輝かしいからだ、人生はあまりに暗黒なからだ。だが今日、私は汝を正視しようと思ふ。私はこの汝に對する私の執着の上に自分の生活を樹立させようと思ふ。生を厭ひながら生存を續けて行くほどの悲慘と愚鈍とはない。生きるのは最も雄辯な生の肯定である。今日、私は汝の光明を凝視する如く、またこの人生の暗黒をまじろぎもせずに見詰めようと思ふ。

さらば太陽よ、この勇ましい快癒者の心を、暖まらうとするこの心を更に暖めてくれ。

内に向つて流れる涙　『涙について』改題

泣け、聲を立てゝ泣け。弱い心と脆い魂とを有つたやさしい人々よ。美しいフロイラインはその愛人の前に泣け、健かな青年はたゞひとり隱れて泣け。人はたゞ泣かんが爲めにのみ生れたのだ。そして涙は卿等を慰めるであらう。

今の文學を愛する若い人々にして、泣かんとして泣くことを恥ぢる人があらば、私はかう云はう、惡魔のやうな晩年のフロオペルさへも寂寥の爲めに泣いたではないか、巨人のやうなドストエフスキイでさへも失戀の爲めに泣いたではないか。泣け、泣くのは恥ではない、泣くのは何よりも人間的だ、人は泣くことの出來る限り、なほ心の平安を取り返し得る。泣きながら寢入つたならば、夢はおまへを美しい童話の國に連れて行くであらう。

い屈託はもう十分だ。私はいま、たとひ巻煙草の一本を吸ひ終る間だけであらうとも、おまへ達を仰ぎ見て、おまへ達の寂しげに淸らかな顔をぢつと見入つて、おまへ達との沈默の會話を交したいのだ。あまりに地上の事物に囚はれすぎてゐたこの長い年月の自分のみじめさを今私はすつかり忘れてしまひたい。私の魂がおまへ達の世界に屬してゐると眞面目に信じてゐたあの少年の日の純粹な心持ちにかへつて行きたい。星よ、おまへ達はよもや私を見忘れはしなかつたらうね。私のために淚を注いでくれるやうに思はれたあの昔の夜とおなじやうに、星よ、私の心をおまへ達の光の輪をもつて取卷いてくれ。

太陽の惠み 『日光の下で』改題

太陽は私を暖めてくれる、冷たく冷たくならうとする今日の心を暖めてくれる。

人間も植物とおなじことで、日光に浴しないでは十分に育たない。私はあまりに日光に背いて來た。私は日蔭の草のやうにひよろ〳〵と育つた。私の心は今「もつと光を！」と叫んでゐる。ゲエテが臨終に際して口にしたこの言葉は深い意味を含む象徴的な言葉として傳はつてゐるが、私はたゞその字義通りに光を求める、日光を求める、そしてこの言葉のこれより深遠な解釋を私は知らない。

私を此世に引止めるものは、太陽よ、あゝたゞ汝のみだ。汝はすべての晴れ晴れしい思想の母である。汝を讃美する程の生の肯定はない。しかも私は汝を厭ふ。何よりも汝を憎む。ああ汝のために、いかに多くの苦痛を私たちは忍ばなければならないか？ 汝は快い朝の眠りをいかばかり妨げるか？ 汝はいかに嚴しく空しい一日の勞苦に人間を驅り立てるか？ これを思へば、汝の無慈悲な一面を私はしみ〴〵感ぜずにはゐられない。私は汝を憎む。

泣くのは女性的だと？　それは誰の言葉だ？　それは泣くことを知らない人の言葉だ。本當に泣くことの出來る人間が本當の男性だ。クルセクセスは失はれたる軍勢のために泣き、アレクサンデルは愛する少年の死のために泣いた、泣くのは男子の恥でないとゲエテは歌つた。女性の涙は直ぐ乾く、それはあんまり夥しく流れすぎる、しかも餘りに揮發性だ。それは胸の底から流れ出ない。男性の涙はそれとは違ふ。その重々しく胸の奥底から流れる涙はどんなに熱く燃えてゐるであらうか。そして純潔な男子でなくては泣くことはゆるされないのである。

單純な無垢な人々にはあらゆる幸福が與へられてゐる。いかに多くの涙が彼等の青春を甘くし、彼等の生活を豐富にし、彼等の心をやはらげたことであらう。泣くものは常に洗ひ淸められる。絶えて泣くことのない心は枯草のやうに乾からびてゐる。

しかも世には悲しい人がある。泣くことさへ許されてゐない不幸な人がある。かういふ人に取つては、人生は無意味な戯れである。彼等は死ぬことが出來ない爲めに生きてゐるのだ。彼等の心の中には生の苦々しさが一杯詰まつてゐるのだ。世に神あらば、神よ、彼等を憐れみたまへ。

けれども、世には流されないでしまふ涙もある。笑ひに變ずる涙もある。人よ、涙はただ頰にのみ流れるものと思ふか？　涙はまた內部に向つて流れることを知らないか？　脣に漂ふ影を笑ひと思ふか？　目のほとりに打寄せる皺を笑ひと思ふか？　世には笑ひとしてしか表現することの出來ない啼泣のあることを知らないのか？

友よ、我々がなほ泣き得るならば、誰れに恥づることもなく、我々は思ふままに泣かうではないか。涙を流して泣くことが出來れば幸福であるが、よし涙は外に流れずとも、洞穴の天井から落ちる雫のやうに、心の中にしたゝるならばそれで十分だ。またもし微笑でなくては泣けないならば、微笑をもつて泣かうではないか！

單純な心 『シンプル・ハアト』改題

心よ、おまへがまだ年若かつた時には、おまへは嘆息して言つた、「なぜこの世界では邪惡がこんなに蔓るのだらう、そして正しいものはなぜ滅びて行かなければならないのだらう？　これは正しい事であらうか？」と。

心よ、おまへは純潔であつた、おまへはこの人生の不合理に堪へることが出來なかつた、おまへは善、正義、道德と絕叫した。しかもその聲は空しく響き去つた、そしておまへに與へられたものは世故に長けた人達の微笑と、痛ましい絕望と疲勞とにすぎなかつた。

心よ、おまへは癒やしがたい絕望を抱いて絕間なく地上をさまよひ步いた。おまへは今苦しい經驗で一杯になつてゐる。おまへは今一番賢い老人よりも賢い、それだからおまへはかう言はなければならない、「これが、これが正しいのだ！　これでいいのだ！」と。

心よ、おまへは本當に弱かつた、弱いもののみが美しいと思つた、滅びるもののみが正しいと思つた。おまへの思ひには裏がなかつた。そこで、この世界は存在する價値がない、さう叫んで、そしてつひに自分を溶爐の中へ投げ込んだのだ。

心よ、おまへはその中で溶けてしまつた、美しく脆くおまへは溶けてしまつた、――だが、それは何たる奇蹟であつたらう！――おまへはフェニックス鳥ででもあつたのか、おまへはその冷灰の中から、新しく生れ出たではないか。昔日の可憐な子供らしいシンプル・ハアトは、今や一個の男子の複雜な心となつて生れ變つたではないか。

そこで心よ、おまへは今一番賢い老人よりも賢い、おまへは一たび絕望の熱い溶爐の中を潜つて來たのだから。お

まへの脣には今經驗を積んだ人達の微笑と諦めとが漂うてゐる。それだからおまへはこのやうに言はなければならない、「世界は永遠にこの通りだ。私は今片隅の孤獨の中に歸らう。そして僅かのもので滿足する時、我々は誠に幸福である！」と。

沈默と表白

最も强い者は沈默する。すべての言葉は畢竟怯懦の表白である。
ああ、何故に我々は語らなければならないか。
言ふべきことの何もない時、又は何も言ひたくない時、生活は我々を强ひて語らしめる。それは自分の意志でする事ではないから、まだ辯明が出來る。
自ら進んで、沈默を强ひられる時ですら、卽ち自己の言葉を發表するに一方ならぬ努力を要する時ですらも、我々は語らずにはゐられない。我々は語らずにはゐられないものによつて苛責される。
ああ、人間は何故にこんなにも饒舌であるか。
人間は常に孤獨である。二人の人間がお互に理解すると云ふ事ぐらゐ困難な事はない、恐らくそれは不可能であらう。
それにもかかはらず、人間は語らずにはゐられない。語らずにはゐられないものによつて苛責される。何たる弱味を人間は有つてゐるであらう。
この弱味からして藝術は生れたのではなかつたか。——

然し、今更こんな事を云ふのは痴人の業である。
かうした考へは多くの人の聞くを欲しない事だ。
そしてその不快な目に遭はせた返報として排撃され、嘲笑されるだらう。そしてそんなら默つてゐたらいいぢやないかと云はれたなら、こちらには返す言葉はないではないか。
曾て深刻なる厭世詩人ド・ギニイは、「沈默のみがひとり偉大なことである。其他の事は怯懦である」と言つた。然し、我々がギニイの名を知り、これを尊崇し得るも、ギニイが我々と同じく怯懦な一人であつたからではないか。人間の事業は、唯その弱味の上にのみ建設せられる。第一、人間は最も怯懦なこと、即ち生きると云ふことをやつてゐる。
ここに於て、自分はツルゲエネフのあの賢い言葉を思ひ出す、「何等かの弱點の上に築かれたもののみが最も强固である、理性の上に築かれたものは最も弱い」と。さうだ、全くこの通りである。
かうして、我々の弱點は庇護せられる。そして、我々は自由に饒舌を弄する事が出來る。(大正七年八月)

新道德を想ふ

×

賤い、賤いこの世界で、日毎に起る數限りのない出來事を、ただ見、ただ聞くばかりの、この片隅の小さな詩人にとつても、今日の日はあまり騷がしく、あまり不安である。「舊道德は地に墜ちて、新道德は未だ生れず、この悲慘な暗黑な時代に生死する我等の運命」のいかにあはれなものであるかを、私もまた深く嘆かずにはゐられない。忠實な

新聞紙は、日毎に我々に告げ知らせる、この大きな世界のすさまじい旋轉を、そこでいかばかりの悲喜劇が、勇ましい生活のアクタアズによつて泣き笑はれてゐることかを、そしてその中には、新しい時代と古い時代との衝突から生ずるものが最も多いやうに思はれる。

つい先き頃も、音樂學校に於て、さうした一幕が演じられたやうに思はれる。兩性から成る合唱團が、相携へて關西に赴いたとき、舊時代の人々の側に非常な激怒があつた。それは力强い反抗を以て酬いられた。またこれは餘程以前のことであるが、都下の某校に於て一女生徒の遺稿が、舊時代の火によつて無殘にも燒却せられたことも私は忘れ得ない。今や死に瀕してゐる舊道德は、隨所に最後の苦鬪を戰つてゐるやうに見える。然しそれはかの神風連が、敢然として新時代に抗して、死を以て力鬪したやうなそんな勇ましい、氣持のよいものではない。今の舊道德を最もよく代表してゐるやうに見える教育家中に、さうした確信と誠實とを微塵をも見出すことは困難であらう。彼等は恐ろしく腰がきまらず、水鳥の飛び立つ音にもあわてふためいて、風見の鴉のやうに右顧左眄してゐる。彼等の道德は唯單なる僞善の別名に外ならない。唯體裁をつくることの外に、その日その日の風むきに從ふ御都合主義の外に、何處に彼等の道德があるか。舊道德は多くさうした習俗と虛僞とから成る世間道德にすぎないのである。

然しながら、新しい時代の新しい道德とは何ものであるか。私は不幸にして、最も道德感情の鋭敏である筈の文學者に於ても、未だその片影をも捉へ得ない。そこにもまたただ舊道德を見るばかりである。ああ彼等もまだ餘りに臆病ではないであらうか、若しくは餘りに怠慢ではないであらうか。

然し自分を殘酷なほどに追求することなくば、文學者は平板の外面、皮層の淺薄な觀察者たるに止まるか、又は安易な感傷主義（センチメンタリズム）の陶醉者たるにすぎなくなるであらう。その初めに於て、習俗を無視するの勇氣を有つた人が、その終りに於て習俗に屈服するのは止むを得ないかも知れぬ。だがその半ばに於て、そんなにも習俗をのみ、換言すれば世

間道徳をのみ顧慮してゐるといふことは不思議なことである。一度びも戰を交へずして敵に降るのは將に取つて死に當る恥辱である。文學者が世間道德に屈從して甘んじてゐるのも、また同じ恥辱ではないか。今は亡きＮ氏の如きもその點で些か憾みに堪へぬところがあつた、氏の大を以てして、その同時代者の道德、かの武士道的道德と餘りに容易い妥協をしたあとはなかつたらうか。

最近、私の尊敬するある文學者が、自らその經驗を叙した作品に於て、その主人公が、自分に恥るよりもより多く世間に恥るやうに見られたことも、私の遺憾に堪へないところであつた。自分の良心の聲に聽き、自分の心の審判に從ひ、自分の廻避せんとする卑怯な心を緊縛して、これを凝視し、よくこれに堪へるならば、そこにおのづから、自分の新しい道德は生じて來る筈である。この新しい道德は在來の道德、因襲の道德と相一致することもあらう。また相反することもあらう、その相反する場合には、我々は飽くまでこれと戰はなければならない。些少の妥協と雖も恥辱である。然し、その場合、この新しい道德は舊道德の立場から見れば不道德には違ひない、が、決して無道德、又は沒道德ではないと思ふ。

×

ところが、今の文壇には、またそれとは反對に、恐ろしく勇敢な人もある。例へば、Ｉ氏やＭ氏の如き人人である。殊にＩ氏は、臆病とか怠慢とかの誹りを受くべき一點をも有しない人であつた。氏は決して因襲道德を認めないやうに見える。然し氏は私の敬愛してゐる先輩であるとは言へ、因襲道德に代るべき氏の道德といふものがはたして示されてゐるかどうかは私の疑問とするところである。氏の道は餘りに安易である。氏があまりにも無雜作な自己肯定を愛好せられてゐるのを、遺憾に堪へない。

兎まれ、私には我が國に於て、現在存する凡ての中に、大きな一條の悲喜劇の絲が、悲劇と喜劇といふ意味ではな

くして、トラギコメデイの意味での悲喜劇の絲が貫かれてゐるとしか思はれない。そこには一個半個の徹底した自由思想家があるだらうか。狂氣の世界にまでも進軍した勇ましい將軍、例へばニイチエの如き熱誠な道德家（モラリスト）があるだらうか。世界で最初のインモラリストと號したこの人程の道德家はそれ程多いとは思はれない。日本人にはあそこまで突き詰めて行くことはとても出來まい。これ我國に悲劇なくして喜劇に富む所以である。しかもこの喜劇は一向愉快なものでもなく、むしろむごたらしいものである。また、さればこそ現下の社會問題の如きも、中途半端なものであり、栓の拔けた空氣枕のやうなもののやうに思はれるのである。いくら聲を大にしたところで、擊劍の稽古は眞劍勝負ではない。

×

私は思ふ、今は空騷ぎすべき時ではなく、靜思すべき時ではないかと。我々はもつと自分の問題を突き詰めて考へなければならないのではなからうか。自分の問題を閑却して、一圖に社會問題に聲を大にするところから、幾何の意義を見出しうるであらうか。私はむしろ各人が、いづれも自己の生活に更に思ひを潛めるとき、そこに新しい生の意義と、新しい道德の曙光とは閃めき出づるであらう。そして、それがまたいろいろな社會問題を解決する第一歩でなければならぬと思ふ。（大正九年十二月）

昔の人のために　『昔の戀人のために』改題

しづかなるこの夏の夜に
などかくも胸さわがしき

窓よりの風すずしきに
などかくもわが息の熱き

飛鳥山の花の散る時分から、暫く私は王子に從兄と一緒に住んでゐた。彼はその土地にある釀造試驗所に通つてゐるし、私は或る多少文學的な仕事をやりながら、傍ら獨逸語を勉強してゐた。その時この詩が出來た。

月かげはひろごりて、また
森はたかく波うつ
街の騷ぎ、子供の歌
この窓をめぐる木立も
ただ、變らぬに
ああ一とせはすぎさりしよ

これはみな實景である。街の騷ぎとは遙かな東京の騷音をいひ、森とは飛鳥山をいつたものである。私は仕事に疲れると散歩に出た。狹い王子の町は、到る處に私の記念を殘してゐる。殊に飛鳥山の絕崖の上から、東の方を望むのが好きであつた。そして夜毎月を仰いでは、懷しい人を思うて、感傷的な淚を流したものだ。

ああ、我れは幾夜か
なり騷ぐ木の葉の彼方に
あだにのみ君をもとめき——

然し子供は最も純粹に愛してゐた。木立を通し、森を通し、その人の面影を捉へようとして捉へる事が出來ないで幾月かすぎた時、その人が中老の商人に嫁ぐといふ噂を聞いた。

ああされどかくばかり我れに貫く
天使にも似たりし人は
かのいやしき市の翁に
その胸を惜氣なく投げあたへけん

これがその一年ののちの感慨である。市の翁といふ言葉にこもる腹立しさは、ユウモラスにさへも思はれるが、その一向きな素朴な心持は今にして限りなきなつかしさを覺えしめる。若い詩人は、その人の幸福な笑ひを思つて、これになほ二行を附加せずにはゐられなかつた。

いと遠き市の響きをきけば
我れは覺ゆ、その中にかの華やかな笑ひのまじるを

全く、私は東京から聞えて來る雜音の中に、はつきりその人の笑ひを聞きわけるやうに思つたことが一度や二度ではなかつた……

これが獨立した一篇となつてゐる。この次にもう一篇ある。これは右の作より私自身にはすぐれてゐるやうに思はれるが、他の人にはどう見えるか?

よどみなく年はすぎ去る
すさまじく世はうつり行く
まことある戀もかなはず
路行くに影もうすれき

年はすぎる、時はすぎて行く、そして弱い心の持主を、愈々痩せてゆく彼の影をはかなくあとに殘して行く。まこと

ある戀もかなはずば、まことある戀だからかなはないのだと私は思ふ。ましてや、その人があんなヴァニテイの權化ともいふべき人なのだから。

なさけをば人に惜しみて
樂しくもあるべきときに
君はしも重く病みけり

けれども、時がたてば事情が變る。時はすべてを變へて行く。さうしてあのやうな華やかに美しかつた人、あのやうに幸福の女王のやうだつた人も、浮世の運命は免れるに道なく、いつしか病床に親しむ人となつてしまつた。あの華やかた笑ひの底には、既に蝕んだ胸のうつろな響きが聞かれてゐたのである。

うるはしき君の今日をば
いかに我れ嘆きいたまん
うきたる戀は今我が求むるものならじ
不幸なるもの、いと脆く美しきもの——
そは君なりしか？

美しいものは脆い。蝶の翼を見よ、薔薇の花を見よ、空にかかる虹を見よ。すべて美しいものは脆い、或は脆いがゆゑに美しい。あの花のやうであつた人も、またこのやうに脆かつたか？上もなく幸福であると思つた人も、また不幸な人の一人であつたか？ああ今は、もう今となつては、うきうきした心で、はかない戀などといふ事を考へる事は出來ない。が、それよりも一層深い一層眞劍な、本當の人間的な愛をその人に注がう。

いま我れおのが嘆きをやめて

いと熱き慰めもて
　傷ける君をかなしまむとす
これが本當の心である。今は愛をささやくべき時でなく、慰めの言葉を齎すべき時である。そしてこの慰めの言葉にこそ、本當の愛の心はこもるのである。
　かくばかり悲しき君に
ねがはくば健かに樂しきむかし
　我れに苦しきその日をばかへし與へよ
自分が不幸のどん底にあるとすれば、その人は幸福の絶頂にあると思つてゐた人であつたものを、今、私はやはり昔の私であるのに、その人は既に昔のその人ではない。寂しい病の床に苦しんでゐる蒲倅の人である。ああ、天はあまりに驕慢なあの笑ひを憎んだのであるか？　そんならもうゆるしてあげて下さい、健康な、幸福な、水鳥のやうに快活だつた昔の日にあの人をかへして下さい。その昔の日こそは、私にとつては苦しい苦しい日であつたけれど、私はその苦しみをもう一度味はつたとて苦しうない、その人の樂しい生活さへ恢復されたなら……
私はかう考へた——それがこの三行である。（大正八年）

寂しきものの慰め

さみしきものの慰めに
さみしき花はふさへるを

かなしきものの友だちに
かなしき人はふさへるを
胸にひめたるくるしみと
かたりあかさん人もなく
きのふは野邊に出でて泣き
けふは窓邊にさしぐむと
君が言葉のかなしさに
われも嘆きをわかたんと
さみしく笑みて手をとりて
かくて夫と妻となり
高嶺の花も野の花も
おなじ終りはもろかるに
摘みすてられし一輪を
ひろひてさしぬわが瓶に

つらい運命は時として、たのもしい道連をこしらへてくれる。苦しんでゐる者は苦しんでゐる者を友達に得る。こんな事を考へてゐたのが、その頃の私だつた。全心は愛の感激に燃えてゐた。絶えず美しい夢想を描いて、自分でそれに醉つてゐた。この詩もその頃の私の心持を現したものの一つだ、別に取り立て云ふ程の作でもないが、その純粹さは今でも嫌ひではない。

心なく摘みすてられた野の花の一輪を、自分の瓶に拾つてさす心持、慰めのない生活に苦しんでゐる者同士が一緒になつて、本當に地味な、でも、どうやら幸福な新生涯に踏み入る心持、さうした心持を考へるのが、私は好きだつた。ドストエフスキイのソニヤとラスコリニコフとの戀が、私には理想的なものであつたのだ、

其後、私は懷疑家になつた。云ひかへれば年を取つた、でも、さうした昔の心持はやつぱりなつかしい。のみならず。あの少年の夢想が、今なほ胸のどこかに深い根を置いてゐる事を發見しては、人間といふものの、いつまでも變らない事に驚く。（大正八年）

奥榮一君に

奥榮一君。君は今どうしてゐますか？　どうしてまだ出て來ませんか？　僕はこの前君に詳しい手紙が送れなかつた代り、今ここで少しこの頃の感想を書いて見たいと思ふ、もつともこれが『民衆の藝術』に現れる時分には、君はもう此方に來てゐることだらうとは思ふけれど。

今はもう三時だ——夜の。僕のみすぼらしい家のまはりでは、蟲がしきりに鳴いてゐる。秋だ。窓硝子をとりはらつてある窓からは、たまに思出したやうに夜風がまぎれ込む、そして浴衣一枚では少し寒い。もう夏の夜とは言へない。少し穩かならぬ心持があつて、二日つづけて飲んだ酒の醉ひに頭がぼんやりしてゐるくせに、外から歸ると直ぐ机に向つて飜譯をはじめた——やつと十枚ほど出來ると、もう二時だ。

考へて見ると、僕が飜譯をやり出したのも隨分久しいものだ、はじめて持つた鶴卷町の家で君とヒユウマニテイを力說し合つてゐたあの時分からだ、いろんな餘儀ない事情から、その後半を他人の手にゆだねなければならなくされて、

ために木村莊八氏に罵られたあのドストエフスキイから今日に至るまで、隨分澤山譯した。澤山仕事をしなければ食へないからだ。もうそろそろ倦いてもいい頃だ。それでも仕方がない、意地になつて反抗的に今日もそれをした――こんなに遲くまで。ラマルティンの『グラジェラ』といふ小說に、羅馬の一畫家の勤勉な勞働の生活が描かれてゐる、彼は一日アトリエで默つて働いてゐる、そして夕方になると、一家が集つてアヴェ・マリアの祈りをあげて、それからおだやかな心で眠りに就くのだ。僕はそれを讀むと、敬虔な氣持に打たれた。絕えざる勞働の生活――それが本當の人間の生活だ。僕がミレエの繪を買つて來て壁にかけたのもついこの頃の事だ。「人生はあそびではない、なぐさみではない、また人生は享樂すべきものですらもない。人生はつらい勞働である、忍苦である」と僕等の愛するツルゲエネフは言つた。我がネヅダアノフ君、君もまたそれをよく理解してゐる、僕は君が故鄕にかくれて、何年かの間、手づから機械を廻して繩を製造したあの勞働の生活を尊いものに思はずにはゐられない、また最近の君の小學校教師の生活をも。君の「人間」の出來たのもみなそのおかげなのだ。

然し、こんな事を言つてゐながらも、實は僕はやつぱりなまけてゐたのだ。小說を書く書くと言つてゐながらも、まだ小品の一つも書かないでゐる、エッセイを書くんだと稱して、それも一向に書かない。考へれば恥しいことだ、――そして飜譯ばかりしてゐる！　笑はれたつて仕方がない、飜譯家といふ有がたい名前を後生大事に守つてゐる意氣地なし！　だが然し、その飜譯すら食ふに困らなければやりはしないだらう。僕はこんなになまけものだ。もとはかうでもなかつたのだが、生活に疲れて活氣を失つてしまつたからだらう。けれどもね、人間の第一の幸福は悔恨を伴はぬ怠惰だといふことは眞實だ、ツルゲエネフは決して人を欺かない。僕はその幸福な怠惰を求めてゐる。そして實際にそれを得たつもりでゐた。僕はこれ迄一向悔恨した事がなかつたのだ。ところが此頃になつて悔恨を伴つたから仕方がない！　と言つても本心はそんなにも悔恨してゐないかも知れない、すると一層不屆きなわけだ。だが僕は凡ての

後悔を嘲笑する人間だ。僕は人がくよ〳〵と過去のことにかまけて屈託してゐるのを見ると、どうしてその時間を新しい行動のためにささげないのだと言はずにはゐられない。そこで僕は今、なまけ者たることを廢した、そして自分の本當の仕事をやりたいと望んでゐる、どんなになまけてゐる時でもやつてゐた其日の仕事を果した上に更に働いて見ようと。

君のこの頃の元氣はうれしい。君もたうとう小說を書いた、『大海のほとり』を讀んで、僕は涙ぐましいほどの氣持になつた。僕は今こゝであの作の批評をしようとは思はない、靜かに完結するのを待つてゐたい。然しあの作の一行一句の君の熱した呼吸を聽き、君のあの激越した容貌を見るとき、僕は自づからなる微笑を浮べると共に、君があれ程平靜になり得たのを喜んでゐる。そして「頭や腕で書く」――それ等の人々の總稱は新技巧派といふのださうだ――人の多い此時節に、君がハアトでもつて書いてゐるのは何よりも喜ばずにゐられない。心から出たものにして始めて心に入る、「偉大なる思想(パンセエ)は心からのみ來る」とヴォオヴナルグは言つた、ましてやすぐれた藝術は必ずや心からのみ生れる。

我々は決して頭腦のいい事を誇つてはならない、心臟のよくないことを恥ぢなければならない。僕もこれから君と相携へて美しい「心の藝術」の創造のために、一生の徹夜を續けよう。かうした飜譯のための一夜の不眠ではなくして生涯を通じての緊張した勞苦の生活を樂しまう。よし僕等の藝術が第一流の評價を得なくともそれが何だ。よし僕等の仕事が文壇の視聽を動かして、雜誌の上でいろ〳〵と論評せられる幸運を得なくともそれが何だ。曾つて君はその尊崇する木下尙江の踏んだ道を自分も踏まうと誓つた。德富蘆花や木下尙江の如く文壇といふものを全く念頭に置かないで、かの文壇の專門家達とは風馬牛に、廣い讀書界の心の批判に從つて進んで見ようと考へた。「僕は通俗作家になる」と君は非常なプライドを以て公言した。僕は勿論君の其態度を男らしいと思ふ。僕は君の如く勇敢になり得な

いとしても、いかに君と共鳴するところが多かつたであらう、かうした歩き方を話していかに久しい悶熱した呼吸を洩らしたことであらう。さうだ、今こそ僕もやる。僕も男らしくやる。僕はいかなる先輩の庇護をも被らずに、いかなる勢力の後援をも受けずに、單獨で、獨力で、ただ自分の力をのみ信じて、自分の前途を開拓して行かうと覺悟した。そのために廣く世に認められるに至らず、滅亡しなければならなければ、それだけの運命だつたのだ。そんな弱い小さな才能ならよし滅亡しなくとも何の價値もないのだ。

徒らなる饒舌はたゞ疲勞を齎らすのみだ。僕は今さうした饒舌によつて自分に元氣づけるのを恥しいことだと思ふ空談に疲れる間に、隱忍し刻苦して自分の本當の姿をつかまへなければならうそだ。君がまた都門にそのいかにも燕趙悲歌の士を偲ばしめる、悲劇的な情熱の色を帶びた、眉宇の間に鬱勃たる反抗的精神を浮べた姿を現はすとき、僕は君に語るべき寶に多くのものを有してゐる。

もう明方に近い。何處かで鷄がないた。一番鷄だ。かうした都會の一隅でも黎明を告げる鷄の聲をきく事が出來るといふのが何だか大變不思議な事のやうな氣がする。さあ、もう筆を擱かう。

福士幸次郎君に

福士幸次郎君、輕佻浮薄な今日の詩人の中に一人の君を見出すと云ふ事は、僕には此上もなく愉快なことである。僕は未だ認められずして既に忘れられた詩人である。久しく詩壇から冷遇を蒙つた爲めに、詩壇と云ふものに意地惡くなつた點も幾分かあらうが、然し僕が今日の文壇に冷笑の語とされてゐる所謂「詩人」諸君を寛容する事の出來ないのには多くの理由がある。何よりも第一に寛容の出來ないのは彼等が毒にも藥にもならぬ人達だと云ふ點である。然

るに君は彼等と類を異にしてゐる僅かな人々屬する、そしてその中でも特に君が僕の目を惹いた。君の作は時々讀んで來た、間接に君の話を聞いたりして、一度に會つて話して見たいものだと思ひながらも、例の出不精で訪ねて行きもしないでゐたが、その中君の原稿を『反響』に貰ひたいと思つて手紙で頼んだところ君は左のやうな葉書をくれた。それは五月の事であつた。

「僕の作を讀んで下さるのは有難く思ひます。僕は併しあなたに對しては早速に返事が出來ないのです。僕はあなたをよい方だと思つてゐます。併しあなたがしてゐる事は文壇（僕の文壇といふ意味は理想的です）の空氣を濁らせるものだ。そんな事は大嫌ひです。相馬御風や中澤臨川が人間の心を濁らせるやうにあなたのも濁らせる。僕はあなたの心の底には惡いものはちつとも感じないからあなたが今度『新潮』へ書いたやうなものを書かなければ迯りませう。さうでなければ嫌だ。僕のいふ事を聞いてくださるのは本當だと思ふ。相馬御風や中澤臨川は本當さうな事を云つて人をごまかしてゐるヤツラだが、あなたがするのはその正反對だ。本當のものを持ちながらふざけてゐる。どつちも嫌ひだ。だから氣持よく返事が出來ない。」

僕はこの葉書を讀んで暫く机の前で考へ込んだ。この葉書の中にはただの一字も福士君らしくない文字はない、この中には眞劍な若い理想家（アイデアリスト）の心臟の鼓動が聽かれる。僕はいい氣持がして、思はず悦然たる微笑を覺えたけれども、同時に君に對して自分の態度を辯明しなければならぬ義務を感じた。

福士君、君は實にいい人である。君は水晶のやうに純である、君は火のやうに熱い。君は誠實なヒュウマニストである。思ふに來るべき文壇のメエン・カレントは君の如き人に依つて導かれるであらう、又さあらん事を僕は希望してゐる、そして君に「ふざけてゐる、不眞面目だ」と思はれるに至つたのは僕の悲しみとするところである。五月に僕の『新潮』に書いたものと云へば『近松秋江論』であらうが、實にあの一篇のために僕は二三の知友を驚かした。僕を「生れ

たる詩人」と呼んだ我が故郷の一友は書を寄せてその驚きと失望とを告げた。友は僕の書くものが二三年前の詩などに現れてゐた「花々しい鮮かさと神聖な感激」とを失つて、その代りに「輕薄な洒落を得々として云ふやうになつた」のを嘆いて「君は今や昔日の君でなく、秋江の徒とならうとしてゐるのが悲しい」と云つた。僕は秋江氏をさして不眞面目な人とは思つてゐないし、未だ自分が秋江氏ほどに人生に疲れて消極的になつたとも思つてゐない。僕は「生れたる詩人」ではなくとも、少くとも其日其日をごまかして行く卑怯な人間にはなりたくないと思つてゐる。それで僕は僕のやうな者にでも多少の望を屬してゐてくれる人々に自分の眞意を明かにしたいと思つた。これ此の君に寄せる手紙を公開狀にした理由である。

禍士君。君の葉書は僕の生涯に取つての一つの事件であつた。「本當のものを持ちながらふげけてゐる」と云ふ君の批評はまことに身に餘るお言葉で、いたく恥入つた。それから「僕のいふ事を聽いてくださるのは本當だと思ふ」といふ親切な忠告に對してはただただ有難く嬉しく感泣するばかりであつた。ただ「ふざけてゐる」と云ふ君の言葉は君としては無理のない觀察かも知れないけれど、それについては聊か僕の心持を述べて君に了解して頂きたいと思つた。

思へば僕ももとは大變な自信家であつた。自分の力で人類を一變させる事が出來ると迄も信じてゐた。その夢は何時ともなく破られて了つた。玉手箱の蓋を開けて見ると、僕も一個の凡人にすぎなかつのだ。かくの如くして張りつめた絃はゆるんでしまつた。そしてこのデスイリュウジョンが「人生の秋」に逢着したやうな思ひを僕に起させたのである。

「これは秋なり。秋け―汝に心をやぶる！
飛び去れ！　飛び去れ！―
日は山に忍びよる

かつ下りかつ下りて
一歩毎に休息す。
何故に世界はかくも萎びたる！
つかれてのびたる絃の上に
凬はその歌を奏づ。」

と云ふニイチエの詩句を其時に味深く讀んだ一日がある。これがまた德田秋江氏の心持に同感した所以でもある。けれども僕は「若くして老いた」とは雖も尙未だ二十代の青年である。自分のあまりに散文的にならんとし、感激を失はんとするのを恐れてゐる青年である。僕は自分の天分について無益に考へ惱むことをやめて、寧ろ自分のありつたけの力をもつて生涯の大戰を戰はうといふ決心に徐々として到達した。勝敗は別に問ふところでない。若き日の自信は尊いものである、が然し一度びそれを失つてから、再びあんなに華々しくはなくとも然し底力をもつて踏み出して行くのは更に尊いものではあるまいか。それが本物なのではあるまいか。ただ漠然と自分の偉大を信じてゐるよりは、いかにそれが小さくとも、自分の本當の力を確實に認識する事が大切だと僕は思つて來た。

要するに去年あたりまでの僕は愚かな程にナイイブであつたが、その正直で單純だつた理想家はだんだんと懷疑的になつて來たのである。然しこれは惡いことではない、輝かしい朝を迎へん爲めには暗黑の夜をすごさなければならない。僕は今その暗黑の中に迷へる人である。けれどもその時に當つても、幸ひにして僕は「吾人が動搖と懷疑とに苦しめられてゐる間は、何を信じて宜いのか、何を行つて宜いのかが分らないから迷つてゐるのも宜い。然しその途次に於いて、同胞のあるものが、重い扉で指を挾まれたのを見た瞬間に於ては、吾人の何をなすべきかは全く明かである——卽ち吾人は扉を開いて、その手を引き出してやることを努めなければならないのだ。」と云ふブランデスの言

の眞理を夢寐なほ忘れることはない、

あの『秋江論』一篇は右のやうな心の狀態の中から生れたものである。これに加ふるに、僕には生來キッテイな人間でもない癖に柄になくキットを振廻したがる癖がある爲めに、一層君に「ふざけてゐる」と思はれるに至つたのであらう。これも無くて七癖で自分でも持て餘してゐるのでもあるし、時に諧謔的な態度に出づることが必ずしも「ふざけた」態度でないのみか、反つて眞面目らしく見えるのみの毒にも藥にもならぬフィリステルどもに對する間接射擊であることは、古人が既にこれを示してゐる。ただ惡いと云へば、僕が柄にない事をしたのが惡かつたのだと思ふ。若しあんなものでも眞正直な人の子をあやまるやうな事があると知つたなら僕も考へなければならぬ。けれども僕にはそれだけの力もあるまいし、また自分では決してふざけた積りではなかつた。ただ下世話にいふ「お調子に乘つた」のは惡かつた、これは自分でも認めて、自分のお人よしを恥ぢてゐるのである。

實に福士君よ。かのフィリステルどものやうに村夫子的の眞面目を以て難かしい人生論を上下するばかりが眞面目な態度ではない、文壇にはさう云ふ人々もあるやうだが、僕は君が彼等に對して寬大でなからんことを望む。然し此處に「然し」が必要だ。げにホレエシオよ、天地の間には汝の哲學に於て夢みられるよりはより多くのものがある。僕は幼い子供である。何ものをも知るところがない、世の中は分らない、人の心持は分らない。いや、自分の心持さへ分らない。他を責めんよりは、寧ろ自ら省みてこの遲々たる步みを續けた方が賢明なやり方であらう。僕のふざけてゐない事は追々に君の了解せられる處となるであらう。甚だ不本意の文ながら、これに依つて幾分か君並びに我が知友に僕の今日の心持を了解して戴く事が出來れば幸甚である。(大正四年七月二十二日)

秋の心持から

今年の春も知らぬ間に行つてしまつた。東京に出てからもう六七年になるが僕はまだ花見といふものをしたことがない。花時に二三度上野を散歩したのと、王子に從兄と一緒にゐた折り、飛鳥山に行つて見たのとが花見と云へればまあ花見だが。かうして今年も毎朝、寢床の中で讀む新聞の三面記事で、上野、向島などの人出を知つて、無邪氣なこの國の人達の三春の行樂を羨ましく思ひ、花時分にはとりわけひどい都會の埃の中で歡笑する人達の放膽に驚くだけで、たまたま所用があつて、下町へ行きかへる途中で、電車の窓から江戸川の櫻を一二度見た位のものだ。そして今年の花ももう散つてしまつた。

今日も金策に出かけた途中で、泥濘の中に落花を踏み躙りながら、傘を傾けて、すつかり靑くなつてしまつた櫻の樹を仰いで、ああ今年の花も僕の爲めの花ではなかつたと呟いて、何とも言へぬ情ない思ひがした。毎日々々、徒らにその日の食に追はれ通しで、眞面目な勉强も出來ないで、しかも一方には、どうにかして生活を一變しなければならぬと、そればかり始終考へてゐながらも、唯だうか〳〵と暮して來た間に、何時とも知れず來た春がまた何時とも知れず行つてしまつたのだ。つく〴〵此頃の自分を顧ると、よもやこんな身にならうとは思はなかつたと長嘆せずにはゐられない。つく〴〵貧乏といふものの割りに合はないことを感じて、世の中の一番馬鹿げたことだとは知りながらもつい愚痴の一つも言ひたくなる。何といふ卑しい心だらう、何といふ弱い心だらう！

「若い時分に貧乏に苦しめられたものは、卑屈にならなければ頑固になり、氣むづかしくならなければ冷酷になる」とブランデスは言つた。弱いものは卑屈になり、强いものは冷酷になる。僕なぞはその卑屈になつた、若くはならう

としてゐる者の好例であらう。貧乏と戰つて生長して來た人間は、貨殖を專念とする堅實な散文的な人物になるか、然らずんば、一生苦しみ拔いて、末は野たれ死にする人間となるかだ、少時の困窮の經驗は、人心の賴みがたく、世路の艱難なことを、人生に於て金錢の外には何一つ賴るべきものがないことを、彼のまだ柔かい頭に深く深く刻み付ける。だからその人がよし冷酷な守錢奴となつたとしても、決して咎めることは出來ないのである。然し、かうした卑俗に堪へられない詩人に取つては、生存は絕えざる冒險である、流浪である、彼はやむを得ず day-to-day life を送らなければならない。彼が資本を有たずして人生の市場に立つたといふただその一事によつて、彼は生涯の間、すべての不利益と戰はなければならない。彼は謂はば武裝せずして戰線に立つた兵士のやうなものである。その必然の結果は敗北に外ならない。人生の第一步で旣に躓づいた者は永久に傷けられてしまふ。さうして、僕もその一人であつた。さうしてかかる人々は最も早く疲れるであらう。

曾つて僕を「生れたる詩人」と呼び、シェレイに比してくれた故鄕の一友は、先日手紙をよこして、その大なる驚きと失望とを告げた。友は僕の書くものが『秋の斷片』や『あはれなる基督の弟子の歌』などに現れてゐた「あの若々しい輝かな色と神聖な感激」とを失つて、その代り「輕薄な酒落を得々として云ふやうになつた」のを歎いて、「君が今や昔日の君でなくて秋江の徒とならんとしてゐるのが悲しい」と言つた。「純情のシェレイ何處にありや」とも言つた。さうだ、それは自分でもよく知つてゐる。僕の琴はたしかに絃がゆるんだ。僕の心はたしかにたががゆるんだ。つまり、僕は疲れたのだ、生活に疲れたのだ。

友よ。シェレイは生れたる詩人で、しかも貴族であつた、僕は――ただ馬鹿で貧乏人といふだけである。しかも、近頃になつてやつとこのわかりきつた事に初めて氣が付いたとは何といふ馬鹿な男であらう。僕は自分の天分に痛ましいデスイリュウジョンといふものをしてしまつたのだ、カリバンはつひに自分の顏を見た! ああ、貧乏といふものは

こんなにも早く少年の空想を破ることが出來るものか！

　だが僕はまだ全く老いたのではない。僕はこの心の沈滞に甘んずることは出來ない。僕は陣立を立直さなければならない。出直して來なければならない。僕は此頃の自分があまりに散文的(プロゼイツク)になつたことに氣付いてゐる。わが心は小さく固(かた)まらうとしてゐる。これを溶かすべき涙は既に涸(か)れ果てた。さらば火をもつて溶かさなければならぬ。我はわが心の放火者とならなければならぬ。僕はわがうちに既に情熱の火の燃え盡したことを信ずることは出來ない。丁度フェニックス鳥が自ら燒いた灰の中から生れ出るやうに、冷灰に等しい自己の無能無一物の中から、若々しい羽色をもつて生れ出なければならぬ。

　僕は自分の寂しかつた靑春を今日ここに葬る。僕の靑春は徹頭徹尾の自己欺瞞であつた。もうそれは澤山だ。天上の星よりも、今日は地上の石ころの方が尊い。自ら欺いて來た天分の自恃(ほこり)よりも、この現在の自覺が尊い。僕はまだ二十臺だ。僕は一個の平凡兒として、あらためて人生の闘技場(アレナ)に立現れよう。「凡てか無か」これが僕の標語であつた。凡てを得ることに絶望した今日、僕は無に歸すべきだ。然し、それほどの勇氣があれば僕はこんな無能力者ではなかつた筈だ。出來の惡い兒ほど可愛いといふ。僕はこの意氣地のないつまらない自分が、そのつまらない事によつて一層いとしくてならないのだ。この出來の惡い兒を終りまでいたはつてやつて、出來るだけの努力をさせて見よう。人間と生れて來た以上は、この人生に何等かの貢獻をしなければならない。僕も力一杯の仕事をしなければ創造主にすまない。そして僕の仕事がどんなに小さくつても、それは僕の罪ぢやない。僕はこんなに考へて來た。

　これは秋なり。春はすぎた、夏も知らずに秋になつたか。いや、僕の夏はこれからだ。思ふに僕の晩春が秋の氣分をもつて僕を暫く欺いたのに相違ない。よし。働かう。（大正四年四月）

私を笑つた娘　『ツルゲエネフの鼻』改題

少年の時分には、とりわけ文學を愛する少年は、天才と呼ばれる文學者に少しでも自分の顔が似てゐるとか、境遇が似てゐるとか、性質が似てゐるとか考へることは、何よりも心の躍ることである。さうして、さうした類似點は容易に發見せられるものである。私はどんなに長い間、どんなに多くのすぐれた詩人との類似點を自分の身に探し出しては喜んだことであらう。少年の日の私の意見によれば、その境遇はゴオリキイに、その性格はルソオに、さうしてその鼻はツルゲエネフに似てゐた！　恐らくそれはいづれも或る點迄は眞實であるに違ひない。特にその鼻に至つては、もと〳〵自分で氣付いたものではなく、人にさう言はれて自ら信ずるに至つたのだ。「君の鼻はツルゲエネフそつくりだよ」と言はれて少年は正直に喜んだのであつた。何といふ愛すべき無邪氣さであつたらう。今にして考へれば、私の鼻は格別ツルゲエネフに似てもゐないらしい、別に形が變つたといふわけでもないのだけれど。

併し、私をツルゲエネフに接近させたものは、一つはこの鼻のシンパシイであつたかも知れない。あの憂鬱な同時に輕快な作風が、あのスキイト・サッドネスが主として若い私の心を限りなく惹きつけたものではあつたらうけれど。人生に於て、人を人に結びつけるものが多くは極くつまらない事情であることを思へば、またこのつまらない事情にこそ深い意味があることを思へば、私はこのユウモラスな鼻のシンパシイを全く無意味に思ふことは出來ない。さうして私の鼻をあの偉大な露西亞的なツルゲエネフの鼻にまで高めてくれた友人に感謝せずにはゐられない。

一體、私は少年の時分から、詩人の傳記を讀むのが格別好きであつた。これも畢竟みな自分との類似點をそれらの卓越した人々の上に見出して、自ら勵まし自ら慰めて、若い時分でなければ得られないあの獨特の快樂を享受せんが

爲めであつた。私がツルゲエネフの傳記らしいものを初めて讀んだのは、『文章世界』の增刊として出た『近代三十六文豪』によつてであつた。けれども、その記事によつて察したところでは、ツルゲエネフと自分との間には、どうもあんまり似たところが無ささうなので――扨てこそ鼻のシンパシイとなつたわけである。

が、鼻のことはもう澤山だ。私がツルゲエネフの作品と親しんだ初めは何であつたらう？　多くの人々と同じく矢張り二葉亭主人の名譯によつてであつた。『片戀』や『あひゞき』や『浮草』（ルーヂン）などは、上野の圖書館に毎日々々通つてゐた時分、借りて讀んだ。『片戀』のあの「戀する女の眼といふものは……」といふ名文のあたりなどはわざわざノオトに書き寫したものであつた。『浮草』ば大分繰返して讀んだ。その時分、私は何でも音讀した、音讀しないと氣がすまなかつたので。それについて一つの失敗談がある。

私の部屋の窓の外に隣の家の井戸があつた。隣の家には二人の娘があつて、姉さんの方は電話交換局に出てゐた、一寸綺麗な娘で、なか〳〵プラウドで、すまし返つてゐた。年齡はその時分もう二十二三歲になつてゐたらうと思ふ。妹の方は姉と違つて、容貌が惡かつた、頰の紅い、圓顏で眼が丸くつて、鼻がちよつぴりとついてゐて愛嬌があつた。氣質も素直であつた。

あの夏の夕方であつた。私は窓をあけて、外の光で、熱心に『浮草』を讀んでゐた、例によつて聲をあげて。勿論、小さな聲で。そのうち、だん〳〵興に乘つて、もう周圍を忘れて、すつかり書物の世界に沒頭してゐたが、丁度ルゥヂンがナタアリヤにやつた手紙を讀んで、それからナタアリヤがその手紙を燒き棄てて、いきなりプウシキンの詩集を開いて、その初めに目に觸れた句によつて占ひをするところまで來た。

　こひせし人のあはれさは
いつまで草のいつまでも

かへらぬむかしかこたれて
浪たちさわぐこゝろには
はなも紅葉もうつらめや
たゞひとすぢにくやしくて
おつる泪は干さじとぞ

といふ句を讀んでゐた時、不意に窓の外でくすくす笑ふ聲が耳に入つた。ふつと何氣なしにその方を見ると、隣の家の妹娘が井戸端に水汲みに出て來てゐたが、水桶をそこへおろしたまゝ梅の樹の下に佇んで私の方を見ながらいかにもをかしくて堪らないやうに笑つてゐるのであつた。私はいつしか興に乘つて大きな聲をあげて讀んでゐたのであつた。娘は私の眼に出會うと、どぎまぎして急いで釣瓶をたぐり始めた。私は私ですつかりあかくなつて、途方に暮れて、急いで障子を閉めてしまつた。あとで姉娘が出て來て妹を叱つてゐる聲がした。……其後、私はふとしたことから、その娘の、其後の氣の毒な運命を聞き知つた、さうして丁度ツルゲエネフの結末を讀むやうな感慨を覺えずにはゐられなかつた。

——これはツルゲエネフに關係した、私のつまらない、子供らしい思出である。

佐藤春夫君の印象

僕が佐藤君と初めて相知つたのは、君も僕も共に十八の時だつたと覺えてゐる、だから丁度今年で十年になるわけだ。君も僕も同じ明治二十五年の三月生れだが、昔から君の方が遙か年長者らしく成熟してゐた。今でもさうだ。畯

かい黑潮の流れ寄る紀州の生れだからといふわけでもあるまいが、佐藤君は驚くべき早熟の男である。僕自身も隨分早熟の方であつたが、然し僕のはたゞ感情的に、と云ふよりはむしろ文字を弄ぶ上にさうだつたので、僕が戀といふやうな字を頻りにつかつても、實はその戀がいかなるものかも一向知つてはゐなかつた時分に於て、佐藤君は感覺的にも、すべての點に於て、遺憾なく早熟であつたらしい。卽ち本式に早熟だつたのである。僕が朝鮮からやつとのことで大阪まで上つて來、其處からまたやつとのことで東京へ出て來て、途方に暮れてゐた時分に、同國の先輩といふのを緣故に、生田長江氏を訪ねて、いろ〳〵糊口の上にも文學上にも御世話になつたが、一度故鄕の方へ歸つて半歲程ゐて、再び東京に出て來た時に、長江氏から初めて佐藤君の名を聞いた。氏は與謝野寛氏、石井柏亭氏等と共にその夏紀州に講演に赴いて佐藤君に會つて來たのである。長江氏が容易に後輩の長所を認めて、之れを激賞する美點を有してゐられることは文壇周知の事實であるが、然し、遙かに見れば餘程その評價の標準を下げられたらしい今日に於ても、氏があの時佐藤君を激賞したほどに讃嘆の辭を惜しまれないかどうかは疑問である。氏は紀州新宮に佐藤春夫君といふ、君と同年のすばらしい少年がゐる、將來どんな發展をするかわからない、それに家庭が丁度ゲエテのやうなので、君はゲエテのやうにいゝお父さんをもつてゐるのだからゲエテのやうにえらくならなけりやいけないよと言つて置いたなど言はれたが、その口吻には單に家庭の狀態のみならず、その天分に於ても少年のゲエテに對するかのやうな風があつた。僕は彼を待つた、やがて彼が出て來た。その初對面の時既に僕はすつかり驚かされ、畏服した。僕は人一倍シャイな男で、今は少しはなくなつたが、その頃は人の前へ出るとろく〳〵口もきけなかつた。その僕があの十八歲の少年とは思へぬ機智縱橫、端倪すべからざる佐藤君の話振りを聞き、あの氣の利いた態度を見たのだから、驚き畏れたのも無理ではないと思ふ。彼は全く其時分から既に完成してゐた。既に一家の見識を備へてゐた。既に人生とはどんなものかを知つてゐた。それに僕は、いろ〳〵の辛酸を嘗めて來ながら、人の心持さへ察することが

出來なかつたのだ。何とふ天分の相違だらう。

佐藤君に對する最も古い記憶で、今僕の頭に殘つてゐる事は君にナショナルのリイダアを少しばかり教はつた事と、僕から絶交狀を送つたこととの二つである。この後の方のは一寸恥しいけれども、笑ひ話だ、書いて見よう。丁度佐藤君が森鷗外さんの向うの下宿にゐた時だ。その家は崖の下に建つてゐて、丁度二階が通りに面してゐるやうな家で佐藤君はその崖の上の道から部屋の隅々までも見通せるやうな端れの日當りのいゝ部屋にゐた。或日其處へ遊びに行くと、同鄕の奥榮一君、下村悦雄君などもゐて、佐藤君は例の如く窓の敷居に乘つかゝつて、盛んに氣焔をあげ、警句を吐き、交る交る三人を揶揄してゐたが、どうしたはづみか話がエロティックな方面に涉つた時、彼は僕があの少年特有の習癖を有してゐると言つて、一寸こゝに書けないやうな面白い描寫をしてからかつた。僕は眞赤になつた。圖星をさゝれただけに怒つた。どんなにして歸つたか忘れたが、歸るとすぐ絶交狀を出した。するとあとで佐藤君はいろいろ僕を慰めさとして、その手紙を返してくれた。その時佐藤君はあんなことでおこるのは正直すぎるよと言つた。その時僕は初めて彼の美しい心を知り、とりわけ彼に親しんだやうに思ふ。

佐藤君はこんな風に十八九の少年の癖に單に友人のみならず、隨分先輩をもやりこめて得意でゐたりしたが、そのかうした態度はその後ますます發展して行つた。ホラティウスの所謂「一つのキットを失はんよりむしろ一人の友人を失はん」といふ趣きがあつた。そのため隨分無用の反感を買つたやうだ。彼の古疵の一つなる誤譯指摘の如きも、あの文章が名文であつたゞけ、なほさら多くの人に小面憎く思はれたに違ひない。あんな聰明な男でありながら、一つは周圍の先輩たちが驕兒の驕態を徒らに讃嘆するばかりであつたためもあらうが、客氣に逸つて、才に傲るといふ傾きは確かにあつた。彼のさうした思ひ上つた驕慢の態度は感嘆せずにはゐられないと共に賞讃すべきではないと僕は思つてゐたが、然し彼がだんだんにその浮誇を脱却したことは、その機才よりも更に驚嘆すべきものがある。そして

彼が浮華を去つて、質實な人格を築くようになつた第一步は、恐らくあの尾竹紅吉さんの妹さんを對照としたラヴ・アフェアであつたかも知れない。佐藤君はボチチエリのマドンナが好きであつた。そしてあの美しい少女にその面影を見出したのであらう。或は彼女のためにボチチエリを愛したのかも知れない。それは純潔な美しい戀であつた。彼は煩悶のあまり紀州に歸り、天草にまでも漂遊した。その頃の詩に、

遠く離れてまた得がたきものと思ふ日にありて
われ心からたるまことの愛を學び得たり
そは求むるところなき愛なり
そは信ふかき少女の願ふことなき日も
少女マリアの像の前に指を組む心なり。

といふすぐれた作があるが、これがその時分の彼の純粹な感情を歌つたものである。彼は詩人である。彼の小說の意義も一にその詩人としての絕大の天分の上にかゝはつてゐる。あのいかに感嘆していゝかを知らぬ散文詩『田園の憂鬱』の如き、詩壇に盛名ある人々に對する自然の諷刺とさへ思はれる。

『スバル』や『三田文學』や『我等』などは久しい間彼の短篇、詩歌のすぐれたものを載せてゐた。才人として彼の名はかなり廣く知られてゐた。廣津和郎氏の『新人佐藤春夫論』によつてもそれは證せられる。しかも彼は長い間失意であつた。認められなかつた、それには彼の驕兒であつた事も與つて力があつたのであらうが、主としてまだ機運が至らなかつたのである、彼の藝術は旣に已に完成して渾然たるものとなつてゐたのだけれど。そして、つひにあの神奈川縣下の隱遁生活が始まつた。あの時分、彼は自轉車に乘つて東京に出て來た序に、よく僕の家へ寄つたが、何となく意氣銷沈してゐた、いろんな苦惱がさらでも憂鬱な色を帶びた顏に渦を卷いてゐた。しかしあの時分ほど佐藤君が藝

術家らしい風格を帶びてゐた事は前後を通じてないと思ふ。いかにも藝術の中に浸つて失意を忘れようとしてゐる風があつた。然り、あの時分に、彼は『田園の憂鬱』を書きつつあつたのだ。

今佐藤君は文壇の流行兒である。いろ〳〵な評家によつて屢々論ぜられてゐる。然し、僕は彼の新しい作品に感嘆するよりも、より以上に、彼の人間の立派になつて行くことに感嘆してゐる。順境に置かれゝば誰れしも立派になるのであらうが、佐藤君のやうなのも珍らしい。赤木桁平氏は「猥雜なる屬性」といふやうなことを言つてゐられたが、僕はそれを思考の惰性だと言ひたい位だ。曾ては容易に人をゆるさなかつたあの男が、今ではよくいろんなものに感心する。最近、葛西善藏氏の作品に傾倒してゐるのなどもそれだが、葛西氏の如きは多くの人のいふやうに單なるリアリストではないと思ふから別とするも、自分とは全然相反したものもよく認めて行かうとしてゐる。それからもう一つ感心することは、そのいかにも藝術に全身を浸してゐるやうな生活をしてゐることである。彼のやうな藝術至上主義者には、是は當然のことであらうが、他の友人仲間の誰れ彼れを考へ合せる時、彼の態度の最も徹底してゐることに感心する。

紙上漫步

自分に對する警告

詩人は世の中の最もユウモラスな人間に屬する。彼等は彼等の詩歌のために宇宙が造られてあると思つてゐる。彼等はすべての人間が絶滅しても、自分の詩集さへ遺ればいゝと思つてゐる。彼等はその魂をきれいな活字で荒く印刷した、紙質の上等な、フランス式の裝釘のその詩集と喜んで換へる。彼等は美しい文字を並べてさへ行けば人間の貭

實な感情を歌ふことが出來ると思つてゐる。詩人が詩作せんと欲すれば、まづ詩人たることを止めなければならない。これは勿論一つのパラドックスであらう、然し、詩人といふ名稱が輕蔑の口調をもつてでなくして語られない今日にあつては、この言葉の中には恐らく多分の眞理が含まれてゐるであらう。

少年の夢想から

我れは幸福を味ははむが爲めに生れしか？
いな、全人類に幸福を齎らさんが爲めに！
かかる傲慢は神の喜んで恕したまふところならん。

——ああ幸福なる少年の時よ。私は曾つて、この詩句を書き記した時ほどに幸福ではなかつた！

愛の說敎師に

愛は饒舌を厭ふ。僞りの豫言者が常に華かに裝へる如く、僞りの愛は常に美しい言葉を着てあらはれる。愛なきところ、そこに愛の說法がある。

愛についての一つの獨斷

まことに愛の眞意を解するのはただ非常人のみである、そして人がまことに愛の眞意を解するのはただ非常時に於てのみである。

興味のある女

女よ。おまへのその狂態は私に興味がある。傷つけられた自負心と、傷つけられたエゴイズムとが、おまへを引きずり廻してゐるさまを傍觀してゐるのは興味がある。愛することを知らぬ女には憤怒の涙が與へられる。愛に殉ずることの出來ない女には永遠の寂寥がある。腹の立つ時でなければ涙が出ない女には興味がある。

寂寥の慰みに愛を弄ぶ女は興味がある。曾つて一人の男性をも愛しなかつたことを誇りとする女は興味がある。しかし、どんな馬鹿な男が彼女を愛するであらうか？　しかもなほ自分が愛されてゐると思ふところに彼女の面白味がある。人生を樂しまんとするものは、先づ人生を離れなければならぬ如く、彼女を樂しまんとするものは、先づ彼女をある距離まで遠ざけなければならない。それは共に傍觀すべきものである、決して愛すべきものではない。

笑ひの爲めの悲しみ

笑ひが野卑で、涙が高貴なものであるといふ信念を抱きはじめたのは何時頃からであつたか、自分でも忘れてしまつた。それはそんなにまで古いことである。然し、いよいよ自分が沈鬱になつて來ると共に、私は笑ひの價値をだんだんと見出して來る。笑ひは人生の肯定である。笑ひは幸福の反映である、或はその誘引である。私は笑ひを欲する。そのあとに空虚な寂寥を伴はない笑ひを欲する。あゝ、もし笑ひがその消えたあとにより以上の不滿を殘しさへしなかつたなら！

文學者としての龜

いつとも知れず年を取つて行く人もある、長いこと變らないでゐて急に年を取る人もある。そのやうに急激に老熟する人もある、また少しづつ目に見えぬやうに熟して行く人もある。龜は兎になる事は出來ない、龜はその龜たるに滿足しなければならない、然し龜とても歩くことは出來る、そこで龜はいふ、「少しづつ進歩して行くといふ事が僕の唯一の强味だ。甚だ心細い强味だが、然し、なほ强味たることは失はない。」

二重の不幸人

人間と共に眞面目に談らうと思はなくなつた人間。この不幸な人間を世間は不眞面目だと言つて攻撃する。かくて彼の不幸は二倍になる。

反逆

むだ書きは樂しみなものだ。藝術は要するにむだ書きであればよい

光榮ある例外

善人榮え、惡人滅ぶといふのは、善人の書いたおとぎばなしや、マアク・ツヱエンの所謂「日曜學校の教科書」の中ででもなければ生ずるものではない。さればシルレルも言つてゐる、“Der Schein regiert die Welt, und die Gerechtigkeit ist nur auf der Buehne” と。ところがこゝにたつた一つの例外がある。それはかの――(彼の名は昔日の露西亜に於けるヘルツェンや、チェルヌイシェフスキイの如く印刷されない方がいゝだらう)である。彼はその最後の手紙の中で言つてゐる、「まづは善人榮えて惡人滅ぶ、めでたしめでたし云々」と。勳章を下げたり、年金を貰つたりして愉快に榮えて

ゐる善人諸君は、かくて彼の破滅を手を拍つて喜んだのである。

先驅者

自ら信ずるところのないものは先驅者の名を渇望する。然し、忘れてはいけない、ただ鍔れたもののみが本當の先驅者だといふことを。

厭世詩人の手帳から

快活は幸福の唯一のあらはれである。そして快活といふものは直ぐなくなつてしまふ。

神樣の失錯

神樣は人間を創る時には、まづその弱點から與へることにしてゐた。神樣は私をこしらへ上げるとき、こいつを天才にしてやらうと思はれた。そして、天才のもつてゐるあらゆる缺點を、氣違ひじみた考へや、痩せた病弱なからだや、世界中をぶらぶらほつき歩いてゐたかつたり、寢床の中で煙草をふかして、うつらうつら一日を過してしまひたかつたりする怠け癖や、何事にも最後の限界を越えようとする欲望や、激烈な感情に伴ふ薄弱な意志やを與へたとき、神樣は急に手を止められた。それはこれ迄あまりに多くの天才を世界に與へた事に氣が付かれたからであつた。またこの者を天才に固有の悲慘な運命に投ずるのが可哀相になつて來られたからだ。――そしてそれは何といふ慈悲だつたらう！――そして、天才なしに、私はこの世界に生れて來た。そしてなほ一層惡い事には、全能の神樣は、この出來ぞこなひの人間が、誰よりも、一番悲慘な天才よりも、また完全な凡物よりも、十層倍も氣の毒な人間だといふ事

に一向お氣付きでない。

プラトニック・ラヴについて

プラトニック・ラヴ、一名永遠の斷食祭。

プラトオンの像を見て狂せるレナウは言つた、「これは馬鹿げた戀を發明した男だ。」

少女は言ふ「お友達になりませうね。」

算盤をもてる女は言ふ「私あなたを愛してるわ、けども……」

コケットは言ふ「キスだけよ」

プラトオンの像を見て未だ狂せざる別の詩人は言ふ、「これは氣の毒に、馬鹿げた戀の發明者にされてしまつた哲學者だ。」

プラトニック・ラヴ、一名日和見(ひよりみ)の戀。

それは、きたない心をつつむ立派な着物。美しい方便。そして女が商人となる時必ずこれを愛する。

洞　察

ある時代に於て、ある人またはある事物を偉大だと信じてゐた人が、その信念が消滅してしまつた成熟の時に、單に、自己の生存上の便宜から、依然としてそれが偉大だと呼んでゐるといふ人は少くなからう。

心　理　學　者

厭世家(ペシミスト)ならぬ心理學者とは考へることの出來ないものだ。

生存の祕密

すべてのものには快樂が伴ふ。こゝに人間が生存を續け得る祕密が存する。

何處かで讀んだやうな文句

彼は死んだ。二年たつた。彼の友人は一人として彼のことを言はなくなつた。敵のみは彼を忘れなかつた。

人間の强味

知るべからざるものを知りたいといふのが人間の欲望である。かくの如き好奇心は最も深い根ざしをもつてゐる。この故に人間は曾つて眞理の探究に倦んだことがない。

世界苦

Weltschmerz（世界苦）獨逸人特有のこの言葉には、いかにチュウトン人の深奥な感情が含まれてゐることぞ！　そしてああ、日本人にしてなほこの言葉を口にし得るとは！

詩人の叫び

天地の不可思議に私の魂は溺れてしまふ。果て知れぬ世界を眺めて、私の魂は叫ぶ “Wide, wide world!” と。あ

ゝこの世界には實にいろ／＼なものがある、そしてその一つすら十分には理解出來ないのだ。あゝ、我々の生は驚嘆に始まつて驚嘆に終るのであらうか？

不幸なる著作家

人間が批評家として立つときは、殆んど萬能であり得ること、しかも人生の一角に立つ戰士として見るときは憫れむべきクリイチュアであることを知つた、人間のあらゆる賢い言葉が、その天賦の弱點とは全く無關係に印刷せられ賞讃せられるのみなることを知つた。さて、どうしたらいいのだ？　まだ何か書かねばならないのか？

最も悲惨な人間

貧乏な享樂家！　何といふ悲惨な人間だ！

制　限

人間の見解は皆それぞれの地平線に限られてゐる。人は自分の頭上に飛び上ることは出來ない。すべての言葉はその語り手の匂ひを有つ。我々はあらゆる思議に於て、その人の氣質（テンペラメント）を味ひさへすればいゝのである。そして聰明な讀者はよくこの事を知つてゐる。

誘　惑

人はみなその最も恐れるものに出逢ふ。彼の恐怖が彼をその方へと誘ふからである。深淵のふちに立つとき、恐怖

が反つて深淵の中へと我々を誘ふ。死が我々の絶えざる考察の對象であるのは、我々が死を恐れてゐるからである。

決算

善人と不幸な者(この二つの概念には一つの言葉で足りる様に思はれる)とにとつての慰めは、惡人も幸福なものもやがては同じく死ななければならぬといふ事である、死が彼等にとつて一層の苦痛であるといふ事である。實に死は善人と不幸な者とにとつて、二重に喜ばしいものである。死は彼等から不幸を取り去り、惡人と幸福なる者から幸福を奪ひ去る。そして、死ののちには何もないのだ。そこですべての決算は終る。そこに於ては、不幸なる者も幸福なるものも、ただ等しく人生に生きて來たといふだけである。幸福なる者の短い死の惱みが不幸なるものの長い生の惱みと差引勘定になるのだ。實に人生はよく出來てゐる。

死の苦痛

死に苦痛なしといふ或る獨逸の學者の說を讀んだことがある。人はこの言葉に驚くであらう。然し、それは死の瞬間に肉體の苦痛の決して伴ふものでないことを說いたのに外ならない。それはさうかも知れない。一發の銃聲、一匙の毒、塔上の一飛躍、海水の一激動、それは苦痛を伴はないかも知れない、苦痛を感ずべき時に旣に靈魂は飛翔し去つてゐるかも知れない。死の懷に飛込む瞬間に誰がなほ苦痛を感ずるほどに剛膽であらう。恐るべきは死と相面してゐる時である。なほ助かる望のある時である。死の眞の苦痛は、すべての人が生きてゐると考へるところにある。

讀書子の嘆

世界といふ書物ほど難解な書物はない。そのたつた一行一字をも、本當に理解することは、殆んど不可能だとさへ思はれる。これまで書かれた、またこれから書かれる一切の書物は、みなその註釋に外ならない。それ等は、それは隨分參考にはなるだらう。が、それはどんなに立派な註釋であつても、結局參考以上のものにはならぬであらう。ああ私は餘りに註釋に信賴しすぎてゐた！

また一つの獨斷

一本の腕を見て、その彫像の全體を推知し得る人でなければ、眞の義術鑑賞家とは云ひがたい。一篇の詩によつてその詩人の全體を察知し得る人でなければ、眞の批評家とは云ひがたい。

厭世家に

生きんとする欲望なくして生きるは罪惡である。それは愛なくして結婚するものに似てゐる。然し愛情なき夫婦もなほ子供を擧げ得るのに對してかうした生存者が果して何事をなし得るだらう？

自殺の原則

「この世界を粉々に打碎いてしまひたい。それが出來なければ、いつそ自分自身を――」

ストリンドベルギアン曰く

誰だつて、妻の貞操を信ずることは出來ない、アダムを除いては。

ある對話

「あゝ人生は苦痛の谷だ、何處を見ても悲慘だ」
「そんならなぜ君は死なゝいのだ？」
「そこだ、その死ねないところにペシミストの最大の苦痛があるのだ、恐らくそれは一切の悲慘事の根元かも知れない」

私の倫理學

我々の經驗するある瞬間が若し永續するとしたならば、それはどんなに堪へがたいものであらう。いかに純潔な人といへども、その永續する事を欲しないある瞬間があるに相違ない。我々が眞に道德的たり得んとする努力は、一にかかる瞬間をつくらない事に存する。さうして我々の魂の最高所に飛揚したる瞬間を永續せしめよ。然らば我々は最もすぐれたる最も美しき人たるを得るであらう。

人生

どうしても勘定が合はぬ。そこで來世が持出される。

最大の自負

余はすべての場所でアナコリスティックでありすべての時にアナクロニスティックであるといふ程の、これ程の自負は

未だ曾つて無かつた。

或る藝術論から

藝術は生産に屬せず、消費に屬す。

洒　落

戀愛なくして女を弄ぶものは、考へないことを書く作家に似てゐる。その女は間もなく棄てられてしまふであらう。その作品は間もなく忘れられてしまふであらう。
どうだ、この比譬は？

沈默の理由

私はすべてのことを感じた、そしてこのすべてがいづれも既により巧妙に語られてゐることを發見した。

平凡人の信仰

自分は一個の平凡人に過ぎないと自ら認めるためには、餘程の勇氣が必要である。若しそれが單なる反抗の言葉でなく、思はせぶりでなく、轉倒せる虛飾でないならば、自分は一個の平凡人に過ぎないと自分自身に言ふほど、これほど敬虔な言葉はない。これほど眞實な言葉はない。平凡人たる自己に眞に滿足し得るとき、その人は神の道を見出したものと云つてよい。

交友難について

友人は時として敵よりも重い傷手を與へる。交友間の最もデリケエトに言はれた言葉は、時として敵の擲つ毒矢よりも深い傷手を負はせる。

交友に於てあまりに深入するものは、最も痛切に人間の利己心に觸れるものと覺悟しなければならない。

二様の悲劇

親子の間の悲劇の多くは「取りかへる」ことが出來ないために生ずる。夫婦の間の悲劇の多くは「取りかへる」ことが出來るために生ずる。

個人主義者の信條

ゲエテは Leidenschaft bringt Leiden（欲情は苦惱を齎らす）と云つた。それは眞理である。私は Mitleiden bringt Leiden（同情は苦惱を齎らす）と云ひたい。この方がより深遠な眞理である。

陶醉の必要

自己に醉ふといふ事ぐらゐ人間にとつて喜ばしいことはない。自己に醉ふことの出來なくなつたものに生存は全く無意義である。

莊さんと光さん

美しい妻を持つ爲めには俗物でなくてはならない、社會に尊敬される爲めには惡人でなくてはならない、幸福である爲めには馬鹿でなくてはならない――とから莊さんの言つた言葉を思出して、念入りに考へて、成程それに違ひがないと得心が行くと、光さんは急に生きてゐるのが厭やになつた。俺は俗物にも惡人にも馬鹿にもなりたくない、すると美しい細君も持てないんだな、社會にも尊敬されないんだな、それに第一幸福でなくなるんだな！ さうすると生きてゐる甲斐がないんぢやないか。そこで光さんは途方に暮れてしまつたのだ。だが、莊さんは一向平氣なものである。莊さんは孤獨な隱遁者で、小さな哲學者である。光さんはつひに莊さんにはなれないであらうか、光さんはこの問題をどう處置したらいゝのだらう、そしてその莊さんとは誰の事だらう、光さんとは誰の事だらう、試みに當てゝごらんなさい。

反古の中から

人生は灰色だ、若くして年老いたものには。すべての幸福の說敎師は、灰色になる術を敎へる、しかし灰色にならねばならぬものは、不幸な敗れた人間だけだ、幸福の子の脣はあかく、目はくろく輝く。人生は灰色だ、鮮かな色の褪めたものには。

利己主義萬歲

すべての淚は自分のために流される、すべての言葉は自分のために談られる、つまり、すべての人は自分のために

生きてゐるのだ。

「私はあなたを愛します」とは、「私はあなたを自分のものにしたい」といふことだ。このわかりきつた事がよく間違へられる。

狼の死

あるがままに人生を見て、あるがままに人生を肯定せよ。もしそれか堪へられなくなつたなら、そのときは――默つて死ぬがよい！　これが、これのみが勇者の道だ！

最も強い者は沈默する、すべての言葉は畢竟怯懦の表白だ。沈默のみが人間の唯一の德だ。狼にならへ、狼の死に――かくて汝は運命を克服する！

自由の戰士の幸福

自由のために戰ふものゝ最後の望は（よし意識には上さなくとも）祖國のために、或は民衆のために死ぬにある。壓制より祖國を、或は民衆を救はんとして、彼は自分を自由にする、あゝ、このすべての生の壓制より――同胞の自由のために戰ふものに、これはよりよき報酬だ。

藝術家の悲劇

藝術家の目的は自己を發見するにある、その生涯は不斷の自己探求である。あらゆる經驗はその一つ一つの手段である。またその一つ一つの制作はその報告書である。ところでつひに何物も發見されなかつたなら？　その報告が誤

つたものであつたならば？　彼の生涯が、浦島の玉手箱であつたならば？　そこには何物も發見されなかつた代りに彼の頭が眞白になつてゐたならば？　それは恐ろしい悲劇だ。だが、まだそれよりも恐ろしいことがある。發見すべき自己がはじめから存在しないために、新しい流行に於て常に自己を見出す藝術家がある。彼等は常に勝利に醉うことが出來る。然し彼等の死と共に、彼等は全く生きなかつた人となる。彼等はその時二重にその勝利を償はねばならぬ。これ等の藝術家の作品に横はつてゐる絶大なる自負と自己滿足とほど、しかく滑稽で且つ悲慘なものはない。

裏日本のひと夏ひと秋

――故郷からの手紙――

小引

十七歳のとき東京へ出て來た私は、十八歳のとき郷里へ歸ることになつた。それは親戚の家へ養子に行つてゐた從弟が死んだため、そのあと代りにとて叔父が呼び戻したからであつた。そして大きな希望をもつて東京へ出て來た私が、なぜ容易く叔父の意志に從つたかといふと、東京で生計の道のたたぬのを悲觀してゐた矢さき、ある日、朝の合嗽の時に血痰が出たので神經質な私は肺病になつたのではないかと非常な恐怖を覺えてどうしても國に歸つて靜養しなければならぬと考へたからである。

かうして風變りの骨休めのつもりで歸つた私は、直ぐにいろ〳〵な煩雜に苦しめられる身となつた。そして直ぐに東京にあこがれるやうになつた。そしてたうとう萬難を排してまた出京した。その半歳の間の手紙がこれである。紙數の都合によつてその半ばを割愛したのは殘念であるが、これだけでも十八歳の少年の心臟の鼓動を聞くには十分であ

らうと思ふ。私は前から「裏日本の秋」と題してこの手紙に現れてゐるやうな經驗に基いて一篇の創作をしようと思つてゐたが、この手紙そのまゝの方が一層面白からう。

六月十一日

別れて早も三日に候。その間實に千日、千萬里のへだてに候。

旅中は面白き事、面白からぬ事あまたありしも、ポストに緣遠かりし爲、葉書かきては出さず、手紙と一緒に御送り申せし次第に候。

別れてのち。まづ左の如くに候。小生の豫期は寸毫もあやまる事無し、宛として是れ愚劣なる喜劇の一場に候。かくて幾年、と思へば淚もこぼれ出で候。ただ自ら安んぜむのみ。

かの人の性の一字のあるためにのみ、靜岡ではいらぬ辨當も貰ひ候。驛名に藤と岡との名多きはうれしく存ぜられ候。Fuji と oka この羅馬字に胸をどらせし事もあり、思へばおろかなるかな。

京都で夜明。大阪は不快なる處也。大阪以西車中の客種甚だしく下等に相成候へど、丹波に入れば純朴愛すべく、山間と谿谷との風景も絕佳なり。車中、出雲の美しく親切なる然して若き女、京へ買物に行けりとてよく語る。小生一家の舊知の由に候ひき。

新舞鶴迄の切符買つて大失敗。舊舞鶴にて海岸線に乘込む事となり、行李を詰替て貰ふため大に氣をもみ、かくて四時迄待つ。遠く橋を渡りて町を見る。空瓶のやうな町に候。その上磯臭くして、郵便局を問へば親切に敎へくれしゆゑ行つて見れば、ポスト一個これあり候ひき。

胃のせゐか車中氣分あしく凄てすごす。朝早く境につく。大山のさま昔に變る事なし。米子を見る。車中の一瞥に候へども相變らずに候。

さて、淀江につけりとお思ひなさるべく候。まづ太田の叔父の家に入る。その後の事、型の如くに候。田舍は何の變化もなし。ただ人の老い、人の成長せるのみに候。

愈々養子に候。唯一つの逃路を作りたるのみ。これで行けば幸福に候ゞ碌々として老い朽つるも痛快なるべし。御馳走。挨拶。挨拶は粗末ならぬやう、祖母よりの度々の注意に候。

大きくなつた。この嘆稱。あまり瘠せてゐない。この安心。叔父よりも誰よりも脊が高くなつたのは諸方より等しく悦ばれし事に候。

死せる從弟に涙多し。鬼の如く思はれし叔父さへ涙にくれ居る始末、膳を共にして、叔父も老いたりとそゞろにいたましく思はれ候ゞ長くのびたる髯に白きものまじり、悄然といたし居候。すべて涙。小生も涙を出せし如く裝はざるをえず候ひき。されど從弟の死は悲しむものに候。

從弟の位牌は小生の弟にして米子に養子せる節三と申す十五か十六の男の子これを持ち候由。品があつておとなしくて愛嬌があつて利發なる爲め、皆に讃嘆せられし由。この弟は小生の如く愚ならず、小生の如く臆病ならず、小生の如く甲斐性なしには候はず。

從兄は六尺近くの偉丈夫。農學校にておしやれをし、女狂ひせし事はもう忘れたらしく、腰に煙草入をさし、威勢よく米子に通つたりなどいたしをり候。嫁さんは近在の豪農より貰ひし由にて、土産とせしリボンの一つはその人のものとなるらしく候。未だ相見ず候ゞ平凡とよぶ語の偉大なる力を知り申候。

こゝにして困るのは只うるさきだけに候ゞ同じ事を百萬遍言つて飽かざるは田舍人に候。

呑氣にして、身體を丈夫にして、面白からぬ事を面白く思ひ、それで嫁でも貰ひ、子供の一人も出來れば、それで小生の夢思は幕を閉ぢたのに候。自ら嘲つても始まらず。そのうちお目にかゝりうべきを望に、牡丹餅でもたべてゐ

るべく候。
疲れて手紙もろくには書けず候。黄道吉日をえらびて、いよ〳〵印南家へ行くのに候。それから手代に算盤を習ひ藏の様子を見、質屋の店にデカダン面の店ざらし、御一笑あるべく候。「今日はどうも降らにやようございますがな」と少くとも十遍位繰返す。日が暮れれば寢る。例の所謂外光派になつて、女でも買つて見るやうになるべきか、如何。自然のみはよく小生を慰めてくれ候。海岸を散歩。ルネのわづらひを思ふ。從弟の位牌に對しては、『ファアザアス・アンド・チルドレン』の結尾を思ひ出づ。小生には只だ野暮のみこれあり候。
奧樣にくれ〴〵も宜しく。詩は作れず候。
祖母よりくれ〴〵もよろしく申候。

六月十三日

氣忙しく身に落つきのない爲めに何する事も出來ません。夜何か書かうと思つても書けません。たゞあなたにだけは毎日會つて見たい氣がしますから、自分だけがしやべる氣で、かうして手紙を差上げるのです。
田舍も存外面白い(例の反語かも知れず)こゝでは「要なき饒舌、絕えざる挨拶」が處世の大祕訣です。
まづ雜感でも記しませうか。僕は××××氏以上の戀愛狂です。しかも戀愛の憎惡者です。電車の中であふ女、これ、那の戀人といふ人間ですから、歸鄉中の汽車汽船で、米子邊の女を澤山見受けて何とも感じないですんだとは思はれないでせう。出雲は美人系の由。雲伯の女には美しいのが多い。やさしい言葉の一つでもかけてくれゝば鄉音だけに一層うれしい。
田舍人には個性が稀れです。くど〳〵と同じ事を辯じ立てゝ止まぬところにはつぐ〳〵感心します。こゝには岩野

泡鳴氏の刹那心熱主義は全く否定されてゐます。

明日愈々行きます。暫く樣子を見てから、その中に養子になつて印南淸平になるのです。なるべくなり度くないものです。これについて祖母がその胸中の計畫を話しましたが、それがをかしくもあり、氣の毒にもなりました。祖母の妹にあたる叔母と、その叔母の姑にあたる老婆と二人きりですが、二人ともいつ死ぬかも知れませんから、さうすると私が主人になれる。質屋はこのあたりで一番大きな、一番繁昌する家だし、少くともあの廣い家屋敷だけでも人を羨ましがらせるに足る。だから幸福ではないかと言ふのです。それからまた田舍には子方、金娘といふものがあつて、いい家の主人と盃事してその子分みたやうなものになるのですが、從弟すらもう二人もそんなものを有つてゐたさうで、おまへもそんな風にするがよいと言つて、その子方と金娘になる筈の二三人の名さへ擧げました。それから次ぎには更に進んで嫁の話で、太田の子のうちどれがいいか、八重がいいか雪がいいかときかれて、デカダンのぐうたら先生默り込んでしまひました。これはこの印南の叔母も太田の叔父叔母も、暗々裡に僕の父母もその事に決してゐるらしいのです。八重がいいと答へました。八重、年はまだ十三、姉妹中のきれうよしで、また一番利巧な娘です。十五位になると皆嫁になれるのだからと祖母は申します。だが明日の事を思うと氣の毒です、自分自身に對しても。

すべて高飛車です。しかもこの二日といふもの僕の腰は大變低くなりました。下らぬ雜談に笑ひ興じさへします。が、心の中の寂しさは何とも言へません。折々發作が起つて、祖母に喰つてかゝつてはすぐ後悔いたします。苦しい眞の涙が初めて胸に流れました。尊い經驗です。挨拶と愛嬌一つにつながれてゐる生活の心細さ。だが面白い事、面白くない事、すべて深く考へれば味のあるものです。つまらない事に笑ひ興ずるのも自分に對する諷刺のやうに見えて、また小氣味のいゝものです。

日夕、大きな大山を仰ぐと自分も一緒に大きくなるやうな氣がします。以上。

六月二十五日

米子に二晩泊り、只今歸りしところに候。二十三日の夜、例の米城文豪等の主催にて、「故國木田獨歩氏追悼會」新公園にて開かれ候。小生は、田中、及び畫家なる由良の二友と席に列り候。席上珍談甚だ多く候へども、これを割愛いたすべく候。

新聞社に諸文豪を訪ふ。宛然たる梁山伯なり。小生もやゝ圖々しくなり、彼等は皆多少疊數をあけをるらしく候ひし。一人言ふ、今如何なる本を讀めりや。小生答ふ、本とはいかなる本。彼、雜誌なり、文章世界なり。小生、讀まず。彼等皆驚く。すなはち小生自己の頭の古きを説明いたし候。また、多少本を持ち歸りしやときく。否と答ふ。これはモオパッサン、ツルゲネフ、ゴルキイ等の英譯の事なりき。餘程英語が達者なるやうに思ひ居るなるべし，彼等の疊數をあけて小生を敢て侮らざる所以なり。

近來凡俗と交るよりも、寧ろ筆とる方わづらはしく相成候。然かも歸途、車中に於てつくづく思ひて候。書かざるべからず。書くべく候。人は見るなかれ。名聲は來るなかれ。たゞ自ら滿足すれば足る。

質屋は忙しく候。されど自己のものとなるかと思へば大に働き度く候。二人の老いたる人を靜かなる墓地へ送りて、悲しき涙を注ぎなば、その後は心のまゝに候。華かなる世界に住みたく候。浮名を流したく候。更に悪名をも流したく候。文藝は末のみ。次便。

朝記す書

日附なし

一

此手紙は前の手紙の續きにて候。心の浪の靜かならぬまゝに、最近の出來事といふもの、久しく御目にかけず、愚

痴のみだら〳〵と書き記し候こと何とも恐縮の至りに候。

先日は『山陰日々』の諸文豪、當地の不老園といふ公園見たやうな處の中に、旅館と料理屋との合の子見たやうなもののあるそこへ來りて、使もて呼出狀を小生につけ申候。何とも早、盛んなものにて候ひき。一寸女中に用を言付けるのでも、「オイちよいと、使賃は別にお前の方から出してくれ」「麥酒も序にたのむよ」といつたやうな調子。彼等は麥酒を以て最上の酒となすが如く、島崎藤村氏を以て最上の文豪となし居るが如くに候。穢多唄をうたひ、梅毒淋病の唄をうたひ、更に自ら作れるらしき「佐々木春濤さんえらいもの、何とかどうとかして自然主義」といつた風な唄をうたひ候。その中には小生や田中や在京の米城文士等のもあるらしく候ひしが、さすがに名ざしだけは致さず候ひき。

歸郷の理由をすべての意味に於ての食傷だといふ小生の言は、彼等間にて頗る面白き解釋をされ居るが如く候。何しろ藝者買を神聖犯すべからざる吾人の戰鬪行爲なりと思惟し、是を自覺を以てなすが故に、我等の藝術家としての人格を偉なりと爲さゞるを得ずと言ふ人達に候。四人來り候が、いづれも藝術家としての誇をもつた人にて候ひき。祖母が迎ひに來りしゆゑ、直に歸り候ひしが、その呼出言葉に、わざと生田とは言はずして、淀江の印南をもつて致し候、是れ祖母の哀れなプライドに候。何とも形容し難き苦々しさを感じ候ひしが、また悲しくも相成候。我が世界より見たる彼等の世界は無意義に候、彼等より見たる我も然らん。小生は寂しくそれを眺め候。

田中君の手紙に、「當地の所謂ナチュラリズムの文士に會して、甚だ人生のはかなきを感じ申候、ヒント其物を捉へむとして、あくせく、金のわらじを穿きて歩くにはあらずやと思はれ候、ヒントとは其人の人格に與へらるゝもの、情緒の流露にあらはるゝものにてはなく候や、技巧の末に走りて根本を忘却せるにてはなきかと思はれ候」とこれあり候。

二重の假面に候、二重の煩悶に候。おなじく早晩死ぬ身なれば、空しく帳簿に死文字を記さむより、寧ろ一首の歌なりと作る方、神の御心にもかなふには非ずやと存候。淺薄に候、幼稚に候。されど僞らぬわが感情なるを如何にいたし候べき。詩を作るより田を作れとは、小生にとりては惡魔の囈語にすぎず。

わかれて僅か二月にすぎざれ共、一年も相見ざる心地いたし候。御方戀しく、東京戀しく、人戀しく候。小生の當地にある、油の中に水のはひつた樣なものに候。水の中に油がはひつたのにはこれなく候。かくてあれば、第三者のまじはらぬ生活切にこひしくなりて候。倉の戸、店の戸、表の戸、くゞり戸、格子戸、二階の戸、それらの戸を、いま幾度かあけたてせざるべからざるかを想へば、あゝ生ける者は禍なるかなと嗟嘆せざる能はず候。今この時、わが生涯のわかれ路なり、みちじるしあらず。いづかたかと惑ふ。

三

昨夜の手紙は、下へ休みに來りて、祖母の隱居にて、箱膳を臺に、度々心を剪らざるを得ぬ日本蠟燭をともして、その絶えずゆらめく火の下にて記し申候。盆唄の稽古にや、透通るが如き美音にて、近き家に唄ふ女の唄ながく聞え申候。哀しき思ひ胸に充ちて、やや痛むを覺え候。いま、磯あるきして、歸りてまた認め行く。

小生の記す處悉く斷片的に御座候。然り、まことに小生の生涯は斷片的にて候ひき。

噫、戀しきは烟花の生涯なる哉。三春の行樂誰が邊にかある。吁、小生のみ、何が故に日蔭の草となり果て候ひしか。運命なるべきか、さらば默するより外致方これなく候。

淀江の人に惜しむで貰ふために生れ來りし我に非ず。ともすれば斯く叫ぶ自己が淺猿しくてならず候。

七月八日

今日跣足で濱から歸つて見ると御手紙が來てゐる。そのうれしさその悲しさ。此頃はやる瀨ない氣持になると仰むけに倒れて天井を眺める癖が付きました。今も疊に身を投げて泣きたい氣持になりました。泣き得るものは幸福なりといふ。あゝ、僕は幸福でせうか。

近況はおだやかです。先日(一日の日)米子へまゐりました。亡き從弟のとぎばなしといふものの爲です。神おろしです。ツルゲネフの小說を思出しました。

この家の親戚(老婆の出た家)で、不和になつて義絕してゐる家があります。養子問題からです。その家の人が田舍にはよくある事で、のり殺してやると前に言つたさうです。從弟はそれを言つて泣きました。四十までの壽命だつたのにと嘆きました。僕の事は久しく見た事もない、會つた事もないがとまた泣きました。僕は一緒に行つたのですが、餘り大勢はわるいといふので、わざと座をはづしてゐたのですが、あとでそれを聞いて淚ぐみました。寺へもまゐりました。寺町の實城寺。寺がいゝといふ氣がします。寺こそ僕の塚穴です。あゝ、高い天井もよく廣い敷石もよい。池の鯉のやうな眞紅な法衣を着けたいものだ。住持の俗僧が讀經をあげ、木魚を叩く。法華です。僕はこの木魚こそと思ひました。何よりも忍辱だ、堪へ忍ぶは僕の事、叩かれるための木魚、あゝこれだと思ひました。あゝ木魚、木魚、すべからく木魚となつて一生をすごさうか。)

花瓶に白百合を見出して、ふと思出すと、去年のこの日こそ僕の東京へ出た日です。七月の一日、雨は蕭々と降つてゐました。去年の今日、今年の今日。昨は茫漠たる沙漠を前にして靑雲の志に心亂れ、今は木魚におのが一生の運

命を見出さむとす。これ僅か一年の變化に非ず。白百合は柏木の家の窓の下に咲いてゐたのです。思ひ起せば、げに遙かにも來つるものかなの感に堪へません。

屛風に僧院の二字が大書してありましたが、僧院、僧院、何といふなつかしい名だらう。僕は幼くして僧院に行くべかりし身でした。寺院の一種ゑならぬ空氣にふれてはなど僧院には行かざりしと嘆じます。けれど、けれど、寺を出ると、はや美しい女に心が動かされます。この日、樗牛全集を買ふ。若き樗牛の肖像を見のがす事が出來なかつたからです。くたびれてこの上書けません。それでも昨今は閑になりました。二三日中に必ず詳しく感想でもお目にかけます。但、向後は苦痛はゆめ訴へず、面白い事ばかり記しませう。

僕はよく笑ひます。さうです、大變よく笑ひます。そのうち情人の一人二人はこしらへませう。敢て戀人とは言ひますまい。然しつけ元氣になりさうですね。便祕はもうありません。身體の工合もよくなつて少し肥りました。

手紙書きかけると店が忙しくなる。こんな時は本當に腹立たしくてなりません。これで。

七月十三日

書き記したい事あまり多く、まづ何から書いたらいゝか思ひ惑ふばかりです。定めし東京の夢しげかるべしとの御言葉、今更に悲しく感ぜずにはゐられません。あゝ東京よ、東京よ、車窓品川をすぐる時には、恐ろしい巨人の手を脫れるやうな嬉しさを感じましたがそれは束の間の我ならぬ我の喜びでしたか。

毎日々々、俗事に忙殺されて、徒らに靑春を食ひ盡す身、考へればたまらなくなつて、留度なく若い涙が迸ります。あゝわが罪は若き故也。

あゝ世の中はこんなに悲しいものでせうか。私はその階級の前に立つてうちわなゝくばかりです。苦痛は訴へまい

と覺悟してゐても、筆をとれば、悲しい文字が出て來る。でも、私はつとめて笑つてゐます。かうしていつまで續く命でせう。徒らに質を取つて死ぬ身でせうか。人の言ふやうに私の身體が肥えたならば、私の心は痩せたに違ひありません。あゝ世の中は悲しいものです。私はいつも若くして死んだ從弟を羨みます。

從弟の墓は海に面してゐます。夕暮毎に訪へば、さても靜かなとこしへの住居なるよ。燒香の煙ゆるやかにのぼる空には淡き一輪の月うかび、海の音永遠の祕密をさゝやくやうです。美保の關の燈臺の火明滅して、暮色凡てを包む時、眼前の數十代の昔から人を葬つた死人畑を眺めて、人生の儚さを想ふ時、まづ心に浮ぶのは自ら憫れむの念です。あゝ私もこの寂しい墓地に埋められる身の上なのでせうか。

忘れがたいのは東京をたつた日です。六月九日です、先日、米子の寺で在京の日を想ひ起してから、東京を發つた日のことがしきりに胸に浮びます。その日會つた人の顏さへ一々憶えてゐます。電車の客の顏、車掌の顏、驛夫の顏。プラットフォオムにいつまでも立つてゐられたお姿も眼先にちら〳〵いたします。その帶、傘をもたれた手に少し顏を現した入場券の赤い筋さへも。

歸ります、歸ります。一年か、二年か、三年か、はた五年十年の後か知りませんけれど。またたとへ自分に才能が無いと知つたとて、また貧しかつた才能の衰へた事を知つたとて、はたまたいかばかり世に遲れたとても。

あゝ質屋の若旦那！　この若旦那は首傾ける癖ある由。心にわづらふ處が多いからでせう。

幸か不幸か知らず、この質屋は米子の某質屋を除いては、この近傍第一の繁昌な質屋とかで、新しく來たこの若旦那の一日は、なか〳〵に忙しき樣に見受けられるさうです。

朝六時に起されます。顏洗ふ前、裏庭を逍遥して考へる。樂しい時です。次に掃除、その他の雜用。客はそのまだ起きぬうちから、來て歸つたものも多いのです。午前中は最も多忙。午後午睡。帳簿の整理には泣きたくなる事もあ

りますが、心に思ふことは別の事ですから割合に樂です。この頃は受質が多いので、倉へ行つては札を合せて質を取出す。倉の中の空氣は大變しつとりしてゐて物思ふのにふさはしいのですが、ついうか〳〵時を費したのに氣付いて大に狼狽する事もあります。

倉の中で殊に心を惹くのは縮緬の下着、肌襦袢、綺麗な女の帶などです。これをしめるのはどんな肌であらう、どんな腰であらうなどと思つて、いろ〳〵空想すると樂しい氣持になります。これも質屋の一得でせうか。『蒲團』の主人公に倣つてその匂を嗅ぐだけはさすがに氣が咎めて出來ません。

あゝ、これ程に戀にあこがれてゐるのか、これ程に女にあこがれてゐるのか。

歸つてからもうはや十人の女に戀しました。定めしお笑ひになるでせう。目に入る女の凡てを戀する者は、廣い世の中にも、恐らく私位なものでせう。願くばこの空想兒を嘲りたまふなかれ。

結婚の話は歸國後しげ〳〵と耳について、此頃の蠅と一般、うるさい事此上もありません。君は結婚するさうぢやないかとは田中の揶揄です。それに對して私は鸚鵡返しにやり返す外はありませんでした。

此間の事でした。近在の者の由で、大きな手をした四十七八の男が來ました。その話に、十七になる息子に去年嫁を取つたが、夫婦仲もよく、嫁もいゝ嫁で大變喜んでゐるといふのに何とも言へず哀れな氣がしました。この哀れは彼れの哀れではなく自分の哀れかも知れません。それからまた、頰のあかい、多少田地も有つてゐるらしい、よく酒を飲む男ですが、これが昨日太田へ行つてゐますと、婚禮を擧げる爲だとて、酒を樽で買つて歸りました。來會せてゐた者も、それは結構な事でと祝ひ合つてゐました。若い息子に年の行つた、しかも出戻りの女を娶つてやると言ふと、それはしつかりしてゐて結構と皆はまた祝つてゐました。皆こんな風です。

是等の若い夫はいづれも大滿足なのです。そしてその生涯は平和にすぎてしまふのです、何だか悲しい氣がします。

亡き從弟の父なる太田の叔父は淸盛を小さくしたやうな人物です。從弟の死に淚乾く間もなく女々しく泣きくどく樣は氣の毒ですが、それも一に從弟が折角いゝ家の跡をついだ甲斐もなく死んだからです。ところが、家には長男なる從兄と幼い末子とを除くと、女の子ばかりなので、私を呼び歸して自分の娘を添はせようとの魂膽なのです。ところが當家の女主人はもう年も六十を越してゐるので、長女十三、次女僅かに九つになる太田の子の成長を待つ事が出來ず、明日にも、年齡は多い程いゝから(あゝこの私のみじめさ)役に立つてくれる女を娶らうといふ考へで、已にその穿鑿もしました由。日吉津とかに二十幾つの出戻りの恰好なのがあるさうで、祖母を通して私に話がありました。けれども若しそんな事にでもなると、叔父は從弟の位牌を持つて歸ると言つてゐるので、それに恐れて、有耶無耶に打つちやつてあるのです。結婚といふ事を考へるとどうしていいかわからなくなります。

をり〳〵は死にたいと思ふ事もありますが、自分で弱蟲と嘲ります。そして寂寥が滿潮のやうに押寄せます。

小生、木魚庵と號しました。また例のと御笑ひなさるでせうが、致し方ありません。

七月二十七日

濱は海水浴でなか〳〵賑かです。この照りに、世間の景氣も立直るだらうと、來る者每に喜んでゐます。ひとり哀しいのは小生の身の上です。これも求めて苦を招いたのだから、もう何事も訴へますまい。

晝、汗を流して、夜、氣を養ふ。椽に寢轉んで見上ぐれば、無數の星、廣大無邊の空間に、いま露はふりつゝあるのです。夜の景はすてきです。夕闇に橋のてすりやゝ白く、川向の金刀比羅樣の老松すく〳〵と中天を摩して、宛然雪舟の墨繪を見るやうです。

日々の感情の搖動は風ふく夜の寒竹の、月にうつる形よりもなほすさまじい。昨日の思ひは今日筆とりて記す能は

ず。今日の想ひは明日人に傳ふる事かたし。

いかに爲すべき――前の大川に箱や樽など洗ふ時、畑の茄子、南瓜、草花どもに水やる時、はた筆とりて判を押す帳場の前、袷を入れ、單衣を取り出す質倉の中、いかに爲すべきとは、僅かに二月の間に、幾千度となく口を洩れた言葉です。今は溜息と共に東京戀しといふ身の上です。しかも是れは初めからわかりきつてゐたのです。

夜は十二時前に寢に就く。蚊帳の中に大の字にぶつ倒れて烈しく太息をつきます。これで少しは氣が落ついて眠れます。

『山陰日々』の諸公とは其後、我不往彼亦不來です。歸國後、同紙上に公にしたのは、『木魚庵偶歌』と題した左の舊作三首にすぎません。

乾きたる胸をあはれみ夜毎夜毎しげき涙をたまひける君
わがまこと悲しつたなきいつはりと君が心にうつる夜な夜な
穗先にも似たるはかなの面持にやがて靡かむ人をこそ見れ

彼等にはうまく合槌打つより外ありません。先づ僕は頭が古いと言つて相手にならず、相手になる必要もなく、まだその閑もありませんから。ツルゲネフを言はず、モオパッサンを語らず、「盛んなる時の短き若く死ぬ人の比ならずけふおとろへぬ」の一首を示し、また東京に出る事のないのを暗示して、ひそかに彼等のいか程自分を輕蔑するかをうかゞつてをります。それが面白いのです。

座敷に寢ころんで木に灌ぐ雨を眺めてゐるぐらゐ心細くつてまた好もしいことはありません。更に、疊と衿の濡れる事もあれば、疊もぬれぬ初秋の晝、といふ晶子女史の歌を想ひ出さずにゐられません。悲しい身にはこれがふさはしく覺えられます。僕はおもふに苦痛のために生くべき身、僕の身から苦痛を取除けば弦のない弓となりませう。かう

思ひ返して僅かに生きてゐるのです。

僕は、長流水性の九紫です。運勢吉凶判定に曰。「此星の人は易に離の卦に當るを以て、其性質物事を飽るあり、心は正直にして、氣早し、又心變りあり、爲に一代注意すべし、之が爲に、勞して功のなきこと多し、愼むべし、他人と交際上にも注意すべし、又物あきを云ふ心を注意すべし、一代吉運の方なりとす」云々。あたれるが如くあたらざるに似たり。一代吉運には苦笑せざるを得ません。書きかけてよし、書きかけてよし、漸くこれだけ記しました。

八月五日

久しく音信を怠り候事、何よりも心苦しく候。餘暇無きに非ず、まさか筆執るすべを忘れたるには候はねど、寸閑あらば横臥して無爲を樂しみたく、ために何一つ仕出かせし事も無之候。

先日は田中君來訪いたしくれ候。迂生の喜び御察し下され度候。彼よくわが缺點を知る、されど之を責めし事無し。我また然り。共にその長所を認め尊重すべきは尊重し、忠告すべきは忠告す。茶をすゝり西瓜を食ひつゝ語る。彼は「純」の字を最も好むといふ。手帖に彼この字を記せば迂生「情」の字をその下に附す、これ迂生の最も好める文字、兩者の性格はよくこの二文字に現はる。彼迂生を呼ぶに純情の詩人を以てす。「君の本領は詩なり」とは彼の常に謂ふ所。迂生を解すること最も深し。彼は迂生の訴へるを聞きて、思想の畠あるに非ずやと先づ喝破し、五年十年豈おそしと爲さむや、靜かに急げと、中庸を失せし迂生の心に一服の淸涼劑を投じくれ候。

その先々日には、五年振りに次弟と會見いたし候。米子町の廣戸氏へ養はれて嗣となる。兄弟いづれも養子に緣あるも一奇に候。水泳に來りしに候。色黑くなりて見違へるばかりにて候ひき。自分と血をわけたものよと思へばいとしく候。十五歳、中學に在りて首席に近き成績の由、迂生よりは凡てに於てすぐれたるを悅ぶ。兄の如く劣等なる人

間になる刎れと密かに祈り申候。
今日は日をいため、且つ頃日よりの風邪にて心地すぐれず候。身體に對しては最早何の煩らふ處無之候。生くといひ將た死ぬといふそのいづれともあらばあれに候。
出奔の事もとより易く候。斯の如く容易にその想ふところを遂行し得べくんば人生は苦痛も煩悶もあるまじく候。

八月三十一日

盆前といふので大騷ぎです。この土地ぐらゐ墓を大切にする處はまづありますまい。朝に夕に、私はこればかりでも、ほと〳〵草臥れてしまひます。從弟が死んで、新墓の事ですから一層です。今日は墓掃除をしました。墓石を砥石でこすり、水をかけて綺麗に洗ふのです。ある金持の家では、二日の間、墓石をこすつてゐるのださうです。呆れた處ぢやありませんか。もつとも墓石や墓地の立派なのを誇る習慣もありますから、一寸骨董同樣に家寶として珍重するのでもありませう。生きてゐる者は全く墓の番人といふ格です。然し乍ら、生者より死者を大切にするのは美風には相違ありますまい。

たとへば、夕暮、米子の方からとぼ〳〵と淀江の町へ入つて來る者は、町の手前に、際限のない墓石を見るでせう。蝙蝠は黑く空に舐り、蛇は叢にかくれ木槿の垣から飛び立つ昆蟲も見える。この死者の間で多くの生物はそれ〴〵の生を營んでゐる。これを見る旅の若者などは、急に首を垂れて足を早めるでせう。日暮毎に墓に灯ともしに行く私は、むらさきの大山を望む時にもまして悲しい氣持になつて、淀江にはこんなに墓が多いのかと驚いたり、死んでからまで他を勞する人間の生涯は憐れむべきものだと考へたりします。

父一家は九月中頃いよ〳〵歸國するさうです。私は今のところ全く沒交渉です、思ひ出す事さへありません。下の

町の祖母の處へ赴く度に、朝鮮でいまどうして居るだらうとか、小包で何々を送つてやらうとか、あちらへ送る手紙を書けとか、そんな事言はれて、初めて自分にも親があるのだなと氣が付くやうな始末です。親不幸の至りですが、それでも接近して居れば自然と親子の愛情も湧くのでせう。つまりは私に親など顧る閑がないからの事です。人間親をもつ、是れ不幸のはじまりなり。新舊思想の衝突などと言ひません。ただこの二重生活の甚だしく至難なのを嘆ずる外はありません。迷信と習慣との中に巣をくつてゐる彼等を憫れむより、全く別の世界を覗き、禁制の木の果を食つたこの身を悲しむ外ありません。太田の叔父の如きは易々諾々從ふのをいゝ事にして僕を追使ふ事度々ですが、それでもいいのです。

この地の風俗なりとお目にかけませう。米子との間に、小波といふ村があります。高濱長江氏の出身地です。現に氏の家からは、澤山質が來てゐます。この村はなかなかえらい人物を產してゐるだけあつて、非常に開化してゐます。男女の關係など頗る自由で、多くコンヴェンションを打破せるところ、此上もなく痛快です。小波の者といへば一種異つた眼で觀られる程です。この村にこの家の支店があつて、毎日ある老人が通つてゐますが、この前、今大阪から歸つて來てゐる手代が行つてゐた時には、中々面白い濡場があつたといふ。表情に巧みな女、媚のある女、ぞろぞろしてゐます。この村の質物はすべて一種の特別の香氣を含んでゐます。御來屋といふ町また面白いところの由。その間にはさまれたこの淀江町は奈何。町家の者共はあぐらかく事を賤しみ、正坐して自己の百姓や漁師でないのを誇りとしてゐるだけあつて、酒飲むにさへ他を憚るといふ有樣。何かといふと、しよけんの手前を云々する。蓋し、世間の手前とは嗤ふべきみえ、されど彼等にとつては大切なる町内の信用の手前をいふ。憫れむべき小偏見の奴隸どもです。眼鏡ひとつかけても忽ち大問題となるのです。橋ひとつ越したこの西原(卽ちこの家のある處)、すべての裏町等は、百姓と漁師が多いだけに町の風俗とは異つて、獨立した風俗を有してゐます。それが賴もしい、彼等は天眞爛漫です。野

界はあるべく、愚鈍はあるべし。私はそれを愛します。
　女の中にえらいのがゐるさうです。但、これぞといふ首はございません。私が歸國してから暫くして、朝島團隊なるものが出來ました。この地の漁師の若い者などが、見樣見眞似に芝居をやりだした、その團體です。顔見世とかいつて、俥で十餘人町を走らせましたが、揃つて色の黒い樋太遖の、中には首にハンカチイフをまきつけたのもあり、些か興ざめた話ですが、その勇氣を買つてやりませう。一夜、その觀劇に行く。戎座と名は福々しいが、實は屋根もない小屋に、澤山黒い頭が並んでゐる。後の方で見る、お話にならぬけれど、地の者と思へば感心でもある。それからといふもの、これ等の連中に現をぬかす女も出て來ました。が、その首領がこの間、鰒を食つて死にました。皆惜しみました。墓は從弟のより少し先きにあります。親戚以外の者の詣でる墓は、この淀江の數千といふ墓の中で、たゞあの墓だけです。
　今兵士が來て海岸に屯してゐます。天幕三十、その中にごろ〳〵してゐます。兵士など愚劣きはまるものです。しかもこの裏の方の女など、大騷ぎをしてゐます。中々の評判です。天幕の下に穴掘つて拔出す××多く、××を增し、巡査まで注意に巡廻する有樣です。世間見ずの彼等の眼には、兵卒等の姿は定めし意氣に威勢に映ずるのでせう。昨日なぞも西瓜の番小屋で捕へられた××××××送り還された由。××××十日位はたしかなものです。
　昨夜よりは盆踊りがはじまりましたが、警察からさしとめられました。白鉢卷に、威勢よく太皷をかつぎ廻つては叩いてゐた若い者共はがつかりしたといふ步調で四散しました、そのあとに女連が少し殘つてわや〳〵言つてゐるさま氣の毒でした。風紀警察を呪はざるを得ません。殊に惡むべきは地方新聞です。『山陰日々』など極力盆踊を蠻劇、蠻唄、蠻風と惡罵してゐました。人生の觀照を云々せる彼等は、藝者買を唯一の大事業となすだけあつて、無智、文盲愚直、鈍根の田夫野人等の歡樂を嫉妬せざるを得ぬ程に女冥加の薄い先生方なんでせう。誰か盆踊を醜猥なりといふ。

私の身邊など、今そんな話で包まれてゐます。が、それが爲め特に私は墮落してはゐません。彼等田園の男女は更に屁とも思はないでせう。うら盆を樂しみに一年營々として働いて、この失望を得たる彼等に同情せずにゐられません。これは大きな社會問題です。思はず力瘤が入りましたが、これが畢竟盆踊を見るを得ず、美しい唄をきゝ得なかつたからの憤慨にすぎないんでせう。いやになつたからこれでやめます。

八月二十七日

柔和にして悲しき眼付。是れ生の欲するものに候。哀しき生涯の中に、生の獲るべきはこの眼付の外にあるまじく候。昨日釜山時代の寫眞を發見いたし候。兄弟四人、うち一人は已になし。給仕時代の皺服つけたるおのが幼顏(をさながほ)を見てはいふべからざる哀しさとなつかしさとを感じ申候。

八月三十一日

此頃は月よければ毎夜露を踏むで野路を逍遥す。初秋の風身に沁む。月下、鐵道線路の上に立ち、東を眺め、西を見るとき、わが瞳に涙あり。鐵橋を行きては歸り、わたりては歸る。蘆の戰ぎ靜かなるに水かがやく、下に落つるわが影はひとり蕭然として薄し。

九月一日

自らも許し人も許す不健全が昂じて濟度しがたくなつてから、俄に大騷ぎした揚句、はる〴〵伯耆くんだり迄落ちのびて、けふ、しと〳〵と降りそゝぐ雨聲をきいてさすがに心細くなつてくる。これは秋の雨、身を知る雨。今はた

だ長明が外山の閑居を羨むのみ。然し世の中の面白味はわかつて來ました。午後二時。

九月二日

死なむかな、死なむかな、地獄へ墮ちたら、またその次の地獄へ行くまでに候。をり〱はかく思ひぬれど、名の欲、藝術の欲、情の欲、忽ちにして到る。あゝ難い哉、無の中より有を見出さむこと。

九月三日

けふは米子へ赴きます。生れ故郷の事ゆゑなつかしい。たうとう白足袋を穿かせられました。野となれ山となれ三四日遊んで來ようと思つてゐます。また何かお目にかけませう。午前九時、出發の時。

○

九月五日

一

今、米子にゐます。遥かに淀江を望めば、地獄でも見るやうで怖ろしい氣がします。弟は『冒險世界』の愛讀者、その先生が、お前の兄さんは若手の文士だと賞めたと言つて、頻りに悦んでゐました。若手の文士は餘り譽めたものではありませんが、質屋よりはましです、雲泥の相違です。もとより是は我執嗤ふべく、卑しむべしですが、ただつくづくとこの性格がいやになり候耳。噫、惚れられる人格。男にも女にも惚れられるやうな人格。私はます〱その人格が戀しいと共に、自己の天地の、强ひて餘地なき籬のうちにちぢこまれるが如きを嘆ぜずにはゐられません。

先づ一昨日來の、日記みたやうなものでもつつくり合せてお目にかけませう。

二

九月三日。九月に入つて僕は哀れな決心をした。この米子行は、或は最終のものなるやも知れぬ。寺詣りである。泊らずに歸れとは皆の言草だ。太田の叔母と、叔父の妹なるお兼といふ叔母と、同行は三人。はじめは扇を忘れたとて走らされ、また三圓程金を取つて來いと走らされた。汽車が來るので氣が氣でない。その金は丁度一畑藥師にまゐるとて、實家の母と二人連立つた從兄の細君の手に小使としてわたつた模樣である。

祖母は節(弟の名)の家に行つてからの口上や、寺での挨拶や、くだらぬ事を大聲でくり返しくり返し言ひ付ける。乘客はなかなか多かつた。赤い手柄の田舍娘がその中にまじつてゐた。僕は身にも合はぬ浴衣や羽織を着せられて、紺足袋はみつともないからとて、白足袋を穿かせられた。自分の身でない證據である。身賣りしてゐるやうなものだ。どこの若旦那だらうなどと思つて人は見たかも知れぬ。けれど僕は恥しかつた。

車中いろんな事を思ふ。大きな財布を帶に卷き込んで、腰にしめた、爪の色の黑い男と對向に腰かける。うるさく顏を見られて不快だつた。隣には敎員が二人ゐた。よくあるタイプだ。生徒の方よりか小さな權力爭ひに腐心してゐる彼等の事とて、その心が狹いだけにその顏まで下卑てゐる。人間小學敎師となる勿れ。

濱五軒屋を通る時、三十の天幕が見えた。その先きは海、美保の關、わが行くべき道、果しなき海。今迄、「奴も自然主義にかぶれてるネ」「何、奴の自然主義は生れぬさきからだ」などと何の事やら話してゐた敎員は、二人ともものびあがつて天幕を見た。日の丸の旗が曇天に際立つてゐた。

熊黨驛には盆踊に疲れたやうな顏した若者が五六人、てんでに卷煙草を握つて、プラットフォオムに立つた儘、僕の

顏までも見た。草花がすこし植ゑてある。何やら紅い花が見えた。
大山がよく見える。裾野が遠く尾を曳いた末に、出雲の山も見えさうだ。日野川を渡る。こゝらあたりは米子の小學時代の最も記念の多いところだ。廣い河原の兩端に、すこし水が流れてゐる。僕は川尻を眺め、海を眺めた。末は木立である。目を轉じて、川上を飽かず飽かず眺めた時、一滴の涙は靜かに睫を濕した。
道笑町の踏切をすぎてゆく時、車窓から見ると、まだ稻の靑い田圃を地上して建てた僕の昔の家が、今もやはり酒屋を住まはしてゐるので、酒藏からは相も變らぬ煙がのぼつてゐる。端れだつたその家は、もう町の中程になつてゐる。前に講社があつて、廣い境内には一筋の川が流れてゐた。今は三階建の家がそれを埋めつくしてゐる。
裏町を通つて寺へ行く。元の角盤小學は燒けた、そのあとに新に校舍が建ちかけてゐる。その邊で丹羽といふ舊友に出會ふ。殆んど見忘れてゐた。一丁程隔つてから振返つたら、向うも此方を見てゐた。小學時代に美しい兒だと思つてゐたのも五年もして見ると、みな見る影もない。賢いと思つてゐたのもその通り。淸水は大阪に行き、竹下は新聞配達になつたとは前に聞いた。丹羽は水たごを擔いでゐた。
米子は派手な處だ。美しい女も多い。言葉が輕く、はき〳〵して要領を得てゐる。商賣が上手で、人をもてなす事がうまい。そして、人間が淡泊してゐる。しつこく、ねつい、淀江の者にいぢめられた身には、霖雨に日光を得たやうな氣がする。
朝日座の隣の方の家の二階に、壯俳らしい下等な顏をした男が三四人、街道をぢろ〳〵見下してゐた。この邊はすべて食氣の店だ、あいまいな女も出入りしてゐるが。一體に米子は飲食の店に富んでゐる。寺町通りに同じやうな店の多いのも妙だ。
實城寺へ行つた。今日は施餓鬼ださうだ。位牌のまへで叔母はまた泣き出した。昔と、死んだ兒とは美しいものだ。

頸の長かつた事、死顔の美しかつた事までも言つて泣く。
　六人の僧が並んだ。老いた盲僧が一人まじつてゐた、その兒だらう、愛らしい男の兒が手をひいて來た。約二時間餘り。老い皺ばんだ聲は若い僧の華かな聲と一緒になつて、相和さぬふたつの聲はぐる〳〵と本堂をめぐつた。頻りに立つたりすわつたりするので、盲僧がよろめくのを、隣の僧が手をとつてやる。今更の事ならねど、その凡てが形式的なのはいやだつた。
　辨當をたべて、それから弟の家へ行つた。養父はあんまり大きくなつて見違へた、初め孤兒院の勸誘員かと思つたといふ。事實だらうけれど皮肉としか思はれぬ。この人だ、僕の幼い時、寺の小僧にやるのが一番よからうと言つたのは。その時は隨分怨んだが、今ではむしろ感謝してゐる。
　弟は幸福にも掌の中の玉のやうに可愛がられてゐる。養子に行くなら幼い時、とつく〴〵思ふ。養父の頭には大分白髮が見える。この人は裁判所を親戚のやうにしてゐる……である。食へぬ人物である。然し、僕の家の破産した時、いち早く自分の燒印を器具に捺して了つて、差押の苦を免れさせてくれたり、掛金代金を取つてくれたりした。
　錦公園に行つて見る。足下に波の寄るを見て、欄にもたれて佇む。向うには城山、城山の下には新しく女學校の寄宿舍が建つてゐる。冷藏會社はなくなつた。歸途、雨。
　隨分御馳走になる。五年振りだ。外出から歸つて寢る。

三

　九月四日。けふは雨、稀に出ると雨だ、うんざりしてしまふ。羊羹がつくられた、餡のやうな羊羹だつた。午後雨の晴間を寫眞うつしに行く。

母校の前の長谷川といふ家。六十錢。いよ〳〵うつされる時、高く動悸が打つて身體が震つた。二度寫したがどうもいけないやうな氣がしてならぬ。眼を動かしたから眼の中がをかしくなつてゐるだらうし、手付もをかしいに相違ない。寫眞師は四十恰好の髭のある瘦せた人。羽織の折目まで正してくれたが、あゝされるから餘計にかたくなつてしまふ。一週間位で出來よう。十六七の娘がゐていろ〳〵世話をやいた。それで一層だつたかも知れない。

雨のために何處にも行けぬ。目算がらりと相違。

夜、西町へこゝの叔母さんと三人行く。寄宿舍の女學生らしいのが林檎を買つてゐた。女學生らしい顏してゐる。思ふ、この地方の無教育な女はすべて情欲に狂奔してゐる、然し教育ある女に眞に戀愛の能力があるだらうか。疑はざるを得ぬ。この地方の者には熱狂のところがない。

精神的の愛をぬきにした單に情欲のみならば、僕はこれを今でも容易に得る。しかもこんなものは服部嘉香の詩評よりもなほ重大視するに足りない。然し精神的に死ぬまで人を思ひ得たならば、人に戀せられたならば、……つゞいて東京の人を想つて悲しくなつて來た。知らぬまにその距離はます〳〵遠ざかつてゐるではない乎。僕はいまあの人の五文字をどうしてゐる。それからいろ〳〵東京のことを胸に繰返しながら、米子の山の手とも言ふべき町の泥濘を歩いた。三人の話は等しかつたが、ひとり僕の胸のみは遙かに遙かに遠い雲の彼方にさまようてゐる。

大阪朝日の『それから』や椋十の『世界見物』などを讀んで寢た。夢は哀れなものであつた。

四

これがまづ、そのあらましかと思はれます。今日は淀江へ歸らねばなりません。

九月七日

米子から歸る時は死にに行くやうな氣がしました。私はか弱い哀れな草なのです。九月の夜風の中を、汽車は速く速く、僅か二里半の路を走るのです。哀れな草は土を離れることは出來ないのでせうか。私がどんな感懷をもつて日野川をわたつたか、それは當人の私にさへわかりませんでした。

でも遂ひに歸りました。一家の上には何となく陰雲がかかつて見える。家のうちは暗かつた。私は奥へ通つて、そして長い溜息をつきました。米子では雨にふりこめられて、どつこへも行かず、たゞ羊羹や牡丹餅の御馳走に胃をいためたばかり。淀江に歸つて東京に歸る日を得ました。淀江に老いられる人でない事はわかつてゐるといふ御言葉に對して、恥しい次第です。依賴心の發達した意氣地なし、それに違ひはありません。だが、變化しなければならない。古い春月をすてゝ新しい春月とならなければ、おめおめとお目にかゝる事は出來ない。

僅か四ヶ月ですけれど、少しは變りました、いや大に變らなければならない。

私は東京での自分がいやになり、ここでの自分が更にいやでたまりません。ただこの次の東京での新しい自分に僅かに望をかけてゐますばかり。哀れみぢめな心。わが身ひとつをもて扱ひかねた行末はと思ひ想ふと、どうしようといふ氣もなくなつてしまふ。

覺悟しなければならぬ。少しでも呑氣な生活を欲する程、疲勞した身心は、もう何事もいふ元氣もあるまい。

邪魔ばかりされるゆゑ、これできりあげなければなりませぬ。

この頃はいつも大橋の上に立つてばかりゐます。欄干に腰かけて、水の流れを見てくらしてゐる。何をくよくよ川端柳のやうな心持にはどうしてもなりえませぬけれど。不一。

九月十七日

全く秋らしく相成候。東京大水の由。地方新聞を介して僅かに承り候。御地は山なれば安心いたし居候。愚父一家十六日に歸着。ます〳〵複雜に相成候。小生歸京は來月上澣。その後の事はその後定むべく。思ひ出でらるゝは「わしが死んだらョ、誰が泣いてくれる、裏の山椒の木で蟬が啼くョ」の悲謠に候。小生、この頃毎日裏畠に出でてこの謠を三四度宛うたひ申候。

酒に口ふれぬ事兩三ヶ月。さびしさに堪へず。

愚父に逢ひてます〳〵僧房が戀しく相成候。昔日の企業家の末路を見ては遁世の念しきりに候。木魚の心をもて平和に靜かに暮したしとも存候。親は矢張り戀しく候。弟はいとしく候。

反抗は嘲笑、憐憫を伴ふを奈何。寸閑裡にて。

九月二十六日

全く秋らしく相成候。初秋といへば、月光もひとしほ愁胄に沁むを覺え候。夜な夜な枕も浮きて、東京の夢破れがちに、衾のうちいと冷かに御座候。

雨、また雨。今日は日照れども、昨日も雨、明日も雨か。さながら東京を離れし前後に似たるもの有之候。百姓は最も閑なれば、風祭だとて、酒餅たらふく、いづれも疲れた顏にて、人毎に胃腸をいため居候。

小生また、今思ふところ口腹の慾のみ。卑しさの限りに候。

かく書き乍らも、家の前に、大八車とどまれば、何ならむ、薩摩芋、さぞ味よかるべし、などと思ひつつ立上る。裏の無花果はふくらみて、紅き筋をつくり、白き乳をふく。柿もあからみ、梨はちぎられて枝に稀なり。それもよし、

これもよし。栗は栗飯、彼岸の團子、さもしさの限りなるべく候。

野にいづれば、行雲流水、すべて悠々たるものあり。風ふけば稲葉戰ぎ、右手の田に飛ぶ蝗、左手の田に落つ。白雲大山をかくす事繁き此頃に候。

去二十日より、叔母風邪がもとにて、今日で一週間病臥いたし居り候。氷嚢は日にいく度、夜いく度、かへてはひやし、醫者は米子から迄招く始末。稲荷さんのお怒にふれたのだとて、豆腐を買はせたり、神佛に御祈禱、おろかはなく候。かかる次第で、心ならず御無沙汰いたし候。

小生も可惜好機を逸し、暫く東上は不可能となり、おまけに這麼わけで、若しこの叔母にでも死なれては、一家は闇、さしづめ小生は進退維谷といふ瀬戸際にだち〱といふ破目に相成べく、大に心配いたし居候。

弱り目に祟り目、どうせろくな事はあるまじく候。

さりとて死なれず、世に生きてゆくのは、損な事だと、やつと今の今悟り申候次第。

この屋臺を賣り飛ばしてと言つた處がはじまらず候。

親父の一家は、暫くこの地にまかりあり候。親父は出雲の海潮溫泉に療養に赴き候。小生も同道の筈の處、右の始末にて果さず、いづれまた行く日あるべく候へば、その折にはゆる〱近時の所感御目にかけたしと存候。

九月某日

秋風秋雨ものがなしい日々、御ねざめの程のみおもひやられます。

私はいま手を束ねて何事も爲し得ません。

當家の女主人なる叔母、危篤とて、この頃は毎日々々奥の間には親戚の者が五六人もつめかけて、鳩首しては心配

さうな溜息をつき、酒を飮んでは夜遲く歸つて行きます。加持、祈禱から、醫者といふ醫者を呼ぶなど、あらん限り手を盡してゐますが、病人は熱のさしひきに苦しみ悶えるのみです。憫れむべき僞善のともがらの恩にきせた親切ごかしはうるさくて仕樣がありません。

事はます〳〵面倒です。この叔母が死んだら、愈々一騷動持上る幕です。叔母といつても私の親父なり、「小淸盛」の叔父なりの叔母ですから甥姪も一一數へ立てねばわからぬ程多く、なか〳〵ごた〳〵してゐます。

さしづめ私に、私より年上の女を嫁に貰はなくてはならぬといふので、現に闕(美保の關)に十八になる質屋の娘で丁度恰好なのがあるとの話も出ましたが淸盛先生が承知せず、幼い自分の娘をぜひ家に入れて、私の嫁にしなければ承知せず、定めしごた〳〵は何ヶ月も續く事と察せられます。

私はこの機會に際して去らねばなりません。去らなければ本當に死ぬやうな氣持がします。どつちへころんでも心の中には恥かしい事ばかりですけれど。

秋燈雜記

白附無し

○

心は水となりて流る。晝下り、大川の蘆に沿うて遡り、そのだん〳〵狹くなつたあたりで、浮草に對して佇む。水に浮く花の白く、黃に、風はそよ〳〵と過ぎる。こゝに舟を浮べたらと思ふ。小さな淵といつてもいゝ程で、淀みよみに水は流れてゐるが、その色は深碧である。悠々たる天地の前、心は水となりて流る。

野には蝗がとび、稻田を渡る風はさや〳〵と田舍娘の顏を包んだ白い手拭をもてあそぶ。心は水となりて流る。自ら鞭ち、自ら罵り、自ら慰め、おのれ一つに倦み果てゝ、この反省の流れに對す。しかも心は水の如くに流れゆきぬ。

○

十三夜であつた。むら雲すこし、空にのこつてゐる宵の口。緣の方から小さな仔猫が入つて來た。音もなく自分の膝に這ひ上つた。すこし濡れた身體を撫でゝやると、眼を細くする。瘦せて骨ばかりである。

どこから來たんだらうかとか、捨てゝ了へとか、うるさくやかましい。自分はわざと知らぬ顏して、團子をちぎつてはやり、ちぎつてはやつた。何しろ飢ゑてゐると見えて、用捨なく食ふ。うまさうな音さして食ふ。

膝の上に抱いたり、愛らしい鼻の頭を撫でたりしてゐたが、たうとう捨てに行かねばならぬ。東京への手紙を驛の箱に入れに行く序に、驛の構內に捨てゝやらうと思つた。誰か拾ふだらうと信じたからである。

あかしやの並木の上に、月はかゝつてゐる。終列車にのる客が、五六人ベンチに眠つたりしてゐる。

三度。はじめは冷い甃（いしだたみ）の上、つぎには丸葉柳のもと、それから砂の上に、三たび地におろして、三四步にして顧るとちつとも動かずに、私の方を見てゐる小さな影が目にうつる。

私はたうとうこの猫を捨てる事ができなかつた。

袂にある一錢銅貨を餅にかへて、餓ゑた口に食はしてやらうと思つたが、驛の前の茶店には、人が澤山ゐるので、何だかそれも出來ない。

長い人家のない路を步いて行つた。月の光は哀れである。ちよろ〳〵流れる小川の石に、影は碎ける。稻葉がそよそよとゆらいで風はすでに秋の音を帶びた。

私はたうとう泣きたくなつた。毛の硬い猫の顏と頰ずりしてしつかり抱きしめてやつた時、ほろ〳〵と淚が衿（えり）に下つた。

歸つてすわると、首をすくめて膝の上にのぼり、またわが掌を眠り場とする仔猫。

あゝ哀れな猫、私もお前のやうだと、私は思つた。
東京へ歸る決心をした日である。噫、水は油にまじる事ができぬ。

十月九日

靑い空はいつでも靑い。橋の欄干にもたれて、じつと河底に見入ると、水は今日も流れてゐる、急がず、激せず、わき目もふらず流れてゐる。僕は、海は荒れた海がすき、河は急流が嫌ひである。この靜かな流を見てゐると、いろんなものが流れて來ては、ゆるやかに通りすぎる。秋の暮方の光に、天地は黄色にぼかされ、孤影は河底に落ちて流れず。何をくよくよ川端柳、水の流を見てくらす。僕はかうしてゐなければならぬ。——樣、僕はかうしていつ迄居なければなりませぬだらうか。

出鱈目の日記

八月十日

一筆啓上。
題して出鱈目の記と云ふ。出鱈目を出鱈目に書くが故に候。これでも手紙のつもりに候。手紙と云ひ得べくんば、極めて聯絡のない、餅をちぎつて投げたやうな手紙と云ふべく候。
言譯は毎度致しおき候につき、このたびははぶくべく候。

○

田舍の金持などといふ者ほど、みじめな、貧弱な生活を送るものはありますまい。道を行けば出會ふ者悉く頭をさげて行く。田舍は純朴のやうで、反つて都會より不快だ。金の前に頭の上らぬ哀れな人間共。かくて、輕く頭で會釋

する彼等金持連の得意おもふべし。大吹野といふ家は、苗字のかしらに大の字のつく程あつて、先づこの地第一でせう。その虎の子のやうに大切にせる金子、田地の時價等凡てを合しての總財產大枚十萬とは驚くべき富豪なるかな。この主人、鐵四郎氏は、年に一度、松江に西洋料理を食ひに行く外に何一つ道樂のないお方と聞えてをります。是れ尊敬すべき人なり。年に一度の西洋料理はさぞ旨かるべし。外はおして知るべきのみ、以てこの地の氣風を察すべき也。

華かなる生涯に憧憬し、豪奢を尙ぶ小生、一日たりともこゝに堪へ得べしと信じられますか。

○

過去に生きてゐる町。

昔は米子よりこゝが繁華だつたさうです。米子は殿樣が貧乏だつた爲、店を出すと直ぐ品物を取上げられるので、皆こゝに買ひに來たのださうです。

岩佐、長尾などといふ大きな金持があつた。今停車場になつてゐるその邊から、その前の池のあたりは、一帶に岩佐の馬場であつた。飼馬は六頭もゐた。砂を驅つて逞ましい馬の馳走する樣が目に見えるやうだ。何百人の召使や、從僕や下男や、所謂子方、出入者があつて、入るに車、出るに馬。鳥取からはいつも侍の來てゐぬ日はないといふ風。それは豪奢を極めたものださうです、然して今何の狀ぞや。

その頃なれば私もこの地に住む事を光榮としたかも知れません。

あゝ過去に生きる町とつく〴〵思ふ。

墓地は雪隱と同樣、人の目に餘りかゝらぬやうにすべきものだと私は思ひますが。淀江は墓の多いのを誇りにしてゐる。たゞ一個所に集められた際限のない墓地は、淀江の表玄關を占領してゐる。汽車にしろ歩いてにしろ、米子の方から來る人はいやでもこの墓を見せられなければならぬ。

葬式の立派な町。盂蘭盆の賑かな町。坊主の金持になる町。

色情院と初めは間違へた吉祥院の生臭坊主は頗る慾深な奴だから、やがては大吹野よりも金持になるだらうと私は思はざるを得ません。

子が生れると、いらぬものが出來ましてとか、こげに早出來んでも宜に、今はどつこも早出來ましてなとか言ふ。その癖家の爲だとかいふので、子が無ければ養子する。他所からこゝに養子に來た人はどんなにみじめだらう、私は同情に堪へぬ。

安靜、安靜、そして無爲、これが自分を救ふ道かも知れぬ。忙中『方丈記』を三度び繰返して讀み、ひたすらに鴨長明が外山の庵をなつかしむ。月かげは入る山の端もつらかりき絶えぬ光はみるよしもがな。ただかくの如し。ゲエテが晩年の靜寂を羨むもの豈樗牛のみならんや。

人は驚くべき多忙のうちに驚くべき閑日月を得ると共に、最も悠々たる閑居のうち、最も畏るべき繁忙に會するものだ。僕は今この二つをともに味つてゐる。

「欄によつて鴨東の山を見る。陰暦十三日の月は、秋光に充ちたり。虫の音をききながら眠る」云々の御手紙を見て京都へ行き度くてなりません。こゝに歸る時、夜明前に京都を過ぎましたが、夜の琵琶湖の黒い水上に黄燈を望み、黎明戀しきまだ見ぬふるさとを素通りしては徒らに車窓を離れ難かつた。いろいろの因縁はあるでせう、理由もあるでせう。が、もとはと云へば、彼處には自分を戀してくれる女が居るやうな氣がしてならなかつたからです。この氣持だけまだ見ぬ國にあこがれる身なのでせう。

二度はこゝに隱れて松露のやうな、隱れて靜かな生涯を送らうと決心もしましたが今はすつかりぶちこはしです。あまりに因循だからです。餘りに卑賤だからです。餘りに繩張が嚴しいからです。あまりに他の穿鑿立てがすぎるか

らです。この地はつひにわが隱れ場にあらずと倉の板壁に落書せずにはゐられません。

徒らに他の目を憚り、舊慣の奴隷となり、なめくじのやうな生活を送るのは、考へれば考へるだけいやです。見聞きする事多きに從つてます〳〵いやになります。凡俗のわづらひは淀江のあつて極まれり。

こゝの叔母はこの頃の病氣もあり、それやこれやで非常にやつれました。私には實によくしてくれます。情として忍び難うはございますけれど、仕方がありません。

明後日には愈々父一家が朝鮮を引拂つてこの地に歸つて來ます。今更どうする事もできません。實際、父は人に損をかけられ、人に損をかける爲に生れて來た人です。氣の毒な人。そして神經質な、思立つた事をやめない、いやになつた事はもう辛抱しきれない、何でも飽きやすい人。それが遺憾なく私に遺傳してゐます。だから父がその生れ故鄕に歸つて來るやうに、私は自分の心のふるさとに立歸らなければならぬわけではありませんか。

○

夏中、裏の果樹、菊苗、南瓜などに水を汲んでやつた。

三十餘日の旱に、かかさず毎日水をやつたのは、これらの草木の外に、も一つあつた。それは小さな名も知らぬ草である。

夏蜜柑の下にうちしをれてゐた、まことに見るかげもない哀れな草である。

でも缺かさずに水をやつた。草は美しく靑くのびた。

こんな小さな名も知れぬやうな草ではあるけれど、紅い撫子に似た綺麗な花を咲かして、長らく自分の眼を悅ばしてくれたのだと思ふと水をやらずにゐられなかつた。西洋草花の一種だつたと思ふ。米子から歸つて見ると、他のいろんな毒々しい雜草と一緒にそれも見事に刈り取られてゐた。

○

女の十六七は最も美しく最もきたない時ですね。家にふしといふ娘をおいてゐます。亡き從弟のこれも金娘とかです。それが大變不潔なくせに、をかしい事にはこの頃頻りにおめかしするやうになりました。

この間一寸見えぬ品物があつて、當人に縞柄を見て貰はないとわからぬ故、質置の女を連れて倉の中へ入りましたところ、ふしの奴、倉の戸をぴつしやりとしめて了つたぢやありませんか。それでなくとも蒸すやうな處、殆んど死ぬやうな目にあひました。幸ひその女が磊落な女で怒りはしませんでしたけれど、氣の毒でした。出て見ると、眞赤な顏をして何か意味あり氣なことを言つてをりましたが、皆にからかはれて後の方へ隱れてしまひました。

でも、僕が米子行の留守に、兵士が三人とまつた日、夜、隣の間で蚊帳を吊つてゐたところを、奥から「もし姉さんちよいと」とやられて、こはさうに逃げ出したさうです。

○

四月頃でしたか、蟻を見ての話今だに憶えてゐます。こゝの人間共は挨拶するのも、祭りに騷ぐのも、寢るのも食ふのも、悉く本能的にやるのです。手代などの算盤をはじくさま、蟻が食物をはこぶのと少しも變りはありません。あゝなればしめたものだとつく〴〵思ひました。

なほ書きたくはありますが、あまり机に對つてゐるのは家のため惡いさうですからこれで切上げます。何を書いたのやら覺えません。これも本能的かも知れず。

九月十七日

昨日父の一家歸着仕り候、萬感こも〴〵いたり、御手紙をさし上げる事も能はず候。

要するにこの機逸すべからずに候。また平和に解決し、本月中に出發いたしたく候。

愚父は例の神經衰弱に脚氣の併發、曾ては憎みぬれど、勿體ない話、あゝこれ眞に哀れな氣の毒な人、小生は全く親孝行ならねど、父をあはれむ情に堪へず候。皆樣にくれ〲もよろしく。

十月八日

相變らず物思ふ閑だけはあります。

山影悉く相接し、秋色世界に充ち渡るとき、澄むこと水の如き靑空、白波よする外の海、みな愁懷に觸れずといふ事なく、懷に秋風あり、わがふたつの眼、夕每に涕涙しげく流れるのを覺えます。

悲しい幽棲に馴れては、賑はしく笑ひ興ずる事さへ面白いやうになりました。人生は夢なり、うれしき夢なり、かなしき夢なり。小生は死する能はず候。

九月三十日、三更、病人は息を引き取りました。人の臨終ほど悲しいものはない、半死の生ほど情ないものはない。斷末魔の息づかひは、丁度死の怪物が氣管を往來するやうでした。いかなる人の死も、死は悲壯です。死は眞に畢生の努力です。

葬式は十月の二日、朝十時の出棺でした。私は生れてはじめて野袴を着て位牌堂を持ちました。

七日の間は店のこと、死後のあと始末のこと、古い習慣の酒宴、喧騷、なか〲に忙しく、今なほ忙殺せられてをります。人の誠も見え、人のあさましさも見えました。死者は私の養母となる筈の人、親父の叔母にあたります。私は涙一滴こぼすことが出來ませんでした、なぜだかわかりませんが、それが大變悲しい氣がします。

秋は秋とて、門外哀音に充たされてをります。夜は必ず波の音を聽く、耳を傾けて聽く。海の音は生命と死滅との

間の叫びのやうに思はれます。黄昏の磯に空しく立ち盡すことが、また樂しい此頃の行事となりました。情熱に燃えた胸はすでに固定して、悔恨の涙ともすれば落ちる夕です。

この頃「節操」のことを思つてゐます。「處女時代の情交と夫婦關係」考ふべき問題の一つです。實は先夜、例の太田の叔父と叔母との爭ひに起因してゐるのです。夜遲くでした。叔父夫婦は夜每、下の町から墓まゐりに來るのが常ですが、その夜、叔母は家に歸らずにこゝに寢てしまひました。叔父は一度歸つて行きましたが、多分何處かへ立寄つてその儘引返したものらしく、またやつて來て祖母を呼びつけ、叔母を叩き起し、おまへのしつけが惡いからだとか、外聞が惡くて世間に顏出しが出來んとか、例の如く、今にもはじけさうな顏しておどすやうに叱り付けました。かうした鬼面は常のことながら、そのたゞならぬ樣子になほ氣を付けて聞いてゐると、何でも昨日なくなつたこゝの叔母の初七日に、米子へ寺詣りするため叔母が髮結ひに行つたのが惡いといふやうな事なのです。いくら叔父のことだとて、餘りをかしい事だと思つて、よく考へて見ますと、叔母が若い時、關係のあつた男に對する嫉妬から起つた事のやうでした。

叔母に對する鬱憤の餘波は祖母に破裂し、親子とも大馬鹿者だと毒罵する聲、打擲する音、死んでしまふと叔母の泣く聲を、店にゐて聞きながら、私は微かに嘆息の聲を洩らしました。叔父の性格としては、それがいつまでもあきらめられなくて、激せずにはゐられないのでせう。だがこれも中幕の一つにすぎません。これがなければ人生は無味淡々たる豆腐のやうなものでせう。私はこれを意味あるものとなすと共に、社會問題として男女關係を論じたく、女性の開放を叫びたいのです。といふのも一時の氣まぐれかも知れず、たゞ尠くとも我等は女性を尊重しなければなりません。

十月十一日

わが詩は悉く波の響に候。

御地にありし時は、晴れたる日は、觀潮樓の前に立ちて、爪立して遥かに遠く一抹の靑色を望むを又なき快といたし候ひき。

かくまで小生は海を愛し候。これも何かの因緣に候べし。前生は定めし魚か、何ぞでありしなるべし。幼時、骨ありとて、魚を嫌ひし事など思出され候。

今朝も傘さして墓詣りいたし候節、桑畑の中の道を磯山越して、雨中の海のしめやかなるを見入り申候。

すこし隔りたるは皆かすめる朝の靜けさ。網小屋三つ四つ。砂原には縱横に人の足跡、犬の足跡、落花の如く亂れ合ひ居候。

いさり舟、帆あげてあまた浮ぶ。いま漕ぎ出すのも三つばかりこれあり候。蓑つけたる漁夫の姿。卑しき心もてるもあるべし、金儲の事を想へるもあるべし、されど何の妨ぐるところかある。さながらにして是れ一幅の畫圖中のもの。小生は波うち際に佇みて、思ひを行末に走らせ申候。

雨繁ければ、海の音を聽いて、やがて立かへり申候。

わが歌ふところは悉く波の響をつたへたく候。

○

過日の米子行は歩いてまゐつたのでなほ面白いものでした。道々、小學時代の同窓に出會つて、その變つた姿に驚き、皆一人前になつてゐるのに、自分一人取殘されたやうな氣がしました。

日野川はなつかしい河です。橋は極めて狹く、極めて長い。こんな橋ほど好きなものはない。側面より眺めると極

く汚ない橋ですが、此方の橋詰に立つて彼方の橋詰の方を望むと、何ともいへぬ面白味があります。雲の上のやうな氣がします、夢みる思ひがします、虹の浮橋見るやうです。人來り人去る、その姿は黑く小さくなる。橋の上には味柿賣る男があつて、蹲まつて大きな縞の財布に手を突込んでその中で金の勘定をしてゐました。銅貨の音、白晝の寂寞に響き渡るのを聞くと、ふと、二度と行くまい丹後の宮津の俗謠を思ひ起して、ひとりをかしくなりました。その男が色が黑く、頭が禿げてゐるのでなほをかしくなりました。

町を素通りして例の若い畫家を訪れました。鳥居をくゞつて行く家で、「延命さん」とよぶ神社の、その横屋なのです。窓の下に立つて「由良君、由良君」と二三度呼んだが、寫生にでも出たのか、何の返事もないゆゑ、足を回して田中を訪れました。

歸りは小波村の茶店で休息し、それから一息に走つて歸りました。この村には支店もあつて、みな顏馴染です。あれが明石屋の「跡とりだ」と僕を指して話してゐる女もありました。僕がこの村へ二三度も行きましたら馴染が出來たのだらうと噂が立つたさうです。そんな村なんです。

歸つて見ると初七日の墓參りとて、あだかも米子の偺と子偺とを先きに、親戚一統、黑紋付で勢揃ひして行くところでした。手傳ひとかに來てゐる子方や親類の女どもに笑はれました。顧みてをかしくなりますが、この米子行は畢竟考へるためでした。道々絕えず腕組して歩きました。實際、今は物を考へるほど樂しい事はありません。そして路傍の思ひ出と、一味の芝居氣とは、こんなに下駄をちびさすべく、また大いに手傳つてゐるに違ひありません。

叔母の死後の跡始末が大變です。毎日、親戚の者が五六人も集つて、奥まつた一間に、鳩首して、相談か會議か知らぬが、ひそ〳〵言つてゐる樣子は甚だ物々しい。

親戚中には太田の叔父の妹婿で、一生うどんと綿とを打つて暮すとはいへ、人も許し自らも許す分別者もあり、食

ふものも食はずに金をためた、その證據には瘦せて頰には肉といふものなく。骨と皮の、その日暮しの貧乏人の如く貧相な人もあり、また、これも一ぱしの分別者ではあるが、然し實は酒が飮みたくて喉がぐう〳〵いふといふ、座敷乞食に似た爺さん(もつともこれが僕の祖父の弟なのです)もあり、なか〳〵の激論で、顏を赧らめて座を立つ事など宜しくあつて、つい先きの日、やつとまとまつた形となりました。三人寄つて文珠の智惠袋の正味は奈何。僕が叔母病中看護の際の僅か一分間の空想以上に出てゐないのです。それ位の事だと思つてゐたが、果して然り。さりとは氣の毒の至りです。

從妹の八重子を相續人にして、親戚中で後見する事。即ち、僕は婿養子とならねばならぬわけです。尤も實は夫婦養子なのですが。そして五日每とやらに、交替に帳簿を調査に來る筈で、一錢の小遣ひもその目をのがれる事が出來ないとは、さりとは情ない話ではありませんか。

田舍の人といふものは面白いものですよ。

まづはかういつたやうなことです。

十月十一日

豪飮三夜、つひに血を吐かむかな。海は常に明るし。漁火夜を輝く。あゝ痛飮淋漓、せめては思ひのみを海に飛ばさむ哉。

十月十五日

生存の價値なき生存より脫れ得る日をのみ待居候。その他は敢て顧るのいとまこれなく候。

呼吸に痛あるを覺え、骨に疼あるを感ず。秋は深くなりゆき候。この頃は、夜、蟲の音をきゝ、朝、波の響を聽く。堪へがたく候。

十月二十一日

中海の繪葉書に

この海は錦が浦、この海をわたつてどつかへ行くべく候。死んでも東京へは行きたく候。

十月二十一日

秋なりとは言へど、心は冬なり。降る雪に萠ゆべき草も芽を出す折とてはなく、いつ歡樂の春にあはむとはかなき嘆きのみ繁し。

こぞの雪今やいづこと咏ずべき日、はやく來よかし。今日は初めて日を拜し得たり。まづこの光に照らさるべき東京を思ふ、御すまひを想ふ。

荒磯はみるめも潮も干てかへる春の長日にあふよしもがな

枕木にはかなき夢を夏の蟲　これは翁のまづき燒直しなり　一鼠

十月二十三日、富長村にて

今日隱岐の島を見たり。淀江にありて隱岐の島を見ざるにあらねど、けふこの地に見たる隱岐はまた格別に候。常に見るはその最も近きもの只一つに過ぎざれど、今見ればつげの小櫛に似たる島、鋸の齒に似たる島、水平線上に相並ぶ。靑く、淡く、消えなむとして僅かにあり。初め蜃氣樓ならずやと疑ひ、のち白く塗れる船その前を黑き煙吐き

つゝ打ちすぐるを見るに及んでとみに遊行の念起り來り候。
島住の面白さ、思出となりて心の泉に湧き來り候。出雲にありては大根島にすまひ、朝鮮にありては加徳の島の入たりし昔なつかしさの限りに御座候。喇叭の聲に起き、喇叭の聲に伏したりし鎮海灣の小入海、いく夜寢ざめの波の音、夜半の枕に寂しく通ひ、要塞の事なれば打振る信號旗の紅や黄の亂るゝ空に、なく雁の歸るわたりの家を戀ひて、十五の秋を泣き盡したる日もあり候。膳にのる海老と百合根をなつかしみ、親しき人の笊に入れて持ち來りしふかし芋に舌皷打ち、雪の日の凍みて寒き村徑を連れ立ちて學校に通ひたりし寂しき波入村のいく月も忘れがたく候。

名和神社に參拜いたし候。左右に長く櫻の大木並び、盡くるところに鳥居あり候。顧れば何より青き海ひろ〴〵と二つの目の中に漂ひ候。皇太子殿下お手植の松といふもあり候。小さな松に候ひき。櫻紅葉、櫻落葉、ともに風情よろしきものに候。櫻樹盡きて阪をくだる時、柏木の家を想ひ起し候。櫻多かりし、雨の日には櫻葉叩く音寂しく候ひき。その家の三月をおもひ、更に遠き寂しきかかる隱れ家にまで雨の日訪れ給ひし時の、低き垣の外をいにがてに傘傾けてほゝゑみ給ひし姿思ひ出でられて、檢査ありと見え、田舍人等の牛を曳き、牛に曳かれてあまた通りすぐる中に、ひとり呆然と立ち盡すものこれを久しう致し候ひき。

なほ富長にて

華かに短かに。華かに短かに。これ今わが座右の銘に候。心ほどの世を經るとはいしくも申されけるものかな。華かなる心をもちて、願はくは華かなる世を經たきものに候、そはいかに短かかりとも。人目忍びてならねど、匆々の走り書き、先づはこの通り。

朝夕はめつきり寒く相成候。田圃に出て見れば、今刈入の最中に候。農家は一年のうち最も忙しき時に候。一年の

収穫、意味深長に御座候。是より野は寂しくなりゆくのに候。

小生の胸は収穫すべきものを有せず候。いと悲しき至りに御座候。小生の胸は春夏よりの寂寥たる荒野に候。あらの、あらの、あはれなるかな。右せむか重疊たる山嶽、左せむか大海原は泡立ち叫ぶ。やむなく小生は常に死の隣りに座し候。淀江の俗、隣家を重んず、隣家また何くれとなく世話やくを常とす。されば小生はこの死を頼まざるべからず候。

十月二十七日

人間の一生は隨分と面白いものに相違ございません。死ぬ前にぜひ靜かな隠れ家をえて、自己の一生を顧みて、その變轉を味ひたいものです。私も死ぬ前に、どうぞ一年の閑靜を得て、一年の老の中に、二十餘年のこし方を味ひたいと思ひます。「大いなる悔」「やりすぎた悔」は老いたる心にはしかく重荷ではありませうとも。くもりたる日。

十月二十八日

東京が戀しいので時々麥酒を買つて飲みます。中には腐敗してゐるのもあります。

十月末、富長村にて

北海に面する地は少し風が荒ければすぐ冬になります。今日は昨日の暴風雨のあとをうけて、綿入でもまだ寒い位です。

東京が戀しい、戀しくてならない。心はしきりにあくがれわたる。けれども、不動の金しばりにあつた身、一寸も

動くことが出來ない。空しく志を千山に馳せて、身は邊境に朽つべき運命なるか。

いつそ放蕩でもしようかと存じますが、私は荷風氏の如く放蕩の哲學者でもなく、その上このはにかみやですもの、これからは專一に炬燵を抱いてすくんでゐるより外に手も足も出ない。

昨日當地にまゐりました。御來屋の手前ですから、汽車を御來屋に下りて、半里ほどあと戻りするのです。海に沿うて、惡風の荒れる日を、風呂敷包背負つて跣足で歩きました。

風に傘を破られ、柄を取られて、破れたやつを頭からかふつて歩きましたところ、丁度その日が御來屋町の祭禮の日だつたので、澤山の子供にはやし立てられました。

雨は降る、著物は濡れる、風は追風で、帆かけ舟の如く身は飛んで行く。

それでも鼻唄うたふ元氣はありました。

御來屋の町は田舍町ですが、道幅きはめて廣く、これでは電車が通つても差支ない程です。それに家が小さく低いので、草原を行くやうでした。町の中ほどに元弘帝御腰掛岩といふのがありました。美しい姿の女の多い町です。晴れた日には、用もない人が路上に數限りなく佇んでゐるやうな町です。

當教會所は大變いゝところにあります。日に五たび神を拜し、身を淸め、まじなひをして貰ひます。父も母もこもつてをります。匇々。

十月末、富長村にて

落つべき葉は漸く落ち盡し、刈るべき稻は漸く刈りとられ、山里は慌しい冬を迎へようとしてゐます。秋は凋落の時に入つて、愁思いよいよ繁くなつて、堪へがたい。悲しい。情ない。

僕は生甲斐のある生活を欲してゐます。母は親のいひつけなら好かぬ事でも爲ねばならぬといつも申してゐます。僕はただ默然たる外ありません。

生甲斐のある生活、それは田舍町のものではありません。僕は凡てを捨てなければならない。意志の勝利だ、蠻勇の決戰だ。若くして晩年を見た私は、人に見られるのがいやです、けれどもまだ外部の年齢の若い故の罪を負うて雜沓の群れに身を投ぜずにはゐられない。僕の生甲斐ある生活は、末日の頹唐の快樂と、山林の獨居の幽靜と、このふたつにまたがつてゐるのです。

滑稽視されるでせうが、僕は何だか自分が短命なやうに思はれてなりません。二十五までの命です。僕は老人になつてゐる自分を想像することさへ出來ないんです、身體が弱いといふだけではありません、もつと根強い宿命のやうな氣がします。二十五以上はもう奇蹟です。されば僕は永遠の策を思はねばならない、短世のうちの生甲斐ある朝暮を欲せずにはゐられない。僕は狂者の如く宗教を求めますが、今なほ求め得ません。

黑住宗忠は偉大な人格です。黑住教は陽氣なれといひ、腹を立て物を苦にする事をいましめ、誠を取外すなと敎へ、足る事を知れと說く。つとめて厭世を排し、樂天をたふとぶ。まことに立派な敎です。僕はこの敎を尊びます。けれど僕の全てはこの敎にすつかり反してゐます。この敎の生通しは僕の考へてゐる永生と相同じきか否かを知らず、ただ僕は痴人の涙に身を浸す能しかないのをどうしませう。

このあたりは自然の美は廣く世に知られてゐませんけれど、恐らく中國に冠たるものがあるでせう。果なき青海原に白帆ひとつ泛べるもよく、暮れゆく海の靜かなのもよい。山連り、崖ならび、その下に新道續き、道の下は小石の磯となつて海に續く。風起れば波立騷ぎ、波起れば沖津沖津に白く花咲き、水平線に面白き動搖を見る、自然は到底人間にその片鱗だに許すものではない。

僕がこゝに來てから早くも五日になる。もうぢき十一月だ、いま一月で滯鄉半年となる。かうして鄉に滯つてゐるのは宛かも母胞にあるやうなものだ。十月で生れるか、流產か、難產か、大變な難產です。

東京の空は夢のやうです。戀しい人のその後思ふまいとしても思はずにゐられない。出會ふ女がすこし容貌がすぐれてをれば、皆あの人に似て見えます。「世に美しき女は多し、安んじて可なり」この座右銘の一をくりかへして僅かに淚を抑へても、面影ますます鮮かに、朝御霧夕御霧の如く朝風夕風も吹きはらふこと難し、憫れんで下さい。

此頃は質の煩勞を忘れ去り蘇生の思ひです。

女の尻を追ふ、これいかによき事ぞ、そんなに思つた夜もあります。

知らぬ國に行つて旅愁が味ひたい。生れ變つて相見るのが嬉しい。あゝ明年の正月は何處に迎へる事でせう、さつぱりわからぬ。生れ變つたのちならば何處でもいゝわけですけれど。

僕は凡ての人にすてられてもいゝ、生甲斐のある生活の人にさへなれたならば。僕は憫れむべき人間です。僕は御許に取殘しておいた自分の小さな天分を身につけるばかりでも、東京に歸らなければなりません。まして戀しい人の國ですもの。

おふたりとも御大切に。汗入小敎會所に於て。

十一月三日

本日出發いたし候。この一件で自分の馬鹿な事が愈々相わかり候。

詩人の日記

小引

これは明治四十四年(1911)及び四十五年(1912)の日記の砕片中現存せるものである。これをこゝに掲げるのは、我が『靈魂の秋』『感傷の春』二集の讀者諸君に、その頃の私の詩の註釋として讀んで頂きたいと思ふからである。當時私は二十歳であつた。二十一歳であつた。そして殆んど人に知られてゐなかつた、が、若い詩人としてそのいかに充實した生活を送つてゐたかは、これだけの日記でも十分察することが出來よう。私はこの頃の自分を一番愛してゐる。

明治四十四年の日記

十月三日

久しく怠りぬ。余は自ら談らずんば生くるを得ず。人に談れば恥多し。ただ默してこれを我れ自らに訴ふ。

この年は意味ふかき年なりき。今我れは老いたり。ただ己(おの)れに克(か)ちて世に勝たむのみ。德こそはいとも愛すべきかな。

けふ、我れは獨逸學院にありき。進みたる、新しき實物教授のため、空しくかへりぬ。

焦心に堪へざるけふ此頃、掌の白き隙あらざらむとす。爲すべきことといかに多きぞ。しかして、今かのひとの爲に爲さむとするの念また多し。戀はたたふべからず。しかれども、ここに戀ならぬ戀あり、そは浮誇ならず、そは夫を

愛する妻の心なり、妻をいたはる夫の心なり。特に、年若き夫婦の相共に人生の長き艱難に向はんとする心なり。これぞ眞の愛なる。我が身に加へられたる拍車なる。

一日の日の、××の言葉、我が思ひにかなへりき。いかに情ぶかき人なるかな、われ一旦あやしき巷に走らんか、つひに恐るべき結末あらんのみ。ただやさしき妻、虚榮心なき妻、堅忍なる妻、たえて自らを思はざる妻、これぞわがマドンナなる。かのひとこそは。然り、然れどもわれは未だいと切に思ひつつもためらふ。二十二歳にもならば否、われはその早からむをねがふ。ああわれも弱きかな。

五日

今日より毎朝、四福音書の筆寫を始む。思ふところ多し。一日ために意味あるものとなれり。

一事に會ふ毎に一事を利するを忘れざれ。自らを苦しめて、人を苦しめざれ。これやがて自らの快樂とならむ。狹量を愧づ。かかるもの、嫉妬深き夫となるなり。神よ。我をして海の如く、水の如き人たらしめよ。

生涯を通じて、ただ一人の女を知るのみなれ。眞の美には力なかるべからず。――「美とは何ぞや」他を動かすの力なかるべからず。しかも、全身をもて動かさしめざるべからず。

八日

殆んど理想に近き人あり、(未だ見しことなけれど) その人今や配偶を求め、また何人にか行かむとす。われは弱くして、しかも強くならずんば、弱きを助くる人を求むる能はず。

われは年の多ければ多き程よろこぶ。そは我をして多く勞する事なくして、夙く貞潔ならしむるの便あれば也。また我が如きものは妻としてよりも、寧ろ母としての人を最とすべければ也。

我に於て肉感と戰ふは難からず。わが體質は弱し。これあるものは好奇の心のみ。嘗て苦痛に堪へざるとき之を追

へり。今我れ苦痛に堪へむとす。さらば肉感は我に於て關知するなからむ。

九日

朝に聖書を寫し、夜論語を讀む。「鈍根我が如くして、尙聖賢の道を知り得るもの、このこれ神の惠なり」。Novalisの日記ばかり、今の我にとりていとよろしきはなし。そは敎へらるるに非ずして、やさしき友の眼もて眺めらるる也。夜の一杯の牛乳ばかり旨きはなし。朝の散策の空氣もまた然り。

十日

けさ、故鄕の弟より手紙を受取れり。新居の見取圖を添へたり。いとよろこばしかりき。ワイルドの獄中日記を讀む。いといたく身にしみぬ。彼もまた愛すべかりき。おもふ所多し。われは夕暮を好む。あはれなる物賣の笛をききつつ小雨そぼふる町を二階の硝子戶よりながめし時、感いふべからざりき。かなたに谷中あり、小さき家の屋根白く光れるさま、谷間の町、小さき田舍の趣きあり。この一瞥は、よく空虛なる胸に悲哀の糧をあたふるに足れり。人の悟るもかかる折ならめ。興來らば美につきてわがおもふ所をうたはむ。

我は幸福なる、幸福ならずとも、不幸ならざる人を妻とする能はず。されば我は世のあらゆる少女を求めず。ただ最も最も不幸なる人を求む。さらば不幸なる人をして幸福ならしむることはよし能はずとも、それ以上不幸ならしむる虞れなし――我が如きものの妻たらむ人は、不幸なるかな。されど不幸なる人にしてわが妻とならば、或は幸福の日を獲むか。

十二日

朝、ゆくりなくも××君よりの短き力ある言葉を受けたり。わが「不幸なる人の子のため」にうたひし歌の、第一

詩を解せざればなり、否、眞の生活を知らざれば也。

かのいはゆる詩人なるもの、卽ち文學者をもて自任せるものの如きは、我に於ては風馬牛のみ。何となれば、彼等は

基督の敎なくんば、わが生涯はあるべき筈なし。わが詩を解する人は、まことの生活をなせる人ならざるべからず。

の反響を君より聞くを得たりしは、いとうれしく、また意味ふかきことなり。

二十一日

招待狀を得て、××と二人、午後音樂學校の演奏會に行けり。心動かすもの女性の肉聲に如かず。古より、多くの人の墮落し去りしもまた無理ならずと思へり。××はいふ、埋木のゲザが歌うたへるアンネットの胸に手をやりてここに何も感ぜざるかと云へり、若き女と若き男と共に、モツァルトが『ドン・ファン』の一節を合唱せるをりなど、それを思へりと。二秀才とよばるる田中久子のヴァイオリン獨奏と、小倉末子の紫の袴の上におきし手――白くこえたる手のいと大きなりしが、强く心を惹きぬ。かかる手のもちぬしは我をもまた古の人々のやうに墮落せしむるなり。さはれこの人人のめでたき末を祝福せまし。

風紀の嚴なる學校に、さりとはこの危き曲よ。しかも演奏するものそれを知らず、聽くものまた知らず、をかし、また悲し。

あゝ我ばかり焦心して、我ばかり自棄せるものはあらざらむ。ある瞬間には、激して金錢の奴隷たらむとす。ああ我ばかり貧の苦き味を嘗めたる人ありや。ありとするも、彼等は感ずることかくも强からざりしならん。兎まれ今爲すべきこと二つあり、そのやや土臺の定まるを待ちて、恥かしくも待ちのぞめる結婚の準備を爲すをえんか。ああ神よ、そのならむまで我より業を取り給ふな。我を安全に步ましめたまへ。

我は洗禮を受けて、基督敎徒として婚せざるべからず。

今日はかの好ましき帽をかむりゆけり。かの帽をかぶれば、我はいとよくクウパアに似たりといふ。

明治四十五年の日記

三月七日

ともすれば我が影のかへりみらるるかな
我が心こそ惡の巣なれや

我は書齋に老うべき人なり、これ悲しき今日此頃の自覺なり。いまだ書物のみ我にのこされたり。

六月十九日

天才の事業は一人稱を三人稱になすにあり。

今日我れ、この厭はしく思へる時に於て、己れの最も幸福なるを見出しぬ。東京を去らざるべからざる事起りて、はじめてここにあるを幸福としぬ、この憎むべき地にあるを。仕事をとどこらしたれど無事なるを得たり、この仕事あり、我れなほ生くるを得、幸ひなるかな、このいと損なる煩はしき仕事や。

我れ祈ることを知らば、心より祈るを得ば、今日こそは神に謝すべき日なれ。我は必ずや狂せむ、病まむ、罪人とならむ、國を追はれむ。今こそは暫くの休憩なれ。

今日我れを嘲るものありき、(毎日のことなり、我が瘦せ細りたる體格の故をもて)我れ二度び顧みざるを得ざりき。ああ弱きかな、されど三たび目には、我れ心を安め、首を正しうするをえたりき。その時口に上りしは、すぎし日譯せし Novalis の "Ich seh'dich in tausend Bildern" なりき。マルクス・アウレリウスに、最大の復讐は、汝等たえて彼等の如くならざるにあり。

昨日ハ×兄來れり。われ今の時、ハイネ等のユンゲ・ドイチュラントの運動起らざるべからざるを云ひて、暗に彼に對する囑望をもらせしに、彼言下に、この時代はすべての時代の惡しきところを悉くもてり、いかなる事をも爲さざるべからずと云ひき、されど悲しむべし、偉大なる彼は、またすべての天才の惡しきところをもてり。

子は母に背かんとす。許せよ、わが不幸なる母。われつひに婦女子の情に殉ずる能はず。我は凡人となる能はざる也、我は不幸なる兒とならざるべからざる也。

事の成否を以てその人を卜すべからず。人あり、生れて言はず、行はず、五十年を面壁に終へたりとせよ、誰かその人を圖りえんや。然して言ふも解せられず、行ふも益なかりき、その人は小人の嗤ひを買へり。我れまた母にそむくとも、小人の嗤ひに中に沒了せん。

我れおのが不幸のかず／＼を數ふ。しかもいく度數ふるも、一つだに減ぜることなし。かかる愚かなる業なにをかせん。

我が住まむ地は人すまぬ森、そこに日光と淸水と、二三の書あらば足らん。我が生きむ季は冬、そこに我が心は春を感ず。我が最も幸あるときは夜、そこに我れは夢み、眠り、また自然の靈にかこまれてさまよふべし。

人間と人間のつくりしものと無くんば、我れ晝を愛せん。我が最も重き惱みと壓迫とを感ずるは夏なり。

夜よ、汝は我が母なり、神のあたへ給ひし我が戀人なり、夜よ、汝の膝を我が涙の床となさしめよ。夜よ、汝の愛すべき面衣のうしろの目は我が母の目なり、汝の手は我が厭ふもの、我が憎むものを悉く蔽ひぬ。汝來るとき、我が愛はめざむ。夜よ、神の與へし我が戀人よ、我をして汝のやさしき胸のうちに、醒むるときなく眠らしめよ。

我れ中夜めざめて我が世の夢ならざるかをあやしむ。ああ何故に我は人間をかくも厭へるぞ、然らずば、人間は我にかくも厭はしきぞ。しかも、何故に我れここに生きたる、いな、何故に厭ふべくして、しかも人間と生れたる。おも

ふにこは夢なるべし。この夢は忽ち醒むべし、我はいと〳〵人間を愛する、正しき意識あるものとなるべし。

世に一つの幸福だになし、しかも我れ死を好まず、死はなほ我を微笑して招くものに非ず。ああ我はかの若き詩人のごとくたのしく死する能はず、しかもこの世は我に於て更に厭はしきを。いな、我は不信者なり、泡の中にすむ虫なり。我れ神に行かざるべからざるか、將た神我れにのぞみ給ふべきか。

我が身は羸弱、癈人の軀に似たり。我が誇とすべき精神は弱きこと赤兒の生れ落ちし時のごとし、しかして我が頭腦は働き鈍くして透明ならず、加ふるに夜半めざめし時、その痺れ痛みて痴人の如くなれるを感ず。ああ止んぬるかな、かくては我に殘るもの、ただ些少の文才のみなるか。ああ我また彼の紛々たる小才の兒と共に、その心をも人の嘲のもとに委ねざるべからざるか。

我が思想は耕さざる土地なり、荒地なり。頭腦は日々にすさむのみ。甚だ報酬すくなき、無駄骨なる、手段としての職業に朝より夕までを奪はれて、夜わづかに息づくのみ。かくて何事をかなし得んや。ああ生涯かかる卑しき生きかたをせざるべからざるか。

ゲエテは千古の大才なり、我はかかる愚人なり。されど我はなほ彼に屈せざるべし、我は彼を輕蔑するの力を有す。彼が空色のマンテルを着けて露臺に於て眠りし時、家を失ひしあはれなる人々は北地の雪に凍りしならん。彼が『ファウスト』の崇高なる大作に頭腦を勞せるとき、地上の人はいかに卑しき、あさましき、みにくき、藝術的ならざる惱みをなやみけん。彼が美しき戀愛にゆめみし夜々を、今や我等は怨嗟と絶望とに泣かんとす。

ゲエテは千古の大才なり、我はかかる愚人なり、されど我はなほ彼の知らざりしものを知る。

今の世に於て、我等にありては、藝術も戀愛もおろかしきもののみ。我は我が思想の矛盾を悲しみ、我が意に從はざる我が情を憎む。

我はゲエテを研究せざるべからず、一は自らを強くせんために、一は大なる幸運と大なる人間とを知らんがために。

日附なき日記

我は我が詩をもて我が墓の飾りとせん。また死後の我が糧とせん。我は何人の爲めにも我が生涯を歌はず。ただ自らの爲めに墳墓の爲めに、後の世のおもひでの爲めに歌はん。

不眞面目なり、戯れなり、空語なり。自ら排擊しつつ、自らそのあはれむべき狀態にあり。
ああ、いつの日にか、我れ眞に衷心より神を信ずることを得べきか。
現世に適應せる人間に非ず、しかも神を信ぜずんば、ああ我はいかになるべき。
我れ、切におのが詩人たるを恥づ。藝術は、詩歌は、人をして眞の信仰に入るを妨ぐ。
神いかに我を笑ひたまふらん。
熱く愁へて、少なく信じ、深く歎きて、恥を避けんとす。ああ愚かなるかな。詩人は時々歌ふことをやめて、おのが喉を調べざるべからず。
詩人を兼ねざる哲學者と、哲學者を兼ねざる詩人とは永く人の胸に生くること能はず。
何ものかを獲むことを思ふ。行くべき地、戀ふべき人も多し。一生にたつた一度でも――魂の底より熱火を燃やしたし。
げに慕ひくるる少女と、あはれみいたはる女の人とをもつべくして、我が生涯はあるなり。

おれには戀愛の資格なんざちつともない。戀愛なんか出來ない人間だ。なぜか？　おれには財產もない、地位もない、世才もない。そしてただこの愚かさがあるだけだ、この內氣な性質があるだけだ、この滑稽な臆病心が！　そして戀愛ほど大膽と厚顏とを要するものはないのだ。だからおれは先天的に失戀者だ。ただ自分を憐れんで同情してくれる女だけはある。母の子に對するやうに、姉の弟に對するやうに、その女に保護されて、愛されて、慰められればそれでいいのだ。おれの一生の事業は、詩を書くことでも、小說を書くことでも、繪をかくことでも、また革命やその他のことをやることでもない。ただ實にその一人の女を求めるだけなんだ。

おれをあはれと思つてくれ。あざわらふ百人の女はよしあらばあれ、一人の「まあかはいさうに」と言つてくれる人があればいいのだ。××は或はその人かも知れぬ。それともまたおれのベアトリチェは、まだ手まりをついてゐるかも知れぬ。さうして見ると、やつぱりまだ生きて行かなければならぬのか。

おれは末梢神經で生きてゐる人間だ、おれをあはれと思つてくれ。おれは馬鹿だ、おれをあはれと思つてくれ。

世界には何か自分を滿足させてくれるものがあるに違ひない。それが人間――女性なるや、または自然なるや、それとも事業なりや、死なりや、それはもとよりわからぬ。而して、××はまたその象徵として現れたものでなくてはならぬ。

實感をもて書くべし、詩は形式を重んずべき時代にあらず。

理智をもつて讀むべからず、情意をもつて讀め。一書は以て胸裡に一革命を起すべし。深く讀み、深く解せよ。

いかに平民的なる詩人といへども、貴族よりも貴族的なり。貴族は時にその美服をぬぐ。されど詩人はいかなる時

にも、その詩を離すことなければ也。

我が胸はしめれる地面の如し。あらゆる嘲弄、侮蔑、憐憫、同情の雪降り來りて、悉く溶け去る。我は貪慾にこれを吸ひ、これを蓄ふ。

千百の計畫はあれども、一の執着なし。

先づ小さき家を借りて、其處に新しき生涯を開かむ。小規模の印刷工場を作り、手刷の機械を買ひ入れ、少許の活字をととのへ、自ら書き、自ら紙を仕入れ、自ら印刷し、自ら製本し、自らこれを賣り、もつて自己の思想をつたへんことを欲す。かくの如くならずして何ぞ自由思想あらんや。兎に角、活字は余の生命なり、自らこれを有せざるべからず。

空想を脱して理想に入らざるべからず。淺き沼に釣を垂れずして、深き海に沈まざるべからず。女のごとく散漫に生活せずして、常に劒（つるぎ）にふれて泣くべし。小事に歎くな。荊（いばら）の上に坐せ。

神我れを見そなはせり。

げに我は幼なかりき。聖書を抱きて、人なきところに行き、考へざるべからず。しかして、遂ひに祈らざるべからず。

げに我は幼なかりき。我が恥とせるところは恥ならず。恥ならぬものこそ反つて恥なりけれ。神よ、我をして自らに目を向けしめたまへ。

我は人生に美を求む。しからば、我は花街に走るべきか、劇場に赴くべきか、否、我が美は神の御手に在り、我は神に祈らむと欲ふ。されば我が美は人の世の美にあらざるなり。

神よ、我が悲しみをして深からしめたまへ。神よ、我が歡びをして深からしめたまへ。神よ、我が生涯をして深遠ならしめたまへ。かくて我は眞に美しき人たるべし。

影は形よりも美しきものなり、
藝術は人生の影のみ、
されど人、影を求めて出で行かんか、
失望を伴ひてかへり來らん。

我れ常に祈らむことを欲す。されど、未だ神の道は遠し。あゝこひねがはくば、我れ神に行かむとき、神我れに來まさむことを。これ我が悲しき兒の、唯一の願ひなり。

人誰れかイスカリヲテのユダたりし時を有たざりしものぞ。我れ、自らの不信、疑ひ深き心を、更に更に、泡の如く消ゆるこの希求を、夜やすく眠り得ることを悲しむ。

生涯に一たびもイスカリヲテのユダたらざりし人は、ユダを先立たせて行きし捕吏のみ。されど、常にユダたるは悲しむべきかな。

我が謂ふところの修養とは何ぞ——苦しむことのみ。

日々神の面を描く——これにまさる善事なし。

我は選ばれたるものならざる乎。見よ、人に笑はるべき風采を、動作を。これ俗と同ずる能はざるところ、卽ち神の恩寵なり。

我れ幸ひにして、悲壯に生くべきことを敎へられぬ。我れ幸ひにして不幸の中に育ちぬ。我れ幸ひにして苦しめり。我が資格は旣に十分ならずや。

しかも我れ、ともすれば自殺をおもふ。十字架を負ひて主に從ふことの苦しさを想ふに堪へざればなり。かくて我れ、ともすれば卑しく生く。

類ゐなき惠みを受けて、しかもその惠みを拒まむとする乎。ああ眞の生涯は苦痛によりてのみ味はる。されど我が新生よ、ああ汝の盃は苦し。

美的生活——充實したる生活——悲壯なる生活——神に到るの道。

ごまかしの生活——平穩なる生活——低劣の生活——世に生くるの道。

道は二つのみ、ほろびるに到るの道、神に到るの道——馬太傳第七章第十三節。

血の汗を流して考へよ。

我に肉體の美あらむか、肉體の美を誇りたるべし、我に富あらむか、富に驕りたるべし、我に幸福あらむか、座してただ煙草をふかしたるべし、我に多くの戀あらむか、多くの女を傷けたるべし。

しかも、かくの如く、我は然らざりき、これ我が與へられたる天寵か（いまだこの心弱し）

女のあひだに愛を求めてまはるは卑しし。
ただひとつの天の愛をただ座して待て。
愛は甘からず、傷けられ、瀕たるるは愛なり。
天の愛はただ惱めるもののみに來る。
あてなき戀をただ座して待て。
充ち足らふまでの飢渇に笑めよ。
愛の手の我が部屋の戸を叩く時、
我がなほ生くる、病める、死せる、はた何をか問はん。

眞に愛し得る人は幸ひなり。
獻身的なればこそ愛なれ。
愛は打算にあらず。
おろかなればこそ愛は天國の鍵なれ。
賢きものこそ愚かなれ。
世の智者學者こそは無智なれ。
過去を救はんと欲すれば、現在を高めざるべからず。即ち、或人にして美しき人となりし時は、その人の醜き過去も美しき意味を附與せらるべき也。

隱遁の外なし、現世の幻影を追はむより、神はよし幻影なりとも、神の國の幻影を追はむには如かじ。我がこの思ひを抱くこと久し。

現世の厭ふべく、人の憎むべきを知る。
理想の國にのがれてそこに歌うたふべきか、
はた、ここにありてこの忌はしき世を痛罵すべきか。

陸ゆくときは雨なきをねがひ、
海ゆくときは風なきをねがふ、
ほしいままなる願ひをも憎みたまはず、
我れ狐のごとく疑ひて見上げし時も、
なほ十字架の上よりやさしく見そなはしき。
主よ、おんみいかばかり我を愛したまふぞ、
よし身は主に近くとも背けるものより、
遠くとも主の方を向ける故をもて、
ただその故のみをもて我をよみしたまふか。

人の心には刺あり、
世にはまことなるものなし、

ただいつはりの巧みなると拙きとのみ。
ああ、これぞ世の姿なるか。

惡しき世界、轉倒したる世界よ、
この國あり、この我あり、
我この土地の陷落せざるを怪しむ、
天火の我と我が本土とを燒かざるを怪しむ、
世の人のすべて新しき衣きて笑ふを怪しむ。

繁子よ、汝は失はれたり、
この廣き世界に、ただ一人の我を殘して
いとも悲しき女なりし君は
かの美しき國に急ぎ去れり。
上なく氣高かりし、美しかりしその心は
つひに地上のものにあらざりしなり。
新しき領土はいつかまた見出づるを得ん、
かくも美しき心をまた誰れか見出でん。
夏の夜、電光の下にうちふるふ木の葉のごとく

我は我が人にむかへりき。
その目は、いつも涙をたたへし目は、その悲しき輝きをもてる目は、
今なほ我れにのみ注がるるなり。
はじめてその目にむかへる時、
我れは全世界の苦痛を知れり。
されど君は母の如き微笑もて我にのぞみき。
繁子よ、汝は我に失はれたり。
天國の聖者の喜びのために、我が地獄はさらに暗くなりぬ。
我れは生涯、君のために、君が美しき心を慕ひて泣かん。

この天は曾つてダンテの惱みを見き。
いま我が愚かなる嘆きを見るを恥づるか。

眞實に生きる惱み

心の中の星

序に代ふる詩

Zwei Dinge erfüllen das Gemüth mit immer neuer und zunehmender Bewunderung und Ehrfurcht, je öfter und inhalt ender sich das Nachdenken damit beschäftigt: der bestirnte Himmel über mir und das moralische Gesetz in mir.

Kant

私は青空に星をさがした
眼に見えぬ一つの星を求めた、
むなしく、夜毎を、秋の夜毎を。
オリオン、シリウス、無数の星座に

無數の星は光りを競ふとき、
私の求める星は、影も見せず。

眼に見えぬ星がある、
天文學者の觀測はそれを見出す、
だが私の求める星を、彼等の望遠鏡も
つひに私に敎へてはくれない、
それは新しい大望遠鏡も及ばぬ空にある、
それは全くちがつた空のものであるから。

星は心の中にあつた、
私の心の濁りの中に――
ちやうど曇り翳つた空のおくがに
人眼には見えず星のしづもるやうに、
濁りの底に、晝も夜も
しづかにも輝くよ、わが心の星は。

この星を信ぜよ、私の友よ、

空には輝く無数の星座
衷(うち)には消えぬ一つの光、
たとへ今その微光すらも見出しえずとも
私はたしかに信じてゐる、その底には
眼に見えぬ一つの星があると。

夜空さやかに晴れわたつて
銀河の中に、燦たる星斗を仰ぐとき、
人はわが心の衷(なか)の星を崇(あが)めるだらう、
それはカントの「道徳律」か、——
知らず、知らねどその星を發見せんと
私は身を獻ぐ。私は心の天文學者だ。

眞實に生きる惱み

×

私は孤獨な人間であつて、あまり賑かな人中に出て行くのは好ましくないので、大抵家に引籠つて、丁度屋根裏のやうな感じのする狹い書齋で、靜かに好きな本を讀むとか、自分の書きたい事を書くとか、又は、いろ〳〵な小さな計畫を立てゝ見るとか、さうした事で、毎日の日を送つてゐる。

然し、本を讀むといつても、私は大體系統立つた學問をして來なかつた人間であるから、それが、いかにも獨學者流な偏した讀み方であるには違ひない。ある纒つた題目について、系統立つた研究をするといふやうな事は、自分の興味から云つても、また外部の事情から云つても、私には到底出來ないので、從つて、どうも散漫な讀み方になつてゐるだらうと思ふ。勿論、散漫であると云つても、自分の好きなもの、讀みたいと思ふものしか讀まないのだから、そこに自から自分一流の系統は立つてゐるのだらうとは思ふが、どちらにしても、私は餘りしつかりした學問のある人間とは云へないのである。

ところでかういふしつかりした學問のない一介の詩人にすぎない私が、かうした高い演壇に立つて、何か物言ふといふ事は、これまで、全然經驗のない事であるといふばかりでなく、大體、私にとつては、ふさはしい事ではないので、一體、何を話してよいか、どうも話する事がなささうである。いや、話せばいくらでも話せる事はありさうであるが、話すだけの價値のある事がなささうである。然し價値のあるなしは別として、私としては、私の感じた事、思つた事を、ただありのままお話して見てもよいやうに思ふ。

兎に角『眞實に生きる惱み』といふやうな題目について話したいと思ふのであるが、これはあまりに大きな問題であるし、且つ餘りに威張つたやうな響が耳について、何だか氣恥しくもなつてくるのであるが、然しどうか眞實の生き方をしたい、衷心にやましきところのない生活をしたいと熱望し、眞實に生きんと欲する私の惱みが、ここに多少とも、述べ得られたら、それで滿足してもいいのである。

×

人間一人が世の中に立つて生きて行くといふ事は、もうそれだけで、なかなか容易ならぬ事である。ましてや、少しでもごまかしのない、立派な、第一義に卽した生き方をしようといふのは、私などのやうな平凡人には到底望まれない事かも知れない。けれども初めから不可能の事と定めてしまつて、それを斷念する事は、爲したくもない事であるし、又爲してはならない事であると思ふ。

扨、眞實に生きるにはどうすればいいか、それには、なによりも誠實といふ事、自他ともに欺かない事、過ちをあらたむるに吝でない事、常に、自己反省を怠らない事は云ふ迄もない事であるが、この反省といふ言葉は、私達は、よくつかふ言葉であるし、又、今日の文壇及び詩壇の人々には、度々つかはれる言葉であるが、悲しい事には、この反省といふ立派な言葉が、多くの場合、たゞ他人を責め、他人を非難する場合にのみ用ゐられてゐる傾きがある。「反省したらよからう」とか、「反省して見給へ」とかよく人に向つて云ふ人があるが、さう云ふ人に限つて、大抵自分では、その反省といふ事をやらない場合が多い。他人の弱點に對して敏感な人であるほど、自分の弱點には氣が付かなかつたり、又、氣が付いてゐても、極めて寛大にこれを見逃してゐるらしい。一體に、人間には、自分の事は棚にあげて、他人の性格なり、行爲なりを非難したり攻擊したりして喜ぶやうな傾向が多い事は確かである。つまり人間は自ら裁かないで、容易に、他人を裁かうとするのであるが、然しこれは、眞實に生きる道には、一番遠い、一番困つ

た事なのである。「反省したらよからう」といふ忠言は、常にまづ、自分自身に向けなければならない。この事が、眞實に生きようとするに當つて、まづ第一に必要なのである。ところが、私なども、さういふ事は十分知つてゐながら無反省な自己肯定をやつてゐる場合が極めて多い。そしてこれは、ひとり私ばかりでなく、一般に文學者といふものの通弊ではないかと思はれる。

×

本當に立派な文學者を除いて、今日、多數の文壇人は、蟲のいいものがそろつてゐるやうである。さうして、最も自分勝手な、蟲のいいものほど、文壇人としての勇者のやうに見做され、最も極端な、無反省な自己肯定が文學者としての第一の途ではないかとすら我々に疑惑を感ぜしめる狀態である。

一寸考へて見ると、文學者こそ一番本當の第一義の生活が出來てゐるやうに思はれ、藝術家とか文學者とかいふといかにも美しく響いて、何かすばらしい思想を抱き、人並すぐれた美點をもつてゐる高貴な人間のやうに感ぜられるのである——云ふ迄もなく理想的な藝術家なり、文學者なりは、正にさういふものであり、我々の心付かないところにさういふ正しい高貴な心情の文學者、藝術家が隱れてゐるのであらうとは思はれるけれども、然し、私が、弱小な文學者の一人として、かなり長い間經驗し、見聞して來た現文壇に對する觀察の結果は、私の期待を裏切る事が餘りにも多いのである。

世の多くの文學者は殆んどその九分通りまでが、決して、我々の仰ぎ見て、以つて範とするに値しないといつても過言ではないのである。彼等の大多數は、本當のごまかしのない第一義的な生活をしてゐる人々ではないのである。尤も賢い人ならば、初めからそんな事は容易に理解されたであらう。何故といふに、藝術といふもの、文學といふものの本質の中には、既に、世間を對象とし人間を對象とするところから生ずる、止むを得ない一つの世俗的なものの

要素が含まれてゐるからである。

×

曾て長谷川二葉亭氏が、世にあつた時、文學は男子一生の事業とするに足るかといふ問題が論ぜられた事があつてその時二葉亭氏がこれに否定的な答をなされた事は、普く世に知られてゐる事である。

「文學は男子一生の事業とするに足らず」この二葉亭氏の否定的解答は、かの、所謂藝術至上主義を唱へる人々には、どんなにか憤激に値する輕蔑の語であつたらうか。然し、彼等藝術至上主義の徒よりも、長谷川二葉亭氏其人こそ、千倍も藝術を愛し、文學を愛してゐたといふ事を私は敢て斷言して憚らない。何故といふに、かの二葉亭氏の飜譯上の苦心又その三つのすぐれた小説のために費した努力を考へるものは、私の言葉を理解せずにはゐられないであらう。では、そんなにも、文學を愛してゐた二葉亭氏が、どうしてそんなに文學を否定し去つたのであらうか。

×

長谷川二葉亭氏は私の好きな人である、そして私の崇拜してゐる人である。明治の文學史上にも、こんな人があるかと思ふと、私は感謝の氣持さへ起るのである。この二葉亭氏は日本の文學史上に珍しい人であるのみならず、人間として、非常に意味の深い人であると私は信じてゐる。第一、痛快な事は、此人の考へ方といひ、生き方といひ、その生涯の閲歴といひ、すべて普通の文學者とまるきり違つてゐる事である。二葉亭氏は、一生涯、憂國慨世の志士的傾向をもつてゐた人で、はじめは一種の帝國主義的な考から出發して、その頃樺太千島交換事件といふものが起きて世論が沸騰してゐたので、今、日本にとつて露西亞といふ國が一番の脅威である、恐怖である、將來、日本の一大暗礁たるべきはこの國であると考へた、今のうちにこれに備へて置かなければならぬ、それにはまづこの國の國情を知つておく必要があるといふ考へから、露西亞語を學ぶやうになつた。かうして露西亞語を、はじめは、さうした帝國

主義的な考へから學んでゐるうちに、ツルゲェネフとか、トルストイとか、ゴンチヤロフとかを知り、それから益々文學的方面のものに興味をもつて、其後文學にたづさはるやうになつた人であるから、當時の、一種の藝術至上主義者であつた紅葉山人一派の硯友社の人々とは全然その出發點を異にしてゐたのである。從つて、二葉亭氏が、當時の藝術至上主義的の文學者に對して、かなりの不滿を感じてゐた事や、又は、排斥したい位に思つてゐたであらうことは察知するに難くはないのである。二葉亭氏の文學的教養にあづかつて力のあつた露西亞文學そのものはといふと、これはその當時の日本の藝術至上主義の作品などとは、全然反對のものである事は、何人も知つてゐる事であらうと思ふ。出來露西亞人は、非常に瞑想的な眞摯な徹底的な、深刻な國民で、しかも常にその頭から「社會」といふこと「露西亞國民の救濟」といふことを忘れた事のない狀態で、――これは云ふまでもなく凡て世界大戰以前の露西亞について云ふのであるが――彼の國では、智識階級の者が二人よると、まづ「我々露西亞人は」とか「露西亞の社會は」とかいつて、ムキになつて論じ合ひ、話し合ふのである。從つて、當時の彼の國の文學者も自分一個の狹少な興味や、小さな骨董的な趣味などをもつて人生に對することをしないで、直ちに、人類の問題、人間の生活、社會と個人との關係さういつた大きな根本の問題に向つて考察を下したのである。彼等は常に人間の苦惱、人間の本當の生活を閑却しなかつたのである。これが、今我々の露西亞文學を非常に愛し、尊重する所以でもあり、又露西亞文學が、世界の人心に、渇仰されてゐる所以でもある。二葉亭氏のやうな性格の人が、かうした露西亞文學に親しんだ結果はどうであつたか、云ふまでもなく二葉亭氏は、露西亞文學によつてその眼を開いてからといふものは、社會といふものが大きな問題としてうつり、それに關聯して、文學といふものに、多くの意義を見出し得たらうと思ふ。又、ツルゲェネフのバザロフの考へなどによく似た文學に對して、功利主義的な見解をもつてゐたドブロリュウボフとか、ビサレフとか云つた批評家の說はかなり二葉亭氏に共鳴の出來たものだらうと思ふ。然るに、かうした眞劍な文學から眼を轉じて、當

時の硯友社文學を顧みた時、その餘りに遊戯的な、戯作者風な、金持の若旦那の道樂的な作家の態度に、必ずや不愉快と反感とを禁じ得なかつた事であらうと思ふ。

×

硯友社一派の文學がその後勃興した自然主義によつて殆ど打破されて了ひ、自然主義的作品、自然主義的運動は、全文壇を風靡して、ある一面には、其の後の文壇にいい貢獻をしたには相違ないが、それも今から考へて見ると一種の藝術至上主義ではなかつたかと疑はれるのである。少くとも藝術は、何よりも人生の眞を表現しなければならぬと主張したのはよかつたが、その中の大部分の人の眼界は餘りに狹少且つ皮相な表面にのみ限られてゐはしなかつたらうか。廣く社會の全般に眼を放つといふ事なく、大きな社會問題に、眞向からぶツつかつて行くといふ事なく、自分たちの狹い生活の範圍内に眞を求め、井戸の中の蛙的に、人生を觀た傾きがありはしなかつたらうか。いや、それはそれでいいとして、その狹い自分一人の生活もこれを徹底的に深く掘り下げて行つたならば、いろ〳〵な大きな問題がそこから自づと湧き上つてくる。けれども彼等は惜しい事には、深く徹するといふところまで行き得ないで、ただその表面、もしくは中途半端なところまでしか描き得なかつた、その結果はたゞ平凡な日常生活の記錄、露骨な性欲生活の描寫以外には出る事が出來なかつたのである。二葉亭氏の『平凡』は此等硯友社文學者、自然主義者に對する辛辣なる諷刺であつた。尤も二葉亭氏自身は諷刺のつもりでなく、一般に文學者といふものが、社會に對して、どんな態度をとつてゐるか、それを書かうとするつもりであつたが、結局諷刺になつて了つてゐるが、これは確かに匕首のやうな鋭い諷刺と云つていい。しかもこの辛辣な諷刺は、當時の硯友社文學者、自然主義者に對してのみならず、現文壇、否、一般文學者そのものに對する批評だといつてもよいのである。ところで二葉亭氏の『平凡』には、どういふ事が書かれてあるかといへば、つまり文學者などといふものは一番ほんとの事のわからない人間だ、却つて理窟も何も

分らない世間ありの人間の方が、理想だとか、人生だとか喋りまはつてゐる文學者よりも、そんな概念に囚はれないで、素直に人生を見てゐるだけ本當に眞實に生きてゐるといふのが、その根本思想となつてゐるのである。勿論この説はかなり逆説的な調子を帶びてゐるから、その點に多少の考慮は必要であるが、然し、その中には十分な眞理がひそんでゐると私は思ふのである。

×

現在、文壇の人と云はれる人の中に、第一義の生活、眞實に生きる生活をなしつつある人が極めて少いといふ事を私は初めに云つて置いたが、人間の飾りのない眞情を吐露すべきはずの詩人が、耳馴れた宛轉たる調子を自由に驅使し得る才能にまかせ、心にもない感情を弄び、言葉の遊戯に陷つて得々としてゐる事が、今の詩壇の詩人達には、果して無いといひ得ようか。

小説家といふ大看板をかゝげてゐる人が、人生の一大事を閑却して、ひたすらに何か變つた珍しい種はないか、讀者をアッと云はせるやうな素敵に面白いタネはないかと言つたやうに、新ダネ、珍ダネをあさり廻つて、丁度寄席の藝人に見るやうに、面白可笑しい人情噺で、無智な讀者の喝采を博して能事了れりとしてゐる事が、果して無いといひ得ようか。しかもこれ等の人々が、自分こそは藝術家である、自分こそは詩人であるといつて、外の小説も詩も書かない世間普通の人よりも、自分達の方が一段立ちまさつた人間であるかのやうに振舞つてゐる。これなどは、二葉亭氏の諷刺をそのままもつて來て非難していい職業的の文學者の事であるが、なほ、もつとこの人生といふものを本當に考へてゐる人、さういふ文學者でも、その文學者である事によつて、人としての本當の道を失するやうな事がありはしないか。その人が、本當に第一義の生活といふものを考へてくればくる程、文學といふものに對してある疑ひを抱き、文學者であるといふ事に惱みを感じて來るといふ事はないであらうか。極言すれば、禍ひは文學そのものの

中にありはしないであらうか。

×

ここで一轉して、私は私自身について考へて見たい。私は今職業的文學者といふものを侮蔑的に言つた。然るに、私自身職業的文學者でないかといへば決してさうではない、出來るだけ文學といふものを職業的に考へたくない、金の爲めにのみ書きたくない、自分の書きたい事を書いて、書きたくない事は書くまい、かう私は心に誓つてゐるのであるが、その誓ひ通りに、今現に自分を固く持し得てゐるかといふと、全然さうであるとは云ひ得ない。隨分、書きたくない事も書き、言ひたくない事を云つた事も多かつた。たゞ少しづつでもさういふ事の少くなるやうにと思ひ、そのために出來るだけ貧乏な生活に堪へるやうにしてゐるだけの事である。

然しどんなに貧乏に耐へつゝゆくとはいつても、原稿生活をしてゐる限りは、それも要するに中途半端で、トルストイの藝術論の敎へてゐるやうに、他の職業によつて衣食してその傍ら感興にまかせて、文學にたづさはるといふのが矢張一番いいのではないかと考へずにゐられない。が、なほ一考すれば、原稿生活必ずしも惡いのではないと思ふ事も出來る、何故かといふと、文學といふものに十分の意義を認め、これによつて、自分の救ひを見出さんとし、又人類社會のために何等かの貢獻をする事が出來るとしたならば、文學者の生活に投じこれによつて衣食するのは毫も恥づべき事ではないからである、學者は學問によつて食ひ、說敎家は說敎によつて衣食の道を得るのと同じやうに、文學者も文筆によつて衣食する事は正當な事でないとは云へないからである。ただ問題は、文學が果して我々が善に向ふのに役立つか、我々の心の救ひ、人々の心の救ひとなりうるかといふ事にあるといつてよい。そしてこれまでの私は、眞實に生きるのに、文學は立派に役立つものである、文學は惱めるものの救ひとなりうる、少くとも慰めとなり得ると信じたのである、今も私はそれを信じてゐない譯ではない。然し、第一義に徹した生活、もはや、何等の妥協

も糊塗もない生活、衷心何のやましきところもない光明的な生活、それをひたすらに求めてゐる私は、だん〳〵と宗敎的な考へ方に傾いて來て、宗敎的な生活、「自我」を無くした生活でなくては本當に救ひに入る事は出來ないといふ考へが、日々濃厚になつて來るのである。

文學と宗敎とは極めて接近してゐるやうであるが。然し究極は全く正反對のもので、彼は自我の高調、自我の確立であり、此は、自我の絕滅、無我の道である。本當の宗敎的の生活といふものは、名利を一擲し、天地の間に全く孤高な一個の人間として立ち、宇宙の大我に融合せんとするのである。これに反して文學といふものは、出來るだけ多くの人に讀まれ、出來るだけ、世間に働きかけて行く効果の上から、勢ひ名利の爭ひ、自我の强調とならざるを得ないのである。文學者にとつては、名譽心、自負心、其他の煩惱が、その活動の根本に橫はる重大な要素となつてゐるやうな事はないか。文學は、人間の煩惱の結晶といつてもいゝではないか。現に、私なども殆んど全く無名の靑年であつた時の方が、ずつと純粹で、多少、かうして認められて來てからが名利に囚はれがちになる事を沁々と感じてゐる。今や、私はこの文學そのものに執着する心と、眞實に生きんとする心との矛盾、爭鬪に惱んでゐる。然し、かうした苦しい心の爭鬪と懊惱とは、單に文學者のみならず、いかなる職業をもつてゐる人にでも、ほぼ同樣の經過を取つて、襲つてゐる惱みではないかといふ事も私は考へる。而して、眞實に生きる事を絕對的に考へて行けば行くほど、この世の中の生活は、殆んどすべてが人間の心に害するところがある、究極、理想的な生活は、全然この世間生活を拒否する事、即ち、古人のしたやうな出家遁世の外にない。又、自殺こそ此の不合理を脫却する一番いい道ではないかとさへも思はれる。眞の生活は、世間的生活の終るところより始まるといふ眞理を考へる時、一切か、無か、あれかこれか、非常につきつめた心をもつて、この問題を考へる時、いかなる人と雖、必定この大暗礁に突き當るのである。而して古來、その一すぢの心持を辿り、純粹な思索を以て眞正面にこの暗礁に打突かつて、遂にその信ずるところ

に進んで行つて自殺した人も多いし、出家遁世した人も少くはないのである。私は、今ここに、この惱みからその一命をすてた人、世俗と一切の緣を絕つた人に對するとかくの批評をこころみるつもりはない、しかし彼等のさうした、どこまでもたじろかず、どこまでも糊塗しないで、考へぬいて行からうとする强い心は、同じく私達の心としたいのである。そして、私達もまた、その最後の一線に於いて、あへて、一死をもおそれないだけの覺悟で、どこまでも徹底的に步いて行つて見たいと思ふ。文學者否なりと考へる時が來れば、私は文學者をやめるのだ、生存する事が否であると思へば、私は死んでもいいのである。しかし、どこまでも、無意味に死んで行くのは、自分の欲するところではないのであるから、一道の光明が、眞實の生が、この日常生活に、なほ少しづつでも見出せつつ行き得る間は、私は一步一步それに向つて努力して行きたいと思ふのである。これで私のいひたい事は終るのであるが、非常にまづい云ひ方の中にも私の心の方向はお分り下さつた事と思ふ、

——處女講演の摘要——

時代及び個人の心のツワイライト

一

メレジコフスキイが、その『イプセン論』を結んだ一節を、私は屢々思ひ出す。

「最後の光は空から消え失せて、未だ一點の星も現れず、古い神々は死滅して、新しい神は未だ生れない時を支配する、暗い、おぼろ氣な薄明（うすあかり）の中に、生死すべく運命づけられてゐる時代の人々の悲劇的運命」と、メレジコフスキイが呼ぶものを、いかに痛切に、我々の心は感得するであらう。

今、我々の眼界に橫はるものは、暗い、おぼろ氣なツワイライトである。それは夜の、日沒後の薄明であるか、或

ひは朝の、日出前の薄明であるか、——恐らく後者であれかしと私は祈るが——とまれ、我等の時代は、暗い、おぼろ氣な不安の霧に包まれてゐる。或る戲曲の結末によつて記憶する、「ああ夜は暗い、ああ夜は永い！」と云ふ悲痛な嘆息が、どんなにか我々には、聞き古した、ものういリフレエンと思はれるであらう。

今は、無信仰の時代である。謂はゞ、一種望みのない、無氣力な、ものういニヒリズムの時代である。歐羅巴については、私は多くを知らない。今の日本人には、もつと正確に言へば、現代の日本の知識階級にとつては、神がない、そしてまた、その大多數は神を必要としない。確かに、彼等の間に瀰漫してゐるものは、一種のニヒリズムだと私は思ふ。併し、それも露西亞のニヒリズムのやうな、深い絶望と幻滅との結果としての、深刻な否定の敎義ではあり得ない。それは、そんな苦悶の深淵にまで突き進む勇氣も要求も有たない、ダルな、イージイ・ゴオイングな、一種の輕いあきらめであり、皮相な不可知論であると思ふ。それは私がいつもよく苦勞人哲學の名で呼んでゐるもので、最も常識的な、安價なさとりであり、氣輕な解決によつての自己欺瞞である。無信仰、無敎義、無思念の安住である。安價な妥協であり、其日暮しの糊塗偸安である。しかも、殊に、文學者間に於て、それが顯著なやうに思はれる。心靈の渴きに悶え、鹿の溪河を喘ぎ慕ふが如く、靈魂の糧を求める人は、反つて文學者以外に多い。これは奇異な現象だが、事實はまさにさうである。そして今の文壇の人々に對して、一般の人が、漠然たる不滿を持するやうになつた最大の原因は、恐らくこの邊にありはしないだらうか。

一般の知識階級の人々は、大多數の文學者よりも先きに進んでゐる。かう私は斷言して憚らない。古い信仰と、古い道德とは失はれて、新しい信仰と、新しい道德とは未だ樹立されない、この彷徨の時、昏迷の時、摸索の時は、隨分永い間續いて來た。そしてこのダルな、ものうい、無氣力な、暗黑裡の安逸に慣れ、大多數の文學者が、その甘夢に醉うてゐる間に、一般の知識階級の中から、この燃えるやうな心靈の渴望が、信仰の翹望が生れ出でたと云ふ事は何

と云ふ皮肉な事實であらう、時代の先覺者であるべき文學者の大多數よりも、彼等の方が、いち早く心靈にめざめて、この時代を覆ふ不安を感得したのである。少しでも出版界に注意してゐる人は、最近になつて、著しく深い精神生活の要求に應ずべき、惱める靈魂の糧となるべき宗教的の書物の出版の著しく增加したこと、そして例へば、西田天香氏の『懺悔の生活』のやうな書物が、廣く一般の知識階級の人々によつて讀まれ出した事實に氣が付かないことはなからう。

二

或る一般的の不安が、丁度暗雲のやうに、今の時代の上を覆うてゐることは、疑ひのない事實である。その不安はかの歐洲戰爭の直接の結果である世界的不安と共通するものであるかも知れない。一方に、デモクラシイの思想が勃興して、一般の思想が恐ろしく左傾し、社會主義化した一方には、宗教的信仰を求めんとするの傾向が顯著になつたと云ふことは、まことに興味のある事實である。この二つの傾向は、一見、兩極の如き觀があるけれども、それがいづれも、この一般的不安の結果であり、その不安から脫出しようとする懸命の努力であることに於いて、相一致してゐると私は信ずる。

抑、人間を救ふものは何であるか。我々をより善き生活に導き、我々を幸福な生甲斐のある生に導き、我々からあらゆる不安を除き去つて、眞に我々を安心立命させるものは何であるか。

それは自由と愛とであると、逝ける哲學者野村隈畔氏は言つた。そして、自由と愛とはただ革命と自殺とによつてのみ得られると、この詩人は――詩がなかつた爲めに自殺したのだと或る思想家は言はれたにも拘はらず、私はこの哲學者を詩人と見る――推論した。そして革命の代りに自殺を擇んだ。果して、彼の死は眞の救ひであつたらうか。

彼の理論は悲しむべき錯誤ではなかつたらうか。それは大きな問題である。恐らく容易に決定せられないものである。併し、私は死者が自ら信ずるところに向つて進み、宛かもかの薄倖なハインリッヒ・フオン・クライストを想起せしめるやうな美しい最期によつて、確かにその救ひを見出し得たことを信じたいと思ふ。とは云へ、それは私の不幸なラジカリスト龍田純一の信念とはなり得ても、直ちに私自身の、また一般の人のそれとはなり得ないであらう。然らば革命は如何、革命の可能については、私は信じられない。また、よしその可能が信じられたにしても、それが眞に人間に自由を齎し、幸福を齎し、その救ひを齎すや否やについては、深く疑ひなきを得ない。

社會主義は殆どまさに我等の時代の常識である。私はそれに反對すべき何等の理由も有たない。マルクス流の乾燥無味な唯物史觀は、私には餘りに散文的に思はれ、餘りに反藝術的に思はれるが、併し、クロポトキンの思想や、ギルド・ソシアリズムの或る思想などは詩的感興の對象とさへもなり得る。だが、それを一篇の詩としてではなく、實行の指標として考へる時、問題は自ら異つてくる。社會主義者の思想は、人間を物質的方面から考へた場合の、幸福の鍵となるべき唯一の可能なる推定である。私はどんなにそれを重んずるだらう。現在の社會狀態が少しでも改善されたならば、それはどんな喜びであらう。だがその假定が確實であるとしても、それが最後のものであらうか。それだけで十分であらうか。我々の肉體が飽滿し、充足し、慰安されたゞけで、この心の重い不安が殘らず取り除かれてしまふだらうか。そこに問題がある。

多くの樂天的な人々に考へられてゐるよりも、人間はもつと罪の深いものである、もつと救はれ難いものである、もつと深い惱みに巣くはれてゐるものであると、私は知つてゐる。惡は人間の屬性であると、私は信じなければならない。老病死苦の苦患にさいなまれ、生死に病む煩惱具足の人間が、果してよく自力で救はれようか。自ら自分を救ひ得ようか。死といふ問題を考へただけでも、私は神を思はずにゐられない、他力の救ひを翹望せずにゐられない。

to be or not to be の問題は、大多數の人には、殊に大多數の文學者には、全く風馬牛の問題であるやうに見える。また、或る人にとつては、既に全く解決せられた問題であるやうに見える。私は生きたい、そして私は生きてゐるのがせい一杯だ、それ故どうしてそんな事を問題にしてゐられようと或る人は言つた。私も一應はさう思つて見る事もある。だが、またまた、それがいつか心を一杯に占めてしまふ。どうせ不可解だとは分り切つてゐても、求めて苦惱を身に受けるやうなものだとは悧巧に考へ直しても、やつぱり心がそこに還る。不安な地上の空氣の中に棲息する被造物の、悲しい痛ましい運命である。野村隈畔氏の死の如きも、いろいろに解釋され、いろいろに論議されもしたし、また實際、いろいろな事情と動機とに導かれたものではあらうと思ふが、根本はやはり to be or not to be の問題なのだと私は思ふ。生と死の問題の、避くべからざる歸結であつたのだと思ふ。そして、單に一野村氏のみに限らず、世の多くの眞に人生問題に惱んでゐる人々の主要の問題は、まさにその to be or not to be の問題であると思ふ。そして、それ等の惱みに對して、唯一の解決を與へてくれるものは何か。ただただ信仰あるのみである。神に對する絶對の歸依あるのみである。我々が眞に神を信じ得られたならば、我々は勇ましく生きる事が出來る。そしてまた、安んじて死ぬ事が出來る。

三

現代の社會を覆うてゐる一般的不安は、歐洲戰爭の直接の結果である物價騰貴、生活の困難等の物質的原因を有つことは疑ひを容れない。こゝに、左傾思想の一世の大勢力となつた根據と理由とがある。だが、その一面には、この不安が心靈の不安であり、その不安が心靈のめざめであると云ふ事も、否定しがたい事實だと私は信ずる。もとよりそれは上記の物質的原因に影響せられ、刺戟されたのであると云ふことは言ふまでもない。大きな社會的變動・社會

的災厄は、必然的に、人間を靈魂の覺醒に導く。そして、さうした一世の機運は、名僧善智識を喚び起す、源平の戰亂の後に法然、親鸞、續いて日蓮の如き聖人が現れて、善男善女の渇仰を受け、その心の救ひとなつた如きその好例である。併し、我々の一種ものうい、無氣力な、ダルな、ニヒリズムの時代は餘りに永く續いた。古い信仰と古い道德とが失はれてから、隨分永い昏迷の年月が經つた。自然主義運動が、舊道德の破壞を叫んでから、もう十四五年にもなる。歐洲戰爭の直接の結果たる世界的不安がなくとも、我々の心に、暗い、おぼろ氣な薄明りの中に生死するものの不安が芽ぐんだとて、それは毫もあやしむべき限りではない。

倉田百三氏の『出家とその弟子』などが動機となつて、今や、我國の知識階級の間に、眞宗的信仰が新しく力を得來つて、歎異鈔が頻りに問題にされ、また、西田天香氏の一燈園が漸く世の注意を惹くやうになり、すべて、これ等の宗教的翹望の中に、私は我國の知識階級の間に、大いなる心靈のめざめが顯著になりつゝあると云ふ事實を認めずにゐられない。そしてそれが私をして、やがて宗教のルネッサンス——宛かもかの聖德太子の時代を思はしめる——が來なければならないといふ事、この漸層的に高まりつゝある時代の翹望の前に、我々の心に救援を齎すすぐれた人が現れなければならないといふ事、それを信じ、偉大なる豫感に襲はれずにはゐられない。我等をめぐる暗い、おぼろ氣な薄明は、今こそ日の出前のツワイライトに相違ない。そして、その薄明の中に、既に一道の光がさしはじめたのではないだらうか。

今、これを單に私一個人の問題として考へて見る。私はかなり永い間、懷疑の薄暗の間を辿つて來た。何物も捉ふべからず、何物も信ずべからず。と云つたやうな絶望が、それこそ本當のニヒリズムが、私の人生觀の基調となつてゐた。幾度か、私は死を思つた。死の外に何等の救ひあるなしと、私は信ずる外はなかつた。だが今、私にも、その絶望の底から、何だか一道の光のやうなものがさしそめて來たやうに思ふ。救ひが何處からか來さうに思はれて來た。

そして一面から言へば、それは道を求むる心のいや切になつて來た事を意味する。道が求め得られると信じ得られるやうになつたのである。(その過程についでは、また別に詳しく書くつもりである)そしてこれは私一個の事であるが、併し、これは今の時代全般におしひろめて、一般の人々にあてはめて誤りなきを得ることはないであらうか。

「ああ夜は暗い！　ああ夜は永い！」だが、黎明は來るであらう。

眼に見えぬ星

×

秋はまづ木の葉におとづれてくる。庭前の青桐の樹を仰いで見ると、さらさらと涼しい音を立てゝ搖いでゐる靑い葉の層が、その端し、その下の方で、もう褐色にすがれた色をまじへ、また、むざんにむしばんで、丁度網の目のやうに、たゞ纖維だけが殘つてゐるものもある。その葉の層の間から洩れ込む日影も、はやいくらか色褪せて、木草に見える疲勞のすがたが、その輝きにも見られる。

目をおろすと、そこには、狹い、ほんたうに狹い庭の面に、幾つも幾つも、大きなその桐の葉が落ちころがつてゐる。長い柄のついたその葉の樣子が、まるで何か動物の死骸のやうである。庭の草と草との間の僅かな土の上には、二つに裂けた銀杏の葉も二つ三つ見える。自分の書齋の窓からのぞむと、隣の屋根の上の遙かむかうに聳えてゐるあの高い銀杏の樹の葉が、此間、太平洋から來て東海道を荒して行つた颱風のをりに、吹き飛ばされて來たものに違ひない。あの颱風の折りには、この庭を飾つてゐたたつた一本の萩が、去年一向伸びなかつたので、今年は非常に丹精して、卵をうみつけにくる黃色な蝶を追拂ふのに骨折つて、やつと見事に伸びたと喜んでゐた甲斐もなく、半ばから

ボツキリ折れてしまつた。高い堤の上なんかに、澤山むらがつて、こんもりとゆるやかにしなだれてこそ、萩も生甲斐を感じるであらうのに、こんな狹苦しい庭にたつた一本、さぞ窮屈でさぞ寂しかつたであらう。それに日影が上の方にばかりあたるので、ただ上に上に枝葉を張つてゐたのだから、あの嵐には折れずにゐられなかつたのであらう。あはれな萩である。

私の小庭にも、なほかずかずの眺めがある。前の竹垣には、うねうねと蔦の蔓が這ひめぐつて、右へ左へくねりながら、上へ上へと伸びあがり、ギッシリと蔦の葉が垂れそろうて、美しい模樣を置き、垣根の上に出ては、そこの柱の上にうづたかく盛り上つてゐる。やはらかな、女性的な萩の葉の傍らには、鉢植の楓の葉が五つ六つ、ざくろの葉、桃の葉、躑躅の葉、小さな檜に逞しく這ひからんで、風にゆらゆら搖れてゐる山芋の葉も野趣があつていゝ。百合は莖さへ枯れて久しく、おいらん草の葉も衰へて、花のながめも今はないけれど、私はこれらのながめに目を慰めるのだ。花が好きで、花の色をながめ、花の香をかいで、天地の艶な姿とはたらきとに心を慰められてゐた私であつたが、今は、花よりも葉の方が心を惹く。今漸くにして、私は謂はゞ葉を發見したのである。今迄はむしろ閑却してゐた木の葉や草の葉が、どんなに趣きの深い、どんなに複雜な言葉と表情とをもつてゐるかを悟つたのである。花の美ですらも、どれぐらゐ葉によつて助けられてゐるか知れない。とりどりの色と形と、とりどりの手ざはりとをもつたそれぞれの葉は、それぞれにその木なり草なりの性質を語つてゐる。一見極めて平凡であるが、よくながめてゐると、思ひがけない面白味が見出されてくる。葉の大きさ、恰好、厚み、色合ひ、千差萬別で、柔かなのもあれば剛いのもあり、男性的なものもあれば女性的なのもある、ひどく取りすましたやうなのもあれば、おどけたやうなのもあり、貴族的な感じのもあれば、見るから土臭い親しみのあるものもある。今更に自然の豐富さに驚かれると共に、そのとりどりの面白味に、みんないいのだ、みんな存在の理由を有つてゐるのだと考へずにはゐられない。そしてまた、丁度

それと同じやうに、私も此頃になつて、人間の一人一人の顔付、一人一人の個性にも、それ〴〵の味はひを喜ぶ事が出來るやうな氣がして來た。

×

葉のおもしろみと云へば、私は、夏になる前に遊んだあの甲府の近郊をおもひ出す。

そこには、町から宿へ行くまでの幾曲りした徑の兩側に、靑々と、右の平地にも、左の山の傾斜にも、爽かな葡萄畑が連つてゐた。人の脊たけほどの高さの棚の上に延びめぐつてゐる葡萄蔓から垂れ下つた葡萄の葉が、山風にひるがへつて、白い葉裏を見せてゐる。秋、葡萄の實の熟れる頃には、紫の房が垂れそろうて、それは〳〵美しいといふ事であるが、私はこの初夏の風に搖いでゐる葉のつらなりを見たばかりで、もう十分の滿足を覺えたのであつた。

宿から善光寺の方へ行く徑のまはりも、また、殆んど葡萄畑ばかりで、中にはその棚の下に、空豆などを植ゑてゐるところもあつた。路傍には、晝顔の花が、そこにもこゝにも、花の杯に一杯の露をためて、寂しさうに咲いてゐた。靑く澄んだ空をながめたり、その空と東南の山脈との間に、ほんの首だけのぞかせた裏富士の靜かな姿をながめたりしながら、何思ふこともなく、のんきにブラ〳〵と步いて行くと、自分も自然の中の一つの草か木かであるやうな氣持がしてくる。そんな時には、詩を思ふやうなすきもない、自分がその詩なのだ、詩と自分とは一つである、これが卽如の境である、自然との融合も、かうして我々に許されるやうになるであらう。イプセンは『歌はれなかつた歌が一ばん美しい歌だ』と言つてゐる。詩の極致は、結局詩のないところにあるかも知れない。全く、詩人がどんなに豐富な言葉と、圓熟した技巧とをもつてゐたところで、決してその自然と魂との相觸れ相合うて鳴る玄妙な天來の響をそのまゝに傳へる事は出來はしない。その感じたものが、どんな幽玄な、深奧な、微妙なものであつても、それを言葉にあらはしてみると、つまらない、平凡な、見る影もないものに過ぎないのに、我ながら驚いてしまふ。こんな筈

ではなかつたがと言つたところで、もう追つつくことでない。肝心のものは、もう指の間から洩れてしまつてゐるのだ。いや、その詩人の魂の感得しえた一番いゝものは、一番尊いものは、いつも、いつでも、その底にとゞまつてゐるのだ。そして、言葉に湧き出るものは、その影にすぎないのだ。人間の言葉は、自然を飜譯するには、あまりに不完全な器具である。そこから象徴詩の理論も生れて來たものであらうが、その象徴詩も、その理論を徹底させると、結局白紙に歸する外はなくなつてしまふ。眞實性の表現に焦心する詩人も、つひには絶望して、筆を投じてしまふ。藝術とは、畢竟ゑがかれた輪の中での人間の最善の努力にすぎないではないか。その輪の外に出る事は、つひに人間には許されないのだ。天は到りがたく、自然は捉へ難い。人間のなすべき事は、その制限の中での最善の努力、たしかにこの外にはないであらう。

エマスンは、自然は記述される事を好むと言つてゐる。そして、實際、自然は、自らその歴史を書く。「星や小石は自分の影を背負つて行く。轉がる岩は山の上にその掠り傷を、河は土壤にその流の條を、動物は地層にその骨を、齒朶や木の葉は石炭に、殊勝なその墓標を殘して行く」のだ。我々はその天地といふ大きな備忘錄に書かれたものを、たゞ目をもつてばかりでなく、また魂をもつて讀まなければならない。その讀むといふ事こそ肝腎の事なのだ。それを不完全な人間の言葉に飜譯するといふ事は、それ程の事ではない。

飜譯者が、うまく飜譯してやらう、誤譯をすまいなどと、力みながら、しらべて行くとき、原作の味ひは、反つて味はゝれ得ない事が多いのに、心ゆるやかに、素直な受動的な氣持で、漫然と讀み耽つてゐる時に、しみじみとその眞味が味はゝれてくるものだ。そして、さうした受動的な、心に何のこだはりもない氣分で、ゆつくりゆつくり田舍路を辿つて行くのは、何といふ樂しい事であらう。そこに一軒の農家がある。荒壁の家のつくりも山國らしく、家の廂に冬中の薪の置場をしつらへてゐるその前庭一杯は、つい軒近くまで葡萄の棚である。その農家のむかうには、大きな

溜池があつて、野ばらが一杯に、岸から垂れ下つて、白い花びらが點々と水の上に浮いてゐる。池のまはりには、まだいろ／＼の草花が咲いてゐる。勿論、さま／＼な葉が風にゆらいで、初夏のしめやかな日影のもとに、嬉々としてひるがへつてゐる。私はしみ／＼とした目付で、その一つ一つの葉を讀んで行く。東京の街を、行き會ふ一人々々の人の顔を讀んで行くのに、一種の趣味を見出して來た自分だが、この野の草木の顔を讀んで行く方が一層樂しいのである。かしこで見出す不幸と、煩惱の苦惱の影の代りに、こゝでは幸福と、靜澄なおほらかな自然の姿とが感受されるのだから……。

海岸に育つた自分には、甲州は珍らしい喜びを與へてくれた。あの雨の降つた翌朝、何處もかしこもしつとりと濕うてゐる山道を、それも、丁度小川の川底のやうに凹んで、石が飛び出してゐる、殆んど通る人もないらしい山道を、兩方からさし交うた木の枝をかき分けるやうにして、裾を高々とからげながら、歩いた時の事を思ひ出すと、今でも爽かな山氣が身に感じられる位だ。子供の折り、故郷の小さな山々で遊んだ日以來、そんな山道の雜木をかき分けて歩いた事なぞは一度もなかつたのだから、思へば二十年振りだつたのだ。田舍に棲んで、あんな山道を、毎朝、歩いて見られたなら……時々さう考へては、急に旅に出て行きたくなる……

×

此頃は、夜になると、時折り私はその小さな庭にテエブルを持出して、その上に置電燈をすゑて、庭椅子を立てゝ、それにかけて、書きものをする。夜風にさやさやと鳴る靑桐のそよぎの下で、ひんやりと涼しい夜氣にかこまれて、餘念もなくペンを走らせてゐると、つい足もとと云つてもいゝ位なところで、何か蟲が、かすかに鳴く。時とすると、何處から來たものか、一匹の蟋蟀が電燈の臺のまはりに、暫くカサコソと動いてゐる事さへある。そして、蟲の聲は、一夜毎に繁くなる。はじめは、何處か遠くで、「あゝ蟲が鳴いてゐるナ……」と思つてゐたのに、今では、家をとりめ

ぐつて、夜もすがら蟲の音がつゞく。晝間でさへも、巷の物の音の間から、そのしめやかな音が洩れ聞えてくる。私は一年中でこのだん／＼蟲の音のふえてくる季節が一ばん好きだ。サラ／＼とペンを走らせてゐると、丁度それに伴奏するやうに、蟲は鳴く。私はペンを擱いて、暫くぢつとその聲に聽きとれてゐる事もある。そして、ふと氣がついて、「あゝ、秋だナ！」と思ふ。さうだ、やつと秋になつたのだ。さう思ふと、私の胸からは、ほッと安堵したやうな歎息が洩れる。ひと夏は、私には苦行である。旅を思うても、避暑客の混雜や、其他のいろんな夏の旅の不快をおもふと、やつぱり何處へも行きたくなくなる。旅もやつぱり秋。秋になつたら……もつと涼しくなつたら……と言ひ言ひしてすごした。そして……たうとう、秋風が、私の家の靑桐の梢に鳴り出したのである。

秋はいゝ。人間も自然も、みんな落着いて、みんな靜かに澄んで來て、みんなしめやかに、靈性の色を帶びてくる。頭の上の木の葉のそよぎは何といふ幽邃の響と、一味の哀愁とを帶びる事であらう。だが、更にその上に君臨する大空は、いかに澄み切つて、いかに透徹して、無限の靈氣をわが眼にふりそゝぐ事であらう。この戶外の俄づくりの書齋から、ふと仰いで見ると、その空は、今一杯の星である。隣家の廂とむかひの屋根との間の僅かに限られたその空には、黑くうかぶ靑桐の葉の間にさへも、星はまたゝき、微笑んでゐる。私はペンを擱いて、今度はぢつとその空を眺めるのだ。いつまでも、いつまでも。何とも言ひ知れぬ、深い思ひに沈みながら。

星の空を仰いでゐる時、魂はいつかその空にのぼつて、自らその星の一つとなるかのやうである。すべてのものが、遠く遠く隔つてしまふ。地上のあらゆる繫縛が、みんな解かれてしまふ。いつも身を壓へ付けてゐる、七情の重みも何處へ行つたであらう。眼は星を見てゐる、魂の見るものは何であらう。その星空の奧には、われ／＼の魂を惹きつけ、引き寄せる何物かゞある、われ／＼の眼に見えない何物かゞある。それがぼんやりと心の眼に映じ出して來はしないか。

試みに、星空を、一二時間ぢつと眺めてゐるとよい。さうすれば、たしかに、今迄眼に見えなかつたものが見えて來、今迄心に觸れなかつたものが觸れてくる。それは新しい星であらうか、今迄眼に見えなかつた星であらうか。その星でもある。だが、その星もまた一つの象徴にすぎない。その奥に、その底に、何物かゞある、――それを私はぢつと凝視するのだ、望遠鏡でさへ見出し得ないものを、私の魂の眼をもつて……

その人にとつては、眼に見えないものは存在しないのである――と云ふやうな人は、いかに貧しい恵まれない人であらうか！　そんな人は、生涯、たゞ色相に惑はされ、煩惱に驅られて、大きな眼をあけながら、實は眠つて世をすごしてしまふのだ。醒めなければならない、此の世界が、どうしてこれだけのものであらう！　この眼の捉へ得るだけの僅かなものであらう！　それは、もつと〳〵廣いのだ、もつと〳〵はかり知られないものなのだ。天地の祕密は、人間の前に、七つの封印をもつて嚴しく封ぜられてゐるかも知れない。だが、人間が生きてゐるのは、その祕密を解くためでなくて何であらう。宗教といひ、哲學といひ、藝術といひ、その天地の扉をひらく鍵として人間に與へられたものに外ならないではないか。私達はその鍵を投げすてゝはならない……

さう思つて、私は再び目を空から、戸外の俄づくりの書齋のテエブルの上におろして、再びペンを手にとる。そして、青桐の梢のそよぎを聞きながら、蟲の鳴聲を聞きながら、餘念なくペンを走らすのである。

海濱雜記

×

ひとり海邊の町にやつて來て

見も知らぬ町をよこぎれど、
あやしみ見る人もない。
ここは夏三月がほどの海水浴場、
たのしい若い人たちが
どんなに群れ戯れてゐたであらう。
今はもう十一月、
夏の姿は去つて遠く
秋の思ひを抱く秋の客ひとり、
ひねもす宿の二階のてすりにもたれ
目したにつらなる海をながめる。
鈍くくすんだ灰色の海のおもてに
一列に白くわき立つ波の高鳴り、
ひねもす止まず、私の心、
なほその亂れをうつしやまず、
秋も十一月、秋の詩人、
ひねもす海と默語を交す。

×

もうここへ來てから、五日にもなる。

毎日々々、海を見て暮してゐる。朝から魚を食べさせられて、三度々々、魚ばかり食べてゐるので、もう少々鼻について、刺身の眞紅な色など、見るさへウンザリするほどだ。もう東京へ歸つてもいい時分かも知れない。

そのくせ、何一つ書けもしないし、頭も纒らない。默つて海邊を歩いたり、ぢつと太平洋の波濤を眺めながら、夕方までぼんやりイんでゐるのだ。いろいろな思ひが、その大濤のやうにまき起る、後から後からと……そして、さきの波はあともとどめず、あとの波もまた消えてしまふ。

信越線の汽車で、碓氷峠を越えて、突兀たる妙義山を右手に見て、群馬から埼玉へ、埼玉の平野の單調な景色をながめて、東京へ歸る途中、彼の心には、すべてのものは過ぎ去つてしまふ、過ぎ去つてしまふ、みんな時の流れに消え去つてしまふのだといふ感慨がとどめる事が出來なかつた。日本アルプスの雪を眺めたのは、まだ昨日のやうに思はれながら、今は太平洋の岸邊にイんで、まき起る波濤に相對してゐる自分をおもへば、その感はなほ更に強い。かうして、十年の後、二十年の後、過去をふりかへれば、ただ一場の夢にすぎない、どんな苦惱もどんな歡樂も、すべてがただ一場の夢にすぎないのかとおもへば人生はあまりに儚い戯れである。處世一夢の感、こんなにも強く強く身に迫るのは、この無常迅速の痛感は、抑も何の故であらう。

Das Leben, ein Traum! ……

私はこの言葉を、絶えず叫びかへしながら、山と山とで限られてゐる海濱を、端てから端てまで歩いて行つた。砂濱の中に、波打際の近くに、無數の凹凸をもつた平面な岩が、丁度一枚板のやうに横はつてゐる。その窪みにたまつてゐる潮水で足袋を濡らしながら、私はその岩の上を飛び歩いた。町を横ぎつて海へ流れ入る三筋ばかりの川を飛び越した。その中に一番幅の廣い流れには、此方の岸から丸太を投げかけてあつたので、その丸太のはしまで危い足どりで出て行つて、そこから飛んだが、幸ひに飛びそこねもしなかつた。さうして歩いて行くうちに、もう砂濱は絶えてしまふ。

濱には人影一つない。
このひと夏を
ここに飛びまはつてゐた少女たちは何處へ行つた？
あの腹立たしげに咆えてゐる波の中へ、輕々と飛び込んでゐた若者達は何處へ行つた？
彼等はゐない、彼等はゐない、
また夏が來て、
この濱が旗や天幕で飾られるとき、
その中の幾人が再びここに歸つてくるだらう？
再びここに來るとても
去年のままで誰れがゐよう、
それは違つた人間である。

私もさうだ……昨日の私は今日の私でない、今日の私は明日の私でない、周圍の凡てはもとより、我々さへも、かうして刻々變つて行くのだ。これが流轉の世相である。こんな事をしきりに考へながら、私は町を横ぎつて、宿へ歸つて來た。昨日の夕方。

×

今日、たまたま新聞を手にしてみると、詩を散文の形に書き改めた事について、いろいろな人が、いろいろな意見を吐露してゐる。

私はそれを讀んで、それがあまりに自分とかけはなれた問題なのに、われながら驚いた。そんな事が問題にもなら

ぬほど、私は詩の愛を失つたのだらうか。いやいや、さうでない、私にはそれよりも、もつと重大な心の重荷があるのだ。謂はばその苦しみが、ここまで私を連れ出して來たのだ。松本へ行つた時には、あれからすぐ越後の方へ出てみる筈だつたが、何だか遠い遠い何處とも知れないところへ、このままずつと行つてしまひたいやうな氣持が頻りに起つて、自分で自分が心配になつたので、そのまま信越線で歸つて來たのだつたが、歸つてみると、やつぱり氣持が落着かないので、家ではたつた一晩寢たきりで、すぐまたこちらへやつた來たのだつた。

私には、今、詩形や詩のリズムの問題などは、どうでもいいのだ。それは私が今かうしたつきつめた心の狀態にあるからばかりではない。ふだんから、私はさうなのだ。

詩の散文化といふ事ほど、詩人を激せしめる事はない。ある人などはそれを痛歎し、その傾向を痛撃して、奮然として起つたと言つてゐる。その氣持も私にはわかる。以前は私も詩の散文化を歎ずる氣持を持つてゐたのだから。然し、今ではそれでいいではないか、と言ひたいのだ。何といつても、詩の定形律の破壞である自由詩は、勢ひ散文化し、散文に近づく。自由詩を認める以上は、詩の散文化は許していいではないか。散文的になつたからとて、大して差支はないではないか。要はその內容の如何にある、「詩」がその中にあれば、形式上の些少な缺點なんか、大目に見ておいた方がよい。それが今後の自由詩の成長を助ける道である。今あまりそんな點をやかましく言つてゐると、折角の自由詩の努力が挫折してしまふ虞れがある。散文化であらうが何であらうが、放任しておく事だ。さうしたなら、そのうちに、自由詩も立派な發育をして、完成した詩形になるだらう。

藝術上の事はすべてさうだ。ほつておくことだ。ほつておくことだ。作品でも、つまらないものは、そのまま滅びてしまふ。いいものは殘る。それでよい。そこに何の議論も要らない。つまらない批評家が恐れげもなく大膽な論斷を下して憚らないのは、考へてみれば大それた事だと思ふ。

私は議論はきらひである。だんだん嫌ひになつてしまつた。世の中には、議論によつて決せられるものは、一つとしてない。理窟は何とでも立つ。そこが理窟の理窟たる所以だ。一寸重點をかへれば、議論はすぐばらばらにくづれてしまふ。

ひとり議論ばかりでなく、あらゆる主義主張が、だんだんに心持に遠くなつて來た。すべての主義主張といふものは、元來、その根柢に無理がありはしないか。本來廣汎な眼界をわれと限つて、狹苦しい型の中に入る事ではなからうか。もしさうだとすると、自分の世界を自分で狹く限定してしまふのは、つまらないと思ふ。

白紙のやうな心で、すべてのものを受け容れて行きたいものだ。何事に對しても、偏見を持たないで對したいものだ。詩の方でも、その形式や傾向などに煩はされないで、直ちに作者の魂を見、作者のライフを見て、いいものはいいと素直な心で認めて行きたい。眞なるもの、美なるものは、誰れが見ても、眞であり美でなければならない。それがさうでないのは、多くの人が、自己の狹少な趣味に囚はれたり、形式の末に拘泥するからの事だ。

もつと打ち開いた心になり、もつと互ひに理解する事をつとめよう。それには私自身、まつさきにその努力をする義務がある。これ迄もさういふ風に努めて來たつもりだが、もつともつとさう努めて行かねばならぬ。

×

私が曾つて、詩は救ひではなくとも、少くとも慰めであるといつたら、なぜ救ひでないのだ、救ひでない位なら、詩は無意味ではないかと云つた人があつた。私も、その人とは多分意味は違ふであらうが、それと同じことをおもふ。私が藝術を熱愛しながらも、藝術に對して、常に或る疑ひを抱かずにゐられないのは、それである。つまり、私にとつて藝術は宗教でなければならない、しかも、私はまだ藝術を宗教とおもふ事は出來ないのだ。悲しいかな、まだ詩を救ひと信じ切る事が出來ないのである。詩は何と云はれても、まだ私には慰めである。石川啄木が歌を悲しい玩具

だと云つた氣持が、私にはよくわかるやうに思ふ。啄木も歌にそれ以上を求めはしなかつたであらう、いや、求めても甲斐のない事を知つてゐたに違ひない。

西行が歌に對したやうに、芭蕉が俳諧に對したやうに、私もなりたいとおもふ。西行が「此歌卽ち是れ如來の形體也。去れば一首讀み出でては、一體の佛像を造る思ひをなし、一句を思ひ續けては、祕密の眞言を唱ふるに同じ。」と言つた言葉は、たふとい言葉であるとしみじみおもふ。しかも、私は、まだ疑ひがある、若くは、まだ自分の道を十分に信じえない。詩は救ひであるかも知れない、救ひとなりうるかも知れない、が少くとも、今の私には慰めにはなる……今日もやつぱりさうとしか思はれない。

×

今日は午後からひどい風だ。海のおもては、凄いほど藍碧に冴え切つて、その藍碧の上には、白い波がしらが、丁度棒切れか何かで叩かれでもするやうに、すさまじくはね返つて、恐ろしい勢ひを呈してゐる。

町でもここは高見なので、風あたりが一段強いので、先刻女中たちがバタクサと雨戶を繰り出して、他には容とてもないので、たゞ自分の部屋の前だけに、二三枚の雨戶の間にわづかな隙間を殘して行つたばかりで、薄暗い室內に、ひとりぽつねんとすわつて、風の音、波の音、うしろの山の松の音、時々颯と來る風に雨戶のガタ〳〵いふ音、そして、片肱のほとりには、煮えたぎる鐵瓶の湯の音を聞いてゐると、何處か遠い海中に島流しになつてゐるやうな氣持がする。

たうとう、私は自分で蒲團を出して來て、その中へもぐりこんで寢てしまつた。いつのまにか、ぐつすり寢込んだと見えて、眼をさましてみると、もう夕方であつた。いつか風も落ちたと見えて、あたりはひつそりとしてゐる。雨戶もくりあけてあつたので、障子をあけて出てみると、美しい夕映である。水平線上の茜色に染められてゐる夕空に、

遠見崎神社のある左手の山の形が、くつきりと黒く彫り出されて、丁度寫眞の種板かのやうに、眼に印しつける。山の下から右手へ逝つてゐる海は、やや黒みがかつた紺靑の上に、白い波がしらを、野山の芒の穗のやうに靡かして、もう穩かに凪いでゐる。もう少ししたら、その海のおもてには、無數の漁火がちらちらしだすだらう。

暮れゆく海……さうした言葉が、ふと頭に浮んだ。そしてその言葉に伴ふ私一人の特別な氣分が、驚くほど生々と蘇つて、忽ち私を遠い昔に逝れて行つてしまふ。遠い故鄕の海邊で送つたひと夏ひと秋のその思ひ出である。この太平洋の暮れ行く海面を眺めながら、私は暫く、閑かに、日本海の夕をおもひ浮べてゐた。

晩秋の靜觀

半月ばかりの旅から歸つて、毎日、机の前にすわつて、書物を讀むでもなく、物を書くでもなく、ぼんやりとしてすごす日が、幾日か續いた。

秋も末になつて、春から夏にかけて、裏口から表へと自分の家をめぐる日影が、今では机の前の硝子戸にさしこむやうになつた。默想の眼をあげると、淡黃色のカアテンをすかして、近くなつた秋の日ざしが、その厚味のある布の中ごろを四角にくぎつて、くつきりと鮮かな卵色に浮き上らせた中に、硝子戸の棧の影が黑く畫かれて見える。

もう夕暮だらうかと、私は思つた。時計のない――あつてもわざととめてある――私の家では、時間を知ることは出來ない。時間の外に住みたいのが希求である私には、あたりが明るくなれば朝で、暗くなれば夜で澤山である。朝にはわが來つたもとをおもひ、夕にはわが往く果のやすらひをおもふ。今見る色は夕暮の色である、まだ夕には遠くとも、ここばかりはやも夕暮の氣配である。その黃色な明るみを、ぢつと眺めてゐると、私の心には、諸佛の極樂、

西方淨土が思ひ浮ぶ。

私には、天國といふ基督教的の觀念よりも、古い佛教の西方淨土の觀念が、傳統的な親しみをもつて、容易く心にリアライズする。

夕映の眞紅にもえてゐる西の空をながめて、幾度び私の心は、この西方淨土のおもひに浸つて、寂しい心を慰めた事であらう。我を忘れてぢつと眺め入つてゐるうちに、夕映がだんだんうすれて消えてしまふと、そのあたりに、金星のさやかな光がきらめき出す。身のまははすつかり黄昏れて、靜かな薄暮が足もとに漂ふ。丁度このやうにして、我々とおなじやうに、その光と闇との相半ばする西の仄かな黄色い空をのぞんだ古い東洋人の心に、いつしらず、人間性に深く根ざしてゐる無限のあこがれ、不死の願ひが、西方淨土の觀念を生んだのは、少しも不思議ではないであらう。

まことに夕暮の靜寂の中に默思する時、私たちの心の中には、限りないやはらぎと落着きとが生れて來る。丁度ゲエテがあの美しい二つの『旅人の夜の歌』にうたつたやうな、たのしい平和、靜かな安息への渴望のおもひが湧き上つてくる。一日のをはりは、一生のをはりを思はせる。そのとき、心はおのづと、來世にむかふ、彼岸にむかふ。

西方十萬億土の彼方、彌陀の淨土に往生して、彌陀の化導によつて成佛するといふ思想は、人間のはかない安心にすぎないではあらうが、しかも來迎の雲に乘つて、佛樣が迎へに來て下さると思つてゐた、單純なむかしの人の信仰は、或る感動なしに考へることはできない。

神(ゴット)といふ觀念は、私には、それほど直接的にぴつたりと胸に來ない。神といふ言葉の中には、何だか威壓的な、峻嚴な響がある。それはイスラエルの神などの聯想かも知れないが、何だか人間のとりつくしまもない、森嚴な、恐ろしいもののやうな氣がして、親しみが起らない。佛といふ方が、私たちには、どれほどなつかしく胸に響いて來るか知

れない。佛樣といふ言葉には、私たちの心の中まで沁みこんでくる、非常に親しい、やさしい感情がこもつてゐる。その中には、單に人間に對する神といふやうな、限られた、二元的な觀念とはちがつた、もつと廣い、もつとゆたかな、親しい響がある。私たちのなくした祖父も祖母も、みうちのものをはじめとして、なくなつて行つた凡ての人たちが含まれてゐるのだから。

みんな佛樣になるのだ……と考へると、私の心は、御來迎を信じたやさしい單純な昔の人の心と同じやうになつて、大變やすらかな、やはらぎを得てくる。みんな西方淨土に行けるのだ、と思へば、人の世の爭ひに、ともすれば尖る心も、やはらかになごむのを覺える。

私は旣成宗敎を信ずるものではないけれど、旣成宗敎のもつてゐるいろいろな儀式や約束に伴うて、幼い時にはぐくまれた宗敎的感情が、私たちの築き得る獨自の信仰の基礎となることは、疑ひ得られないと思ふ。歐羅巴の詩人や文人で、つひにはカトリックの信仰に復歸する人の多い事をおもふにつけても、宗敎の儀式そのものも、必ずしも斥け去る事はできないのではなからうかと思はれる。形骸に墮した宗敎には意義がない、けれども、一般の人の信仰は、祭壇なくしては、なり立ち得ないことをも思はずにはゐられぬ。

私は子供のをりに、月ごとに、祖母や姉などに連れられて、お寺詣りをした事を思ひ出す。私の故鄕の市には、寺町といつて、その片側にお寺ばかりが十位も並んでゐる町があつて、その中に、私の家の檀那寺であつた安國寺といふ禪宗の寺もあつた。どの寺でも、山門を入つたところで、寺番が香華を賣つてゐる。そこへ行つて、線香や花を買つて、庫裡の土間の片隅に納めてある、家の名を記した小桶を取出して來て、閼伽の井から水を汲んで、本堂の裏へまはると、そこは一帶の墓地である。その中には、私のまだ見ぬ祖父の眠つてゐる墓もあるのだ。その墓の前へ行くと、佛樣に花をささげたり、線香を供へたりして、祖母は南無阿彌陀佛々々々々々々と、何遍も何遍も口の中で唱へ

ながら、なくなつた良人の墓石に水を手向けて、それから子供の私にも、佛樣に水をあげるやうに言ふ。私も南無阿彌陀佛と唱へながら、墓石の頭から、幾度も幾度も水を注ぎかける。さうした幼い日の事が、昨日でもあるやうに、鮮かに思ひ浮ぶのだ。

墓詣りの歸りには、庫裡によつて、お住持樣に會ふ事もある。廣いお寺の建物の中は、ひつそりしてゐて、方丈の間から望まれる庭の泉水の、落ちる水の音ばかりが、閑かに聞える。

私はお寺が好きであつた。

お寺へは、また、法事の時にも行く。また、よその家の葬式のときに、自分の家の屋號の入つた提灯をもつて、會葬に行かせられる。葬式は夜あつて、會葬者はそれぞれの提灯をささげて、お寺まで棺の後について行つて、本堂の前の廣場に圓い環をつくつて、鐃鈸や銅鑼の物々しい奏樂をもつた儀式のすむまで、しづかに並んでゐる。儀式がすむと、故人の遺族や親類の人たちがその環のまへを禮にまはつて、名前を一々帳面に書きつける。私は大小不揃ひな提灯の光がずらりと並んでゐる光景と、その時の妙な氣分とは忘れられない記憶である。

かうして町の人は、今でも同じ事をくりかへしてゐるであらう。私達の學校友達であつたものも、かうしてもう幾人か墓場へ送られた事を私は知つてゐる。私を墓詣りに連れて行つてくれた祖母も姉も、今はおなじやうに、その墓の中にやすんでゐる。

私の心は、このごろ、しきりに死んで行つた人の上にかへつて行く。

無常をおもふ心が、時々、あらたにされる。

そしては、あの西方淨土のあこがれが、とりわけかうした夕暮の諦觀のをりに、丁度むかしのはかない歎息のやうに、今はなごんだ心の上を這ふ。

雪の中の芽

×

朝のうち、急にあたりが暗くなつた。どうしたんだらう、と思ひながら、ぢつと外を見てゐると、何だか白いものが、ふわふわと飛んで來た。何かの紙切れかしらと思つて、見ると、めづらしい雪であつた。雪はひとひら、ふたひら、ふわりと落ちては、すぐ地上で消えてしまふ。その有様は、丁度地の中に入つてしまふやうである。私は雪の降る模樣を、ぢつと見てゐるのが好きだ。あの自然があらはす自在な織模樣、白い小さな片きれの舞踏は、殊にはげしい降りのをりなど、いかにも果て知れぬほど奧深くて、いくら見てゐても見あきない。が、今はそれほどの事もなくて、すぐやんでしまつた。十分間位で。これが今年の初雪であつた。

その雪を見てゐると、私はすぐ此間行つた信州を想ひ出した。あの日本アルプスの雄大な連峰を。十一月の中頃だつたが、雪は勿論既にその連峰のいただきを輝やかに飾つてゐたのだ。

中央線の夜汽車は苦しい。車中の混雜、それでなくても、車中では眠られない自分の性癖には、いつも弱るのだがその苦しみも、日野春から、小淵澤、富士見あたりへ行つた時、すつかり償はれてしまつた。日野春あたりをすぎてやうやく黎明の光がさして、沿線の、いかにも高地らしい樹木の茂み、林のつらなりが、姿をはつきりさせて來て、汽車がしきりに逆行をはじめだした時分、

「富士が見えますよ。」と一人の旅客が言ふと、みんなが左の方の窓をガタガタあけて、眼を後方にむけると、そこにほのかな曙の光の空を背景にして、紫色にくつきりと畫いたやうに浮んだ富士、――實に近く、實に高く、それはもう

山ではなかつた。一つの靈、一つの神性、そして、悠久その物であつた。この春、K君やF君たちと名古屋へ行つた時、富士驛のあたりで、私たちは、眞闇な夜空に仄白く幻のやうに浮き上つてゐる富士をながめて、その幽徹な神祕的な美趣を嘆賞し、私は『夜天の富士』といふ詩をさへ考へた程だつたが、今見る富士は、全くそれと反對に、黎明獨特の銀砂子を交へた白い輝やかしい空の上に、桔梗色のむらさき匂ふ豐かな線をくつきりと印してゐる「曙天の富士」であつた。東京などではもとより、甲府あたりで眺めるよりも、ずつと高く、ずつと崇嚴な趣。これは人物の場合でも同樣で、こちらが高い心境に行けば行くほど、すぐれた人が愈々すぐれて見えるものである。私はまた、私の心境の上から、かうしてなほ高地へ行かねばならぬ人間であることを考へずにはゐられない。

小淵澤、富士見と行くに從つて、パッと朝日の輝きが霧の追はれて行くあとから照り出したその下に、行手の信州の空一帶に、遙かに連る日本アルプスの連峰を、生れて初めて望んだ時、「山、山、山！」ただその一つの單語が、噴泉のやうに胸から迸り出るばかりだつた。私は初めて山を見た思ひがしたのだ。そして、その日本アルプスの既に雪をもつた山嶺と山嶺とは、朝日の光をうけて、薄紅ゐに、絹地のやうに輝いてゐる！

山、山、山――私はたちまち、まだ見ぬ瑞西を想ひ、ニイチエを想ふ。オーベルエンガアデインの高地、そこで生れた永遠囘歸の說を。實に、かうした悠久の自然は人をして永遠をおもはせ、無窮の生命を豫感させずには措かない。

×

信州の空は、驚くほど美しい。この前、甲州に遊んだ時、その空の美しさを嘆美した私は信州に來て、殆んど空ばかりを見てゐた位だつた。その美しい空の下には、進んだ敎養をもち、非常に眞面目な、眞實に人生を考へてゐる人たちが住んでゐるのだ。私を招いてくれた松本詩話會の人たちも、それであつた。私は桔梗ヶ原を越えて、松本に行つ

て、その公會堂で、つまらない、自分の至らぬ心の稚い問題について話したのであつたが、この文化の進んだ國の人たちが、熱心に聞いて下さつたのは嬉しかつたが、それだけ十分の準備もなく、力なくして高壇に立つたものの悲哀と寂寥とを感じたが、殊に、あとでこのおなじ場所で、嘗て西田天香氏が尊い講話をされた事を聞いて、私は人知れず顏が赧くなつた。そして至らないものが至らない事を示したのも、何かの足しにはなるだらうと、自ら慰める外はなかつた。けれども、眞面目な人たちを見、眞面目な人たちと話すのは嬉しい事である。澤山の人と十一時頃までも話してから、俥で淺間の宿へ歸つたが、その途中、私は偶然の事から信州の夜更けの空を見て、そこに思ひがけのない星影を望んだのである。

松本から淺間までは一里ほどある。その間を自動車が通つてゐるが、夜更けたので、俥を呼んで貰つたが、その若い車夫は、途中で蠟燭を買ふ樣子を見ても、人の善ささうな男だつたが、どうした事か道を間違へて、とんでもない處へ私を連れて行つてしまつた。寒いからといふので、諸君が殆んど隙間ない位、母衣をかけてくれたので、外は見えないけれど、いくら行つても行つても、淺間に着かない、夕方到着した時は、自動車だつたけれど、それにしてもこんなに遠い筈はない、それに路が恐ろしく惡くて、ともすると俥がひつくり返りさうになる。どうも樣子が變なので、何遍も聲をかけようと思つたが、車夫を信頼して我慢してゐると、たうとう俥がニツチもサツチも行かなくなつてしまつた。そこで母衣をあけて貰つて下りてみると、そこはもう道ではなくつて、前は一面の河原であつた。石か水か、仄白く浮いてゐる河原のむかうは闇で、その中に、松本平を限る山のつらなりが黒くぼんやりと姿を現してゐる。まはりには、薄が夜風にゆらゆら搖れて、まるで墓場の樣な凄凉な景色だ。邊りには灯影一つなく、唯遠く望んで、河原の遙か下流にちらほらと微かな灯影が幾つかきらめいてゐるのみだ。

「あれが淺間だらう、どうもあの方角らしい、」と私が言ふと、車夫は頻りにペコペコお辭儀して、すみませんすみま

せんを繰返して、「旦那、どうぞお乘りなすつて、」と言つた。が私はなほも、寒い風の中に彳んで、ぢつと空を仰いだ。月のない夜空には、雲がむらがつてゐたが、その間に、一つ、それは何の星だつたか、私の眼に落ちた星があつた。闇のやうな心の中に、一點の星を見出さうとする今の私の內生活の有様は、全く、この秋蕭條のその深夜の、人里はなれた河原のそれであらう。だが、こんな思ひもかけない處で、かうした星を見た事が、それだけ、私には非常に意味深く考へられたのだ。私は思つた、迷へるだけ迷はねばならぬ、この車夫のやうに道を間違へて、とんでもない處へ行くかも知れないが、そこでどんな星を見得るかも知れないと思つたのだ。

車夫は淺間へは一度行つた事があるきりだと言つてゐたが、それからも、もう一度行きづまりの道へ引き入れたりしたので、私は一時は心細くなつて、狐にだまされてゐるのではないかと思つたが、たうとうしまひに自分で彼を案內してやつて、やうやく淺間へ曲る本當の道へ出て、幸ひ宿まで歸り着いたが、その時はもう一時を大分すぎてゐたので、松本から十一時にこちらを出たからといふ電話を受けてゐた宿では心配してゐる處だつた。一里餘りも上の方へ行つたものらしい。が、こんな失敗も、また非常に面白い。此方から望んでも再びとは、あんな物凄い夜の河原に彳んで星を眺める事は出來ないであらう。

二三年も逢はなかつたM君が、突然、私の家を訪ねてくれた。M君は信州の人で、三四年前によく詩の話をしに來た人だつたが、その後、西田天香氏の一燈園に入つて、秋田のT鑛山へ行つて、そこから折々詩を送つてくれてゐたが、今逢つてみると、その變りやうに私はすつかり驚かされてしまつた。もとから非常に純粹な、眞率な心をもつた人であつたが、今靜かにその話を聞いてゐると、そこには昔見出されなかつた人間としての深さ、眞實に生きつつある人の尊嚴が、その謙遜な樣子の中に自から溢れてゐる。一年の奉仕、求道の生活は、こんなにも、高い境地へこの人を連れて行つたのかと、私は驚異しつつ、そのM君の背後に輝いてゐる西田天香氏の人格の力を想つた。

M君は秋田の雪の中に埋れながら、米をといだり、米を搗いたり、薪を割つたりしながら、折々心に浮ぶままの詩を書いてゐたのだ。それから北海道へ渡り、樺太へまで渡つて、始終奉仕下座の生活をして、いたる處で勞働をして、そして到る處で、その寢床とその食事とを見出し得たのである。これこそ眞實の生き方である。私はしみじみさう思ふ。しかも、私にあつては、それはやつぱり單なる知識、單なる想念にすぎないものを、M君は、何の躊躇なく、何の理窟もなく、直にその信念の中に投じて、そこに生きてゐるのだ。私はひと晩、M君の話に耳を傾けた、それはみんな私のこの頃考へてゐる事ばかりであつた。しかも、私とM君との間には、千萬里の隔りがある！

M君が秋田にゐた時の生活の話は、試練の生活として、今の私には、とりわけ尊いものであつた。雪は一丈もつもつて、半年は雪の中に埋められるやうな寂しい處で、觀音經はじめいろいろな經文をよんで、その中にどんな尊い言葉が記されてゐるかを、はじめて知つたといふ。多くの人は本をよむ、然し、本はどんな尊い本でも、その人の心境相當のものしか與へてくれないといふ事は事實である。

かうして――ふりつむ雪と屋根の上からかき落す雪とで窓なんか塞がれてしまふ、上の方に穴をあけて入口にしてある、その洞穴のやうな家の中には、晝でも火をともす、雪をとかして水につかふ――そんな中で、M君の信念はかためられ、强められ、立派な一人の眞實者となつたのだ。

あちらでは、雪が半年も消えないのに、その雪の中で、草木の芽はどんどん伸びて行くさうである。何といふ恐ろしい力だらうと、詩人であるM君は嘆じた。芽は死なない、芽は伸びて立派な若葉となり、害葉となり、花も咲く。そして蟬が、雪の中で鳴きだすのである。

雪の中の芽、雪の中でも伸び出づる芽、――それは、何といふ有難い自然の理法であらう。そこに尊い敎訓があると私は感ずる。われわれはみんなその芽である、われわれの衷(うち)の眞實を求める心、神を求める心、道を求める心は、その

芽でなければならない。今、私がどんな虛僞と偸安との生活をしてゐようとも、自らその生活に甚大な疑惑と不安とを感じながらも、その生活を一氣に打破する勇氣なく、その日暮しの糊塗の生活をしてゐようとも、その一身の革命のまへには、どれだけの障害が横はり、どれだけの犧牲を要しようとも、なほかつ、私のなかのこの求道心、この眞實の生への欣求は、決して滅ぶ事はない。それは一日々々、立派に育つて行きつゝある。去年の私は今年の私でない、昨日の私は今日の私でない。それはたしかな事實である。そして、それが恥多き今の私に、唯一の救ひでもあり、慰めでもある。

M君よりも、比較にならぬほどの煩惱の子である私、M君よりも千倍も業の深い私も、いつかは、眞實に生きる眞實者となる日のある事を、私は信ずる。その信念に勵まされて、一日一日、私は求道のみちを進まねばならない。

清澄を欲す

×

私は先月郷里の方へ歸つて、そのあたりを一巡して、歸京したばかりですが、旅から歸つて見ると今更に東京の生活が、慌しく落着きのないことを感ぜずにはゐられません。かうした生活の中で、あたふたした日を送つて、下らない問題にかゝづらつて、生涯の一大事を閑却しがちだと考へると、衷心から不安の念に堪へません。

出來ることなら、今度行つて好きになつた名古屋か、又はあのなつかしい湖畔の市松江あたりにでも、暫く隱棲して、もつと靜かなもつと落着いた心で、詩や長篇小說を書いたり、自分の研究を進めて行つたりしたいと考へてゐます。たゞし研究といふとえらさうですが、實は私はこれまで不如意な生活をして來た爲め、正式の學校敎育を殆んど

全く受けてゐないので、一般的敎養に缺けるところ多いことを、哲學的敎養を積むに當つて、とりわけ痛感するので、もつともつと勉强がしたいと云ふだけの事に過ぎないのです。

すぐれた才能も、明晰な頭腦も惠まれてゐない事だけは、今更どうすることも出來ないのですが、然し、華かな才氣や、氣の利いた身振りで、人生を淺く、要領よく、しやアしやアと悔もなく過すやうな才人でない事は、そんなに悲しいとは思ひません。それよりその生活にも身振りにも少しの無理もない、極めて自然な、本當に誠實な、心から親しむことの出來るやうな人間になりたいのです。そして、もつと靜かな、もつと淸く澄んだ心持になり、もつと現前の喜怒哀樂に動かされないやうになりたい、と云ふのが、私の切實な祈願です。常に、永遠の相に於て、この人生を見たいものです。今の私は恥かしい煩惱の徒に過ぎません。

朝日新聞から「此頃の心持」を問はれて、かういふ返事をした。それから早くも小一年たつ、愈々益々、私の心は、淸らかに、さわやかに、おほらかに、澄み切つて行きたいといふ一圖の願ひによつて滿たされてくる。

今、燈下に坐して、殘りすくなくなつた今年の日數をかぞへ、しづかにこの一年をおもひ返すにつけても、その事が、鮮かに感じられるのである。外に現れた仕事の上からいへば、今年は非常に貧しい怠惰の一年であつたけれども、心持の上から云へば、今年ぐらゐ自分にとつて意味の深い年はなかつたといふ氣がする。

辛さ、くやしさ、憤ろしさ、この何年といふもの、私が感じて來たものはみんなそんなものばかりだつた。私の心は始終ふるへがちで、始終かき亂され、始終激動してゐた。だが、それもこれも、結局、忍ぶ外はないのだつた。いくら人の辱めがくやしくとも、いくら世の中が憤ろしくとも、耐へ忍ぶ外はない事を知つた。そして、實際耐へた。

けれども、その隱忍の氣持は、あまりに苦しいものである、まるで窒息しさうな心の狀態である。私はそんな暗い氣持が堪へられなかつた。もつと明るい、ひろびろとした心持、そんな心持にならなければいけないと思ふやうにな

つて、私は心を鍛錬することを學んだのだ。心だ、すべて心一つだ。自分の心境さへすすめば新しい世界は展けてくるのだ。人の辱めも世の迫害も及ばぬ高い世界が。さういふ事を知つて來たが、さて、愈々となると、人間はおろかなもので、驚くほど進歩しない。十歩進んだと思つても、次ぎの瞬間には、またちやんと十歩退いてゐる。知力ではよくわかつてゐても、その思慕の境地へは、なかなか進んで行けない。

殊に、我々が人間として眞實に生きるために、何よりも大切な事である、一切の卑しい欲望や、野心を全く征服してしまふことは、なかなか一朝一夕の事ではない。いや、一生かかつても出來ないかも知れない。殊に、それが私のやうな鈍根なもの――人一倍その性格の中にわるいものを持つてゐるものには、難中の難であらうも知れぬ。けれどもそれだけに、愈々自分はそれに努力しなければならない。

私の求めるものが美であつたならば、私は安易な氣持で、自分をあまやかしてもゐられる、自分の魂から目をそらして、いつも外の方ばかり見てゐてもすませる。また、私の求めるものが善であつたとしても、私はまだそんなに苦しまなくてすむかも知れぬ。なぜかといふと、世に謂ふ善などといふものは、それは人間の中の約束から生れる、方便的なものでありうるからだ、それは絶對のものでないからである。だがこの善がさうした相對的、便宜的、習俗的のものでなく、永恆的なもの、不變なもの、絶對のもの、となる場合には、それは眞と云ひえられる。そして、私の念々止み難く求めて喘いでゐるものこそ、この眞である。

眞を求めるものは、眞理の探求者、一意專念の求道者は、苟くも自己を欺くが如き事があつてはならない。私は何よりも、まづ此事をおもふ。

×

山中深く淸麗の響を立てて流れてゐる谿川の孤獨と淸澄との相よ。どうか私もその谿川のやうな心持でありたい。

いつも濁りの波をあげる私のけがれた心も、いつかはあのやうに澄み切つて、さわやかな心になれかしと、日毎に念ずる私である。

山かげの石間をつたふこけ水の
　かすかにわれはすみわたるかも

良寛和尚がかう歌はれた、その透徹した心境は、想望するだに、心往の情禁め得られない。そこまで行くのには、どれだけの天賦と、どれだけの修養とを要するだらう。

だが、私も一日一日と、さうした高い心境へとしづかに歩いて行きたいものである。

×

今は、どんな非難でも、默つて身に受けようと思ふ。激する事なく、反撥する事なく、靜かに耳を傾けたいと思ふ。これが求道者の第一の道である。

一つ一つの詩は、一つ一つの作品は、謂はば一つ一つの罪の懺悔である。もともと罪を負うて生れた人間の身である。生きてゐるといふ事が、すでに罪障であり、悩みであるとするならば、その生きの呻きであり、歎息である詩が、罪せられるのも止むを得ないではないか。この觀念の仕方は、打見たよりも深い意味があらう。

勿論、私はまだ悟り切らない人間である、聖人の道には千萬里遠いところにゐる、あはれな煩惱の子であるから、自分の詩人として、藝術家としての意義と努力――自分にとつては、それが直ちに人間のそれである――とを、全く否定するやうな非難を受ければ、苦痛でない事はない、少くとも不愉快でない事はない。が、それをぢつと堪へたい。ぢつと堪へるばかりでなく、どんな無理解な漫罵に近いやうなものや、個人的反感から出てゐる暴言にも、或ひはその中に眞理を含んでゐないとも限らない、何か自分の氣付かないでゐる弱點を、敵意の本能から洞察してゐないとも

限らないから、それを頭から反撥してしまはないで、それを見付ける努力をしよう、見付けたら、潔くそれを承認して、それによつて自分を戒めて行かう、若し全然何の致ふるところもないものならば、そのまま忘れてしまはう、かう私は決心して來た。そしてこの決心は、はじめのうちこそ、それが無理な努力であつても、さうしてゐるうちには、だんだん本物になつて、ちつとも無理でなく、自然なものになる時もあらう。

かう考へて、絶えず自分をいましめて來たのが、この一年の修養であつたのである。そしてまた、丁度、私がさう考へて來るやうになつたこの一年ぐらゐ、私に對して、いろいろな非難や攻撃のさかんだつた事もない。

私は今自分の事も、人事のやうに、いくらか見てすごされるやうになつた。少くとも、昔のやうに一圖に憤つたり、激昂したりするやうな氣持の無くなつただけは、自分でもうれしく思ふ。

孤獨に徹せんとする心

×

寂しい日が續く。

いつも孤獨を求め、寂寥に親しむ性癖でありながら、時とすると、寂しくてたまらなくなる。こんなところにも、やつぱり矛盾のある自分だ。

けれど、その寂しさは、外的の事情から來るといふより、内的の事情から來る。つまり自分に對する不信、疑惑から來るのである。自分の力を信じ、自分の仕事の意義を確信してゐる時には、心が張りつめてゐて、決して寂しいなどとは感じない。

心の寂しい日は、心の弛緩した日である。自己不信は心の弛緩を來し、ひいては人を怠惰に誘ふ。怠惰はたしかに罪惡である。從つて自己不信もまた罪惡であるといふ三段論法が成立ちさうである。

然し、こんな寂しい日にも、私は敢て外面的な努力によつて、自分の寂しさを消さうとか、まぎらさうとかいふ氣持は、少しも起らない。そんな事は、却つて反對の結果を來すに過ぎないから。賑かな人中に出ると、一層寂しくなる。そこで見出すものは、人間の魂と魂との接觸ではなくつて、ほんの表面的な談笑や交渉であつて、しかもその交渉の中には、隨分いやな要素も澤山まじつてゐるのである。社交の中では、寂寥は一層徹底したものとなる。孤獨の隱栖は、なほ世間を故鄕に思はせる瞬間があるが、社交の中では、人間生活の縮圖が、敏感な心を一層の孤獨感の中に投げ込む。そしてその孤獨感が、その彼のエレメントの中での、彼の安住の地での自由な寂寥の甘美を戀ひ慕はしめる。

うちとけた友達と、隔意のない談笑に打ち興じ、精神的な交渉を有つた時でも、そのあとでは一層ひどい寂寥に襲はれる事もあるのだから、社交生活が孤獨者にとつて、堪まらない後味(あとあぢ)を有つのは言ふまでもないことである。

古來の賢者や哲學者や詩人が、揃つて孤獨を讃へ、寂寥を求めたのは至當のことである。社交の中では、人間のより低い方面が働くのだが、孤獨の中では、眠つた靈も眼を覺ます。孤獨の中で、靈は落着いて平安を得るばかりでなく、力あるものは、力の意識を感じ得られる。孤獨の中で、自恃の念を失ふほど、たよりなく、心細いことはないであらう。だがその時、一時的に糊塗する事なくして、ぢつとそれに堪へて、再びその不安の過ぎ去るのを待つことが、何よりも必要の事である。

かう私は考へて、この寂しい時、一層その寂寥に徹しようと思ふ。寂しいと感ずるうちは、まだ眞に孤獨に徹し、寂寥に徹してゐないのである。

×

人に親しみ、人を信じれば裏切られる。誰でも、さうした苦い經驗の一つや二つ有たない人はないだらうと思ふ。人間は自分の一番信じ、一番愛したものから、一番手ひどく裏切られる。そんな例は歴史上にもザラにある事だし、自分達の周圍には、なほ更ら多い。客觀すれば、裏切つた方にも止むを得ない事情があつて、一概に責める事は出來ないものだが、裏切られたと思ふ當人には、そんな客觀の餘裕はない。結局、双方から自分の言ひ分を立てて、互ひに非難し、誹り合ふといふ痛ましい成行となり勝ちである。

人と人との交渉を思ふとき、なぜ互ひにもつと了解し合ふことが出來ないのだらうかと、悲しい氣持になる。さうかとて、いつも警戒して、鎧つたやうな態度ばかりとつて、人に對するのは、あまりに寂しいことである。どんなに人に裏切られても、折角の好意があだとなつて返つて來ようとも、やつぱり親しい打ちとけた氣持で人に對したい。

他人に對して、不滿や憤りを感ずるのは、自分が他人に對して求めるところがあるからのことだ。何の求めるところもなければ、從つて、失望することもなく、不滿も、不平もない。少しばかりの好意を大きく見積つて、錢勘定のやうに清算ばかり欲してゐるやうな、そんな事は卑しむべき事である。それは恩を賣るものの事で、その好意は結局好意ではない。それは他人のためでなく、自分のためにした事なのだから、そんな事を考へたら、不平を言ふまへに、まづ恥ぢなければならないだらう。と言つても、それだからとて、好意を受けた人の方で、恩を仇にするやうな仕打をするならば、それも恕されない事である。然るに現實世間では、好意を與へた人と受けた人との關係は、大抵氣まづいものになるやうである。人間には、自分が恩惠を蒙つてゐると感ずる人が、一番煙つたく、その人の存在に一番壓迫を感ずるといふ本能がある。自分に對して、一番惡聲を放つ人は、きまつて、自分が何等かの意味で、多少でも恩を施したと思つてゐる人間であると云ふことは、一見皮肉な逆説のやうに思はれるけれど、實は人生の正しい觀察であるのだ。

こんな事を考へると、寂しくつてたまらなくなる。けれども、その絶望に打ち挫がれてはいけない。かうした極端な否定とペシミズム――そして、これこそ人生の深い觀察の結果である――とを通過して、そこから一道の光明を見出さなければならない。自分を正しく支持しようとするものは、この努力の上にその全力を向ける。

靜動二途

一

今日はすさまじい風であつた。この武藏野の都では、先づ春のおとづれを告げるものは、そよ〳〵と吹くやはらかな東風（こち）ではなく、埃を面に叩きつけ、窓硝子をなぐり飛ばし、山の手あたりの安普請の二階家を舟のやうにゆら〳〵させる荒つぽい風で、そんな日郊外からでも東京の空を眺めると、黄色い塵煙が厚い層を築いて、眞に文字通り黄塵萬丈の異觀を呈してゐる。夕刊の告げるところによると、さうした風のために、今日は壓し倒された家屋もあるといふ。そして今日のこの風は、また今の東京の人心をも象徵してゐるやうに思はれる。政界に於ては、政爭の醜その極に達し、黨人身上の問題の摘發となり、泥のなすり合ひといつたやうな有樣で、其間彌次といふものゝ怒號は、この風の唸りよりも烈しい。街頭では自動車が横行して、無慘にも花のやうな令孃を轢き殺し、惡家主は家屋の拂底につけ込んで借家人を虐む。サボタアジュの流行語火の如く消えて、不景氣風吹き廻つていつ止むとも知れず、曾て表に湧き立つた人心の險惡は今や底に湛へられて、何處から何處へともなく、たまたま無氣味な風聲鶴唳が稻妻のやうに閃いて行く。今日のこの世上の有樣を觀た時、吉田兼好はならびが岡の庵に隱れ、鴨長明は外山の方丈に「月影は入る山の端もつらかりき」と詠ずるであらう。

この生暖く喧しい風の日に、私の書齋は何といふ靜かなことであらう。深く垂幕をめぐらしたれば、さのみは埃も來らず、玄關とてもない、文字通りの陋屋ではありながら、立てこめた二階家に圍繞されてゐるお蔭には、恐ろしく時代のついてゐる癖に、こんな風の日は頗る安全第一で、さらに吹き倒される心配もない。その陋屋の狹苦しい書齋にひとり坐して、無念無想、たゞ茶を啜り、煙草をふかして綠の影をおとす燈火に對してゐる、この夜の私は何といふ靜かな私であらう。昨日までは、恐ろしく響きの强い言葉を以て物を言ひ、殺氣立つたと思はせるやうな振舞をもした私が、文壇などといふものを千里の遠きに置き忘れて、快適の微笑のおのづから口角に上るとは、私の心からだけはこのすさまじい風も落ちたのか。靜かだ、外の風ももう殆ど止んだやうだ、たま〳〵流れ彈のやうに硝子窓に外れて行く音ぐらゐなもので、夕方一寸散步に出た時、薄い月の下を雲が慌しく走つて、風は濕氣をもつてぽつりと二粒三粒雨らしいものが面を撲つたのに、まだその雨にもならぬらしい。この靜かな夜の靜かな心をもつて、私は何をしよう。先き頃露店で僅な錢で購つて來た『芭蕉翁文集』でも繙かうか。いや、この靜かな心に浮ぶが儘に、とりとめのない、くさぐさの心象を書きとめるとしよう。

二

外はたうとう雨になつた。そのばら〳〵と窓にかゝる音を聽けば、しめやかな〳〵昔の心が蘇つてくる。長い間の傳統となつてゐる、私の衷の日本人的な心持が動いてくる。『閑吟集』の、「木の芽春雨ふるとても〳〵、なほ消えがたき此の野邊の、雪の下なる若菜をば、今いくかありて摘まゝし」や「梅花が雨に。柳絮は風に、世はただ噓にもまるゝ」や、まだ少し時は早いけれども、隆達の小唄「面白の春雨や、花の散らぬほど降れ」などの句が自づと口にのぼつてくる。

冗長なバラッドの多い西洋の民謠に比べて、我國の民謠は何といふなつかしい響を我々の胸に傳へてくれる事であらう。和歌、俳句、さうした短小な詩形に盛られた古い日本人の心はいつまでも〳〵若い日本人の心に昔ながらの響を喚び返す。殊に、小唄、俗謠、俗曲の類に至つては、日本人のセンティメントを最も率直に、最も端的に表現してゐるので、讀む毎に、誦する毎に、案を拍つて三嘆せずにはゐられない。『松の葉』の如き人皆これを知る、私はこれ迄殆んど閑却されてゐた『閑吟集』一卷に世の注意を喚びたいと思ふ。

「うしろ影を見んとすれば、霧がなう、朝霧が。」

「名殘惜しさに出でゝ見れば、山中に笠のとがりばかりが、ほのかに見え候。」

「何せうぞくすんで、一期は夢よたゞ狂人。」

「人の心は知られずや、眞實心は知られずや。」

「筆で一度いうて見う、いやならばわれもただそれを限りに。」

「世間はちろり〳〵に過ぎる、ちろり〳〵。」

「思へど思はぬふりをして、しやつとしておりやるこそ底は深けれ。」

「宇治の川瀨の水車、なにとて浮世をめぐるらう。」

かうした作例を擧げると、いくらでも書いて行き度くなるからこれで止めるが、私がこの『閑吟集』で特に面白く思ふのは、その複雜不定の形式を雜然とつらねてゐる事である。朗詠の名殘と思はれる「靑風殘月雨聲となる」といつた類のものもあれば、今様くづしもあるし、隆達小唄と相通ずるものもあれば、「夢幻や南無三寶」とだけですましたものもある。もつともこれは編者がその記憶してゐる句だけを書き留めたからでもあらうが、一體にその自由な詩形は(そしてその爲めに此集は是迄の小唄愛好家に棄却されたのであるが)我々新しい詩人に取つては大變參考になると思

ふ。殊にリズムの研究に全力を傾倒してゐる福士幸次郎君には、就中有益なものだと思つて、推奬して置いた次第である。

三

七七七五といふ今の普通の俗謠形を超越したものには、なほ近世の「越後甚句」がある。福士君は多分これが今の俗謠の原形であらうと言つた。心に浮ぶが儘を投げ出したやうなところに反つて力がある。「甚句は越後の甚句、越後甚句は世界の花ぢや」と誇つてゐるのも無理はない。

「いとしうて目を放されぬ、かへて見る人ないそへか。」
「今夜の夜も夜中、天の川原が西東。」
「來た夜のしるし、柳でもさせ井戸端に。」
「殿は川狩に、鮎になりたい山川の。」
「いやなら暇、御難つけるな人の子に。」
「花咲きや實なる、實なる合點なら殿ごんし。」
「劍坂の石も、殿が踏んだかなと撫でて見る。」
「思ひきりや切れる、鐵の鎖も切りや切れる。」
「飯岡の田の中淸水、又も飲まれて戀し水。」
「盆は來い正月はいやだ、殿とわたしの年がよる。」

また稀には上田敏氏の激賞せられた「見送りましよとて濱まで出たが、泣けてさらばが云へなんだ」の如き、よく整

つたものもあるが、一體にその原始的の調子は普通の俗謠體よりも一層自然な氣がする。

私は例へば「梁塵祕抄」中の「思ひはみちのくに、戀はするがに通ふなり、見染めざりせば中々に空に忘れてやみなまし。」の典雅や白氏の詩から出た小謠の「をりしも秋なかば、三五夜中の新月の、二千里の外までも、心しらるる秋の空、雨はまた瀟湘の、夜の哀れぞ思はるる。」の華麗などをも愛するものではあるが、どちらかと云ふと、この原始的な素朴な北國人の聲の方が好きだ。然し、いづれにしても是等の民謠こそは、我國の詩歌の精華であると敢て斷言して憚らない。

曾て私は廿歳を越えるか越えぬかの嘴のまだ黄色な身をもつて「吾人は須らく日本人を超越せざるべからず」などと、樗牛まがひの文章を日記に書いたりして、大に歐化論を唱へた（勿論日記の上でである）けれども、十年の後の此頃では、とりわけつくぐ〵と、自分も一個の日本人に過ぎないといふことを感ずることが多い。或る場合には西半球から來た多くのものに本能的な嫌惡を禁じ得ないことすらある。箸とフオオクとを同時に見た時には、二本の指でつまんだ昔の名殘だと思はれる日本人の箸の上品さに比べて、曾つて五本の指でつかんで食つた事をまざまざと白狀してゐるフオオクの民族は何たる野蠻人だらうと思つたりする。また油繪のしつこさを見ては墨繪の枯淡を喜び、珈琲を飲んでは綠茶でその口直しをする。私も依然日本人だつた。然しながら、私もなほ黑船渡來後、思想上の黑船、卽ち自然主義並に社會主義渡來後の日本人である。私の心の舌も生臭いものでないと承知出來ないやうにもなつてゐる。今の多くの詩人は問はず、古來の詩歌に於ては、歐羅巴を遥かに凌駕する我々も、小說に於いては彼の足下にも寄り付けない。綜合を得意とする我々は、分析には最も下手だ。私はこのまゝで滿足出來ないのである、私は日本の民謠の價値を讃へる時、今日の我が文壇の徒に小器用な小說のことを思ふ。

四

私は恐ろしく人間臭い事が好きである。花鳥風月を友とすると云ふやうな境地は、私には、想像も出來ない事だつた。私の詩を讀んだ人は、私が靜かに自然を樂しむとか、風物の畫幅中に自己を沒却するとかいふ事は極めて稀で、常に生の惱みを歌ひ、七情の苦に輾轉して、常にたゞヴァイオリンのやうな張り詰めた音ばかりを出してゐるのを見て、これを愛し、これに同感してくれた人も多いが、またそれを慊らなく思つた人も多からう。併し、善かれ惡かれそれは私の性分だ、外にしやうもないのだ。昆蟲の觸角のやうな過敏な心をもつて、この惱みの多い人生に面してゐる私だ。

うれひある胸にうつるは
いとふかきその憂ひのみ
うるはしき自然のいろも
いかでその嘆きを消さん

と昔言つた通りだ。自分の詩が本當の詩なのだ、私はいつもこんな傲慢なことを聲高に自分に言つたものだつた。併し、私ももう三十歲になる。三十歲といふ歲にもなつて見ると、私のやうな恐ろしく主觀的な人間も、不思議な事には、いつしか客觀的に物を觀得られるやうになつて來た。自分で言ふのは烏滸がましくはあるが、感情も落着いて、物の觀方にも餘裕が出て來た。いつ迄も此の小さな自分に執しないで、自分といふものを自然の中に投入し、また人間も自然の一斷片として見る事が出來さうな氣がして來た。そこで私は小說を書いてもいゝ時が來たと自分に言つたのであつた。

思ふに、情熱を誇るうちはまだ人間も未熟なのだ。有り餘る程の情熱を深く抑へて、世をも自(おの)れをも人ごとのやうに靜觀し得られる心境に達しなければ一人前とは言へまい。西行や芭蕉の如き人々は、思ふに有り餘る情熱に身を燒かれた人であらう、しかもその情熱を克服して、あの靜かな悅びの生活に浸ることの出來るやうになつた人であらう。私はあの人達の作品を讀む毎に、つく〲とこれは出來上つた人だ、仕上げの出來た人だなと感ずる。そしてその閑寂を愛し、風雅を友とすると云つたやうな、一種法悅に近いやうな心境をそゞろに羨ましく思ふのである。然し初めから情熱なく、熱意なく、單に花鳥風月を弄ぶ風流人に過ぎなかつたり、言葉の細工人に過ぎなかつたりしたのでは、てんで問題ではない。それのみならず、また我々はいかに西行や芭蕉を愛するとは云へ、また彼等の心境に深い敬意と同感とを拂ふとは云へ、今の世にあつては、我々の行くべき途はつひに西行や芭蕉の踏んだ途その儘では決してない筈だ。我々はトルストイといふクワスをも嘗め、ドストエフスキイといふウオツカをさへ飲んだ。古日本人の世界の單純と閑寂とを憧憬する程に、我々は複雜となり、動亂に身を處してゐるのだ。餘りに早く老い込んで、生悟りに悟りすますのは危險である。私は時と風雅と寂びとの世界に休息して、靜かな悅びを味はひつゝも、更に勇を皷してもつと〱複雜な恐ろしい心の世界に飛込んで行き度いのだ。

私の伴侶に言ふ

良人からその妻に宛てて、公開狀を書くといふやうな事は、かなり勇氣の要る事である。

わざとらしいと云ふ事は別としても、それはその當事者が、餘程進んだ心境に行つてゐない限り、厭味に思はれたり、滑稽に思はれたり、あつかましく思はれたりする。それはデリケエトな心の人には、かなり羞恥感を伴ふ事でな

ければならない。とりわけ日本的な氣質と趣味とにとつては、全く適應し得られない事に思ふ。けれども、そんな因襲的な躊躇や顧慮を排して、十分オープンリイになる事も、また惡くはない事である。殊に、われわれが社會に立つてゐるのは、いはば不斷の試驗場に臨んでゐるやうなものであるから、この試驗をも私は受けて見ようとしたのである。

だが、それにしても、どうして私などにこんな事が頼まれたのだらう。私にはその理由が分らない。社會の片隅に、蝸牛の殼のやうな巢をかまへて、おとなしくすツ込んでゐる自分たちは、どの點から見ても、社會のセンセイションに訴へる可能性はなささうだから。別に何か好ましからぬ問題があると云ふのでもない。では、家庭圓滿といふ點から來たのだらうか。もし、それが普通の意味の、さうした幸福の代表に擧げられるのだとすると、それは當らない。然しいろいろな試練を經て、やうやくに純化され、破綻すべくして破綻せず、反つて互ひに本當の理解にまで到達したといふ夫妻のそれに、多少でも近づいて來たといふ點でならば、それは多少の意味がある。私も願はくば、さういふ純化された愛と理解とに到達したいと思ふのであるから。

ところで、妻に呼びかけるとすると、まづ、その二人稱の稱呼に困つてしまふ。いつもオイといふ間投詞で用をすましてゐるのだから。が、今はまづかりに、おまへと呼ぶ事にして、彼女に少し私の言ひたい事を言ふ——

——よ。おまへは僕とは全く反對な人間だ。それでよく一緒に生活してゐられると、時々不思議になるくらゐ違つてゐる。

さき頃、エミイル・ルカといふ墺太利の詩人哲學者の"Grenzen der Seele."といふ本を讀んだら、その中に人間をグレンツメンシュとミツテルメンシュ(假りに極端人、中庸人と譯しておく)とに分けて論じてあつた。面白い見方だと思つたが、さて、そんなら僕などは、そのどちらだらうと考へて見ると、どう見ても中庸人ではないやうだ。ところで極端人、中庸人などと云ふと、極端人はえらくて、中庸人はつまらないやうに思ふ人があるかも知れないが、それはさう

云ふものではなくて、ただその人の特質を云つたのに過ぎないのである。これはフイヒテに對するスピノオザ、ベエトオヹンに對するバッハと云ふ風に對立させてあるのでも分るだらう。だから、自分のやうな平凡な人間でも、遠慮なく自分は極端人であると斷言していいわけだ。

そんならなぜ極端人であるかといふと、それは僕のこれまで踏んで來た道、生きて來た狀態を見ても分る事で、いつどうするか分らない危險性を十分有つてゐる事から言つても、大きな矛盾を心に有つてゐる事から言つても、極端から極端に走る烈しさから言つても、とりわけ危險きはまる極端人であることを、自分でも氣が付く。安全第一に此世を渡つて行くやうな、圓滿無事な人には、今更どう考へてもなれさうにない。その事は、一緒に住んでゐるおまへが一番よく知つてゐる筈だ。

僕の內部には、確かに二つのものが、常に相對してゐる。大きく、善と惡——と對立させれば、特に僕だけがさうなのではなくて、誰れだつてさうではないかと云はれさうであるが、それが僕には特に激烈なやうに思はれる。が、それよりも、極く卑近な日常生活の些事に現はれる矛盾撞着が、よく僕のその困つた人間である事をよく示すだらう。それが僕の性格を複雜なものにし、人に誤解される原因ともなつてゐるのだ。ところが、その點で、おまへの方は、全く單純で、一本氣で、矛盾がなく、そして何よりも——徹頭徹尾の善良さだ。

長い間、自分ほど善良なものはない、自分は實に善人だと信じ切つてゐた僕は、その實その善良の半面に、實に惡い分子を多分に有つてゐる事——皮肉な意地惡さや、復讐心や、憎惡心の强い事や、さうしたいろいろの惡は、隨分强く僕の心の中に根を張つてゐる——それが年とともに、はつきり分つて來て、自分は業の重い人間なのだ、救はれ難い人間なのだと思つて來たのだが、その自覺にはおまへとの結婚生活があづかつて力がある。おまへといふ人間のあまりの善良さには、時々驚嘆する位だ。それに、おまへには全く矛盾といふものがない。物を皮肉に考へるところが

ない。何事でも、明るく明るく考へようとする、自分に都合のわるい事は、わざと目をふさいで見ないで、わるくいへば、丁度獵師につかまへられさうになつた猿が、目の上に手を當てて、相手を見えなくして、それで安全になつたつもりでゐるやうな、愚かなほど面白いところがある。おまへは幸福なオプテイミストだ。ところが、僕と來ては、生れながらのペシミストである。何事をも惡い方面ばかりを鋭く見る。物事を暗く考へて行く。勢ひ、皮肉にもなり、消極的にもなる。その點で、僕よりかおまへの方が確かに强者で、より多くの生活力を有つてゐると云へよう。おまへは確かにすばらしい生活肯定者である。

こんな處でこんな言ひ方をすると、何だか滑稽な氣がして仕樣がないけれど、まあ思ひ浮んだ事だから書くが、おまへがより多くドン・キホオテ的だとすれば、僕はより多くハムレット的な人間だ。僕は、とつおいつ、思案のうちに一生を過ごしてしまふやうなタイプの人間だ。だがさう言ひ切れないところが僕だ。僕にはこの反面もまたかなり强いのだ。ドン・キホオテ的な點でおまへにまけない程のところがある。第一、僕がドン・キホオテでなければ、おまへと結婚なんかしてゐないだらう。ところで、困つた事には、僕のかうした二面は、始終入れ替つてゐるのだ——いろんな點で、相反したものだが、僕の心の中では一瞬間毎に入れ替るのだ。それで、その一面だけを見てゐる人は、思ひがけない處で背負投げを食つてしまふ。おまへも今だに、その背負投げを食つては時々腹を立ててゐる。これも僕の持つて生れた業だらうと思ふ。

おまへと僕と、おまへの女友達との間に數年前に起つた、今なほ忘れ得ない一つの事件の如きも、その背負投げの最大のものであつたのだ。その事件は僕にとつては生涯の運命を決すべき重大な事件であつた。これを客觀的に見れば、むしろ滑稽な愚かな失錯と云ふだけに過ぎないだらう。しかも僕とそしておまへとにとつては、それは靈のめざめともなり、墳墓であつて同時に復活である程の意義をもつた事件なのだ。そして、それこそ僕がかのストリンドベ

ルヒの如く、自分の死體を洗ふやうな心をもつて、一日も早くこれを書かなければならぬ宿命的の事件なのだ。それを、どういふわけかは知らないが、どうかして僕を傷つけたいといふ惡意で充滿してゐる、昔の僕の友達が、いつだつたか、ある雜誌に面白づくな雜錄に書いて、さんざ僕のことをこきおろしてくれてゐたといふ事で、僕はそれを讀まなかつたが、おまへは早速讀んでひどく昂奮してゐたね。そしてその雜誌に、その雜錄に對する感想のやうなものを送つた、僕にこつそり隱して、――そんな場合、僕に相談しないで、自分のしたいやうにやると云ふのがおまへの流儀だ――ところでそんな事は、新聞記事の取消文と同樣な効果をもつもので、反つてそれまで氣付かずにゐた人の注意を喚起するのである、そして折角變名であつたその記事の主人公が、何人であるかを、十分すぎるほどに、皆に合點させるといふわけだから、僕としては苦情を言はねばならぬ事なのだよ。だが僕はもうそんな事で、おまへをとつちめるといふ氣はしなくなつてゐる。それでいいと思ふ。どんな事を言はれやうが、それは結局その言つた人自身をあらはすにすぎぬ。だから、その悲慘を通り越して滑稽な人間が、僕自身であると、全世界の人がすつかり知つたところで、僕は一向何の痛痒も感じないのだ。そこで、おまへの例の遣り方を知つた時も、僕はまた、「やつたナ」と思つて、微笑したばかりだつた。

その僕の昔の友達は、僕の事件に、頗る明快な解釋を施して、結局、僕を女性に何のチヤアムをも有たない憫然な男として、僕のみじめ極まる貧乏と共に、大いに憫んでくれてゐたさうであるが、それを聞いて、僕は破顔一笑した。人間は正直なもので、そしてまた結局可愛いものだと思つたのだ。世には何の反省もなく、女性から女性へと轉々として、生活を享樂して、何の良心の咎めも感じない人も尠くはない。僕はそんな人を今では少しも非難したり咎め立てしたりしたい氣持はなくなつてゐるが、然しかりにも妻のある男が妻以外の女性に心を動かした場合には、そこにどれだけの苦悶があり、どれだけの躊躇狐疑があり、どれだけの心の爭鬪がなければならぬか、それを僕は實によく

知つてゐるのだ。その苦い盃を滓まで飲んだつもりだ。けれども、その友達にとつては、その女性を得さへすれば立派な男で、然らざれば悲慘で滑稽な人間なのだといふ。實に理義明白で、極めて論理的である。その人にとつては、道德觀念や、とりわけ人間的な眞實の愛情などいふものは、全く沒交渉なものであるらしい。それが、今の世の人心であらう。すすんだ近代人の心なのだらう。

そこで、その親切な友人は、その結果から推斷して、僕を日本一のみにくい男であるとして、日本一のふられ男といふレッテルをはつてくれたのださうである。立派な友情である。何しろ日本一と云へば、惡い方だつて、これでなかなかさうは容易に許せないものだから、すばらしいと思ふ。だが、親切序に、いつそも少し奮發して、いつそ世界一と銘打つて貰ひたかつた。それだけは遺憾に思ふ。

僕は今、さう思つてゐる。貧乏である事、みにくい人間である事、みじめな人間であるといふ事、それは世俗的な考へからこそ、悲しむべき事であるかも知れぬが、本當に生きんとねがつてゐる人間にとつては、却つてどんなに幸福であるか知れないと。

人間が靈性にめざめて、人生の眞實に思ひをひそめるのも、道を求める志を起し、一念發起するのも、つひに悟りの道に入り得るのも、さうした人生の不如意と、運命の試練とに漂うて、本當の寂しさを知り、一切のものの空なることを觀ずるからの事ではなからうか。

そしてその點で、さうした惠まれないといふ事こそ、容易に世俗的な誘惑を斥け得られる天與ではないだらうか。

僕はさう思つてゐる。それゆゑ、僕はどんなに嘲られようとも、自分の貧しさや、みにくさを少しも恥ぢようとは思はない。貧乏を標榜したくはない、が、今の文學者にとつて、それほど貧乏が恥づべき事だと敎へられては、奇異

の思ひを抱かずにゐられないのだ。だが、僕は自分が一般の人に思はれてゐるよりも貧乏だといふ事を、天下に吹聽して貰つたのは、別にわるい事でもなからうと思つた事である。

ただ、それにしても、僕はそれを誇るわけには行かない。僕は凡てに於て、隨分まだ不徹底なところにゐる。それは恥かしい。例へば、貧乏にしても、貧乏に徹せず、みにくさにしても、みにくさに徹せず、中途半端なところにゐる。凡ての點に於て、平々凡々な十人並のところを彷徨してゐるのだ。それこそ、僕の悲しみであつたのだ。

だが、然し、それもいい。僕は今も昔と違つて、自分の平凡に安住する氣持になつてゐる。一日より一日と、世俗的な虛榮心や、名譽心を離れて、純化されて行きたいと思つてゐる。

ところで、その世俗的な虛榮心のない點では、おまへは全く惠まれてゐる。僕などは、あの大きな邸宅に住んで、電話などを引いてゐる友人から、そんなにも嘲けられたといふこの小さなみすぼらしい家が、嘲けられた爲めではなく、ずつと前からの事だが、時々いやになつて、何處かもつと大きな家に行きたい。こんなケチくさい狹苦しい家に住むのには、もう倦きたと言ふ。その癖、そのすぐ後で、無理算段をして、高い家賃の家に、堂々たる門戶を構へて見榮を張るなどは、滑稽で、醜惡だと思ふ癖に。これではどつちが本當だか分らないだらうが、事實は、兩方とも本當なのだ。それが、例の僕の困つた性質なのだ。

ところが、かうした僕とは違つて、おまへはこの狹くるしい家を、この世で無二の棲家だと思つて、喜んで、始終何やかやと手入れをしたり、いろんな道具をゴタゴタ買ひ込んで、飾り立てたりして、滿足しきつてゐる。おまへは自分でもよく言つてゐるやうに、貧乏性だ。貧乏に適合してゐる。全く、こんなにも都合よく貧乏に調和してゐる女は、一寸外にないだらう。だから、まあ、かうやつて今日まで生活して來られたわけだ。その貧乏性な事は、例へば少し金が手に入れば、それをすつかり使つてしまはないうちは氣がすまないといふ風なのだ。もつとも、この點では

僕も同樣だ。そこで二人で、いつもピイピイいつて、貧乏世帶を張つてゐるわけなのだね。然し、僕はこの方が氣持がいいと思ふ。貧乏を此上もない恥辱として、擯斥し、嘲笑して、自分の心にもない事を書いたり、魂を賣るやうな恥かしい行ひをして、大枚の金を得て、その力量を誇つて、自動車を乘り廻はしたり、待合入りをしたり、溫泉地で豪遊したり、賭博をしたりするやうな事は、僕は何よりも嫌ひだ。わるいとも言はないが、ただ、僕の柄でなく、僕の趣味でないのだ。その點では、おまへにいつも賞められてゐるが、然しあの人達は、反つて、僕たちのやうな生き方を一番輕蔑してゐるのだよ。（某婦人雜誌より妻に與へる公開狀を求められて）

作者として語る

私はこの私の初めてのロマアンを、『相寄る魂』を世に送り出すに當つて、何と云ふ不思議な錯雜した氣持であらう。「誇りと自信とをもつて」などと事もなげに言ひ得られるならば、どんなに幸福であらう。誇の裏には羞らひを、自信の底には疑惑を、歡びの蔭には憂鬱を、私の心は感ずる。そして、思ふに、これが作家の本當の心ではあるまいか。殊にその心血を傾倒した處女作をもつて世に現はれる作家の心臟は、確かに嫁衣を纏ふ處女の胸のやうにわななきふるへてゐるに違ひない。然し、多年その心裡にわだかまつてゐた一つの思想が、一人の人間の生涯が、その人間をとりめぐる多くの人間の生活が、つひに一つの纏つた世界となつて生れ出でた時、長い長い陣痛の後に、兎に角人並の子供を我が兒として一瞥した產婦のやうな安心が、その疲勞した身心に漲るのはまた無理からぬ事である。その取扱つた悲劇の餘響が、なほその衷心に憂鬱な調べを奏でてはゐるとしても。

この作に就いて、今、作者として私は何を言はう？　非常に澤山言ふべき事があるやうでもあり、また何も言ふべ

き事がない氣もする。恐らくこの後の方が本當であらう。凡ては作品の中に盡きてゐる、作品が凡てを語つてくれるのだ。その外に何も言ふ必要はない筈である。もしさうでなければ、その作者は失敗なのだ。とは言へ、母親は自分の子供に就いて語らずにはゐられないものである。その上、長い事私の勞作を心に懸けてくれてゐた愛友に、いつも怠つてゐた感謝の言葉に代へて、今日の感を、この機會に際して送りたい氣もするから、聊かこゝに書き記す事にする。

この作品は長い根差しを有つてゐる。今にして、初めてこの作品の着想を得た日の事を顧ると、我ながら隔世の感がある。それはもう十年の昔となる。青葉の一番いい時節、宛かも初咲きの花のやうな匂はしい時に、既に世路に痛み傷いてゐた私の魂の底から、この作品の原形の著想は湧き出でたのであつた。それは謂はば早春の芽生えのやうに一點の綠に過ぎなかつた。今とは比較も出來ない程單純ではあつたが、しかもなほそれは酵母であつた、それは私の詩集に蒔き散らされた愛の言葉となり、つひに書き上げられなかつた一篇の小説ともなつたのであるが、その未熟な斷片が、今日のこの尨大なロマアンとして三十歳の峠に立つた私の前に置かれるのを見た時、

「たうとう！」と私は長い旅路の後のやうに、胸の奥から嘆息をつかずにはゐられないのである。

私の『靈魂の秋』を讀まれた方は、

ああ、破船の後ただ二人殘りし男と女との戀！

破られたる船に海水はたのしく押し入る、

やぶられたる胸に愛はたのしく忍び入る。

と云つた文句をもつた一つの斷片を記憶せられるであらう。私を限りなく惹き付けるものは、實にかやうな愛である。曾てドストエフスキイの『罪と罰』で、ラスコリニコフとソニヤとの愛が、私を感動せしめたのも、それが二つの碎か

れた魂の互ひの救ひであつたからである。Liebe と云ふ言葉、それを私は戀と愛との二つの言葉に譯し分ける事を欲しない、これを二つに分ける時、二つともそれは不完全なものとなる。眞の愛は互ひの救ひでなければならない、よし外面的には悲劇と見え破滅と見えても、それは調和であり、建設である。それは抽象的の愛でなく、もとより世俗の戀ではない。そしてこの愛の祕密を知る爲めには、人は多くの犧牲を拂はなければならないのである。碎かれた魂にして、初めて純眞の愛を感得するのである。

この作品は、その原形に於いて、二人の難破した男女の、二つの碎かれた魂の物語であつた。彼等は痛ましくも人生と呼ぶ暗礁に難破したのである。その魂と魂は、互ひの夢想に欺かれて、男は男子の幸福、即ち功名野心に、女は女性の幸福、即ち結婚に生きようとして、しかも現實地上の法則に躓き、互ひに痛み傷ついてのち、離れ離れた二つの魂も、ここに相寄り、相救ふ。互ひの罪と互ひの苦しみとを分ち分たれる事よりは、互ひの不幸に慰めの涙を注ぐ事よりは、より美しい事が人生にあり得ようか。ここに眞の愛がある。私はそこに、ただそこにのみ、神聖なる結合を見出すのである。

かかる愛のために一篇の讚歌を書かう。から私は心に誓つた。今、私の誓ひは果されようとする。これは私獨自の愛の哲學を說いたものである。これこそ私の愛の讚歌である。私はこの中にさまざまの戀の形式を描いた。それは夢のやうな憧憬であり、火のやうな同情であり、息苦しい性愛であり、つひに、凡てを擲つて、ただその愛人によつてのみ生きようとする愛の極致にまでも到達する。しかもかかる愛に取つては、ただ一つの歸結しか存しない、それは——死である。私はこゝに大膽なロマンティシズムの叫びを擧げた。それはあらゆる俗惡な、厭ふべき俗物(フィッスティン)どもに對する激烈な挑戰狀なのだ。然も、身をもつてかかる挑戰狀を書くものは、たしかに魅力ある人間である。そして彼こそは、かかる人物であらねばならぬ。私の作品は『不幸なる天才の物語』と云ふ割註を有つた。世にはたまたま、「俺は

天才だ」と豪語して、空虚な昂奮の中に得々たる無反省な人間もあるやうであるが、然し言ふ迄もなく、私はそんな自稱天才を取扱はうとしたのではない。私の意圖は、この世界よりも一段高い世界に適合すべく生れた人間が、いかに此の世界で破滅しなければならぬかを、その悲痛な徑路を描くのにあつた。もとより、これは甚だ無謀な企てであつたに違ひない。なぜならば、丁度基督でない人が基督を描き得ないやうに——古來基督を描いて成功したものはないと言はれる——私のやうに、自分自身天才でないものが、天才を描くと云ふ事は、恐らく不可能の事だからである。然し、私の天才は少し意味が違ふ。一體、天才と云ふものも決して固定した觀念ではない、人それぞれ見方を異にする、そして私から見れば、天才は生れたるイデアリストである、現實地上の拘束に甘んじない不羈の精神である。從つてその生涯は不斷の戰ひであり、その最期は悲劇的である。つまり、天才は此の地上に於て破滅すべく運命づけられてゐるのだ。然し此種の人間については、天才といふよりもつと適當な名詞がありさうに思ふ。それが見付かつたら、訂正するつもりだ。

美しきものは滅びざるべからず、

此世は美しき者の國にあらざればなり。

私はこの自らの詩句を絶對の眞理だと信ずるのだ。自らの醜さに堪へないものは自ら殺す、その時彼はいかに美しい者であらう!

滅び行くものは美しく、

美しきものは滅び行く。

この主人公龍田純一は、あらゆる事に失敗した、彼は此の世上の人として惠まれてゐなかつたからである。彼と對立する藝術家で、世俗的の意味で天才と呼ばれる西尾宏は、殆んどあらゆる事に成功する、彼はこの世の適者であつ

たからである。この二人の對立によつて、私は多くの事を語らうとした、それが幾分でも解して貰へれば幸福である。我が主人公は決して回避はしなかつた、彼は勇ましく戰つた、しかも彼は破れたのだ、どうして彼は破れなければならなかつたか、私は更に角それを書いたつもりだ。ところで、敗北者は眞に敗北者であらうか？　勝利者は眞に勝利者であらうか？　それもまた私の提出した疑問の一つである。

然し、つひに彼は、我が主人公は、ただ一つの事に成功する、彼の破れたる生涯が、自づとそこへ彼を導くのだ。それが彼の生涯の眞の意義であつたのだ。そしてそれは何？　それは、即ち眞の愛である。彼こそは眞實の戀愛者である。戀愛者とは、世俗の戀を弄ぶ遊蕩兒の謂ひではなく、愛に生き、愛に殉じ、その愛人によつて救ひ救はれ、そこに不朽の感を感得するもの、一つの死によつて、二つの魂を融合するもの、愛の死によつて、永遠の中に生きるものの謂ひである。この偉大な事業に比べては、凡てはいかに小さく見窄らしく見えるであらう！

人生は常に醜い妥協と糊塗との上に、漸くその安全を保つてゐる。悲しい事には、愛に於てさへもまた然りである。然らば、眞に生きようとする者は、常に黑白を決し、徹底した道を踏まうとする者は、愛に於て究極を盡さうとする者は、何と云ふ壯烈な反抗者であらう！

最も徹底して生きようとする生れながらのイデアリストに取つては、人生の善と惡との對立は、外部のみならず內部に存するこの相剋は、何と云ふ運命的な制縛であらう。利己主義が人生の基礎であり支柱であるのが、現前の事實とすれば、これに反抗するものが、いかに歸結すべきか、私はこの大きな問題をも取扱はうとした。

弱くして美しい者に對する愛と同情が常に彼を驅つて苦しめる。人間に幸福を齎らすのが彼の夢想である。社會主義の理論と運動とが彼を牽引したのは自然の事である。××事件を導火線とするホワイト・エラアに壓搾されつつある熱烈な實行家の中で、彼はどうしたらいいだらうか？　生れたる藝術家である彼が、ここでいかやうにその道を見出

すべきか、私はそれをも語らうとした。

恐らく凡ての處女作の常である如く、私も餘り多くを語らうとし、餘りに多くを盛らうとしたかも知れない。そして或ひはそれが、反つて私の豫期を裏切るの因となつたかも知れない。若しその場合には、自分の無力を嘆ずるのみだ。ただ、尠くとも私の知つてゐる限りに於いては、一人の人間の一生を取扱つたものは、これ迄我が文壇に見當らないやうであるから、重荷のもとに喘ぎながらも、兎に角これだけの企てをここ迄搬んで來た事、今これだけの量を書き得たと云ふ事だけで、私は滿足してゐる。宛かも銅鑼を叩くやうな騷々しい昂奮と絶叫とでなくては、俗耳に入らない今日、幾人かあつて私の言葉に耳を傾けてくれるであらうか。私はそれを知らない。我れ笛吹けども汝等踊らず、しかもなほ私は笛を吹く。

自分の救ひと慰めとの爲に

×

「どういふ態度、どういふ抱負をもつて、これから長篇を書いて行くつもりであるか」

私は自分が創作家として、どれだけの才能を有つてゐるか、それは分らない、何事も黑い色彩に於て見るやうな性質を有つてゐる私には、悲觀的な判斷しか出來ない。だが、そんな事はどうでもいい、兎に角一生懸命に書いて見ようと思つてゐる。私などのやうな凡庸な人間には、その外に途はない。その外に何の恃むべき强味もない。

この十年近くの間、苦しい、自信のない、暗い生活をみじめに送つて來た間に、とにかく、いくつかのロマアンの腹案が出來てゐる。私の生活全體を擧げて考へて來たいくつかの大きな問題と相關する根本思想が出來てゐる。それ

を書けたら書いて行きたい。

『相寄る魂』で私は私の愛の哲學を――不十分ながら、然し概念的でなく――描出し、私のイデアリズムに一つの結論を與へた。次いで結婚についての總括的な考察を下し、進んでは男女の情慾の生む不調和（ディスハルモニイ）を捉へて、若い男女の前路に一つの警告と忠言とを投じ得られたならばと冀求してゐる。勿論、自分にそれだけの力がない事は十分知つてゐるから、こんな事を言ふのは大それた事だとは思ふが、力量の問題はしばらく措いて、常にそれだけの善意を、人生と人間仲間とに持してゐたいと思ふ。私のやうな弱小な汚れた者も、せめてその向ふ方向だけは正しい方に向いてゐたいと思ふ。

然し、こんなに言ふと誤解する人もあるかも知れないが、私はまつかうから社會の善のため、人類の救ひのために小說を書くと、標榜するだけの血氣は最早や失はれてゐる。

私は、曾つて、少年時代に、世の中を救はうといふ甘い夢想に醉うた私は、今では、ただただ、救はれたい、自分が救はれたいと一心に祈願し、救ひの手を天と地とに差し伸ばすあはれな一人の人間である。

だが、なぜ小說を書くか？

かう問はれた時、私は衷心からただかう答へる、

自分の生活に取つて、今ではただそれだけが慰めだから。救ひだから。

小說を書く事によつて、私は自分が慰められる事を知る。恐らく、また救はれる事をも私は信じたい。

小說を書く事によつて、私は自分をよりよくし、より淨くし、より高くし、より美しくし、より本當の人間にする事が出來ると、私は信じたい。

悲劇の觀者に及ぼすカタルシスについての說は今日なほ屢々引用せられる。だが、そのカタルシスは先づ何よりも、

作者自身に對して最もよく行はれなければならない。私はさう思ふ。

作家は救ふよりも先づ救はれる、敎へるよりもまづ敎へられる、喜ばすよりも先きに喜ばされる。

まことに、一つの長篇は、愛を學ぶ一つの學校である。ラスキンは他人の事をも自分の事のやうに考へ得られる想像力を愛の基礎と見てゐる。

どんな卑しい人間もジヤスチフアイされなければならない、彼の卑しさも止むを得ない必然性を有つてゐるから。カリカチユアにしか値しない人間も、その人間である事によつてすぐれた人と同じ地盤を要求しうる。彼が滑稽に見える事が、一層作者の涙に値する。

凡ての物はそのレエゾン・デエトルをもつ。作家はそれを描きつつ學ぶ。

作家は判事でもなく、檢事でもなくして、辯護人でなければならない。然し、私は特に弱くして美しい人間に對して、いい辯護人になりたいのだ。「歷史は勝利者のものだ、然し藝術は敗殘者のものだ」と言つた私の昔の詩句は、今もなほ私を勵ます。

私はつひにモラリストである、

だが結局、その善と惡とも後へ消える。……

人生には誰れが惡いといふではなしに、ただ二人以上の人間が相對立してゐるといふ事情のために、いろいろな悲劇が發生する。さうしたどうする事も出來ない人生の實相は、これまで宙に考へてゐたよりも、實際創作に從ふことによつて、より深く痛切に感得することが出來る。

書くことによつて、いろいろの事を學ぶ、それは單に愛ばかりではない、智慧も、眞實も。いや、凡てのものを。

自分のやうな學歷のないものにとつて、創作はいい學校である。

心靈の教化、人格の鍛錬、生死の救拔。
これが私の信仰だ。
若しこの信仰が破れたら?
そのときは私が文學をすてる時だ。
文學が自分の慰めでなくなつた時、救ひでないと悟つた時は、
その時は私が文學者でなくなる時だ。
それは深淵だ、暗い、恐ろしい……

×

「長篇に對する文壇の態度についてはどう思ふか」
批評家としては格別、作家としては、今のやうな絶對的無視の狀態を、平靜な氣持で、堪へたい。
靜かに、どんな待遇をも、默つて、忍苦したい……
私の座右の銘としては、
世間(及び文壇)を對象として生き、考へ、行動してはならない事。
自分の心のむかふところに從つて生き、そしてその事自身の中から慰めを見出す事。
まづこんなものである。

——或る質問の答——

勤勉と孤獨と純潔と

「勤勉と孤獨と(そして半ば戯に)純潔の誓ひ」とをバルザックはその後進に勸めた。これはまた私などのやうなまだ一人前にもなつてゐない青年に取つても、まことに貴重な格言である。我々はあまりに「なまけもの」である、また餘りに社交的である。それでは見込がない。純潔の誓ひに至つては、卑俗な例ではあるけれど、かの藝人や角力とりなどが何歳までは女を斷つ願をかけることがよくあるが、即ちあの願がけに外ならないのである。かうした事は、卑俗でもあり、また滑稽でもあるかも知れない、けれども私はそこに彼等の眞劍な精進の心持を汲み取るものである。然るに、我が文學者の社會に於いては、それとは反對である。この高尚な人達は次ぎのやうに主張する、「女さ、女を知らないで藝術が話せるかい!」人はこの言葉の卑俗さに驚くかも知れない、然しこれはすぐれた文壇の大家の口から私自身が屢々聽き取つたところである。そして、これは眞理でない事はない、女性はそれ自らでは何ものでもないかも知れない、然し我々が一個の人間として出來上るのについては、どれ位重大な關係を有してゐるか想像も出來ない位である。人間を、また藝術家を作るものは、その人の經驗した戀愛事件であるとも言へよう。然しそれは所謂「浮氣」ではない、決してない。私は他人の私行を是非しようとする興味は少しもない。けれども今の文壇の作品に、かうした浮氣といふに止まる戀愛事件を、面白半分といつたやうな態度で取扱つたやうなもの丶餘りに多いのにはつくづく驚かずにはゐられない。そしてその作家の藝術に對する愛も、また浮氣に過ぎぬのではないかと疑はずにゐられないのは、悲しむべき事實である。我々は、さうした人達の安易な例に倣つてはならない。我々はバルザックの敎訓をむしろ文字通りに守らなければならないと思ふ。

バルザック自身の勤勉は驚くべきものがあつた。こ丶に彼自身の手紙がある。

「私は晩の六時か七時に鷄と一緒に眠り、夜の一時に起きて、朝の八時まで働く。それから何か輕いものを食ひ、一

杯の珈琲をのんで、また午後の四時まで懸命に働いて、それから客を迎へたり湯を浴びたりして食事をすまして寢床に入るのだ」何といふ勤勉だらう。しかもそれが毎日の日課なのだ。

ジョルジュ・サンドは、バルザックを評して、「彼は勞作に於ては、抑制を知らなかつたが、その他のあらゆる欲情に於ては、抑制的であつた」と云つてゐる。

全く、かうした勤勉は、その結果として、おのづと孤獨を生み、孤獨はまた必然的に純潔を生んだであらう。彼がしかも佛蘭西人には稀らしく遲筆で、その作品を、校正刷で推敲を重ねずには滿足しないといふ奇癖のある彼が、二十年間に、殆んど百卷に近い作品を出し得たのも無理はない。しかも、バルザックは五十歲まで生きたのだ。

我々には、とてもその眞似は出來ない、それにはバルザックの體力が必要である。蒼白い瘦せつぽちのひよろひよろが、バルザックのやうにやつて見せると、いくら力んだところで何にもならない。けれども、あらゆる世俗的な享樂を斷念して、藝術に專心する事は、我々に取つて、それだけ愈々必要な事ではないだらうか。

勿論、あらゆる經驗は、何等かの意味で、その人の藝術に貢獻するのであるから、カフエエ通ひをするもよし、花をひくもよい、もつと危險な事をしてもよい。然し、それが若し單に心の墮落の徵候にすぎなかつたならば、それは悲しい事ではないだらうか。

殊に、さうした世俗的な受用の中にあつて、多くの人は、いかに世間人らしく幸福であるであらう。さうした人達は、どんな事をしても、恐らく自責の念を感ずるやうな事はあるまい。さういふ生き方もあるのだ。そして、さういふ人々こそ、全く無上の幸福者と云ひ得られよう。その人々には藝術もまた商賣である、それゆゑ、彼等は危險な事は少しもやらない。家內安全、商賣繁昌が、その人々のモットオである。何といふ世間智であらう。何といふ處世の達人であらう。

然るに、ドストエフスキイの如きは、全く此種の人ではなかつた。ひとりドストエフスキイには限らないが、とりわけ、この人は、いろいろな危險にのぞむ傾向の多かつた人であるだけに、その極端な生活法が特に顯著である。あの窮乏と濫費との、神と惡魔との間の大きな振子であつたドストエフスキイ、利巧な處世學者から見れば、全く理解が出來ないかも知れない。常に最後の限界を飛び越さうとせずにゐられなかつたあの人は、無暴な生の賭博者ではなかつたか。此種の人が今の文壇にあれば、さぞ利巧な、それゆゑ幸福な人々の笑ひの種になることであらう。バルザックとても、またさうだ。山のやうな借金を背負うて、世俗的な受用の道をすてて、たゞ書きに書いたこの作家は。——然し、眞劍な靑年にとつては、こんな人々のみが、ひとり尊敬と共感とをかち得るのである。

×

「私は秋が好きだ。秋のもの悲しさは、いろいろな事を思ひ出させる。木々の葉はもう散つて了つて、夕空がまだ眞紅の色に燃え、その色が枯草の上に、金の光を投げるとき、人は恍然として、つい今まではまだ心の中に燃えてゐたすべてのものが消えて了ふのを見る。

今しも私は荒凉たる草場をこえて、楊の木立が影をひたしてゐる冷たい濠にそうて、散步から歸つて來た。楊の木立の露はな枝は、風に鳴つた、時々聲をひそめた、それから突然聲をあげた。そして今や、まだ茂みにかかつてゐる小さな木の葉が、ざわざわと顫へた。草は身顫ひしながら、地上に身を傾けた。すべてのものはより蒼ざめ、より冷たい樣子を呈した。地平線には、太陽が白い空の中に身を沈めて、あたりを消えて行く生命の殘りをもつて充たした。私は凍えて、殆んど恐ろしくなつた……」

これはフロオベルの遺稿としてあらはれた小說『十一月』の冒頭である。私は大戰後久しぶりで丸善に殺倒して來た澤山の獨逸書の中から、粗惡な裝幀をもつたこの一冊を見出して、すぐ買つて歸つてこの冒頭を讀むと、もうすつか

りその中に惹き入れられて了つた。

　これは一八五二年十月二十五日に完成された作品で、一九一四年にフロオベルの遺稿の中から發表せられるまで、半世紀のその上も筐底に祕められてゐたのだ。私はこれを讀んで、フロオベルがいかにすぐれたロマンテイシストであるかを、今更のやうに深く感じた。今ではフロオベルを單なるリアリストだと思ふ人もなからうが、彼が根本に於て、一個の詩人であり、一個の浪漫主義者であることは、多くの人々の考へてゐるよりも遙かに高い度合に於てゞある。一體、すぐれた藝術家は、すべて一の例外もなく、皆一個の詩人であり、一個の浪漫主義者である。もつとも、私がここに云ふ詩人とは、今の文壇の所謂詩人ではない。言葉でちよいとした手品をやつて見せたり、文字で逆立をしたりするやうな空虚な細工の謂ひではない。私が嘗て、「藝術家は世間人ではなく、然し一個の詩人でなければならぬ」と云つたのは、勿論かうした勿體ぶつた道化者でなければならぬと主張したのではない。自分が道化者だといふことを知らないものが最上の道化者である。彼等が一番よく人を樂しませる。然し、かうした意味に於て人を樂しませる事は恥づべき事である。私は何人にもまして詩を愛するものだ、そしてこの愛人に對して、つく〴〵氣の毒に思ふ事が屢々である。何となれば、彼女があまりに善良な女で、文學的カリオストロなどに利用され、あやまられる事が餘りに多いからである。然しさうしたシヤアラタンがどんなに勿體ぶつて。自分に箔をつける事に苦心しようとも、それはたゞ笑つて見てをればいゝのだ。私の意味する詩人とはそれとは違ふ。私の意味する詩人とは、世間人の反對なので明る。たゞかう言つたゞけでも分つてくれよう、分らない人には千萬言說明して見ても分るまい。そしてかうした詩人が卽ち私のロマンティケルなのである。彼等は冒險家である、從つて實生活での失敗である。今の文壇には實生活の成功者が餘りに多い。藝術のために貧乏してしまつたフロオベルなどは、賢い世間人の笑ひの種であらう。『十一月』はだんだん病的になつて行く孤獨な人間の想念の世界を取扱つた點で、何處かドストエフスキイの『地下室か

ら』などと似たやうな味ひもあつて、秋蕭條のスティンムングを、こんなに力強く描き得た作は外に一寸類がないとさへ言ひたい、そして何よりもあの沒主觀の作家であるフロオベルの主觀の跡づけられる事を興味深く思ふ。

我が魂の祭

私は閑夜の靜談を好む。心友と團欒して、苦茗を啜つて詩を談じ、古人を論じ、高遠の哲理に夜の更けるのを忘れる時、その時が私の魂の謂はゞ祭の時なのである。

聰明敏活な好才子は、その馬鹿らしさに定めし失笑されるだらうが、馬鹿らしくても此方が、所謂色彩と音樂との世界に、縱橫の機才を振つて、天晴れの男振りを示すよりも私には適してゐるのだから仕方がない。いな、私は華かな舞臺に立つ時は眩惑して倒れる位が落ちなるを奈何せん。男振りを上げるどころか、下げるのは必定である、へまにへまを重ね、しかもへまをやるまいとの氣苦勞に、恐るべき無言の行を演じて、バルザックの全著作でも積まされた駄馬ほどの疲勞を擔つてとぼとぼと玄關もない陋屋に歸るだけなるを奈何せん。そこで私は閑夜の淸談を好む。しめやかに蕭々たる雨聲でも聽きながら、ノヴリスを誦し、ゲエテを論じ、西行を談るのが、私に與へられた役割だ。然るにその私が、足蹴にされた犬のやうに吠える！　これは不思議な事である、不思議なよりも喧しい事であらう。そこで親切な友人は忠告を與へてくれた、多分さうした行ひが私の品位を下すことを心配したからであらう。私は氣品を最も尊ぶ。氣品なき時、いかに熟練した藝術家も單なる細工人に過ぎない。私が志賀直哉氏を尊敬するのも、ひとりそのタレントのみならず、またこの氣品あるが故である、志賀氏の如き大人げないと評せられるシッペイ返し（人間社同人に對する）に於てすら、十分その氣品を示されてゐる。私が氣品なき、品位なき、下賤の人間であつたならば、

ああ、私は終りだ、たとひ社交場裡の才子となり得ても、面白をかしい小説に話術の非凡を三歎されようとも、哀れな詩人の悲境を脱して、一躍文壇の名家とならうとも、私は最後だ。

願はくば、毅然として生きたいものだ。きぢの儘の自分で生きたいものだ。その一言一行がわざとらしく、不自然な、偽善者の見習書生みたやうでない、裸一貫で押出した、立派な男として生きたいものだ。權勢に恐れず、强者に媚びず、赤手空拳、胸を叩いて地上の一角に立ちたいものだ。そこに、その人の氣品の姿がある。だが、私は足蹴にされた犬のやうに吠える！　私は犬でない迄も、足蹴にされたもののやうな醜さを有つてゐる、私はそれを悲しむ。喪家の狗よ、汝のしよぼ濡れて、尻尾を腹に卷き込んで眼をきよときよとさせて、一目散に逃げ出す姿は、かりにも氣品のある姿とは云へないぞ。然しその狗が自分の無力をも顧みず、敢然その信ずるところに從つて、巨大な猛獸に飛び懸つて行く時は、狗子佛性あり、彼は救はれる。私はそれをしようとするのだ。ただ、それだけだ。私の生涯の事業はただそれだけだ。その飛び付く事だけだ。巨大な怪物の喉笛にくらひ付く事だけだ。

私は曾つて堺利彦氏や大杉榮氏の如き人々の知遇を辱うするのを光榮とし、クロポトキンの『パンの略取』を熟讀し、早稻田署の刑事の訪問をむしろ得意としたやうな時代もあつたが、その時はかやうにして巨大な怪物の喉笛に飛び付くのだと自分に言つたのであつたが、然しながら今日私は最早全くそのやうには考へない。小川未明氏や江口渙氏の如き誠實な人々が、社會主義同盟に加入せられた事は、ブルジョア氣分の充滿してゐる今の文壇に取つては確に好感に堪へぬ事であり、尊敬すべき事であり、また有意義な事でもある。然し私は憂ふ、二氏は他日その踏み入られた世界に對して、或る幻滅を感じられる日が來はしないであらうかを。私はブルジョアが嫌ひだ。然しプロレタリアも同樣に嫌ひだ。プロレタリアが出世するとブルジョアになる、結局本來のブルジョアよりも一層嫌やなものが出來上る、それが嫌やだ。プロレタリアを以て誇稱するある方面の人々の、ラフな氣分は、デリケエトな藝術家に取つ

ては堪らないものになる事はないか。曾つて勞働文學者と稱する一團の人々が現れて、その所謂勞働文學といふものを示されたが、私はその餘りの非藝術的なることに驚いた事がある、そして私は藝術と勞働文學とは全く相反したものだと理解したのである。そして反つて、勞働文學などと標榜することを厭つてゐる宮島資夫氏の『恨みなき殺人』の如き作品が、藝術としてもすぐれてゐるし、またその人々の言ふやうな勞働文學としても最上のものである事は面白い事實である。我々藝術家は、その人々と最後に於て、必ずや超え難い溝渠のあることを發見するのではなからうか。社會と人間との救濟は理論上によつてはつひに齎されない、物質的な、外部的な方面からは遂ひに齎されない。レエニンの世界が我等の理想境であるとはいかにしても信ぜられない。否、反對に我々の救濟はたゞ心からのみ來る、ただ内部からのみ來る。私は漸くにしてこの事を悟るに至つたのである。

人々が各々その自己の上に、その自己の生活の上に思ひを潛め、これまでの自分の生き方に不安を抱いて來るならば、その魂は淨化の第一歩に立つたのである。私は今の餘りに安易な、餘りに樂天的な、餘りに明るすぎる所謂人道主義なるものに心醉するものではない。また、徒らに思ひ上つて、自分をば萬人の上に立ちまさつた天才だと揚言して、我爾を救ふなどと叫ぶやうな文學靑年的な昂奮を賞讃するのでもない。或る若い作家の如く、その恐るべき昂奮が、これを解剖して見た時、結局大家になる爲めの昂奮といふだけに過ぎなかつた、といふのでは赤面しなければなるまい。藝術家は何よりも先づ反省の人でなければならない。不倫な行ひ、必ずしも咎めぬ。博奕、必ずしも咎めない。然し、苟くも藝術家にあつてはそれが普通の世間人のそれであつてはならない、決してならない。善惡は空語のみ。善とは何ぞ、惡とは何ぞ、言下にその明答を與へ得るものは道學先生のみ。藝術家はそんな形式一點張りの世間道德を一笑に附してよい。我等は常識の世界の住人ではない、或る場合には世間道德を蹂躙して可なり。然しながら自分自身の道德はいかなる場合でも確固として存しなければならない。然るにその人が何等反省の途を知らず、絶え

ず自己を解剖臺上に置くべき人が、その苦痛を極力避けるに於ては、つひにその人の道德は成立しない、彼は世間人と共に盲動して、安易な常識の世界に安住するあるのみ。そしてその時その人は道學先生の非難に全く屈服しなければならぬのである。藝術家の負ふべきおひめ、贖ひを避けるものは、その代りに世間人の贖ひを課せられるの外はないのだ。（私が曾つて善に對する意志と言つたのは道學先生の所謂善ではなく、この藝術家としての善なのである。）これは悲しむべき弱さではないか。私は自分が汚れた人間である事を知つてゐる。私に何で他人を咎める事が出來よう、たゞ私はこの汚れた自分を飽くまで追及したい、凝視したい、自分の行爲の一微端をも見のがさないで、無慈悲な解剖の刀をこれに加へよう。然らばどうして、いかに厚顏な自分でも、どうしてその汚濁に安んずることが出來よう。江口渙氏は「實生活の紙屑」といふ名言を以て今の或種の作品を評せられた。ところで、私の思ふのには、これ等の實生活の紙屑製造人たちは、自分に對して餘りに寛大なのではなからうか、自分を甘やかしてゐるのではなからうか、またその人の見方が常識を一歩も出ないから、それらの作品が紙屑で止まるのではなからうか。

こんな考へをもつてゐたので、私は時事子に被論者の名前を出して論じて貰ひたいとのぞまれた時、言下によし來たとばかり、何の憚りもなしに、率直に『文壇に望む』だのだが、『間違つた輕蔑感』の一語の下に無慘に葬り去られたのは我ながら憫れむべき無力の文壇見習生ではないか。然しこれは私の罪だ、私は、誤つたのだ。曾つて社會主義に同感したのと同樣に、文壇に對して兎角の言をなしたのは、（結局自分に向つて言つたのであつたとは言へ）私の大きな誤りであつた。私の飛付くべき相手は他の何處にもない。たゞこの私自身に外ならなかつたのである。

文壇といふ言葉は、さても不思議な言葉である。個々としては條理を履み、理性を具備した人間も、群衆の集團の一片となる時、恐しい猛獸となる。私にはこの文壇といふ言葉がさうした群集の雪崩のやうな氣のする事が時々ある。然し、文學者が群集心理の熱した酒を呷つて、燒打をやる筈もない。反對に、文壇といふ漠然なる名稱のもとに、無

名のつまらない人間に（知れよ、或る人々に取つては、無名、即ち小家であるといふ事は、直ちにつまらない事を意味するのを！）非難攻擊されるのが文學者の宿命である。兎に角、月々作品を發表して作家として立つてゐる人は、文壇が沈滯の極に達したとか、行詰つたとか云はれてさへも、不愉快なショックを受けるのである。況んや、今の惡文壇の惡作家などと云はれた日には、それがどんな意味で言はれたかを考へるまでもなく、決していい氣持はしないであらう。かうして文壇を非難した人は反對に非難される人となり、その人が文壇の道路に一歩踏み入れたとき、その道の餘りの險しさに茫然自失することさへあり得るであらう。然し、眞理を熱愛する者に取つてはそれは敢て恐るべき事ではない。ただ、文壇に對する非難は、それが正當であればある程愈々以て愚である。その人はさうした外部的の事に於てでなく、寧ろ內部的に自己の妄を悟らねばならない。私の言が誤謬であると。抑も何人が公言し得るか、（否、その誤謬を證明し得るか）只その言を爲すものが、その背後に權威ある背景を有せざるのみ。その背後にただ空氣あつて、その他に何物もなきのみ、菊池寬氏の所謂硝子の家さへも存せざるのみ。否、私にも詩はある、然し今の文壇では詩人であるといふ事は一般に輕侮をこそ買へ毫も權威とはならないのである。今やただ私に殘されてゐる事は、その言に權威あらしむるの一事のみ。私は男子だ、恥を知るものだ。そこで私は一個の小さな見習生として、今や出發しなければならぬ。

私の手記から

○

詩は綜合である、小說は分析である。詩は飛躍である、小說は步行である。詩人が小說作家たらんとする時、彼はその來た道を謂はゞ逆に取つて返すのである。私は今や曾つて自分の詩によつて歸結を與へたもの、その糸卷をほぐ

して行かなければならぬ。

○

文章を隱して作品を現はすのが眞の作家である。名文だなどと文章を感心されるうちは未だ眞に至れるものではない。文章などを忘れて、讀者をしてその作品の中に同化せしめなくてはならない。例へば國木田獨歩の如き、あの荒つぽい蕪雜な文章を以てして、彼はいかなる效果を擧げてゐるであらう。我々は彼の作品を讀むとき、少しも文章に氣が付かない、ただその內容にぴつたり面接するのみだ。これに反して、若しその間に文章が垂幕のやうに垂れてゐたならば、その人は名文家ではない。鞍上鞍下、人なく馬なきに至つて始めて至境だ。

○

部分に囚はれて大局を忘れる。今の作家は多く然り。どんなに早く走れても、その方向が間違つてゐたなら、その選手は落第だ。部分によつて人を感心させるやうな旨さは、餘り學ぶべきではない。さういふ旨さが兎角曲藝になりやすいのである。然かも今の文壇ではさういふ旨さばかりを問題にしてゐる、そこで今頃又も表現と內容の問題を事新しく說かねばならなくなつたのだ。脊骨がないから實生活の紙屑となるのだ。脊骨だ、作品の價値を定める最後のものはその脊骨だ。

○

一つの石で二羽も三羽もの鳥を打ちとめることが何より大切だ。例へば一行の會話によつて、二樣三樣の效果を擧げることを知り、これを重ねて積み上げて行くとき、その結果は、驚くべき確實な效果を擧げるであらう。

○

元來、小說といふものは、重い重荷をその出發點から歸着點まで持ち搬ぶべきものである。作家がいかにしてその

荷物を搬び行くかが問題なのである。然し先づ第一に重要なのはその荷物の奈何に存する。僅かばかりの風呂敷包を小脇に抱へて自分の健脚を誇るものは嗤ふべきである。ましてや空手でステッキでも振りながら、雪駄をちやら〳〵鳴らしつつ、口笛でも吹きながら、自分のスタイルをこれ見てくれと云はんばかりに得意でゐるやうな作家が果して何にならうぞ。

こんな分り切つな事を、今更のやうに事新しく感じながら、あはれな詩人が一生懸命に髮を長く伸び放題にして小說を書いてゐる。思へば眞面目な滑稽である。しかもこの詩人はまだこんな事をも考へてゐる――

私は文壇外の文壇といふやうな事をよく考へる。文壇といふ言葉が、專ら文藝に關係を有つ新聞雜誌に據つて發表される一切の創作、評論、ゴシップ、漫罵等の總括とすれば、それに據らないで初めから單行本を以て創作を發表して、その喧騷に加はらない人々を總括して、これを文壇外の文壇といふ言葉で呼ぶのも大して差支はなからう。ところでこの文壇外の文壇には、有難い事には情實批評とか何とか、そんなものが一切ない。寂しいけれど、さつぱりしてゐて氣持がよい。何の顧慮もなく何の制限もなく、自分の思ふままに自由に筆を執る事が出來るといふ事は實に有難い事である。私は、ここに始めて自己の安住すべき世界を見出した。みな人がただ一圖に自己の藝術に思ひをひそめ、刻苦して勞作に從ひ、敢て談らず、敢て騷がず、徒黨を組んで陣容を張らず、ただ一人昂然としてその道を勇ましく進むならば、そこには何といふ氣持のいい世界が現はれることであらう。勿論、さうした行き方をするのは虛名を博する所以ではない、田舍の或種の讀者に仰ぎ見られる事もない、物質的の欲望を滿足させることも不可能だ。然し、かかる些事が眞の藝術家に取つては何の介意するところぞ！　よしや詩を作つた爲めに全世界の輕侮と嘲笑とを買はうとも、（事實、現在の文壇に於てはさうなのだ）小說の原稿一枚について幾金かの原稿料の代りに、反對に此方から

それと同額の執筆税を納めなければならぬとしても、眞の藝術家は書かずにはゐられない筈だ！　尤も、この執筆税云々は少々過激な反語に過ぎるかも知れぬ、反語でないとするも、餘りの理想主義に過ぎるかも知れぬ。然し、今日にあつては、敢てこれ位の覺悟を以てのぞまなければならぬと私は信ずる。然らずんば初めいかばかり眞劍な氣持で出發しても、自分もやつぱり何時となく、安易な自得した大家の一人となつて了ふからである。

私は常に「捨身」といふ事を唱へる。そして私自身にまづその捨身の態度に出たいと覺悟してゐる。そしてまづ、その態度を以て創作せん事を期してゐるが、また文壇といふものに對しても私は捨身に行かうと思ふ。そして、自ら進んで敢て私は孤獨の寂しい道を取つたのだ。弱い心が、時にはその寂寥に泣くとても、これに堪へて行かなければならない。

そして、人々が皆この道を踏んで行くならば、それが文壇に對する何よりの警醒となるのだと私は信ずる。文壇を徒らに非難するのは愚である。文壇の人々にはその好きなやうにさせておくがよい、その人々にはその人々の信念があるのである、人みな自己の好むところに從ふのだ。それが不滿ならば、自分だけはさういふ風にしないのがよい。そこで、私は私自身のしたいやうにやるのだ。自分の信ずるところに向つて、孤獨の道を私はひとり進んで行く――これ我が心の慰めである。

然し、これだけの言葉を費したのも、餘計であつたかも知れない。默つて書くこと。そして時に靜夜を心友と閑談すること。それだけが、私には適してゐるのであるから。

靜かな四月

静かな心を、静かな心を。泡立つ水が澄まなければ、水底も見透すことは出來ない、騷がしい心には、物の象も正しくは映じない。藝術家にはこの靜かな心が亂されてはならない、そしてこの靜かな心は、ただ靜かな生活によつてのみ保たれる。

私の心も漸く靜かに澄んで來ようとしてゐる。靜かな一隅に私は滿足して坐し、毎日毎日、いくらかでも仕事の進むのを樂しんでゐる。

一

四月一日に、一月の我が勞作をねぎらふために、私は家のものを連れて散歩をした。それは靜かな穩かな散歩であつた。春のうららかな日に曝し出されてゐる黄色い火事跡を見たり、またその火事の折り、二階から飛び下りたとか聞く、或る友人の事を話したりしながら、關口の大瀧に出て、江戸川公園に入つて行つた。

公園には、その崖の方に夥しい椿の樹がその枝に一杯の花を飾つてゐる。遠方から見ると一樣の紅だが、徐々にその樹の下に近づいて行くと、一本々々その紅に濃淡の差別があつて、それがその樹毎のさまざまの情緒を思はせてゐる。小さな橋を渡つたり、蟹の穴が點綴されてゐる崖下の小流れを覗いたり、また低いところへ下りて行つて、小舟を弄ぶ少年の群れを見下したりした。とあるベンチで雜誌を見ながら話してゐた二人の少女が、こちらの方を見て笑つた。二人とも生々したその頰に春の日を受けて、いかにも快さうである。私もまた何となく微笑まれるやうない氣持であつた。

これ迄私には、何かの用事で外出した時の外は、家のものを連れて歩くなどいふ事はなかつた。自分でも不思議な位、私はいろいろの家庭的な小さな滿足を無視して來た。いや、無視すると云ふ譯でもなかつたのだが、つまり私に

はそんな餘裕が無かつたのである。生活も苦しかつたし、心も苦しかつた。今とても餘裕が出來たと云ふのではないけれど、長い彷徨の後に、漸く自分の行くべき路も見えて來て、いつも騷がしく亂れてゐた心も鎭まつて、一意專念仕事にいそしむ氣になつた。さうした氣持になると共に、徒らに遠いところにのみ向いてゐた私の眼は、手近な自分の周圍に落ちるやうになつた。そして私は長い間、全く閑却してゐた周圍の人間に氣が付いたのである。

二

私は曾つて電車の中で、東京見物に出て來たらしい田舍者の老夫婦が、互ひにやさしくいたはり乍ら、二人仲よく腰かけてゐるのを見て、遠い何處かの片田舍の寂しい野良で、毎日々々働いてゐた人達が、一期の思出に、長年かかつて蓄へた金をもつて、かうして東京に出て來てゐるのだと考へると、何か尊いものでも見たやうな涙ぐましさを覺えた事がある。

三

此頃天才的の藝術家である私の友人が、久し振りで訪ねて來てくれた。彼は二度目の妻を離婚して、長い間遠いところへ行つてゐたので、我々の仲間では、傳說中の人物にでもなつたやうだねなどと話し合つたものだ。その當人が傳說の中からひよつこり現れて來て、その何處か天才らしい或る閃きのある爽かな顏を見せた時、私はなつかしくまた嬉しかつた。私たちはいろいろな事を話したり聞いたりした。その時、彼は、

「この頃は割箸でばかり飯を食つてゐるので寂しいよ」と言つた。私はなぜだかその言葉が深く記憶に殘つた。そしてさうした寂寥を味はつてゐるその友人の藝術家らしい生活を何だか羨ましいやうにも思つた。

四

枯木のやうな小さな樹も、ぢつとよく見ると、皆それぞれに芽ぶいてゐる。埃を浴びながらも、柔かな草は大氣を刺すやうに伸び出してゐる。自然の健かな歩みは、到るところに感じられる。公園のベンチには長閑な顔つきをした人々が憩うてゐる、中にはベンチの兩端近くにある仕切板に頭と足とを載せて、羽織を頭から被つて眠つてゐる職人風の男もゐる。『東京遊學案内』といふ本を手に持つて、祖父さんらしい老人と並んで腰かけてゐる少年もある。それ等の上には、一樣に暖かい日影が甞めるやうに落ちかかつてゐる。その日影を自分達も背中ぢゆうに浴びながら、川ぞひの公園をぶらぶら歩いて行くと、何といふ平和な心であらう。さうして歩いて行きながら、私はいつか藝術家と結婚といふ問題について話してゐるのであつた。

五

藝術家と結婚といふ問題は、我々に取つて興味の深い問題である。藝術家は結婚していいか惡いかといふ問題を捉へて、ドオデエは一つの短篇集をさへ編んだ。そのドオデエ自身はと云ふと、彼は幸福な結婚者であつた。彼は極力その妻を讃美し、その妻に感謝してゐた。實際、彼の妻はよき藝術家であつた、そしてしかもよき妻たるを失はなかつた。ドオデエは彼女のやさしい不屈な助力に向つて、その一つの小說の卷頭に數行の献本辭を記したが、彼の妻はそれを印刷する事を許さなかつたと彼は自ら書いてゐる。トルストイの如きは、ドオデエよりもまた更に幸福と言ひ得られよう。ソフイア夫人は模範的の家婦であつた、彼女は『戰爭と平和』の草稿を六度淨書したと云はれる、しかしさうした助力は彼女の家庭的な努力のほんの一小部分に過ぎなかつた。彼女はあれだけの子供を良人に贈りその子供

を立派に育て上げ、驚くべき財産をも造り上げたのである。けれども、彼女がかうした良妻賢母であつた事は、後年轉心後のトルストイに取つて何よりの障害となつた。トルストイの晩年を思ふ時、彼の「結婚の幸福」を羨望する事の輕率を思はざるを得ない。

不幸な結婚といふと直ぐ頭にのぼるのはストリンドベルヒである。彼は三度結婚して三度離婚した。彼は天使を求めて惡魔に會つた。然し彼のやうな天成の理想家が現實地上の女性に滿足し得られようとは考へられない。しかも彼の妻は二人は女優であり、一人は閨秀作家であつた。然し彼女等がよしんばどんないゝ女性であつたにしても、ストリンドベルヒを滿足させたか否かは甚だ疑問である、『痴人の懺悔』を讀んで人は私の言に同意してくれるであらう。ストリンドベルヒの天才であつた事が彼の不幸であつた、そしてその不幸が彼の天才を愈々高いものにしたと私は言ふの外はない。

ストリンドベルヒの蔑視したメエテルリンクはその點で最も幸福な人であらう。彼ははじめから神祕主義者であるほどに幸福であつた。彼の結婚に於て、我々は曾てルブラン夫人の良人讃美の文を讀み、今また彼が美しく若い第二の新妻と米國で撮つた寫眞を見る事が出來た。私はそれ以上その幸福について知らない。然し、それよりもロバァト・ブラウニングと、エリザベス・バレットとの結婚生活ほど羨むべきものはなからう。藝術家同士の結婚生活は不幸なものと相場が定つてゐる位困難なものであるのに、この二人は、しかも全然同じ種類の藝術家——詩人であつたにも拘はらず、あんなに美しく終始した事を考へると、尠からぬ畏敬の念さへも禁じ得ない。此外、私の頭にはカアライル、バイロン、シエレイ、ハイネなどの無數の例が雜然と浮んで來た。けれども、この問題はつひに決定する事の出來る問題ではない。ドオデエの『藝術家の妻』は結局何の斷案にもならない。無數の相異つた性格の結合が無數の相異つた事情のもとに、一つの試驗管の中でいかなる作用を現はすか、それを誰れが一言の下に言ひ盡せよう。或ひは良人に

より、或ひは妻による、また相互の性格の適否による、更にまたよく選擇せられた配偶の上にも外部からの破壞的事情が來る事もある。

ただ、藝術家の結婚は幸福よりもより多く不幸に傾く可能性のある事だけは斷定して誤りではなからう。何となれば、藝術家の生活はいろいろな點で普通の女性の堪へ得ないものだからである。殊に天才的な人には、兎角よき良人たるに適しない要素が多いからである。とは言へ、結婚生活の不幸が直ちに藝術家に取つての不幸であると言ひ切る事は出來ない。個人としての不幸は藝術家としての幸福である場合がまた甚だ多いからである。

六

この間の晩二三人の客がいろいろな旅の話をした時、久世山ほどの嶮しさが登れる人なら日本アルプスへも大丈夫登れるといふやうな話が出た。それを思出して、久世山に登つて見る氣になつた。

山の下の草原には、子供たちがそこ此處の水溜りに集つて、泥いぢりに夢中になつてゐた。杖を土に突立てて、その先きに帽子をかぶせて置いて、水の中をじやぶじやぶ渡つて、泥をはこんで來ては、堰をしたり何かしてゐる。

草原のむかうの端しには一つの洋館が見えた。あんな家に住んだらどうだらうなど話しながら登つて行くと、成程日本アルプスもかくあらうと思はれるほど傾斜が急だ、でもその距離が飽氣ないほど近いのはさすが久世山である。そして登り切るとそこが平地なのにがつかりしてしまふ、登つて向うの端しを見るとそこが町だから面白い。でも、登り切ると風がさつと面を撲つ。やつぱり山は山だ。山の上にはかなり人がゐた。一寸可愛らしい顏をした女中が踞つて子供の守りをしてゐるのもあつた。二匹の犬がすさまじい勢ひで追ひかけ合つてゐたが、勢ひがあまつたやうに毬のやうに麓へ駈け下りて行つた。上り際の笹原の中には、立枯の木が何本か白く暴れた肌を無氣味に風にさらして

ゐる。それを見てゐると、何だか吹いて來る風さへもまだ冬の名殘りを有つてゐるやうな氣がして來る。

風に面して、街の方を見下すと、牛込一帶の地がそこに展開してゐる、街の甍の上には、空が薄濁つて低く垂れてゐる、あの中には私たちの玩具のやうな家も物蔭にもぐり込んでゐるのだ。

それを見ながら、私は今の私の仕事の事を心に思ひ浮べた。

七

今の私の生命も、希望も、情熱も、みんなその一作に注がれてゐるのだ。

どんなに[illegible]い間、私はあはれな詩人として、あはれな飜譯家として、文壇人の輕蔑と無視との間に生きなければならなかつたであらう。私の餘りに敏感で、また餘りに氣位の高い心は、その度びに俄かに燃え、また俄かに冷却した。私の詩は或ひは感傷、或ひはアナクロニズムと貶せられた、私が詩の飜譯をした時、或種の人達は露骨に反感と冷笑とを注ぎかけた。そこで私はおとなしくしてゐると、皆が寄つて集つて壓しつぶしにかゝるやうな氣がした。私は激昂して一再ならず激烈な文を草した。響の強い言葉を用ゐて、猛然として私は手套を投げた。ところがこの私の態度はまた一段の反感を買はずにはゐなかつた。先き頃では、單にその言をなした者が私であると云ふ爲めにのみ、私の言に毒惡な冷語反擊を加へたやうな匿名記事さへも見えた程である。けれどもさうした狂的な、いくらか滑稽な、正直と云ふよりも寧ろ愚鈍な時期もまたつひに過ぎ去つた。私はもはや徒らに憤激して、自分の精力を消耗する事は出來ない。今日、私はあらゆる誹謗を笑つてすますことが出來る。

それは自信が出來たのだとも言へよう。本當の仕事をやつてゐる者の强味が漸く私にも分つて來たのだ。

私は今始めて自分の本當の仕事をやつてゐるのだと感じてゐる。今にそれが完成して世に出れば私の生れて來た甲

斐もあらう。こんなに苦しんで眞劍にやつてゐるのだから屹度いいものが出來るだらうと、家人は私を慰めて言つた。私はもう自分一人で思ひ上つて天才氣取りをするやうな幸福な時代は過ぎてしまつた。また、態度の奈何が作品の價値判斷の標準にならうとも思つてゐない、或る人々は私をそんな風に考へてゐる幼稚な人間だと思つてゐる。けれども私はもう三十歳だ、これでも少しは人並の苦勞もして來た人間である、そんなつまらぬ事が自慢になるならば。(私は謙遜が好きである、然し卑屈ではありたくない、おもつたことは正直に言ふつもりだ。)外部的には私はおほきをのぞまない。私は自分の書いたものが出版され、又それによつて其日の麵麭にさへ事缺かなければそれで滿足する。貧しい暮しに馴れてゐる私はそれだけで喜ぶのだ。それに私の作品は今の文壇の傾向とは全然相違した、全くオリジナル(風變りと云ふ意味、誤譯して解されないやうに)なものであるから、今の文壇に認められようなどとは、勿論私の毫も豫期しないところである。しかし、今度こそは私は前の時のやうに、文壇人の輕蔑と無視とに激昂するを要しない。私は生きた、そして私の衷心に一つの確乎たる信念が形づくられたからである。また私は文壇といふものに全然無關心にならうと決したからである。また、いかに世に認められなくとも、藝術家はその創造によつて既に酬いられてゐる事を私は確信するを得たからである。

八

登つた折りと反對の側から久世山を下りてところどころの水溜りを飛び越して草原を横ぎつてゐると、一人の子供が後からばたばたと走つて來て、振向くと、ニツコリして、その儘ツウと向うへ駈けて行つてしまつた。その可愛らしい甘えたやうな樣子に私たちは何とはなしに微笑ましい氣持になつた。

歸りに私たちはパウリスタに入つた。そこで珈琲を飲んだりエビのフライを食べたりしながら、私はまるで日曜日

の勤人見たやうに十分自分に滿足しきつてゐた。

自分のやうな人間も、漸く一人前の人間になりかけて來たなと私は考へた。自分も大人になつた、地味な生活を樂しむ地味な人間になつて來たなとも考へた。實際、私はやつと此頃になつて、どうやらかうやら地味な日常生活の眞味を知つて來たのである。英吉利人の所謂ドメスティイック・ライフを樂しむ氣持をいくらかづつ知り出して來たのだ。

私はこの數年間の苦しい生活を囘想した。まだ世に認められない貧しい詩人、貧しい飜譯家の生活は何たるみじめなものであつたらう。十圓の家賃が持ち切れないで、五圓の家に引越した、小說を書く自信も興味もなく、溜息つきつき飜譯をコツ〳〵やつては思ひもかけない人たちの反感を買つてゐたのだ、何たるトラギコメデイだつたらう。全く私には自信がなかつた、自分がいかにつまらない男であるか、いかに才能の貧しい男であるか、いかにお話にならぬ低能兒であるかを私は每日々々自分に言ひ聽かせ、自分に證明するために生きてゐるやうなものであつた。その生活が暗く、淀んだ、薄汚ないものであつたのも無理はなかつた。全く、自分ながら愛想の盡きた意氣地なしだつた。私はよく家のものに愛想を盡かされなかつたものだと思ふ。しかもその上、この意氣地なしの貧乏詩人は、一度びは、一つの滑稽な失錯重大な罪過にさへも陷つたのである。半年餘りの間、私は家のものを苦しめ、また自(おの)れを苦しめた。然し、つひにそれも惡夢のやうに消えてしまつた。その苦しい經驗と共に、私の靑春も消えてしまつたやうに思はれるけれども、また同時に何たる幸福であらう、私の意氣地なし根性も消えてしまつたのだ。その一時的破綻によつて、我々の基礎が眞實なものであつた事を證明するを得たのは、私が自分の心のどん底の暗黑をつきとめ、また二人のものの興味のある性格の對照を究め、善惡の裏表になつてゐる人間の不思議な心理を自らの上に實驗し得たと云ふ利益に比しても、更に感謝しなければならぬ事であつたが、それもその事件が私をしつかりした一人前の男子にした事に比べればまだ何でもなかつた。今日私は過去の自(おの)れの意氣地なさを笑ふことが出來る。

九

靜かな心を、靜かな心を。私は自分に與へられた本當の道を認識すると共に、何よりも靜かな落着きが願はしくなつて來た。そして靜かに落着いて仕事をしてゐるうちに、これ迄徒らに大きな抽象的な問題の上にさまよつてゐた私の眼は、身邊の小事に思ひもかけぬ興味を見出すやうになつた。人生の瑣事、今現れて次ぎの瞬間には消えてしまふやうな瑣事の中に、深い意味を見出すやうになつた。そこに深い生の象徴が見出される。そしてかうした心持の變化の中に、私がドメステイツク・ライフを樂しむ地味な人間となりつつあることの祕密が存するのかも知れないと思ふ。

永久に若く

×

若し私に翼があつて、非常に强い翼があつて、そして一種特別の肺臟があつて、星の世界へまで飛んで行けたならばどうであらう。そしてそこから此の地球を眺めたならばどうであらう。抑も私はどんな氣持がするであらうか。たしかに私は其處で悟道するに違ひない。私は私の下界時代が殆んど理解出來ないに違ひない。私は一體何をして生きてゐたのだ、何であんな下らぬことに頭を惱ましてゐたのだ、つまらぬ人の批評を氣にしたり、自分に才能が無いといつて絕望したり、人が自分を輕蔑したといつて憤つたり、期待した賞讃が來なかつたといつて失望したり、漫罵を受けて氣を腐らしたり、復讐心に燃え立つたり、空虛な機智を誇つたり、他人のおもわくを推量つたり、他人の言動

に兎角の批評を下したり、すべてのかうした際限のない無意味なことに貴重な時間を捧げて、それでよく何の不安も感じないで、さも有意義な生活でもしてゐるやうに思つてゐられたことだ。私はかう考へるに違ひない。

星の世界まで行けば、人間も最早人間ではなくなるにちがひない。その魂は既に無限の靈氣に洗はれて、眞に、渺茫たる、宇宙の大海の一端を泳ぎ拔けて、地上の塵の海から、人間を日夜卑しく、小さく、醜くする、地上の空氣の圈内から拔け出したのだから、全く違つたものになるに違ひない。だが星の世界まで飛んで行くことは出來ない、我々には翼もなければ、特別製の肺臓もない。人間は永遠に小さな人間である。永遠に地を這つてゐなければならない。

けれども、このやうな汚れた空氣の中に、このやうな塵の海の中に漂つてゐながらも、星の世界に行つてゐるやうな心持で、私は日每の地味な生活を送りたいと思ふ。すべての現象を通して、たゞ永遠なる本體をのみ眺めたいと思ふ。これが今の衷心の願ひである。その爲めには、私はすべての生活の喜びを、犧牲に供してもかまはないと思ふことすらある。生活の喜びといへば、私のオークワアドな性格、到るところで顏から火の出るやうなぶまばかりを演ずるやうな私の愚かさは、もと〳〵それを味ふことを不可能にしてはゐるのだけれど。

×

詩壇復興の聲を聞いてから、一年になる。詩壇は果して昔日の隆盛を恢復したか。それについて『早稻田文學』に出てゐた柳澤健君の一文を大變面白く思つた。ポピユラリテイについて、民衆詩人を揶揄したあたりは、少しどうかと思つたが、それについて思出した事があるから、それを書いて見よう。

今の民衆詩人諸氏は、なぜあんな考へであんな詩作をしてゐるのであらうか、私はつねづねそれを不思議に思つてゐた。諸君はホイツトマンや、下つてはトロオベルのエビゴオネンとして得々たるものがある。然し、ホイツトマンの

強烈な人格的背景なくして、『草の葉』張りの詩を作るほど危險なことはない。それは徒らに空虚な叫びを擧げることにすぎなくはないか。私は諸君が民衆詩人を以て自分も許し、他人にも許させてゐながら、どうしてあゝした處に踏止まつてゐられるかを疑ふのである。柳澤君は一民衆詩人の詩集の運命について語り、その著者の二重の苦痛を語つてゐられたが、忌憚なく言へば、諸君の中のある人々の作には、殆んど何等の藝術的感興をも與へない無內容なものが多い。人の心を惹き付けることの出來ない所以である。しかもその人々は必ずしも才能なき人々ではない。それは思ふにその人々の誤つた藝術觀の致すところではなからうか。あまりに固定した概念に囚はれてゐるがためではなからうか。民衆に對する呼びかけは無用である。私の所信を以てすれば、そんな事ばかりしてゐる詩人は、民衆詩人と稱しがたいのである。私は民衆と共に生き、共に惱み、自らの舌を以て民衆の聲を代辯する詩人こそ、始めて眞正の民衆詩人と呼ぶべきであらうと思ふ。そしてかうした意味からは、私は以前から自分を民衆詩人であると信じ、またより多く民衆詩人たらうと期してゐた。然し民衆詩人といふ語は、甚だ無意味に響く。詩人が眞に自己內心の聲に聽き、自分の魂の底から眞に人間らしい、眞率な作を生むとき、彼は常に民衆詩人に外ならぬのではないか。しかも特に民衆詩人と自稱する以上は、更に一歩を進めて、フランソア・コペエや、ネクラソフのやうに、專ら下層社會の人々の生活と感情とを歌はなければならなくはないか、私は民衆派の諸君がホイツトマン風のトロオペル風の詩人であつて、コペエやネクラソフがそれであるやうな意味での民衆詩人でないことを心寂しく感じてゐる。

×

文學者として立つものはどうしても文壇と接觸しなければならない。人間と生れた以上はどうしても社會と接觸しなければならないのと同じわけである。が、私はそのいづれをも極めて煩はしく思ふ。社會の事はしばらく措き、文壇の空氣といふものが、私は時として堪へ難く不愉快に感ぜられる。その不愉快を一々具體的に記したいのだが、そ

れは差しひかへる。文學者も政策（ポリシイ）を要するといふことは考へて見てもいやなことである。しかも事實に於ては、文壇は權謀術數の大家に富んでゐるのである。然しかうしたことはあまり深く言はない方がよからう。これも要するに文壇の人たちが、あまりに職業的であり、あまりに專門家的であるのに基因するのだ。文學よりも文壇を重んずるとき、人は專門家的になる。我々は文壇よりも文學そのものを尊重しなければならないと思ふ。まづ試みにある創作家諸氏のグルウプに行つて見るがよい、またある詩人諸氏の會合に行つて見るがよい、そこで我々の感ずることは、それらの人々が尊敬すべき藝術家であるかもしれないが、しかしながらあまりに專門の技術家であることであらう。これは私一個の愚かな性癖かも知れないが、私は何だかそのことが寂しい氣がする。これはさうした專門家的空氣が私には性が合はないのでもあらう。私は文壇よりもより多く文學そのものを尊重したい。詩を作つて詩壇と關知せず、小說を書いて文壇と關知しない人が、私には一番羨ましい人である。

×

此頃、私は事每に、殊に自分の書いたものゝ一々に、愚かさと無能と拙劣とを見る。そして堪へがたい自己嫌惡と憂鬱とに襲はれる。どうにかしなければならない、どうにかして自ら滿足の出來るやうな境地に達しなければならぬ、一足飛びにさうした處まで行けたならとは日每の甲斐なき願ひである。が、所詮それは不可能の事である。やはり一步一步遲々たる修養の道を踏んで行くより外に仕方がない。外にばかり向ひがちの愚かな眼を出來るだけ內に向けて、人格の鍛錬と精神の育成とに全ての力を注ぎたい、さうせずにはゐられない、それでなければ何とも言へない不安に壓迫されるからである。

勿論、私の性格はたしかに風變りで、愚かしさに富んでゐる。私は、つねづねルソオに似てゐると思つて、それで自分を安心させてゐるのであるが、たとひルソオに似てゐないにせよ、この風變りの性格には悲觀するを要しない。

それは普通の人としては生きて行く上に困ることであらうが、藝術家としては或る點に於ては强味でないとも言へないからうと思はれるからである。然し、それとて誇るに足るべきものでないのは勿論だが、更に私の頭腦と精神とに至つてはこのまゝでは捨てゝおけない、それは恐ろしく無力で遲鈍だ。しかもこの自己改造に於て、適當の方法を見出しにくいことは何よりも殘念である。

×

氣が付いて、私ははッとした。ある時――いつのまにか自分は安易な生活に慣れて、良心を眠らせて、ごまかしの生活に陷つてゐるのではないか。言ひ換へれば、不眞面目な輕浮な人間になりつつあるのではないか。これは大變だと思つた。人間はかうしていつか知らぬ間にいい加減な出たら目な人間になつてしまふのだ。私の知つてゐる人の中でも、その靑年時代には隨分眞劍に物事を考へる好靑年であつたらしいのに、その日その日をごまかして、自分で知つてゐながら自分を欺いて、どうせ世の中の事はと言つたやうにタカをくつて、出たら目の生活を送つてゐる人がある。ああ、あんなになつてはもう駄目だ。そんなに安易な悟りをひらいては、反つて生きてゐるのがつまらないのだらう。

此頃、某作家の小說を讀んで見たところ、空想的な戀をして一人で喜憂してゐる靑年が書いてあつた、そして小說作家である主人公はそれを嗤つてゐるらしいやうに見えた。私はそれを讀んで考へた。この靑年は、この作に現れてゐるところだけでは、たしかに愚かで、滑稽な位である。然しそれは何といふ羨むべき單純さであらう。之れに反して私は主人公の老成した氣持の無趣味さを感じた。

我々は永久に老いてはならない。平凡な苦勞人のやうな氣持になつてはならない。ものわかりのいい出たら目な人間になつてはならない。永久に若く、潑剌として、反省の心强く、精進の念熾(さかん)んで、凡ての妥協を排し、勇敢で眞劍

で(これは凡て青年の特徵である)なければならないと痛感したのであつた。

ハイネと女性

一

私は書齋にハイネの二つの肖像を掲げて、筆の澁滯した時、筆を擱いた時などに、折々その方を眺めやる。そしては人間の寂しさ、悲しい運命の相をおもひ見ることがある。その肖像は、一つはハイネの巴里時代の初期の男盛りを示したもので、秀でた額の上に頭髮を高く盛り上げて、いかにも巴里の風流才子らしい洒落れた服裝をして、その肉感的な脣に皮肉の微笑(わらひ)を湛へ、その多感な眼には自得の色を隱さないでゐるのであるが、今一つはそれとは全く反對に、沈痛な世界苦(ウエルトシユメルツ)の詩人としてのハイネを示してゐる。基督の顏を思はせたと人をして評せしめた晩年の病苦に窶れた顏が、黑い背景(バツク)に白く浮出してゐるさへが、一味凄慘の氣を與へるのだが、殊にその射通すやうな鋭い眼には、人間の虛僞と痴愚と、並びに人生の悲痛と索寞とが、鏡のやうに影を映(うつ)してゐるのではないかと疑はせるし、額には一條の深い皺が刻まれ、こけた頰の線は寂しく流れ落ちて、いたましくも伸びた髯は、顎を支へた左の手によつて半ば隱されてゐる。私はこの同じ人の二つの時代をさながらに現はした肖像を見くらべて、すべての美しいもの、優雅なものも、みな滅びて墓へ沈んでしまふと歌つたハイネ自身の詩句を想起せずにはゐられないのである。

その從妹であるアマリイ・ハイネに悲しい戀をして、その痛みをアマリイの妹なるテレエゼによつて慰めてゐたけれど、テレエゼもまた彼にとつてつひに路傍の人であつた。巴里に赴いては、アンジエリクや、デイアーヌや、オルタンスや、クラリツスのやうな多くの街頭の椿姬たちと戲れた。さうした『歌の本(ブツフ・デル・リイデル)』と、『新詩集(ノイエ・ゲデイヒテ)』との詩人について

は、又別のをりに詳しく談らうと思つてゐるから、今は上に言つた二つの肖像のあらはしてゐる時代の二つの眞劍な愛情について述べて見たい。その一つは、後の彼の妻マテイルド、實はクレサンテイア・ウウジエニイ・ミラアに對するそれ、今一つは彼の晩年の不幸な靈の戀――ハイネ一代の傑作と評せられる『苦難の花』を獻げたムウシユのためのそれである。

二

マテイルド(ハイネは彼女をから呼ぶことを好んだ)はある貴人の私生兒として一八五一年、セエヌ・エ・マルヌのヴイノオに生れた。けれどもこの高貴な父親は彼女を少しも構ひつけなかつたので、彼女は殆んど何等の教育も受けず貧しい境遇の中に生ひ立たねばならなかつた。十五歳の時、彼女は巴里に出て來て、少しも自分を愛してくれない母親と一緒に慘めな生活をしてゐたが、その叔母の店の賣子に出ることになつた。その折り、彼女の姿がその店の前を始終通つてゐたハイネの目にとまつたのである。彼女は大變美しい、爽かな、可愛らしい、また情熱的な娘であつた。その笑ふときには一列びの白い美しい齒を見せるチヤアミングな口や、頰の笑くぼや、こまやかな皮膚の色や、栗色の髮の毛や、よくとほる聲のひびきは、詩人の心を惹き付けずにはおかなかつた。ハイネは忽ちマテイルドと烈しい戀に落ちた。狂熱と陶醉との時が彼の前に展けた。その頃彼はその友のレワルトに書いて、「君はソロモンの雅歌を讀んだことがあらう? あれをもう一度讀んで見たまへ、そしたら君はその中に僕が今日君に言はうと思つてゐる事を殘らず見出すだらう」と言つてゐる。けれどもハイネは暫くすると、嫉妬の苦惱に堪へられなくなつて、この情熱から免れようと努めるやうになつた。氣儘で、遊び好きで、おめかし好きで、到るところで人にちやほやされて喜んでゐるやうな彼女の性質は、俗物的な氣持を少しも有つてゐなかつたハイネにすらも、その煩に堪へざらしめた。それで、

その翌年には二人の關係は絕たれねばならなかつた、マテイルドは彼女の氣持を淨化しようとするハイネの制御に從ふことが出來ず、ハイネはまた彼女の氣まぐれに調子を合せる事が出來なかつたのだから。けれども數ヶ月の後には、詩人は再びマテイルドと和解して、その生涯の伴侶として彼女をシテ・ベルジエエルの住居に迎へるやうになつた。マテイルドは主婦としての必要な資格は少しも有つてゐなかつたけれど、その後ハイネの愛情は褪めるやうな事はなかつた。ある時の如き彼はとある料理店(レストオラン)で、隣のテエブルにゐた大學生たちがマテイルドと人の目につく程目と目で物を云ひ合つてゐるのを見て、ひどく激昂して、その方へつかつかと行つてその中の最も不都合な奴にいきなり拳固を一つ喰(くら)はせた。その結果はピストルでの決鬪の要求となり、兩敵手はサン・クルウの森へ馬車を走らせたのであるが、決鬪の前にハイネの釋明によつて幸ひ和解する事が出來た、そんな事さへあつた程である。二人の生活が獨逸のある傳記家のいふほど不幸なものであつたとは思へないやうな反證も多く擧つてゐるけれど、二人の間に激しいシインが現出した事は稀れでなかつた。さうした爭(いさか)ひの子供らしい面白い實例を一つ述べて見よう。マテイルドは鸚鵡を飼つてゐて、それを言語に絕するほど可愛がつてゐた。そして良人と爭つてふくれた時に、その鸚鵡に愛撫の限りを盡し、詩人をして嫉妬のあまりこの鳥を殺させてしまふほどの極端な昂奮に導いた。けれどもマテイルドはその最愛の鳥のゐなくなつたのを見ると、非常に烈しくふさぎ込んでしまつたので、ハイネは直ぐまた同じやうな鸚鵡を買つて來なければならなかつたのである。こんな風であるから、愛するマテイルドの爲めに、マテイルドに十分の贅澤をさせてやる爲めに、ハイネはどれ位苦勞しなければならなかつたか知れない。彼が後に時の佛蘭西政府から年金を受けて、爲めにその論敵に攻擊の武器を與へるに至つたのも、また一つはマテイルドの爲めだつたのである。けれどもマテイルドとても決して惡い女ではなかつた。彼女は良人を欺くやうな事はなかつた。そしてハイネが病床に就いてからは、まごころからその看護に盡したのであつた。

三

ハイネの友ハインリッヒ・ラウベが一八四七年にその朋友を巴里に訪うた時、彼はハイネが恐ろしい衰へ方をしてゐるのに驚いた。すつかり痩せてしまつて、半ば明を失し、昔は無髯であつたその顏には蓬々たる髯が伸び放題になつてゐた。はじめはモンマルトルの墓地の近くなるアムステルダム街の「蒲團の墓」に埋もれて、のちには、アヴュニユウ・マテイニヨンの住居で、彼は獨逸の故郷を慕ひながら、アンデルセンに與へた彼の詩にあるやうに「故郷の遠さよ！ 私の胸の重たさよ！」と嘆じながら、曾つて不信を以て誇稱した脣になほいくらかの反語は伴ひながらも神の名をのぼせ、ヘレネ人からナザレ人になりかはりながら、我が生の無常迅速と人間の運命の儚なさを嘆じてゐた彼の病床に、獨逸と佛蘭西との多くの友は慰問を怠らなかつたが、その中に彼の最後の幾月かを美しく飾つた一人の女性があつた。それはのちにカミイユセルダンの名のもとにハイネの追想錄を著した獨逸の一女性で、その本名をエリイゼ・フオン・クリイニッツといつた。彼女はボヘミアのプラアグに生れ、まだほんの若い時に巴里に來て、ある男と非常に不幸な結婚をした。その男は彼女と別れるために精神病だと言ひ立てゝ、彼女を癲狂院へ送らうとしたので、彼女は英國へ逃げて行き、後ち維納を經て巴里に歸り、維納の作曲家ヴエスク・フオン・ブッツトリゲンにたのまれた事でハイネを訪ねたのである。

彼女はその時二十八歲であつた。あをい眼と明色の髮とをした女で、そのやさしい樣子、その魅力のある容貌は、一目見た時からハイネの心を奪つた。間もなく彼女は詩人になくてならぬものとなり、彼女が二三日も訪ねて來ないやうな事があると、ハイネの苦しみは非常なものであつた。そしてこのエリイゼに宛てた手紙と詩との中には、それまでのハイネの戀の詩の文句に見出され難いほどの崇高なまた深遠な感情が盛られてゐるのである。ハイネは彼女を

運命の心によつて自分と結び着けられた眞の許婚者だと呼んでゐる。プラトニック・ラヴで終るべく強ひられてゐる二人の愛の悲しさを、彼は或ひは泣き、或ひは笑つた。彼女がいかに終つたか、それは知らない。然し彼女がハイネの「悲しい秋の最後の花」となつた事に、そこに美しい女性の心を想ふ。それだけで彼女は我々の心に生きるのだ。

ムウシユといふ名で呼んでゐた、彼女に與へたかの偉大なる詩に於て、死者と彼の柩のほとりに咲いてゐる悩みの花との神祕的な成婚の詩に於て、ハイネの歌つたほどの高い調子は、近代の詩人中最も崇高なるシエリイに於てゞなくては容易に見出され得ないことは、既にブランデスも言つてゐるところである。それで私はその詩を玆に掲げて見たい氣もするが、あまりに長い詩なので、それは私の譯出する全集によつて見ていたゞく事にして、その代り玆には前に一寸擧げた『生の航路』とよぶ詩を掲げてこの稿を終らうとおもふ。

笑ひと歌と！　日光は
きらめき搖れる、波は搖る
たのしげな舟を、その中に
わたしは友達と氣輕に乘つてゐた。

小舟は微塵に碎かれて、
泳ぎの下手な友達はみな
祖國の海に沈んでしまつた、
嵐はわたしを打上げた、セエヌの岸に。

わたしは新しい船へと乘つた、
新しい友達と。他國の波は
わたしをゆすぶりもてあそぶ――
故郷の遠さよ！　わたしの胸の重たさよ！

そしてまたもや歌と笑ひと！
風は吹き吹く！　舟板は鳴る――
空には最後の星も消え失せた――
わたしの胸の重たさよ！　故郷の遠さよ！

私はこの詩を口にする時、やゝ老いた心の中に、二十歳の靑年のやうなある感動をさへも覺える、私の胸の重たさよ！　故郷の遠さよ！　諸君も試みにこれを二度ほど繰返して歌つて御覧なさい！

いろいろな反省

×

ケエベル博士は「日本人の精神並に性格を甚だしく醜くするところの傷所(きずどころ)」として「虚榮心と自己認識の缺乏と及び批評的能力の更にそれ以上に缺如せること」を擧げてゐられる。この批評の適切すぎる事は殆ど私をしてフイジカル

な痛みを感じさせる位である。私はまづ試みに自分の一番熟知してゐる一人の日本人を考へて見る。何と云ふ驚くべき度合に於て彼はこの缺點を有してゐるであらう。そしてその日本人とはかく言ふ私自身に外ならないのだ。私がなほ一個の文學者であり得ると云ふ事は、殆ど滑稽な事にしか思はれない。けれどもこれはひとり私ばかりにも限らないやうに思はれる。

我々は實にナイーヴである。ナイーヴであるのはいいが單にナイーヴであるばかりではつまらない。それは結局抒情詩を生み得るに過ぎない。我々が盲目的な西洋崇拜者であつたり、我々がすべての思潮を易々と泳ぎ拔けたりするのも亦その爲めである。そしてかうした流行と雷同とは我々がいかばかり自己認識を缺いてゐるかと云ふ事を證據立ててゐる。自己認識は反省又は自己批評から生れる。自己認識と批評的能力とは畢竟シノニムだとさへ言ひ得られよう。いかなる國も我が文壇ほどにすぐれた批評家を有しないところはあるまい。現今のある批評家に至つては、自分のその時々の讀書より得た落想をその與へられた作品にあてはめて能事畢れりとしてゐる人さへあるらしく思はれる。それ故一作家に與へられた評語が何等の變更なしに其儘他作家に適用されて少しも不都合を感じない程である。勿論我々はこれ迄全然批評家を有しなかつたわけではない。が。硯友社時代より今日までの歴史を顧みても、批評に於て最も貧弱であつた事は疑ふ餘地がない。批評的能力を缺いては決して複雜深刻な藝術は生じて來ない。この能力の缺如が我々の文學をしていかに淺薄な單純な貧弱なものとしてゐるであらう。

自己認識と批評的能力の缺乏とは直ちに懷疑的精神の缺乏を意味すると言つても甚だしく誤りではなからう。淺薄なオプテイミストはいかなる國に於てよりも我々のところに於て榮えてゐるやうに私には見える。日本人が樂天的國民であるか否かについては問題があらう。我々は佛教國に生れてゐる、そして我々は既に兼好や長明の如き人を出してゐるではないかと云ふ人もあらう。が、私は未だ曾つて我が國に於て深刻な懷疑の聲を聞き得たとは信じられない。

一體、日本人は極めて健全な民族である。實に我々ほど中庸の美德を有してゐる民族はない。然しこの事が我々の文學に有利な結果を齎したかは疑問である。我々が果して眞に悲劇的（トラギッシュ）の域にまで達する作品を生んだか？　私にはブランデスの極力攻擊してゐる丁抹の文學が丁度我々の文學に相當してゐるやうに思はれる。そしてこれは皆我々の突き詰めて考へる事の出來ない不徹底な感傷性の結果だと思ふ。我々には餘りに懷疑が無さすぎる。我々はその批評的能力の缺如に基くイージイ・ゴオイングを棄て、安價な解決を下す事を急がずして、もつと徹底した考察に努めなければならない。近時輩出した勇敢なデモクラット諸氏もまた餘りにお手輕すぎはしないか？　何等の懷疑をも經ない感憤に過ぎなくはないか？　私は昔日の所謂人道主義者に與へられた警告を今日再び繰返さずにはゐられない。

×

恥づべきものを打ち碎けとはヴォルテエルの標語である、私はそれを恥づべき偏見を打ち碎けの意となして、それをこゝに繰返したい。私は此頃偶然、かの有名なドレフュス事件の顚末を書いたものを讀んだ。そして、今更に人間の偏見の力の恐ろしい事を感じた。猶太人の問題は我々日本に取つては何等痛痒を感じない問題だらうが、然し、人種問題は將來我々の躓きの石となる事はないか。

愛蘭の狀態は、愈々嶮惡の度を加へて行くらしい。しかも愛蘭はひとり英國にあるのみではない。曾つて鎖國攘夷を唱へた人々の子孫である我々は、人種的偏見に最も深く巢くはれてゐはしないか。我々は米人の無法な人種的憎惡に激昂する。然し、それはただ彼の罪にのみ歸せられるだらうか。我々の朝鮮人や支那人に對する態度を顧みる時、その激昂の火も、一斗の冷水を浴びる事はないか。その國內に於てさへ名譽ある特殊部落といふものを有つてゐる我我は、米人の偏見を怒るの資格が果してあり得るか。

私はあらゆる偏見を惡む。が特に、かうした人種的偏見を、一日も早く滅却せしめたいのだ。そしてその尊ぶべき

今殆んど全く閑却されてゐるこの問題に一般文學者が眼を注がれん事を希望してやまない。
事業に貢獻するのには、文學者こそ正にその人ではないか。私は階級的闘爭を少しも輕視するものではないが、更に

×

天才といふ言葉を聞くと、皮肉な微笑が覺えず口角にのぼる。かうした言葉の響だけでも、一人の人間の生涯を誤まらせるに十分だと云ふことを考へると、概念と云ふものの力に驚かずにはゐられない。若い心を容易く拉し、空しい夢で、これを狂氣に導く。私はこの言葉を憎む。

こんな言葉のために懊惱し、この概念に玩弄せられ、餘計な錯亂と昂奮との日を送つてゐる人々を見る每に私はこんな罪深い言葉を發明した人は抑も何人であらうかと考へる。そして、これ以上に甘い言葉がなぜ無いだらう、さう考へると笑ひたい氣がする。

眞に人生を見、また人間として出來上るためには、先づさうした幼稚な固定觀念から釋放されなければならない。此頃の長篇小說を發表する若い人々に對して、私は同情を失ひたくない。けれどもその中には、餘りに思ひ上つた無反省な人の多いのが殘念である。いや、或る點から云へば、その人達の無反省と自己惑溺とが、その作品の酵母であるとも云へるやうに思はれる。その熱がさめた時、そこに一人の凡物が殘る、恥かしい囈語の記錄が殘る、それでは自分でも堪らない事だらうと思ふ。然し幸ひに、さうした人の自己欺瞞は餘程重賽なものらしいから、その點は心配は要らないかも知れない。

自負心は人間の最後の弱點である。かなり出來上つた人でも、自負の心を殺して行く事はなか〳〵因難であるらしい。隨分高い心境に達してゐる人として常々敬意を拂つてゐる人がたまたま不用意に洩らす言葉を聞いて、今更驚くやうな事もあるのだ。だから、まだ未完成な若い人々が、俺は天才だとか、俺はえらいとか呼號するのも無理はない

事かも知れない。人間の心を深く見て行くとき、あらゆる意味の自負心が生活の支柱であることを悟らずにはゐられない、それゆゑ私はそれを一概に責めたくない。然しそれは今專ら行はれるやうな、餘りに安價な、輕佻な、子供じみた高慢心、それから生ずる醜い傲慢な態度、さういふものであつてはならない。それは反つて心底で自信のない事を告白するやうなものだ、眞に自信のある人の態度は、もつと謙遜であるべきだ。宗教的な謙虚な沒我、そこ迄は到達する事が出來なくとも、せめて俺はえらいとか、俺は天才だとか豪語しなくともすむ位えらくなつて欲しいものだ。

×

多くの人間、殊に文學者を、イデアリストとリアリストとの二つに分類すれば、大抵の人は年の若い時分は概してイデアリストである。

純潔で無垢な心には美しい夢が宿る、然しその夢が辛辣な現實との接觸によつて、脆くも碎けてしまふ時、多くは一人前の苦勞人になつてしまふのである。無反省な文學的な昂奮は、その熱が退いてしまつた時には、自分ながら狐につままれてゐたやうな空虛感と寂寥感とに堪へられないであらう。

然し、さればとて、それ等の人が現實に相面し、年効と經驗とに敎へられて、靜かに自分と云ふものを顧みるに至つた時、矢張り一人前の苦勞人となり、苦勞人哲學に安住するに至つたならば、それもまた痛ましい目擊である。その人の凡ての喧騷な絶叫が單なる若氣の至りに過ぎなかつたのであるとすれば。

然しまた、中には初めからさうした夢を有たない人もある。初めから現實生活に順應して、妥協の偸安に心を傾けて、小さく悟りすます世間人は、文學者の間に於てさへも極めて多いやうに見受けられる。

否、今の文壇の基調をなしてゐるのは、かういふ人の苦勞人哲學であるやうに思はれる。どうせ世間の事は分らんよ、今更じたばたしたつて始まらんよ、何よりも生活さ、これが苦勞人哲學だ。

然し稀には生れたるイデアリストもないではない。二葉亭四迷の如き正にその人である。「思想ぢや人生の意義は解らん」といふ結論にまで到達して悲痛な惑溺に沈下しつつも、(否、そこ迄行つたのも彼がイデアリストだつたからだ)なほ止み難い理想の追求に生命を堵したその生涯に對しては、私は滿腔の共感と敬意とを傾倒せずにはゐられない。

私は思想といふものをそれ程尊重してはゐない、人生の究極は思想以上だと考へる。けれども思想以下では、餘りの無思想と無信條では、單に一般的な苦勞人哲學では滿足出來ないのである。

もつと迷ひたい、もつと苦しみたい、もつと積極的な生活信條をつかまへたい、幾度び破られ傷つけられ、人生の鐵槌に打撃されようとも、再び起き上つて、その初一念の追求に進みたいのである。

然し、その翹望より轉じて現前の自分の生活を顧れば、恥かしい至りである。今更他人を責め得られる限りではない。けれども、逐日、我れ人共にこの熱意を固守して進むを得ば、どんなに生き甲斐があるであらうか。

藝術家の心がけ

一

曾つて私が本紙(時事)上に於て、倉田百三氏の『俊寛』に對する感激を述べた時、文壇の考巧なる人々は微笑せられた。私は遺憾なく自分の衷の詩人を暴露したからである。然し私が詩人であるといふ事は恥辱ではない。私が小說を書いても、批評を書いても、常に詩人にすぎないといふ事は、毫も赤面すべき事實ではないのである。すぐれた客觀批評の大家の林立してゐられる評壇に、一人の愚直な主觀批評家があつても差支はなからう。彼の感激が道化て見えるならば微笑されてよい、然し道化者のみが眞實を語るのである、沙翁にこれを聽くまでもない。

私は今の文壇の人々が餘りに道化者でないことを惜しむ。人に笑はれることを恐怖するものはつひに眞實を云はず、また眞實に生きることが出來ぬ。すべて藝術家は自分の傷口を天日に曝すべきである。自分の魂の闇黑を公衆の前に裏返して見せること、宛かも神に懺悔するが如くでなければならぬ。公衆もまた一つの神である。今の流行作家の如くお子供衆の御見物として見るべきでなく、然し神として見なければならぬ。神の前に立つとき笑はれることの恐怖が何であらう、利害の打算が何であらう。

見よ、文壇の人々を。彼等は餘りに利巧者である。その體裁をつくらふこと世間人と全く擇ぶところがない。霜降の外套をつけ、大島紬の上下きちんと揃へて、腕時計の金をきらめかし、以て雜誌記者の信用の擔保とする。その書齋の裝飾もまた成金のそれである。この人々の商賣上手は全く驚嘆に値するものがある。然し、藝術は商賣ではない。私の如きは商人の子と生れながら、商人に適しないからこそ、藝術の世界に入つたのである。然るに今更算盤を持ち、掛引を行ひ、國勢調査の時に書き出した著述業をリテラリイに手びろく行ふべきであるかと考へずにはゐられないのだが、實際に於いてはかうした考へはウーロン茶あたりで物わらひの種となるのである。笑はれることの恐怖は藝術を窒息せしめる。眞實に生きんとする時、一切の世界は消える。それがいつでも眼中にある人は、畢竟商人にすぎない。藝術家は眞實を俟つて始めて生きる。我々は『白痴』のムウシユキン公爵の如く、滑稽に見える事を慮れてはならない。この勇氣あつてこそ、また人を動かす事が出來るのである。その點で常に世間を眼中に置く人は、長い年の後には、反つて世間を失ふ事になると私は確信してゐる。藝術家は何よりも捨身にならなければならぬ。「身を捨ててこそ浮む瀨もあれ」の古歌は、普通解せられてゐるよりもずつと深い內容を有つてゐるのだ。捨身になれない者は永久に救はれる望みはない。捨身になれない藝術家は、お子供衆のお慰みに、額をポンと叩いて、面白可笑しい落し噺や人情噺ぐらゐは出來ようが、眞に人を動かすことは出來ない。藝術家に取つては、藝術が凡てゞある、藝術の爲めに

は自分の一切を犧牲に供すべきである。全生命を打込んで一作を、僅か一作でも完成する時、彼は生きたのだ。

今の文壇に弛緩した狀態を察するには、今いかなる作家が流行兒となつてゐるかを見ればよい。そしてさうした人人の註文に忙殺せられて書きなぐつたやうに見える短篇などが兎角の批評を受けて、畢生の努力を傾注して成つたものの如きすぐれた長篇などが閑却され無視されてゐるのは奇怪至極の事實である。

世には一年中文壇の非難ばかりをして暮らしてゐるやうな批評家がある。私はそんな人と同じになりたくない。人を非難するよりも自ら省みることが賢くもあり、有意義でもあることをよく知つてはゐる。然しそれにしても、時々今更のやうに驚くことがある、何といふ調子の低い文壇であらうと。商人社會でももつと壯快な話を聞くことが出來る。商人社會に、反つてもつと眞劍な生命がけの態度を見ることが出來る。その子供の文學者にならうとするのを危險がる親たちは、最早時代遲れであらう。

現文壇の流行作家は、例へばU——氏の如き、確かに敬服すべきすぐれた手腕を有つた作家であるが眞の藝術といふべくむしろ遠い。なぜなれば、その作品の背後に世間人があつて、しかも詩人がないからである。氏の笑ひにはペシミズムがない、氏の饒舌には何等の信條もない、即ち、ゾルレンがない、善に對する意志がない、しかもこれこそは藝術家の脊髓である。しかもかかる言葉を今の大家諸氏は衒學だと思ひ、かく言ふ者をアカデミックフウルだと笑はれるであらう。

月評家の名の最後に、私の名をも列記してくれた、即ち私を他の人々と反對に、批評家として認めてくれたN——氏の名をも、私はここにその御禮として揭げて見よう。氏の如きまた現下の作家心理のよき標本である。氏は多少惡ずれのした、然しかなり正直な心を有つたお坊つちやんであるらしいが、然しただそれだけである。氏の作品もまた曾つて私の敬服したやうなたくみな手腕を示してはゐるが、藝術といふべくむしろ遠い。描寫の手腕などといふ事は、

大切は大切であるが、畢竟第二義的のものである。氏にもまた善に對する意志がない。それゆゑ肯定もなければ、否定もない、畢竟ただごと作家である。そして今の文壇には、如上の二氏のみならず、ただごと作家が充滿してゐるのである。

今の文壇の作家たちの多くは、商賣人であるくせに、餘りに寡慾に過ぎるやうである。即ち、一流の大家として、原稿が賣れて月評家に賞めて貰へさへすれば、それで至極滿足なのである。酒屋の亭主が商賣繁昌し、家內息災でありさへすれば滿足してゐるのと同樣である。彼等はそれ以上を求めない。ただごとにならずにはゐないわけだ。かうした多くの作家の如く手堅い商ひ振りをしてをれば、信用は確實なものであらうが、大した儲けはあるまい。

私はより多くを求める。この點で私は生れたるロマンテイケルであらう。然し私の意味するロマンテイシズムとは、T――氏やS――氏のそれではない。私は世界と人生の鍵として心を用ゐたい。心臟の鼓動は人生の鼓動であるから。私はまた現象を通じて、常に本體を見んことを願ふ。いかなる平凡卑近の事實の中からも、深い象徵的意義を見出さんことを願ふ。地上の限界を、即ちあらゆる常識を飛び越したい、よしその爲め無限の深淵に身を滅さうとも。生くるは即ち冒險である。藝術家が何故心の冒險家でなくてよからうぞ。

文壇に對する非難は、それが必ず非難者それ自身に戾つてくる。そしてそれは當然である。私の文壇に求めるところも、つまり私自身に求めるところに外ならないのである。

二

囘顧して私は時々驚くことがある、何といふ調子の低い、散文的な文壇であらうと。そこには何等藝術に殉ぜんとする壯烈な意欲がない、善なるもの美なるものに對する抑へ難い渴望がない、熱烈な肯定もなければ否定もない、絕

望の悲劇もなければ十字架上の笑ひもない、愛もなければ憎みもない、血に到るまでの捨身もなければ、狂氣に到るまでの激情もない。一言にして云へばそこには何等のゾルレンもない。そこにあるものはただ生ぬるい生ざとりと、職業的勤勉とがあるだけである。世間的名聲に對する欲望と卑小な自得とがあるだけである。しかもこれが我が現在の最高文化を代表する文壇の主潮なのである。さうした自得した人々は、凡ての眞劍な努力に對して、冷笑と侮蔑を注いでゐる。嘗つて有島武郎氏はその或る作品の或る描寫を滑稽だと冷笑されたのに答へて、「凡ての眞面目な努力の有様を、その當事者の心になれない第三者が見ると凡そ滑稽な物であるに違ひない。」と言はれた。我々もさうした冷笑に對しては、またこの言葉を以て答へるの外はない。全然違つた別箇の世界に住んでゐる者が、互に理解し得ることは全く不可能の事である。二者の間にはただ戰ひあるのみである。一が勝つとき他は負けなければならない、二者は兩立し得ないからである。そして私がかく言ふ二者とは、藝術に對する何等の愛もなく、善に對する何等の意志もなく、常識の世界に安住して、安易なる文士生活を樂しんでゐる人々と、世間智に乏しく、然し熱烈なる要求に燃えて、藝術の愛に殉ぜんとする人々とに外ならぬ。

何等の要求をも有しない作家は、換言すれば何等善に對する意志を有しない作家は、畢竟ただごと作家たるに過ぎぬ。ただごと歌を作る歌人は輕蔑せられる、しかもただごと作家は他人を輕蔑して得々たるものがある。何たる奇觀であらう。世の中には時々こんな面白い事實もある。然し、諸君は餘りに幸福すぎる、かかる幸福人はいかに巧妙なる說話の手腕を有するとも、いかに描寫の冴えを示し得るとも、畢竟藝術家ではない。しかも今やかかる人々が現文壇の主權者なのである。心ある人々がこぞつて現今の文壇に侮蔑の眼を向けてゐるのも、決して理由のない事ではない。

かかる文壇にも、尊敬すべき眞摯な眞の藝術家が全くないわけではない。しかもそれ等の人々の作品が概ね文壇か

ら閑却せられてゐて、かの子供衆のお慰みに人情噺の一くさりを演じようといふが如き安易な作家が重んぜられてゐるといふ事は何とも我々には理解しがたいところである。

私は自得せる現在の或る人々に對しては、これを非難する氣もなく、その覺醒を促す氣もない。彼等は縁なき衆生にすぎぬ。私は來るべき新興の勢力に多大の期待をかけてゐる。やがてはこの低調と沈滞とを破るべき新しい藝術家の一團も現はれるであらう。

私の誹議者等に

私はおとなしい人間である。あまりおとなしすぎて、子供の時などは、よく學校で虐められたものである。その癖ひどく反抗的で、意地つ張りである。忍べるまで忍んでゐるが、我慢が出來なくなると、思ひがけない大膽さをもつて思ひ切つた事をやる。そこで虐めつ子どもが不意を喰つて、目玉の飛び出すやうなとんでもない目に遭はせられる。私の性格の中にあるこの矛盾を、その弱さ臆病さを知つて、その強さ、その大膽さを知らない人は意外なところで背負ひ投げを喰はされてしまふ。私は自分でも危険な性格だと思つて、やや持て餘し氣味であるが、感情が激して來ると、自分で制御が出來なくなつてしまふのである。

おとなしくしてゐると、それをいい事にして、寄つて集つて虐めにかかる――それが世間の通弊である。そして殘念ながら文壇に於ても、私はこれまで鴉の太い嘴の矢が、あはれな犧牲者の上に無數に落ちかかつた例をあまりに屢屢見た。十七歳の時東京に出て來てから、今日で十有二年間、昨日より今日へと僅かな麵麭のために喘ぎながら、くだらぬ下受仕事に乏しい才能を浪費しつつ、文壇の奈落で暗い蠢動を營んで來たお蔭には、私は知らずにすめばそれ

に越したことはない、いろ〳〵な文人の暗面を、いやでも見せつけられた。私はこれだけでも自分の生涯を呪はずにはゐられない。

思へば私は街頭に、新聞紙上に、到るところで目を射る社會の不合理に、冷酷に、忌はしい弱い者いぢめに、いかに身體中が火になるやうな憤りを覺えたことであらう。しかも自分がそれを奈何ともすることが出來ない無力者であること、自分もあはれな一個の弱者にすぎないことに氣付いては、私のかよわい單純な心は、いかに致命の一突きを感じたことであらう。

ああ虐げられたるものの涙流る

と悲しみ、

されどこの世は地獄なり、深き地獄なり

義しきものは常に滅び、惡きものみな勝ち誇る

と嘆じたこの小さな詩人は、つひに、

歴史は勝利者のものだ、

しかし、藝術は敗殘者のものだ！

敗殘者の友はただ詩人のみだ。

と叫ぶに至つた。一人の詩人、一人の藝術家としてでなくしては、つひに此の不條理に打克つことが出來ないのを悟つたのである。しかもこれ等の不合理は、ひとり廣い、遠い社會の一般的事實であるのみならず、また私のより親しい文學者間の小さな世間に於けるそれでもあつた。

弱いものいぢめ――何といふ恥辱だらう！　しかもこれ人間の止み難い本能である。生物中の最も激烈なる共喰動

物よ。汝等の荒々しさには、狼ですらも驚くだらう。强國は弱國を虐げる、資本家は勞働者を虐げる、彼は此を虐げる。これがこの人生の實相である。私は『力卽善』と題する詩の中で、

人の世は間に合せなり、
ここにして泣くはおろかし。
ただ强き拳をねがへ、
强き拳よ、これにまして語るものなし。
力ある拳くだせば
粉微塵に正義は碎くる。

と、かう叫んで、あらゆる弱蟲と出來損ひとを壓しつぶせと說敎したニイチエの弟子となつた。だが、これは弱い心の、（ニイチエがさうである如く）絕望的な叛逆に過ぎなかつた。私は不信者の國に、不信者の胎から生れたとは云へ、生れたる基督敎者であつた、伯希來人であつた。私はゲエテ風の冷靜な達觀の人には容易になり得ない。私は此災厄が奈何ともし難い人生の實相だと知つてはゐる。然し、私は一管の筆の力の許す限り、是等の不合理、無道、暴虐と戰ふつもりだ。私は私の「打たれる隣人」のために、よしそれは徒らなる言葉の響だけに過ぎなくとも、なほかつ言擧せずにゐられない。つひにその行爲の空しきを知りつつも。

だが、今は先づハイネの率直さを以て、自分自身のために。

私はこれまでおとなしくして來た。もう五六年も前になるが、山口佐太といふ新潮の投書家によつて、淸水柳三郎君のやうな天才の爪の垢でも煎じて飮めと言つて、その凡庸を罵倒されたのを始め、詩壇の一隅に辛うじて存在してゐるばかりのあはれな者でも、相應に罵詈雜言を受けて來た。私は自分を漫罵した人の姓名は決して忘れないといふ

弱點を有つてゐる。然し私はこの弱點を強ひて押隱さうとは思はない、私はその點でハイネやルツソオの率直な性情を欣慕するものである。私が他日一個の人間として出來上つた人になつて、さうした漫罵をも毫も意に介せず、さうした意味深い名前をも忘れ去ることが出來たならば喜ばしい事であるが、今強ひて忘れようとしたり、毫も意に介しない振りをして見たところで、さまで賞讃すべきことだとは言へない。のみならず我々人間が弱小にして百千の缺點に巢くはれてゐるからには、いかなる漫罵も當らないといふ事はないのである。從つてそれ等の漫罵家は、いかなる理由のない不合理な反感から出發してゐようとも、なほ何等かの意味で我々に敎へるところがあるに相違ない。何故その名を忘れてよからうぞ。匿名ならば百方手段を盡してその本名を究めなければならぬ。

私は長いこと詩壇に閑却せられてゐた、「未だ認められずして既に忘れられた」あはれな詩人であつた。十年間私は寂しく一人の道を步いて來た。私には仲間はなかつた、また仲間をつくらうとも思はなかつた。私がどれほど時の詩壇から不當な虐遇を蒙つたかは言ふまでもない。もつともそれは正當であつたのかも知れない。私には自信がなかつた。私はそれが當然なのだらうと思つて、常に意氣沮喪した、暗い慰めのない氣持になつて、詩稿を破り棄てて、苦い酒を飮んだ。つひに私は長いこと詩を棄ててしまつた。然るに思ひがけなくも年を經て、ひよろひよろ伸びた日蔭の草も、幸ひに微かな日光を得て、見すぼらしい花を開くことが出來た。今、私も我が詩壇に於ては、一人の大家であるさうである。——何たる不思議な現象だらう、また何たる滑稽だらう! 私が大家? 考へて見ると噴き出さずにはゐられない。私が大家! よし大家として置かう、ところでこの大家はなほ依然として詩壇の繼子である。そしてまた詩壇に於て孤獨な一人の道を踏んで來たやうに、文壇に於ても孤獨な一人の道を踏んで行き、再び文壇の繼子とならうとしてゐるのである。

私は長いことおとなしくして來た。然し杯は滿ちた。私の衷の危險な獸が眼を醒ましてしまつた。私はただ虐めら

れて閉口頓首してゐる模範的の世渡り上手ではない。然しハイネのやうに、遂に自分自身の毒矢に當てられようとも、エントゲルッングを求めんとするものである。私の手套は今や投げられんとする。そして何がこの危險な猛獸をからかつたのだらう？

それは一つの黑い集團であつた、一人一人の名前を以ては呼べない、一つの影であり、一つの雲であつた。彼等は最近數ヶ所から鬨聲を擧げた。彼等の中の一つの聲は言つた、「汝は卑俗なる小曲作者である、汝は低級な俗謠作者である、詩人ではない」と。これが私に向けられた矢である。私が詩人でない、低級な俗謠作者、小唄作者に過ぎないと云ふのか！　私には自信がない、然し自分が詩人であるといふ事だけは（たとひ嚴正な歷史的評價に於て第二流の小詩人であらうとも）それだけは臆するところなくこれを言ふ。そして公平なる讀者に、私の三卷の詩集を提供して、その公平なる判決を得ようとするものである。尤も私の意味する詩人とは、佛蘭西語や、死語、廢語で、その思想感情の貧弱を蔽はうとする詩工を意味するのでなく、よし一篇の詩は作らなくとも、眞に魂の底から感動することの出來る一個の人間をさすものであるから、詩人といふ語の概念が違ふとすればそれ迄である。それから卑俗と云ふのが私の比較的新しい小曲の試みに對する非難ならば、私はいつでも啓蒙の勞をとることを辭さない。私は新しい民謠を心がけた。俗謠を卑俗として排斥する人々には、私もまた卑俗になるのは尤もである。去なしよいなしよと思うたうちに太郎が生れていなされぬ、卑俗である。博奕打たしやる大酒呑みやるわしの布機むだにして、卑俗である。親は子というて尋ねもするが親を尋ねる子はないぞ、卑俗である。心短氣でわしや國を出て今はならはぬ職をする、卑俗である。だがこの卑俗の中にどれだけの眞實、どれだけの生命があるか。この中には生きた人間がある。そして生きた人間が卑俗ならば、何が卑俗でないか。成程、死んだ人間ならば卑俗ではない、彼は飯も食はず排泄もしないから。丁度そのやうに美しい死文字を並べただけならば、卑俗ではないかも知れぬ。だがそれは空虛ではないか。だが餘り

長くなるからこれについてはまた別に書くつもりだ。また他の二三の擧についても他日にゆづつておく。よしハイネが常に非難されたやうに、闘爭的と言はれようとも、私はこれからは何事にも沈默は守らないつもりなのだから。おとなしく我慢はしてゐないつもりなのだから。

序だから福田正夫君にも言ふ。貴君は二三ヶ月前に、私が日本語で長大な敍事詩を書くことの不可能を論じたのに對して、短い詩だつてつまらないぢやないかと言つて、私の反省を求められた。詩劇であらうと小曲であらうと、凡ては價値の問題だ。藝術的價値さへあれば、いかなる形式のものでもよい。が、私はただ日本語で書かれる長篇詩は韻律を無視する限り無意味だと云ふのである。そして長篇詩を散文化せしめない事は、日本語では不可能なのである。それは現に貴君の作がよく證明してゐるのである。私は今詩壇のことには殆んど何等の興味もない。私は詩壇とは今後絶緣することになるだらうと思つてゐる。然しこれからも襲擊には應戰するつもりだ。私にはいつでもこの問題を更に詳しく論ずる用意は出來てゐる。

序に西宮藤朝氏にも言ふ。私は余は批評家であると揚言するだけの自信がない。それは私が批評そのものを尊重してゐるからである。批評家に對して要求するところが多いからである。それで曾つて時事に月評を書いた時も『批評ではなく』と題し、また私は批評家ではない、批評家の天分を有たないと言つたのである。然るに貴君はその翌月の「新小說」に於て「誰かが批評家は作家より一段も二段も劣るといふとそれをよく考へて見もしないで創作月評をするのに私は批評家でないがとか、私が批評をやるのはほんの片手間であるなどと冒頭に斷り書きをしてから始める云々」と云つて、さうした無定見な馬鹿者を攻擊された。が、その頃そんな事を言つたのは私ばかりであるから、その無定見な馬鹿者は即ち私であるやうに見える。名前は擧げてなくとも、こんな明白な場合には一言辯ずる必要はあるであらう。それでこの事は曾つて本誌で月評を試みた時にも一寸言つては置いたが、どうせ序であるから、今日は敢て貴

君の名を掲げて言ふ。

宇野浩二氏がその勝利に醉うて、昂然として「詩人と批評家とは作家よりも一段も二段も劣る」と放言した時、詩壇は沸騰した、雜誌『詩王』の人々がこれに答へたのを始め、其他隨所に火の手があがつた。若山牧水氏の如きは讀賣紙上に於て、余の一首の歌なほ一作家の全集に匹敵すと云はれた。（丁度その同じ日の讀賣に於て、私自身も詩壇の回顧に於て宇野氏の言を引いて半ば宇野氏の誤謬を指摘し、半ば詩壇に警告した。）批評家もまた傷けられたことは疑ふべくもない。正面から反撃した人もあつたやうであるが、西宮氏自身も右の一文に於て明かなる反感を示してゐられる。そこで宇野氏に對する私のある程度の同感は、詩人と批評家諸氏を不快にしたことは確かである。かういふ事は要するに個人の問題で、宇野氏の如く大ざつぱな放言は恕されないが、概して現今では作家の方が複雜味をもつてゐるとだけは言へよう。所でこの言が溫厚な西宮氏をしてなほこの激語あらしめたのは無理もないが、然しながら、よく考へて見もしないで云々とは何事であらう。名前さへ擧げなければどんな事を云つてもいいと氏は思つてゐられるのであらうか。私は敢て言ふ、私が自分は批評家でないと云つてゐたのは、ずつと以前からの事である。私は今更宇野氏を大導師にしなければならぬ程弱小ではない。ただ然し貴君の書かれる如き批評でよければ、私は何も自分は批評家ではないと謙遜する必要は毫もないと思ふのである。――私の危險な性格はここでまたその鋭鋒を顯はしてしまつた。失策は私の常例だ、よし、この儘編輯者へ送つてしまはう。（大正九年八月）

附記。これは當時の私のおろかな激昂、醜い心の有樣をそのまゝに示してゐるものなので、こゝに收めるのは隨分苦痛であるが、一は研醜共に蔽はぬ公明な態度をとりたいのと、一は現在の心境への過程を示さうために敢て除去しなかつた。

藝術と藝術家の生活

――ノオトよりの斷片――

モラリスト曰く

最も美しい詩が卑劣な心からでも生れること
ああこの呪咀よ、――
このにがい眞實を知つてなほかつ
誰か藝術をたふとぶものぞ！

藝術を思ふ時私の胸は躍る、藝術の無意味なることに就いて、確信を以て語る時といへども、私はひそかにそれが甲斐なき反抗であることを知つてゐる。宛も人生の無意味なることと、空虛なることに就いて、何等非難すべき缺陷なきシステムを樹立した厭世哲學者もただちに自殺を斷行し得ないやうに――ショオペンハウエルは、自殺を以て、ひとしく生きんとする意志の主張と見做して、之を愚なわざと爲したが、併し自殺の行爲それ自らは、疑ひもなく厭世觀の最上の形式である――文學といふものに對して、あんなにも辛辣な侮蔑的表白をなした長谷川二葉亭も、遂にまつたく、文學を棄て去つたのではなかつた。否、反對に、彼の胸に熾烈な文學の愛の燃えてゐたことは、多くの事實によつて推察する事が出來ると思ふ。あの異常な飜譯上の苦心は、更にかの三個の長篇小說のために費された刻苦は、決して文學を愛しない人のなし得るところではない。

我々文學者はすべて、ヴィナスの山に迷ひ込んで、再び出づることを知らないタンホイゼルである。我々は遂にこの

妖女ヴィナスの魅力を脱することは出來ない、そして彼女と戯れることによつて、遂に神を忘れてしまふ、然り、神を忘れて了ふ。藝術家は、彼が藝術家であるといふ唯それだけで、すでに異端となる、不信者となる、背敎者となる。

×

藝術は人格の反映たと云はれる。人格上に缺陷ある人の藝術は、結局、缺陷ある藝術であつて、決してより長き靜價を保つことは出來ないと云はれてゐる。私はこの俗論を嘲笑せずにゐられない。私の見るところによれば、どんな背德の人間でも藝術家たり得るであらう。否、背德の人間であるといふことが、藝術家として强味となる場合がないとは限らない。ハインリッヒ・ハイネの人格に就てはこれを誹議する人尠しとしない。メエリケの如きは彼の詩には感嘆するが、彼の知合にはなりたくないとさへ云つた。彼の性格の有してゐたある缺陷は道德上たしかに非難にあたひするものがある。併しそれ故に彼の詩の有する價値は寸毫も低下しないのである。彼の傳記にふくまれた汚點は、いささかも彼の天才たるをさまたげないのである。ジアン・ジアック・ルソオの文學史上、思想史上に於ける地位は、極めて重要である。併し彼の人間はどんなであつたか？　彼の不朽の名著『懺悔錄』は弱い、卑怯な、傲慢な、卑劣でさへもある一個の人間の告白にすぎないではないか！　然して懺悔錄の重んぜられてゐるのは、寧ろただその爲めからではないか！　然もその告白でさへも、決して正當な告白ではない。彼は擧げる必要のないやうな自己の小弱點を誇大して語り、自ら愧ぢてゐたより大なる弱點を隱蔽してゐると云はれてゐる。西洋の偉大なる人物の例はこれで十分だらう。私は眼を私の周圍にむける。

私は多年所謂文學者といはれる人々の生活を見て來た。そして彼等の人物と生活とには世間の普通の俗人や無智な人達の生活よりも一層惡いものの存することを知つた。彼等の中には人間として何等の價値なき卑劣な卑しむべき人間さへもある。然も彼等は文學者として全然價値なきものではない。私はそれらの目擊によつて、藝術といふものに

對して深い懷疑に陷つた。私は先天的にモラリストである。善惡の價値の問題が、私には何よりも重大に見える。そして藝術は遂に私の善と一致するところがない。

まづ私をして藝術家の有する缺陷に就いて語らしめよ。

藝術家の嫉妬に就ては古來多くの悲しい逸話が傳へられてゐる。藝人の社會に於いて美聲の義太夫語りが朋輩のために水銀を飲まされて聲をつぶされて了つた話だとか、さうしたやうな忌はしい事實は、私の知つてゐるだけでも十指を以つて數へきれない。勿論藝術家は藝人とはちがふであらう。けれどもこの點に於いては、私は藝人と藝術家とを區別することの甚だ困難なるを覺える。藝術家なる美名を以て藝人とは峻烈に自己を區別してゐる人々の間に於て、私はあまりに醜い事實を知りすぎてゐる。それは勿論文學者の如きは藝人社會に比較すれば概してより高尙な人格を有する人々であるから（もつとも中には藝人にもおとる者もないではないが）嫉妬がただちに犯罪となるやうな事は殆どないと云つていい。けれどもその事はその嫉妬の念がより薄弱だといふ證明にはならない。「詩人は他の詩人のほめられることを喜ばぬものだ。」とハイネは云つてゐる。ロンブロゾオによればシヤトオブリアンとボワロオとはどんな人でも靴屋のやうなものでも、自分の前で、他人のほめられるのを我慢して居られなかつたといふ。そして、是れはあへてこの二文學者のみには限らないのである。

藝術家の倨傲に就いても隨分と面白い逸話はある。また、藝術が藝術家をして、人間の正道を踏み外さしめるいろいろな場合もまだまだ澤山ある。藝術が藝術家を誤ることは、蓋し豫想の外にあらう。――もつともこれは藝術に限らない。哲學としても同樣である。どんな下等な人間でも、その頭腦さへ立派であれば、大哲學者となり得るのである。ベエコンの背德の人たりし事は一般に認められてゐる。ショオペンハウエルもこれに言及して、偉大なる頭腦と高尙なる人格とは屢々一致しないといふ事を說いてゐたと覺えてゐる。――

×

白樺派の人々によつて、所謂人道主義の精神の高唱せられたのは極めて有意義の事であつた。けれども私は文學の本質について考へるとき、かやうな主張をなす人が、必ずや文學を棄てて宗教に赴かずにはゐられないと信じてゐた。そして果して、我が武者小路實篤氏は、新しい村の計畫を立てて日向の地に向はれた。私はこの擧を以て宗教的精神の發現に外ならないと信ずる。そして氏がその思想の當然の歸結として、この擧に出でられた勇敢な態度は、何人と雖も敬意を表せざるを得ないところであらう。私も氏が愈々新しい村を建設せんがために九州の一角に向はれたといふ報道を新聞紙上で讀んだとき、また更に恐しいショックを受けた、そして氏の事業の成功せんことを衷心から祈つた。ただ一點。私の不滿に思つたところは、氏がこの尊い事業を企圖せらるるに當つて、功名の念がまづその發動機になつてゐるらしい點である。武者小路氏（及びその一派の人々）は常に今に見ろ、今に見ろを叫ぶ人である。自己の力を世に示さんと欲してゐる人である、氏等の對象は常に世間にある、現在の世間は氏の輕蔑してゐられる所であるが、後代の世間は必ずしもその輕視せられぬ所らしく思はれる。かうした態度は氏が正直な、率直な人であるために特に目につく所であるが、氏が眞實な生き方をしようと努めてゐられるだけに、又とりわけ目障りになるのである。と言つて、私は敢てこれを責めようとするのではない。人間の心は弱いものであるから、殊に氏が本質的藝術家であるとすれば、藝術家は自ら意識する事はなくとも、人に譽められるといふ事に格別の誇りと誘惑とを感ずるものであるから、これは止むを得ない事と思ふ。ミルトンの言葉を借りて云へば、「名譽心はいと高き人の最後の弱味」である。私はよしアンビションからのみ出發したものであらうとも、すぐれた藝術や事業は決して其價値を失ふ事はないと思つてゐる、それに武者小路氏と雖も、漸々にさうした誇らはしい思ひ上つた心をなくして、謙遜な心持になられる老成の日のある事を信ずるから、今に於て氏の雜感の言葉を捉へて云々するが如きは無用の業だと信じてゐる。唯だ

これによつて、少しく平素の所思を記したのみだ。

アシジのフランチェスコの轉心は功名心とは何の關係をも有してゐなかつた。聖者は宗教界の偉人にならうなどと考へたこともないであらう。基督をはじめ、凡ての宗教界の偉人はさうであつたに違ひない。何となれば宗教は神を對象として人間を對象としないから。然るに藝術は？　藝術は人間の物である。思ふに藝術は凡てショオペンハウエルの所謂生きんとする意志の主張である。自己主張である。宗教が神に自己を沒却する道であるとすれば、藝術は人間の間に自己を主張する道である。此意味に於て藝術は利己的のものである。それ故に藝術は善と一致しない。されば最もよく生きんとするに當つて、藝術家は常に躓く。最も救はれ難い人間は恐らく藝術家であらう。

×

トルストイの『藝術論』は一時私の深く動かされた著書であつた。そして今や、私は何年振りかで再びこの書を讀んだ。その時私の頭に浮んだのは、伊太利の文藝復興期のことであつた！　藝術は常に異端である。現世的である。反宗教的である。

ダンテの『神曲』に於て『地獄』が最も藝術的價値を有してゐるといふのは定説である。どんな敬虔な人でも、『天堂』を讀めば退屈するであらう。

藝術と宗教とを調和せしめようとするのは、天と地とを結合せんとするやうなものである。トルストイは當然、藝術を棄つべきであつた。書くことによつて他人を善に導かうといふのは何たるマニヤであらう。そのマニヤからかやうな悲劇的な書物が生れたのだ。然し、トルストイは藝術家であつた、彼はヴィナスの魅力に囚へられたタンホイゼルであつた、しかも彼は神を忘れることが出來なかつた。何といふ悲劇であらう！

ミユウズの神は嫉妬ぶかいといはれる。然しゴッドは更に嫉妬ぶかいのではあるまいか？　藝術を愛するものはつひ

に神の心にかなふものとなり得ないのではあるまいか？

「一人の人間を幸福になし得るものは、既に一個の藝術家である。」といふ言葉は、餘人は知らず、私には非常に尊い意義を有つてゐる。藝術を書くものとのみ信ずる間は、人はつひに救はれない。我々が最もよく最も正しく生きるためには、藝術を行ふ事を知らなくてはならない。文學は、いなすべての藝術は、私を以てすれば、結局一つの技術にすぎない。藝人や職人と自己を峻烈に區分して藝術家と呼ぶのは、何といふ馬鹿げたことだらう。思ふにトルストイは、一切の藝術を、いな藝術そのものを否定し去るべきであつた！　藝術そのものを否定し去らない以上、デカダンの文學の如き、なほ最上の藝術たり得ることをいなむことは出來ない。

藝術を否定し去らうとして、しかも否定する事の出來ないのは、あだかも生存を否定しようとして否定し得ないのに等しい。いな藝術は生きんとする意志の最上の表現であるとすれば、藝術をすてるのは藝術家にとつて、生命を棄てるよりも更に困難であらう。しかもその人がそれを正しくないと感じたならば――それは恐ろしい事である。トルストイの悲劇は、また我々の悲劇でもある。（大正七年）

附記。この斷片はその獨斷と部分的誤謬とに拘はらず、私の現在深まつて來てゐる藝術に對する根本疑のより古い、より不完全な表白として、多少の意味をもつてゐる。が、たゞ私が今このやうな偏狹な道義觀からでなく、より高い見地から藝術を見てゐることと、文中のハイネ及びルソオについての言葉が、――一般的に藝術家の取扱ひ方が、――あまりに單純であつて、從つて誤謬に陷つてゐる事だけは、一言ことわつておきたい。

智慧に輝く愛

やはらぎの心

×

廣い廣い涯しもない大海の中を、一つの木片れが漂うてゐる。

木片れは、潮にもまれ、波にたたかれながら、涯しもない大海を、何處といふあてもなく、何のためと云ふこともなく、あだかも誰かに命ぜられたやうに、ただひとつ、寂しく漂うて行く。

丁度そのとき、この大海の他の一端にも、おなじやうな一つの木片れが、おなじやうに漂うてゐる。何處といふあてもなく、何のためといふ事も知らないで。

そして、ある時、ある瞬間に、この二つの流れ木が、偶然、ほんの偶然に、ぱつたりと出あふ。それは運命といつてもいい、また天の攝理といつてもいい、ほんの何かの拍子で、涯しもない大海の中で、二つの木片れと木片れとは、ひよいとぶツつかる……とおもふと、すぐまた離れてしまつて、もとのやうに、またてんでに違つた方向へと漂うて行く。

これがこの世に生きてゐる私達の姿ではなからうか。人間同士も、この二つの浮木のやうなものではなからうか……

おもへば、寂しい人間の姿である。孤獨な人生の道である。けれども、その孤獨な人生の道にも、おなじ人間仲間が、たまたま、たとへほんの一瞬間でも、ふと行きあうて、心と心との相觸れる微妙な悅びを感じ合ふ事が出來るのだとおもへば、そこに無量の慰めが湧いて來はしないか。

同じ世に生れ合つたといふ事も、深い因緣である。それが、たまたま、地上の一角に落ち合つて、親しく顏を見合

ひ、話し合ふといふだけでも、深く考へれば、有難い事實である。何でもなく思へば、これ位何でもない。當然な事はない。數の知れないほど澤山ゐる人間が、どうして出會はないでゐられよう。互ひに交渉を持ち合はないでゐられよう、それは當然の事ではないか、さう言ふ人も多からう。然し、その何十億か何百億か、はかり知られないほどの澤山の人の中で、偶然、おなじ時代に生れ合せ、おなじ國のおなじ土地に生れ合せ、しかもその上親しく話し合ふ事のできる人は、抑もどれほどあらう。世界中の人の數にくらべてみれば、それはほんの云ふに足らぬ數にちがひない。それが更に、知人となり、友となり、親となり、子となり、戀人となり、夫婦となる事をおもへば、千中の百、百中の十、十中の一、目に見えぬ不思議な手によつて、選び出され、引き合はされ、結び着けられる事の不可思議に、驚きを覺えないでゐられようか。これが奇蹟でなくて何であらうか。

大海の眞中で、二つの流れ木が、たまたま行きあたるのと、それは全く同じ事ではないだらうか。どんなに人間は澤山あつても、大抵は一生何の緣故もなくすんでしまふのだ。そんな人があるとも知らずにすぎてしまふのだ。その中で、たまたま緣あつて、何かの交渉をもつ事になるといふのは、そこに深い因緣があつての事でなければならない。その對者は、もはや無心に自分をはこんで行く波浪ではなくて、やはり自分とおなじ流れ木でなければならない。

袖ふれあふも他生の緣といふ俗諺があるが、その言葉の中には、溫かい眞理が含まれてゐる。それは人間的でもあり、また宗教的でもある、深い心持を含んでゐる。その中には、しみじみと心に觸れるものがありはしないか。そして、その眞理を、若し本當に心から感ずる事ができたならば、私達は、今知らず識らず行つてゐるやうに、互ひに憎み合つたり、爭ひ合つたり、謗り合つたりしないで、互ひに愛し合ひ、互ひに理解し合はなくてはならないとおもふ。

友達や、緣者はもとよりの事、敵といへども、全く緣なくてすぎてしまふ人よりはよい。佛敎に順緣といひ逆緣といふ事があるが、友達が順緣の知己であるならば、敵は逆緣の知己でなければならない。さうだ、敵は逆緣の友であ

る。どんなに憎み合ひ、傷つけ合はうとしてゐても、既にそれだけ互ひに關心事にし合つてゐるといふ事に、なみなみならぬ意味が見出されはしないか。互ひに空氣のやうに見すごす事にくらべれば、敵と敵とは互ひにその價値を見出し合つてゐるものである。互ひに尊重し合つてゐるものである。それを本當に心から感ずるやうになつたならば、私達は互ひに罵り合ひ、憎み合ふ事をやめるであらう。

人を人に結び着ける事情は、たとへどんなに云ふに足らぬものであらうとも、かやうに深く考へて行つたならば、限り知れず尊いものである事が感ぜられてくるのだ。

私達を大海に漂ふ一つの浮木と觀ずる時、私達の心には、靜かな、そしてやや悲しい、やはらぎの思ひ、和解の思ひが湧いてくるではないか。

愛について語らうとする時には、私達は、まづこの和睦の氣持、やはらぎの心に注意してみなければならない。まことの愛は、かやうな平和な、おだやかな、諦念の地盤の上に咲き出づる花ではないであらうか。もつと、はつきり言つたならば、無常を觀ずる心こそ、まことの愛を生む胎ではないであらうか。

私達がいつかは死なねばならぬ人間の身である事を、眞實心から感じ得たならば、誰か瑣細な事に無益な爭ひを演ずるであらう。しかも私達は、一人殘らず死ぬべき人間だ。もし私達が一週間の後には殘らず死なねばならぬ事が分つてゐたとしたら、私達は今現にやつてゐるやうに、空しい名利の爭ひに執して、互ひに憎み合ひ、罵り合ふ事をやめるにちがひない。そして一週間と五十年とは、永遠の時の前には、何の相違があらう!

Memento mori!(死ぬべき身なるを思へ)とは、いみじくも云はれた言葉である。

×

私は屢々、ラスキンの次ぎの言葉をおもひ出す、——

「よく人は、人間の天性は無情なものだと云ふが、それを信じてはいけない。人間の天性は寛大で、善良なものである。ただ聾、盲目であるため、自分が直接に見たり感じたりしない事を、理解することが出來にくいだけにすぎない。若し人間が、その隣人について、自分自身と丁度同じやうな表象をなし得るものならば、今よりはもつと多く、お互ひに心配し合ふにちがひない。」

かう言つて、ラスキンは、なほ次のやうな言葉を附加してゐる。——

「今もし一人の極く粗暴な男の目の前で、一人の子供が水に落ちたとする。彼は大凡、自分の出來るだけの事をして、危險をも恐れないで、その子供を救ふであらう。そして全市の人はそれを喜ぶに相違ない。然るに、このおなじ男に、何百人といふ子供が、衞生上の設備の不完全のために死にかかつてゐる、そしてそれを助けるには、ほんの一寸した骨折ですむのだからと言つても、彼は少しもそれには耳を貸さないであらうし、又、よし彼がその骨折をしようとしても、全市はただ妨害をするだけであらう」と、かうラスキンは斷じて居る。

利己的ならざる想像力こそ、愛を驅る翼である。いかに愛が飛び立たうとしても、想像力の翼が添はなければ、遠くへ行くことは出來ない。最も博大な心は、溫かい愛とともに、强固な想像力の翼をそなへてゐるのである。利己的な、無情な人の心は、ひとり愛に乏しいばかりでなく、また、想像力に缺けてもゐるのである。その人の想像力はたかだか自分一個の上を出でないといふ人にとつては、自分以外の人の苦しみは、毫もその眼に映ずる事がない。そこで容易に、何の苦しみもなく、利己的な生活の中に生きて行けるのである。が、一度び他人の苦しみが、まるで自分自身の苦しみとおなじやうに、まざまざと、痛々しい程に想像せられるならば、決して晏如としてはゐられないだらう。

たとへば遠い支那の曠野で、澤山の貧しい苦力達が、飢餓と寒氣に、算を亂して斃れて行く悲慘な狀況を新聞で讀んだとして、博大な想像力をもつた人ならば、どんな苦痛を感ずるか知れない。そして、自分の平和な幸福がどんな

にかうしろめたく、良心の苛責に感ぜられる事であらう。
然し、私達は大抵、それほどには博大な想像力をもつてはゐない。たかだか、輕い同情の氣持を表白する位なもので、身に痛く、犇々と感ずるほどではないであらう。
少くとも、私の如きは、その部類である。
それを思へば、私などのやうなものは、殆んど全く、人間愛とか、人類愛とかいつたやうな大きな言葉を、かりそめにも口にする資格がない事を、それにつけても、切に反省せずにはゐられない。
本當に、私などのやうな、鈍根な人間は、實際まのあたり、それを目擊しなければ、身を以てその經驗をしないうちは、あらゆる人生の悲慘な災厄を、身にしみじみと感ずる事が出來ないのである。よし出來るやうに思つても、それはその實際の困苦や悲慘の、ほんのおぼろげな表象にすぎないのである。もし、それがさうでなく、私達が本當に、人生の老病死苦の悲慘を痛切に體驗し得たならば、こんな風に、その日暮の生活に晏如としてゐる事は出來ないであらう。
貧乏しなければ貧乏の苦しみはわからず、病氣をしなければ病氣の苦しみはわからず、失戀をしなければ失戀の苦しみはわからない。人それぞれの苦しみを、ただわが身に引きくらべてみる事の出來る限りにしか、miterleben するを許されないのだ。いや、その上に、たとひ自らの身にそれを經驗したとしても、それを極く淺く、うはつらだけで通りぬけてしまふかも知れない。

×

私は自分の想像力がいかに貧しいものであつたかといふ事を、この春、秋田の方へ行つて、とりわけしみじみと感じた。北の國の雪と、雪の中の人々の生活とについて、私は人からも聞き、自分でもいろいろに想像はしてゐたが、

實際を見てくると、その想像は、殆んど言ふに足らぬものであつた。たとへ想像は實際に近づいてゐたとしても、その想像には、直接自分の感覺をもつて觸れ得てはじめて生ずるヴィヴィツドな實感といふものが缺けてゐた。だから、北國の雪を見ないうちに、私がどんなにそれを賦したところで、その詩は決して實感をもつて人に迫るところはなかつたであらう。

曾て私は『雪』といふ詩を書いて、「雪見にころぶところまで」といふあの有名な古人の句を引いて、自然の愛をうたつたが、それを見た先輩のO氏は、「雪についてこんな風にも見られるものかなア」と云つて首をひねられたといふ事を聞いたが、自分が親しく北國の雪を見、北國の雪を踏んでみて、私ははじめてO氏の言葉が、ひしと思ひ當つたのであつた。O氏は雪の深い越後の人であるが、私の見た板谷峠から北、山形、新庄あたりの雪も、あのシベリア嵐が信濃の山に突き當つて、それがみな雪となつて降るといふ越後の雪に、決してゆづらないであらうと思はれた。

私が秋田に行つたのは、もう三月の末であつたが、あちらはまだ春らしい氣配もなかつた。どちらを見ても雪ばかりで、黒い土の色などは、何處からも見出し得なかつた。板谷峠あたりのスノオセツトの、雪のトンネルが旣に珍らしいものであるが、往途（ゆきみち）で、米澤より少し先きの方だつた、黎明に、車窓の外がぼんやり白い、それが曉の白さとはちがふので、妙だナと思つてゐたが、少し明るくなつてみると、雪なのだ。停車場などは、あたりの雪をすつかりかき集めて積み上げてあるので、改札口のすぐ横からして、建物の屋根よりも高い雪の障壁が出來てゐるのだつた。が、それなどまだ言ふに足りなかつた。もつと北へ行くと、山陰の野は一面の雪で、農家などはその中に屋根まで埋められてゐるのだ。その白い野原には、殆んど人の足跡といふものは見えず、ただ鴉が一羽、白紙の上にあやまつて落した墨汁の一點のやうに、ぢつと身動きもしないでゐる。雪の中に、少し雪が低くなつて長々と連つてゐるのは、多分河であらうと思つたが、それが北の下流になると、こちらの懸崖からむかうの懸崖まで、さしわたされた大きな樋の

腐つたところから洩つた水がそのまま凍つたものであらう、大きな氷柱が崖の深さほど凡そ二丈もあらうと思はれる長さで、林のやうに連つてゐる光景、それなどは、自分の貧弱な想像力では到底想像しえられないものであつた。

私はそれからなほ、雪國の人達の生活の様子を見、その人達の話を聞いて、はじめてその本當の苦しみがどんなものであるかが、いくらか理解された。また、雪が消えて黒い土が現はれる時がどんなに樂しいものであるかも分つた。土崎などでは、雪の消えたのを祝つて、町中總出のすばらしい綱曳きをして遊ぶといふ事である。さうした雪國の空氣にふれて、おなじ裏日本でも、南方のあまり雪の澤山は降らない山陰の海岸に生れた私は、雪に對する觀念がすつかり違つてしまつた。

こんなおろかな自分である。こんなにも想像力を限られ、從つて愛をゝ限られてゐる自分であるといふ事を、そのをり、情ないほどはつきり感じたのであつた。おもへば、世に知られない如何に多くの苦しみがあるだらうか？　私達は、それらの多くの苦しみを、つひに知らないで過ぎてしまふのだ。

ところが、釋迦や基督のやうな聖人は、一切衆生の苦しみを、その一身に體驗したのである。

悉達多太子が、白馬に馭して、迦比羅城を立出でて、市中を巡遊して、此世の老病死苦をまのあたり目擊されたとき、世界の苦惱に對する深い悲哀の情が、その心を一杯にした。それはどんな深甚な印象であつたらうか。それは心の底に徹した體驗であつたにちがひない。太子が菩提樹下にすわつて、ひとり靜かに、此世の生死老病諸患について冥想に入られた、一切の賤しい慾念はその心から消え失せて、圓滿な靜寂が來た。釋尊の心には、悲喜を脫した幸福の思ひが、そぞろに湧き來つた。それこそ、衆生に對する慈悲心であつたのである。

おもへば、昔の聖人は、かやうにして有難い智慧の光を私達の上に及ぼされた。私達凡庸なものは、慈悲心を衆生に及ぼすどころか、自らその衆生の一人として、その慈悲の光りに浴すべき身であるが、ただ些かでもその道をすすめ

て、自分の心の中にひそんでゐる一點の智慧の光をみがき出して、人として生れた甲斐を心から感じたいものである。

それには、ただ身の浮木にすぎぬ事を知つて、一切の我執を捨てなければならぬ。道元の教へに、

「眞實無所得にして、利生の事をなす。即ち吾我を離るる、第一の用心なり。此の心を存せんと思はば、まづ無常を思ふべし」（大正十二八月）

智慧に輝く愛

×

愛といふ言葉は、始終、いろいろな人の口によつて繰返される。私も度び度び、愛について語つた一人である。だが、私が本當に愛について知つてゐるだらうか。かう自問してみる時、私は殘念ながら、さうだと自信をもつて答へる事が出來ない。なぜならば、眞實に愛した事のある人にして、はじめて愛を知つてゐると斷言し得るのに、私はこれまでまだ眞實に人を愛し得たとは、到底自信しえられないからである。

私はただ、ほんの愛の探求者にすぎないのだ。

だが、愛は探求しえられるものだらうか、考へ究めえられるものだらうか。私は今、それを疑ふ。いや、愛は單に考へ究むべき性質のものではないのではあるまいか。また、考へ究めても、何の益にもならないのではないか。さうも考へられるのであるが、自分の心を激勵するために、やはり何か書かずにはゐられないのである。

愛といふ言葉は、しばしば繰返されるにも拘らず、およそこの言葉ほど、その內容の曖昧なものはない。

愛といへば、戀愛の意味に解されるのが普通であるが、それはあやまつてゐる。勿論、戀愛も愛の一種であるが、

愛といふ言葉は、もつと廣い意味をもつてゐるのである。そして、戀愛とは全く相容れぬ。むしろ戀愛の否定とならざるを得ないやうな性質の愛を含むのである。そして、それこそ眞實の愛ではないであらうか。戀愛も淨化されて、その愛にまで到達しなければならないではあるまいか。そして、その愛こそ、吾我を絶し、利己を沒した愛である。言ひ換へれば、どんな事があつても、決して憎みに變ずる事のない愛である。

ところが、男女間の愛といふものは、總じて、憎みに變じやすいのである。甚しきは、愛と憎みとが同時に存立する事すらある。

一體、愛といひ憎みといへば、全く正反對のもののやうであるが、もともと同じ一つの根から、煩惱具足の人間の心から生え出してくる感情であるかぎり、天と地ほどの隔たりのあるものではなくして、例へば、おなじ一つの木の葉の裏おもてのやうなものではなからうか。風が吹けば裏がへる。その時、愛は忽ち憎みとなる。それが大凡の戀愛に於ては、免れ得ない運命であるやうに思はれる。戀人同士の間の嫉妬心、男のあだし女に心を寄せた場合の女の苦悶、女の變心を憤つての男の刃傷沙汰、それはあまりに私達の見聞きしすぎてゐるものである。悲しい人間の煩惱である。

私は男女間の愛をおもふ毎に、その憎みをおもはずにはゐられない。そして、その憎みが愛と裏おもてであるといふ事々思ふときさうした愛を單純に讃美する事は出來ない。ナイーヴに、Love is best とはどうしても思へないのだ。

一體、戀愛の與へるものは幸福であらうか、果して戀愛は眞に尊い天の恩惠であらうか、私はそれを疑ふ。

「己がある刹那に、まあ待て、お前は實に美しいからと云つたら、己はそれきり滅びてもいい」とファウストが言つた。本當に、そんな美しい刹那を味ふことが出來たなら、それこそ、メフィストフエレスに、魂をゆだねても惜しくないに違ひない。ことに、眞理を雲烟の間に求めようとして、くすんだ灰色の書齋の中に日を送つてゐる人間には、この心持は、時折り強い誘惑となつて現はれてくる心持だとおもふ。

そして、その時、悪魔は美しいグレエトヘンを、彼の眼の前に連れてくるのである。だが、それは結局、一つの悲劇をつくり出したのにすぎなかつたではないか。あはれな、純潔な處女の魂を無慘にひき裂いて、このかはいい、可憐なものを、破滅の淵に陷れたにすぎなかつたではないか。

グレエトヘンは悲しんで言ふ――

……だけれど、だけれど、それまでになる道筋は、

まあ、あんなに好かつたのに、あんなに美しかつたのに。

あはれなグレエトヘンよ。だがそれが本當に美しい刹那だつたらうか。いや、そこではメフイストは勝てなかつたではないか。

たとひ戀愛が、どんなに賞めたたへられ、どんなに渇望されてゐるにしても、本當に尊い瞬間は、パッションからは決して生れて來ないことを、私達は悟らなければならない。パッションに驅られてゐる時は、喜びもまた苦しみである事を、私達は悟らなければならない。

煩惱に根ざした悅びは、いつも苦い。激情の悅びは、また、激情の苦しみである。戀愛こそ煩惱の中の煩惱、激情の中の激情である。それゆゑ、どんな有頂天の歡樂の中にも、常にその底に一點の苦味が點ぜられてゐないことはない。いな、その悅びが同時に苦しみであると言つてもいいであらうと思ふ。なぜなら、愛するものは苦しまなければならぬのが戀であるから。

×

いつまでもかうしてゐたいと思ふやうな時、そこで生は最高調に達し、その存在の意義は充たされるであらうと思はれる時を、私は曾ては戀愛の樂しい陶醉の瞬間に見出し得られるやうに思つた。戀人同士が、默つて顏を見合せて、

互ひに我を忘れてゐる瞬間に見出し得られるやうに思つた。だが、今はむしろ、自然の中に我を忘れた瞬間こそ、ほんとに充實した、至高至純な時ではないかと思ふやうになつた。

自然に醉ふことが出來るやうになれば、もはや人間の愛は、あまりかへりみないでもすむであらう。

私はこの春、魚見ケ崎の岩の突端に寢ころんで、日向ぼつこしながら、つい眼の前に、初島の姿を眺めてゐた時に、いつまでもかうしてゐたいと思つた。そして、何とも云へない平和な滿足を覺えた事を忘れ得ない。さうした靜かな幸福は、決して戀愛の悅びの中からは感ぜられないと思ふ。

なぜならば、人間を相手の時には、それがどんな幸福であつても、その幸福の中には、何かしらある一抹の暗影が投げかけられてゐない事はない。人間を相手の時には、その愛は必ず苦しみを伴はずにはゐない。自分の悅びが相手の苦しみであるか、相手の悅びが自分の苦しみであるか、又は二人ともが苦しみであるかであつて、二人ともが悅びである瞬間は、極めて短いであらう。しかも、その二人の悅びが相一致する幸福な瞬間でさへも、互ひの胸にあるものが、果して互ひに期待し合つてゐるものであるか否かを、どうして知り得よう。吾我の情强ければ强いほどその愛は惱みである。そして、戀愛は究竟利己的な愛ではないだらうか。然るに、自然は、いかなる烈しい自我にも決して逆らふことがない。自我の强い詩人文學者が、最後に自然の愛に隱れるのは、まことに道理であると思ふ。

だが、自然の愛の滿足も、悲しい事には、また私達の不斷の安住の處とはなり得ないのである。若し私達が一抹の雲となり、一流の水となるを得たならば知らず、生きて此世に存在してゐる限りは、人間界のきびしい制限を受け、いやでも應でも、人間生活の苦惱と面接しなければならない。西行のやうに出家遁世したならば、まだしもであるが、芭蕉などには、まだなかなかに、俗事の煩ひが多かつたやうに思はれる。在家人としては能ふ限りの自由と、超脫した心境とをもつてゐたこの人でも、在家人としての生活の羈絆は全くは脫し得られなかつたやうに思はれる。まして

や、我々心境の到らないものは、いくら自然の愛とか、自然の禮讃とかいふ事を口にしても、自分の生活の全面を反省した場合には、それが甚だ力の弱いものとならざるを得ない。

我々は、どんなに自然に醉ひ、自然に幸ひせられても、また再び人間の中にかへつて行かねばならない。そして、そこでは再び、もとの自分の醜い姿を見出さねばならない。そこでは、否應なしに、人間を相手にしなければならないからである。

そんならば、人間を相手にして、しかも何の苦惱も感ぜず、何の束縛も受けず、丁度自然を相手にしてゐる時とおなじやうに、平和な幸福を感ずるには、どうしたらいいのだらうか。それには、自分の心をあらためる外はない。自分の心の中の唯我の念を殺し、煩惱五欲を超脱する事の外にはない。さうしたならば、どんなに苦しい煩ひの中にあつても、心は常に平和で、怡々たるものがあるであらう。自我を滅ぼし、煩惱を絶つたならば、そこには最早、愛もなければ憎みもない。即ち、苦惱がない。それぞ愛憎の彼岸である、まことの自由の境地である。

どうぞ、その愛憎の彼岸にまで到達したい。私は、ただそれのみを冀ふ。

そんならば、愛は全然否定されるのか。いや、反對に、そこにこそ、その愛憎の彼岸にこそ本當の愛が存するのだと思ふ。それはもはや、憎みに變ずる事のない愛、利己的の關心をもたない愛である。それは感情の愛ではなくして、智慧の愛である。なぜかと云へば、そこはもはや感情の領分でもなく、理智の領分でもなく、智慧の領分であるからである。そして、そこまで我々を救ひ出してくれるものも、また智慧に外ならないのだ。

私の友は、「感情の働くときは知識は働かない、知識の働くときは智慧は働かない」と言つた。

普通の戀愛にあつては、專ら感情が働く、そして少しく知識が働く。智慧が働くやうになれば、その愛はもはや、狂ほしい煩惱ではなくなるであらう。

相愛する男女も、漸次その愛を純化し、浄化して、智慧の愛に高めて行かなければならない。智慧に照らされなければ、その愛は暗い、愛に輝きを與へるものは智慧である。

智慧に照らされないうちは、愛は盲目で、我執とからみ合つてゐる。その我執、その吾我の念をひきはなして、愛を正しい道に連れ出すものは智慧である。

智慧の光がさすと、愛は利己を離れ、個を絶した。深いあはれみ、尊い慈悲の心となるのである。そこで、amour は caritas となるのである。おなじ戀人でも、すべての自れの幸福を諦念して、その amour を caritas にまで高めてその戀人の靈の救抜に身を捧げるとき、罪の子も聖者になるのである。これが、ワグネルの『タンホイゼル』のモテイーヴである。尊い處女エリザベエトの心こそ、智慧に輝く愛の化身である。この愛に照らされて、さしも汚れたタンホイゼルの靈も、雪のやうに白くならずにはゐなかつた。

愛の暗く且つ盲目である時には、それはいろいろの悲劇を生む。智慧の輝くところには、かつて悲劇はない。そこには、ただ悲喜を絶した平安がある。

然し、智慧の光は、輝々たる焔では決してない。普通の戀愛の火ならばさうであらう。智慧の愛は、月光の如く、蒼く靜かに澄んでゐる。それは謂はば寂光土の光である。ねがはくば私の迷ひの心も、その智慧の光に照らされて、靜かに深く澄みわたらんことを。

西行の歌に、

　浅く出し心の水やたたふらんすみゆくままに深くなるかな

愛もまた深く深く澄まなければならぬ。（大正十二年七月）

愛憎の彼岸へ

×

今日私はこの演壇に立つて、一場のお話をいたす事となりましたが、御覽になる通り、私はあまり身體の頑健なといふ方ではなく、譬などはとりわけ大きくはないし、長い間のお話は疲勞を來して、中頃には、お聽きとりにくい事もあらうかとは思ひますが、其點はどうか許していただきたいと思ひます。それから又かういふ風に東京などから來て、お話をするといへば、此頃ある方面の人々の盛にさうしてゐるやうな階級文學、民衆運動の宣傳でもあるか、それに近い何等かの主義主張ででもあるかと思はれませうが、私は特にさうした一つの主義主張に囚はれたくないので、右にも左にも偏らず、素直に人生を見て行きたいと思ふのであります。それで今日も、表面的な主義主張でなく、人間の心情そのものに深く根ざしてゐる愛情の問題について、一人の人間として、私自身の惱みわづらつて來た徑路や、それに先人の例をもひいて、多少のことを云つて見たいと思ふのであります。

我々の心の中の愛と憎しみ――この一見相反してゐるやうに見える二つの感情は、いづくいかなる時代のいかなる人々にも、男女をとはず、凡そ一個の性格として存在する限りは、免れ得ない感情で、その程度の差こそあれ、殆んどすべての人が煩ひ惱んでゐる事ではなからうかと思ひます。さうしてこの愛と憎しみとは、一見相反するやうで、實は裏おもてのもので、愛あつての憎しみであり、憎しみあつての愛である、極端に云へば、憎しみは愛の變形した現はれではないかとさへ思はれます。

私もまた普通の人間の例にもれず、この憎しみの感情を有つてゐますが、人一倍煩惱の人間であるだけに、私はと

りわけこの感情の強い方であります。私には、自分に對して非常にひどい事をした人間とか、又たへがたい侮辱を加へた人間とかを、衷心から憎み、これに對して他日むくいるところあらんと考へ、その事を忘れる事が出來ないといふ弱點が、小さい時から多かつたので、我れながら困つたのであります。もつとも、これには私の少年時代の事情——朝鮮などに流浪して非常に不合理な事件に遭遇しその經驗が何から何まで暗い苦しいものであつたといふ事情が手傳つたため、益々不平反抗の徒とならざるを得なかつたといふ事もあるのでありませうが、それにしても、私はあまりに強く憎しみの感情の持主でありすぎました——かういふ心情から、私は富んでゐて些かの慈悲心もなく、貧しいものを苦しめ虐げて、恬としてかへりみない人間達を非常に憎み、今もなほその感情は形を變へてつづいてゐるのです。

然し少年時代のさうした反抗心、憎惡心は丁度石油の火のやうにメラメラと燃えやすく、そして消えやすい。私も若い間の徒らに血氣にはやるさうした心を、其後いろいろの本をよみ、いろいろの世間的經驗をもつみ、又自分自身の内省にもとづいて、今ではかなり根柢のあるしつかりしたものに養つて來ました。が、私が少年時代にさうであつたやうな、さうした個人的動機に根ざした憎惡や反抗心は、勿論、極力征服してしまはなければならない感情でありますが、もつと廣大な、社會的憎惡や反抗心も無條件に肯定していいものでありませうか。

×

人が人を憎む——これはキリスト教などの教義から云へば、隨分いけない事であるのは云ふまでもない事であり、又、キリスト教に限らず、いかなる宗教にあつても、古聖人の言葉によつて見ても、憎しみはもつともいけないものとせられてゐる。然るに、人間の心の中で——心に七情の巣喰ふかぎりは、しつかりと底にわだかまつてゐて、どうしても取り除けられないのは、この憎しみの感情であります。とりわけ常に虐げられ苦しめられてゐるものには、こ

の感情が一層强烈で、謂はばその全心を憎しみのために燃え盡されるやうな氣さへするではありませんか。
さつき私は富んだものが何の慈悲心もなく、貧しいものを侮辱し迫害するのを見ると、これに對して憎惡を抱かずにはゐられないと云ひましたが、この憎惡こそは、この頃社會主義運動の原動力となつてゐるのではありますまいか。
社會主義的の思想、又此頃特にやかましい階級文學といふものは、一言にして盡せば、憎しみの思想であり、憎しみの文學であるとも云ひ得られはしないでせうか。抑壓された無產階級の權利を奪ひ返し、社會の不平均を打破するのが、社會主義の思想の眼目であり、無產階級の悲慘な生活を基礎として、その反抗心、憎惡心を强烈に描き出して、同じ境遇の人々の鬪爭心をかき立てようといふのが、無產階級文學の目的のやうに思はれます。又、さうでなければ、無產階級文學の意義をなさないと思ひます。そして、社會の現狀をありのままに見てゆけば、かうした思想が起り、かうした文學が現はれるといふ事も、まつたく不思議ではなく、當然のことでなければなりません。そしてこの思想に對しても、私は決して風馬牛ではないのです。

×

また私一個の事にかへりますが、私が十七歲の時に、東京へ出ました時分は、自然主義が大變盛になつてゐて、島村抱月氏は『早稻田文學』により、田山花袋氏は『文章世界』によつて大いに自然主義の精神を鼓吹されてゐた時代で、從つて私もその自然主義の思想の影響を多分に受けましたが、然しその衷心に於て、私のやうな性格の者にとつては、この「現實暴露の悲哀」とか「ありのままの人生」とかいふやうな事にとどまつてゐる自然主義思想には、十分の共感が持てなかつたのです。それはあまりに個人主義的でもあり、又一種の藝術至上主義のやうな印象をも與へたからであります。そして、さうした自然主義の小說などよりも、當時の私が心から動かされたのは、木下尙江氏の『良人の自白』だとか『火の柱』だとかいふものの方でした。木下尙江氏の『飢渴』といふ評論集を當時はじめて讀ん

だ時には、隨分感動したものでした。その中に書いてあつた彼の有名な「谷中村滅亡事件」所謂「足尾鑛毒事件」なるものは非常な刺戟を私の若い心に與へました。

かういふ非痛な現實の問題から一轉して、當時の文藝を見ると、自然主義者の見るところの現實は、非常にブルジョア的で――尤も當時はブルジョアとかプロレタリヤとかいふ云ひ方はしませんでしたが――一體になまぬるい、いい加減な目で人生を見てゐるといふ風に感じられました。そして自然主義者が一生懸命に論じ立ててゐる問題が、人生の一大事に何の關係もない閑問題にすぎないやうな氣がして、どうも一緒になつて熱する氣になれなくなつたのです。と同時に、かうした傾向をもつてゐたために、私の思想はだんだん社會主義的な色彩をおびずにはゐませんでした。當時の文壇で文學者として立ちたいといふ志望も益々强くなつて來たので、この二つの間に、大きい溝渠があり、矛盾のある事が、だんだんにはつきり分つて來ました。

私の心の中には、文學を非常に尊重してゐるにも拘はらず、それが現實の生活と直接的に何等の交渉をも持たなければ、價値がないと考へる心持がある――つまり今ここに一人の餓ゑたる人間があるとして、さしあたつてその人を助けるには、一杯の飯でなければならないのに、それを與へる事をしないで、自分は藝術によつてもつと大きなものを與へるのだと自信をもつて言ひ切る事が、私にはどうしても出來なかつたのです。

昔ロシアのニヒリスト達は、プウシキンの全集よりも一片のパンの方がずつとねうちがあると云つた――私もある瞬間には、それに同感せずにはゐられなかつた。社會主義的な思想になればなるだけ、藝術などといふものは、まどろつこしくなつて、もつと直接的な、實際的な運動によつて社會改革の實をあげたいと考へたのであります。

×

當時私は荒川義英といふ靑年と知り合ひになつてゐましたが、この荒川といふ靑年は、そのお父さんが社會主義者

の故老堺利彦氏の友人だといふ關係から、氏のお世話になり、同志の一人になつてゐた男で、隨分過激な思想を抱いてゐましたが、この靑年は、不良少年の仲間に入つて、かなり亂暴な生活をしたり、又不治の病氣――喘息のひどい持病があつたりしたためか、私の今云つたあの憎しみの感情がとりわけはげしかつた。彼は口を開けば必ず特權階級、有產階級の者たちを罵倒し、ぜひとも直接行動をとつて、いかなる暴力によつてでも、社會改革を早めたいと叫んでゐたのです。ところで、この直接行動――暴力の是認といふ點で、私は荒川とはどうしても意見が一致しませんでした。

なるほど目的のためには手段をえらばないといふ事も、一應は考へ得られる事であつて、今あるところの横暴な特權階級を打破し、虐げられたものの自由と權利とを囘復するためには、そこにどうしても鬪爭が行はれ、力と力の爭ひを生ずるに相違ない。力によつて力に對抗し、暴力に訴へてでも進んで行かなければ、社會改造の目的を達する事は出來ない、少くとも容易でない事は、これを外國の二三の大革命について見ても分る。

だが私はそこで社會主義者の考へと道を分たずには居られなかつた――そしてこれは單に私ばかりでなく、同じ社會主義者でも、キリスト敎から入つて行つた人や、トルストイアンである人や、すべて心に宗敎的傾向をもつてゐて、それを出發點としてゐる人々は、やはり必ずこの點で道を分つであらう、これは唯物史觀を奉ずる社會主義者と、宗敎的傾向をもつた者との最後のわかれ目ではないであらうか。そして、私が少年時代あんなにも感激した社會主義的著作者木下尙江氏などの後半生の心的推移は、特にその顯著な例ではないでせうか。

×

木下尙江氏は日本の社會主義運動史には、隨分重要な役割をつとめて居る一人で、今ロシアに行つてゐる片山潜氏だとか、堺利彦氏だとか、其他の四五人の人々とともに、第一期の社會主義活動をした人であつたが、氏は其後だん

だん自分で自分の主義、自分の生活に疑ひを抱いて來た結果、遂にあらゆる外的活動から離れて、靜座法に入つて行き、今では三河島に殆んど蟄居の生活をするやうになつて了つた。かうした改宗は、當時の社會主義者の中では、隨分非難の高かつた事で、彼は僞善者であるとか、裏切り者であるとかといつて、今でもさうした方面からは輕蔑され、憎まれてゐるやうです。然し私から見れば、木下氏は却つて自分自身に生きるやうになつた、行くべきところに行つたのだといふ風に考へられる。

なぜさうであるかといへば、人間が本當に自分の魂の問題について考へて行けば、さうした社會主義運動は――あながち無益な事であるとは思はないが――然し、とにかく魂の問題から見れば、外面的な事にすぎず、あまりに物質的方面にのみ重きをおきすぎて、反つて本當の人間の救ひに遠ざかるものだと考へられてくるからです。

さつき云つた事、餓ゑてゐる人を見ると、何よりもパンをやらなければならないといふ考へが、我々には起つてくる。この考へが、やがて社會主義的運動の方に、我々の心を向はせるのではあるが――然しまたもつと眼が開けてくると、さうした物質的な方面の救ひといふものはいはば一時的な事であつて、人間が各自擔つてゐる不幸や罪といふものは、さうした事だけでは決して除かれない。今ブルジョアの階級が打破せられて、プロレタリアの世界になつても、その時にプロレタリアが、今のブルジョアと、結局は相距たることはなはだ近い横暴をはたらくやうにならないとは、どうしてはつきりと斷言し得られようぞ。彼等とても人間としての弱點のある限りは、いつかは奢侈にもなり、橫暴にもなり、極く樂觀的に見て、社會制度が多少、今よりはいい狀態になつたとしても、人間の不幸は、やはりその影を絕つとは考へられないのです。

人間の欲望といふものは無限のもので、どこまで行つてもこれでいいと云ふ限度はないのです。何か欲しいと思ふものを手に入れると、今度はその手に入つたものがさほどではなくなり、又ちがつた新しいものを欲しがる。一を穫

れば二を望み、二を獲れば更に三を求める。かの金持が、どんなに金を持つても、それで足れりとせず、貧しいものよりも一層强烈に金を得ようと躍起してゐるのなどはそのいい例である。こんな風であつて見れば、人間の心には、到底生きてゐる限り滿足といふものがない。これがまた一面人間の進歩する所以でもあり、文明の進む理由ともなるのであつて、あながち惡い事とは云へないけれど、それから來る苦しみ惱みといふものが、どんなに人間をわるくもし、傷めてもゐるであらう。人間の心にかうした煩惱のある限り、永久に平和といふものはなく、いつもその煩惱心に驅られて苦しむ。そしてこの惱みから人間を救ふには、ただ心の內部からの改革、卽ち魂の救濟のみであつて　外面的な救ひ、物質の救ひは、それに比べると、姑息な第二義的のものにさへ思はれるのです。すべては心ひとつで、心の方を閑却して、外の方ばかりを問題にするのは間違ひなのではあるまいか。

×

木下尙江氏も、多分はかうしたところから、あんな風に心の進路を一轉されたのではなからうかと私は考へるのですが、一體に宗敎的な心持から人間の救濟などを考へて、社會主義者の仲間に入つた人々は、遂には大部分かうした徑路をふむやうであります。西洋では、ドストエフスキイなどが、その改宗の一番いい例となるでせう。

丁度ドストエフスキイの靑年時代には、當時の樂天的なドイツの理想哲學に耽つてゐた時代全般が、漸く目ざめて、實際的な社會問題に目を向け、不合理なる農奴制度の破壞を叫ぶやうになつた——農奴制度は博愛の精神にも反するし、政治的、經濟的立場から見ても、個人の權利の侵害であると云ふので、進んだ當時のロシアの靑年間に、熱烈な運動が起り、博愛的、人道的精神をもつた人達は、競つていろいろな結社をむすび、ドストエフスキイが屬してゐたペトラチエフスキイの團體もその一つでありました。ドストエフスキイは一生貧しい人々や、虐げられた人々の味方で、人道的な作家ユウゴオやシルレルなどによつて、啓發された人だけあつて、この問題に無關心ではゐられなかつた

のは無理もなく、彼は遂に進んでペトラチエフスキイの結社に入り、その會合にのぞんで、プウシキンの過激な詩をよみ上げたり、また暴動を起さなければ農奴解放の實行が出來ぬと、暴動を起す事の議論が出た時に、その暴動を叫びさへもした。

一體このドストエフスキイの團體は、人道的精神から出發してゐただけに、溫和派であつたので、暴動可否といつたやうなかうした議論も出たのだと見えます。ところで、ただちに暴動を主張したといふのだから、みなドストエフスキイは過激な改革論者だと思つてゐたが、實はドストエフスキイは本當はさういふ事の出來ぬ側の人であつた。とにかく極端から極端に走りやすい傾向の人であつて、しかも其折は血氣盛りな青年であつたものだから、ドストエフスキイも多くの青年達のやうに昂奮的であり又過激的でもあつた。遂に三十三人の團員と一緒に、革命を企圖したものとして死刑の宣告を受け、のち死刑だけは免ぜられたが、シベリアに流刑されたのであります。ところで、このシベリアの流刑中、ドストエフスキイは、その暗い寒いシベリアの端で、澤山の兇暴な囚人の間に起居しつつ、つくづく自分の過去を考へ、自分の社會改革を志した行動の意義を考へずにはゐられなかつたのです。

當時ドストエフスキイは一册の聖書を手から離さず、朝も晩もそればかり讀んでゐたといふ事であります。そしてこの聖書の敎へる所は、ドストエフスキイの行爲を是認するものではありませんでした。キリストは「人爾の右の頰を打たば左の頰を向けよ」といふやうな無抵抗主義を敎へてゐる。凡ての宗敎的生活は、この無抵抗主義から始まらなければならない。なぜかと云へば、眞の宗敎心といふものは、己れを空しうして、絕對なるものに歸依するのにあつて、なほ少しでも自ら恃む所があつては、本當の宗敎心とは云へないのである。然るに、かの眼に眼を、歯に歯をといふやうな行き方は、自我の主張の極端なものだからです。

×

社會主義者はキリスト教を排撃するか、又はキリスト教も一種の社會運動であるやうに解釋したがつたりします。然しキリストの教へには、どうしても社會主義の實際運動とは氷炭相容れぬものがあるのです。

ドストエフスキイが深くよめばよむほど、聖書によつて悟るところあつたのは疑ひありません。彼も亦それを考へて見ずにはゐられなかつたのです。即ち人間の救濟は外から來るのではなくして内部から來る。富の分配はまづとにかくとして、人間は愛について考へなければならない。凡てを愛のためにする事である。愛によつて生きる事である。我々の力の許す限りの事を、愛によつて行ふ事である。多分この事、この愛の宗教にまで、ドストエフスキイの心は進んだのであります。人間が、その心の憎しみですべてに動いてゐるうちはその行ふ事は決して成就しない、愛をもつてするのでなければ本當の救ひは決して來ないものである。そして人皆がこの愛をもつて互に助け合ふならば、その時はじめて理想の社會は生れ出るであらう、即ち理想的の社會を生むための要約は愛である。隣人のために自己を犧牲とする、自己犧牲の精神即ちキリスト教の精神、これがドストエフスキイの信念の確立點になつたのであります。そこでドストエフスキイは愛の使徒となり、シベリアから歸つてからと云ふものは、また再び社會改革の激論を吐く人ではなくなりました。それで、依然として社會主義を遵奉する人達からは變節者のやうに思はれた事さへありましたが、それは實にかうした内部のコンヴアシヨンから來たものに外ならなかつたのであります。この點、ドストエフスキイと木下氏と、多少似てゐないかと思ひます。そして最近、このドストエフスキイや木下尙江といふやうな人々の心の道といふやうなものがいつしか私にも分つて來て、本當の救ひを考へれば考へるほど、宗教的な、己れを空しうするところの歸依の生活といふものにあこがれずにはをられない人間になりました。もともと最初からして、私などは、同じ社會主義でも基督教的社會主義の匂ひの高い木下尙江氏に刺戟され啓發されインスパイヤされて、さうした傾向をもつてゐただけに、やはり、どうしても宗教的な心の救ひでなければ本當の救ひにはならないと考へるやう

になつたのは、當然ななりゆきにちがひありません。

愛憎の彼岸へ——かういふ演題を設けて話して來ましたが、この「愛憎の彼岸へ」といふ本願が、今の私の心を一杯にして、私の心の當面の大きな問題となつてゐるのです。然し今のところはまだその欲求の心をもつてゐるといふだけで、まだ實際に自分の生活に實現し得てゐるとは云へないのを、かうして話すのは、僭越至極であるやうに思はれてなりませんが、然し迷ひは迷ひとして、疑問は疑問として、私の自分の心のままを、そのまま話して見たいのであります。

考へて見ますと、私が前にも申しましたやうに、人一倍愛憎の强い人間であつたから、それでかうして弱小ながらも、詩人といふものになる事が出來たのかも知れませんが、然し、ただそれだけでは、詩人といふものもつまらないやうに私には思はれるのです。一人の人間としてその愛憎の心の强いといふ事は、たしかに非常な不幸な事であると私は考へます。まことに、憎しみが自分にとつて非常に苦しい束縛であり、自分の心を混濁せしめ、醜くするものである事は云ふまでもないのですが、憎しみと反對の愛が、——この愛といふものが、又、憎しみにもまして、自分にとつて堪へがたい重荷となり、自分の本當の救ひとなるものでない事をも、等しく私は感じないではゐられないのです。

愛といふ言葉の中には、私から見れば、やはり大きな問題がある。愛といふ言葉は大變美しいが、この愛の本體を、冷靜にしらべて行きますと、そこから飛んでもない恐ろしいものが飛び出す事が往々にしてあるのであります。つまり同じく愛とは云ひながら、愛には二通りある。一つは自分を沒却して本當に他の事ばかり思ふ愛、一つは利己的な愛であります。が、人間の愛は大抵はこの利己的な愛で、自分で美しく思つてゐても、その本體は美しくないのであつたりするのです。ドストエフスキイのいふ愛は、云ふまでもなく前者の方、即ち自己を沒した愛なのでありますが、

人間といふものが我執に囚はれて、利己心を脱却する事がなかなかできないものであるだけに、この犧牲的な愛にはなかなか到達出來ず、愛を口にする人が、實は最も愛少き利己的な人物であつたりする事はよくある例で、我國の人道主義を唱へた人達の中には口では人類愛を唱へながら、實際は自分のエゴイズムによつて周圍の者を苦しめながら、それに少しも氣付かないで、愛の使徒のやうに信じ切つてゐるやうな人も往々あつたといふ事であります。考へて見れば恥かしい事ですが、人間は弱いものであり、自分の事は一番氣がつきにくいから、こんな事になつて了ふのであります。然し、これは人事でなく、我々もまたそんな風になつてゐるかもしれないから、氣を付けて、自ら反省するところがなくてはならぬと思ひます。

×

一體、漠然たる抽象的の人類愛といふものは、いかにも美しく立派に思はれるけれど、それは兎角空虛なものになり易い。本當の愛は、何處までも自分の手近いところから具現して行くものでなくてはなりません。自分の父母、兄弟、友人、隣家の人、さういつた人々に對して、自己犧牲の愛を示して行つてこそ、はじめて愛は本當に生きた力のあるものとなるのです。隣人の愛といふのは、要するに、この手近の人への愛に外なりません。それに、自分の我儘や、エゴイズムからして、自分の家の人や知合の人を苦しめながら、口でばかりいくら人類愛を唱へたところで仕方がありません。遠人の愛即ち遠い人への愛は、とかく抽象的な、夢想的なもので終りやすいのです。それよりも隣人の愛といふことを極く具體的に考へて行くことを要します。然しこの己れを空しうした愛が、どこまでも無理がなく行へれば、言ひ分はないのでありますが、どうもこれがさう行かない事が多い、そこに人間の苦痛があります。同じく人を愛するにしても、自分の好きな人を愛するのは譯はないが、嫌ひな人を愛する事は、なかなかむづかしい、そこに我々の惱みがあります。

だがこの自分の好きな人のためには何でもするといふやうな愛は、勿論美しいものではありますが、その實際をよくしらべて行きますと、やはり利己心に根ざしてゐるものであつて、從つてそれは憎しみの心と裏おもてになつてゐる愛といつていいのです。もつとも根本から云へば利己的とも見えはしますが、親の子を思ふ愛などは、實に純粹なもので隨分感動させられる事が多いものですが、それに反して、男女間の愛、戀愛などとなると、正にさうした憎しみと裏表の愛であるといつていいと思ひます。なぜならば、もしその相手の異性が自分の愛の心を受け容れない時には、愛が忽ち憎しみになる事があるからです。しかもかうした愛欲の情は、人間にとつては免れがたい煩惱五欲であるところに人間の惱みがあるのです。そして實際に於て、人間愛とか人類愛とかいふ自己を沒した愛は、とかく力の弱いもので、ただ頭の中で概念として存するだけの場合が多いのに反して、かうした愛欲の愛は、本當に死よりも强い力をもつてゐる。この愛はその現はれから見ると、自分以外の人のために、自分を犧牲にして、その人のためなら何でもするといふ風だから、人間愛のやうであるが、實は自分の感情の滿足から出發するもので、本當に根强い力をもつてゐるだけ、それだけ利己的なものだと云はねばなりません。かういふ風に、おなじ愛でもすぐそれが憎しみにかはるやうでは、煩惱心と云はねばならず、我々にとつては、一つの苦患(くげん)であります。私はかうした愛や憎しみから超越したい、かうした愛執や憎惡を克服したい、言ひかへれば煩惱から救はれたいと思ふのであります。かうした愛憎を超越したところに本當の愛がある、「智慧に輝く愛」がある。それはもう愛といふよりは、絕對の慈悲である、慈悲は聖者の愛であると云つてもいい、その聖者の心に一步でも近づくやうに努めて行つたならば、私などのやうにこんなにも鈍根なものでも、いつかは多少はましな人間になれようかと思ふのであります。

×

社會主義運動も、今の時代には、たしかに成さねばならぬ事ではある。社會制度が今より少しでもよくなれば、そ

れだけ人間が幸福に近づくわけでありますから、私はそのために悪戰苦闘してゐる人々に、敬意をはらふに吝ではないが、然し今のところ議會政策が絶望である我國では、さしあたつて直接行動、暴力運動に出る外はないので、これが第一に私がそれに同ずる事の出來ない點であります。私としては、さうした戰ひよりも、平和な道に於て、自力の道によつてよりも、他力の絶對歸依の生活、宗教的な謙虚な生活によつて、自分の心を淨化し、醇化しつつ生きて行きたい。そしたならば自分にいくらか力が出來たなら、おのづとそれが他の人にも影響して、世の中にも働くやうになれるかと考へるのです。暴力に對する暴力を以てし、憎しみと反抗の心に燃え立つて相せめぎ相戰ふといふ事は、人生の狀態からいつて止むをえない事ではあらうが、「三界は火宅」といふ、その火宅をそのまま現はすやうな事は、私の心としてはあまりに寂しい事に思はれてくる。それでなくてさへ、人間の憎惡心、反抗心は根强いものであつて、これを惡として、力限り手綱を引きしぼつてゐても、なかなか制御は出來ないのが普通であるのに、ましてやこれを野放しにして理論的に肯定してかかつたのでは、その結果は考へて見るだに恐ろしい事で、そこには一大修羅場が現出する事は疑ひのないところです。憎しみではなく、愛で理想の世界を現はして見たい、憎しみといふもので裏打ちされた愛でなく、愛憎を越えた彼岸にある本當の愛、全く自我を沒した愛、即ち慈悲の光に惠まれて、敵も味方もない、一齊の弘誓の船によつて救はれ、それによつておのづと社會改造の實をあげたい、とかういふ風に私は他力の救ひを求めてやまないのです。そして、何はともあれ、まづ自分みづから、自分の小さな我執をすてたいと考へるのでありますます。狹い我執にとらはれてゐる間は、たえず愛憎の情に驅り立てられ、煩惱の火にやかれ、眞の智慧の光は我々の魂を照らさないと思ふからです。そして、若しかういふ風に自分の狹い自我を脫却する事が出來たなら、おのづとそこに廣い天地がひらけて來て、目前の小事に煩はされないで、平和なごんだ心持になれるだらうと考へます。それで私も弱少ながら、どうにかしてこの修業をつんで行かうと思ふのであります。そして、一人でも多くの人が、かう

した修業を積んで行つたなら、世界は本當に救はれる日が來ると思ひます。この人間としての修業こそは、やがてすべての眞實なものの根幹となる大切なものである事を、私は痛切に考へさせられてゐるのであります。

（大正十二年三月十八日、秋田市記念館に於て）

愛についての斷想

×

あまりに愛の言葉を多く語つてゐると、反て心の中に愛がなくなつてしまふ。
私は近頃しみじみとそれを感じてゐる。
愛については、最も少く語りたい。

×

私は曾て書いた。
「愛は饒舌を厭ふ。僞りの豫言者が常に華やかに裝へる如く、僞りの愛は常に美しい言葉を着てあらはれる。
愛なきところ、そこに愛の說法がある。」

×

私たちは愛の說敎師となつてはならない。
私たちはいつも愛の生徒でなくてはならない。
愛はそれが心に滿つるとき、あへて言葉を要しない。

言葉を要するとき、愛はまだ十分ではない。

×

愛の說法は、つねに餘りに散文的である。愛は散文ではありえない。
詩人にして、はじめて愛を歌ふことを得る。
人の愛するとき、俗人もなほ詩人となる。

×

詩人といへどもなほ、あまりに愛の言葉を繰返すことによつて、その詩を磨滅せしめる。
最も少く愛について歌ふとき、その詩人は最も多く人を動かすであらう。
これを私自身への箴言としたい。

×

しかし、ゲエテやハイネの如き天才はまた別である。
愛を歌ふこと愈多くして、愛の言葉愈々鮮かになる。

×

「久遠女性はわれらを引き上ぐ……」
かくてファウストは救はれる。これゲエテの愛の結語であり、またその生涯の總和である。

×

「ふたりが何を語つたか決してたづねるな!
螢に問へ、なぜ草の中に光るかを

波に問へ、なぜ小川の中にさやぐかを
問へ西風に、なぜ吹きかつ咽ぶかを

問へ紅玉に、なぜそのやうに輝くかを
問へ菫に薔薇に、なぜ匂ふかを――
けれども問ふな、月かげの中に
苦惱の花とその死人とが何を囁いたかを！」
「決して問ふな、――」

かやうに、ハイネはその最後の詩篇の中に結語を下してゐる、あの壯麗なムウジュのための「苦難の花の」中に。生涯あのやうに愛について語つたこの詩人も、愛について語りえないことを悟つたのにちがひない。いな、愛のための詩人であつた彼こそ、愛について最も疑ひをもつた人の一人であつた事を我々は知つてゐる。

×

私もまた、愛の眞實を考へ究めんとして、迷ひの途に立つてゐる。
愛――全くそれは容易く口にするべく最も危險な事物である。
愛について語るより、元來愛について考へるといふ事が、既に危險な事かもしれない。
愛といふ、しかも自愛は愛と言ふを得ない、それは愛に最も遠いものでなければならぬ。
他愛のみが愛である。しかも、それさへ十分の吟味を經なければならない。殊に男女の愛に於いては、それは美しくして、しかもまた着物のやうに裏返されるをどうしよう。

熱烈な愛が、忽ち烈しい憎しみと變るのは何故か。それがなほ愛であらうか。
人間愛、人類愛、――何といふ美しい言葉だらう。だが、それが單なる言葉で終るとき、それは他に愛を强ふるエゴイズムの現はれと見なされても仕方はないではないか。愛の詩人は忽ち愛の說法者となり變りはしないか。

×

「我」をすてて愛に從へ、そのとき人は生きた詩である。
愛とは卽ち「我」を捨てる事でなければならぬ。
然らざる愛は、なほ相對の愛たるを免れない。

×

愛については、愼まう、いな、敢て語るを愼まないではゐられない。
私はいま、愛について自ら語るよりも、むしろ古人に聞きたいと思つてゐる。
また、たまたま私が愛について語ることがあつても、それはつひに新しい眞理である筈がない。
ただ、古人の道破せられた眞理の上に、私の詩の鰯を投げるにとどまるであらう。そして、それが低い地位にある詩人の運命であらう。
然し、私が本當に愛を知るのみならず、愛を身に體得する時こそ、私ははじめて眞實の詩人と呼ばれるであらう事だけは、私のはつきり知つてゐる事なのである。（大正十二年四月）

サイレンの誘ひ

――有島武郎氏の記念のため――

×

七月に入つて、もう七八日にもなるのに、まだ鬱陶しい梅雨はあがらない。しとしとと、蜘蛛の絲のやうな粘つた雨が、執ねく、きりもなく降つてゐる。全く、この陰鬱な、濕潤な日本特有の灰色の季節は、たまらない暗鬱な氣持の中に、私を引きずり込んでしまふ。

庭先きを見ると、もうはや桐の葉が二つ三つ落ちてゐる。毎年々々、このまだ夏の炎暑も來ないうちに、むざんに凋落する病葉を見るごとに、私の胸に巣くうてゐる悲しみが、あらたになる。

それは私の身の上の悲しみである。自分の無力を殘酷な程にはつきりと意識してゐる人間の悲しみである。「ああ、力が足りない！」といふ嘆息が、我知らず唇を洩れる。

×

「力が足りない！」

ただ、それだけだ。

道德家たちは、それを責めてゐるのだ。

批評家たちは、それを責めてゐるのだ。

だが、それでどうしようと云ふのだ？

弱い罪人と、弱い作者とは、たださう云ふより外に道を知らないのである。

力が足りないのだから、いくら責めても仕方がないではないか。

「力が足りない！」

×

有島武郎氏の訃報を聞いたのは、私がかうした事を思つた。その翌朝であつた。まだ眠つてゐた私をよびおこして、家のものが、それを告げた。そして、その記事の載つてゐる新聞を持つて來て見せた。

何といふ思ひがけない事か！

私は暫く、それを信ずる事が出來なかつた。

然し、どうも事實に疑ひなかつた。

私は驚いた、驚いたと云ふだけでは足りない、私は確かにギクリとした。

私の執筆中の小說『相寄る魂』の結末が、私の尊敬してゐた先輩、有島武郎氏によつて實現されようとは！

そして、なほその日の夕刊によつて、その情死の相手の婦人が、私も一面識のある『婦人公論』の記者、波多野秋子夫人であることを知つた。

續いて、いろいろの人のこの事件に對する批判があらはれ出した。私は十分に注意して讀んだ。然し、それは殆んど大半、取るに足らぬ饒舌にすぎなかつた。

彼等の見てゐるよりも、もつと人生は深いものである、もつとどうする事も出來ないものである、から私は繰返し言はずにはゐられなかつた。

「力が足りない！」要するに、それだけだと、私はまた思つた。

有島さんも力が足りなかつたのだ。私の描いた主人公とおなじやうに――そしてまた、これが凡ての人間の運命なのではないか。

人間としての自分の無力を意識するものは、何事にも敢て咎め立てをなし得られるものではない。

×

すぐれた一つの精神が、此の世界から失はれて行くのをみるとき、我々の心には不思議な寂寥の感がおこる。

然し、それがこのやうな異常の道をとつたとき、その寂寥の感は、むしろ暫く背景に押しやられて、かへつて、一種名狀しがたい昂奮狀態を喚びおこす。

多くの人は、さうした昂奮狀態から、いろいろな感想や批判を述べ立てた。非難する人もあり、讃美した人もあつた。

ただ、その喧騷の中で、私は寂しかつた。それは讃美すべき事ではなからうが、また非難すべき事でもないであらう。人が人生に對してもつと敬虔であれば、輕率に他人の行爲を裁斷する事は出來ない筈であるから。

私は寂しかつた。私は人間の弱さを身に引きくらべて、いたましく思つたのである。

×

有島武郎氏の死を、戀愛によつてのみ解釋して、これを非難攻擊しようとする人は、結局、自分がいかに戀愛を重んじてゐるかを自白したものである。

彼等が今少しの想像力と理解力とをもつてゐたなら、彼等は人間二人の死が、實にやむを得ない自然の法則に服從したのに外ならなかつた事を知り得たであらう。そして、互ひに口を噤んだにちがひない。

私は有島氏の死を、情死と見ないで、自殺と見たい。といふ意味は、その死をその單なる結果によつて判斷しないで、その複雜な原因を豫想して、感情を離れて、理性によつて判斷したいと思ふのに外ならない。

生きるのには、あまりに理想家であつた。あまりに善い人であつた。あまりに淸純な人であつた。さういふ人にとつては、結局、人生は「なまけた幻影」にすぎないものと思はれてくるのは、いかに至當な事であらう。

生は無意味だ。ましてや抽象的な階級鬪爭が、何の救ひ、何の慰めとならう。

前には限りも知れぬ虛無！

今は、ただ死――一思ひにその深淵へ！

そして、人生に於いて最も直接的で、最も抽象でないもの、卽ち戀愛によつてその死を賑はした――情死。

はなやかな死。然し、それは悲しくまた寂しい。

その死の底には、何といふ慰めのない失敗の自覺が橫はることであらう。

「力が足りなかつたのだ！」と何處か遙か虛空で、寂しく笑つてゐる人の聲がする……

×

我々が運命を騙る事が出來なければ、運命が我々を騙るのである。

人生に於いては、鐵鎚となるか、金敷となるかだ。そして、我々は容易に金敷となつてしまふ。

なぜなれば、我々は運命に對しては、餘りに微弱であるから。

自然の大威力に對して、人間は一匹の蟲とどれだけの違ひがあるだらう。

×

戀愛は、その圈外にあつて考察し、論議する時、抽象の死物となつてしまふ。それかとて、戀愛の當事者には、概

ね考察がなく、また考察を必要としない。
戀愛論は、人體の解剖に似てゐる。生身の人體は解剖できず、死體を解剖してみても、生きてゐるままの働きはわからない。
要するに、わからないのだ――
人生に於ける戀愛の位置も――絶頂か、奈落か、或ひはその中間か？

×

人生といふものは、だんだんに分らなくなつてくる。
年をとるにつれて、分つてくるかと思ふと、反つて分らなくなつてくるのが人生である。
戀愛も、もとより分らない。
然し、分らないながら、それが人間に與へられた最も貴重なものであると共に、最も恐ろしい贈物である事を私は感ずる。

×

戀愛の價値は、まづ、それが單なる抽象でないところにある。
人類愛とか、人間愛とか、或ひはまた、藝術だとか社會運動だとか云つても、要するに抽象たるを免れない。
ひとり戀愛ばかりは、具象の具象である。
これほど直接的な、端的なものはない。
それは火花だ、パッと燃え上る――そして、後には一抹の灰を殘す。
「戀すれば、われもそなたも、燃え燃ゆる火中の花よ、花の葉よ。

戀すれば、花のそなたも葉のわれも、おなじ火ぢやもの灰ぢやもの」
こんなに詩人はうたつた。
然し、それでいいのだ、灰は一度火であつたのだから。一度び燃燒すれば、そこで生の意義は充たされたのであるから。
こんなところから、ラジカルな戀愛至上主義の思想が發生する。

×

本當に生きるとは、つまり醉ふことである。
醉へない人間に何の悅びぞ。
だが、この醉も煩惱に根ざしてゐる限り、惡醉でのたうち廻つて、あげくの果てが宿醉に苦しまねばならぬ。その宿醉から救ふものは、或ひは死であるかも知れない。
その點で、情死者は幸福な人達だと云ひ得られるであらう。

×

戀愛ほど短命なものはない。
母親の愛は、その子供の死の日まで、いやその死んだ後々までもつづく。母親自身が死ぬ日までつづく。
男女の愛は、その純粹な愛情にくらべては、いかに不純な要素を含んでゐる事であらう。
戀愛を長生させるためには、いろいろの試練を加へて、これを淨化しなければならない。
純化される時、戀愛は戀愛以上のものとなる。ラヴはつひにチヤリテイとならねばならぬ。

×

戀愛と仕事と——それは人生の兩極をなすものかも知れない。

戀愛はそれ自らを目的とするとき、またかくあるべきであらう——貴重な浪費である。

仕事はいかなる場合にも、生產に屬する。

仕事——これは極く大まかに言ふのである——は、その名譽心から出ると、義務心から出るとを問はず、人間の建設的努力である。

戀愛と仕事と——一方があがれば、一方はさがる。正にシイソオである。

まだ本當の仕事をする時の到らない靑年時代か、でなければ、中年になつて、仕事の希望の挫折した場合、又は仕事そのものが無意味に思はれ出した場合などに、戀愛は人を襲ふ。

戀愛の心の動くのは、相手の異性の奈何よりも、要するに、チヤンスである、いや、その時の心の方向によるのだと思はれる。(世界にたつた一人しかない女性——といふやうなロマンチシズムは、私を去つて旣に久しい)

そこで、シイソオの一端が上つて、戀愛は絕對ともなる。また絕對とならなければ、その戀愛は純粹のものとは云へないかも知れない。

もつとも、世間には戀愛と仕事との一致してゐるやうな幸福な人もあるかも知れぬが、そんな幸福な人とはなりたくない。

×

ラサアルは、戀愛のために斃れた。

有島武郎氏は、その死のかなり以前に、「この頃は何んだか命がけの戀人でも得て、熱いよろこびの中に死んでしまふのが一番いい事のやうにも思はれたりする」と言はれた。

仕事よりも戀が重くなる。そんな瞬間が人間にある。この事實だけで、戀愛の價値は既に十分に認められる。
一般的の價値のはかりにかけて、善い惡いといふ前に、この明白な事實を考へよ。

×

重複自殺――私はこの言葉をみる每に、人間がいかに孤獨であるかを、痛切に感ずる。
心中の事を、歐羅巴では重複自殺といふ。さすがに個人主義の觀念の確立してゐるところだけあると思ふ。

×

戀愛は個人主義の最も端的な現はれである。
戀愛ほど、社會共存の思想に牴觸するものはない。
戀愛は人を孤獨にする。
廣い世界をたつた二人にちぢめてしまふ。
二人にとつては絕對の價値をもつてゐる。それだけ世間にとつては無價値である。
スティルネルの個人主義――二人だけの世界、二重の孤獨。
ニイチエが Einsamkeit に對して造つた Zweisamkeit――孤獨(一人きりでゐること)に對する二重孤獨(二人きりでゐること)
私は戀愛を重複個人主義(Doppelt-Egoismus)とよんでみたい。――重複自殺(Dopplt-Selbstmord)に對して。
二人の情熱が烈しければ烈しいほど、世間の爪はぢきとならざるをえない。
しかも、「一人きりでゐること」が悲しい事である如く、「二人きりでゐること」も、やつぱり悲しい事である。
世間を敵として立籠つた二人きりの世界も、穩かな安らひの床である場合が、世に幾何あらう?

互ひの心中立ては、結局、自分に對する心中立てにすぎないではないか。
重複個人主義を分解すれば、二つの個人主義となる。
Zweisamkeit は Einsamkeit の複數にすぎない。
戀愛ほど人に孤獨を感じさせるものはない。世間と二人との間の距離が、二人の間にもやつぱり見出される時の孤獨を想像してみよ。
そして、この孤獨からまぬがれるには、ただ、ただ死の外にない。
死は戀愛の極致である。
死によつて、はじめて愛は完うされ、二つの靈は一に融合する。
ここに情死の哲學的解釋がある。

×

生きてゐて、出來るだけ善くなるやうにと思つて、出來るだけの力で仕事をしてをれば、世間は決してその仕事を善くは言はない。多くの批評は、大抵非難で、そして、その非難を詮じつめてみると、結局、被難者に死ぬことを勸告してゐないものはない。
「この作者は全然見込がない、どんなに勉强して書いて見たところで駄目で、無駄骨折の草臥儲けだ」これが死の勸告でなくて何であらう！　なぜかと云へば、若しその批評家の言ふ如く、全然見込のない、何を書いても駄目な人間ならば、それが藝術のために一生を捧げた人間である限り、もはや死ぬ外に道はないからである。
「彼は僞善者である、彼の行動は悉くそれを示してゐる。彼はウソつきである、人道主義を看板にしてゐる輕蔑すべき男である」そしてこれが死の勸告でなくて何であらう！　なぜならばかやうな非難の底には、實に測るべからざる

惡意が潛んでゐて、それを排除することは、ただ死を以てしてのみ可能であるといふやうな場合が十中八九だからである。非難者は自ら意識してはゐなくとも、さうした種類の非難には、對者の破滅に對する燃えるやうな熱望が感得せられるからである。

ところが、若しその非難せられたものが死んだ時、さうした非難者は何と言ふか？

今度は馬鹿だといふのだ。

×

善だとか、愛だとか、人道だとか、奉仕だとかいふ概念が、純潔な心には、深く深く根をおろす。

然し、人生の眞實は、恐ろしい力をもつて、そのやはらかな心を碎く。

美しい理想主義は、醜い破綻に終る。

「力が足りない！」と云ふ嘆息が、ただひとつ殘る。

昔、そんなにも熱烈に考へてゐた事が、今は無意味になり、馬鹿々々しくなる。

純潔な心の人ほど、烈しい厭世主義者になり、虛無主義者になるものはない。

有島武郎氏はさうではなかつたらうか？

そして、かやうな人が一思ひに死んでしまふと、世間は今度はどう云ふか？　馬鹿だと云ふのである。

利巧な人にあつては、かなはない。そして、世間はさうした利巧な人によつて出來てゐるのだ。それだけでも、有島武郎氏の死は道理だと私は思はずにゐられない。

×

自分の嫌つてゐる人間が、自分の讃美してゐる行爲に出たとき、その人間が好きになるか、その行爲が嫌ひになる

か、どちらかである。そしてそれによつて、そのどちらの感情が强かつたかが知られる。

有島武郎氏の死によつて、近松秋江氏は、丁度この面白い試驗に出あつた。そして秋江氏は曾てあんなにも情死の讃美者であつた氏は、急に心中が嫌ひになつてしまつた。

私はこの事實によつて、人間の感情といふものの力の恐ろしさに、何とも言はれない心持を經驗せずにはゐられない。

そして、あんなにも圓滿な善良な、缺點のない紳士で、從つて人望の高かつた有島氏にも、なほ秋江氏のやうな反感をもつた人の存してゐた事を思つて、人間の免れ難い業といふものがはつきりと目に見えるやうな氣がする。

×

反省は聖人をも罪人にする。

道德堅固をもつて任じて、他を非難する人でも、しづかに自己を反省するとき、自分の非難に相當するものが、自分の內部にも存する事を發見するであらう。

ましてや、自分で缺點だらけの人間が、どうして他人を非難出來よう。

反省とは、他人の缺點を、自分の上に見出すことである。

×

人の一生には、おお死よと、呼びかけずにはゐられない瞬間がある。

死が救ひと思はれるやうな瞬間がある。

その時こそ、遥かな波の間から、美しいサイレンの聲が聞えるのだ。この聲を聞くと、多くのものは、オデッセエのやうに、急いで耳に蠟をつめるか、帆檣に身を縛するかするのだ。

ぐ有島武郎氏の耳にも、その抗(あらが)ひがたい誘惑の聲が聞えたであらう。そして、氏は心ゆくばかりその聲に聞きとれたであらう。そして、いつしか氏は美しいサイレンの手に身をゆだねて、この世の外へと消えてしまつた。名辭と善意と時勢とに强ひられた惱みの生活は、蠱惑の死によつて打切られ、かくて地上の惱みから、やさしく弱く高貴な魂は救はれたのだ。

自殺者に對して、あまりに苛酷な宗敎は呪はれてあれ、自殺者もまた救はれねばならぬ。

×

有島武郎氏と死を共にした波多野秋子夫人は、その死の一月前に、私の家に來られた。こんな烈しい、强い印象を與へる婦人には、私はまだ會つた事がない。あの有名になつた大きな二つの眼。それが語つたものは、强い性格の力であつた。波多野秋子夫人自身が、美しいサイレンであつたかも知れない。そして人生に對して、いつも受身であつた人は、その戀に於ても、また受身であつたに違ひない。

×

呼びかけずにはゐられない刹那

「まあ待て、おまへは實に美しいから」と言つたが最後、ファウストは、魂をメフィストにゆだねなければならない。だが、さう呼びかけずにゐられない刹那があつたなら、「そのまま滅びてもいい」ではないか。それが人生の至高の時なのではないか、そこで生の意義はみたされるのではないか。

ところが、頭の中に、鬼が一匹でもゐたら、もう駄目だ。メフィストほどの名うての奴でなくても、『イワンの馬鹿』

にでてくる小さな尻尾のある小鬼でもだ。（こいつには理智といふ學名がついてゐる）この小鬼が跳梁して、いつも私の悅びを臺なしにしてゐる。

この小鬼を退治しよう。そしたら、生の杯を滓まで傾けて、十分に醉ふことが出來る。醉へない人間に何の悅びぞ。から呟いたのも、もう古いことだ。爾來、私はいつも鬼退治の戰敗將軍だつた。此頃になつて、やつとこの鬼をまくことをおぼえた。私は今自然によりて我を忘れたいとおもふ。此頃私がよく旅するのは、一面またこの意味からでもある。

×

右の一章は、波多野秋子夫人が『婦人公論』のために「生の悅びを感ずる時」といふ題目について徵された原稿である。私が會つた時には、すでに死の決意は出來てゐた筈である。それを思ふと、不思議な氣がする。

思ふに、「呼びかけずにはゐられない刹那」が、あの二人の上にあつたであらうか？

生の悅びが極まるところが死の悅びであるといふ事は、私の實に實によく知るところである。

私の小說の主人公たちも、さうして死んだ。

彼等はその生の意義を充たした。

力の添はぬ仕事を企てつつ、私はいつ本當に生きたと云ひ得られるだらう？

彼等は作者の私を憫れんでゐるに違ひない。

×

『婦人公論』では、次いで、「人生に於ける戀愛の位置」について、諸家に質した。それに對する私の囘答も、この斷章の中に見出されるであらう。（大正十二年七月――八月）

名聲と良心との悲劇

――文學者生活の二つの暗礁――

高名なる藝術家の、思ひがけない死を聞いて、私の心はいたく動き騒ぐ。多くの文學者の中には、裁斷の高所に坐して、嚴正なる批判を下す人もあらう。我々弱小な人間には、そんな大それたことは到底出來ない。曾つては、あんなにも幸福そのものゝ象徴でもあるやうに思はれてゐた人の、この突然の悲報に、殆んど言ふべきことを知らない。たゞたゞ、この嚴肅なる事實の前に、頭を垂れるのみである。

故人の死因について、局外者の身をもつて、いたづらな揣摩憶測を下すことは、一私人としては、この際愼しみたいことであるが、たゞ、この現前の一事實が、私の長く考へて來た一事に、いたく觸れるものがあつて、恰かも自分の傷手を刺されるやうな思ひがする。そして、人生の歸趨に疑ひ惑ふものゝ一人として、この與へられたかずかずの暗示に對して、再び自己の心裡の反應を、吟味せずにはゐられない。まことに、我々はこの際何を語らうとも、各自の內部について語り得るのみである。

靜かな學窓裡の人が、一度びその片隅を離れて、時代の潮流に投じて、力の限りを盡して戰ひ、つひに赫々たる名聲の彩雲に包まれて、社會の師表と仰がれ、一世の指導者として、衆人の上に立てられた時、心なき人々は、一代の幸運兒として、これを嫉視したかも知れない。しかも、實際に於いては、その時、人知れぬ痛苦と幻滅とが、その人の心に萠し初めなかつたとは、果して斷言出來ようか。一個善良圓滿なる好紳士が、かの頑迷なる舊思想の徒の、所謂痴者と化した迄には、いかに悲痛な心理のプロセスが、その內生活の間に展開したであらうか。それを思へば、心

の戰くのを禁じ得ない。自ら平凡人と稱してゐた人が、かの薄倖な天才の如く、非凡な終結を見出したことは、抑も何を意味するか。故人が單に愛のためにのみ死んだとは、いかにしても考へられない。リイベストオト、卽ち「愛の死」の思想に、心惹かれることの多い自分ではあるが、この現實世界に於て、愛が人を死に驅る迄には、死はなほ多くの準備を必要とするであらう。

私にとつて、悲痛にして嚴肅なる問題は、文學者に於ける名聲と良心との問題である。文學者生活の悲劇は、實にこの二つの桎梏によつて構成せられる。たゞ、一は主として外部の、對世間的の繫縛であつて、我々の力が充實し、眞に强健に徹するを得たならば、極めて輕微な問題となつてしまふであらうが、他の內面的な問題は、我々の力が强大となるに從つて、愈々强大となり、我々が靈魂の高所に飛翔するに從つて、愈々熾烈となるべき運命をもつてゐる。文學者の生活に、單に一個の職業として以上の意義を置かないか、或は藝術至上主義又は自然主義の名によつて、單に外界の觀察者、又は空中樓閣の建築者として滿足する場合には、名聲の問題の如き、單に生活の方便として重きをなすに過ぎず、良心の問題に至つては、全く相關知するところなくして終るだらう。然し、文學者が一個の「人間」であり、從つて熾烈な自己探求者であつた場合には、その生活は、必然、悲劇的色彩を帶び來らねばならぬ。

曾つて私は、數年前に、片隅の幸福といふことを云つた。その要旨を約言すれば、名譽名聲を求めるのは、不幸を求める事であつて、人目に立たぬ、地味な、謙遜な生活を、人生の片隅に送るところに、人間の眞の幸福は存するといふのにあつた。ところが、いつであつたか、或人はこの語を用ゐて、暗に私を誹議してゐた。しかもそれが、私の豫期に反して、意外にも、私をさも自得し、飽滿し、自分の幸福に醉うて、いい氣持でゐる安價な人間であるかのやうに云々してあつたので、私はその餘りの無理解に啞然たるものがあつた。若しこれが、かやうな無責任な放言ではなくして、私の所說と實際との間の矛盾を指摘したのであつたならば、私は喜んでそれを首肯したであらう。實際私は、

この數年の間に、自分の努力が、その所期と反對の方向へ私を押流した事を、自認せずにゐられない。しかも、それは止むを得ない自然の結果であつた。私は常に片隅を愛して、出來るだけ地味な、謙遜な道を踏んだのであつたが、然し私もなほ文學者であつた。いかに弱小であるとは云へ、文學者として社會に存在する場合には、たゞそれだけで、既に片隅の幸福に遠い――もとより今の私の理想とするところは、既に幸福な生活ではなくして、むしろ悲壯な生涯であるとは云へ、まのあたり、すぐれた人の異常な結末を見る時には、文學者生活の至難を痛感して、そゞろに胸を打たれるものがある。

文學的努力の當然の結果でもあり、又その生活の基礎ともなるものは、名聲である、世間的人氣である。これが、文學者の生活を保持する支柱であると同時に、彼に對する無形の繫縛であり、壓迫である。文學者の生活にとつて、こんなに致命的な關係をもつものは尠い。名聲はよく文學者をして墮落せしめる、その極端なるに於いては、つひにこれを死に至らしめる。名聲の過小と、不到來は、多くの悲劇を生んだ、その過大もまた悲劇を生む。曾つて有名になることの困難を說いた人があつた、私はむしろ、有名であることの困難に、心おののく。

もとより私などの如き、文學者としての最低に屬するものが、名聲の禍ひについて語るのは、一見奇異に感ぜられるであらうが、逝ける文學者の生涯について靜かに思ひをめぐらす時、名聲といふものが、いかに恐ろしい贈物であるかに愕然とせずにはゐられなかつたのである。異常な人望のあつた故人の葬儀には、會葬者六百人を算したといふ。思へばこの六百人こそ、故人に對する社會の敬愛と、それに伴ふ壓迫とを象徵したものではなかつたらうか。比較的靜穩な、晴れやかなものであつたらしいその前半生に對して、その後年、殊に最近の數年の、著しい波瀾動搖のあとを偲ぶにつけ、社會の敬意と信頼とが、この人にとつて、いかに重い壓迫であつたかを考へずにはゐられない。曾つて私が某紙に於て、ある一事實を引いて、この人の藝術的良心の鋭敏な事を嘆美したのに對して、直ちにその然らぬ事

ん辯ぜられた程に、非常に買ひ被られる事を恐れた人であつたのだから。然し、その一行動毎に愈々加はるこの社會的期待を、どうして脱却することが出來たらう、しかも單なる文學者としてのみならず、社會の師表たるべき高潔な人格者として、又、無產階級文化の將來者としての名聲を。

しかも、この赫々たる光彩の中にあつて、自分が矢張り弱い一個の人間に過ぎず、人間としての弱點を脫する事が出來なかつたのを見出したならばどうであらうか。その生れ付いた階級の精神を脫却する事の不可能を悟つたならばどうであらうか。その心中の相剋は、良心の苦鬪は、いかばかりであらうか。こゝに於いて、名聲の問題は、おのづと良心の問題となつてくる。

良心の問題？　プイ！　ブルジョア・インテリゲンチアの腦髓の遊戲ぢやないか！……かやうに、プロレタリア論客は言ふであらう。まことにさうである自己のあらゆる意欲を絕對に肯定し、生活本能の導くがまゝに、あらゆる手段を盡して、その敵對階級を擊破し、絕滅せしめるに當つて、そこに何の狐疑逡巡ぞ、何の自己非難ぞ。彼等にとつては、良心といひ、自己反省といふ、畢竟無意味の空語にすぎないであらう。

然しながら、それにも拘はらず、この無用なる反省、無意義なる良心の問題こそ、文學者にとつては、宿命的に背負はされた重荷でなければならない。自己の生活の暗面を直視することは、罪障多き人間にとつては、堪へがたい苦行である。出來得べくんば、眼をそれから背けたい、そして外部の事物によつて、それを忘れ、それをごまかしたいと云ふ卑怯な本能を我々は誰でも持つてゐる。然しその弱點に屈する時、その文學たるや著しくその價値を失ふであらう。かの放恣な幻想をたのしむやうな、所謂藝術至上主義者などの藝術の價値が、第二義に墮するのも、それが自分の生活の根元と隔絕したものであるからに外ならない。その人々にとつては、藝術は自己からの逃避に外ならないのだ。世には、自己からの逃避としての藝術もあり得るのだ。然し、眞の人間的藝術は、さういふものであつてはな

らない。

天文學者は、たゞ天體を觀測しさへすればよろしい。文學者は、自分の心を、自分の魂を、たえず觀測してゐなければならない。彼の全意義は、すべてこの一點にかゝはる。文學者こそ、心の天文學者でなければならない。だが、それは何たる危險な仕事であらう。その誠實に比例して、その危險の度も加はる。文學者の眞の悲劇はこゝに發生する。弱い我々は、往々にしてこの暗礁に觸れて難破しなければならない。然しこの不幸な難破にこそ、彼の藝術家としての完成が存するのではないか。たとひそれが敗北であつたにしても、彼の切々たる誠實の氣は、完成した藝術品にもまして、人の心に訴へるものはないか。私は實にそれを思ふ。

亡き藝術家の戀愛事件に對して、多くの非議を事とする人よ。諸君は數年前に行はれた某無政府主義者の情事を想起し得ないか。かのアナアキストが、その友人の妻を奪つて、公然之れと同棲し、狂へる獅子のやうに世間を睥睨した態度は、確かに痛快ではあつた。プロレタリア論客は、この藝術家にも、またかくの如く生きよと云ふであらう。然しそれは我々の理性に訴へても、我々の感情を滿足させるものではない。——多分、これは滅び行くべきインテリゲンチヤの聲ではあらうが——私はあまりにも潔く逝いた我々の尊敬する藝術家の死を、深く哀悼すると共に、圖らずも、文學者に於ける名聲と良心との悲劇を想起せざるを得なかつた。故人がこの暗礁に觸れたのだとは、必ずしも斷言し得ないのだけれども。（大正十二年七月）

燒跡の靑き芽生え

忘れる事の出來ない大震劫火のあつた日から、すでにもう三十幾日もの日數を經た。

私の住んでゐるこのあたりこそ、地盤がかなりしつかりしてゐたと見え、家屋の倒潰もまづ稀で、町並は、それぞれその瓦のめくれた屋根にはトタンをかぶせ、歪み蹲まつてゐた軒をまつすぐにし、とにもかくにも以前の町に回復し、家々の前にあつた瓦礫の山は、どこかに整理され、自警團も解散となつて、やうやうの事で、震災氣分はうすれて行つた。そして、外にも出ないで、ぢつと自分の家ですわつてゐると、十月の寂しい秋雨が降りつづいて、朝夕はめつきりと冷たくなり、時々空がはれると、麗しい日が椽に黄ろく照つて來る……。

そんな靜かな秋の陽ざしを見ると、過ぎ去つた凶事の記憶は、まるで惡夢のやうに感じられて來る。あつた事とも思はれないやうな氣さへするが、然し、足一歩、下町の方に入ると、そこには慘澹たる燒野の原が、打消しがたい眞實の光景として、同じ秋の日に、その傷ついた胸をさらしてゐるのである。

なるほど、そこには、もう多くのバラックは建つてゐるし、建ちつつもある。しかしそのささやかなバラックは災前のあの美しい市の幻を、いよいよもつて、あざやかにする。あそこはああであつた、こちらはかうであつた、何といふひどい破壞と滅亡とであらうと、昔のあでやかな夢を思ひかへしつつ、心は暗くなつて行く。今にも霜がおりて來るであらう、木枯の風は、さへぎるもののないこの燒野に吹きなびくであらう。雨はバラックの上に重く降るであらう、ことしの冬の寒さ、それを考へると胸は疼むやうである。

あの恐ろしい日――九月一日の夕方、飯田橋に近い高架線の上から、燃えに燃えた火の旋風、熱焰の海を、二時間ばかりも自分は見てゐた。それから二日の朝、市ヶ谷の方から九段の方に出で、神田の一部の殘焰の町の中を、頰を燒かれるやうな熱さの中を、水道橋の方に廻ると、そこの高架線の上には、熊の皮をかぶつた男が燒死してゐた。十三日の日には、家の者とともに萬世橋から本所被服廠に行き、そこで、もう大凡取片付けのすんだ廣い廠内を步いた。

手向けの花がかざられてゐるほとりに、遺骨は灰白色の堆積をおよそ七八ヶ所以上もきづいてゐたであらう。人の脂の靑みがかつてギラギラと浮いてゐる中央の水溜り――それはこの雨で出來たものであらう、――には、子供の下駄や、化粧水の瓶などが泥にまみれてちらばり、柵のあたりには、何百臺とも數しれぬ自轉車が、赤く燒けてその骨を硬ばらせてゐるのがつみ重なつてゐるのであつた。私は長くそこに止まることが出來なかつた。死者を悼む心は、やがて、無常を悲しむ心である。

十三日以來引籠つてゐた私のところへ、信州から上京したといふ『散華樂』の詩人、三石勝五郎氏が見舞によつてくれたのは、十五日頃ででもあつたらうか。互にこの度の事を話し合ひ、無事を祝して、そのあとで、詩の話もいつものとほりしたのであつたが、三石氏は花の都、浮華に漲つてゐた東京の火の洗禮を「これはいいぢやないか」と君らしい純な言ひ方で批評をした。

その三石氏が、十月の上旬に入つてから、日はいつであつたか忘れたが、突然たづねて來られて、これから自分の弟が、自動車を操縦するから、一緒に燒け跡に行かう、今日一日自分のために費してくれと云はれるのだ。一旦ことわつて見たが、熱心なすすめに、その氣になつて承知をした。すると、氏は、氏の友人の依田英一氏を、私に紹介してくれた。自動車は町角にもう來てゐて、三石氏にそつくりといつてもいいやうな令弟と、依田氏夫人とがそこにのつてゐた。これで、同行は六人、依田氏と三石氏令弟とは、運轉臺に並び、車内には、三石氏と自分、依田夫人と家のものとが並ぶ。

この中古のがつしりした六人乘りの自動車は、矢來の町をまつすぐに、まづ、日比谷方面へと飯田橋にむかつて走つて行く。九段の下に出ると、相變らず澤山の通行人が、左右に正しく歩いてゐる。バラックは十三日の比ではない。もうよほどたつてゐる。燒けたトタンを兩方からたてかけた避難小屋はもう見られない。ただ一つやけのこつてゐる

愛國婦人會の建物を左に行くと、クロオデル大使もひどい目にあつた事と思はれる、フランス大使館がすつかり燒けてゐる。お濠の石垣は、さほど崩れてはゐないが、竹橋あたりの江戶の昔を語る樓屋は大分破損してゐる。宮城前に出るとアメリカから來たのであらう、新型のテントの幾列かが綺麗に並んで、松の間にチラチラしてみえる。火災當時には、ここは一杯の避難者で、數十萬人を收容して、その一命を救つた廣場だと思ふと、いつも廣すぎると思はれてゐたのが、今はさうは思はれなくなつた。人間といふものは勝手なものである。

それからまつすぐに丸ノ內の大通りに出ると、三菱原あたりの事務所の高樓は、多少の破損はあるが、火はまぬがれてゐる。帝劇は、どうして、どこから火を出したのであらうか、內部がすつかりやけて、一二等入口の大玄關の大理石の柱はくすぼり、あの美しかつた大階段も、メチヤメチヤである。このあたりの一帶は、通行人や、いろんな食物店まで、埃まみれである。

「これはまた、どうだネ」と三石氏が叫ぶ。警視廳の大建築物が爆破されて、文字通りミヂンになつてゐるのだ。ただ見る煉瓦の尖端がその赤い碎壁を見せて、瓦礫の山なのである。

「ひどいね」と依田氏もいへば、三石氏令弟もいふ。

日比谷の左側はすつかり燒けてゐるが、日比谷公園は、草木まで無事で、園內は一杯の民衆である。私達の自動車は、園の中央を衆議院方面に走り、そこから麴町、赤坂見附を降り、見附の傍のガソリン販賣所に一寸寄る。そこでもガソリンは賣らなかつた。暫くの間休んでゐるので、煙草をふかしつつ濠を見る。擬寶珠つきの美しい辨慶橋が、中央どころで歪んでゐる。依田氏夫人は、

「あのやうな橋はほんとによろしいのに惜しいこと……」と云つて、しみじみと眺めてゐる。

二十分ほどして出かける。溜池より虎の門の方へ、このあたりは、地震も火事もずゐぶんひどかつたやうで、建て

こんでゐた料亭藝者屋など、あと形もなく、山王の森の樹木も赤く燒け枯れてゐる。ほとんど燒けさうにも思はれぬ虎の門の女學館の校舍が、すつかり燒け落ちてゐる。

「ここなどどうして燒けたらう？」誰かが云ふ。

櫻田本郷町から芝口まで、そこから又芝公園まで、茫々たる燒野である。自動車は、疾走して、増上寺前をよこぎる。赤い御門は立派にのこり、木の間に靈廟が美しくすいて見えるのはうれしい。このあたりは、又一杯の飲食店である。運動場の方は、多くのバラックで、おしめなどがほされてゐる。三田通りは燒けないで、昔の三田通りである。それでも方々石垣とか、煉瓦切れを使つてあるやうなところは、みな壞れかゝつてゐる。「さつまつ原」から、泉岳寺前を通り、品川停車場近くまで來ると、自動車はパンクして了つた。

「こゝまで來たんだから横濱に行かう」と三石氏はしきりに令弟にすゝめてゐて、皆もその氣になつてこゝまで來たのだが、パンクしては仕方がない。三石氏令弟は電車で、ダンロオプをどこか遠方、芝口か赤坂かへ取りに行かれる。その間、四人は大混雜の品川停車場でやすむ。地震以來、もう自動車は、贅澤品などいつてゐられない、眞に必要な交通機關となつたのだ。構内にも自動車が澤山並んでゐる。待つこと一時間ばかり、やうやう歸つて來られたので、それを修復して、出かける。そして、八ツ山京濱の橋まで來るとまたパンクした。仕方がないので岐路に入り、しきりに直す。

私達は晝食に、依田氏の求めて來られた壽司をたべる。その時、二人の人が通りかゝつて、三石氏と顏見合せて互に「やア」と云ふ。三石氏は、この人は僕と同郷で、輕井澤ホテルの主人ですと紹介する。

「燒けたナ、これからどうする？」と三石氏はそのブツキラボウな問ひ方をする。帝國ホテル附近の店をも經營してゐて、それが燒けたとの事である。

「ナニ、またやるのさ」と、その人はおちついて答へる。そして、一寸話をして、忙しいからといつて行つて了ふ。

半時間ほどして車もなほつたので、

「横濱は止さうね」と三石氏も云つて、それより一直路、銀座に出て、工事中の歌舞伎座の前より、間もなく永代橋をわたる。それからは深川である。

深川の地は實に氣の毒であつた。そこらは木造の家ばかりなので、燒け跡は、たゞ灰のみである。灰と、燒けたトタンとが、まだそのまゝに殘つてゐる。目拔きの町並は、さすがに飲食店のバラツクが、チラホラ並んでゐるが、町の中になると、ところどころ灰かきをしてゐるばかり、丁度田舍で、百姓が田で働いてゞもゐるやうな有樣だ。

何といふ名の橋か、欄干はやけ落ち、その下の汐入の川は、材木が一杯につかつて、それがすべて黒く燒けて灰を流してゐるので、水もまた黒くよどんでゐる。地震以來、地盤が低くなつて、大潮にはいつも水がさして來るといふのは、このあたり一帶なのであらうと思はれる。燒けた材木の間には、襤褸布なども浮いてゐて臭氣は鼻を打つ。橋のたもとで、自動車をとめる。そして、依田氏夫妻、三石氏、私たちは橋をわたる。三石氏令弟は、どこかの官廳へでも行くと見えて、大手町まで行きたいといふ人をのせて、その間に社會奉仕をする事になる。

あとできいたのだがその問答が面白い。

「これは、乘合自動車ですか?」

「いや、さうでありません」

「のせて下さらないか、いくらでも出しますから」

「いや、私は御主人のお供をして來たのですから、さういふわけには行きません、しかし社會奉仕ならば、やりませう」

その人一二間行くと、立止まつて考へて、
「では、やつて下さい」
「承知しました」
自動車はかうして大手町まで、ブー〳〵走つて行つたのだ。あとで、三石氏令弟は、
「さつきのせて行つた人は、えらい人だね」と呟いてゐられた。
洲崎遊廓の中に入ると、すぐ正面に防波堤が見え、その上に七八人、立つてゐる人があちこちを眺めてゐる。
「この洲崎から焼け出されて、私の家へ一寸避難してゐた婆さん(三十七八の婆さん藝者)がありましてね」と依田氏の夫人があるきながら家の者に云つた、「ひどく困つてゐたやうでしたが、その焼跡はどこでせう」依田氏と夫人とは先に立つて行く。そして左折して、ずつと防波堤に近い端のところまで行く。そこにも四五人、一組の家族がこゝかしこで灰掻きをしてゐる。それにたづねると教へてくれた。
その婆さんの焼けた家跡といふのは、かなり立派なものだつた。まづ、玄關の石もいゝ石だが、黒い棒片れを立てたやうになつてゐる立木のところに、よくこんな風なところで見る、石人形、遊女と客とが一緒に立つてゐる人形が、赤い火に焼けて、褐色に寂びた色をして立つてゐる。
「これは面白いね」と三石氏が云ふ、「いゝぢやないか、焼けて風情が出來たよ」
かなり大きい家らしかつた。庭には石橋がかゝり、泉水には數奇をこらした石燈籠が配置され、富士山が造られ、それは木に圍まれて、木の間には、石の佛像があり、五重塔があるが、これはころがつてゐる。
「婆さんが泣いて惜しがるのもむりもないのね、なか〳〵いゝのですもの……」と依田氏に夫人がさゝやく。三石氏は、

「さうだね、なか〱しやれてるね」と、いつてそのはしの方にいつて、無雜作に立小便をした。三石氏は、今は、面倒くさい事のなくなつた、うるさい噓でかためたもの丶なくなつたこんな有樣が痛快でたまらないらしい。そこを離れて、防波堤に近より、外を見ると、水の一杯にたゝへた潮入りの沼澤地で、ずつと彼方に、房總半島が見える。水路からあの夜の避難の小舟は、きつと彼方にのがれたであらう。こゝかしこ見つゝ行くと、傍の燒け跡に、一宇の祠があつて、そのメリンスの幕が燒けないで、心なき風にひら〱してゐる。

「こんなものが燒けのこつてゐるよ」と依田氏が皆をかへりみる。

「まつたく、のこつてるね、不思議に」と、三石氏が叫ぶ。

そのあたりの焦土に、無花果の實が黑こげになつて澤山おちてゐる。樹はすつかり燒けてゐるが、その根元に、靑い芽が二本伸び出でようとしてゐる。又、見ると、その隣の柘榴の木の下にも靑い芽が五六本、非常に鮮かな綠をふいてゐる。ぢつと、皆の眼が、この新生の芽の上にそゝがれた。人間の復興よりも、もつと素直に、もつと速かに、このさゝやかな新生はすでに秋の日をあびてゐるのだ。何ともいはれない可憐な情趣が、この時私たちの胸をたゞちに打つ思ひがした。

一時間ほどして、この洲崎を出て、再び自動車にのり、本所に入ると、又パンクした。そして路傍で、修繕に骨を折る。ふと外輪に、燒けた五寸釘が折れこんでゐるのを發見し、「これだこれだ」と度々のペンクの理由を燒け釘に發見したのも、燒け跡らしい事件である。

それよりは、もうパンクせず、本所被服廠跡に詣で、兩國より淺草にいで、途中三人の巡査をのせて、上野まで、社會奉仕をもして、灯のともるころ神樂坂にかへる。

「疲れたかね」と三石氏は、少しも疲れない元氣にみちた顏をして、さきに自動車を下りた。以前の東京は、自分に

は。緣のないものだつた。災後の東京にこそ、人間の本當の營み、眞實に近い聲がきかれようとの氏の持論は、今や、なかなか堅いものに見えるのだ。そして自分も亦それに同感をもつのである。（大正十二年十月）

餘震の秋の夜

×

どこの家でもこの頃は、十一時となるとすつかり寢靜まつてしまつて、物音一つしない。それまでとても、このあたりは夜分さわがしいところではないのだが、この頃は、――あの地震以來は、格別、みんなの寢靜まつてしまふのが早い。それに十月も末となつてからは、もう鳴いてゐる蟲もなく、ぢつとかうしてゐると、まるで野の中にでもひとりゐるかのやうな心持になる。ただ時々、自動車の疾走するらしい音響が微かに響いてくる。蚊ももうほとんどゐないので、ぢつと讀書などするには、一年中この頃の夜ほどいい時はない。然し、ぢつと本を讀んでゐると、ほとんど何の前觸もなく、震動がおそつてくる。柱が、そして障子が、そして床が、それぞれに身顫ひするやうに搖れる。かなり長いこと搖れてゐるが、全體の調子がごく緩漫なので、素人のものにも、「ナニ、餘震なのだ」と安心してゐられるわけであるが、それでも底に一種の不安が萌す。九月一日のあのはげしい地震以來、そもそも何千囘の震動數であらう。ほとんど我々の心づかない晝間のものを合せると、想像も出來ないほどの囘數となるであらう。ただ一ケ所の深い海底の大陷落が、その及ぼすところかくの如くである。自然界のさうした嚴然たる法則を見ると私は、それがやはり人生の事、人間のいろんな生活中の出來事にほとんど規を同じくすることを感ぜざるをえない、否、人間の事象そのものこそ、もともと自然界の現象の縮圖にしか外ならないのだ。きはめて嚴肅なるもの、きはめて恐怖すべきものが、

何のこともなく看すごされてゐるものの中に芽を藏してゐる。そして、一朝そこに、一つの芽端が發すれば、それは次へ次へとその枝をのばし、延長力のあるだけは、その延長をとどめようとはしない。およそいかなるものでも、その影響をうけ、その影響を及ぼす。我々のあらたに考へねばならぬことはその點にある。

×

私はいつも、あまり外出をしない方なので、或る時家の者の話では、この近所の人々が私の家に始終遊びに來る友人が私で、私はかへつて來客だと思つてゐたとの事で、事のあまりに意外なのに、失笑した。ところが、こんな私も、今度の地震の後で、町内の人々にまじつて、夜警を幾夜かした。「十一時ごろまで」と「十一時から」との毎夜交代で、街路に出て、そこにある木の腰かけに腰をかけて、出入の人々に注意する。はじめ二夜は、電燈がつかなかつたので、まるで祭禮の時のやうに、大提灯をかけ、それにもえる百目蠟燭のかげで、暗い街路を何時間も何時間もみはりをする。子供達が、昂奮して寝られないと見えて、同じやうに、掛けて、いつまでも、いつまでも、ぢつと並んでゐる。夜ふけになると、その子供もいつか歸り、男きれのない家から出てゐる婦人は、毛布を身にまいて、うとうととして了ふ。そんな時、ずつとむかうで、やはり二三脚の腰かけを打寄せて、三つ四つの小提灯のかげで、在郷軍人らしいのがまじり、四五人で話をしてゐる。床屋さんだの、菓子屋さんだの、鑵詰屋さんだの……さうした商店の主人達なので、いづれもこの町生えぬきの人々らしい。いろんな話の末には、小學校時代の話なども出て、どこの美しい娘はどうなつたの、かうなつたのと、なかなか話はにぎはしい。もう二時三時頃になると、それも話がつきて、いつの間にか一人二人散つて了ふ。交り交り路地を見まはつてこちらに來る人々が、「御苦勞さん」と、聲をかけてゆく。またふと氣がつくと、犬が二疋足許に來てうづくまつてゐる。これらの犬は、地震の始まつた時、ハッと驚いてそれからどこへ行つたか、一目散にかけ出して了ひ、歸つて來たのは、その日の夕方であつたといふ。どつか搖れないところへとか

け出したのか、それとも恐怖のあまり度を失つたのであらうか。ぢつとまるくなつて寢てゐるかと思ふと、ふど、起き上つてむかうに行く。その樣子はやはり人間の心持の影響を受けてゐる。

町内の人々は、この五六日、どこででも親しくなつてゐた、また其の後もその時の親しみはつづいてゐるらしい。あんな事がなければ、いつまでも口もきかないでゐたであらうのにと考へると、どんな人間でも、善良な一面をそれぞれもつてゐることがはつきり感ぜられる。

蹊には、もう着物は、夜露でしつとりとして、かなり冷えわたつてゐるので、疲れも感じられてくる。空が白みかかると、自動車の數もふえ、夜警の必要はもうなくなつてくる。

×

震災の詩といふものを多くの詩人が作つた。私も九月十一日、その所思を書いたけれど、私のやうな傾向のものには苦しい事である。私には、あの煉瓦の山、燒けたトタン板、人間の脂の溜り、さうしたものを見ても、それのみそのまま歌つて見てもつまらないと思ふので、ほとんど詩に生み出すべき感興を喚び起されない。しかし私がただ一つ詩にうたひたかつたのは、燒後十七八日頃、もうバラックもぽつぽつたちはじめた頃、三石勝五郎氏のさそひで、氏の令弟の操縦する自動車で、ずつと燒け跡を一めぐり、本所の罹災地にさしかかつた時、パンクをした、それを、三石氏令弟が修繕する間、車上でまつてゐると、燒野ヶ原となつてゐる町の上には、海の方からの風がひどく、ところどころの灰燼地から灰くさい臭氣もながれてくる。その街路を、とぼとぼと幼兒を荷車にのせて引いてくる夫婦がある。幼子のそばには大根が二本、その外には、一つの風呂敷包位である。多分、家は燒け、遠緣の親戚が千葉縣あたりにあつて、そこで今まで、避難してゐて、今かうして、子供をつれてかへつてくるのであらう、その車のすぎゆく影、それはいたましくもあるが、また平凡でもある。私のうたひたいのはそんな平凡なところにある。

「福士君はどうしたらう」と、本所深川の有様を、新聞で見て、まづ私は心配せずにはゐられなかつた。福士氏は、あの日の前夜十時ごろ私の家に來て、いろいろ雜談のあとで、深川の生活をはなし、一度遊びにくるやうに言つて歸つて行かれた。その翌日があの事變なのだ。私は心配せずにはゐられなかつた。

ところが、此間、その福士氏が、たづねて來てくれた。そして「もし死んだなら、ここへ第一に、おバケになつて來ましたよ」といつた風な餘裕のある調子で、すつかり安心することが出來た。

福士氏はいづれその震災のことは書かれるであらうが、子供のあるために一あし早く家を出て、町内の人人よりも一あしさきに避難して、商船學校の附近の、水のそばの一寸した土地で、辛じて火をさけられたのだとの事であつた。そしてその多くの人々の中に、牛が二頭位、まじつてゐたため、火はとにかく、その牛に、ひどく心をビクビクさせられた、「こはかつてね」との話であつた。

福士氏は、二三十人の人々に、たよりにされながら、あの巨軀に、子供を肩に上げて、火中の難をのがれられたのだ。私達は氏の幸福を祝せずにはゐられない。

×

東京の災害はひどいにはひどいが、湘南地方、又は伊豆半島の方はどうであらうか。私は今年の二月に、友人と、伊豆の熱海に行つた。その時熱海までの道のわるいのにどんなに驚いたかしれない。今度そのわるい道もいよいよわるくなり、多分通れないところも多い事だらうと思はれる。根府川(ねぶかは)あたりで、車窓から下を見おろした時などは、實に危險に思はれたが、今度、そこで、列車が停車場ともども海におちたとの事である。もつと先きの、眞鶴から熱海までの海ぞひの山道は、私の行つた時も、輕便鐵道の汽車は、いつも海の方へ傾斜して、すすんだものであつたが、

あの激震の折りは抑もどんなであつたらう。（大正十二年十月）

秋蕭條

×

秋も十一月、何處へ行つても、蕭條の秋景色に、思ひ浮ぶこと、みな一抹の哀愁にいろどられる時である。薄の穗は白くほほけて風に靡き、落葉樹はもはや塞さうに梢をあらはにし、なほもはらはらと落葉の雨を降らす。その草木を吹く風には冷索の響きがあつて、いつの秋でも今頃は萬物の凋落の相が心にしむやうな季節であるが、それにしても、今年の秋はまた何といふ秋だつたらう。

あの大地震があつてから、慌しく、とりとめなく、はやもう二月あまりたつてしまつた。その間に、私は何を考へ何を思つて來たであらう。それは餘りに激しく、餘りに多端なものだつたので、反て、何も考へなかつたのと同じやうになつてしまつた。人間の心は、喜びでも悲しみでも、何の感情でも、盛り得られる一定の量があつて、それ以上は、甕につがれる水のやうに、受け容れることが出來ぬものであるかも知れない。少くとも、こんな恐ろしい經驗に遭つては、誰れしも言葉といふものがいかに不完全なものであるか、その印象や感銘があまりに切實である場合には、表現がどんなに困難であるか、否、不可能であるかを感じたに違ひない。

昨夜、私は燒跡を歩いて歸つて來た。私は大きた大きな暗の中を歩いたのだつた。見る限り累々たる焦土と家屋の殘骸！それが暗の中に黑くおぼろに浮き上つて、たまたまその間にバラックの微かな光が見えてゐる。これがあの神田の街だらうか？　昔、さうだ昔――見なれた萬世橋が何處にあるのだか、それすら見當もつかない程の變り方で、歩きなれ

た町の道筋さへもすつかり私をまごつかせてしまつた。私の見たものは、テント張りの牛飯屋、亞鉛張りの簡易食堂、蠟燭賣、懷中電燈賣りなどの哀れな灯影だ。まるで朝鮮か何處かさうした植民地の場末としか見えぬ。いや、それよりひどい。何處を見ても無慘に燒け落ちた建物の跡、焦土の山だ。その間を自動車がやつて來て、前燈を閃めかしながら、疾驅し去る。その行手には、まつくらな日本橋、京橋が橫はるのだ。變り果てた日本橋、京橋の幻が眼底に浮ぶ！

私の心には、かの耶利米亞の哀歌が思ひ出された、「ああ哀しいかな、古昔は人のみちみちたりし此都邑、いまは凄しき様にて坐し、寡婦のごとくになれり、嗟もろもろの民の中にて大いなりし者、もろもろの州の中に女王たりし者、いまはかへつて貢をいるる者となりぬ、」といふあの悲愴な言葉が驚くほどの實感となつて。——そして、私もいつか眼がうるんで來たのだ。これを感傷的だとわらふ人にはわらはせておく、私は月のない空を仰いで、そこに冷かな無關心な星の影を見た時、心は哀しい詩の方に動いた——

今夜は幾日、月は出ない、
空は冷光の星にかざられて
何事もなげに地を蔽ふ、
星よ、おまへはこの土地を見る
痛み傷ついた大地を
裂けた地上を、
崩れ落ちた海を見る
隆起した港を

失はれた都市を
暗い灰燼の中によこたはる
死者の骨片を、その堆積を、
おお星よ、
おまへはそれを見て悲しまねばならぬ。

そのなほ歩いて行くと、左側の焦土の中に、バラックが一つ立つてゐて、薄ぼんやりとした提灯がともつてゐる。その提灯の下には、木の卓子が一つ、その上に小皿、丼、燗徳利があつてまはりには男ばかり六七人も坐つてゐる。然し、飮んでゐるのではない、話を聞いてゐるのだ。頭の小さい男が、何か言つて身振りをして拳をかためた、それは燒死した死人の知死期のあの無氣味な拳なのだ。それを見せてから、その男はなほも話してゐる、きつと本所の被服廠であつた事だらう。どんな話だらう? 熱心にみな聞いてゐる、もうみんな慘い話には心がしびれてゐるのだ。

少し行くと、碎けた煉瓦の山のかげに、またバラックが一つあつた。十四五の色の白い娘が一人、二十五六の脊の高い若い男が一人、四十位の女が一人、その三人が小さい提灯の火の下で、荷物をひろげては話をしてゐる。ふとその娘がやさしい眼をあげて、若い男に何か言ひかけて笑つた。若い娘といふものは、こんな時でも愛らしく笑ふ、こんな燒野の中で、幸福さうに、その紅い美しい頰をそめてゐる! 私はそれを見ると、何ともいへずあはれな氣持がして、この荒凉とした燒野ヶ原の中でも、この恐ろしい災難の中でも、その娘の美しい笑ひのやうに、新しい幸福がその人達の間に萠むことを祈らずにはゐられなかつた。そして、「バラックの歌」を心に描いた。

バラックのそのわび住居には
これからの夜寒の夜な夜なは

冷たい風が吹きこむだらう！
そこに住まうとするものは
お互に仲よく、お互にやさしく、
お互に慰め合つて、
その袖は袖にかさね
その肩はその肩にそへて
共にあたため、共に夜寒をしのぐやうに、
爭ひと不人情とのあとをたつて
愛し合はずば親も子も、兄弟も夫婦も
その狹いところでは一緒にゐられない、
それが幸福だ、不幸の中の愛のたまもの、
たつた一つの提灯の火が
電燈にかはる時が來ても
その仲は睦まじくてはならない
それがバラックの佗住居。

×

今日は一日、前の家では、二三人の男が屋根にのぼつて屋根瓦をめくつて修繕をしてゐる。屋根全體の瓦がみんな浮いて、一つ一つがなだれを打つて、地震の震動の方向にそうてずれてゐるのだ。そして、ずつと下の方では、七八

枚、今にも落ちさうになつてゐて、その中の一つなどは、長いこと危く樋にひつかかつてゐたので、私はそれを見る毎に、いつも自分があぶなく助かつた事を思ふのであつた。

私は最初の激震の鎭まつた時に外に出たのだが、狹い路地を出て行きながら、ふと下を見ると、そこには前の家の瓦が五六枚地に墮ちて、微塵に碎けてゐた。もし、私があの激動最中に、あわてて外へ飛出したならば、その瓦の一枚に當らなかつたとは、誰れが保證し得よう。そして、打ちどころによつては、それかぎり私の息の根は絶えたかも知れない。一枚の瓦にでも、死ぬ時は死なねばならぬ人間の運命である。安全地帶と云はれてゐる牛込にゐてさへそれである。もし深川や本所に住んでゐたら、どういふ事になつてゐたか、否、地震の震幅がいま三四寸のびてゐたら、我々凡てがどんな事になつてゐたか、ただ神ぞ知る。しかも、震幅三四寸は、大自然にとつては何でもない事なのだ。それをおもへば、「助かつた!」と痛切におもはずにはゐられまい。しかも、此の危機は、ただに今度のやうな天變地異の場合だけでなく、平常無事の日に於いても、程度の差こそあれ、常に存してゐる事を思はなければならない。

去年あたりから、私の心には、無常をおもふ一念が、不思議なほどの力をもつて襲つて來てゐた。むかしから、生死の問題は、いつも私の念頭を離れた事はなかつたが、以前はなほ幾分か餘裕のある氣持でないとは云はれなかつた。私の日念々止まずといふのではなかつた。然るに、今は一刻もぢつとしてゐられないやうな氣持になつて來たのだ。私の日日の耽讀書は、いつのまにか、文學書から經典や祖錄に變つてしまつた。勿論生來の鈍根ゆゑ、解するところは極めて低くまた乏しいけれど、兎に角道元和尙の教へられた「學人初心のときは、道心ありても無くても經論聖教等を能々見るべし」の言葉に勵まされて、有難い智慧と慈悲とに照らされようと努めたばかりでなく、多年、修道してゐる友達に導かれて、參禪をもしたいと願つてゐた。

そのとき、あの大地震が來たのであつた。私が何を感じ、何を思つたか、それはもはや書き記すまでもない。私は

不思議にも自分の生命の助かつた事を思つた、しかも他方には十萬の生靈の滅びた事を思つた。そして、私の懈怠がなほ甚だ恐ろしいものである事を思つた。

今度の震火災で最も慘酷な目にあつた下町方面の人は、大部分知識階級に屬してゐないので、大抵日頃聖天、帝釋天、水天宮などの神佛を信心して、その御利益を祈つてゐた人達であるから、今度の災難にあつて、中には「神も佛もあるものか」と言つて、狂氣のやうに神佛を呪つてゐた人もあつたといふ事であるが、考へてみれば、まことに無理のない事と深く同情せずにはゐられない。けれども、私達だけは、本來、さうした意味で神を信じ、佛を祈るのであつてはならない。さうした利己的な信仰は、直下に裏切られる時がある。自分の心を措いて、何處にも神はないと知つてゐる私達の信仰は、また別種のものでなくてはならないのである。

良寛が地震のをりに書かれた手紙がある。

「地しんは信に大變に候、野僧草庵は何事なく、親るゐ中死人もなくめで度存候。

うちつけに死なばしなずてながらへて

かかるうきめを見るがわびしさ

しかし災難に逢ふ時節には、災難に逢ふがよく、死ぬ時節には死ぬがよく候。

是はこれ災難をのがるる妙法にて候。」

今、良寛のこの言葉を聞けば、いかに犇々と心に迫るものがあるだらう！　この大安心、この大信心に合致しなくては、私達の信仰はおろかな迷信と罵られても仕方がないのである。「死ぬ時節には死ぬがよく候。」私もまたかう思ふ、結局はここだと思ふ。然し、折りにふれ時にのぞんで、自分はまだまだこの覺悟が出來てゐないのを、つくづくなさけない事に思ふ。現に私はあの大激震の時、もう駄目だと思つて、机の下にはひり込んだのではないか！

私の今の心持は、蕭條たる秋景に似てゐると私はよく思つた。全く、私の心には、悲しみがある、底にたたへた深い悲しみがある。秋蕭條の心持た。それを私は誇つてはならない。それは自分の心境が、未だ未だ到らないものであるといふ、何よりの證據であるからである。誰れかの言葉に――多分、ヒルテイだつたと思ふが――「我々が悲しみを感ずる時には、必ず、そこに我執の念がひそんでゐる」といふ意味を言つてあつたが、まことに剴切な言葉だと思ふ。私もまた物事にこだはらない、天空海濶といつたやうな、はればれしい心持にならなくてはならないと、今日もまた思ふのである。

×

今度の震災が、どんなに澤山の人の運命を變へてしまつた事であらう。幸ひに死をまぬがれ、火災をまぬがれた人でも、どれだけかその影響を受けなかつた人はないであらう。そのために、思ひもかけない境遇の轉變を見た人もどんなに多い事だらう、あまり廣くもない私の交友の範圍ですら、かなり澤山ある位だから。

K病院に入つてゐたO君は、病氣が殆んど全快してゐたので、事變後、救護が大變だといふので、早く退院してくれと迫られて、シヤツ一枚の姿で私の家へ來て、一晩泊つたきりで、一刻も東京にゐるのが恐ろしくなつたと云つて、あの混雜した貨物列車に乘つて、富山の方へ歸つて行つた。この夏九州から出て來たばかりの若い女の人は、「東京の苦しい夏にすつかり弱つてしまつて、秋になつたらとそればかり思つてゐましたのに、こんな悲しい秋にあはうとは思ひませんでした……」と言つて、泣くやうにして故郷へ歸つて行つた。また、大磯に住んでゐたOさんは、「家も藏もみんな滅茶々々になつてしまひ、一ヶ月の間はそのとりかたづけに夢のやうな思ひの日を送つてしまひました、けれどもあの恐ろしい地震の力に、大きな決心をえて、幾とせ惱んだ悶えから、やつとのがれ出る事が出來ました」と言つて、多年の因襲の束縛からのがれられたのをせめてもの幸ひとして、北の國の都へ行つてしまつた。片瀨に病氣

の保養に行つてゐたW君は、度々遊びに來るやうにと言つてくれてゐたのに、忙しいのでまだ一度もたづねてあげなかつたうちに「たうとう片瀨には住むのに適した家は、もう一軒も無いので、やむを得ず國に引き揚げねばなりません、折角靜養に來て、こんなひどい目にあつて、不幸な人間は何處の果てまで行つても、不幸な目に遭ふのかとおもへば、寂しい心になります。さうは云つても、かうしてゐられるだけ幸福かも知れませんが……」と書いてよこした、

「神祕的な愛の生活に愈々はひらうとして、私の魂は喜びにみたされて來てゐました。エピサイキヂオンの喜びに、理想主義の根本を理解しかけて來て、これから自己の生活に光明が、希望の影がさしてくると思つてゐましたのに——多くの人達もさうでせうが——今度の天災によつて、根本から挫かれてしまひました。然し仕方がありません、シエリイと共に、ルツソオと共に、あくまで戰ひ、あくまで精進して行かうと思ひます。鬱れた時は、ハイネと共に、皮肉の笑ひを一杯たたへて、此の世を笑つてすごしたいものです。人間の生活は、シエリイの云つたやうに、

Woe is me.

grief itself be mortal……

といふのが眞理でせう……」と詩人であるW君はその手紙を結んだ。私はその手紙に返事を書かうと思ひながら、まだ書かないでゐる。それに私の言葉も、W君の胸に新しい光明を點ずる力はないのだ、私もまたやつぱりW君の悲しみと、悲しみを等しうするばかりなのだから。

思へば、どれほどの希望が、このた震災のために碎かれたことであらう、どれほどの愛が、そのために裂かれたことであらう。また、どれほどの若い理想主義が、この直下の打擊のために打ち破られたことであらう。かうした大災厄にこそ機會づけられはしなかつたけれど、私もまた、その挫折と、打擊と、そして幻滅とを知つてゐる。靑春の希望は、平常でも、容易に碎かれてしまふ、愛は裂かれ、美しい理想はいたましい幻滅と變るのだ。

だが、滅ぶべきものは滅びよ。私は新しい東京が、見るも無慘な燒跡の焦土の中から、より强い力をもつて復興し來ることを信じてゐる。それと同樣に、若い心に育くまれてゐた、凡ての理想家の夢が、無慘に破壞された後から、人生の冷かな知識の洗禮を受けて、新らしい愛と希望とが、春の若草のやうに萠え出でるべきことを信じて疑はない。

私の心もまた、曾ては震動され、燒き盡された事はなかつたらうか？　今も私は辛じてその方向を見出したといふだけで、まだ秋蕭條のスティンムングを全く脫する事は出來ないでゐるが、然し、何處かにか新しい智慧の光は旣に照らしそめた事を思ふ。（大正十二年十一月）

秋雨點滴

×

秋も末になると、いつの年でも、しげしげと雨の降るのが常で、そして、この頃になると、あの陰氣な、雨の多い、裏日本の氣分が、心に一杯になるやうな氣がする。どちらかと云ふと、陰鬱で、苦勞性で、心が始終曇り勝な私の裏日本的氣質は、自分でも決して好ましいものではない。私はもつと晴れやかな、自由な快活を學びたいと思ふ。あのセント・フランシスや、その兄弟たちの持つてゐたやうな、禪宗の坊さんたちの持つてゐるやうな、こだはりのない快活、翳のない笑ひ、私はそれを懷しいと思ふ。ところが、大抵の宗敎家には「悲哀の人」といふのを通り越して、氣むづかしく、近づき難い峻嚴さが鐵條網を張り渡してゐるのが、私には氣に入らない。角笛の聖者など、そんな人らしく思はれて、何だか親しみが感ぜられない。基督はさうではなかつた。カナの筵の基督をおもふと、實に明るい嗄かな氣持がするではないか。もつとも、基督には「悲哀の人」と言はれるやうな、少し陰氣で悲しさうなところがあつた

やうな氣がするが、若し實際さうだとすれば、それは基督の年が若かつたためであらう。年をとると、どんなに靑年時代に寂しさうな陰氣な人でも、いくらか快活を學んでくるものであるから。

快活といふ事は、一つの德だと私は思つてゐる。けれども今は、今年の秋は、この私の陰鬱な、物悲しい氣持も、許して貰はなければならない。かうして、瀟々たる雨の音を聞いてゐると、いつの年よりも、とりわけ佗しくて、身にしむやうな感じがする。私はあの燒野原になつた下町に、もうかなり建ち揃うたバラックの亞鉛板の屋根に、バサバサと音して降る雨の音をおもふ。その佗しい秋雨の音が、その屋根の下に住んでゐる人達には、どんなに蕭條たる感を與へるであらうか。

今では滿潮ごとに、水が一杯に浸してしまふといふあの深川あたりの燒跡の低地は、昨日も今日も、繁繁と降るこの雨が、どんな落寞たる光景を呈してゐる事であらう、それでも、そんな土地にも、愛着を持つてゐる人達はやはり歸つて行つて、バラックを建ててゐる。その愛着は、義人田中正造翁の名によつて忘れ難い渡良瀨川沿岸の荒廢地の人達が、曾て世に示した鄕土の愛着を思ひ出させる。しかも、あそこにはまだひよろひよろと瘦せた草も生え、立枯れても木は立つてゐたであらうが、ここにはみんな燒け落ちて、あとには木の葉一つない、荒凉たる焦土と殘灰のみである。その殘灰をたたきつけるやうに降る音を想像すると、とても佗しいとか悲しいとかいふ言葉では形容出來ない、實に何とも言へない氣持である。

あの九月一日の大震災後、旬日の間は、いくら望んでも雨は降らなかつたのに、それから急に繁くなつた雨が、此頃では、二三日目每には、空が急に暗くかき曇つては、パラパラと降つてくる。そして一雨每に、寒くなつてくるのが感じられる。秋のうちはまだいい、今年の冬は、抑もどんな冬となるであらうか。何だか例年よりは、一層寒いのではないかといふ氣がせられて、バラック住居の人達をおもふと、深く鎖した家の中で、ぬくぬくと蒲團の中に眠る

事が、やましい氣持がせずにはゐられない。

×

九月には、どれだけの仕事をしよう、それを仕上げたら、旅もしよう、久しぶりに裏日本の秋にも親しまうなどと考へてゐたのに、あのすさまじい地鳴りと同時に、間髪をいれず襲ひ來たつた大激震と共に、さうした一切の期待や豫想は凡て空に歸してしまつた。私ばかりでなく、恐らく凡ての人がさうであつたらう。人間の描く夢や望みは、みんなそんなものであると思へば、その餘りの脆さ、儚なさに、捨て鉢な、皮肉な笑ひをさへ覺える、――絞首臺上の罪人のするやうな、捨て鉢な笑ひをさへも。けれども、それは一瞬の思ひにすぎないで、こんな自然の暴虐に遭つても、つひに屈しないで、再び摩天の樓閣を築き上げる人間の力を思ふと、更にたのもしい、心強い氣持を感ぜずにはゐられないのだ。人間の偉大さは、實にこの不撓の努力そのものに存するのだ。その努力や事業の結果はどうでもいいのである。成敗利鈍は敢て問ふを須ゐない、ただ努めに努めて、この生を極度まで伸張せしめるところに、人間の意義は存するのだ。レッシングが、人間の價値を、その眞理の所有よりも、その倦まざる眞理の獲得の努力に置いたのも、この心に外ならないであらう。また、ゲエテが「ファウスト」で語つたところも、結局は、かかる絶えざる不屈の努力をなすもののみが、つひに救はれるといふ眞理に外ならなかつたであらう。

神田、日本橋、京橋あたりに、だんだんと立ち揃うて行くバラック建築を見るにつけ、深川あたりの沼澤地にも、やつぱり出來つつある小さなバラックを見るにつけ、私はこの人間の大きな力に、尊敬と愛とを感ぜずにゐられないのである。

私もまた努めよう。私はいつも自分の價値を疑つてゐるやうな人間ではあるが、その力は私の心にもある筈なのだ。私の書くものは、恐らくつまらないものであらう。二三の批評家はさう言つてゐる。中には「絶對に何の價値もない、

一つとして取得がない」と一蹴し去つた人さへあつた。それなのに、私はその何の價値もない作品の續稿を、鞄につめこんで、たつたそれだけを持つて、家が燒けるものときめてゐたあの九月二日の流言蜚語の夜、雜司ケ谷から江戶川を一生懸命に提げ廻つたのだ。あのをりの自分の姿をかへりみると、滑稽な氣のする反面には、私もやつぱり人間だといふ誇りをも感ずるのだ。九月一杯、徹宵の夜警にヘトヘトに疲れながらも、おぼつかない蠟燭の火の下で長い作品の後段を書き續けて行つた氣持は、恐らく私は一生忘れないであらう。

×

鄕里の白河に歸つてゐた私の若い友達が、最近出て來て、震災當時、その町でおこつた面白い話を聞かせてくれた。今度の震災で、いろいろな悲慘な話や、涙のこぼれる樣な話や珍らしい話も澤山あるであらうが、こんな面白い愉快な話は、一寸外に聞いた事がない。氣の利いたオチのある小說を書く才能をもつた人ならば、この話からすばらしい傑作を書くことが出來るであらう。私にはそんな藝當は出來ないから、ただ聞いたままを簡單に書いて見よう。

丁度あの震災當時、白河の町では、澤山の人が汽車から降ろされた。その中に大阪から來て秋田へ行くのだといふ一人の男があつた。警官や町の人達が澤山立會の上、その男の携帶品を取調べたところが、驚いた事には、彼は十個の爆彈を携帶してゐたのである。そこで、自警團の連中は憤激した。「此奴は鮮人か社會主義者に違ひない、擲つちまへ擲つちまへ！」と氣の早い連中は呶鳴り立てた。するとこの男はすつかり狼狽してしまつて、ヘドモドしながら、から辯解してのがれようとした。自分は決して鮮人でもなければ、社會主義者でもない。あなた方が爆彈だと仰しやるのは、こりや實は花火であつて、秋田の共進會に出品しようと思つて持つて來たのだと、から主張してきかなかつた。

果して彼の言ふやうに、それが花火であるか、それとも爆彈であるのか、白河の人達には到底判別する事が出來なかつた。一度花火の裝置を見た事のある男の說では、成程恰好は花火には似てゐるが、花火にしては第一あんまり大き

すぎるといふ。近頃の爆彈は隨分いろんな形狀と裝置とを持つてゐるから、こりや爆彈に違ひないと云ふので、殺氣立つた町の人は、あはや大阪の男を取りこめて、手に手に棒や武器を振り廻さうとしたのを、警官が一生懸命に制してゐると、その男はガタガタ顫へながら、たうとう堪まらなくなつたと見えて、

「そんなら一つこれを揚げて見まつせ」と彼は大阪辯で言ひ出した。「揚げて見さへすりや、爆彈だか花火だかぢきに分りますわ、花火も花火、秋田の共進會で一等を取りたいと思うて、私が一生一代の腕によりをかけてこしらへたものやで、そりやすばらしいものだつせ」「さうかそんなら一つ揚げて見い、そんなに自慢をする位なら、まんざら嘘でもあるまい」と云ふので、愈々それを揚げて見る事になつて、それ迄は、彼は警察で保護して貰ふ事になつた。然し、爆彈か花火か實際に火をつけて見るから、その爆音に驚かないやうにと布告をした。

するとその夜、好奇と不安の心に驅られた町中の人は、指定の廣場に集まつて來た。愈々一定の時刻が來ると、かの男は嚴重な警戒と監視のもとに、廣場の眞中に立ち現はれた。

「爆彈だなんてな事を仰しやりますが、まあ御覽じろ、そりや、どえらい見事なものだつせ」と、彼は自慢しながら用意をはじめた。どうにかして命を助かりたい一念と、自分の努力の效果を見る期待とに。彼は昂奮して、せつせと支度をはじめた。然し、花火を打ち揚げる適當の臺がその町になかつたので、急ごしらへにこしらへた臺によつて、まづ最初の一發に點火した。

花火か爆彈かと、半ば恐怖に驅られて、廣場を遠卷にして見物してゐる町の人達の目の前に、昇り龍降り龍などと云つたやうな平凡なものではなかつたであらうが、兎に角彼の言つたやうなすばらしい空中の蜃氣樓が、燦爛たる火光を放つたのである。

「ほんとに花火だ。おれはこんな立派な花火をまだ見た事がない」と、町の人達はめいめい有らん限りの感嘆の聲を放つた。

「成程花火だ。見事にこしらへたもんぢやなア、おまへはなかなかいい腕をもつとるナ」と警官も大いに彼を賞揚した。

「もつと揚げろ揚げろ」と群集は叫んだ。

「揚げまつさ、みんな揚げてしまひまつさ。此の次のは、もつと上等だつせ」と彼は言つて、また更に一發に點火した。かうして彼が秋田の共進會で一等を取らうといきごんでゐた十發の花火は、たうとう一つ殘らずためされて、白河の空の上に、彼のすぐれた伎倆を十分に發揮して消えてしまつた。

私の書き方は一向つまらなかつたが、この花火の話そのものは、實に面白いではないか。芥川龍之介氏の筆などを煩はしたら、どんなすばらしい小話になつたか知れない。芥川氏の筆の冴えてゐるやうに、この大阪の花火屋の伎倆も冴えてゐたに違ひない、恐らく超凡のものであつたと言ひ得るだらう、何しろその一命を救ふ事が出來たのであるから。そして命を助かつた彼も幸福であつたが、こんなすばらしい花火を見る事を得た白河の人達も幸福であつた。

「私はそれを見ませんでしたが、」私の叔母はそれを見て、これ迄こんな花火を見た事はないが、これからも見る事はあるまい、ほんとに一生のいい思ひ出になつたとにこにこして喜んでゐました」と、私にその話を聞かしてくれた若い友達が言つて笑つた。私も笑つた。そして、花火がすばらしい藝術である事を、今はじめて認識したのである。そして　このすばらしい藝術をつくるものが、單にその作者一個ではなくして、實に自然そのものである事を知つたのである。そして、私のこの結論が、小話の形式にかなふか否かは、敢て私の問はないところである。

×

バラツク建築の先驅をして、數年前から既に亞鉛板屋根である私の家の屋根にも、今雨はバサバサと音を立ててゐる。秋來る毎に、雨は家の傍らにある桐の樹の葉と一緒に、繁々と落ちてくるのだ。その音を聞いてゐると、雨の日の旅のやどりの佗しさがなつかしくなる。

今年の初夏に、山中や片山津に行つて、山中の蟋蟀橋を見に行つた時、秋來て見たいなどと思つたが、今年はたうとう行けなかつた。それに、バラツク住居の人達の事をおもふと、旅などといふ事を考へるさへ、すまない氣持がしてくるのである。

そしてただ、かうして秋の雨を聞いてゐるだけで、今は十分だといふ氣がしてゐる。（大正十二年十一月）

旅と書物

×

旅に出て自然に親しみ、家に籠つて書物に親しむ。これが今の私にとつては、何よりの幸福である。家にばかり閉ぢ籠つてゐると、單調な讀書生活に倦怠を覺えて來て、心は旅にあこがれ、新しい未知の自然の風物が頻りになつかしくなる。けれども、あまり久しく旅から旅にさすらうてゐると、今度はまた、あんなに倦き倦きしてゐた靜かな家居の讀書生活が慕はしくなつて、あの向ひ馴れた机にむかつて、新しい書物の頁を切りながら、新しい未知の心の風物を追うて行く氣持が、此上もなく樂しいものに思はれてくる。かうした氣持の變化を、此頃の私は絶えず繰返してゐるのだ。

まる二年間も重荷になつてゐた『相寄る魂』後篇をやつと脱稿して、その初校を一通り見終るとすぐ、私は旅に出た。丁度十二月の中旬だつた。旅をするにはわるい時節で、しかも行先きが寒い裏日本なのだから、暖かい南伊豆に旅するつもりでゐる友達には笑はれたが、この逆行が本來私の流儀でもあるし、それに又、九月一日のあの大震災で私達の身の上や生活上の狀態を心配してゐる故鄕の身うちの者に、自分の無事な姿をも見せ、東京の詳しい事情をも話して聞かせて、皆を安心させてやりたかつたし、同時に、この半歲の無理な勞作の疲勞を醫するために、都を遠く離れた靜かな故鄕の溫泉に浸つて、ゆつくり靜養したいと思つたのであつた。

その旅のことは、別に『裏日本の冬』と題して集めた旅信に詳しく書いたが、十何日も途中に費して、年の暮押しつまつて出雲まで行つた時には、一尺何寸といふ雪さへも降り出したけれど、私は『相寄る魂』後篇、『裏日本の秋』を書き終へて、すぐその舞臺になつてゐる土地を訪うたのだから、他の人に話せば笑はれるだらうと思はれるほどにその侘しい冬の姿をした山や海や湖水などが、妙に心をたかぶらせて、あだかも哀切な音樂を聽いてゐる時のやうなスキイト・サッドネスが、絕えず孤獨な旅人の心を貫いてゐた。

私は旅にメエリケの詩集を一册携へて行つた。けれども、殆んどその一行をも讀まないでしまつた。あの靜かな湖畔の溫泉宿で、湯から上つて、炬燵の上にこの詩集を持つて來て置きながらも、中をあけてみる氣にはなれないで、私はぢつと炬燵にうつぷして、ぼんやり默想に耽つたり、雨雲にとざされた空のもとに陰鬱にたたへてゐる湖面の侘しい景色を眺め入つたりしてばかりゐた。

旅は書物を讀むべき適當な機會ではない。むしろあらゆる書物の存在を忘れるべき時である。旅は書窓の窮屈な制限された生活から、私達を暫く休息せしめて、環境の轉換と新奇な風物とによつて、精神を一新させ解放させてくれる。それは謂はば、窓をあけて新しい空氣を導き入れるやうなものだ。それなのに、やつぱり舊生活の形骸である書物な

どを持つて行くといふ事は、一番つまらない事である。私はそれを深く感じたから、これからは旅には書物など一册も持つまいと思つた。

旅に出たならば、おもふさま旅の幸福を享受しなければならない。もつとも、旅といふものは、或る人々の考へるやうに、決して樂しいばかりのものではない。その一面には、隨分苦しい事が多い。思ひもかけないやうな災難を受けたり、とんでもない氣苦勞を嘗めさせられたりする。けれども、それすら私には、いい惠みであるやうに思はれる。「可愛い兒には旅をさせよ」と昔の人はいい事を言つてゐる。旅は單に美しい自然に親しむ方便であるばかりでなく、またいろいろな人情風俗を學ぶ上にも貢獻をするであらう。私達は時々旅をする必要がある、いろいろな點から云つて。そして、旅に出たならば、心を全く旅にゆだねるがよい。心ゆく限り旅の樂しみと苦しみを味ふのだ。そしたならば、やがては自分が倦怠を感じてゐたその日常生活も再び生々としたものとなるであらう。

一事に當つては、一事に沒頭せよ、他の凡てを忘れよ。かくして、その一日一日を、意味多く、悦ばしく味はふことの出來る日日是れ好日の境地に、到達し得られるであらう。

×

東坡が詩に、

　　廬山烟雨淛江潮。未到千般愁不消。
　　到得歸來無別事。廬山烟雨淛江潮。

私はこの一絕が好きだ。旅に行くと、いつでも私はこの詩を思ひ出す。久しく憧憬してゐた山水などに接したとき、その風光が自分の想像を裏切らなかつた場合でも、なほこの感を免がれない。久戀の地、思慕の國へ、やうやうの事で探勝の旅を果し得ても、家に歸り着いた時には、やはり「到り得、歸り來つて別事無し」の感を覺えるであらう。

どんなに美しい風景でも、親しく眺め得た後には、やはり何でもないものになつてしまふ。そしてそれは、單に山水に限らず、人生の百般についても、言ひ得られると思ふ。すべては、見ぬうちが花である、あこがれ望んでゐるうちが、幸福なのであらう。

東坡は照覺常總禪師に參じて、一大事を畢了した大悟徹底の大居士であるから、この詩の如きも、生死の一關を透過して、風光自ら別事無き境地を賦したものであると思ふ。悟道の境界はもとより私達には揣摩をゆるされぬところであるが、私達のやがて到達するであらう人生の究局、人生の歸趣も、またこれに外ならないやうに私には思はれるのである。

「未だ到らざれば千般愁ひ消せず、到り得、歸り來つて別事無し」

私達はいろいろな欲望を持つてゐる。その欲望を果すまでは、絶えず內から驅り立てられるやうで、一刻も心が安まらない千般愁ひ消せずである。然し、一旦その欲望が充たされると何だか、がつかりしたやうな氣ぬけのしたやうな心持で、あんなに熱望してゐたものも、結局何でもなかつた事を感ぜずにはゐられない。これは人生のあらゆる事に於て、私達の經驗するところだが、私達がまた人生の終局點に立つて、その一生をふりかへつて見た時にも、多分、おなじく此の別事無しの感があるであらう。これが人生なのであらう。人間の一生は、これだけのものに過ぎないのかも知れない。けれども、その別事なきところは、みづからその境地に行かなければ分らないのである。それを知るためには、私達は一生を消費しなければならないのである。丁度、別事無き悟道の境界に達せんがために、禪門の人々が、打座三十年を敢へていとはないやうに。

「到り得、歸り來つて別事無し、廬山は烟雨、淅江は潮」（大正十三年一月）

裏日本の冬（旅信）

×

大津で夜が明けた。山科、京都、丹波口、二條、花園、嵯峨、それらの驛々をすぎる間、京都の土地がいかにも小綺麗で、あつさりしてゐる事が、つくづく感じられる。畠の土なども膏ぎつて肥えた感じはなくて、何かふるひにでもかけた土のやうにサク／＼した感じがして、こんな土地からは、細い美しい大根が出來るだらうと思はせた。線路はしばらく保津川に沿うて走る。淺い水だが、胡粉をかけたやうに、濃藍色が際立つて、川に横はる岩の影さへ彫んだもののやうだ。層々と高まつて生えてゐる對岸の山の樹々も、綠が描いたやうで、日本畫の感じが出てゐる。綾部まで來ると、車窓の外を、總髮紋服の大本教がノソ／＼歩いてゐる。圓山川に沿うて城の崎まで來ると、玄武洞から乘り込んで、懐鏡を出して、しきりに頭を直してゐた佳人が下りる、才子が後からついて下りる。城の崎には下りまいとおもふ。竹野といふ驛からは、汽車が海岸に沿うて走る。山を越すと、岩と岩との狹い間に海が見える、また山が遮る、暫くするとまた海が見える。

但馬の海は岩礁の間に濃碧の潮を湛へて、岩と松と水との照應が深く心にとゞまる。海岸の波打際まで、赤瓦の家が建ちつゞいてゐる横から、松山が岩礁の面を差出して、海を劃つてゐるといふ風な景色だ。殊に、柴山港といふところの、四五丁の幅に、海水がずつと岩山の間に押し入つてゐて、その港口に一寸した島影が横はつてゐる景色や、香住といふところの、海に迫つた町並と、沖に横たはるこんもりした島影とはすてがたい眺めであつた。京都附近では日が照つてゐたのに、山陰に入ると、一杯に霧が立て罩めて遠景が見えなかつたが、この香住では、たうとう雨に

なつて了つた。といふより、此邊ではずつと雨が降つてゐたらしい。小さな驛には陸橋がないから、降りた客も汽車の發車するまでそこに立つて待つてゐる。それらの人や、前から立つてゐる人達が、雨傘をかざして、寒さうに立つてゐるのが、いかにも裏日本らしい感じだ。山と山の間に砂丘が見え出すと、もう鳥取だ。

×

十五日、鳥取の驛に着いて、吉方溫泉に俥を驅る。三階溫泉といふのに泊る。成程、三階建の家だ、こゝの湯は少しぬるい、浴場は面白い恰好になつてゐる。三角形になつてゐて、その不等邊角の兩端に石段がついてゐて、それを十段ほど下りた底に浴槽があるのだ。細長く窓がずつと上についてゐて、障子張だから仄暗い。その夜、浴槽にゐた女の白い裸形が、その十段を驅上つた樣子は、高地にかけのぼる若駒のやうで面白かつた。

翌十六日、午前中俥をやとうて市中を見物する。まづ城山の方へ行つてみる。袋川といふ川が町を橫斷してゐて、それを越したところが町の目貫きなのだ。川端は町の中らしくもなく、枯芝や枯柳が一杯につらなつてゐて、その川堤から、川へ下りて行く路がところどころについてゐて、何處か平野の眞中を流れてゐる川のやうな感じである。山は例の久松山なのだ。

山の下の一劃はもとの御屋敷町で、今も家老屋敷のあとなどがその儘殘つてゐて、いかにも城下町といふ感じがする。年とつた車夫は、昔の盛んだつた事をしきりに話して「以前でしたらなア、何せよ三十二萬石のお城下だもんで、えらいもんでしたわい」と口癖のやうに繰返して行く。鳥取は米子などと違つて、だんだん衰へて行く一方の市街で、典型的の舊城下町と云つてよい。敗荷(はいか)の茶色な莖がみんな枯れたり曲つたりしてつらなつてゐる壕を越して、城跡の入口に入ると、もうそこには、昔の城の名殘りの石垣があちらにもこちらにも築かれてゐて、そこのとツつきに門があつて、それから石段があつて、まはりまはつて廣場へとのぼる。車夫が附いて來て、城をとりこぼした事を惜しが

つたり、附近の說明をしたりする。

小高い廣場に上りついて、そこの亭のところから市街を眺望する。「鳥取は松の多い處でしてナ」と車夫がいふとほり、到るところ松が茂つてゐる。市街の中にもそこここに松の樹が高く聳えてゐる。中國山脈はもう眞白になつてゐるが、西北の海岸の方には、砂丘が佗しく見える風はそちらの方からかなり強く吹きつけてくる。そこを下りて、再び町を横切つて、荒木又右衞門の墓にまゐり、それから樗谿神社にまゐる。鳥取の名所はまづこんなものだ。智頭街道、若櫻街道、鹿野街道、この三つの大通りを三つとも通つて、樗谿神社に行く。山と山との間に奥深く建つてゐる、一寸いい神社である。そこらの家に、椿が二本、濃淡二樣の花を一杯つけてゐたのが、山陰に來て見た初めての花だつた。石疊の道の右には淸水が流れて、幽かな音を立てゝゐる、この山の奥に水源地があるとかで、一寸した瀧などもあつた。この神社の境内には雀が一羽もゐないので有名である。

×

今日の午前十一時半に鳥取市を發つて、ただいまこゝまで來た。たうとう伯耆の國まで歸り着いたのだ。

松崎の驛で下りて、すぐ俥に乘る。今日はひどい風で、湖水の方から吹いてくる風に、俥の母衣が飛びさうである。田圃の中の道を三四丁も行くと、先きの方を自轉車に乘つて走つて行く十五六の外套を着た少年が、振返つて、「何處まで行くか」と訊く。と、車夫は「養生館までだ、お前はどこへ？」と訊きかへす、「養生館だ」「そげならわしが持つて行つてやる、電報だらう？」と言つて、車夫が電報を受取つて走り出すと、少年は「ええかえ、たのんだぞ」と念を押して引返つて行つた。いかにも田舍らしい感じがして、このエピソオドが僕は氣に入つた。

一條の川があつて、そこに東鄕橋といふのがかかつてゐる。それを渡つたところから右に折れて、湖畔の養生館へと入つて行く。と行手には東鄕湖が今日の風に白く波立つて見える。養生館は水に沿うて立つてゐる氣持のいゝ一構

へだ。一番奥まつた湖水の上に差出してたつてゐる部屋に通されて、すぐ湯に入る。浴槽には湖水から湧く湯が樋の口から絶えず流れ込んでゐる。温度も、吉方温泉のは少しぬるかかつたがこゝのは丁度頃合ひだ。湯に入つてゐると、女中が來て、「あなた樣は谷口樣ぢやございませんか」と訊いた。多分旅行案内で有名な谷口梨花といふ人ぢやないかと思つたのぢやあるまいかと推察した。湯から上つて、名物のうなぎを食べて、それから炬燵に入つてこれを書く。「雲は閉く蓮岳の春」全くその通りだ、もつとも山陰に入つてからは、雲は閉してばかりゐるが、僕の心持だけは、もう山陰氣分を脱してゐる。こゝで少し落ついてから、少しく詳しく書かう、今日までは、筆持つのがたいぎで、あまり書けなかつた。

×

山陰に入つてから、一日も快晴の日はなかつた。鳥取に着いた翌日の午前中に、一寸日が照つたが、市中を見物して城跡に上つた時、賀露の砂丘の方から吹いてくる西風がきつくて、久しくそこに止まる事が出來なかつた位だ。それからずつと陰晴定まらず、一寸日が照るかと思ふと、雨がバラ／＼來て、あらしになりさうだと見ると、また急に風がパタリと落ちるといふ風だ。けれど、湖水の水は始終荒立つてゐて、見てゐる眼のまへでざわめいでゐる。對岸の浅津のの方の低い丘陵と村落とは、雨雲にたれこめられて、陰鬱な眺めである。

晝すぎ、浴槽に浸つてゐると硝子戸にバタ／＼と音烈しく打ちつけるのを霰かとおもへば、大きな金平糖のやうな雹だつた。でも、こゝまで來てはじめてゆつくりと心が落ついて、炬燵のぬくもりと湯づかれとでうと／＼とまどろみながら、とりとめない白日の夢を追ひ、また起上つては對岸の景色を眺めながら、お茶をのんだり煙草をふかしたりして、波の音をきいてゐる。波の音は昨夜の夜すがら、枕に通ふどころでなく、寢床の下に鳴つてゐた。こゝは湖畔の砂地に差出された建物で、浴場の方から眺めて見ると、三四尺も砂地の上に高く床をしつらへてあるから、波が

荒い時はずつと寢てゐる下の方に音立てるのだ。波の音と、今一つは左手の砂の中から湧き出して、浴槽に流れ落ちる湯の音と、それだけが夜ぢゆうの音樂だつた。晝間でも、ずつと離れたこゝには、あまり話聲なども聞えて來ない。今は外に客も稀れらしく、靜かな日がもう二日たつた。食べ物は、鰻はもとより、鰡などの魚類に、蜆の味噌汁、鳥取でウンと食はされて來た蟹もある。海の魚と湖水の魚と。湖水を舟で淺津の方へわたつて見たいと思ふが、天氣がわるいから、どうなるかわからない。裏日本の秋ならばまだしも、今は裏日本の冬枯時、目に入る景色も落寞としてゐる。が、自分にとつては、すでに雲開萬岳春だ。晴好雨奇の東鄕池の雨奇を味ひつゝ、東京の事にも心配せず、萬事安心してゐる。

今日はこれからこゝを立つて三朝(みさき)へ行く。

今日は久しぶりの天氣で、湖上には波一つない。對岸の淺津の靑ペンキ塗りの溫泉がくつきりと日光の中に浮んでゐる。そこは柴山潟の對岸よりも、もつと低く、もつと平らな殆んど丘陵とも云へない陸地の連なりで、それが日本海を限つてゐるのだ。少し眼を左に轉ずると、山になつてゐて、その眞ん中どころにトンネルがついてゐて、しきりに汽車が出入りする。そのトンネルをくぐつて西へ行くのだ。目をおろすと、つい目の下にヒタヒタと水が寄せてゐる、水の底の藻草などもくつきりと見え、その中に泳いでゐる目高の影も見える。

昨日などは、ついそこまで舟を漕いで來て、自分のよつてゐる欄干の下の方を船頭がのぞき込んでゐた。魚をねらつてゐたのらしい。舟の上には、兩方に口のあいてゐる笊のやうなものを載せてゐた、それからまた、十隻あまりの漁舟が、湖心に輪をゑがくやうに並んで、網を投げてゐた。水棹で水の上を叩いて魚を追つたりしてゐた。今日も今見てゐるうちに四五隻の舟が出て來た。

×

二十日の朝、東郷温泉をたつて、三朝にむかふ。

朝、女中が言ひにくさうにして、何か書いて頂くやうに頼んでみてくれと仰しやいましたでと言ふ。それで大急ぎで、硯と絹地とを持つて來させて、二首ほど書く。序にわたしにもと言つて出した彼女の絹地には、二人ほどの畫家が、一人は鯉を、一人は蛤を書いてゐるその上に『丘邊のさくら』といふ詩を書いた。此頃米子の新聞に、知人の松田郵便局長が、僕の歸郷の事を書かせてゐるから、宿で知つたのであらう。養生館は實に氣持のいい宿であつた。いざたつとなると、さすがに名殘りが惜しい。暫く湖上を眺めて、それから着物を着かへる。

櫻並木の堤を停車場の方へ曳きながら、老人の車夫が、しきりに此頃の景氣の事を話す。「汽車がつきまして、こゝも繁華になりました」と喜んでゐる。三十錢の車代に五十錢貰つて、非常に喜んで、停車場の構内の先きの方へ行つて湖水を見てゐると、「もうむかうへ渡れます」と知らせてくれる。陸橋がないから、早く渡つてゐないと乘れないのだ。車夫は僕のトランクと毛布と、それから近邊のいい家の細君らしい人の風呂敷包とを持つてついてくる。田舍は入場券も何も要らないのだ。さうして待つてゐるうちに、一人のお婆さんが息せき切つてやつて來て、やつとこちらに渡つて、「あゝえらかつた、こげな目にははじめて會ひました」と云つて溜息ついた。つゞいて停車場の入口へ、もう一人のお婆さんがよた／＼駈けつけた時、汽車が入つて來た。「氣の毒になア」と皆口々に言ふ。三等車の中で、乘客の頭と左右の山水とを見比べてゐると、しみ／＼と郷土の愛が湧いてくる。車中からみると、湖上に突き出した養生館の建物がなつかしく目を惹く。やがてトンネルに入つて、東郷湖はつひに眼界から沒し去つた。

上井にはすぐ着く、そこから倉吉行に乘り換へるのだ。横から入る小さな客車に、一杯詰め込む。恐ろしく女が澤山乘つてゐる。良家の細君もあれば、百姓娘もあり、お婆さんも相變らず澤山ゐる。(田舍には全くお婆さんが多い)珍らしくハイカラな七三の娘もゐる。それに倉吉の藝者らしいのが四五人も乘つてゐる。僕のすぐ前に來た藝者は、

連れてゐる弟か從弟かともおもはれる二人の青年を相手に、無駄話をしては、「御覽、手にこんなにマメが出來たわ」と言つて靑白い細い手を出して、その小指に三味線の糸だこが出來てゐるのを壓さへて見せる。「うちのをばさんも出來てるわ」と言ひながら、僕の顏を一寸見る。格別目に立たぬ顏だが、眼の涼しい女である。

發車間際に、二人の肥つた婆さんが、無理に押し込んで來て、「みんな細ございませう」と言つて笑ふ、みんなも笑ふ、こんな樣子を見てゐると、思はずこゝろよい微笑が浮ぶ。

定刻より小十分もたつてから、やつと發車する。のんきな汽車である。むかうの方では二三人の藝者が、三十前後の丸顏の垢ぬけのした綺麗な丸髷の女の人を眞中にして、何か笑ひさゞめいてゐる。僕の前の藝者は、コオトの前紐をといて、錦紗か何かの煙草入を出して、小さな煙管で煙草を二三服吸つてから、また煙草入をしまつて、窓の外を見る。天神川の河原を渡つて、倉吉の町が見える。停車場の前には、澤山自動車が並んでゐる、三朝行もある。關金行もある。三朝まで乘合が五十錢で客を呼んでゐる。それに乘ると、もう後の方に三人ほど乘つてゐる。間もなく先刻見た丸髷の女が、前の運轉手臺に乘り込む。『かめさん、(かみさんと言つたのかも知れない)里歸りかナ』と後の男が、その女に聲をかける。「ええ、ちよこりナ」とその細君が振返つていふ。ゆたかな頰の筋肉が、氣持のいいキメをもつてゐる、恐ろしく愛嬌のある笑ひ方をする女だ。自動車はやがて細い倉吉の町筋を縫うて走る。やうやく町の外に出ると、狹い道に材木やら炭やらをのせた車力が、しきりにむかうから來るので、その度びにハラ〳〵する。そこにとまつてゐる荷車に、しきりに早く行けと運轉手が合圖をしても、車力は首をひねつてゐて、なか〳〵行かない。車體だけならいいが、炭俵の積荷が橫へ出張つてゐるので、この狹い道では、無事にすれ違ふ事が出來ないと見てゐるのだ。運轉手の方は、道の左手の泥の上に俵を敷いたところへかゝつては、車體が傾くと見て動かないのだ。かうしていろ〳〵押問答をやつて、たうとう運轉手が「橫になつたら手をかしてくれよ」と念を押してから車體を少しす

めた。どうやらかうやら難關を切り抜ける。が、道はます〳〵細くなる。と、不意に車體が左に傾いたと思ふと、横の口がパッと開いて、そこにかけてゐた僕は、すんでの事、車外へはふり出されようとして、やつと持ちこたへた。もうちよつとの事で、ひどい目にあふところだつた。「あんまり傍へもたれてござつたからだ」と運轉手に言はれたが、一向もたれてゐたわけでもない。が、仕方がないからそれを是認して、今度は出來るだけ右の方へ身體の重心を置くやうにして横の開き戸をしつかり內の方へ押さへてゐる。三朝行もこれでは生命がけだ。思ひがけないところで、ひどい目にあふものだと、一寸あきれる。熱海行の自動車のやうに、斷崖の上を行くのではないけれど、危險の程度はそれ程違はない、なか〳〵容易ならぬ事だ。三朝川の溪流に沿うてすゝむやうになると、川の中へ投げ込まれたら大變と、一層用心をする。けれと、こゝまでくると石をたゝんで堤防の上に新しく出來た道なので、やうやく安心が出來てくる。山と山との間の溪流に沿うて進んでゐるうち、大岩橋といふのをわたる。ともう三朝村だ。「あなたはどちらへナ」と運轉手が訊く。「どちらもきまつてゐない」と答へると、「それぢや、丁度いい。このおぐりんさんの處へ泊りなさい」と言つて、丸髷の女の人をさす。旅館の細君だつたと見える。勿論、それにきめる。細君が愛想笑ひをする。やがてその家の前に來て、車から下される。木屋旅館がそれだ。(あとで女中に訊くと、おかみさんではなくて女中頭だつたさうだ、なぜ丸髷なんかにゆつてゐたのかと訊いても、笑つて答へなかつた)

三朝はラジユウム・エマナチオンの放射量が、伊太利のイスキアを除いては及ぶものがないといふので、東洋一と誇つてゐる溫泉なので、此頃日を追つて盛んになつて行くらしい。三朝川の溪流に沿うて宿が並んでゐて、對岸にも一二軒出來てゐる。ここ二三年のうちには、俗化した溫泉になつてしまひさうだが、今はまだほんの片田舍の溫泉で、小さな申譯だけの料理屋が一軒あるきりだといふ。けれど遊園地をこしらへる計畫などがあつて、對岸には、山の下に、別莊や溫泉宿の敷地の石垣が、幾層となく疊まれてゐて、數年のうちには、すつかり賑かな町になる事を想はせ

てゐる。大岩橋から上流の三朝橋までの間二三丁位が、三朝村の大通りだ。宿はその眞中どころにある。障子の外には、絶えず水音が潺湲と鳴つてゐる。

午後、一風呂浴びてから散歩に出る。三朝橋を渡ると、橋のむかう側三分の一ほどは假橋になつてゐて、二三枚の板を並べて架してあるきりだ。子供などが、そこを平氣で駈け廻つてゐる。橋を渡つて、川について上の方へのぼると、左手の山には、桑畑の枯れた桑の木の間に、年古りた靑苔のむした墓石が幾つも並んでゐる。このかたばかりの墓地の方へ上つて行くと、南天の樹が、毒々しいほど靑い葉の間に、眞赤な實を澤山つけて、何本となく並んでゐる。一杯に落ち積つた落葉を踏みながら、ぢつと川の方を眺めてゐると、平和な氣持になる、今日は日がポカポカあつて、何だか秋めいてゐる。

三朝川に流れ込む山あひの溪流の方へ入つて行くと、水は到るところに溢れて、そこからもかしこからも、滾々として流れ出してゐる。山あひに入つて行くと、日蔭になつて急に冷氣が身にしみる。右手に丸い石でたゝんだ石室のやうなものがあつて、その四角い口から中を覗いてみると眞暗だつた。そこから先きへ曲りくねつた道をのぼつて行くと、到るところに孟宗竹の藪があつて、節の迫つた竹の幹が、靑々として、一層冷たさを感じさせる。あたりには、人の氣配すらなくなつて、無人の境にでも行つたやうで、だん／＼人なつかしさが湧いてくる。山を少しのぼつて行くと、むかうの山の低くなつてゐる上から三德山の姿が見える。

こゝには炬燵がないので、女中が湯たんぽを入れてくれる。溫泉の湯をすぐ入れてするのだ。東洋一のラジユウム入の湯たんぽだ。朝まで暖かい。昨夜、夜びて溪聲が耳からはなれない。雨のやうに嵐のやうに、高まりまた高まる。東郷湖の湖水の波の音とは、またちがつた水聲である。東郷、三朝と來てみて、はじめて靈山大山の恩澤に浴してゐる事を感じる。

旅にゐるとやつばり家が戀しくなる。
家を忘れて長い旅するには年をとつたのか知ら。
生れつきの、今目前にないものがいつもいいと思ふ不都合な性分からか知ら。
こゝでも蟹を食はされる。この邊の冬の名産は大きな蟹ときまつてゐる。東鄕では每日ウナギを食つたが、こゝには別に名物もないらしい。

×

今朝、少し雨催ひだつたが、發つことにして、自動車に乘る。來た時と同じ車で、あの危險な横戸が、今日は糸で車體にくゝりつけてある。そしてそこに乘つたこの村の丸髷の女に、運轉手がその戸はあくから用心してゐなさいと注意したところを見ると、あれからも屢々あいたものらしい。
三朝川の溪流に沿うて走つてゐるうちに、雨は本降りとなつて、大きな飛沫が彈き込んでくる。運轉手が母衣を出して、前の方のあいてゐるところに、これをかけてゐてくれと件の細君に言つて、母衣をひろげて持たせると、それを神妙にささへてゐる。木屋の女中がこの運轉手を生意氣でいけないと批評したのを思ひ出す。
倉吉に降りないで、上井まで直行する。こゝで本線と連結するのだ。
由良、八橋、赤崎と行くにつれて、日本海の波が白く立つてゐるこちらに、低く松林や村々の人家が連なつてゐる。それがすぐ海岸につゞいてゐて、車窓から見ると、ずつと下に低く見える。その上の雲間に、ふと見ると虹がかかつてゐた。はじめ左の端だけが見えてゐたが、いつか消えてしまつたと思ふと、今度は右の端しだけが暫く見えてゐる。考へてみると、陰晴定まらず、雲漠々たる中に、微かに日光の洩れてゐるやうなこんな天氣だから、虹も見える筈だ。

左手には、船山上などは見えたが、大山はすつかり雲に隱されてゐる。

この邊では、この驛から乘つて、次ぎの驛で下りるやうな土地の人達ばかりだ。里歸りか知らん、大きな萠黄の定紋入の風呂敷包を背負つた紅い手柄の花嫁や、「田圃がかける、かける」と連呼する子供を連れた老爺さんや、その爺さんと牛の値段を話して、青島牛が來るものだから十二月から三月までは下りさうで下らんなどと云つてゐた老爺が線路の傍らに立つてゐた道祖神か何かの石に向いて、手を合せて拜んだりしたのも、田舍らしい感じがした。

汽車が下市、御來屋あたりまでくると、海のむかうに、島根半島の長い連なりが見え出して來る。淀江までくると、その島根半島の下に、丁字形に突き出してゐる夜見ヶ濱の松林の黑い一線、その松林と海との間に、細く一白く條曳いてゐる砂濱のラインが見えてくる。目の前の淀江に對しては、殆んど何の感想も起らないが、それらの遠くの光景をぢつと眺めてゐるうちに、抑へがたい情感の流れが胸一杯に湧き上つてくる。そして、一脈の Sweet-sandness が心を貫いて走る。

×

米子に來て皆とあふ。つもる話に日が暮れた、その夜は次弟の家にとまる。淀江の叔母が夜の汽車で合ひに來る。入つて來たその樣子が、お祖母さんそつくりになつてゐる。なつかしい氣がする。炬燵にあたつて、何くれとなく話す。久しぶりにしんみりした氣持になる。

×

二十五日、皆生溫泉に來た。こゝは出口王仁三郎の一月も泊つてゐた宿ださうだ。この家は閑靜な方だが、皆生は藝者が三十人もゐるとかで、想像以上に俗化したところなので、すぐ米子に歸るつもりだ。然し、砂濱の松林の中に出來てゐて、大山も日本海もながめられる。

×

この手紙のとゞくころは、大正十三年の元旦か二日であらうと思ふ。僕ももう旅にも疲れたから、このまゝすぐ東京に歸りたくてならない。すつかりホオムシツクにかゝつてしまつた。家の事も心配になる。もう半月以上たつたのだから。

米子では講演をしたり、人に會つたり、ゴタゴタばかりして、一向手紙も書けなかつた。二十八日に米子をたつて松江に來て、山根實君をとひ、同君と一緒にこの玉造に來たのだ。そして今朝おきてみると、大變雪が降つてゐる。昨夜、山根君は歸つたので、今は僕ひとりだ。そしてもう一晩こゝに泊らうか、それとも出發しようかと考へてゐるところだ。

二十九日といふ日ももう暮れようとしてゐる。外にはなほもサラ〳〵と雪が降つてゐる。雪は今朝もう三四寸位もつもつてゐて、松の樹や垣根の上に白い層をつくつてゐる。それが風の烈しく吹いてくる毎に、粉のやうに飛ぶ。

×

三十日の晝頃ここをたつ。一尺幾寸といふ此地では珍らしい雪で、今日は自動車も俥も出ないといふ、仕方がないから湯町驛まで半里ほどを歩いて出るつもりだ。(大正十二年十二月)

靜かな部屋

×

この間、「靜動二途」について語つた私の感想を見て、友人の宮島資夫君は、君が急に日本人になつてしまつたのに

驚いたと云ひ、どうして君のやうにさう靜かに落着いてゐられるのだらうと云つた。しかしその私といふ人間は、隨分宮島君同樣の激烈な性格を持つてゐて、自分でも制御し切れない感情の激動のために苦しむのである。私の心には自分でも持て餘すやうな厄介なものが澤山ころがつてゐる。そしてその厄介ものが見たところいかにもおとなしさうな、內氣さうな、言葉少なな私をして、人々に對して、「手套を投げ」させたり、匕首のやうな言葉をも振り廻させるのである。そこで私の性格を餘り知らない人は、吃驚してしまふ。けれども、それは私の一面で、他の一面は矢張り見掛け通りの私にすぎない。

殊に、この頃私は出來るだけ靜かに、丁度故鄕の湖水のやうに、ゆるやかな日を送りたいといふ氣持が強くなつて來た。出來るだけ外界からかき亂されないで、書齋の中の人として、藝術家の靜かな悅びの生活に浸りたいとねがつてゐる。もう外界のいろんな出來事などに心をわづらはされたくない。他の人の事柄に關心するよりも、靜かに自分の生活を守つて、これを深め、且つこれを高め、人間としての自分を育てて行つて、せめては世の識者の問題にしてくれるに足るほどの人間になりたいと思ふ。せめては笑ひ話にだけでもならぬぐらゐの作品を創作したいと思ふ。そしてそれには、まづ自分の生活を整理して行かねばならぬと考へる。

創作を初めてから、私はだんだん靜かになつて來た。また靜かにならなければ書けもしないのである。それにこの頃、自分でもをかしいのは、創作をやり出してから、ひどく身體に注意をするやうになり出したことである。私の友人に、大變その點で用心深い人があつて、二人で一緒に散步してゐる時など、電車線路を橫切らうとして、まだ電車が十間位も先きにゐる時でも、私の袖を引張つて、必死の勢ひで駈け出してしまふ奇癖がある。私は袖を引張られながら、內心をかしくて笑ひたいのを我慢してゐたものであつたが、驚いたことには、この頃では私自身、その友人にいくらか似て來たやうに思はれるのだ。今ではその友人の衞生主義は、私の範とするところである。

さうしたわけで、私は外部的には、出來るだけ消極的に生きようと思ふ。そして出來るだけ內部生活を充實させたいのである。そして思ふに、徹底した藝術的生活は、正にさうあるべきではあるまいか。

×

出不精な、人なかの嫌ひな私でも、時たま音樂會などに出かける事がある。そして、その華やかな眩しいやうな空氣の中に、もの珍らしく四邊を見廻して、つまらぬ事にせで驚嘆してゐる貧乏詩人の私の姿は、憫然なものである。ところでそんな時に。一番私を驚かすのは、美しい若い女性である。然し、單に美しいとか若いとか云ふ爲めに驚くのではない。彼女たちの有つてゐる、私に取つて嶄奇な、豐富な、生氣橫溢してゐる時代の表現に驚くのである。そこには、潑剌たる表情の美があり、大膽なる服裝がある。それによつて、私は新しいゼネレエションの波動を、波打際に佇んでゐるやうに感ずるのだ。

たやすく敎へ込まれる受動的な、恐ろしい銳敏な感受性によつて出來上がつてゐる女性は、時代の變化をいち早くその肉體の上に表現する。銀座などで行き違ふ若い女などに、著るしく脊の高い女が澤山見出されるやうになつたが、その顏を見ると、更に一層驚かされる。眠つたやうな、人形のやうな美ではなく、そこには變幻自在な表情に盛られた洗練せられた智的な美がある。何と智的な女性が增えた事であらう。

今や大學の門が、女性の爲めに開かれたことは、我が女性の爲めに喜ばしく思ふ。大學でなければ哲學は學べないやうに思ひ、桑木嚴翼博士の講義を聽けば、忽ち一かどの哲學者になれるやうに思ふなどは、まさに女性の愛すべき無邪氣さではあるが、然し、私はさうした女性の智的な渴望を、ただ微笑するのみではないのだ。私はその烈しい知識慾の中に、祝福すべき將來の我が文化の發芽が豫見するのを樂しむのだ。

とは云へ、或種の婦人などに代表されてゐる。かの氷のやうに冷たい、獨善的な、僞善的な、少しも溫かい人間的

感情を有たないで、形式だけで物事を定めて納まつてゐるやうな、かの厭ふべき、新しい型にはまつた似而智的婦人を、私は謳歌するものではない。これは我が新時代の婦人の最も戒心すべき危險な懸崖であらう。

×

去年の末あたりであつたか、西洋の大きな小說を立續けに五つ六つ讀んで見た時、ヂッケンスの「デエヴイッド・カッパアフォイルド」に最も動かされもし、感心もした。いかにも堂々たる大小說である。缺點を云へば、云はれないこともない。作者が興に乘つて、餘計な低徊をして、退屈させるところもある。また今の人間には緣遠いやうな、一種素朴過ぎる理想主義が氣になるところもある。所謂英國風な健全さがあきたらないところもある。けれども、私はすつかりヂッケンスに傾倒してしまつた。その曖かいユウモアの如きは、今更云ふまでもないことであらうが、取り分け悠悠迫らぬ態度で、恰も大河の洋々たる流れのやうに、筆を進めて行くところ、また、はつきりと物を見て、鮮かにそれを表現して行く才能には、驚嘆すべきものがある。

「デエヴイッド」はヂッケンスの代表作であるといふことであるが、兎に角いろんな點で學ぶべきところが甚だ多かつた。デエヴイットか新妻ドラと共に營む結婚生活の如き、その靈活な描寫の筆には、ただただ推服の外はない。無邪氣なドラのねんねえ振りなど、實によく書けてゐる。また、何とか云つた恐ろしい老孃の如きも、その人を見るやうに書かれてゐる。が、私としては、甘いと思はれるかも知れないが、とりわけアイディアル・ワイフとも云ふべきアグニスが好きであつた。このイッポリト・テエヌの所謂 so calm, patient, sensible, pure, worthy of respect a very model of a wife sufficient in herself to claim for marriage the respect which we demand for it. なるアグニスを中心として、一つの感想を書いて見たいと、私は今考へてゐる。その中にもつとヂッケンスの他の作をも讀んで、その女性觀及び結婚觀について、少しまとまつた事が云へたらばと思つてゐる。（大正九年）

初冬數日

一日

多忙のために返事を遲らした手紙が大分たまつて來て氣になるので、朝からかゝつて六七通も書いたところに、中村詳一君が見える。學校は三十日から休みだとのこと。栂尾(とがのを)の明慧上人の著書の古本(こほん)が見付かつたとて大變喜んでゐる。そして、そのうちどうかして明慧上人の全集を出版して特志の人に頒ちたいと言ふ。明慧上人のやうな立派な人が少しも世の中に知られてゐないのは殘念だと言ひ、またどれ程の立派な人が世に知られないで終つたらうと言つて中村君は歎息した。本當にさうだと思ふ。例へば私達の文學者の間に於ても、隨分そんな例はあり得るとおもふ。文壇的名聲などといふ事を考へると、私は非常に空虛な氣持がする。

中村君は此頃は飜譯には氣が乘らぬらしい。その生涯の事業たる佛陀傳の準備にかゝると共に、益々第一義的な修養に入つて行くやうである。話す度びに啓發せられるところが多い。先月買つたといふ書物の金額を聞いて聊か驚く。

そこへE書肆の主人來訪。

一人になると、書きかけの原稿の續きを書きかける。今丁度一番面倒なところに來てゐるのでどうも筆が進まない。そしていつか他の腹案のことを考へてゐる。母型の女と、娼型の女、そこに生ずる三角關係。美しい心をもつた人が、たゞ一瞬の弱さから罪人となる悲劇。『白き手のイソルデ』が、母と二人で修道院に獻げる袈裟を縫取りしてゐる冒頭の場面(シーン)を考へる、最後にイソルデ・ワイスハンドが修道院に入るのがいいと思ふ。此間見た、そしてひどく感心した久し振りの獨逸映畫『ヴェリタス』(眞實(ディ ワアルハイト)は勝つ(ジイクト))の修道院の場面が目に浮ぶ。あの映畫の殊に中世の卷などは餘

程私の空想を刺戟してくれた。獨逸人はえらいとまた思ふ。さうかと思ふと、また例の書きかけの他の作品の第一部も早く完成したいといふ心が起る。から集注しなくては困つたものだ。然し、澤山の腹案をもつてゐて、氣の向いたものから筆を着けて、氣長に生長させて行くといふやり方は、時代遲れだらうが必ずしも間違ひではないと思ふ。ただうさいふ風では、今の文壇では容易に生きて行けないと云ふ悲しみがあるだけだ。私はとても重寶な文壇人にはなれさうもない。そして、それでいいのだ。

こんなやうな沈思と雜念との時には、私は最後には定つて藝術の意義についての疑ひに苦しめられる。藝術によつて世を救はうと考へる力強い人の覺悟には恥ぢなければならぬが、私はなぜだか物を書いたりする事が、丁度子供の時に、親に隱して雜誌などを讀んだのと同じやうに、何か惡い事でもしてゐるやうな恥しい氣がしてならない。私の藝術の最後の目的は樂しみだ。自己目的(ゼルブストツエツク)なのだ。

疲れたので早く床に入る。ケエベル博士の小品集を讀んで寢る。自分の心が騷がしくなると私はいつもこの書を讀む。魂のためのよき子守唄である。

二日

今日は氣持のいゝ秋晴だ。明治神宮祭は大變な人出だらう。今朝の新聞で見ると電車が衝突したり、大分負傷者が出たらしい。子供だけは助けてくれと叫んでゐる女の人もある。あんな場所に子供などを連れて行くところに、女の女らしい可愛いところがあるのだらう。此間も招魂社の祭の時、古本屋廻りの歸りに、九段の横を歩いて見たが、女の方が多かつた。女といふものは、よくよく遊び好きなものと見える。

玄關兼椽側へ椅子を持出して、暫く日向ぼつこをする。猫の額ほどの庭のカンナの葉が褐色に枯れて、まだ靑いの

は蟲の食つた穴が無殘である。凋落といふ感じが頻りにする、そして私はこの感じが反つて好きだ。何處か郊外へでも行つて見たいと思ふ。少し準備して丸善へ行つて見たい氣もする。が、思ひ返して机に向つて、ハイネを二篇ほど譯したが、どうも意に滿たないのでムシャクシャする。大體詩の譯そのものが無理なのだ。それに又私が凡てに力量の足りないのは事實だ。飜譯も今の計畫が完成したら、ひとまづ止めたいものだと思ふ。

此間中少し無理な努力をしたせゐか、何だか頭も身體も疲勞しきつてゐるやうだ。暫くと思つて晝寢をする。何處かガイゼルみたやうな大きな本屋で、どつさり本を買込んでゐる夢を見る。此頃は實際夢ばかり見る、一寸寢るともう夢だ。眼を覺まして見ると、『新潮』の水守君から十一月の日記をと云つて來てあつた。水守君は今日は引越しで混雜とのこと。

夜、奧むめおさんが見えられる。國から送つて來たからとて、柿と柘榴とを頂く。坊やを抱いてゐられる。お父さんによく似てゐて可愛らしいし、なかなかの元氣者だ。有島武郎さんに抱ッこして貰つたのはこの子だ。O君もお父さんになつたのだと今更にはつきり頭に來る。お互ひにもう子供ではないのだ、しつかりしなければならない。

少年俱樂部、手紙雜誌の問合はせの返事を出す。

三日

また雨かと思つたが、朝のうちに晴れた。晝前、神樂坂へ散步に行き、歸りに新潮社へ寄つて見る。編輯局はみなお休み。加藤君を訪ねると旅行中だつた。

今日は一日ハイネに從ふ。頭が痛いのでやめて、一戶博士譯の『最近の宇宙觀』を讀む。人間世界の卑小な煩雜を忘れさせてくれるのは天文の書物が一等だ。この天空には或ひはなほ無數の太陽が無數の地球を伴つて廻轉してゐる、

同じき生物と同じき生活苦！　ああ何といふ詩であらう！

夕方、石原健生君が見える。松茸を持つて來てくれる。雜司ケ谷へ訪ねて行く約束をしてゐながら、例の出不精で、また向うから來て貰つてすまなく思ふ。石原君に面白い話を聞く、岩野泡鳴氏がなくなる前に、ある人に、「文壇に出ようと思へばいいものなんか書くな」と敎訓したといふのである。「いゝ作を書いたからとて認められはしないのだ」とは、我々のよくいふことだ。然し泡鳴氏の口から出たこの反語的な語には權威がある。

M君新しく出來た詩稿をもつて來る。今ゐる上高井戸の寓居を近々引拂ふが、あちらへ越されてはと勸めてくれる、いつも引越したいと云つてゐるからである。大に意動く。全然引移らない迄も、安い家賃なので家を借りて置からうかとも思ふ。武藏野の寂しい孤獨の詩人になりたい氣がする。

今日も一日花火が上つてゐた。西條氏へ大關五郎氏の第一詩集の會に缺席する旨出す。

四日

快晴だ。晴れやかな日光を見ると氣も浮き立つて、心も廉と一緒に舞ひ上りさうだ。人間の思想だなどと言つても、どれ位天氣に支配されてゐるか知れない。

新潮社の小野田君が見える、西洋の詩人の寫眞のことで。幸ひに必要の人は大抵あつた。小品集、今日より組みにかかる由。

晝頃、新潮社に行き、それから丸善に出かける。獨逸書が來出してから初めて行くのだ。混雜を恐れて、牛込驛から東京驛まで電車に乘る。ここもかなりこんでゐる。丸善の二階で阿部次郎氏にあふ、挨拶をする。『セルビアの民謠』ペエテルといふ人の『新浪漫主義』其他五册ほど買つて歸る。本の高くなつたことは驚くばかりだ。探してゐるハイネ

に關する新著は一向見當らなかつた、けれど〻欲しい本は隨分あつた。一つ近々大借款を起してうんと買込みたいものだ。銀座を散歩して見ようかと思つたが、大儀な氣がしてそのまま歸る。妙に滅入つて、寂しい氣がして仕樣がない。書物なども要するになぐさみだ、いくら書物を讀んだつて人間は賢くも善くもなりはしないのだ。「多く書をつくれば竟なし多く學べば體疲る」だ。いや、本を讀めば讀むほど人間は馬鹿になるにきまつてゐる。知識を增すほど宇宙はだんだん狹くなる、直觀の力は弱まり、いよいよ物がわからなくなる。なまじ本など讀んで小理窟をならべることを覺えると、もう所詮救はれなくなるのではなからうか。そんな極端なことをさへ考へて、あの丸善の二階にぎつしり立並んでゐる金文字入りの萬卷の書を呪咀する氣持になる。そのくせ、近日また懷をふくらませて、出直して來ようなどと思ふ。よくよくの腐れ緣と見える。

夜、仕事。珈琲を煮させて、むやみに飮む。此頃は夜遲くまで仕事をしてゐるといい氣持だ。前には夏の方が仕事が出來たが、今年は冬がよい、これから火鉢に鐵瓶をたぎらせて、バルザックみたやうにどてらでも着込んで創作をやりたいものだ。

五日

ばかに早く目がさめる。直ぐ、仕事にとりかかる。そこへ催促が來たので、愈々傍目も振らず働く。

晝すぎ宮島資夫君が見える。相變らず元氣がよい。君の顏を見ると、生命の强い躍動を感ずる。暫く藝術談をする、君の熱烈な藝術愛の眞劍さにはいつも鞭達される。宮島君は本當の藝術家だ。一緒に新潮社へ出かけようとしてゐるところへ、折よく水守君が見える。引越しで大變だつたとのこと。家のない話が一しきり出る。宮島君は懷からアメリカの新聞を取出して見せてくれる。塹壕で繁殖した三十萬の鼠が巴里を襲擊して、巴里人は今鼠との戰爭だといふ

のだ。事實は常に詩人の空想を凌駕すると宮島君は言ふ。

二君が歸られてからまた懸命にやる。

夕方、O君が來る。O君も今度愈々第一詩集を出すことになつたのだが、調べて見ると舊い原稿は大分紛失してしまつて、今のところ五十篇位しかないといふ。作は拙い方だが十年以上の長い年月に亙つてゐるのだから、かなりなくてはならないのだが、つくづく惜しいと思ふ。仕方がないからこれからもつと努力するやうに勸める。O君のあの個性的な、鋭い、沈痛な詩は、果してどんな風に詩壇によつて迎へられるであらうか。見たいものである。

O君は天性反抗的に出來上つてゐる、そして、常に鳴つてゐる、そこにいかにも君の詩人らしい眞骨頭がある。O君は今の文學者があまりにも專門家的、玄人的に流れて來たことの不滿を語り、また短篇の時代が去つて、大に長篇小說の重んぜられる時代が來なければならないと言ふ。それも日記的のものでなく、眞箇の長篇が出なければ實際うそだ。だが、かうした氣焔の最後には、自分の力量の不足を歎ずるのが、此の二人の浪漫家の常である。O君との對話はきまつて自嘲に終るのが寂しい氣がする。途中からやつて來た若いS君はこの浪漫家振りに少し驚きあきれたかも知れない。S君は例の小說を持つて來たのだが、力量のない私のことだから、中村武羅夫君に見てくれるように頼んで見ることを約束する。

やがて福士君が見える。「生れましてね」と言ふ、福士君もお父さんになつたのである。まづ喜びを述べる。二人のお父さん達はそこで大に共鳴してしまつた。福士君、私の『サンエス』に出した短い方の詩を賞めてくれる。そして自分は詩は當分休業だと語る。飜譯と論文とに忙しいのである。傍にゐるS君は迷惑だつたらうが、三人で韻律論をやる。一人になつてから、福士君に賞めて貰つた詩を二度ほど聲をあげて讀んでみる。そして我ながら無邪氣だなと思ふ。今夜は徹夜をしようと思つてゐたが、あまり調子に乘つて談じた爲め疲れたのでやめる、明日は早く起きて大

いにやらうと思ふ下から、ふとツルゲエネフの散文詩『明日は、明日は』を想起しつゝ眠る。（大正九年十一月）

文學者と反省の問題

反省といふ言葉ほど、奇妙な言葉はない。他人に向つて、「少し反省したらよからう」と誰れも言ふ。しかし、自分に向つて、さう言ふ人は甚だ稀である。大多數の人は、いつでも他人の無反省を非難してゐる。そして、さう言つて他人を非難しつつある自分が、果してその非難から免れてゐるかどうかを暫くでも考へて見る人は、極めて稀有である。然しまた、同時に、自分は反省的であると揚言する人もない。反省的である人は、勿論さうした自負の言を愼しむからである。そこで、この反省とか、無反省とかいふ言葉は、これを他人に强要し、他人を非難する場合にのみ用ひられるといふ極めて興味のある現象が生じてくるのである。そしてこの不思議な事實を思ふとき、私は人間性のある深奥な一角に、觸れ得たやうに思はずにはゐられない。卽ち、人間の自ら正しとして、飽くまで自己を肯定し、自己と相等しからざる他人を斥けようとする我意である。

他人の行爲なり性格なりを、無反省の語をもつて、容易く非難する前に、何人もまづこれだけの事は考へて置く必要がある。

そこで、この反省といふことが、さき頃二三の文學者間に問題にされた事に基因して、私もこの問題を聊か考へて見たいと思ふ。

文學者は、特に反省といふことを問題とする。それは至當のことで、常に人間の精神を視點に置き、人間の生活を問題とする文學者としては、まさにさうであるべきである。けれども、それが、やはり殆ど全く他人に關してのみな

されるやうに見える。そしてそれが文學者だけに、それは文學者が最も他人の無反省を非難して、また他人から同樣の非難を蒙る人間だといふ結果が、とりわけ目立つのである。そしてこの事實を考へると、私は寂しく微笑せずにはゐられない。

まづ、甲が登場して、誰れかを無反省だと攻擊する、と、直ぐ乙が出て來て、甲こそ無反省だと罵倒する、するとまた、丙が現れて、甲も乙も共に無反省だとたしなめる、すると今度はまた丁が出て來て……何處迄行つても際限がない。かの劇中劇の中に、また劇中劇があり、芝居の見物がまた役者で、その芝居の見物がまた役者だといつた風な、ロマンテイック・アイロニイの生んだ奇怪な芝居を見るやうである。

ところが、現に、私はさうした事實を、反省の强要の目白押しを、文學者の間で目擊するの機會を得たのである。それはさき頃某新聞の文藝欄で眼にしたのであるが、批評家の某氏が、現今の名ある長篇小說を列擧して、これらを無反省の文學として、極力非難せられたのに對して、作家の某氏が、特にその友人の一作を斷じて然らずとなし、その無責任な妄言をなした批評家某氏を、君こそ無反省であると責め立てられた事實である。泥棒にも三分の理といふ事がある、その無反省のゆゑをもつて非難せられた長篇作家といへども、みなそれ〴〵言ひ分があるに違ひない。その人達なり、また某氏のやうなその友人達なりが、一々さうして遣り方で反駁したならば、結局その某批評家が最も無反省な人と云ふ事になられたに違ひない。けれども、それらの無反省な人達は、何故か、皆、さうした無反省呼ばはりのやり返しをやらなかつたので、最後に、思想家某氏が結論をつけて、反省の必ずしも文學者にとつて重んずべきものでない事を言はれた。一理ある說だと思つた。そして、それをもつてその論爭は終つたやうに覺えてゐる。

一體、反省とは何であるか。反省とは、つまり、自ら省みて、自己の中の惡と過誤とを意識することであらう。卽ち、それは自己批評である。自己批評は、究極一種の自己否定に導きはしないか。世に或ひはかう言ふ人もあらう、

反省はそれによつて自己をより善くし、より賢くすることであるから、反つてそれは自己の肯定の道であると。私もさう考へたこともある。然し今私はそれを信ずるにしては、あまりに人間の本性に對して、悲觀的見解を有つものである。大多數の人は素朴的な自己肯定者であつて、反省は、自己批評は、その得堪へないところである。私は哲學的敎養が乏しいから、心理學的に、また倫理學的に、これを論ずる資格はない。けれども、私にも反省といふ事について、學問的にではなしに、自分自身の切實な問題として、いくらか考へて來た事はあるから、それを書いて見たい。

自分の問題として考へたのだから、從つて自分自身について語る事になる。さうした何事も自己に關聯して考へるといふやうな事を好まぬ人には、厭はしい事に思はれるに違ひない。けれども、それは勘辨して頂き度い、畢竟するに詩人は自分の事しか語る事が出來ないものだからである。

多くの場合、否、殆ど例外なしに、一切の非難は被難者に適當するものである。どんな理由のない漫罵でもさうである。なぜといへば、人間はどんな立派な正しい人でも、人間性に一般のあらゆる惡德を、いくらか宛つは自分の中に有つてゐるものだからである。

例へば、私にかういふ例がある——尤もこれは私自身をその正しい立派な人の一例に擧げようとするのではない、ただ、こんな場合、他の人の場合を例に擧げる事が不可能だからにすぎない——私は嘗て、リテラリイ・テロリストとも云ふべき、過激な嘲罵雜誌を刊行した人達の爲に、「卑屈なる獻欲者」として、その卑屈を罵られた事がある。わざわざ雜誌を送りつけられたのだけれど、理由のない漫罵と認めたので、それを沈默をもつて看過したところが、今度はその取上げなかつた事を、利巧だとか卑怯だとかいつて罵られた。ところで、この卑屈といふのも、利巧といふのも、それ迄私は自分がさうであるとは、ゆめにも思つた事がない。そしてその非難を受けた折りには、自分こそ最もそれに遠い人間ではないかと自分に言つて、ひそかに苦笑したのであつた。が、暫くすると、漫罵者の言必ずしも全

く理由のないものでないと思はれて來た。これ迄隨分愚かな、自分を不利な立場に置くやうな事、勢力に手向ふやうな猪突事の多くをなした自分といへども、全く卑屈でなく、利巧でないと斷言する事は、自分に媚びる事である、それは究竟無反省の結果であるやうに思はれて來たのである。

そして無反省といふ事でも、またこれと同樣ではなからうか。何人といへども、實際例外なしに無反省である、丁度彼が卑屈であり、利巧であるが如くに。そして今もし誰れかゞ、その無反省の非難を、全く理由のないものとして突返し得るとすれば、それはその人がつまりその非難に適當する事の證左ではないか。

批評家某氏によれば、長篇作家は、凡て無反省であるやうに思はれる。現今の重なる長篇作家は、凡て氏の非難の中に網羅されて、私自身もまたその中に加はるの光榮を得たからである。私としては、自分の作は、自叙傳ではないし、またその主旨がむしろ反省的な人物の破綻を書かうとするのにあつたから、氏の非難はかなり意外な事ではあつたが、然し私の事は別として言ふも、特に長篇作家だけが無反省だといふのは、聊か可笑しく思はれる。長篇卽ち無反省文學と見なすのは、或る一二の作家の齎した先入見ではなからうか。

そして一體反省的な文學とは何物か。文學そのものの本質の中には、反省といふものとは、氷炭相容れぬ要素が多分に潛んでゐる事を、私は認めずにはゐられない。例へば、抒情詩の如きは、全然反省と兩立しない性質のものである。反省は抒情詩のナイーヴィテイを全く奪ひ去つて、これを無味乾燥なものたらしめるであらう。小說の如きも、決して反省に立脚すべき性質のものではないと思ふ。たゞ、作家その人が、人間として反省の人でなければならないといふのであつたなら、首肯する事が出來よう。ところで、反省無反省といふのも、比較上の事であり、程度の問題である。そして一體どの程度に反省的であればいゝのであらうか。私の經驗から云へば、私が最も反省的となる時、私は自分の全作品を抹殺してしまひたい。否、私の全存在を唾棄してしまはずにはゐられない!

反省は或る意味で自己否定である。多くの缺點と惡とを有つてゐる人間にとつては、自己否定に導かざるを得ない。しかも人間は自ら正しくない事を認める事を最も恐れる。彼の惡と過誤と缺點とが、同時に彼の支柱である。人間が生きて行くためには、あまりに公明正大であつてはならない。自己に對して餘りに峻嚴な裁斷を下す時、人はその上生きて行かれなくなる。それは單なる言葉ではない。私の切實な經驗である。

元來、私は引込み思案な人間である。自ら信じ得ない人間である。私は長い間、自分の無價値のみ凝視して來た。その結果は、自己否定であり、自己憎惡である。實に、かの天才を以て自ら任じ、奔放不羈な生活をし、大手を振つて天下を横行する人々の對蹠人である。そしてかゝる人間にとつて、生活が果して何の意義があらう。況や、文學上の制作をや。だが、つひに私はそれを、さうした影のやうな生き方を、德でなくして、反對に醜い惡德だと考へるやうになつた。そこで、私は自分を鞭つたのだ、そして、生きよ! と力強く自分に叫んだのだ。汝は決して無能無價値ではない、のみならず、今のある人々よりも、ずつと立勝つた人間だと言つたのだ。そして、これが無反省であつたらうか。然らば、無反省こそ、祝福さるべき人生の最も貴重な賜物である!

ところが、私の知人で、現にこの點で私より一層この自己否定傾向の烈しい人がある。私はその人を人間として尊敬してゐるけれど、そのつひに何事もしないで、自分で自分をすりへらし、自分で自分を喰ひ盡すやうな生活をしてゐる事を、心ひそかに惜んでゐる。實際、反省力の餘り強い人があつて、その一擧手一投足にも、仔細なる吟味を施すならば、つひには文字通り手も足も出なくなりはしないだらうか。そしてそれは、まさに自分で自分を喰ひ盡す事であり、自分自身との力闘に仆れる事ではないか。そして、その人の一生は、影のやうに儚なく、無意味にすごされはしないだらうか。人間が積極的になり、活動的になりうるためには、あまりに自分に對して嚴格であつてはならないといふ事は、止むを得ない人間としての明智ではないだらうか。

私は最近、木村毅氏の譯によつて、『アミエルの日記』を始めて纒まつて讀んで見た。そしてアミエルが人間としての教養に於て、（學者としてゞなく）いかに高い境地にまで達してゐるかに、今更らのやうに感動した。然し、同時にこの人が他に何等纒つた著作も事業もなし得なかつた所以を、極めてよく了解したと思つた。

これを今かりに、ショオペンハウエルや、トルストイや、ルッソオの如き人々と比較して見よ。それは隨分面白い問題を提供しはしないか。ショオペンハウエルの學說と、その生活との間の矛盾撞着は言ふ迄もない。トルストイの如き、メレジコフスキイのあの辛辣な批評に突かれるだけの大きな隙をもつてゐた――あのトルストイ論の中には、もつと生若い批評家ならば、無反省の語でトルストイを非難したらうと思はれる皮肉が隨分ある――然し、それは彼等の偉大を否定する條件とはならない。勿論、これらの天才と、今の高々自稱天才に過ぎない、或はそれだけの自信や自惚さへ有たない長篇作家達とは、その名を並べるさへ滑稽であるが、然し批評家某氏の眼に、前者が後者よりすぐれてゐるのは、その天才によつてか、或はその反省力によつてかをお訊ねする事は、私にはかなり興味がある。聰明な人達は、彼等天才もまた人間であつたと答へるであらう。頭の銳く働くだけの人は、反省の度合を考へ、彼等の反省力の小作家達よりも、いかに高い度合にあつたかを云ふであらう。然し、ここに比較されるべきは、小作家達ではなく、アミエルである。

既に豫定の紙數を超過してしまつたから、極く端折つて書く。私はかやうに、自己反省の必ずしも無條件に尊重すべきものでない事を明言した。それにも拘らず、然り、それにも拘らず、我々は常に反省を怠つてはならないと私は言はずにゐられない。これ私の內心の聲である。人間として世に處するためには、あまりに强烈な反省の人であつてはならない、然し、眞實に生きんがためには、我々は何よりも反省の人でなくてはならない。我々の絕對の冀求から言へば、斷じて反省を拒否してはならない。ここに大きな問題がある。また大きな矛盾がある。そしてこの矛盾こそ

は、人生の何事を考へるにつけても、常に私の突當る最後の障壁である。（大正十一年六月）

自己に徹する道

一

人生、社會、――さう云つた大きな、茫漠たる概念に、ぢつと相面してゐると、その紗のやうな概念の底から、まづ、ありありと現れてくる姿がある、一人の人間の姿が浮んでくるのである。

この人間こそ、たしかに自分の知るべき値のある人間だ、否、知らずにはゐられない人間だ、この人間こそ、自分にとつては無限の價値がある。この人間を除いて、社會も人生も、何の意義があらう、何の價値があらう、こんなにさへも考へられる位だ。して、その人間とは、この自分自身に外ならないのである。

自分自身を知れといふのは、ソクラテス以來の古い格言である。そして、永久に新しい眞理である。

何事を論じようとも、どんな問題を考究しようとも、問題は必然、最後には、その思惟者、その言說者自身の上にかへつてくる、また、かへつて來なければならない。

我々は、あらゆる論議、あらゆる言說の際に、つねに自分自身を省ることを必要とする。何事をも自分自身の問題として考へなければならぬ。

自分自身の生活の反省の上にこそ、はじめて單なる雄辯や喋舌以上の、意義ある言說が成り立ち得るであらう。

二

反省の問題は、曾つて私は一度論じたことがある。けれども、今にして見ると、當時の私の考察は、不完全でもあり、言ひ足りないところも多かつたから、こゝに少しくその補足をして見たい。そして、今專ら問題にされてゐる階級文學に關聯して論じて見るけれど、然し根本に於て、それは少しも對人的のものでなく、飽くまで、自分の問題として考へて見るのである。

こゝに反省といふのは、勿論、主として自己反省の意味であるが、未來のよりよき自己のために、現在の自己の過失や缺陷を否定すべき反省こそ、人間にとつてその生活を深めるものとして、人生の眞實に徹する至高な道として、絕對に必要のことである。にもかゝはらず、實社會の一員として、その實生活を支持し、一個の生活者として、人生に處するにあたつては、反省こそ、內から自分の力をそぎ、その自由な行進力を抑制する、最も厄介な重荷である。といふ、このヂレンマに、私は目をつけずにゐられなかつたのである。

三

若し我々が、精神主義の立場に立つて、人生を觀る場合には、反省こそ、その依つて以て立つべき基礎ともなるべき、重要なものであるが、之れに反して、現代に於て最も勢力のある物質主義、唯物主義の人々にとつては、反省などは全く有害無益の、繫縛でなければならない。然るに、曾つて漠然と無反省の語をもつて、他を非難した人が、自ら階級鬪爭の戰士をもつて任ずる人であつたといふことは、頗る奇異なる事實として、私には映じた。なぜかなれ

ば、唯物史觀の立場に立つて、人間意欲の强調であり、無產階級者の生活本能の檢束なき主張であるべき階級闘爭を力說する人は、かゝる反省思惟をこそ、まづ、斥け去らねばならぬ筈だからである。私が曾つて、自己反省の必ずしも重んずべきものでないことを云つたのは、またその意味に外ならない。卽ち、この生の伸張をベトオネンすべき、生活者の立場に立つて云つたのである。

今もし、我々が一個のプロレタリアートとして、階級闘爭の戰場に立つた場合には、自己の意欲の一切を擧げて、これを肯定し、自己の生活本能の命ずるがままに、行動し、苟くもこれに障礙となるべき一切を、斷乎として、否定し、手段の限りを盡して、これを擊破すべきである。これぞ、階級闘爭に於ける無產階級者の「善」でなければならない。然るに、若しその無產階級者が、聊かたりとも、自己の意欲に疑惑を挾み、搾取階級の存在理由を考へ、狐疑逡巡するに於いては、彼としては「惡」でなければならない。

しかも、それにも拘はらず、人間は反省によつて、絕えず自己を檢討しつゝ生きねばならぬ事を、私は云つた。反省思惟に沒頭する時、我々は臆病にもなり、消極的にもなり、また、非活動的にもなる。思惟の色に蒼ざめて、つひに積極的には何事をも爲し得ない浩歎は、ひとりハムレットのそれに止まるものではない。文學者は必然、實行の人ではない。文學は實行ではない。文學者は何よりもまづ反省思惟の人でなければならぬ。

私は曾つて、文學の本質には反省と相容れぬものゝある事を云つた。抒情詩の如き最もこの事を證明する。例へばヴェルレエヌの詩の如きは、子供のやうに無邪氣に罪過に陷り、又これを懺悔するといふやうな彼の生活から生れた。反省は彼の詩を窒息させたであらう。

然し、文學者が人間として、更に成熟し、更に意義深くあらんがためには、單にナイーヴに、本能のままに動くだけであつてはならない。

今こゝに、人間をエキスパンシイヴ・ネエチュアと、レフレクティーヴ・ネエチュアとの二つに分類してみると、政治家、實業家をはじめ、階級鬪爭の戰士にいたるまで、凡ての實行家は、前者に屬するに反して、哲學者、藝術家等の如き人々は、確かに後者に屬しなければならぬ。

一は遠心的にはたらき、他は求心的にはたらく。

四

私が文學と實際運動との關係について、曾つて一言を費した時、或人はそれを反駁して、文學もまた一の實際運動ではないかと云つた。私は藝術家がその藝術によつて、一般プロレタリアートの階級意識と、反抗的精神とを喚起し、社會制度の不合理を描いて、社會改革に貢獻し得ることを認める。が、これは迂遠な間接的な方法であつて、それを以て直ちに實際運動となすのは、餘りに明らかな誤謬である。のみならず、文學を他の目的に隷屬せしめる時、必然それは傾向文學、又は宣傳文學とならざるを得ない。私は必ずしも、傾向文學、宣傳文學を排するものではない。むしろ反對に、昔からこれを——例へばハイネ、ビヨルネ等の少年獨逸派の文學など——異常に重んじて來た。たゞこの場合問題は、宣傳を目的とする場合には、反つて宣傳の效果を奏しない場合が多いといふ點にある。

宣傳を目的として文學を考へる人にとつては、文學はその宣傳の用をなすに足りないと知つた時、また何等の意義をも有ちえないのは云ふまでもない。眞實に社會改造の情熱に燃えてゐる人々は、そんな迂遠な道を潔く捨て去るだらう。私は、小說作家として立派な天分をもつてゐる荒畑寒村氏のやうな人が、文學などを蔑視して、實際運動の渦中に身を投じて、階級鬪爭を鬪つてゐる徹底した態度を知つてゐる。

しかも私は未だひと度びも、所謂プロレタリア評論家によつて、文學の意義に對する疑ひの聲を聞かなかつたのは、不思議な事に思ふ。私はその人々が、こんなにも文學に對して盲信を抱いてゐる事の理由を解するに苦しむものである。私はこの點について、その人々の虛心坦懷な說明を聞くことが出來たならば、自分の文學觀にいゝ照明を與へられるであらうと期待してゐる。

五

私は曾つて、階級意識がないといふ理由をもつて非難された事がある。然し、私はそれを首肯する事が出來ない。私のこれまで步いて來た道を見た人、及び私の制作を正しく見た人は、私にむかつてこの言をなす事は、それは明かに誣言である事を認めてくれるに違ひない。ただ、私は今その自分の階級意識を無條件に肯定する氣持になれないのである。むしろ、それを超越し、それを克服したいと思ふだけである。今私は自己の一切の意欲を無條件に肯定するが如き事は、人間として、最も恥ぢなければならぬ事であると思つてゐる。

勿論、現下社會を觀望して被搾取階級の一部の悲慘な生活狀態を見るときは、彼等の反抗心と憎惡心とを十分に肯定し、又十分に同情せずにはゐられない。現在の社會狀態は、言ふまでもなく、不合理極まるものであつて、資本家階級の橫暴が、いかに人間の魂を虐げてゐるかは想像に餘るものがある。從つて、無產階級の間から、奪はれた權利と自由との恢復運動が叫ばれるのも當然の事である。

けれども、これを自分一個の問題として考へる時、また普遍的に人間性の立場に立つて考察する時、私はかうした人間の煩惱心をそのままに、直ちに「善」として肯ふことが出來ない。

六

世の階級文學論者は、口をひらけば自由を唱へ、解放を叫ぶ。然しながら、果して自由は、その人々の確信してゐるやうに、物質的方面から與へられるであらうか。外部的な生活狀態の改善のみによつて、人間生活は眞に解放されるであらうか。それはむしろ、外觀のみの自由であり、形骸のみの解放であると私は思ふ。なぜならば、その心がひとへに物質に執し、物質的の幸福をのみ追求してゐる場合には、いかなる狀態も結局の滿足を與へる事がなく、心は絕えず飽くなき欲望に驅られ、好惡の感情に掻き亂されて、たとへ外面的には、自由を得たやうに見えても、內面的には、依然として繫縛されてゐるからである。

眞の自由は、あらゆる人間の煩惱心を克服した彼岸にのみ存すると私は思ふ。個人的の感情に支配されてゐるうちは、決して人は自由ではない。愛憎の彼岸に立つ時、はじめて我々は眞の自由人たり得るであらう。

されば、我々が眞の自由に到達し、眞に解放せられた境界に到らんがために、ひとへにその眼を向くべきものは、自分の心の問題である。

愛憎の彼岸に立つためには、我々は、自分の心を淨化し、深化して行かなければならない。そしてそれにはまづ、自分の心をそのありのままの姿で凝視しなければならない。卽ち、用捨のない自己反省よりはじめなければならない。

自己反省は、我々が自分自身を救ふべき道に旅立つ旅杖のやうなものであると思ふ。

然しながら、反省は決して容易な術ではない。他人の弱點は直ちに目に着きやすいが、自分の弱點はなかなか認めにくいものである。また、反省を念として、一々自分の言行を仔細に吟味するつもりでゐても、いつのまにか、その峻嚴なるべき自己觀察、自己批評が、反對に、自分の弱點に甘へて、これを享樂したり、又は、全然第三者となつて單に傍觀するだけで終つたりする事はなからうか。

エーワルトは、人が鏡を見るのは、虚榮心からか眞實を欲する心からかといふ疑問を提出してゐるが、全く、自己陶酔に沒入せざる自己反省は極めて稀れであると思ふ。鏡の中の自分の顏に見とれてゐる女性の姿は、この人間の心理を象徵したものではあるまいか。

自己陶酔に陷るとき、既に自分の眞の姿は逸し去つてしまふ。自己に徹せんがためには、それは最も危險な事である。

我々はひとへに自己の生活を直視して、その隱れたる惡をも見のがす事なく、嚴しく自己を檢討しなければならぬ。自己の生活を直視する事は、罪障多き人間にとつては、堪へがたい事である。あまりに自己を嚴しく裁斷するとき、生きる事はいかに苦しく、いかに至難になるであらう。然し、その苦しみ、その困難を避けてはならない。道は自己に徹したところからはじまる。そして、この外に、自己に徹する道はない。

眞に自己の心に徹する事が出來たならば、即ち世界の心に徹したのである。自分の心さへ征服したならば、世界を征服したのである。

救ひは自分の心をおいて外にはない。その外からは決して來ない。自分の欲望のままに振舞つて私達の目的が、世間に出て、人並に成功しようといふのにあるならば、問題はない。いゝのである。

然し、本當に自分の人格を磨いて、人間として生れた甲斐あらしめようと思ふならば、常に自分の心を究めて、その中の賤しいもの、汚れたもの、悪いものを除去して、その心境をかつ高め．かつ淨める修業の道をすゝまなければならないと思ふ。（大正十二年二月於熱海）

ゲエテの旅

ゲエテの靑年時代は、多くの旅に費された。彼はその生地のフランクフルト・アム・マインから、ライプチヒに遊學し、病氣のため歸鄕した後、再びシュトラスブルグに遊學した。ゼエゼンハイムに、牧師ブリオン家をはじめて訪ねて、そこの次女フリイデリイケに戀したのも、その時分の事である。しかもフリイデリイケの戀に囚へられる事を欲しないで、彼は大學の業を終へると共に、故鄕のフランクフルトに歸つたが、その在鄕時代には、その近郊を歩き廻つて、始終フランンクフルトとダルムスタットとの間を往復して、ダルムスタットのメルクの家で交際した女友達などから、そのしきりに步き廻るところから、「旅人」（さまよひ人）の綽名を貰つた。彼自身も、嵐の中をもかまはず步いて、その情を抒して『旅人の嵐の歌』を作つた。

次いでゲエテはライン左岸のエッツラアルに行つて、そこの大審院の見習となり、そこで『エルテルの悲しみ』の悲

痛な體驗をした。そして、許婚者のきまつてゐる女を戀する苦しみから逃れるために、エッツラアルを去つて、ライン河に沿うて歩いて、フランクフルトに歸つた。そして、そこで更に彼の所謂リリイ――アンナ・エリザベエト・シエエネマンとの戀に陷つた。リリイとの戀に惱んでゐる時、友人に誘はれて瑞西に遊んだ。これが第一囘の瑞西旅行である。

つひに彼はリリイとの戀を斷念して、ワイマル公の招きに應じて、ワイマルに入つた。ワイマル生活のはじめには、ライプチヒに遊んだり、ハルツ山に登つたりしたが、一七七九年にはワイマル大公カアル・アウグストのお伴をして、第二囘の瑞西旅行に立つた。その旅のエピソオドが面白いから話して見よう。彼はまづ、公爵をフランクフルトの自分の生家に案內して、それからフアルツ、エルザスの方へ向つたが、その途中で、或土曜日の晚、丁度滿月ののぼつた時分であつた、彼は一行から離れて、ひとりわき道をして、昔通ひ慣れたゼエゼンハイムの小村の方へと馬を走らせた。そして彼が、もう八年間も遠ざかつてゐたかの牧師の家の前で馬を降りた時、その家の人達は、その突然の客がゲエテ其人である事を知ると、非常に喜んで彼を出迎へた。この善良な、靜かな人達のところで、彼は直ぐにまたうちくつろいだ氣持になつた。

彼が昔愛して、そして捨ててしまつたフリイデリイケとは、彼は戶口のところで出あつた。彼が丁度戶口をはひらうとするとき、彼女が出て來ようとしてゐたので、二人は殆んど鼻突合はさんばかりに行き合つたのだ。それで二人とも直ぐに笑ひ出した。彼女は彼をいとしげに、靜かな幸福さうな眼で眺めたので、彼はうれしい氣持であつた。彼は彼女が嘗つて自分を心からなみなみならず愛してくれた事を忘れなかつた。しかもその折り彼は、それが彼女の生命にもかかはる程の瞬間に、彼女を見捨てねばならなかつたのだ。あの時の病氣と、その結果とについて、彼女は語つた。けれども、彼女はその時分の事には、極くあつさりと觸れたばかりで、彼を非難するやうな語氣なぞは少しもなかつた。

本當に、彼女はまごころこめて優しく、彼をもてなして、彼の心の中に昔の感情を呼びさまさうなどとは決して努めなかつた。彼女は彼を園亭の中へ連れて行つて、彼が昔すわつた場所にすわらせて見て喜んだ。それから、昔馴染の隣人や、曾つて彼が頭髮の手入をした理髮師なども呼ばれて來た。かうした田舍人のどんな些細な事でもよく憶えてゐるのにゲエテは驚いた。彼等は彼の學生時代の事を、まるでつい半歳前の事ででもあるやうに話した。昔ながらの心やさしい老人達は、彼があの時分よりも今の方がずつと若く見えるなどと云つた。

彼はその夜、フリイデリイケの家に泊つて、翌朝日の出る頃に出發した。彼は馬上から最後の挨拶をするために振返つたとき、やさしい人達の顏を今一度眺めやつて、それらの人達とすつかり和解の出來た事を感じた。この時から、彼はこの昔馴染の土地を、滿足な安らかな氣持で回想する事が出來るやうになつたと思つた。

ゲエテはそれからその學生時代の紀念に富んだシユトラスブルグへ行つて、そこでリリイと再び會つた。彼女はゲエテの後に得た婚約者を死によつて失つて、今ではシユトラスブルグの名望ある銀行家の妻になつてゐた。ゲエテがその部屋に入つて行つた時、彼女は七週間前に生れたその最初の子供の上に身を屈めてゐたが、その昔の戀人の姿を見ると、驚きもし、喜びもした。彼女は彼にその立派な邸宅を案内して、丁度その折り不在であつたその良人のことを、誇りと愛情とをもつて語つた。そして、晝までと言つて袖を引止めた。リリイの母も、娘のお產のみとりに丁度フランクフルトから來てゐた。

その夜もゲエテは再びこの家を訪ねなければならなかつた。そして、彼は明るい月光の中を古びた通りを宿屋の方へ歸つて行きながら、その心に何とも名狀しがたい美しい感情の湧き起るのを抑へ得なかつた。その時ゲエテの感じた事は、多分かうもあつたであらう――窮屈な重苦しい情熱に搔き倒されないで、これらの愛すべき人達といつまでも親しい友達であり得るといふ事は、何といふ幸福な事であらう！

ゲエテが昔の戀人達と、こんなに親しく再會する事が出來て、互ひに少しも不快な記憶を取換さなかつたといふ事は、私達を感動させはしないであらうか。それはゲエテの德であり、又、彼が選んだ女性の美しさでもある。私達の多くは、果してこんなにいい氣持で、その昔の戀人達と再會する事が出來るであらうか。それが出來るためには、暴烈な欲望や利己心にのみ驅られないで、その愛する女性のために、やさしいデリカシイを以て彼女をいとしむだけの、眞實の愛を持たなければならぬのである。私達もゲエテのやうに、昔の愛人に再會する事が出來るやうでなければならないと思ふ。

ゲエテはこの第二回の瑞西旅行に於て、サンクト・ゴツトハルトから遙かに伊太利を望んで南遊をおもうたが、その渴望は後年になつてはじめて充たされて、彼の生涯の轉機となつたあの有名な伊太利旅行となつたのである。（大正十三年一月）

人間ハイネ

一

ハイネほど誤解された人物はない。また彼ほど憎まれ、罵られ、讒謗された人物はない。今でも、現に生きてゐる人間であるかのやうに、一部の人は――獨逸の最も獨逸的な人達は――彼の名を聞くと、肩を聳やかす。こんな例は、他の詩人や文學者には、一寸類のないものであらう。

なぜ、ハイネはそんなに憎まれるのだらう。まづ、彼は猶太人であつた。「病氣と貧窮よりももつと惡い猶太の血」と彼が言つた、その漂泊の猶太人の呪ひが、彼の柔かな心をいかに傷つけたかは想像にあまりがある。

私は此頃獨逸の文學史家アドルフ・バルテルスの最近の獨逸文學について書いた或る著書を讀んで見たが、それには、一々の詩人、一々の作家の、猶太人であるか、猶太人でないか、凡そどれ位の程度に猶太くさい疑ひをもつかを、嚴重に検討して、猶太人の跋扈をさかんに問題にしてあつた。われ〳〵にとつては、こんな事なんかどうでもいゝ事であるが、あちらではまだそんな事が餘程問題になると見える。

殊に、ハイネの生れた時分は、猶太人の虐待は隨分ひどいものであつたらしい。ハイネの友人で、後年敵對的の關係になつたルウドキッヒ・ビョルネの生れたフランクフルト・アム・マインなぞでは、猶太人は市民權すらなく、猶太人街に押し込められて、日が暮れると、街の門を閉鎖されて、外出が出來なかつた。町へ出ても、舗道を歩く事が許されないで、危險な車道を歩かねばならなかつた。通行人が「このジュウめ、くたばつちまへ！」と罵ると、ぺこ〳〵頭を下げねばならなかつた。殊に、その「繁殖」を防ぐために、年に結婚は十四組しか許されないといふ始末である。フランクフルト・アム・マインはとりわけひどかつたとしても、兎に角獨逸に於て猶太人として生れるといふ事は、當時にあつては最大の不幸であつたのである。

それから、ハイネが獨逸人に憎まれなければならなかつたもつと根強い理由は、ハイネのナポレオン崇拜と、その佛蘭西びゐきとである。

ハイネの生れたデュッセルドルフの町は、當時六年間に亙つて佛蘭西の革命軍によつて占領されてゐた。そして、一八〇六年にナポレオン部下の雄將ヨアキム・ミュラアが大公となつた。そんな風で、その町は萬事佛蘭西風に支配されてゐて、法律は改められ、信教の自由は許されたので、ラインランドの猶太人たちが、ナポレオンを千年間の抑壓からの解放者として崇仰したのは當然のことである。ハイネもまたその猶太人の一人であつた。殊に、ハイネの天賦のエスプリは、キッテイな傾向は、佛蘭西人に先天的に親しむべき宿命をもつてゐた。後年彼は巴里に逃れて、佛蘭

西の女を妻として、殆んど半ば佛蘭西の文學者となつた。周圍の事情からいつても、彼の素質から云つても、それは極めて自然の成行であつたが、それがある種の獨逸人にはゆるす事の出來ない事なのである。ハイネは非愛國的な故をもつて非難される。だが、彼がどうして普通の獨逸の愛國者たちのやうに獨逸を愛する事が出來たらう。然し、實際には彼は、眞實に彼自身の方法に於て獨逸を愛してゐた。獨逸は何といつても彼の祖國であつた。彼の切實な望郷の歌を、虚僞なもの、感情を弄ぶものと非難するものは、やはりハイネを誤解する人の一人でなければならない。

ハイネが、あんなに憎まれ、誹謗され、誤解されたのは、然し、何よりも彼の性格のためである。その持つて生れた氣質と、天分とのためである。

彼はそのセンテイメンタリテイのために、その確乎たる信念の缺如のために、その冗談か眞面目かわからないやうな態度のために、その忌憚なき諷刺、痛罵、皮肉、アイロニイのために、その反基督教的、異端的傾向のためこ、彼は非難され、攻擊され、憎まれ、罵られ、やッつけられた。

然し彼もやッつけた。負けないで、戰つた。かういふ意味からも、彼の生涯は戰ひの生涯であつた。

彼の皮肉は毒矢のやうにはたらいた。この矢を射られたものは、生涯その怨みを忘れ得なかつたのである。

當時の獨逸の詩人たちは、概ね彼の敵であつた。シユワアベン派の詩人等は、ハイネの「シユワアペン・シユピイゲル」其他で、目から火の出るやうな猛烈な皮肉を浴びせかけられて以來、ハイネを默殺した。そして、當時の先輩の詩人で、ただひとりハイネに好感をもつてゐた佛蘭西生れのシヤミツソオが、その主宰してゐる雜誌に、ハイネの肖像を掲げようとした時、シユワアベン詩人等は、一齊にこれに反對し、ハイネの肖像を掲げるなら、我々は今後斷じて執筆しないと云つて、袂をつらねて去つた。それは「ハイネ事件」として有名な事件であるが、それでもシヤミツソオは、ハイネの肖像を撤回しようと思はなかつたので、俄かに他の方面の人達、フオイヒテルスレエベンや、ジム

ロックや、ハウフ等の人々の原稿を集めて、雜誌をこしらへたといふ事であるが、一詩人の肖像の掲載が、こんな激烈な反響を受けたやうなこんな極端な例は、我國の詩壇でも見かけない事である。

詩人プラアテンとの論爭は更に烈しいもので、プラアテンは劇詩を作つてハイネ並びにその友人イムメルマンを攻撃し、ハイネは「伊太利紀行」の中に、猛烈にプラアテンを嘲罵した。その論爭は、ゲエテなども、目にあまつたと見えて、エッケルマンにむかつて、二つのすぐれた頭腦が、さうした論爭のためにかき亂されてゐるのを惜しんでゐる。

かうした論爭の例は殆んど枚擧に遑がないほどである。そして、これだけ一般の憎惡の種をかきおこして置いたハイネが、憎まれないですんだなら、それは不思議な事であらう。

二

ハイネの名は、今では我國でも誰れも知らない人はない位、ポピュラアになつてゐる。然し、この日本に知られてゐるハイネは、たゞ甘い戀愛詩人としてのハイネにすぎない。勿論、それもハイネの一面ではある、また、ハイネは天成の抒情詩人であるから、その書くものは、どんな散文の論策でも、詩の味はひを有つてゐるし、彼の作品の最もいゝものが、やはりさうした抒情詩である事も事實であるが、然し、彼を正當に理解し、正當に評價するのには、まづ何よりも散文に於けるサテイリストとしての、またイロニケルとしての彼を見なければならない。

彼は痛烈なサテイリストであつた、恐らくアリストフアネス以來のサテイリストであつたらう。アリストフアネス、ラブレエ、スタアン、セルヷンテス、ヴオルテエル、スヰフト、ベランジエ、バイロン、これらの人が彼の兄弟分であつた。

ハイネから、その皮肉をのぞき、その諷刺をのぞき、そのアイロニイをのぞいたならば、かなり平凡な、なまぬるい詩人になつてしまふであらう。しかも、甘い戀愛詩人といふ先入見をもつて、ハイネに對する我國の人々は、この重大なハイネの特質を案外見すごしてゐるやうである。彼の最もスヰイトな抒情詩の中にも、その辛辣な苦汁の一滴の垂らされてゐない事のないのを、多くの人は氣がつかない。そして、ハイネなんか甘くて駄目だなどと、きいた風な事を言ふ。特に若い詩人に、さういふ人達が多い。藝術の鑑賞は、偏見を以ては決して正當になされない事を心得おくべきである。

ハイネに關聯して、私もいつのまにか、さうした偏見によつて批判されるやうになつたらしい。勿論、私にはハイネの天分もないし、ハイネとは餘程その特質を異にしてゐるのだが、その誤解と誹謗とを受ける事だけは、ハイネと同じやうになつてしまつた。勿論それは一部の人にすぎないのではあるが。正當に理解しようといふ善意なくして、感情的な嘲罵を恣まゝにして快とするやうな事は、その人達にとつて非常に寂しい事であると思ふ。私としては、およそどんな非難でも、非難はそれが非難である事によつて、既にいく分か當るものであるから、一概にそれに反撥はしないが、非難は非難として、感情的でなしに、もつと冷靜な批評に基いて言つて貰へれば幸ひに思ふ。某氏の如きは、私をハイネの模倣者だといはれた。勿論、多くの詩人がさうであるやうに、私もこれ迄隨分いろ〳〵な詩人の感化を受けて來たので、ハイネの影響も受けて來た事はたしかである。その初期には、確かに模倣時代があつた事を認める。だが私を一圖にハイネの追從者のやうに言ふのは、私を理解してくれないのみならず、ハイネをも理解しない人だと思はずにゐられない。私とハイネとの間には、本質的に類似したところがかなり多い。けれども、一方からいへば、全然相違してゐる。

こんな事はこゝには餘計な事だつたが、私もかうした一種の偏見から、不合理なレッテルを貼付される苦痛を嘗め

てゐる事を述べて、ハイネの苦痛がどんなにひどかつたかを想像して見たかつたのである。ハイネに比べれば、私などはずつと幸福であると云はずにゐられない。ハイネはより高い天分と豐饒とを有つてゐるたゞけ、その受けた誤解と誹謗とも、また比較にならぬほどひどいものであつたのである。

だが、詩人が正當に理解せられるといふ事はどんな困難な事であらう。殊に、その詩人が、複雜な性格と天分とを抱懷してゐる場合、その困難は一倍である。彼は、やむなく同時代をあきらめて、後世を俟たねばならぬであらう。その周圍を忘れて、遠い異國にでも思ひを馳せずにはゐられないだらう。

私はハイネのアイロニイの一つを思ひ出す。それは我々に取つて、非常に興味のある事だが、ハイネは、日本に於ける自分の名聲について自ら書いて、且つそれを自慢にしてゐるのだ。

ハイネ自身の生前に於ける日本での名聲！　何といふ面白い觀念であらう。自ハイネの書いてゐるところによれば、支那人がふるへる手で硝子にウェルテルとロッテの繪を描くのに對して、自分の作品は更に遠く日本に讀まれてゐるといふのだ。何でも、印度から歸つた和蘭人が、印度の新聞にその記事の出てゐるのを見たとハイネに話したので、ハイネは非常に喜んで、どうかしてその事實をたしかめたくてならず、その日本譯の記事の出てゐる新聞を手に入れたいと努力したが、つひに駄目であつたといふ。その日本譯は長崎の通辭をしてゐた人物が譯したもので、西洋の詩が日本譯になつた嚆矢であらうといふ。ハイネの時分に、日本に譯されたものとすれば、それは西詩の日本譯の嚆矢でなければならない。

そこで、私も大いにこのハイネ生前の日本譯の存在に興味をもつて、どうにかして、これを手に入れたいと百方搜索した。また現に搜索しつゝある。どうか、それを發見された方は、私のところまで御一報下さいませんか。

然し、このハイネ生前のその日本譯は、芥川氏の「れげんだ・あうれあ」（？）よりも、一層その發見が困難である事

を私は覺悟してゐる。なぜかなれば、ハイネの氣まぐれな思ひ付きは、彼のロマンテイック・アイロニイは、正直な讀者にとつては、かなりの警戒を要するものがあるからである。だが、もしこの埋れた名譯が世に現れたならば、どうか私のつたない譯などを棄てゝ、その譯によつてハイネの眞面目を見られむ事を期待する。それに勿論、ハイネはその譯をオーソライズしたにちがひないからである。

三

ハイネの後半生は、一種の政論記者であり、佛蘭西からの通信員であつた。彼は革命的な少年獨逸派の頭目として、故國ではその著書全部を抹殺されるの厄にも遭つたし、佛蘭西からハムブルグの叔父を訪ねるため歸國するにも、プロシャの領内を通過する事が許されないで、海路によらなければならない迄の、獨逸、とりわけプロシャの注意人物であつた。

彼は自由思想家であり、自由のための戰士であつた。伊太利の詩人カルドウッチの如きは、ハイネを自由の戰士として頌するオードをさへ書いた。然し、獨逸の批評家カアル・ヒルレブラントはそれにプロテストした。ハイネを自由主義の變節者と見てゐるからである。一體に、獨逸の批評家や文學史家は、ハイネの政治的閲歴に對しては、これを蔑視し、或ひは少くとも冷淡に見てゐる。これは、ハイネの操持の確乎たるものがなかつた事、しばしばその意見を變更した事に基因する。然し、それはブランデスが言ふやうに、ハイネが思ひ入れ澤山の身振りを嫌ひ、またそんな容體ぶつた、不正直な態度に出ないことを誇りにしてゐたゝめに、獨逸人をして、こゝでも誤解させたのである。彼の靈の中には、常にその自由に對する燃ゆるが如き渇望が消えはしなかつた。その大なるペエソスは、常に不變に止まつた、彼の「ロマンツエロ」の一項の終りに掲げられた "Enfant perdu" は、彼の眞の熱烈な感情である。私はその

ブランデスの意見を最も尊重する。概して、獨逸の文學史家はあまりに偏見的でお話にならない。だが、ハイネにもその蔑視と非難を買ふだけの落度と弱點とは十分にあつた。ギゾオの政府から年金を貰つた事などそれである。これは　多年面倒を見て貰つてゐた叔父サロモン・ハイネの死後、その送金が絶えたり、いろ〳〵な點で貧乏した彼が、その妻のマテイルド(とハイネは彼女を呼ぶ)のために、その贅澤な習癖を滿足させるためには、止むを得なかつた事として、後代の我々はハイネを咎める事は出來ないのであるが、何しろ敵が多く、憎まれてゐた彼であるから、その事實が獨逸に知れた時の騷ぎはひどいものであつたらしい。どれだけの人物が小躍りして喜んだ事であらう。

ハイネの敵は、ひとり詩人や文學者にのみ限らないで、學者にも、大學敎授にも、新聞記者にも、政治家にも、國王にさへもあつた。彼の敵に言はせれば、ハイネは人間としてあらゆる缺點を持つてゐたやうに思はれる。ハイネにも人間らしい缺點は十分にあつた事を私も認める。けれども、同時に私は彼の敵の沈默してゐる彼の美點をも見なければならないと思ふ。嘗つて私は「藝術家と藝術家の生活」と題する一文に於て、メエリケの言葉を引いて、ハイネの人物について書いて、文學者の弱點の證左に擧げた事があつたが、あの一面的な考察に誤謬があつた如く、ハイネに對する言説にも更に考慮を要するものがあつたのである。メエリケの批評の如き、この詩人がハイネの敵シュワアベン派に屬してゐる事を思へば、直ちに無條件に受け容れる事は出來ないのである。

ハイネは、いたるところで人間であつた。人間らしい美點と人間らしい缺點とを具へた人間であつた。決して彼の敵の言ふやうな惡い人間でもなく、卑しい男でもなかつた。反對に、彼はその皮肉な筆とは反對に、やさしい感じやすい心をもつてゐた。親切な、同情のふかい、善良な人間であつた。彼がその困つてゐる友人に對して、どんなに親切な世話をしたか、凡て苦しんでゐるものに對して、どんなに情ぶかゝつたかは、公平な傳記者の明かに記すところである。けれども、そのやさしい心が、同時に彼の筆鋒を鋭利にしたものであつたかも知れない。感じやすい心は、

いかに屢々傷つけられて感じ、非常な痛苦を受けなければならない事であらう。そして、そんな時、正直な彼は、その感情を隱すところなく發露せしめた。

彼は最も正直な卒直な人間の一人である。そしてそれが彼を誤解させ、彼を憎ませたのだ。

こゝに彼の言葉がある。

「蔽ひものは魂から落ちる、そしておんみはその魂を、その美しい裸形に於て見ることを得る。そこには何のしみもない、ただ傷がある。あゝ！　ただ傷がある、敵の手ではなくして、友の手の與へた傷がある！

夜は何の物音もない。たゞ戸外には、雨が屋根を叩き、秋風が悲しげに嗚咽してゐる……」

彼は畢竟人間であつた、そして抒情詩人であつた。ルッソオを赤裸の人といふ意味に於いて彼もまた赤裸の人であつた。そして、私はそのゆゑに、とりわけハイネを愛し、ハイネをなつかしく思ふ。（大正十一年五月）

エーワルトの言葉

ケエベル博士が屢々言及せられた『浪漫主義の問題』の著者オスカアル・エーワルトは、獨逸の哲學者の間に、どれ位の地位の人か私は知らない。多分、ニイチエなどと同じく、「專門的な」哲學者仲間では、哲學者の名を許されてゐない人であらうと思ふ。けれども、それは私がエーワルトに傾倒する障害とはならない。

私はエーワルトの著書は、『生の哲學の序曲』と註する『根柢と奈落』と、『浪漫主義の問題』との二著しか知らない。彼にはまだニイチエやカントやアヱナリウスに關する著作もあるが、それはまだ見てゐない。『根柢と奈落』こそ、彼の代表作で、彼の哲學思想を全面的に開展させたものであらう、そしてこれは私の內面生活に一つの光明を投じてく

れた著書である。

エーワルトについては、他日少しく詳しく書いて見たいと思つてゐるが、ここには彼のアフォリズムの中から、二三を抜書きして見る。

慰藉としての哲學

我々に慰藉を與へることの出來る哲學は美しいものである。けれども、若しそれが我々に慰藉を斷念せしめるならば、なほ一層高いものである。

人間の意志

人間の意志は彼の天國である。ただ、殘念ながら、それは屢々隣人の地獄である。

何人にも敵たりえぬもの

何人にも公正に敵たりえぬものは、その最奥に於て腐敗せる性格を示してゐる。

人生智

あらゆる人生智は、究極に於いては、價値ある死を遂げるといふ事に外ならない。

懷疑論

懷疑論は最も深遠な人間の、同時に最も淺薄な人間の世界觀である。

悲劇的と殉情的と

悲劇的人間は自分の弱點を呪咀する、殉情的人間はそれを享樂する。

眞理

眞理は決して中間には存しない。

一人の女性を經驗すると、一人の女性を所有するのとは別箇の事に屬す。あらゆるエロチックの悲劇の最後の原因は、男子がこの二つを一にしようとするところから生ずる。

地　平　線

地平線を眺めたとき、人間の心中には、はじめて彼の不死の意識がめざめた。

氷　結

歲月は涙を乾かすと一般に信じられてゐる。時としてはさうもあらう。けれども、歲月は涙を氷結させる方が普通である。

戀愛と友情

戀愛は他人の中に彼自身を享受することである。友情は自分の中に他人を享受することである。

探求者の悲劇

他のものを求めるものは、常に自分自身を見出す。そして、自分自身を求めるものは、常に——他のものを見出す。

人　形

最大の俳優は、最も空虛な人間である。彼の中には、あらゆるものの座席がある。

過去の殉難者

彼の過去を生かすために、既に多くのものは、その未來を犧牲に供した。

忘恩と謝恩と

忘恩は恩惠者に對する復讐である。謝恩は自分自身に對する復讐である。

孤獨の憧憬

最も深く孤獨に憧憬する人間は、最も孤獨に堪へ得ないものである。

至上命令

汝の孤獨に値するものであれ！　これあらゆる道德の第一の、最高の命令である。

自己觀察者

人間が屢々鏡を見るのは、虛榮心からであらうか、眞を知らうとする心からであらうか？　自己觀察の心理の好資料である。

尊重すべきもの

人がその隣人に於て尊重すべき最初の、そして唯一のものは、彼の沈默である。

自殺と狂氣

狂者と自殺者とは、完全に單純な人間か、或ひは極端に複雜な人間である。狂者はある事實、ある內部の又は外部の事實によつて、すつかり心を充たされて、そのために精神的、肉體的に滅亡するであらう。彼等の魂の重力は、各方面に分たれるのである。自殺者に於ては、あまりに多くの矛盾があつて、そのため必然的に、彼はその人格の容器を打ち碎かざるを得ざるに至る。

自殺への成熟

最早や自分自身について、三人稱に於て考へることの出來ない者は、自殺すべく熟したものである。

ヂレンマ

自殺は、死刑の宣告の許されてゐるが如く許されてゐる。また、殺人が禁ぜられてゐるが如く禁じられてゐる。

批評の系譜學

人生の劇場に於て、行動にまで召命を受けてゐることを感じながら、しかも觀照にまで宣告されてゐるものは、人生に對して批評家になる。

男子の愛と女子の愛

男子は女子を直接的に愛するのに對して、女子はまづ男子自身を愛しないで、女子に對する男子の愛そのものを愛する。

女性の魂

女性の魂は、屢々、男子の魂の傳導體を通つて來たその肉體より外の何物でもない。

男子の忘恩

女性に對する男子の忘恩は、感覺的陶醉の後に於けるその冷却である。

單數と複數

男子は常に「婦人」について語る、女性は常に「男たち」について語る。この事は、男子が結婚に傾くに對して、女子が賣笑に傾く事の論證であるやうに見える。

未來

未來は、男子にとつては、繼續である、女子にとつては、過去の否定である。

客觀と主觀と

男子と女子との間の最も深い差違は、おそらく男子が經驗を有するに對して、經驗が女子を有するところにあらう。

兩性の復讐

男子は女子に復讐するに、享樂若くは殺害を以てする。女子は男子に復讐するに、忘却を以てする。男子は女子にその實在性を奪ふ事によつて復讐する。女子は男子の實在性を奪ひ得ないが、彼女に對する彼の實在性があらゆる意味を失ふ事によつて、それを彼より遠ざける。彼女が彼を殺す事によつて、彼に打克つことは最も稀れである。反對に殺害の瞬間に於て、はじめて、ヘツベルのユウデイツトはホロフエルネスに、クライストのペンテジレアはアヒレスに、抗ひがたく身を委ねたのである。（大正十三年一月）

ノヴリスの言葉

詩は悟性の與へし傷を癒やす。

詩人は科學的の頭腦よりも自然をよりよく理解する。

眞正の詩人は凡てを知る。彼は小さな眞の世界である。

詩は眞正の絕對の實在である。これこそは私の哲學の眞髓である。詩的であればあるほど、より眞實である。

詩は哲學の主人公である。哲學は詩を擧げて原理とする。哲學は我々に詩の價値を敎へる。哲學は詩の理論である。

哲學は詩が何であるかを我々に示す。詩が一であり全であることを我々に示す。

詩人と思想家との區別は、たゞ外觀のみに過ぎず、また兩者の不利益を來すものに過ぎない。それは病氣であり病氣の徵候である。

詩作は我々の機能の放恣な、活動的、生產的な行使に過ぎない——多分思索そのものもそれ以外の何物でもないであらう——それゆゑ思索と詩作とは同一である。思索に於ては五官がその豐富な印象を印象の新しい樣式に應用する——そしてこの中から發生するものを我々は思想と呼ぶ。

何故にあらゆるものがつひに詩となるかは極めて明白である。世界はつひに心情となるではないか。

各の言葉は呪文の言葉である。いかなる靈を呼ばうとも——その靈は現はれる。

我々が贖罪の信仰と呼ぶものは、我々の生涯の運命の中に在る或る完全な詩的の智慧に對する信頼以外の何物でもない。

一切の方式はリズムである。世界のリズムを除去したならば、世界をもまた除去したのである。各の人は彼自身のリズムを有つ。詩は一切のものを與へる。リズムの感覺が天禀である。

我々は目に見えるものよりは、目に見えないものに、より密接に結合されてゐる。

生は我々に與へられたのではなくして、我々から作られた小説（ロオマン）でなければならない。

人は苦痛を以て誇りとすべきである――各（おのおの）の苦痛は我々のより高い位階の記憶である。

ただ藝術家のみが人生の意義を感得する。

人は自ら藝術家であり、藝術家となるだけ、それだけ藝術家を理解する、そしてまた自分自身を理解する。

藝術家は丁度彫像が臺座の上に立つやうに人間の上に立つ。

神は神々たらんことを欲する。

我々は一體何處へ行つたらいいのか？

常に家路へ。

人間のあひだに人は神を求めなければならない。人間の事件の中に、人間の思想、感情の中に、天意は最も明らかに啓示される。

子供のあるところには黃金時代がある。

哲學は本來鄕愁である、到るところで家居にあらうとする衝動である。

我々の智力と我々の世界とが調和するならば、我々は神と等しい。

生は死の初めである。生は死のためにある。死は同時に終りであり、初めである。

我々が、我々の夢みつつあることを夢みるならば、我々は覺醒に近づいたのである。

人間となる事は一つの術である。

精神に取つて、無限よりも、より到達せられ得べき何ものもない。

人は未來の生活によつて過去の生活を救ひ且つ高めることが出來る。

この世には、たゞ一つの殿堂しかない、そしてそれは人間の肉體である。この高い姿よりも神聖なものはない。人間の前に身を屈するのは、肉に於ける、この啓示に禮を致すのである。人間の身體に觸れるのは、天に觸れるのである。（大正十年十一月譯）

女性と戀愛と結婚と

×

衣裳が女に與へられるのは、その缺點を蔽はんがためである。（シヤンフオオル）

×

美人は眼の天國、心の地獄。財布の煉獄。（フオントネル）

×

女は何にでも適してゐる、善いことにさへも。（デユウマ）

×

犬の跛と女の淚とがあてになるものか。（西班牙俚諺）

×

婦人は子供がナイフを弄ぶやうに、自分の美貌を弄ぶ、いづれもしまひにはそれで自ら傷つけるのだ。（ユウゴオ）

美しく忠實な女は完全な譯詩のやうに稀れである。譯詩は普通、忠實であれば美しくなく、美しければ忠實でないものだ。（ザフイール）

×

私が女である事の慰めになるのは、せめて女と一緒にならないですむと云ふ事である。（モンテエギユ夫人）

×

女は志操堅固だと思はれることを好む、けれども本當にさうだと信じてゐるやうな扱ひをされることを好まない。（ニノン・ド・ランクロ）

×

すべての女に迷ふのは、たつた一人の女に迷ふほど危險ではない。（モンマラン夫人）

×

幸福であることなしに愛することは出來る、愛する事なしに幸福である事は出來る、が、愛してゐて同時に幸福である事は奇蹟だ。（バルザツク）

×

貧と戀とは隱されぬ。（丁抹俚諺）

×

戀愛は宛かも流行病のやうなものである。これを怖るゝ事愈々多くして、感染の虞れ愈々多し。（シヤンフオオル）

×

貧乏人の手の金と、戀するものの心の忍耐と、笊の中の水とはすぐになくなつてしまふ。（波斯俚諺）

×

虚僞の愛は眞實の愛よりも立派なやうに見える、そこから多くの女は欺かれるのだ。（バルザック）

×

戀愛は心のメイディである。（デイスレリイ）

×

結婚が戀愛に伴ふのは、煙が火焔に伴ふやうなものだ。（シヤンフオオル）

×

戀は瓶の中に殘つた酒のやうなもの、晩には沸騰してゐても、朝になると氣が抜けて了ふ。（伊太利俚諺）

×

戀人同士が一緒にゐて、決して退屈しないのは、兩方共、始終自分の事ばかり話してゐるからだ。（ラ・ロシフコオ）

×

結婚するには戰爭に出るよりも勇氣が要る。（瑞典女皇クリステイネ）

×

結婚は訴訟のやうなものだ、一方はいつも不滿である。（バルザック）

×

結婚は包圍された市街に似てゐる、中にゐるものは出たがるし、外にゐるものは入りたがる。（亞拉比亞俚諺）

×

女は結婚によつて自由になる、男はそれによつて自由を失ふ。（カント）

×

戀愛の結婚よりも多くの愉快を與へるのは、小說が歷史よりも一層興味のあるのと同一の理由に基づく。（シャンフオオル）

×

少女の接吻に於て一番いい事は、その際彼女が默つてゐなければならぬといふ事だ。（ユリアン・ワイス）

×

戀は善い事より惡い事の方が多い。若し神が人間をそれから自由にするならば、それは慈悲といふものである。（ナポレオン）

×

男子は戀すると嫉妬深くなるが、婦人は愛してゐないでも嫉妬深い。（カント）

×

戀愛は虛榮である、そして利己心がその始めであり終りである。（バイロン）

×

戀は女の生涯である、が、男の生涯では一の挿話（エピソード）にすぎない。（ジャン・パウル）

×

沐浴（ゆあみ）と酒と戀とはからだをこわす、
だが生活をつくるものは沐浴と酒と女ばかり。（ホラテイウス）

×

戀が家に入つてくると、智慧が出て行く。（ロガウ）

×

アモオルは大きな子供、女はその人形。（ラ・ヴイ・パリジアンヌ）

×

婦人が闇の中でも赧くなるかどうかといふ疑問は、甚だ困難な問題である。少くとも、明るみでは解決のつかない問題である。（リヒテンベルグ）

×

若しも二人の人間が、同時に愛しはじめるならば、非常な幸福である。けれども、同時に愛することをやめるならば、更に大いなる幸福である。（エブネル・エッシエンバッハ）

×

眞の戀愛は幽靈のやうなものである。誰れでもその事を話してゐるが、それを見たものはあまりない。（ラ・ロシフコオ）

×

婦人の終るところから惡い男子が始まる。（ハイネ）

×

Madam de W. は結婚を戀の癈兵院と呼んだ。（ラ・ヴイ・パリジアンヌ）

×

「けれども」の一つもないやうな結婚が何處にあるだらう？（バルザック）

×

婚禮の音樂は、私にはいつも戰爭に出て行く兵隊の樂隊を想起させる。（ハイネ）

×

結婚はその義務を二倍にし、その權利を半減することをいふ。（ショオペンハウエル）

×

愛は死に打克つ、けれども、一寸した悪い習慣が愛に打克つやうに思はれる。（エブネル・エッシエンバッハ）

×

結婚する人間は、アドリアの海と結婚するヹニスの大統領のやうなものである――彼はそのなかに寶か、眞珠か、未知の嵐か、何がその中に在るか、何と結婚するのかを知らない。（ハイネ）

×

いかに屡々戀愛は、樂欲をもつて味つけられた自愛心に外ならなかつた事であらう！（マンテガッツア）

×

みせかけの美しい樣式がある。自己克服である、――そして、エゴイズムの美しい樣式は戀である。（エブネル・エッシエンバッハ）

×

クザンテイッペの良人が大なる哲學者であつた事は不思議である。あらゆる口論の間に、なほ思索するとは！けれども、彼は書くことは出來なかつた、それは不可能であつた。ソクラテスは一册の書物をも遺さなかつた。（ハイネ）

（大正十一年十月譯）

後　語

「眞實に生きる惱み」を公刊してから、既に一年あまりたつた。その一年の間には、あの忘れることのできない大震大火の災厄があつた。しかも、その異常な體驗を經て、自分はいくばく道をすゝめえたであらうか。心細い次第である。ただ自分が鈍根ながらに、一人前の人間にならうとする誠實な努力のあとだけは、見出していただけるであらうと思ふ。

自分が筆をとるのは、もとより人に何物かを與へよう爲めではない。他に與へるべく私はあまりに貧しい。私は先哲の門前に彳んで施しを乞ふ貧人にすぎないのである。私はまづ、自ら激勵し、自ら闡明し、又、自ら道をひらかんがために筆をとる。卽ち、自己敎養のためである。

ショオペンハウエルは、輕快な步行は杖を要せず、完全な思索は、筆なくして進むと言つた。筆なくしては、最も平凡な思想をすら、終結まで考へ得られぬ自分は、杖なくしては步けぬ人よりも更にあはれである。私にとるべきは、幾分か心情にあるかとおもふ、所詮、詩人たるにすぎない自分である。今なほ思索せずしてただ感想するのみにとどまるならば、それは悲哀でなければならない。

然し、それもまた私は甘んずる。そして、ただ、不斷の硏鑽を積み、絕えざる自己修養の道を踏む。かくて、いつかは denken に堪へ得るに至るであらう。それよりも、まづ、境界のすすむことによつて、私の精進は酬いられなければならぬ。書くことは、そのより高い心境に到達するための方便であると共に、書かれたものは、その心境のおのづからなる反映である。日日是好日の心をもつてすすまなければならぬ。

昨年末、某誌から、この大正十三年に於ける希望と計畫とについて問はれたとき、私は、「いろいろの希望もあ

り、計畫も舉げて擧げられぬ事もないが、明日の事の恃みがたい世には、そんな事について語るよりも、今日のこの現在を有難い事に思ふ方が意味があるやうな氣がする。雲門の日日是好日、ただそれだけが自分の願ひだ」といふ意味の答をした。

あの大震災の後は、殊にこの現在かく生きてゐるといふ事實が尊く思はれて來た、と同時に、死が常に附近にある事の意識がますます心を壓する。何かの信念をつかんで、安心立命の地を得たい、死にのぞんで安んじて、"Es ist gut." と言ひ得られなければならない。不幸と死との日もまた、日日是好日であり得る境界にまで達しなければならない。

雲門大師の垂語は、もとよりその深義は別に存するであらうが、生得の根強いペシミズムを全く克服して、温和な生の肯定者とならうと欲する自分にとつては、日日是好日、此の警策が一道の光明のやうに閃めいた。この中に、自分は高い智慧を見出さずにはゐられなかつた。

眞實を求めるものは、まづ、智慧をみがかなければならない。眞實と虚僞とは、からみ合つてゐる、それをとき分けるものは、明らかな智慧である。私が聖賢に行乞し、その恩惠に浴せんとするものは、ただその智慧の光に浴して、自分の裏の一點の智慧の微光をてらし出されんがためである。

昨年中に書いたもののうち、一半は故あつて本書中に收め得なかつたが、その重要なものは概ねこの中にある。そのうち(旅信)は、本來公表するために書いたものではないが、その不用意の中に、かへつて多少の興趣はあらうかとおもふ。(講演)は今度印刷するにあたつて、不十分ながら多少の補正をした。『沈默と表白』から『寂しきもの』までの四篇は、前著の卷末に收めた諸篇と同時に公表したもので、最も古く、『靜かな部屋』『初冬數日』『反省の門題の』三つも、前著の中頃に置いて讀まるべきものである。これ等はその言端に現れた心境によつて、

略ぼ年代の推測は出來ようとは思つたが、今度は執筆の年月を一々附記しておくことにした。終りの『ゲエテの旅』以下數篇は、主として、私自身の編輯してゐる雜誌の讀者のために、折々紹介したものから選んで、補正したものである。（大正十三年三月）

草上靜思

銀河の下

×

旅に出ると、星を眺める機會が多い。家にゐると心がいろいろな些事にささへられて、ともすると、空を仰ぐことを忘れる、ふと思ひ出して、窓から見上げても、市中の住居では、大抵、その空は極めて狹く限られてゐる。

星を見るのに一番いいのは、山の上であらう。日本アルプスのやうな高山には、まだ登つた事がないので、その山巓の星空の壯觀は、これをただ想像するのみであるが、いつか榛名の山登りをしての歸るさに、山中でとつぷり日が暮れて、なにか心細くなつた折りから、ふと仰いで空の星を見た時は、何とも云へぬなつかしさが、心一杯に湧き上つた。

孤獨者にとつては、花よりも、鳥よりも、星が一番深く心に沁みる。それはただやさしく慰めてくれるばかりでなく、或る天的な美と崇高とをもつて、宇宙の神祕を默示するからである。星は天の花であるとともに、また天の鳥でもある。星は飛びもするが、その飛ばないものも歌ふことを知る。昔は鳥の言葉を解した賢人があつたが、星の言葉を聽き取ることの出來る人は、既に立派な詩人でなければならぬ。そして彼の詩は、彼自身の頭からしぼり出された時よりも、星の言葉をただその儘に書き取つた時、一層光り輝くであらう。

孤獨者と星とは、深い血緣で繋がれてゐる。されば「孤獨を欲するものは星を見よ」とエマスンも云つてゐる。

孤獨の子なる詩人は、おもふにまた地上の星と仰がるべき人であらう。彼がまことにすぐれた。眞心の詩人であるかぎりは。そして、ヴェルハアレンが「世界は人と星とよりなる」と歌つた時、彼は世界が詩人と詩人ならぬ人とより

なる事を考へてはゐなかつたであらうか？

然し今、詩人に與へられる孤獨の道に——それはまことに寂しい、然し、惠まれた道であるが——進まうとする人のために、孤獨のより深い意味を說く事も無用ではあるまい。して、そのより深い意味の孤獨といふのは、普通解せられるやうに、單に唯一人でゐるといふ外面的の狀態を云ふのではなくして、內面的に深く生きようとする一つの意志、一つの行爲を云ふのである。世俗の喧囂から心を遠く引き離して、自己の內部に生きることの謂ひである。卽ち、それは靜觀、觀心の境を云ふのに外ならぬ。

かやうに解するとき、孤獨は一つの行であるとともに、また法悅でもある。詩と宗教とは、そこで相一致する。この境地に至つては、既に俗人のうかがひえぬところ。たとひどんなに山中深く籠つて、人間から遠ざかつてゐたところで、世俗の事が始終氣にかかつて、心がそれに囚はれてゐたのでは、孤獨も眞の孤獨ではない。これに反して、心が塵埃を絕し、人間の羈絆を脫しえたならば、十字街頭車馬往來の中にあつても、なほかつ孤獨の法悅に浸りうるであらう。エマスンが星を見よと云つたのも、思ふにその意（こころ）ではあるまいか？

まことに、星を見ると、心が淨化されるやうな氣がする。月夜は人を詩人にする。月の光は心を、哀しく彩りもし、樂しく漂はせもする。なほ人間的な、親しい情感の世界である。然し星月夜の、空一杯に蒔き散らされた星屑は、心を地上の制限を越えて、或る不可知（アンナウン）の世界にまで高めてくれる。それはより多くと云はれなくとも、より深く人を詩人にする。何となれば、そこにはもはや地上の詩はなくて、天上の詩が輝くからである。無數の星が天空に描き出したものは、これぞ壯大幽玄な一つの象徵詩ではあるまいか？

×

夏のあひだ、德島に行つてゐた時は、山の傾斜に南面してゐる家の表の緣から、每夜、廣い一杯の天を眺めるのが、

私はたのしみであつた。こんなに廣い、こんなに限られる事のない天空に、こんな澤山の數知れぬ星の饗宴――それはまるではじめて星空を見得たやうな驚異であつた。

夏の空はかくべつ星が美しい。殊にその時分は、空はいつもよく晴れて、塵ひとすぢの影すらも隱れえないやうな透明さで、そして、その南國の天を横ぎつて、幅廣く銀河の流れてゐる壯觀を、いかに私はしみじみと眺め入つた事であらう。銀河はむかうの山脈の上からこちらの山脈の上へと、まるで斜めに降り注ぐかのやうに、眼に近く、白く、光と云ふより匂ひのやうに、匂ひが白々と湧き溢れるやうに、小さな一人の人間の上に、そのすべての詩と啓示とを投げかけるやうなので、見てゐてまるで心が消えて行くやうな思ひである。

星もただ一つ二つ離れて、光つてゐるのを見ると、月とおなじやうに、幽かにしめやかな情感に沈ませるが、かくも星のきらめきは、ただ全き驚きであり、不可說のエクスタシイにまで、かのより深い孤獨の意にまで、心は高められて行く。一つ二つの星は、あだかも異性のなつかしい瞳のやうにも思はれる。輝く瞳、微笑む瞳、ほんのりと涙ぐましい瞳、それらのなつかしい瞳は、都の中に今は何處を向いてゐるか？　たとひそんな事を心に思ひ浮べる事はあつても、この澤山の星を見て、その星を地上の一人一人になぞらへて沈默の會話を交さうと、私は思つたであらうか？いや。私は星を見ながら、殆んど心に何も思はなかつた。心はすでに地上になく、しかも私はまだ、星の言葉を聽き得られるほどの、少くともそれを美しい地上の言葉に捉へ得るほどの詩人ではなかつたのであらう。

ただ、一度、こんな事を思つたのを憶えてゐる――つい此間發つて來たばかりの東京は、遙か何百里の彼方に沒し去つたのに、天上の星はかくも目の前にあつて、かうしてぢつと眺め入る事が出來るのは、思へば不思議な事であると。そして、かの『於母影』のモツトオに引かれた東坡の「岷峨は天の一方にあれど、雲月は我が側に在り」といふ詩の意も、またそのおなじ情感であらうかと。

私は時として、無窮の問題を考へる。すべての有限を超え、時空を超えて永遠無限の世界を考へる。そしておもふに我々が星を仰ぐのは、即ち、無窮を仰ぐのである。永遠を思慕するのである。そこに象徴せられる永遠無限の世界が、地上の生滅の子のあこがれを誘ひやまぬ。人間の生命は、地上にかたく結びつけられてゐる。時間と空間との制限の中にきびしく縛められてゐる。翼はない。光波はない。しかも、この制限を超えんとする人間の運命は、おのづから明らかであらう。この事をおもふ時、私の心は痛む。そして、アウグスト・フォン・プラアテンが「トリスタン」の憂鬱な愁訴をおもひだす。

美はしきもの見し人は
はや死の手にぞわたされつ、
世のいそしみにかなはねば。
されど死を見てふるふべし、
美はしきもの見し人は。

愛の痛みははてもなし、
この世におもひをかなへんと
望むはひとり痴者ぞかし
美の矢にあたりしその人に
愛の痛みははてもなし。

ザイスの女神の面紗をかかげるを敢てしたものは死ぬ。眞美の極致は、人間の眼には永遠に隱されてゐる。あまりに高きを望んで、足、地をはなれ、觀念の海に溺れて、世のいそしみに役立たぬ無用の人間になるよりも、しつかり大地を足の下に踏みつけて、その日その日に充實したる人間になるがいいと、智者は敎へる。そして、星を眺めるのはよい、いつも星ばかり眺めてゐるのは危險な誘惑であると、いましめてくれる。それはまことにその通りである。然し、いつも地上ばかり見つめて、かつて空を仰ぐ事のない心は、いかに貧しく、狹い事であらうぞ。

秋が訪れてくる。そして、秋になると、天の河は天の眞中に來る。夏のころには、南北に流れてゐたのがいつか東西に橫はつてゐる。銀河も河床を變へるのである。そして今、その壯大な銀河は、屋根を隔てて、眼には見えなくとも私の頭上に橫はつてゐるのである。いや、それは私の衷にも橫はつてゐるかも知れない。心の中の無數の星――それはジョルダノ・ブルウノオが原子として見出したもの、卽ち、人間の主觀に外ならぬのであると、哲學者は說くのである。（大正十五年九月）

旅の心

「いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、めさむる心ちすれ」と徒然草の著者も云つてゐる。

平穩無事な日常生活の單調を破るために、人間はいろいろな試みをする。そのために、世上にはいろいろの遊び場があり、いろいの遊戲がある。どんな遊びをしようとも、それはその人の勝手であるが、それらの中には隨分後味のわるいものもあるやうだ。旅行にはまづ絕對に此事がないと云つていい。旅行をゑらぶ人こそ、私たちの好き同志で

ある。

「君たちはなぜそんなに旅をするのだね？」

から問はれても、私は旅が好きだからとしか答へる事は出來ない。それほど私たちの旅は自己目的である。旅行家にとつては、旅それ自身が目的なので、他に功利的目的があるわけではない。けれども、旅の與へる自然的な利益は決して尠少ではない。

旅はまづ、自分の生活の反省に資する。自分の家にゐたのでは、はつきり看取するを得なかつた事、自分の現在の狀態や、周圍の事情について、客觀的な理解を得る事が出來る。一身の變動の場合などに、その方針を考へるために人が旅に出るのは理由のあることである。次ぎに、爽かな自然に接し、珍らしい人情風俗に接して、疲れた心身を慰め、また、新しい知識と經驗とを積む事が出來る。更に、人生に處するに當つてのいろいろな敎訓を學ぶ事も出來る。旅行の意味は、或る點で、讀書の意味に似てゐるが、讀書法が處世法に適用せられる如く、旅行法もまた一種の處世法である。

文化頃に刊行された本で、『旅行用心集』といふのがある。旅についてのいろいろな注意をもれなく書いた頗る有益な本であるが、あの中で敎へられてゐる事は、その題名通り、用心の一語に歸する。何事にも用心が第一、これが人生に於いても適用される。人生もまたより大きな旅に外ならぬ。

柳澤淇園は淀の川舟の窮屈をおもへば、世の中に不平はないと云つてゐる。これも達觀である。今では交通の機關もととのつて、昔のやうな苦しみは味はなくともすむやうになつたが、それでも旅先では、隨分不如意な目にあつたり、思はぬ心配をしたりする。それだけにまた旅は樂しくもあるのだ。

完全な字引が出來て、學生の語學力は著しく低下した。それとおなじ意味で、交通の便は、旅行を氣樂なものとす

ると共に、その快感と利益とを稀薄ならしめた。昔の人が毎日々々歩いて、隨分詳しく丁寧に見て行つた景色や風俗やを、今では汽車は一瞬にうつり變る幻燈にしてしまひ、或る意味で、殆んど道中抜きにしてしまふ。とは云へ、我々は汽車、汽船、電車、自動車に感謝しなければならない。それらがなかつたら、我々は一生どれほど多くの土地を見ないで過してしまふ事だらう。ただ然し、あのケエブルカアだけは、一寸困ると思ふ事もある。強羅、筑波、朝熊山位ならまだよろしい、今に富士山にまでケエブルカアが出來たらどうであらう。しかも、山梨縣ではもう出願者があつて風致を害するといふ理由で却下されたとか聞いた。

商用ならばとにかく、普通の旅行は生產ではなくして消費である。その意味で藝術に似てゐる。然しこの消費は單なる消費ではない。旅を單なる氣散じにすぎぬと思ふのは、藝術を娯樂にすぎぬと思ふやうなもの、いづれもそれ以上、敎訓を與へ生活開展に資するのだ。昔の人は旅を行とさへした。西行の如きはさうである。これが眞の旅行といふもの。まづ、こんな心持が多少でもあれば「旅の恥はかきすて」といふあの厭な、無責任な諺の惡趣味からは脱しられよう。「旅行は愚者の樂園である」と云つたエマスンの語は、かかる不心得者への痛棒としてのみ意味がある。

旅日記をつける習慣はいい習慣である。それは後日の思出草ともなり、また、自分の行動の監視ともなるであらう。もつともなかなかつけにくいもので、我々文學者は反て普通の人よりもそれを難しとする。執筆が既にその務めとなつてゐるからである。恥かしい事であるが。

旅はそのをりもいいが、後になつて囘想する時が一層たのしい。殊に、おなじ旅行好きの友達同志が相寄つて、曾遊の思出を語り合ふのは、たのしみなものである。一度遊んだ事のある土地の名は、いつまでも親しくなつかしく心に殘る。

旅愁といふものもいいものだ。寂しく、味氣ないが、それがまた不思議にいい。これはひとり旅でなければ味はへ

ぬ。連れがあると、愉快で、退屈する事もないけれど、旅の意味が幾分薄れる。また十分自然に親しむ機會を失ひやすい。

旅先から繪葉書を貰ふのは嬉しいものだ。羨ましいナとは思つても、腹を立てる人はあるまい。ふだんは仕事が忙しかつたりして、心ならずも無沙汰してゐる知友に、旅先からたよりするのもいいものだ。

要するに、旅の眞味は、自分で旅をしてみなければ分らないのだと思ふ。（大正十五年九月）

秋燈讀書感

――最善の讀書法について――

×

燈火親しむべしといふ古い言葉があるが、秋になると、讀書欲が旺盛になる。だんだん蟲の音が繁くなつて、まぎれ込む夜風もやや肌寒く覺えるころ、人の寢しづまつた時分に、ひとり燈を挑げて、愛讀の書に讀み耽るたのしみは、またなくなつかしいもので、これはひとり讀書家にのみ許された清福であらうと思ふ。

いつも座右に、讀みたいと思ふ新しい本の二三册も置かれてある人は幸福であるが、長い間讀みたいと思つてゐた本をやつと手に入れて、その第一頁をくりひろげてみた時の、貧しい讀書家の幸福には比ぶべくもないであらう。また、これこそ自分の心の糧だと思ふ本に讀みかかるのも樂しいが、さまで期待してゐなかつた書物が思ひの外有益で、愛讀に値するのを見出した時も嬉しいものである。

讀書子にもまた讀書子の喜びと苦しみとがある。それらをこまごまと書いてみたいといふ氣もするが、今はそれよりも、一般的な讀書の方法について、最も有益な最も正しい道を考へてみたい。それにはまづ自分の愚な失敗のあとを辿つてみなければならぬ。そして、それが自省の資たるにとどまらず、また、他山の石ともならば幸ひである。

×

誰であつたか、自分は書物を讀まないで、直接人生を讀むと云つた人がある。立派な言葉である。元來、人が生きるといふ事は、卽ち、人生を讀むのである。その意味で、どんな人でも人生を讀んでゐるに違ひない。けれども、おなじ人生を讀むのでも、要はその讀み方にある。ここでも問題は、ホワットにはなくしてハウにある。そのハウがむづかしい。私達は分つたつもりでゐても、實は本當の意味が分らないで、ただ、人生といふ書物の文字の上だけを逐つてゐるのではあるまいか。

人生といふものは、考へれば考へる程、むづかしくなり、分らなくなつてくる。人生問題についての私のいろいろの疑問は、殆んど大半、まだ解決の端緒さへついてゐない有様である。おもふに、私は人生を讀みあやまつたかも知れない。また現に、讀みあやまりつつあるかも知れない。人生社會のある問題の論議に際して、私はいつも決定的な斷定の後に、すぐそれを後悔する事が多い。

書物を讀むのも、また、人生を讀むのに劣らない困難である。書物を讀むのも、單に書物それ自身を讀むのではなく、やはり、書物を通して人生を讀むのに外ならぬ。若し、人生を讀み得ないならば、その讀書は非常な失敗と云はねばならぬであらう。

×

私は多少書物を讀む人間だといふ評判を得てゐる。中には、その評判に反して、この讀書子の案外無學なのに驚い

てゐる人もあるかも知れない。實際、私は事物の基本的知識を缺くために、多大の損失をしてゐるばかりでなく、また、そのあやまつた讀書法のために、確實な知識を獲得する事が出來なかつた。とにかく相當書物を讀んで來たわりに、眞に私の身になつたものとては、云ふに足りないのである。

それは一に系統のない讀書法の罪であつた。私は長い間、殆んど習慣的に、何か書物を手にせずにゐられなくて、手にしてゐた。また、一時的の興味に驅られて、ある題目、ある問題についての文獻を讀み漁るといふやうな事もした。が、それは雜駁な知識たるに止まつて、未だ統一されるに至らない。あまりに興味が多方面に走りすぎて、範圍ばかりがむやみに廣くなつて、とりとめのないものになつた。今から顧ると、恐ろしい時間の空費であつたといふ氣もする。勿論、全然得るところがなかつたわけではないが、大體に於いて、極く最近までの讀書子としての私は、一つの見事な失敗であつたらう。

まづ、私の失敗の原因は、その移り氣と、一種の精神的の貪慾とに發してゐる。それが直ちに不秩序へと導いたのである。

私は長いこと、何かもつと面白いもの、眞實なもの、心を魅するものはないかといふ、探險者の好奇心と期待とをもつて、次ぎから次ぎへと、新しい世界、未知の世界を求めては、いろいろな書物を漁り歩いた。今讀んでゐる本よりも、次ぎに讀むべき本の方が、いつもより價値があつた。謂はば私は讀書上のドン・ファンであつたのだ。ドン・ファンが絶えず理想の女性を求めて、女性から女性へと轉々して行くやうに、私は書物から書物へと走つたのだ。しかもあまりに早く……

その際、ドン・ファンの方が遥かに私に勝つてゐる。彼は意識的に必ずしも出來るだけ多くの女性を知らうと願つたのではなからうが、私には出來るだけ多くの本を讀まうといふ貪慾があつた。そして、餘りに多くを求めるものは、

一事をも得ない場合が屢々ある。また、彼の求めるものは、直ちに理想の女性、久遠女性の面影であつたが、私の求めるものは、屢々理想的の書物ではなかつたからである。最良の書物はもう知れ切つてゐる。それ以外に何を求めよう。然るに、いたづらに珍奇を求めるのは、所謂「いかものぐひ」といふもので、またかのディレッタンティズムの骨董趣味に墮する危險性ではないか。もつとも、私の求めたものも、結局は、また自分の氣質に最もふさはしい最良書に外ならなかつたのではあるが。

その外にも私には、ある書物を讀んでゐるうち、その中に出てくるある事項について興味をもち、それに關する他の本を取出して讀むといふやうな癖もあつた。これはルソオも『懺悔錄』の中で、同樣の經驗を語つた後に云つてゐたやうに、いたづらに頭腦を昏迷せしめるに過ぎない事である。そして、そのルソオの言も私は讀んだ筈なのである。それからまだもう一つ、これはもつと恥かしい惡い慣習だが、一番讀みたいと思ふもの、一番深く期待してゐる書物を、むざむざと讀むのが惜しくつて、一番あとまはしにしようとする癖もあつた。丁度子供が一番うまい菓子を一番後に殘して食べるやうに。

そして、これらの賢い讀書家の心して避くべき失錯として、私は敢て語つたのである。

×

その食べるものがその人間であると、或る佛蘭西人は云つたが、私はその讀むものがその人であると云ひたい。その好んで讀む書物によつて、そのいかなる人間であるかが、はつきり知れるやうに思ふ。習ひは性になるとやら、いかに不注意に讀むとしても、ある傾向の本ばかり讀んでゐると、必ずそれに化せられる。後にそれを捨てたとしても、ある一時期を沒頭した趣味なり傾向なりは、人が一時身を置いてゐたある社會の氣分のやうに、そこから去つた後まで殘る。それを思へば、一册の本でも輕々には手に取れなくなる。

その上、人間が一生の間に讀み得られる書物の數といふものは、實に知れたものである。五十年の生涯の全部を讀書に捧げたところで、何ほどの本が讀み得られるものでもない。しかも、さうしたただ讀むのみの生活といふものは、結局、生活ではなくなるであらう。いつか何かで讀んだものの中に、さうした一生本ばかり讀んで暮した巴里人の事が出てゐたが、何でも彼は起きるとから寢るまで、食事しながらまで讀んでゐるといふ風なので、大掃除の時に、警官は彼を强制的に戶外に追出さねばならなかつたといふ。そして一體彼が何のためにそんなに本を讀むのかは、誰も知られなかつたが、或る日、彼はセエヌ河に溺れて死んでしまつたので、その祕密も彼と一緖に葬られたといふ事である。然し、いかに書物が好きで、書物なしに幾日をもすごす事が苦痛な人でも、かういふ工合に、一生本ばかり讀んでゐろと命ぜられたら、恐らく終身服役同樣の苦痛を感ずるに違ひない。私達が書物を讀むのは、その著者のために讀むのではなく、自分自身のために讀むのであると共に、讀書に生命を捧げるためでなく、よりよく生きんがために讀書するのである。

この事を思ふと、愈、放恣な讀書を愼まねばならない。出來るだけその興味を制限し、その範圍を限つて、その中での最良の書のみを讀むやうにしなければならぬ。そこで、讀書法よりも先きに、まづ、書物の選擇法が問題になる。それがまた、なかなかむづかしいのである。

×

外國には、最良書百種とか、必讀書十種とかいふものが澤山ある。それにはきまつて、バイブルだとか、プラトオンだとか、また、ホオマア、ダンテ、シェクスピアと云つたやうな間違ひのない書物が並んでゐる。これらの表に則つて讀書するならば、さだめし有益でもあり、面白くもあり、精神の向上期して俟つべしであらうと思はれるけれど、事實は必ずしもさうでない。そこに物の理と人間の情との齟齬が存するのである。

かうした最良書の表に敎へられたわけではなかつたが、十六七歳のころ、私はバイブルや論語や老子などを讀みかけた。ところが、その結果は、かへつて最惡であつた。卽ち、讀んで敎へらるべき書物が、机邊の飾りとして、自分を引立たしめようとの虛榮心に役立つにすぎなくなつたからである。それには書物の罪もある。バイブルの如きは、全體として見ると、極めて雜然たるものであるから、初心者は、その精髓に觸れるまでに參つてしまふのである。論語などは、バイブルほど尨大でも雜多でもないが、それさへ少しも面白くなかつたし、老子に至つては、はじめから何の事かちつとも分らなかつた。結局、何等得るところなくてすんだのである。

そこで考へなければならぬ事は、それぞれの書物には、それぞれにその讀むべき時期があり、年齡があるといふ事である。この制度を無視しての讀書は、勞多くして、しかも得るところ極めて尠いであらう。だから、他から强制的に、いくら最良書を與へたとて、決してその効果はあがるものではない。かへつて反對の効果を奏する事は、學校の敎科書に用ゐられた本は、どんな面白いものでも、大抵はたのしい印象を殘さないのでも知られる。やつぱり當人の自發的な要求の現れるまで待たねばならぬものであらう。また、多少の要求があつたにしても、あまりに早い年齡にあつては、私の場合のやうな結果を伴ふであらう。

私自身にしても、今では、論語は隨分たのしい讀みものであり、その中に盛られた智慧と溫かい人間味とに觸れ得られるやうになつたし、老子の一語々々からは、汲めども盡きぬ深い暗示を受け得られる。それでも、まだ私ぐらゐの年齡と體驗とでは、こんな書物はほんたうに解し得られてゐるかどうかを、自分でも疑つてゐる。おもふに、これらの書物は、一生かかつて讀むべきもので、一度讀んだから、それでもう分つたと云ふべきものではないであらう。そして、これが最善の書の最善である所以であるが、さればとて、かかる書物をのみ常に讀めと敎へるのは、あまりに理に偏しすぎて、かへつて多少の無理をつくるであらうと思ふ。

私達に對する書物の關係は、師友のそれによく似てゐる。けれども、一にして師友を兼ねるものは尠く、おほむねは、師とすべき書物と、友とすべき書物とに分れる。で、私達の書物に對する態度——即ち、讀書の方法を考へるに當つては、この二つの區別を知つてゐなければならぬ。私達が師の敎へを聽く時と、友の話を聞く時とは、おのづからその心持が違はずにはゐない。私達は常に師の前にゐるには堪へられず、また友とともに嬉戲したいと思ふ。師をも友と思ひ得る境地まで行ければ上乘だが、それはいつ誰れにもとは望めない事だから、一般には、結局、エマスンの讀書論に引かれたシェクスピアの「樂しみのなき處利益は伴はず、要するに、君よ、君の最も好むものを學べ」の金言を推すのが最も情の至れるものと思ふ。ただ、私自身の場合のやうな、あまりに放恣な不規律に對しては、幾分の理をもつて、これを制しなければならぬのであるが。

×

私の周圍には、かなり多くの讀書家がある。中でもカントを毎日三頁宛、規則的に讀んでゐる友に至つては、最も嚴正な人である。これこそ眞にカント風な讀書法であらうと思つて、驚異を感じてはゐるが、私にはどうしたらその友のやうなそんな自制が出來るかが殆んど理解せられない。私のは興に乘じて一氣に讀破する代り、氣分が向かなければ、いつまでもほつておくと云ふ我儘勝手な讀書法で、これが私の專門の學者になれない所以でもあり、もとより人に奬むべきものでもないが、ただ、そのあまりに理を重んずる友の勸告に對して私の答へた言葉、自分が好きでないものを、自分以外の或る權威（オーソリティ）に指揮せられて、注入的に讀む事は、可及的に避けたいと云ふその意志だけは、決して誤りであるとは信じないのである。

それらの點で、私はその友と論議をした。その際、エマスンの說が私の論據を助けてくれた。それはかういふのである。

「讀書の最善の規則は、自然の方法によるので、時間と頁數とを以てする機械的の方法に從ふべきではない。この方法は漠然とした雜駁なやり方でなく、自分特有の目的に固く追從させる。研究者は、よろしく自分に適合するものを讀み、澤山の平凡なものを學ぶために、その記憶を浪費してはならぬ。」

ところで、この說の前半は明かに私を辯護してくれるものであつたが、最後の句は反つて友の方に加擔して、私を非難するものであつた。私は全く澤山の平凡なもののためにその記憶を浪費してゐたからである。これは全く愚かな事である。いたづらに多きを貪るよりも、わづかの選ばれた書物をくり返しくり返し繙讀しなければならぬ。少數の親友が多數の知己にまさるやうに、少數の愛讀者は、最も多くを與へるであらう。

まだ、所思の半ばも云はぬうちに、豫定の紙數に達したから、次ぎにリヒテンベルクの言を擧げてこの稿を結ばう。「著者の目的と根本思想とを數語に約說して、この形でもつて自分のものにする事。この方法をもつて讀めば、努力の甲斐あり、得るところがある」これ正に讀書法の原則。又、「なぜ人間がその讀んだものをあまり自分のものにする事が出來ないかと云ふに、彼等が自分で考へる事が少ないからである」この自分で考へるといふ事、これはショオペンハウエルも繰返し注意してゐるが、かの悉く書を信ずれば書なきに如かずの古言も、その意はまた茲にあるであらう。

（大正十五年九月）

蘭花の窓

秋がくると、私の窓の陽ざしが西にうつる。そして、靑い空がそこから私の心をのぞき込まうとするやうに思はれる。私の眼もそこから空をのぞく事を愛するやうになる。

秋は硝子戸をとりのけておく夏よりも、一層私と自然とのへだてを無くしてくれる。そのとき、私はその窓のしきゐのうへに、一鉢の草花をおきたいと思ひつく。
そして、その窓の草花の下にすわつて、私はしばしば自然と人間との交渉について考へるのである。
自然と人間との通路としての窓。それは私をして、二つの魂の通路としての眼を想はせる。
眼は魂の窓とは、まことにいみじくも云はれた言葉である。
祕密を見られまいとする人、心の底を見すかされまいとする人は、本能的に眼を伏せ、または眼をとざす。
祕密の行はれる場合、窓は閉めきられ、またはカアテンをおろされる。
窓をひらけ！　といふ思想は、極めて健全な、そして深い思想である。
然し、窓をとざす事も、また時に必要であり、意味のある事でさへもある。
私は窓の中にすわつて、しばしば窓の神祕といふ事を考へる。
窓といふものは、まことに、いろいろな事を暗示する。
窓の後には、常に人の心を誘ふ何ものかがある。
道を歩いてゐるとき、ひらかれた窓があれば、我々は無意識にその方を見る。窓の中をのぞき込みたいといふ衝動を覺える。好奇の心がこれを推し、道義の心がこれを引止める。
眼と窓とは、然し、對角にあるとき、もつともよくひらかれてゐる。
窓の中の眼と、眼の中の窓と、——その相互の中に一つの世界が展ける。
「窓と窓」と題する小品を書いたのは、いつであつたか、もう二十年も前の事である。
通りに面した兩側の二階の窓から、若い男と若い女とが、互に名前も身分も知らないながらに、毎日顏を見合せて

ゐるうちに、いづか輕く會釋をするやうになり、互に微笑みを投げかはすやうになる。淡いリイベの感情が芽ぐんでくる――そして、通行人は何も知らないで、その下を通つて行く。

私はさういふ意味の事を書いた。然し、それは一つのフアンタジイであつた。私が現實に經驗したものは、それよりもややおくれて、もつと寂しいもの、ただ一つの窓とただ二つの眼との交渉――謂はば窓の片戀。

私が毎日通つてゐる路の、とほりに向いて、一つの窓があつた。

その窓の張出板の上には、大きな鉢植の蘭が見えた。大きなすばらしい蘭であつた。

秋になると、その蘭は、白い花をいくつもいくつもつけた。

毎日、その窓の下を、その蘭を見て、私は通つてゐた。

けれども、その窓には、つひぞ人の顔の見えた事がなかつた。

私はそれが物足りなかつた。

この家にどんな人が住んでゐるのであらうか？　一度ぐらゐ、人の顔が見たいといふやうな氣がした。

ところが、ある日、私はふとその窓を振向いたとたん、一人の若い女の頭が、その蘭のかたはらを横ぎつて消えたのを見た。

はつと思つて、暫く立止つて見てゐたが、もうその頭は再び現はれなかつた。けれども、何だか通行の人があやしんで見るやうなので、私は急いでまた歩き出した。

それから、私はあれはどんな少女であつたらう、どんな顔をしてゐるだらうと思つて、その下を通る毎に眼を注ぐのを忘れなかつたが、どうしても人の姿は見えなかつた。

せめて聲でも聞きたいと思つたが、不思議にひつそりと靜まつた家で、曾て人の聲のした事がなかつた。

そのうち、或る日、そこを通ると、もうその窓は閉まつてゐた。そしてもうあの大きな立派な蘭の鉢はなかつた。人が變つてしまつたのだナと思つて、それからはもう、私はその窓に注意を拂はなくなつた。けれども、あの一度見た若い女の頭は、あの蘭の花といつしよに、その後も私の頭にこびりついてゐて、私の空想を刺戟したのであつた。この二十歳のころの淡い思出――この誰とも知らない一人の若い女の後頭が、一つの窓を忘れがたいものとしたやうに、窓といふものを神祕なものとしたのであらうか？

いや、事實は、その窓が私にとつて、少しも神祕でなくなつたときに、私は窓といふものの不思議を思ひ當つたのである。

して、それはどうしてであつたか？

私はその窓の內部にすわつたからである。では、その窓は今私がいつもその下にすわつてゐる私の住む家の窓なのであるか。さういふ風に話がはこべば申分はないであらうが、實際はさうでない。

私の友の一人が、偶然その窓の家へ越したのである。そして、彼の通知してくれた番地をたづねて、その窓に出あつたとき、私は少からず驚いた。

「驚いたね、この家だつたのか」と私が云つた。

「どうして？　君はこの家を知つてたのか？」と友は怪訝な顏をして訊いた。

「いやなに、通りすがりに見たばかりだがね」と言つてから、私はかの思出を話した。すると友は

「たつたそれだけの事か、君は隨分ロマンティックだナ、殊に今時分までそんな事を忘れないでゐるのが一層不思議だよ」

「それは君が窓といふものが、どんなに不思議な神祕的な意義をもつてゐるか知らないからだ」と私は一矢酬いた。

「窓が不思議なら、屋根だつて不思議だらうぢやないか」と友も負けてゐなかつた。
「だが、屋根には眼がないからね」と私はまた答へた。「そして、かうして今度はその中から外を見るといふやうな事が出來ないからね」
これは單なる一場の應酬ではなかつた。そのとき、私は主觀と客觀、自我と世界といふやうな哲學的な問題を考へたのである。
ところが、友は極めて散文的な口調で、
「だが、やかましくて困るよ、通りに面した家はこれだから困る……家賃の安いのだけが取得だ……それに時々中をのぞく奴があつてね……」と云つて、ニヤリとして私の顏を見た。
「僕はまさか中をのぞきはしなかつたよ」と私も笑つて云つた。これで私たちの話は一段落ついて、別の方面へと轉じて行つた。けれども、私が窓の意味といふ事を深く考へるやうになつたのは、實にその時からであつた。（大正十五年八月）

秋暑

×

盂蘭盆がすむと、秋風が立つ。
自然とかけ離れてゐる都會の生活では、九月のはじめになつても、まだ秋といふ感じははつきりとは來ない。既に夏の半ばに、花屋の店の女郎花、八百屋の店頭の葡萄の紫の房から、一筋の秋のけはひは立昇つて、それはまだ人工

の秋である。それよりも、むしろ野趣ある新芋の姿が、秋の訪れを告げるであらう。

まつたく、都會では、いつが春であつたのか知らないですごすやうな事もあり、いつのまにか秋が來てゐるのに驚くやうな事も多いのであるが、田舍ずまゐをしてゐると、季節の歩みが、眼に肌に、直接に觸れて、切實に感受されるのである。春から夏へ、夏から秋へ、農家の人々は、自然とともに動いて行く。殊に盂蘭盆は二重の意味で、たふとい時である。それはその父祖の精靈をまつる時でもあり、自分達の半歲の勞力のねぎらはれる時でもある。それから二百十日、二百二十日の厄日もすぎ、風祭と云つて、皆が寄合つて、酒やら餅やらを、たらふく飲み食ひして、胃腸をいためたりする頃になると、もうすつかり秋である。稻葉が風にさやさや鳴つて、蝗が畦道を、田から田へとまりのやうに飛ぶ。そのうち、無花果がふくらんで、紅い筋をつくり白い乳をふく……

×

此夏、しばらくの間、田舍に行つてゐただけでも、私はずつと自然と親しくなつた氣がした。はじめての村の生活が珍らしく、いろいろ學ぶところが多かつた。德島の馬鹿踊りと云つて、特別盛んだと云ふ盆踊りを見ないで歸つたのは殘念であるが、「踊る阿呆に見る阿呆、おなじ阿呆なら踊らにやそんかい」といふやうな唄をうたつて、女子供は晴れの衣裳を着飾つて、皆がみな踊り狂ふといふ事を聞いただけでも、南國人の享樂氣分が想ひやられる。かうした民衆的歡樂は、あるひは粗野であるかも知れない。けれども天眞である。融通のきかない道學者が、それほど澁面するには當らない事のやうに思はれる。

今はさうでもないやうだが、以前、ひどく風紀警察がやかましくて、盆踊が一切禁壓された事がある。丁度私が鄉里の方に歸つてゐた時分であつたが、折角盆踊を見ようと思つてゐたのに、早くも警官によつて解散を命ぜられて、明るい月の下を、白鉢卷で、威勢よく太鼓を擔ぎ廻つて叩いてゐた若い衆達は、がつかりしたやうな樣子で散つてし

まつて、辻堂の蔭や、街道の大松のところに、女達が少し宛寄り集つて、ぺちやくちや喋つてゐるのが、まことに氣の毒であつた。

ひと夏の田の草取りだけでも、決してらくな仕事ではない。このあひだも、田舍で、老母が田の草取りに田に入つてゐるのを見て、自分も試みに一つやつて見ようと云つたら、慣れないものにはとても出來るものではない、足の皮がすぐ破れてしまふからと云つてとめられた事であるが、粒々辛苦に嘆ぜられた農家の辛勞は、ひとりそれには止まらない、雨につけ、風につけ、何かと苦勞の絕える事はないのだ。そんな中で、長い間たのしみにしてゐた盆踊りを禁ぜられた若い男女の心持はどんなであつたらう。

人生は理ばかりで動いてはゐない。情のうるほひのないところには、合理必ずしも合理ではないであらう。私はよくは知らないが、例へば、支那の王安石などといふ政治家の失敗なども、さうしたところにありはしなかつたらうか。そして、現代の日本には、それがまた到る處に無理をこしらへてゐるやうな事はないか。人民の意向とは頓着なしに、杓子定規をふり廻して、つまらぬ事で民心を激發させる官僚的精神は、決して好ましいものではないと思ふ。

×

新聞で見ると、此頃、世界の何處かで、どの方面かの相當權威ある人々が寄り集まつて、暦を改正する會議があつたやうで、その議定されたのを見ると、毎月を二十八日にきめて、一年を十三ケ月に分けようと云ふのである。それも何か便利な事があつて、理窟にも合つた事であらうとは思ふが、かのメエトル法などと同樣、少數の人が勝手に多數の民衆の生活樣式に干渉する事は、無條件に肯定せらるべき事であらうか。殊に、暦は自然の法に準ずべきものである。人間の暦だから、人間の勝手できめられる。十三ケ月は二十ケ月にでもきめられる。だが、自然の運行は、依然として變る事はないのである。今の太陽暦ですらも、農家では隨分不便な事もあつて、今なほ舊暦を棄て得なくつて、

處によつては正月を二度してゐるのではないか。

三月の節句に桃の花が咲かず、五月の節句に菖蒲がないと云ふやうな齟齬もある。（もつとも東京では、すべて室咲きで間に合ふが、その事は、單に室咲き文化の象徴となるにすぎない。）それから七夕、盂蘭盆會、かうした傳統的ななつかしみは、みな舊暦の世界のものである。然し、そんなふうにやさしい年中行事も、だんだんに無くなつて、人の心にもそんな餘裕がなくなつて、ますます散文的にひからびて行く事を考へると、少し寂しい。かういふ感情は、センティメンタルだといつて斥けられるだらうけれど、現代人の心も、旣に感情を無視する合理主義一點張りの乾燥無味には堪へられなくなつてはゐないか。人間が機械になるのが、理想の社會でもあるまいと思はれるが、合理主義は結局、人間を機械にしてしまふ事ではあるまいか。そして、現代の社會主義が、さうした合理主義でなければ幸ひである。

×

旅から歸ると、齒をいためて、仕事も手につかぬので、毎日醫者に通ふ外は、頰を氷嚢で冷やして横になりながら、丁度丸善から屆いたヴォリンスキイの『カラマゾフの國』をぼつぼつ讀みはじめた。すると、ドストエフスキイの生涯の大きな問題の一つが、今私の考へてゐる日本主義と世界主義の問題に對する非常にいい暗示を與へてくれるので、その考へに耽り沈み、しまひには、ソロキヨフの講演やら、エミイル・ルカやシュアレスやらの論を取出して、しばらく齒痛も忘れて、それに沒頭してゐた。

ドストエフスキイも、今のブルジョア臭味の若い文學者からは、あまり顧みられないらしい。あんな重苦しい、長つたらしいものは眞平だと、何處かで云つてゐた人もあつたやうに思ふ。それとは反對の陣營にある無產派の人々はまた、ドストエフスキイの反動的傾向を厭つて、敵意をさへ感じてゐるやうである。しかも、ドストエフスキイの偉大

と、特にその殉難とを知つてゐるので、頗る痛し痒しの態度をとつてゐるらしい。本家本元の露西亜のゴオリキイなどが既にさうである。

ところが私にはその反動的に見えるところが、即ち、ドストエフスキイの露西亜への深い信仰が、そのスラヴ主義の基礎になつてゐる宗教意識が、特に興味を誘ふのである。

近代露西亜の文學史は、一面に於いて、スラヴフィールとウェストレル（西歐主義者）との爭鬪史であるとも見れば見られる。ヘルツェンやツルゲエネフを後者の先驅者とすれば、前者の先覺であり、且つその最高點を占めるものは、やはりドストエフスキイその人であらう。ヘルマン・ヘッセやエミイル・ルカなどは、西歐の敵としてのドストエフスキイに特別の意義を見出さうとしてゐる。戰敗の獨逸が、西歐文化の行詰りを意識して、新生命の開展に當つて、これが啓示をドストエフスキイに見出した事は、興味のある事實であるが、我々はまたそれとは違つた意味で、ドストエフスキイに聽かねばならぬ事が多くはないであらうか？

×

今、我國でも、思想上に、また生活上に、日本主義、東洋主義の精神、並びに我が國固有の文化の傳統と、西歐文明の滲出物としてのアメリカニズム、並びに西歐的唯物思想の結晶としての左傾思想に代表される物質的文化とが相對峙してゐる。少くとも相併立してゐる。そして、到る處で、あらゆる形に於いて、この固有のものと輸入のものとが、或ひは衝突し、或ひは不調和を現出してゐる。これらがいかにして融和せられ、調和せらるべきか、この混亂の中にいかに處すべきか、それこそ我々現代の文學者の大いに考へねばならぬ根本的の問題ではあるまいか。私なども、もつともつとこの問題を根本的に眞劍になつて考へもし、究めもしなければならないと思ふ。もつとも、自分自身が差當つてこんな不調和の狀態ではたまらないが……

氷嚢を頬つぺたに載せて、横向きに寢た儘、私は家族の者をつかまへて、雜然として湧き來るからうしたいろいろの事柄を、口から出まかせにしやべり散らしてゐた。後にはそれが唯物主義の攻擊になり、人間を腐敗せしめる政治なるものを憎む論になり、果ては今度歩いてきた名古屋や神戸などに比べて、東京の物價が二三倍も高いのは、こちらではその間に何かカラクリがあるに違ひない。中間に搾取階級が幾重となく介在してゐるからに相違ない。東京はその市政が示すやうに、一切が誤謬で不都合であるといふやうな過激論を述べ立てた。

おもふに、これもみんな齒痛のなす業に相違ない。シェクスピアは意地の惡い男で、哲學者も齒痛にはかなはぬと云つてゐるが、ましてや哲學者ならぬ詩人ならば、ひとたまりもなく屈服したとて不思議でもない筈である。

×

それにしても暑い。暦の上では、既に秋は立つてゐるが、このきびしい殘暑の中で、齒を痛みながら、いろいろな觀念が頭の中で渦を卷いて、押し合ひ、へし合ひといふ暑さである。自分の頭がまるで今の日本の縮圖でもあるやうに思はれる。それをさつぱりと統一し整理をつけたなら、何と爽快な事だらう。だが、それも一朝一夕の事ではない、あだかも東京市の市政改正とおなじやうに。

朝も秋夕も秋の暑さかな、その鬼貫の秋暑もまだ遠い。（大正十五年八月）

山水抄

×

此間、四國の田舍の家へ行つて、しばらく滯在してゐた間に、むやみに本箱を引つかきまはして、古い漢籍を取り

出して、拾ひ讀みなどしてゐるうちに、思はぬ勉强をした事であるが、とりわけ『淸六大家絕句抄』は、王漁洋一人を除いては、これまで殆んど讀んだ事のない人達なので、珍らしさに思はず讀破してしまつた。勿論、字引にたよらなければはつきり分らぬところは飛ばしての讀破である。

中でも朱竹坨の鴛鴦湖櫂歌は、ひどく氣に入つたので、そのうちの特に好きなものだけ書き寫して來た。「蟹舍漁村兩岸平。菱花十里櫂歌聲」とか、「穆湖蓮葉小於錢。臥柳雖多不礙船」とか云つたやうな句を見ると、そぞろに江南の風光が偲ばれて、いつかは自分も南支那に遊んで見たいといふ氣がした。

旅から歸るとまもなく、たまたま湖南省の人が、私の靑年時代の詩を白話詩に譯したのを持つて、訪ねて來てくれた。それでいろいろ江南の話を聞いたが、その人は私達があこがれてゐる風物を、自分達はそれ程にも思はないと云つた。

×

楊子江のそれに髣髴たる大景は、日本にはもとよりない筈である。大利根の下流といへども、比倫に堪へぬであらう。それなのに、ついこの東京に、そんなところがあると云つたら、駿臺雜話の室鳩巢が門は臨む萬里の流にもました誇張か、または一場の冗談と思はれてしまはう。また實際、全くのアイロニイなしにではないが、私は曾て、吾妻橋から一錢蒸汽に乘つて、千住大橋まで行く間の、鐘ケ淵を溯つたあたりの、兩岸の蘆荻茫々として、秋はことさらうら寂しい風光を愛して、小赤壁流に、何とか命名したい位に思つたのである。それももう十何年もの昔になるから、今はどうなつてゐるか知らない。が、多少は變つたにしても、この東京の隣接では、最も雄大な景の一つであらうと思ふ。

中央線の車窓から眺められる木曾川の風光は有名であるが、それも今では水力電氣のために、すつかり臺なしにさ

れてしまひ、むき出しの河原に石疊々として、わづかに寢覺の床に昔の面影を偲ばすにすぎない。關西線の木津川の風光が、遙かに豐かで和やかでいい位のものである。けれども、木曾川も犬山まで來ると、さすがに日本ラインの壯觀を示して來る。私は犬山城の天主から下の川水を見おろした時の爽快な氣持を忘れえない。大江に扁舟を流すのは、またそれ以上の爽快さである。千里江陵一日に還るの氣分も、幾分かは味ひ得られようと思ふ。

最近見た阿波の吉野川は、ほんたうに美しい川であつた。下流には舟橋がかかつてゐるが、それより何里か上の西條の渡しといふには、自動車が河原の荒い石ころの上を飛ぶと、水の上だけに橋がかかつてゐる。橋といつても、ただ一枚板を並べたばかり、車の通る度びに、その板が一枚毎にバタンバタンとはね上る。下を見ると、きれいな水、澄んで靑々として、そしてなめらかに流れてゐる。

×

榛名の沼の原で、富士山を見つけた事があつた。秋九月半ばであつたと思ふ。榛名湖の上の山に續く山と、三つ峯だか鏡臺山だかの間に、はつきりとあの秀麗な山容を見出した時には、めづらしい氣がした。白根の煙のはつきりと見えたのも、その時であつた。山を見るのは秋である。此間行つた鳥羽の樋の山からは、遙かに富士が見えるといふので、望遠鏡を借りてまで見たけれど、この日はつひに見えなかつた。

富士もいいが、日本アルプスはまた格別である。いつか鹽尻で下りて、松本の人に案內されて、桔梗ヶ原からあの連峰を眺めたときは、山の靈氣が身體中に一杯になるやうな氣がした。あれが槍、あれが穗高……と敎へられる一つ一つが、一つの人格のやうに、それぞれ何をか自分に語つてゐるやうに思はれた。朝夕、こんな山容と相對して、靜思に耽つたら、どんな高峻な思想が生れるだらうと、信濃の人を羨ましく思つたのである。

海を愛し、湖水を愛し、河川を愛する私も、今は水に劣らず山を愛し、森林を愛し高原を愛する。然し、私などま

だ山を語る資格は全くない。ただ、遠くから眺めて、その偉容を嘆賞するにすぎないのだから。世には新聞などで騒がれるやうな人よりも、あまり名の知れないやうな人に、反てほんたうの登山家はあるといふ事だが、そんな人が山を愛するのは、止むに止まれぬ欲求で、あだかも私達が書物を愛し、思想を追求するのと、殆んど同じ事であらうと思ふ。(大正十五年八月)

村荘日記

×

「風聲」とある賴山陽の書のかかつてゐる下で、本箱から引張り出して來た十三册物の『清六大家絶句抄』を枕にして、その中の一册を讀んでゐるうちに、東の煉塀の上を越えて、そよそよ吹いてくる風のこころよさに、いつからうとうとと眠つてしまつた。

あまり蚊がひどいので、途中で起きたが、蚊帳を吊つて、また横になつて、夕方近くまで眠りつづけた。途中の旅で道草を食つた疲れか、それとも、日頃の疲れが一度に出て來たものか、これで三日、こんなに眠つてばかりゐるのである。

午睡からさめると、母屋から差出した屋根の下にある井戸の傍に行つて、その深い底から汲み上げて、冷たい水を一杯、ぐつとコップで飲みほしてから、まつ裸になつて、身體中を拭く。

これで氣分がはつきりしてくる。それから私は、離れの廣い緣側にすわつて、煙草をふかしながら庭を眺める。このあたりはもう山地なので、土地全體スロオプをなして、母屋よりも離れがずつと高くなつてゐるので、ここからは

る。母屋との間の築山には、大きな枝が幾階にも張つた枝ぶりの見事な五葉の松があつて、覇者のやうに根を張つてゐる。その外、木蓮、糸檜葉、山茶花、楓、櫻、椿などが、それぞれに築山と池とのまはりに配置してあつて、その下蔭には、桔梗だとか、百合だとか、ダリアだとか、カンナだとかいふ草花が、雜草の中から花をもたげてゐる。ただ、その幾つかの池に水がなくて、中には、その底に落ちたわづかな土の上に雜草が生え出し、何か名も知れぬ花が咲いてゐたりするのは惜しいが、今は田の水が足りない位だから、勿論、そこへ水を引くといふやうな贅澤は望めないであらう。

かうして見てゐると、一番に感ずる事は、總體に植物の色が恐ろしく明るい事である。今度東京からくるとき通つて來た中央線沿線の、信州あたりの植物の色などはまるで違ふ。船から上つて、ここへくる途中でも感じた事であるが、この阿波では、植物の色ばかりでなく、土地も黄色く見えて、何處となく南國的の明るさをたたへてゐる。けれども、それにも拘はらず、この庭そのものは、何處かかすかに憂鬱な氣分をもつてゐる。それは手入れをする人もないので、草が生え放題に生え茂つてゐるためもあらうが、やうやく家屋敷だけは取りとめたと云つたやうな、衰へた古い家に特有な、あの一味沈靜の趣きで、それがかへつてこの庭に特種の幽寂味を添へてゐる。

今、私は自分の家といふものをもたない。間借生活からやうやく貧弱な借家生活に向上したのにすぎない。そして、行くところを自分の家にしたいと云ふやうな、一所不住の漂泊の徒の氣分でゐるのだが、それが今かうして、思ひもかけぬ四國の片隅の村にやつて來て、まるで我が家のやうな顔をして、勝手氣儘に寢轉んでゐられる事を考へると、人の運命の不可思議を驚かずにはゐられぬ。

×

午睡のひまには、床の間の横手に、幾つとなく並んでゐる本箱の中を漁つてみるのがたのしみだ。萬秋舍と號して俳人であつた先々代と、選齋と號して漢詩人であつた先代との、それぞれの趣味をおもはせる古い木版本が、その中にはぎつしりつまつてゐる。それを一册一册引張り出しては、窓のところへ持つて行つて、埃をはたいて、うろうろ飛び出す紙魚をふるひ落して、くりひろげてみる。この思ひがけない闖入者の氣まぐれな曝書に、紙魚はさだめし吃驚した事であらう。

芭蕉の七部集をはじめ、萬葉集、古今集、狂歌百人一首、又は喫茶餘錄といふやうなものの外、大部分は漢籍で、特に詩集は隨分よく揃つてゐる。詩經の疏註をはじめ、唐宋から明淸にかけての各家の集で、私が平常見たがつてゐたものがかなりあるし、山陽や星巖、菅茶山の『黄葉夕陽村舍詩』のやうな日本人のものも多い。小野湖山、木蘇岐山などといふ明治の詩人の作も、私ははじめて讀む事が出來た。

岳父がその亡父のものを印刷に附したらしい萬秋舍遺稿、また岳父自身の縱橫に朱點と斧鉞を施した詩稿などを讀んでゐると、つひに相見なかつたこの人達に對する限りなき親しみが湧き上つてくる。そして、つひ目の前に並べて掲げてある二人の寫眞を今更のやうに眺めやつた。

寫眞は共に引きのばしであるが、先々代のは隨分薄れてゐる。でも、その人の劍術もできたといふ、いかにもがつしりした樣子は、この家に傳はつてゐる一種根强い生活力を思はせる。それから、この地方の先覺者で、あまりに早く新文化を移入しようとして失敗した岳父の面影には、一生周圍に理解されなかつた人に特有のあの何處かうら寂しいパセテイックな氣分が滲み出してゐるやうな氣がする。

×

義弟の大樹が里から買つて來てくれた鍔廣の麥藁帽、黑いリボンがついてゐるので若い衆でもかぶりさうに思はれ

るのをかぶつて、庭のダリアやカンナを剪つて貰つて、藥罐と線香とをさげて、どうしても案内するといふ六つになる甥をつれて、墓參りに出かけた。

乞食の住んでゐるといふ西の貧乏谷を越えて、（この邊の川は、山から流れ出すときには、隨分水量も豐富だが、それが吉野川に流れ込まないうちに、諸方から水を引かれるために、大抵はカラカラに乾上つてしまふ、さうした水のない谷を此邊で俗に貧乏谷と云ふのである）溜池の横を通つて、爪先上りの路を歩いて行くと、田の草取りをしてゐる人達が、珍しさうにこちらを見る。

路傍の萩などを折り取りながら、山へ入ると、道もない程草の茂つた中に、村の墓が並んでゐるが、田仕事の忙しさに詣る人もないと見えて、香花の手向けられてゐる墓は一つもない。里から上つてくる途中で、あの白く二つ見えるのがそれだと敎へられた墓石の一つが、岳父の墓である。水をそなへ、香花を手向けて、一拜してから、振返つて里の方を見ると、ここからは隨分いい眺望である。

靑々とした田畑の連つてゐるその眞中に、吉野川がゆるやかに流れてゐる。（秋になると、白帆の影も見えるさうである）そして、その吉野川流域の豐饒な田野のむかうには、こちらの山脈と並行して走つてゐる向う山脈が見はるかされる。

かうして一つの大河と、その流域の沃野とを挾んで、兩方に山脈が走つてゐて、その山の麓一帶に、田畑がきり開かれ、人が住んでゐる。（勿論、吉野川も上流に行くに從つて、兩岸が迫つて、つひには一つの溪流となるのであるが）かうした眺めは私は稀らしくもあり、また好ましくもあつた。

歸りには路を變へて、すぐ田圃の方へ下りて、谷に沿うてずつと下つて行つて、乞食の小屋を見に行つた。

谷の底のわづかな平地に、崖にもたせかけて小屋を建てて、その上下にずつと細長く畑をつくつてゐる。胡瓜や茄子

の花が美しい。人が住むと、水はそれを避けて流れるので、こちらで場處を取つただけ、西の畠の方へと少しづつ喰ひ込んで行つてゐる。せむしと片目とだといふ乞食の老夫婦は姿を見せなかつたが、その小屋の前には、犬と猫とが仲好ささうに眠つてゐた。

一度水が出れば、猶豫なしに押流されてしまふであらうのに、こんなところにも人間は住めば住めるもの、生きようと思へば、人は何處にでも生きられるものだと思つた。

×

その夜、西地(にしぢ)の叔父と東屋(ひがしや)の善さんとが來て、母屋の暗い電燈のもとで、酒宴がはじまつた。

この叔父は前に東京へ來た時に會つた事があるが、まるで露西亞人のやうな立派なマスクをもつてゐる。善さんといふのは、此村きつての口利きで、髯むじやの小男だけれど、なかなかの漁色家で、そのため村を騷がした事は一再でないと云ふ。然し、その智慧才覺もなかなかのもので、その父の代に讃岐から流れて來て、ここに住みついたといふやうな身の上から、一代に仕上げただけあつて、村には過ぎた策士であると云ふ。いつもは何處でもすぐ眞裸になるのださうだが、今夜はかしこまつて着物の肌もぬがなかつた。

大樹は酒が弱いので、三人だけで二升近く飲んだ。この村の酒屋でつくる酒で、泉正宗といふ、ぴりツと舌にくるが、男らしい味、村酒また捨て難しである。

叔父は最近、その親類先の事業のために捺した受判の結果にひどく苦しんでゐて、善さんがそのきりもりをしてゐるのださうで、二人でその話をはじめると、叔父の鼻の高い男らしい顔は、だんだん悲痛な色を帶びてくる。そして軍人であつた彼は、話の半ばを歌にして、鴨綠江節でごまかしてしまふのであつた。

私は善さんにむやみに杯をさされて、五六合は飲んだやうだが、不思議に惡醉ひをしなかつた。

この泉谷一村の寺である和泉寺は、村の一番奥、つまり、一番の山中にある。

「今日は随分暑くなりさうだ」と呟きながら家を出た。例の錫廣の帽子に、德島の市で買つたステッキをついて。

村を上へ上へとのぼつて行つて、昨日行つた墓地のある山をぐるつとめぐると、その山が襞をたたんでずつと續く。そしてその奥にまた田が見え、家が現はれる。その大きな一構へは、昨夜一緒に酒を飲んだ叔父の家だ。わざと立寄らないで、山について歩いて行くと、路の傍らの用水が漫々と流れてゐて、路に溢れ出しさうな勢ひである。

暫く行くと、大松が一本立つてゐる。そこを曲ると、左手の目の上に、大きなお寺の屋根が見える。これが和泉寺だ。山ばかりの間に、すつくりと立つてゐるその姿が、いかにも山寺といふ感じである。

隨分遠方からの參詣人もあるといふ事で、そのためか、茶店も一軒ある。山門をくぐると、山について細長く境内が取つてあるので、庫裡に沿うて本堂に行くやうになつてゐる。そして、本堂と差し向ひになつた廣緣には、二人の若者が辨當をつかつてゐた。

本堂はかなり破損してゐるが、一寸趣きがある。そしてその中には、一人おみくじをひきに來たらしく、すわつてゐる姿が見えた。

山門の方へ出ようとしてゐると、庫裡の中から、突然、一匹の大きな土佐犬に吠えつかれた。大きなステッキを振廻してゐたためだつたらしいが、犢ほどもある犬なので、驚いて、急いで山門の横からだらだらと下の路へ下る。そして、そこから更に山の奥へと進んで行くと、右手にかなり離れてゐた溪流が、だんだん接近して來て、いつかその溪の上を歩いてゐる自分を見出す。

この溪は奥の溪と云つて、西の貧乏谷とは違つて、水が淙々と流れてゐるばかりでなく、そこには思ひもかけぬ溪

谷美が見出せた。

藁葺の農家とも見まがはれる立派な水車場を下に見ながら行くと、溪ぞひの木立越しに、奇巖怪石が續々として見えてくる。その岩に激して白く泡立つ水が、淵のところで、かの溪谷特有の藍色を帶びて、殆んど四角形な對岸の大きな岩の底の方が横に幅廣く、洞穴のやうになつてゐる中に湛へて凄愴の氣を吐き、密樹と相俟つて嵐氣肩に迫るものがある。しかも誰もこの景色を見たものはないのだ。特に見に來る人はなく、土地の人は見て見ないのだ。で、恐らく私がこの景の最初の探勝者であるに違ひない。

木樵りの外誰も通らない溪ぞひの細い路は、何處までも奧へ奧へと導いて行く。山を越えて、讃岐まで續く路である。和泉寺からおよそ十町も溯つた時分、急にポタリポタリと雨が落ちはじめた。そして、路が溪へ下りて行つて、水の上に飛ばせた石を踏んで、向う側へ渡るところへ出たとき、その雨はどしや降りになつた。

そこはかなり廣い河幅で、平たい一枚岩もあれば、巨大な奇巖も聳立ち、水はその直ぐ上手で瀧になつて落ちてゐる。私は淸凉な山の雨に濡れながら、しばらくそこにつくばつて、小石を引つくり返して魚を探したり、はしつこい小蟹をつかまへたりして喜んだ。

×

夜、晩飯がすむと、私たちは、義弟や小さな二人の甥などと一緒に、母屋の前の緣のところにすわつた。

そこからは、晝間だと、ずつと眼の下に、吉野川流域の眺めを賞する事が出來るのだが、夜の眺めには、またそれと違つたなつかしいものがあつた。

それは遮るもののない大空の眺めである。驚くほど、星がよく見える。そして、その下には、向う山脈の農家の灯が、澤山に、點々と逋つてゐるので、どこまでが星で、どこまでが灯であるか、はつきり區別がつかない位だ。そして、

その星も灯ももとに美しいと云ふと、向うの方から見ると、こちらの方の灯が、一層澤山に、一層美しく見えるさうだと大樹は云つた。

そんな景色を眺めながら、家をめぐる蛙の聲を聞きながら、私たちは東京の生活について、この大樹夫婦が東京で圖書の通信販買を思ひついて、その機關に雜誌を出し、つひにそれで生計を立てる事になつた時分の苦勞について語つた。彼も不本意に國へ引揚げたものの、今では村にすつかり落着いたし、私もそのために受けた打擊から此頃どうやら癒やされて、ともに重荷をおろした心持で、かうして夏の夜の星を見ながら閑談できるのを私は幸福に思つた。

夏の夜、汽車の窓から、慌だしく馳せ去る沿線の農家の緣先に、ぼんやりした燈光のもとに、二三人の人影のまどゐしてゐるのを見て、一日の勞苦に疲れた人達が、眠りに就くまでのしばらくを、四方山の話に打興じてゐるさまを想ひやる事があるが、今の私たちをむかうから見たなら、丁度その人影のやうに見えたことであらう。

そのうち子供達も寢しづまり、女達も奥の方へはひり、蛙聲の中から、家の横を流れる水の音がたんだん高く聞え出した。西手の水の岐れるところには、水番の灯がちらちら動いてゐる。

私は家の前の庭を歩きまはりながら、星空と向う山脈の燈影とを貪るやうに眺めながら、いつか晝間讀んだ朱竹垞の詩を微吟してゐた。

秋燈無焰剪刀停。冷露濃濃桂樹靑。
怕下解二羅衣一種中罌粟上。月明如レ水浸二中庭一。

（大正十五年七月）

山峽から

×

田舍へ行つて、何にも考へないで、天井むいて、大の字に寢て、思ふさま晝寢をしたいと思つてゐたし、また、自分でも驚くほどよく眠つたが、それでも三日もすると、その晝寢にも飽いてしまつた。

ここは四國、阿波の國は松島村、泉谷といふ讃岐境の連山のはしに南面した村で、うしろの山峽は、その山脈の襞の一つをなしてゐて、名もない溪流が爽かに流れてゐる。

或日、その溪流の奧深くわけ行つた時、沛然たる驟雨に襲はれた。百姓のかぶる鍔廣の麥藁帽がまるで雨を受ける傘のやうでもあり、淸爽の風に打ちつけられるときは、浴衣の上からの冷水浴……。さつぱりとして、爽快なこと此上もない。

夏なほ秋の如しとは、かかる境地を云ふのであらう。

雨が降りやむと、むかうの山脈に虹がたつ。大きな、すばらしい虹が……

×

畠からもぎ立ての胡瓜のうまさ。それを鹽づけにして貰つたり、梅酸につけて貰つたりして、まるできりぎりすのやうに、朝も晝も晩も、胡瓜ばかり食べる。靑い匂ひが、身體中に沁み込むやうな氣がする。

それに田舍娘の肌のやうに色のくろい、きめのあらい、繩でくくられる程ではないがかなり堅い豆腐。年下の三味線彈きを引き込んで、おそろしく仲が好いと云つて村中で笑はれてゐるお婆さんの家でこしらへるその豆腐がうまい。

こんなさかなで、里から買つて來て、冷たい井戸水につけておいた麥酒を飮みながら、すつかり田舍者になりきつた義弟の口から、村の話をいろいろと聞く。

田舍にも、田舍相應の葛藤もあれば、悲劇もある。里の角屋といふ家では、跡とり息子が德島の町へ行つて遊蕩し

て、家産を蕩盡してしまひ、それを苦にして母親は此間猫いらずを嚥んで死んだといふ事で、今日はその家財道具の競賣があつたと云ふし、また、おなじ土地の一人の若者は、こつそり多くの男に身賣してゐた女房を殺して、自首して出たといふ話。その他いろいろ話を聞くと、ここにも不景氣の反映が見えるやうな氣がするのである。

×

夜はもう蛙の世界である。家をめぐつて、いくらとも數知れぬ蛙どもが、水田水田の中で、空をむいて鳴きわめく。ぢつとそれを聞いてゐると、そぞろに、田舍氣分が湧いてくる。

詩人もみんなあの蛙のやうだつたらのんきだらうにと、私はつぶやく。詩話會もなければ、黨同伐異もない。ただもうみんなで勝手にギヤア、ギヤア、ギヤア……

「ガバ、ガバ、ガバ……ツて鳴ツきよるわ！」と三つになる甥が、目をまるくして大きな聲で叫ぶ。（大正十五年七月）

わが故郷の自然美

「彼の自轉車は、街道を眞直に走つて行つた。四五日前、不安な、苛々しい氣持で、和平爺の歸りを待つてゐたあの村外れの砂丘にさしかかつた時は、その折りの自分のうらさびしい姿が思ひ出されて、それが人ごとのやうに微笑まれた。今は、背中一杯に風を孕ませて、風を切つて行く爽かさ、身體ばかりか心まで輕く躍つてゐるやうで、まるで子供のやうだナと、彼は自分でも、この初心な自轉車乘りのはづみ方を可愛く思つた」

これは私が自分の郷土のために、謂はば一篇の讃歌を作らうといふ目的をもつて、（主要目的は別にあつたが）書いた小説『相寄る魂』の一節である。森鷗外博士の名譯によつて知られてゐるアンデルセンの『即興詩人』は、風光明

媚の伊太利を舞臺として、その自然美を心ゆくまで描き出して、一面から云ふと、伊太利禮讃であり、伊太利案内の役にさへ立つやうに思はれる程であるが、私もまた、それは誰しも免れないナイーヴなお國自慢に過ぎないかも知れないが、鄕土に對する愛着を詩化せん事を欲したのである。もとよりそれは『卽興詩人』などとは比較するのも不倫であるし、また私にあつては、その副目的が、反つて邪魔になつてゐる點も多いのであるが、それでも私としては、本望なのである。

「海から眞直に來る風に、帽子を取られないやうに用心しながら、絨毯の上でも行くやうな長い日野橋を渡つてしまふと、純一は常七に敎へられたやうに、すぐその堤について右に入つて、やがて皆生の村に下りた。そこから一條の道が、靑々とした稻田と砂丘との間を走つてゐる。砂丘は行くに從つて、起伏して、その上には松林が斷續し、松林と松林との間には、畠があらはれるかと思ふと、忽ちそれが擴がつて、桑の葉、麻の葉、綿の葉、芋の葉などの、趣きの變つた葉形のとりどりが、少しく隔たると一樣の靑色に融け合つて、涼しい顏に黐つて、いかにも濱邊らしい生生した爽かな香をたたへてゐる」

かうした情趣に富んだ畠と松林と砂濱とが、幅一里、延長五里、日本海と中海の間に延び出てゐるのが、かの夜見ケ濱、又は弓が濱)である。天の橋立を思ひきり雄大にしたものとして、既に多くの文人によつて讚美されてゐるところである。そして、この夜見ケ濱の突端にあるのが、境といふ、船着きの常として、風儀はあまりよくないが、賑やかな港町で、そこを私はかう書いた。

「町全體が海峽に沿うて出來てゐるので、町は東西に細長く續いてゐた。中海と外海とをつなぐ一里ばかりの長さの海峽は、四五町の幅をもつてゐて、海水はいろんな浮游物を湛へて、大きな河のやうに流れてゐた」

この境から、發動汽船に乘つて、對岸の出雲の陸地について、三十分程行くと、美保の關に着く。美保の關は安來

節で名高い『關の五本松』のあるところ、このあたりでの遊樂の地として知られてゐるが、私はその風光を最も愛する。で、そこを私はかう書いた。

「船は港内に入つて行つた、港口は丁度貝殼の口のやうに、美保灣に向いて開いてゐて、淸澄な濃藍色の深い水を湛へてゐた。高い六枚屛風をめぐらしたやうな鬱蒼とした山の下の、僅かな平地を工夫して築かれた、半圓形の石垣のつらなりの上に、町並は櫛比して、小さな環狀を形造つてゐる。そして、その樹木の溢れ落ちさうなほど豐かな山と、家々の裏手にそれぞれ小舟を繫いである石垣の上の町並とは幽邃の水の上に、繪のやうな影を涵して、およそ想像し得られる限りの美しい港をつくり上げてゐた」

一夜、二夜どまりの遊びの人々をのせて、船はこの小さな港を出入する。夜ふけて、欄に打寄せる荒い外海の波は、旅客のまどかな夢をさますであらう。三味の音は、つねに風浪の響に和してただよひ、蕩兒の胸に云ひ難い寂寥と哀感とを囁くであらう。私の小說の主人公と女主人公とは、この美保の關から、松江の方へ行つた。その海上の景色は、あまり人は云はないけれど、私は好きである。

「船は出雲の海岸に沿うて、中海を橫ぎつて、馬潟の瀨戸にさしかかつた。もうそこは中海と宍道湖とをつないでゐる大橋川の河口で、一面に蘆荻の生ひ茂つた川尻の洲が、綠色もやや衰へてもう秋の感じを出してゐた」

船で松江へ行くのもいいが、米子の方からすぐ山陰線の汽車で、出雲へ入つて行くのもいい。山陰道といへば、一體に暗鬱な、陰氣な土地と思はれてゐる。それも間違ひではない、鳥取邊はとりわけその感が深いが、私の生れた米子あたりから松江の方へ入つて行くと、幾分明るい、和んだ氣分が動いてゐるやうに思はれる。とりわけ、松江は山陰の誇りとも云ふべく、そして、その松江の心臟とも云ふべきは、宍道湖である。私はこの靜かな市街と美しい湖水とを、どんなにか愛してゐるか知れない。松江大橋、千鳥城、嫁ヶ島——

ここには曾て、小泉八雲(ラフカディオ・ヘルン)が住み、また、大町桂月も住んだ。私は少年時、桂月翁の『一笠一簑』を愛讀したやうに、後年、小泉八雲のこの土地を描いた小品をどんなに愛したかしれない。

私の生れた米子の町は、町そのものとしては、むしろ平凡である。でも、いつか故有島武郎氏は、そこの城山に上つてその大きい景色を讃美されたさうであるが、まことに、その通りで、その周圍は美しいのである。町のすぐ上に聳えてゐる大山の美に髣髴せしめたのは、私がこれまで見た狹い範圍の山では、富士山をのぞいては、鳥海山と白山位のものであつた。但し、この山は米子へ行くまでの汽車の窓から見たのはいけない。米子以西、とりわけ出雲から見なければいけない。それゆゑ出雲富士といふのである。

山陰は古い國である。特に、出雲は傳說の國である。古事記の多くの傳說は、そこで生れた。杵築の出雲大社は云ふまでもない。美保の關の惠比須樣を祀つた美保神社も、その附隨した傳說によつて、古代の神々の自由奔放な生活を語つてゐる。そして、その生活慾の名殘は、今でも土地の人々の胸に波打つてゐるのである。この土地の夏の夜の盆踊りは、よくその佛を語つてゐる。松江に住んだ小泉八雲は、この美しい行事を見のがしてはゐない。山陽道の方から山陰へ入つて行つた、そこの或る村で、一夜、彼はその賑やかな盆踊りを見て、これを美しい筆で傳へてゐる。私もこの鄕里の夏の夜の農民の饗宴を自分の作中に書き洩らす事は出來なかつた。

「夜はもう何時頃であらうか? 月は今中天にかかつてゐる。その月の中の山河の隈が冴えて、はつきりと見えてゐる。その月を仰いで、純一は敏子に語つた。この靜かな海と樂しい濱とを照らしてゐるやはらかな月の光を見ると、永遠から永遠につづく無窮の時がおもひめぐらされる。その月の下で、かうして踊つてゐる人達は、ここに束の間の影をとどめて、やがて此の世から消え去つて、そしてまた次の時代の人達が、かうして同じやうに、この砂濱の上に踊るであらう――」(大正十五年五月)

婦人と讀書

一

モダアン・ガアルと呼ばれる新しい婦人のタイプの出現は、かなり大きな問題を、社會に投げかけたやうである。もとより、かうした新しいタイプの婦人は、餘程以前から存在してゐたに違ひない。けれども、以前はただ例外的にすぎなかつたものが、今ではかなり普遍的に見出される事に、人々は驚かされたのであるかも知れない。そして、モダアン・ガアルの名の生ずるとともに、その實が愈々これを充たすであらう事は、かうした社會現象の一つの法則であると私には思はれる。

然し、このモダアン・ガアルそのものの概念は、その内容の解釋は、人によつて、まちまちなやうで、いろいろの論議があるにも拘らず、未だ、確然たる輪廓を以て描き出されるまでには到らないやうである。それも或ひは當然の事であらう。混沌たる過渡期にある、現代社會の多くの現象は、常に動き變じてやまないが、女性の心象そのものも、また頗る移動的で、モダアン・ガアルといふのも、多種多樣な方角に動いて、未だ一定の明確なタイプに凝結しえてゐないのであらう。ただ、とにかく、一般に、現代の女性が、日に日に舊來の慣習の桎梏から脫して、著るしく自由になり、能動的になり、自主的になつて來た事は、まがふ方なき事實である。そして、また非常に喜ばしい事でもある。

モダアン・ガアルといふのも、若干の小說作家によつて解せられてゐるやうに、單にあくなき肉的享樂の追求と、外面的粉飾の進化と、アモラルな傾向の增大と、一言にして、婦人の公然たる娼婦化にすぎぬならば、その意味でのモダアン・ガアルには、私は少しもよりよき人生の端緒を期待する事が出來ない。

私の解するモダアン・ガアルは、全くそれとは異る。然し、その名目はどうでもかまはない。私はこの點に多く拘泥する必要を有たない。

私が新時代の婦人に望むところは、さうした頽廢期の一般現象である、濕潤した壁上に生ずる黴の花の如きものでは決してない。さうした破壞的方向への盲動とは反對に、健全な建設的方向への努力であらねばならぬ。人生の義務からの逃避でなく、反てこれに直面して、目前を糊塗しない勇敢さであり、感情に盲動して、本能的に、流れに身をまかせて生を粗末に取扱ふ生き方とは反對に、周圍に對しても、自己に對しても(特に自己に對して)十分に批評的であつて、凡てを冷靜な理性によつて判斷をし、人生に對しても自己に對しても、決して正しい指點を失ふ事なく、しかも同時に、女性らしい優雅と纖細とを失はない事こそ望ましい。結局、內面的の深化、卽ち、卽ち眞の意味の敎養こそ、新しい婦人に最も望ましい事に思ふ。

文化とは、畢竟、敎養の義である。敎養を缺く文化といふものは考へる事が出來ない。アメリカ式の機械文明は、殆んど文化と云ふに値しないであらう。然し、この敎養とは、一般に直ちに推論されるやうに、單に書物を讀む事を意味するものでは決してない。書物を讀む讀まぬといふよりも、まづ批評的精神をもつて、自他に對するのを以て、その端緒とする。とは云へ、讀書は文化人にとつての最高の享樂でもあり、義務でもある事は云ふまでもない。この意味で、我々のモダアン・ガアルは、よき讀書家であるべきである。然し、その場合、最も重大なる事は、單に書物を讀むといふ事でなくて、いかなる書物をいかに讀むかであるのは、今更斷るまでもない事であらう。

二

近時、電車中に讀書しつつある婦人を多く見かけるやうになつたのは、喜ばしい事である。これは一つは、婦人が

車中で男子と顔見合せてゐる事を好まないといふ事情に促されてゐる點も尠くはないかも知れないが、單に、それだけの動機からとは思はれない。婦人の知識慾は、その人間的自覺に隨伴するものだからである。それゆゑ、家庭に於いて、彼女達が、なほ一層よき讀書家である事を私は想像したい。ただ、その際に、電車中で讀むのに、最も不適當な書物を、往々、婦人の手中に見る事を不思議に思ふ。例へば、カントの『純粹理性批判』や、スピノザの『エチカ』の如きは、電車內に持込むには、その內容が少しく重すぎはしないかと思ふのである。

然し、婦人の中には、元來、非常に難解の書物を讀む事を誇りとする傾向もあるやうである。さうした婦人には、私は何を奬めていいかを知らない。自分の未だ讀む機會のない書物を奬めるのは無責任であるし、それに、多くの豫備知識を必要とする書物に、その準備なくして飛びかかる事は、努力の割に効果の上らない事だ、と信ずるから。私の考へでは、婦人はやはり、幾分詩趣ある、藝術的な書物を讀むべきではあるまいかと思ふ。哲學上の著作にしても、直にカントにつくよりも、その前に、もつと容易に、かつ興味を以て親しみうべき著作は、決して尠くはないと思ふ。

けれども、もつと廣い範圍に於いても、日本の古典はしばらく措いて、歐羅巴のもので、特に日本譯あるものといふ條件つきで考へてみると、存外適當のものが少ない。それは私の讀書範圍が狹少であるからかも知れないが、また一つは、私の奬めたいと思ふものが、なほ未だ譯せられてゐないからでもある。私自身好んで讀むスティルネルや、ニイチエや、スタンダアルの如きは、敢て推奬する氣にはなれない。それは幾分、強烈な火酒(アルコール)のかをりを有つからである。その點で、ラスキンの如きは、婦人のよみ物として理想的なもののやうに思はれる。ラスキンの諸著、概ね適當であるが、とりわけその『胡麻と百合』は、是非一讀を望みたい書物である。この書は三つの講演を集めたもので、第一の『胡麻の卷』卽ち『王者の寶庫』は、すぐれた讀書論であつて、讀書の意味を敎へるとともに、人生のよき智

慧に充ちてゐる。が、更に第二の『百合の卷』即ち、『女王の花園』こそ、婦人のために、ラスキンがあらん限りの愛と智慧とを披瀝したものと云つてよい。婦人にとつては、そのよき誇りを傷つけらるる事なくして、しかも、よき敎訓を受ける事が出來る。こんないい書物を讀まないでゐるのは、何といふ損失であらうか。

この著については、エッケルマンの『ゲエテとの對話』、アミエルの『日記』ケエベル博士の『小品集』三卷を奬めたい。この三種の書物は、敎養について、實に多くの事を敎へるものである。我々が自分の混亂し、動搖した生活を整理し、安定せしめようと欲するとき、これらの書物は、必ず來つて助けてくれるに違ひない。

婦人にとつては、幾分、所謂「癪にさはる」ところもあるかも知れないが、ワイニンゲルの『性と性格』の如きは、むしろそれ故に、一應目を通しておくべき書物であらうと思ふ。私はこれ程天才的な書物をあまり知らない。男女兩性に關するこれ程透徹した觀察は、さう多くはあるまい。たとひ多少の誤謬はあるかも知れないにしても。それから、近く物故したエレン・ケイの諸著は、むしろ新しき時代の婦人の常識を代表するものとして、私には意味を有つてゐる。それゆゑ今更推奬するまでもないであらう。この外、比較的新しい著書では、ハピイニの『基督の生涯』は、最も詩趣深き基督傳として特に推したいものである。

三

最後に、なほ特に婦人に奬めたいのは、婦人自身によつて書かれたその自傳、日記、書簡等のパアソナルな書物である。

我々が、例へば、ルソオの『懺悔錄』を初めて讀んだ時、それより受ける感動は甚大なものであるが、婦人もまたこの同じ書によつて、それと同程度の共感と感銘とを受けるであらうかどうかは、私にはいささか疑問に屬する。も

とより、かうした正直な(たとひ多少の異論はあるにしても)書物が、何等の感銘をも人に與へないといふ事はないが、また、そこには性の相違からくる、ある不快感、少くともある親しみなさが横はる事がないとは云へないと思ふ。ところが、同性によつて書かれた正直な告白には、その心配はない。そこで、その效果は一層直接的に働くであらうと豫想される。ただ遺憾な事には、ルソオの『懺悔錄』に匹敵する女性のそれが、未だ十分にはない事である。もつとも、必ずしも絶無ではない。マリイ・バシキルツェッフの『日記』ソニヤ・コヴレフスカヤの『自傳』の如きは、その點で高い價値をもつてゐる。

マリイ・バシキルツェッフは、露西亞の將軍の娘で、畫家として聞え、その『ミイチング』といふ繪など、非常に有名であるが、我々にとつては、その日記こそ實に貴重な婦人心理の啓示である。この人の事は、曾て德富蘆花氏の『靑山白雲』か『靑蘆集』かに紹介されてゐるから、ついて見られるといい。また、最近、その日記の全譯を野上臼川氏が出されるさうである。ソニヤ・コヴレフスカヤもおなじく露西亞の生んだ女流の天才である。その少女時代に於けるドストエフスキイとの關係など、我々文學者にとつて興味のある事件であるが、數學の天才として、ストックホルムの大學教授となつたこの人の內生活の記錄もまた貴重である。この自傳の外、別にソニヤの友人のアンナ・シャルロッテ・レフレルによつて書かれたこの人の記錄も貴重である。そしてこのソニヤの自傳は、たしか野上彌生子氏が邦譯されてゐる筈である。

その他、まだ二三重要なものがあるが、未だ邦譯がないからわざと擧げない。そして、かかるすぐれた婦人の自傳やメモワルが、今後續々飜譯される事は、我が婦人文化の向上のために、極めて望ましい事に思はずにゐられない。

(大正十五年五月)

少女美

×

花が散ると、靜かな雨について、新綠のシイズンが來る。心のおちつく綠の色――靑、藍、紫などのしつとりとした色調につつまれて、山も海も、はては都會さへも、初夏の喜びに躍るかと思はれる。綠は未來を象徴（シンボライズ）する。まことに希望のさながらの色である。

綠色のセルのひとへ、綠色の帶、綠色の下駄のはなを、指環のたまには綠玉（エメラルド）、それに綠色のパラソルをさして、靑葉のかげをさまよひ歩く、ほんのり白いおもかげの、一人の少女が、美を慕ふ私の眼には浮んでくる。それは私の初夏の白晝（まひる）の夢である。そして、その少女の眼は、いかに淸水のやうに澄みかがやいてゐることぞ――その眼は靑い海のやうであると、泰西の詩人の詩にはあるけれど、私もこの美しい眼の靑い波におぼれるかの思ひがする。そして、これは私の理想の少女の象徴（シンボル）である。

これまで私はいろいろの少女に逢つた。そして、そのとりどりの特色といふことを感じさせられた。然し、おしなべて云つてみると、さうした少女の美は、その眼にあると云つてしまつてもいいやうな氣がする。なぜそのやうに少女は美しい眼で、ぢつとこちらを見るのか――その少女の美しい眼には、何とも云へない崇高さがある。邪氣をはらふ淸高美がある。澄んでゐて、朗かに光つてゐて、愛らしくつて、それでゐてちつともいやらしくはない。正しきを愛し、曲れるを憎む一つの精神が、それに宿つてゐるかのやうに見える。或る云ふに云へない思想が、つまり、人生への愛が、その眼にたたへられてゐる。躓きを知らぬ心、疑ひを知らぬ心、僞りを知らぬ心、惡を知らぬ心――それは

純眞そのものである。

×

「夢みるやうな眼」を愛する人がある。うつとりとした、やさしい無智を愛する人がある。それはその人々の好みであらう。私もそれをどんなに愛して來たことであらう。が、今私には、澄んだ、聰明な眼が一層好きである。感情にくもらされぬ眼が好きである。批評のはたらく眼が好きである。まぶしく、キラキラする眼よりも、冴えて、底光りのする眼が好きである。さういふ眼の物語るものは、その少女のヴィヴィッドな爽かな、性格である。

眼は魂の窓とは、皆から云ひ慣はされてゐるが、少女に於いて、とりわけそれが思はれる。

×

濕ひのある、柔かな、そして敏感なその少女の眼の外に、私の心をたのしますものは、少女の髪である。日本ならば「綠のくろかみ」西洋ならば「輝くブロンド」——それはあだかもその持ち主の感情の嫋々たる音樂のやうにも思はれる。その柔かな豐かな髪を、卷くもよし、編むもよし、結ぶもよし、垂れるがままにするもよい。ウエイブの明暗の美、島田まげの淑やかな線の美——そのとりどりに、するがよい。

いい髪の毛をもつてゐる友を羨む少女がある。私にはその少女のやるせない心がわかる。然し、いかにその髪の毛が少いとは云へ、やはり若さがそのつやを見せてゐるのこそ、嬉しくはないか。色の白い少女の中には、髪の毛のあかい人もある。然し、今はあかるい髪のめでられる時になつてゐる。縮れた髪も、くせのある髪も、それは自然のつくれるウエイブである、あまり悲しまないで、何處までもわが姿の天然の美を見出すのがよいのではないか。その顏だちにびつたり似合ふときには、斷髪もまた美しい。よく運動會なんかで見る、ユニフオーム姿の少女が、斷髪の頭を幅廣のリボンなどで卷いてゐるのなどは、實に新しい美感をそそる。

女の人には、髮をうたつた歌が多い。與謝野晶子夫人の若い時分の歌には、とりわけ「くろかみ」の歌が多かつた。黑髮をもつて、若き日の情熱をあやしくもくるほしく、歌ひ切つたとも云ひえられる。髮について思ひ出すのは、かの傳說のトリスタンとイソルデの悲しい物語――金髮のイソルデの美しい戀物語である。一すぢの金髮を燕がくはへて、海のむかうからはこんで來たといふロマンティックな物語のはじまりの上に、若い心は果てしない夢を追ふであらう……

×

この頃の若い娘は、實に美しく見せることが上手だと、ある人が云つてゐた。それは實際その通りである。お化粧の上手さ、言葉の美しさ、着物のきこなし、色のとりあはせ、髮の結ひ方――通りすがらに、それは爽かな風のやうに、こちらの氣持を吹いてゆく。けれど、心には殘りとどまらないで、風のやうに早く行つてしまふ。

それなのに、すぐれた詩、または小說に出てくる一人の少女は、いつまでも人の心に殘つて行く。ゲエテの『ヘルマンとドロテア』の中のドロテア、サン・ピエルの『ポオルとギルジニイの』中のギルジニイ、ツルゲエネフの『貴族の家』の中のリイザなどが……髮でもなく、化粧でもなく、着物でもなく、その性格、その純情によつて。

そこで、私が思ふには、少女はやはり心によつて、この人生に詩を書き込まなければならない。髮をととのへ、姿をととのへする上にも、更に更に、一層リファインしたいのは、その心である。すぐ忘れられてしまふものでない。永遠のものによつて、人々の心に詩を書き込んでほしいと云ふ事が望まれる。それが永遠の女性の神々しい美ではあるまいか。

×

この世のたのしみ――それはまことに、愛の心の豐かにあらん事である……

どういふ泥土の中にゐても、どういふ荒地の生活の中にあつても、ほほゑんでゐるところに、少女の美しさがある。純潔なところに、少女の誇りがある。

江戸時代、若くはもつと以前の日本人の生活では、十四五歳にして、もうすでに多くは結婚をしたらしく思はれる。その頃の人には「少女時代」は殆んどなかつたと云つてもいい。それに此頃では、二十四五までも、十分の少女の生活をなし得ると云つてもいいのは、反ていい事ではあるまいか。女の人にとつて「少女時代」の豊かで十分であるといふのは、ほんと幸福である。この時代に出來るだけものを學び、出來るだけ感情を洗煉し、そして、清澄な心、透徹な頭をもつて、未來をわがものにしてゆくのこそ、少女の雄々しい決心でなくてはならない。

結婚を急ぐことはない。まちがつた結婚を出來るだけしない方がよい。冷靜に、自分で判斷をして……その上の事は、ただ神の思召し、運命のとりはからひである。自然の力を信じて、すべてのことは、時に應じておとづれてくると確く信じてよいであらう。（大正十五年四月）

山の小鳥

伊香保の五月――

今日も湯元の方へ、浴後の散歩をする。

湯元の入口、榛名の山路にかかる手前の橋のところに、Hホテルといふのがある。

明治初年の洋館を想はせるロオズ色に塗つた古めかしい家のかまへが、何となく氣持がいい。誰かが巴里郊外の喫茶店とでも云ひたいやうな感じだと云つたが、その妙に時代のついた鄙びた工合が私は好きなので、よく珈琲を、時

には麥酒をのみに立寄る。

玄關わきのところに、およそ四五百年も經つたかと思はれる、枝ぶりのいい楓の樹がある。こんな大きな楓を、私はこれまで見たことがない。二三日まへに行つた水澤の淸水屋の前庭にあつた楓とともに、この伊香保の名木と云つていいであらう。この前、ここの女給さんに聞くと、宗祇の植ゑた楓ださうでございますと云つた。それなら古いのも尤もだ。

玄關でおとなふと、いつもの女給さんでなく、はじめて見る十六七の少女が出て來て、

「いらつしやいまし」と云つた。

エプロンも何もかけてゐない。女給さんではなくて、ここの娘でもあるらしい。

揃へてくれるスリッパをはいて、右側にある廣い食堂に入ると、卓上の花瓶には、今日は桃の花が挿さつてゐる。

「珈琲を……」

「かしこまりました」

「あ、一寸……紅茶があつたら紅茶にして……」

「お紅茶でございますの」

から云つて、その娘さんはむかうへ行つた。その間、窓により、また欄に出て、眼の下の湯澤の流れの、代赭色に染まつた岩床を見下す。ここら一帶に、崖の上にこんもりと楓が枝をかはし、その柔かな、小さな葉のギザギザが、層々に陰影づけながら、垂れ下つてゐる。やや長けた綠の色は、云ふに云へない快活な感情を誘ひ出す。

もう紅茶の出來るころと思つて、食堂にかへると、むかうの方で、衝立越にセルの裾の見える娘が、やはらかに口ずさんでゐる。

「ミレド……ミレド……ミレド……」
やがて、こちらへやつて來た彼女は、
「お待たせいたしました」と云つて、白いニッケル盆の上に、紅茶の土瓶、牛乳の壺、砂糖の壺をのせたのを持つて來て、入れてくれる。
「むかうの人は薄いの薄いのとおつしやるのですのよ……でも、日本の人は濃いのが好きですわねえ」と云つて。
ここは西洋人が多く來るのである。ずつと下の方にも、Iホテルといふのがあるが、この方が私は好きだ。
娘はいろんな話をする。この谷でなく鳥のなくこと。ほととぎす、ひわ、こまどりなどのこと。秋の紅葉のこと。
桃も櫻も梅も、ここでは一緒に咲くといふこと。
「もう一つ……」
紅茶は丁度二杯分だつた。それが旨い、紅茶の味がはじめて分つたやうな氣がする。
「秋、きつといらつしやいませ。ここらの楓、これで一本々々染め色がちがひますのよ」と可愛い表情をして娘は云つた。そして、私が歸る時には、小鳥のやうないい別辭を惜しまない娘であつた。この娘、いかなる人妻となつて、どんな世をすごす事であらうなどと思ひながら……
溪に沿うて、ずつと引返してから、湯澤の方へ、私はおりて行く。
湯澤の溪底には、代赭色の沈澱物をあとに殘しながら、湯があたたかい湯氣を立てながら流れてゐる。
流れの中に無雜作にころがしてある石を踏み越えて、あぶない足つきで、むかう側へ渡ると、目の上にはずつと高く、こんもりした杉林がすくすくと黑く連つてゐるが、その下の手前には、いろんな雜木が若葉をみづみづしくひるがへして、いかにも五月の爽かさを偲ばせてゐる。そして、その中には、いろんな小鳥がしきりなしに囀つてゐる。

一寸足どりのむづかしい溪を通り拔けると、辨天の瀧の方へ行くかなり廣い道へ出る。すると、もうそこらは小鳥の聲ばかりである。小鳥はただ囀り交すばかりでなしに、木から木へ、道の一方から一方へと、ばたばたと飛び移りながら啼いてゐる。

この伊香保では、——ここには限らない事ではあるが——ほんたうに、小鳥は何處へ行つても啼いてゐる。

あの水澤へ行く道では、麓の澁川の町の飮料水になるのだといふ淸冽な水の流れてゐる黒澤のほとりに、みづみづしい落葉松の葉のパッと開いてゐるあたりに、かず限りなく、いろんな小鳥が啼いてゐた。山鳩、かけす、駒鳥——それから、時たまふつと啼くめづらしい鳥の音を、あれは瑠璃鳥だと云つて、この町の友達が敎へてくれた。

ここには、その瑠璃鳥は啼かないやうだが、駒鳥は一層よく啼いてゐる。

鳥といふものは、全く可愛らしい。そして、いかにも淨らかだ。その淨らかさは、丁度まだ世ごころつかぬ乙女のやうだ。淸らかな水のほとりに住んで、その水をすすつては歌つてゐる。おなじ溪でも、水がなければ鳥は啼かぬ。水の流れるところには、必ず鳥の聲がする。

ああ、山の小鳥よ、おまへは水をすすつては、生の喜びを歌はずにはゐられないのだらう。その聲をきいてゐると、憂鬱な心の私も、今日は何がなしにうれしい。

そんなにここは、なにもかも美しい……

その處を得たものは、みな美しい。

どんな美しいものでも、その處を得なければ、その美は消されてしまふ。

人間もそれぞれ、そのゐべきところにゐる限り、生きてゐるだけの理由があるのである。

人はそのゐべき地位にゐなければならぬ。卽ち、その性格に適した生き方をしなければならぬ。流れに隨つて、流

れて行くのがいちばん自然である。
無理のないといふ事が、何事にも尊い――
こんな風に、私はまたいつもの癖で、木の下のみを歩きながら、とりとめのない感想に耽るのであつた。（大正十五年三月）

花の備忘録

手もとの備忘録をひらいてみると、四季折々の花のことが控へてある――

櫻の花

種類――彼岸、染井、吉野、大島、山櫻、八重……
櫻の保存會といふのもある。

松雪草

風鈴のやうな白い花の咲く草。
英名、スノオドロップ。
秋九月にうゑて、二三月に咲く。
草立、五六寸。
花壇に密植する。
四五年その儘におく。

半陰の地がよい……

たんぽぽの花

蒲公英――通常、黄であるけれど、これには白もあつて、どうかすると、野山で發見することもできる……――こんな風に、順序も次第もなく、書きつらねてある。これらの言葉は、大抵、時々の新聞の記事やら雜誌やらの、極めて文學的ならぬ種類のものから控へ取つたものであるけれど、その片言隻語は、果てしない詩情を私の心に喚び出すのである。とりとめなくそれを讀んで行くうちに、忽ち、心は花の野山に飛んで行つて、かぐはしい若草を藉いて、身のまはりの花の馥郁たる香りを嗅ぐやうな思ひがしてくる。

私はこれを花の備忘錄と名づけてゐる。けれどもそれはかうした散文的な拔書のためではない。その中には、もつとたのしい、生きたメモランダムが取つてあるからだ。それを見て、すぐになつかしい曾遊の日の喜びを蘇らせるものが……そして、そのなつかしい記念は、その折々に、その行つた處で摘みとつた花の――押花なのである。

そこには、去年の五月、伊香保で摘んだ花もある――稀には高山植物の花なども合せて、すべて二十種位もあらうか。

今ひらいてみると、綠のみづみづしいものであつたその葉や、ふつくりとしてゐたその莖が、褐色に變つて、花の白かつたものや、紫だつたものまでも、おなじやうに薦色がかつてゐる。ただ、岩躑躅の花の黄色いのが、その摘んだ時とおなじやうに、やつぱり明るい黄色い花瓣を五つ、平らかに開いて、花蕋の愛らしい花頭を美しくもたげてゐる。

この岩躑躅は、榛名の山のそこここに、あの嶮しい二つ嶽のはるかな斷崖に、あだかも湧き出した淸水のやうな淸麗な色をつらねてゐるのであつた。この色の褪せぬ岩躑躅の花をぢつと見てゐるだけで、私はあの時の全山の翠色を

眼底に思ひ浮べることができる。

根のついたままに押してある麝香菫――これは葉形のギザギザになつてゐるのが、丁度楓のやうで、普通の菫に比して、その芳香が深い。菫といへば、もう野菫か、ヴァイオレット、三色菫位しか知らなかつた私には、この麝香菫はめづらしいものであつた。けれど、このほかの草葉、草花は、おほむね、極くありふれたものである。

あの山には「どうぞ草木を折らないで下さい」といふ制札が、いたるところに立つてゐたし、それでなくとも、私は無雜作に花を摘み取るやうな事は、これまであまりしなかつたので、榛名の山のゆきかへりにも、花を採集しようなどといふ事はなかつたので、いろいろ珍らしい花をその儘見すごしてゐたが、その後、ふと考へついて、伊香保よりも麓の方、水澤や湯中子(ゆなかご)の方へ行く路のあたりで、いろいろ花を摘んだ。

岩躑躅の花よりも、一層美麗な原色をとどめてゐる山吹の花は、榛名の湖水から流れ落ちる沼尾川の下流にある辨天の瀧へ行く路に、一杯に咲きつづいてゐたものである。それが白い木苺の花と點綴し合つてゐたのが、實にいい眺めであつた事を思ひ出す。

水澤路で摘んだ蒲公英の花は、やはり黄いろかるべきであるが、もともと毛のやうな花瓣であるためか、引立たないで、ザラザラしてゐる。

さまざまの花、草花の色のうち、かうして押花にしてみると、黄色がいちばん褪せないで、紅や紫などは、あまりにもすみやかに褪せてしまふ。それが寂しくもあり、また何かしら考へさせもする。

榛名神社の社頭には、その日は、紛紛たる落花であつた。山櫻はもう散つてゐて、その日の花は、吉野とか何とかいふのでもあつたらう。それが室田の方からのぼるとつつきの橋のところから、鳥居のところなどに眞白に、飾つたやうに落ち散つてゐた。そして、さつと吹いてくる山嵐に、それがあちらによれこちらによれする。ぢつとその風情

を見てゐると、古風な日本的情感が、心に漲り渡つて「靜心なく花の散るらん」と歌つた昔の人の感懷が、身につまされて思ひやられる。その時の花瓣が五六點ここにある。然し、私はその花瓣をここに押花にしたのが寂しい。それは既に聲のつぶれた歌妓の姿であつた。花ではなくて、花の殘骸であつた、心なきわざよと、ひそかに嘆ずる。

美よ、美よ――それは、その消えゆくを、捉へようとするな、ただ、見て悲しめよ。

ここには、また赤い躑躅の花もある。平凡な花だ。けれども、その咲いてゐた土地は平凡ではなかつた。物聞山から、躑躅ヶ岡へつづく道――それを更に私は歩いて行つて、人ひとり通らぬ山路を、たうとう二里もあるガラメキ溫泉まで行つてしまつた。相馬ヶ嶽の中腹の屛風で圍んだやうな山峽にあるその溫泉は、溫泉宿がたつた二軒あるきりで、ほんとに寂しい、靜かなところであつた。その一軒の宿には、文子さんといふ十七八になる娘があつた。色は黑いが、愛らしい娘で、ハキハキといろんな事を話してくれた。「こんな山の中にゐて、寂しくはないの？」と訊いたら、笑つて「いいえ、もう馴れとりますから……」と答へた。（大正十五年三月）

灯ともし頃

×

旅をしてゐると、旅は道連れ世はなさけといふ、このありふれた俚諺のほんたうの味はひを、しみじみと悟る。人道主義などとやかましく云はなくとも、人生の眞味と、人間愛の根本とは、要するに、この一句に盡きると思ふ。これ以上なんの理窟も要らない。

旅は道連れ世はなさけ、弱い儚い運命を授かつてゐる人間同士の、これが自然の道德律である。人生を支持する力

は、この相互扶助の觀念でなければならぬ。因緣が結びつけた一人の人は、それだけで尊い。

人生は所詮、旅だ。どんなに思ひ上つて、この世をばわが世とぞ思ふと云ひ得る幸福な人でも、所詮は死ぬべき運命の人間である。自分一人では立つ事の出來ない、あはれな人間である。その事がほんたうに分りさへすれば、道連れの有難さが、人のなさけの尊さが、無理でなしに心に入つてくるであらう。

×

昨年私が伊香保に行つた時の事だ。上野から、發車間際に乘込んだ小さな皺ばかりのお媼さんがあつた。自分の體量の何倍もありさうな大きな荷物を三つも、後から投げ込まれた儘、暫く出入口のところでハアハア云つてゐたが、私の傍の空席を見ると、よちよちとそこへかけて、いきなり私に、その手に持つた風呂敷包を上の棚にあげてくれと云つた。受取つてみると、一つは莫迦に重く、一つは莫迦に輕い。重いのは餅でもあつたらうか、輕いのは確かに煎餅だつた。

それから、そのお媼さんは、私の行先を聞くと、すつかり安心したやうにぴつたり寄り添つて、分りにくい方言で、間斷なくおしやべりを始めた。東京の事、家の事、孫の事、そして、荷物の事——鴻の巣で降りるのだが、いつでも停車場では、驛の人が改札口まで搬んでくれる事、だから下まではあなたが搬んでほしいと云ふのである。

この一切あなたまかせで、安心しきつてゐるお媼さんの氣持は、可愛らしくて、何がなしに微笑まれた。で、鴻の巣に來ると、私は網棚の風呂敷包を下してやり、出入口に置いてあつた三つの大きな荷物を、客車から下まで搬んでやつた。

「えらいまあお世話樣になりました、ふんとに有難うございますだ……」と云つて下りて行つたお媼さんは、今度は驛員に向つて、また何かしやべつてゐた。

×

またある時、電車中で見た一つの事實をも、私は想ひ出す。

私が乘つたその電車には、向ひ側の席に、黑い眼鏡をかけた色の白い美しい靑年が、眞直に向いて、いかにもゆつたりと腰をかけて、何といふ事もなく、にこにこと笑つてゐた。その隣には、一人の若い娘がかけて、おなじやうににこやかに笑つてゐた。二人は連れであるらしかつた。けれど互に顏を見合はすでもなく、もとより話しかけるでもなく、ただぢつとかけてゐるのだつた。

やがて、ある停留所で電車がとまると、その娘が突然立上つて、

「ここで降りますのよ、さあ……」と云つて、その白い手を差出して立上つた靑年の手を取つた。そして、彼は彼女の導くままに、電車を下りて行つた。

その靑年は盲であつたのだ。それなのに、何といふ幸福さうな、安心しきつてゐるやうな顏付をしてゐた事であらう。

×

人生は所詮、旅だ。しかも、苦しい旅だ。

「世に生きて行くといふ事は、むづかしい事である、ああ、疲れ果てたわが心よ」といふアミエルの歎聲が、時折り、しみじみと思ひ出される。この言葉に深く動かされ、同感に堪へなかつたのも、思へばもう十年も前の事である。今、アミエルの日記を讀むと、それは哲學者の最後の病苦の時の言葉であつた。が、人生の途上にも、私達はさう云はずにゐられない事がある。

それでも、人間は生きる。どんな屈辱を忍んでも。お辭儀ばかりして世を渡つてゆくといつたやうな人の寂しい後

姿を、私はしみじみと眺めやつて、一種の悲壯な感をさへ起す。

負けたる人――などと云はずにゐられぬだけに、かへつて私にはそれが出來ない。なまじひに妙な誇りがあるだけ、それだけに一層私の方があはれであるかも知れない。

だが、卑屈といふ事は、決して好ましい事ではない。僅かばかりの好運に思ひ上つて、驕慢に振舞ふのも、淺墓に見えてうとましいが、人の眼色ばかり見て、媚びたり卑下したりする卑屈も、決していいとは云へない。

ただ、當り前にしてゐたいものだ。當り前に、何でもなしに――それが何よりだ。威勢がよくなつたからとて思ひ上らず、落目になつたからとて卑下もせず、いつもおなじ自分でありたいものだ。負けたる人とは、實はそれを云ふのだ。外觀に囚はれぬ人、しかも靄々たる和氣を以て世を包む人を云ふのだ。

×

こんな事を書いてゐると、灯がついた。何だか魂が入つたやうな氣持。一日のうち、この時刻もうれしい。「灯がつく時はいい時」とヱルハアレンの詩句にあつたが、私もさう思ふ。街を歩いてゐて、急にパッと灯がつく時など、何だか急に明るい幸福感が心にも點ぜられたやうで、樂しい灯の下を想ふ。

今はその灯の下にすわつてゐる、そしてその灯を見てゐる。かうしてぢつと灯を見てゐると、「汝等何ぞ明日の事を思ひ煩ふや、一日の苦勞は一日にて足れり」との基督の言葉が、何とも云へぬ慰めとなつて心に湧く。

あの懷疑と厭世の詩人レナウが、冬の夜、雪の曠野に馬を驅つて、とある農家の窓から、あかあかと灯が洩れて來るので、ふと中をのぞき込んで、そこに樂しげな團欒を眺めた時、ゆくりなくも忘れて久しい信仰に返つた氣持さへ分るやうな氣がされる。(大正十五年二月)

町の散步

春にかぎらず、秋にかぎらず、綿のふくらむやうな陽光の射し入り方がして、風もなく、隈もなく、何處から何處まで明朗々な日。

そんな日は、妙に氣分が落着かない、家にゐても、仕事に手が着かない。……それで、煙草の二箱ぐらゐ袂に入れて、懷には、何處か氣の向いたところで、紅茶か珈琲の一二杯のめる位、好きな本の一二册買へる位の小遣の用意のある場合もあり、ない場合もある。

「一寸出てくる……」と、こんなに云ひ殘して、ぶらりと出る。

さて、何處へ行かう。ステッキを立てて、その倒れた方に行けばいいのだ。が、あいにく私はステッキを持たない。そこで、自然、馴染の古本屋のある方だとか、小さな公園のある方とかに向ふ。

このあたりは、まだ商店街といふほどでもなく、電車も通らないけれど、人通りは決して少い方ではない。それに近頃は、江戶川から新宿行の乘合自動車が通る。自動車、荷車、オートバイ、おまけに子供の三輪車まで走る。それで、何といふ事もなく、つい橫町まはりをする。

一體、私は橫町が好きだ。私自身が人生の橫町に適してゐるのであらうか。文藝批評家としても、大通りで人の尻にくッついてトコトコしてゐるよりも、橫町で掘出し物をするのが好きだ。實際、橫町にはいろんな面白いものが隱れてゐる。思ひがけもない旨い物を食はせる家があつたり、探してゐる古本が見付かつたりする。橫町の古本屋には、

折々とんだ掘出物があるものだ。私があの柳町の老眼鏡をかけたお爺さんの店で、探してゐた『螢雪軒叢書』の端本を見付けた時などは、實際、愉快であつた。

誰の氣持もさうであらうと思ふが、町といふ町、似てゐるやうで、またそれぞれに違つた氣分があり、好き嫌ひが起つてくる。この牛込界隈で云つて見ると、鶴巻町の早大前へ行く通りは、何だか妙に落着かない通りだ。江戸川から護國寺までの音羽の通りが、かなり退屈ではあるが、まだしもいい。神田、銀座は、少し遠くもあるし、たまに出て行くと、恐ろしく神經が疲勞するので、散歩よりも寧ろ小旅行の感がある。上野の方が、むしろよい。

私の一番好きな道は、神樂坂通りをずつと濠端に出て、あの古風な屋敷門風の停車場の前を右に、松の木や芝草の靑々としてゐる道をずつと新見附の方に出で、新見附から右へ、矢來の方へと遠廻りして歸つてくる道と、喜久井町の方から戸山ケ原の方へと出る道などである。

商店ばかりの町並よりも、商店と住宅との半々になつてゐる位の町並の方が、感じが落着くやうだ。一つは、住宅の垣根のうちに、草花が仄見えたり、綺麗な庭木がこんもりしてゐたりするのを、何がなしに樂しむのかも知れない。然しまた、麴町邊の屋敷町のやうに、內部の少しも分らない圍ひの大きい家續きで、犬がここかしこにしやがんでゐるやうな、ガランとした通りは厭である。

犬と云へば、いつか私の後になりさきになりして、大きなブルドックと、セッタア種の獵犬とを連れて、若い書生風の男が步いてゐた。二匹の犬は實に快適さうに、鎖を引張つては、心から散步を樂しんでゐるやうだつた。かうした都會では、犬も散步が必要なのだ。

犬とは違つて、猫の散歩といふものは、まだ聞いた事がない。が、何かからボオ・ナッシュだとか、ボオ・ブランメルだとか、又はオスカア・ワイルドと云つたやうな洒落者(ダンディ)が、今ならさしづめアメリカニズムが人間に化たやうな、洒落たネクタイに鼻眼鏡の男が、猫を連れて、銀座通りを散歩でもするとしたらどうだらう。それはすばらしい洒落ではあるまいか。

むかうから二人連れの氣の利いた瀟洒な男がやつてくる。一人は少し猫背ながら、すつきりとしたスタイルのチャプリン髭にロイド眼鏡の最新流行型の男。一人はずつと小柄で、背も一層猫背で、一寸踊つてゐるやうな身體つきだ。その二人がいかにも愉快さうに、ステッキを振廻しながらやつてくるのだ。

行違ひざま、ふッと見ると、その小柄な方の男は、莫迦に短い撫でたやうな顔をして、ピンと髭を兩方にはねて、眼がまんまるで、不思議な事には、耳が莫迦に立つてゐて、帽子の兩側に飛出してゐる。

何だか妙に猫に似た男だナと思つて、よくみると似てゐたのも道理、本物の猫ぢやないか、驚いた、ぢやいま一匹の方は？

そんな事でもあつたら面白いと思ふ。だが、これはホフマン式なメエルヒェンの世界だ。

美しい女を伴つての散歩なんぞは、靑少年の憧憬であらうが、私などは、美しい女を連れずともよし、犬を連れずともよし、猫を連れずともよし、ステッキなくもよし、ただゆつくりと、ぶらりぶらりと、いろんな空想や、思考に耽りつつ、煙草をくゆらしつつ歩いて、疲れたところで休むのに、靑い草の一間四方でも生えててくれるといいのだが、さう註文通りにはゆかない。そこでカフエエか、レストオランに入るのだが、このあたりでは、神樂坂通りを除けば、郊外に近ければ近いほど、いい家がないやうだ。（大正十五年二月）

早春雜記

×

「春くる毎に人は老いる」かういふ詞があるけれども、それは物の理といふものであつて、人の情としては、かへつてその反對の詞を選びたい、「春くる毎に人は若やぐ」と。

×

春まさに動かんとする氣配――さういふものをしみじみと感じたのは、いつの年であつたか、あの江戸川の堤を歩いた時であつた。

どういふものか、私は早春の頃になると、この江戸川の堤を歩いてみたくなる。

はじめて行つて見たのは、もう十五六年も前の、やはり早春の頃であつた。その頃、柳原でやうやく買ひ求めた釣鐘マントを着て、ぶらりと市川の停車場に降りた私は、眞間の手兒奈の祠をめざして、弘法寺の高い石磴をめあてに歩いた。一條の砂道には、枯松葉が赤い髮毛のやうに落ち散つてゐたし、道ばたの畠には、仄かに麥が靑く芽ぐんでゐた。今ではもうすつかり家が建ち揃つてしまつたが、あのあたりは、もとはすつかり田舍景色であつた。

私はこんなところを、愛する女性と一緒に歩いたならと、靑年らしく空想したものだ。そして、のちにそんなシインではじまる小說をさへ書き出したものだ。あれもこれも追つつけ二昔の夢である。

手兒奈の祠には、美い白梅の花が咲いてゐた。そのおなじ樹であるかどうかは知らないが、今でもその梅の花は匂つてゐる。私は俗な祠よりも、ただその梅の花に見惚れた。手兒奈の魂はこれか、美しい手兒奈――私の靑春は、謂

ほぼおまへに結びつけられてゐる。手兒奈は私の好きな女性である。詩にも歌ひ、小說にも書きたいと思つた。その純潔な處女が、今お薩の神樣にされてゐるのは可笑しい事だが、これも理でなくて人の情であらうか。

あの少し急な位の石磴をあがると、やつぱり昔とおなじ事だ。そこの茶店のおかみさんも、昔とおなじ人のやうな氣がする。その茶店では、お寺の境內を越えて、空濠についた道を下つて、むかうの農家から水を汲んでくるのだといふ。一杯の澁茶も、そんな手數のかかつたものだと知ると、一層うまい。

江戶川の水は、いつでも緩やかだ。あの古朽ちた橋を渡つて、堤へ出ても、むろん櫻の枝は、まだかたくなに黑い。けれど、その梢には、やがて蕾となるべきコブコブが指點せられる。水のほとりには、まだ草の芽も見えわかぬ。ただ麥だけは、何處でもわづかに靑い。春近い風のまだ寒い中を、私は何處迄も何處迄も步いて行く。

×

麥を、あの靑やかに生き生きした麥を見たくなつて、郊外に出て行く。花の咲くのを待ち切れない。それほど、春は待ち遠しいのだ。

櫻よりも梅、春に魁ける梅が、その春待つ心に親しくなつかしくしみ入る。

いつか見た街頭の小景さへが、何かから忘れ難い。むかうからくる一臺の自動車――黑い貨物自動車に、二株の樹が乘つてゐる。掘り上げられた梅の樹の、かなりの枝ぶりのが。その一つは白梅、一つは紅梅で、花があちらこちらに、ボチボチとついてゐた。梅の樹の引越し――妙に春の氣分だ。春遠からじと、心はときめく。

×

前にも一寸書いた事があるが、先年、友人と岐阜に行つて、長良川に案內され、川を溯つて、そのぐるりとめぐつたところで、舟から見上げた高い斷崖の上の、山下の村道に、點々と農家の散在した間に、白く、繪のやうに梅の花の

咲き續いてゐるのを見た眺めは、何とも云へなかつた。

私達はそこで舟を捨てて、かなり急な崖の道を上つて、上の道に出た。その道は長良の方から川づたひに、岩の下をめぐつて、ずつと上流の方へ續いてゐるのである。その道を上へ、また下へ、私達は梅花を賞して歩いた。

その折りに斡旋してくれた岐阜の若い人の中にゐた、一人の女の人は、その後何か不幸な戀愛事件で、毒を仰いで自殺を圖つたといふやうな噂も聞いたが、昨年であつたか、京濱電車の中で、思ひがけなくその人から聲をかけられて、はからぬ再會にその無事な姿を喜んだ。今は蒲田にゐると云つて、背中に子供を背負つて、傍らにはその良人らしい人の姿も見えた。いろいろ懷舊談をして、その人が蒲田で降りてからも、私は暫く人生の推移といふ事を考へた。色の白い、情熱的な眼つきをした、才氣の勝つた人であつた。

×

梅の花で思ふのは、「不見西湖林處士、一生受用只梅花」の風流だ。いかにも東洋人らしくて嬉しい。芭蕉が「梅白しきのふや鶴をぬすまれし」と吟じたのも、もちろん林和靖の故事を念頭に置いての事である。

水邊に、しかも宵い竹林か何かを背景にして、白梅の匂つてゐる眺めは、直ちに東洋の詩の味ひであらう。いつの年だつたか、梅の頃に雪が降つて、その白い雪の中に花がいぢけてよごれたやうに見えた寒さも、忘れられない。梅は清高の隱士、寂しいのが心に殘る。然し、その寂しさの好きな私も、やつぱり櫻は好きである。

×

ケエベル博士は、日本の國民的花は、堅い、硬ばつた、萎むを知らぬ菊ではなく、絹のやうに柔かな、華奢な、短命な櫻であると云はれた。菊は幾分支那的の感じが強いが、それだけ豐かな、ねばり強い、何か隱れた力が思はれる花だ。まづ、大輪の黄菊を見よ。それは新しい日本人にとつては、何かを暗示するものがあらう。

菊はもちろん支那傳來のもので、萬葉集にはまだ現はれてゐないが、梅の歌は大宰帥大伴卿の宅の觀梅の宴の歌をはじめ、甚だ多い。それが平安朝に入れば、もう櫻の世界のやうな氣がする。もつとも、或る國學者の擧げられた統計によると、王朝の宮廷の樹木は、梅が第一で、次ぎに櫻のやうではあるけれど。そして、今の歌壇では、萬葉の精神を奉ずるアララギの人々には、梅の趣あり、平安朝趣味の與謝野夫人の歌には、櫻の華やかさを見る。

×

花と國民性との關係、花の好尙に現はれる時代思想の變遷なども、文學史家にとつては、面白い研究の好題目であらう。

イギリスの薔薇、アメリカのさんざし……薔薇は既に我々の生活中の花となつた。やがてさんざしもさうなるであらうか。アメリカニズムの時代となつたから……。だが、私の愛は、どうもやはり梅や櫻や菊などにあるらしい。西洋花とおなじやうに、歐羅巴の詩も、いくら好きで讀んでも、どうも一皮隔てた氣がして、ぴつたり來ない憾みがある。かりに花に對する氣持だけを擧げてみても分る。さんざしなど、名だけは始終目にするが、それほど親しみのない花だ。アメリカニズムが厭なので、坊主が憎ければといふわけではない。そこで詩も、萬葉集や、西行や、李杜がなつかしくなるのだ。とは云へ、私達三十臺の年配のものには、何と云つても、歐羅巴文學がその敎養の土臺の一半を占めてゐる事は、爭はれない事實だ。

それを私はこの頃になつて、とりわけ痛切に感じてゐる。私はこの近年、聊か日本の古典文學に親しんで來たが、曾つて長い間專ら歐羅巴の文學に親しんでゐた折りに、我國の古典に對する抑へ難い思慕が湧き上つたと同樣に、我が古文學にのみ浸つてゐると、今度は歐羅巴の近代文學に對する思慕が蘇つて來るのだ。そして、私の場合は、それは特にドストエフスキイや、スタンダアルや、シャンフォールや、ニイチエであつた。

あの霞の中の花を見るやうな、源氏物語の卷々を繙いてゐるとき、不意にドストエフスキイが堪らなく讀みたくなつた。枕草子や徒然草を讀んでゐるとき、ニイチエや、レオパルヂが讀みたくなつた。

これは面白い心理である。この心理を分析してみると、隨分面白い問題が出て來さうだ。心理學者としての兼好を、フレンチ・モラリスツと對比してみるなども面白いであらうが、ここではそれよりも、一元と二元、綜合と分析、靜と動などの大きな問題にも連絡がありさうだ。そして、特に思ふことは、我々がかうした時代の混亂と不統一との中に投込まれてゐる事の利害である。それは一面、迷惑であると共に、また一面、豐富な精神の世界を惠まれてゐる事でもあると思ふ。

×

平安朝文學は、さながら春の氣分、霞の中に遊ぶやうで、何がなしに、京畿の春霞が思ひ出でられる。のんびりした空氣、遊戯氣分、そしてあの朦朧とした主格ぬきの文章――フランスの象徵詩人は大喜びだらう。(ただし、これは冗談である。)其の舞臺の京都が、既に霞である。ぼんやりぼかされた景色の美しさ、眠たさ。

東京に居ると、何と久しくあの美しい霞を見ない事であらう。春立つとともに立つ霞、これこそ春のムウドそのもの、やや紫がかつて山を罩め、野を罩めて棚曳いてゐるその柔かさ、さながら春の命である。

春霞と春雨とは、わが國特有の趣味を帶びた自然現象で、それによつてわが植物界はいかに惠まれてゐるか知れないと、ある學者が云つてゐたが、こんな都會では、その惠みもどうあらうか。植物はとにかくとして、人間にとつては、そこでは何と情趣に乏しい春だらう。春雨の名は美しくとも、あの掘り返された街の泥濘――それを考へただけでも、うんざりする殺風景さである。

春霞も春雨も、こちらのものではない。京都、奈良の春立つ眺めも、一度は見ておくべきであう。あの大和連山の

靉靆たる眺め、東山三十六峰の春着姿、ぢつと見てゐると心の溶けさうになる霞、その霞より出て霞に入る旅人の姿——それこそ私にとつては、世にもなつかしい思ひ出である。

霞は空中の濕氣とか地溫の冷却とか風位とかによつて、高く低く棚曳いて、山や野や林の姿を美粧する、謂はば自然そのものの詩である。ほのぼのと動いて行く一つの乳色、若しくは藍色がかつた、又は紅みがかり、紫がかつてゐる春の霞、晩春初夏の頃になれば、陽炎に、靄に變つてしまふまでのほんのりとした春霞——それこそは魂のフェアリイランドである。蝶にでもなりたい。

だが、その蝶はおなじ春野の蝶である。以前はあちこちと旅から旅に經めぐるのを好んだが、今では一つところにとどまつて、そこらあたりを飛び廻りたい願ひ——その願ひの春も今にくる、もう三月だ。(大正十五年二月)

冬過ぎて春

×

雪がちつとも降らないので、あの白いものがちらちらと、少しは降つてくれるのを、何かから心持ちにするやうな氣分もあつて、冬もまだまだであらうと思つてゐると、この二三日、暖かい雨が降つて、空氣がしつとりとして、今日は不思議に快晴である。

「もう丁字の蕾があんなにふくれたわ」

「ほんとですね、何だか春が來たやうだ」

家のものたちが、緣先きで、そんな話をしてゐる。その聲につい誘はれて、何がなしにそこへ出て行つてみると、

入口の片隅の丐木の小さな木の下に片寄せてある木瓜に、すつかり芽が出てゐる。
去年買つて來たこの木瓜は、白い花で、その白が實に感じのいい色であつたが、もう今年は咲かないかも知れない。それでも、芽だけ見せてくれたのでもうれしい。
木瓜と云へば、いつかの旅先きで見たその花の可愛らしかつたことを思ひ出す。遠い遠い旅先きでみる野の花は、なつかしいものだ。春の末、汽車の窓から、林の中などを見ると、一杯に緋をこぼしたやうに咲いてゐる木瓜の花は、美しいと云ふよりも、親しい氣分にさせて、いつまでも思ひ出される。
心をやはらげて、歌をうたひたいやうな樂しさに誘ひ込む、野の花の眺めは、何處へ行つても、田園のこよない惠みであるだらうが、とりわけ信州あたりは、それが一層美しいやうに思はれる。あの中央線を、五月の頃に通れば、諏訪湖が見えなくなるあたりから、甲州路に入るまでの線路のスロオプに咲く花の氈は、實にうるはしい。武藏野などにも、あんな眺めはあるだらうか。
信濃の春を知らない私は、あゝした高原の春の小徑を、毎日毎日、飽かず歩き廻りながら、無心な無爲な、せめての一句を味はひたいと思ふ。

×

私が二三度會つた事のある若い詩人で「ポエチカ」の同人である田中準君が、
「きさらぎ過ぎればもうしめたもの」
かうした春を待つ氣分を美しい文章に書いてゐた。
「海邊の蘆は枯れ枯れてつめたい風に乾いた音を立ててゐるが、その根もとには、角のやうな綠の芽が鋭く突き立つてゐる」とも書いてゐた。田中君のゐるのは、下總の船橋の町であつた。

船橋、津田沼、幕張、稻毛――あのあたり一帶の海ぎしに、枯蘆の根もとに芽ぐむ綠の芽の生生しさは、どんなであらうか。また、あのあたりの陸地を、つらなる丘を、やはらかい東風の吹きなびける頃には、豐かな線を盛り上げる麥生の畦には、たんぽぽが、星のやうに咲くであらう……

昨年の三月はじめの頃であつた。私はひとり、あの津田沼の海のさきの方の、海に向いた飛行場の前の街道を、東の方へ東の方へと、十町あまりも步いて行つた。

溫かい天氣なのに、海からの風がひどくつて、どうかすると、吹き飛ばされさうだつた。たまに自轉車が疾驅したり、荷車が通つたりする外には、人通りとてもなかつた。

街道から右手の下の砂地に下りて、砂の間に取殘されたやうな水の帶を飛び起したり、遙か沖合ひまでも續いたその沙洲のむかうに、帆を揚げた舟の影を望んだりしながら、しばらく步いてから、ふと左手の街道の方を見ると、丘をうしろにして、一軒の農家のあるその下の崖によせかけて、辻堂みたやうな一つの小屋が目についた。その樣子が何だか茶店のやうだつたので、街道へ上つて、近づいてみると、果してささやかな茶店であつた。

私はそこへ入つて行つて、粗末な木の腰掛けにかけて、海の方を見てゐると、中婆さんが、澁茶を入れて、それから、ばかに大きい饅頭を三つ皿に入れて、すすめてくれた。

とりとめのない話をしてゐると、その婆さんが、こんなところにかうしてゐると、時によつては、東京から自殺を思ひついて、死場所を探しに來た人が、入つて來てやすむ事があると云ふ。その死體を見たわけでもないのに、どうしてそれが分るかと訊くと、お婆さんは悟り顏に「そぶりで十分に……」と云ふ。そして二月ほど前に、この上の線路で轢死した情死者の若い男女が、はじめて立寄つた時の樣子を、事こまかに話してくれた。お婆さんは、情死者をその二人ときめてゐるのである。

その日の歸りに乘つた京成電車の沿線には、美しい梅が雪のやうに白く、澤山に咲いてゐるところがあつた。

×

春近し――

毎年毎年、私はかう云ひながら、春の訪れを待ちかねる。

それに今日は、朝から、思ひがけなく、ちらちらと雪が降り出した。此頃のやうに雪が降らないと、めづらしい。まるでそれが待ち兼ねてゐた春の前觸れででもあるやうに。もつと降つてくれればいいのにと思つてゐると、積りもしないで、その儘やんでしまつた。

さすがに、もう、春の雪といふ感じ。冬が逝つてしまふ前に、ほんの申譯だけに、こぼして行つたやうな雪であつた。（大正十五年二月）

寂しい溫泉

五六年も前の事だ。友人のK君と旅の話や、溫泉の話をしたあげくに、これ迄凡そどれ位の溫泉を知つてゐるだらうといふので、二人して試みに數へてみたところ、K君は二十あまりも擧げる事ができたのに、私は甲府の東光寺溫泉のやうな鑛泉を加へても、やつと六つか七つに過ぎなかつた。

それで發奮したといふわけでもないが、その後私も東西に遊んで、今では當時のK君位には、溫泉の數も知つて來た。それといふのも、溫泉宿に泊りつけると、とても普通の宿屋には泊れなくなるからだ。長旅の身體やすめなどにも、少々遠廻りをしても、溫泉に落着く事になるし、何處にしようと行先をきめる場合にも、溫泉のあるなしが、餘

程關係してくる。これは誰しも同じ事であらうと思ふ。

溫泉はいいが、いいとは云つても、山の中などに入ると、隨分ひどい目に遭ふ事もある。一昨年の秋だつた。東北本線の大河原から入つて行く、遠刈田へ行つた時などは、少々閉口した。この溫泉は藏王山の麓にあつて、そこから寄根、峨峨などの溫泉に行ける。夏は刈田嶺神社の參詣客で隨分賑はふさうだ。白石からも大河原からも自動車が出るが、私は大河原から輕便鐵道に乘つた。ところが、それは動いてゐる時間よりも、止つてゐる時間の方が多いといふ大變な汽車で、日が暮れても燈がつかない。眞暗な野の中を、眞暗な汽車が走る。その車中には、遠足歸りの小學生が三四十人も乘つてゐて、一齊に唱歌をうたひ出した。ひとり默つてその聲を聞いてゐると、隨分心細かつた。行き着いても、泊るところがあるだらうかと心配にさへなつて來た。

けれども、途中のかなり大きな驛まで來ると、やうやく車中に燈もついたし、停車場らしく、果物や菓子を賣りに來たりした。そこで小學生は大方降りて、客は三四人、みな土地の人ばかり。やうやく遠刈田に着くと、これはまたどうだらう。めいめい旅館の屋號の入つた提灯をさげた宿引が、凡そ二十人位も出てゐて、たつた一人の客であつた私を爭ふのである。

私の泊つた某といふ家は、內湯もあるし、中でも大きな宿であつたやうだつたが、その一番いい部屋といふのが、實に武骨に出來上つてゐて、凡そ半間ばかりもあらうといふ大きな長火鉢に、宿の男が棒杭のやうな炭をざらッとあけて行く。それよりも氣になつたのは、部屋の一方が硝子窓になつてゐて、中の二枚ほどの硝子が窓枠よりも二三寸ばかり幅が狹いので、そこから遠慮なく冷たい風が吹き込んでくる事だ。そこへ持つて來て、蒲團が薄いものだから、火が消えると、もう山の中の夜氣が、犇々と身に沁み込む。女中を呼ばうにも、もう皆寢てしまつてゐる。これには弱つた。仕方がなく、湯に入つて溫まつて來た。

間もなく、隣室の客が、外で一杯ひつかけたらしい樣子で歸つて來たやうで、暫くごそごそしてゐたが、突然襖越しに私の方に聲をかけて、開けていいかと云つた。そして、襖をあけて、私の蒲團を見ると、「あなたの方もさうですか。これはひどい。こんな蒲團で寢られるものですか、これは實にひどい。新聞で叩いてやらなくちやいけない……」とその人は頻りに憤慨してやまない。何でも仙臺の新聞記者で、藏王山のスキー場の工合をしらべに來たのだといふ。「明日はウンと叱つてやらなくちや……茶代なんかやらなくたつていいですよ……こりやどうも失禮しました」と云つて、襖をしめたが、まもなく寢入つてしまつたらしい。私は寢られるどころか、二時間位もすると、また身體が冷えてくる。また湯に飛込む。四五囘もそれを繰返して、やつと夜が明けた。こんな經驗は、私には初めてだつた。その代り、宿料は驚くほど安かつた。

あまりに俗化した遊樂氣分の土地も厭だけれど、あまり邊鄙でも心細い。あまり混むのも厭だが、寂しすぎるのも堪らないものだ。山陰線の湯町から入つて行く玉造溫泉。そこに泊つたのは、二三年前の十二月の押しつまつてからだつた。松江の伊勢宮町の友人Y君を訪ねて、同君とその友人のH君と、Y君の家の女の人と四人で、松江から自動車でH館といふのに行つた。母屋から凡そ六七間もある長い廊下を行つた離れに案內された。つい傍に風呂場があつた。少し熱いが、綺麗な湯。外に客もなし、賑かな一座で、勝手氣儘な話も樂しかつたが、少し夜が更けてから、Y君達が歸つてしまふと、急に寂しくなつて、その夜はその儘寢てしまつた。翌日は朝起きて見ると雪が降つてゐる。後は山だし、外に客はなし、二階二間、下三間の離れにたつた一人、湯はもう自分の專用のやうなもの、普通ならばこんないい事はないのだが、その夜の寂しさと云つたら堪らなかつた。時々木の枝から落ちる雪なだれの音まで、ひんやりと身に沁みた。それに一度眼がさめると、もうなかなか寢つかれない。寂しい處の好きな私も、これには參つた。もう一晚、そこで泛る勇氣がどうしても出なくつて、その翌日は、この雪で自動車も俥も出ないといふのに、その雪

り中を十町あまり、てくてく歩いて、湯町まで出てしまつた。あんな心細い事も初めてだつた。（大正十五年一月）

結婚の一挿話

「結婚といふものは、二度くりかへすだけの價値のあるものかどうか、それは疑はしい。が、人間は一度は結婚しなければならぬやうに、また、結婚が不幸に終れば、二度でも、三度でも、やり直していいものらしい。私は八遍結婚をした男を知つてゐる」と私の知人は云つた。或はさうかも知れない。

それにしても、結婚といふものは、全く妙なものである。

私はそれについて、いろいろ考察してみたが、考察は考察、事實は事實、どうも生きた現實といふものは、人間の小さな頭ぐらゐには、入りきれないものらしい。

結婚論といふもので、あまり感心したものがない。面白いと思ふものは突飛で、實際に照らして首肯しがたく、穩健と思ふものは平凡で、分り切つた事である。が、まあ、結婚といふものは、夢のやうな詩や、高遠な哲學ではなくて、卑近な、平凡な人間界の一つの約束にすぎぬとすれば、結局、分り切つた平凡なところに落着くべきものであらう。

とすると、高遠な論議よりも、結婚の實際の一寸したエピソオドの方が、面白くもあり、爲めにもなるといふわけであらう。けれども、それは訊ねられても、私には大して面白いエピソオドもない。それに、まだ、八遍やり直した男とは違つて、たつた一度しかした事がないのだから……

また、よし何があつたにしても、それはただ、私たちの結婚が、いかに貧しいものであつたか、いかに悲喜劇に充

ちたものであつたかを示すにとどまるもののやうに思ふ。貧しいものは、いい結婚が、美しい樂しい結婚が、到底出來ないといふ事を、おくればせに、私も悟つた。で、そんなミゼラブルなエピソオドを一つ思ひ出した。

一月であつたか、二月であつたか、その日は雪が降つてゐた。寒かつた。もう降りやんではゐたが、三四寸は積んでゐたと思ふ。原宿のK先生の門をくぐる時、その上に積つてゐた雪が、ばらばらと頸にふりかかつて、襟首がぞつと冷たかつたのを覺えてゐるから。私たちはK先生の家で會つた。

二人がそこを出た時は、もう十時をすぎてゐたやうに思ふ。雪の道を二人は歩いて、靑山の通りに出た。もつと話して、いろいろ相談をしようと思つて——實に地味な考へだつたが、それでゐて私は空想の中を歩いてゐたのだ——そこのとある蕎麥屋の軒をくぐつた。すると、二人を見て、そこの男が二階に上つてくれと云ふ。

それならと、何心なく二階に上つた。私はその時はじめて、蕎麥屋の二階といふものに上つた。が、もとより私は愛を語るのではなくして、地味な世帶の方針を相談するつもりだつたのである。

そして、私はラスコリニコフ氣取りで、ラスコリニコフらしい事をいろいろと云つたやうに思ふ。自分を貧しい、虐げられた靑年の切端つまつた境遇に置き、彼女もおなじ虐げられた境遇に置いて、不幸によつて結びつけられるプウア・カップルの寂しい幸福を已れに擬して、空想的な人道主義の想念に生きんとしたのだ。

それはよかつたが、歸りぎはに、女中を呼んで勘定をして貰つた時、私ははたと當惑してしまつた。どうしたものか、普通の三倍位の勘定なのだ。私はその中に意味の違つた請求が加算されてある事を知らなかつたのだ。それで私の貧弱な財布は、そこで逆さに振られて、後には電車賃さへも殘らなかつた。私は悄氣かへつて、その蕎麥屋を出た。電車道を歩きながら、私はやうやくその事情を話して、彼女から電車賃を貸して貰つた。そして二人の歸る方角は反對なので、一人で電車に乘つた。そのために、彼女が、その雪道をひとりとぼとぼと澁谷の奥まで歩いて歸らなければ

ばならないのだとも氣づかずに。
何といふみじめな男女だつたらう。それを思ふと、今でも自分達が可哀さうになる。もつと樂しい、晴れやかな、ゆたかな美しいエピソオドを持ちたかつた――この世で駄目なら、次ぎの世で。(大正十五年一月)

食卓の趣味

食卓の趣味――それはまた日常生活の趣味である。
長い間、私はそれを知らないできた。いつもながらのかまはない書生流儀で、心に餘裕もない若さだつたので……朝の食事には、朝刊の新聞が主になり、夕方の食事には、仕事の都合やら來客やらで、ずつと晩く一人で食べたり、外に食べに出たり……
いま一つ、私に子供がないことも、そんな風になる一つの理由であつたらう。食卓を圍むには、子供の嬉々たる笑聲が、團欒の氣分を完全なものにするであらう。食物の味ひは和樂によつて深められ、手料理に味をつけるのは人情そのものである。
けれど、私もだんだんと、幾らかはその趣味を解するやうになり、食事が樂しみにもなつて來た。
寒い底冷えのする日の寄せ鍋、葱鮪(ねぎま)、京都から來た素燒の玉子燒で、自分で玉子を燒いて、同じく素燒の鴆かんかんで燗をして飲む酒の味ひ……何だかから俳人めいた氣持である。
それは食卓といふより、食膳の趣味であるかも知れない。もつと文化生活風の卓上に薔薇の花でも飾つた、ああした趣味も、人によつては、もとよりわるくはなからうと思ふ。(大正十五年一月)

忘られぬ言葉

「……家へ歸つて叱られちやふわ、そんなばかなことを……」

そのあともない、さきもない、ただそれだけ……

學校歸りらしい十五六の二人の女學生。かう云つた一人の方は、手にアネモネの切花をさげてゐた。

さて、それは何の事だつたのだらう？　それはどんな祕密だつたかしら？

この通りすがりに聞いた言葉が、なぜだか忘れられない。（大正十四年十二月）

誹謗に堪へる力

×

ツルゲエネフの『散文詩』には、その友人の惡口を言ひ擴めて歩いた靑年の滿足を描いてゐる。彼は自分がつくり出した誹謗を、他の友達の口から聞いて、自分でもそれを信じるに至つたのだ。何といふ幸福、そして何といふ善良さよと、ツルゲエネフは言ふ。

だが、その男を靑年にして、老年にしなかつたのは、ツルゲエネフが或る一部の人々から、甘いと云はれる所以であるかも知れない。その友人の誹謗に成功して、雀躍(こをどり)してゐる老人――何と痛烈な人生の觀察ではないか。

ツルゲエネフはもう一つ、一人の愚物が、皆に輕蔑されるのを殘念に思つて、一法を案出して、何でもかでも無茶

苦茶に否定し、罵倒しだして、そしてつひに、恐るべき男だ、毒のある鋭い男だと云はれて、皆に尊敬され、恐れられるやうになつた事を語つてゐる。そして、これもまた確かに人生をよく觀察して來た老齡の作家の語るところたる事を、肯かせずには措かない。

實際、世間には人を罵つて快しとしてゐるやうな人達がある。また、人を誹謗する事によつて、自分の立場をつくり得たやうに信じてゐる人達もある。考へると寂しい事である。一體どうしてそんなに、他人を對照にせずにはゐられないのだらう。そんなにも人の事が氣になるところを見ると、その人達の生活が、どんなに空虚で、退屈なものであるかが感じられて、氣の毒な氣がする位だ。人を罵り、人を誹謗せずにゐられぬのは、既に相手に負け、相手に呑まれてゐるのだ。世に謂ふ負けて勝つとは、形は負けても、實は勝なのであるが、これは形に勝つて、實は負けてゐるのである。

私達はそんなみじめな隷屬的な人間になつてはならない。人を罵るものとなつてはならない。反對に、人から罵られるものとならなければならぬ。

×

一體、誰かが一意專念、自己の信ずる道に向はうと志すと、忽ち讒謗者は增し、敵は加はるものである。そしてそのめざす處、行くべき道が嶮しければ嶮しい程、その上に落ちてくる誹謗も石ころも大きく、嘲笑の矢も鋭くなるのだ。して、これは何故であらうか?

人間が極めて世間並な考へ方をして、世間並の生活をナイーヴに肯定して、それに安んじてゐるに於いては、そこに何の矛盾もなく、何の問題もない。彼がどんなルウズな生活をしてゐやうと、それは當然のことであるから。

がこれに反して、より高いところに、何等かの目標を――それは假りに理想と云つてもいい――置いて、それを目

ざして進まうとすると、つまり、その信念に生きようとする、その目的が明かになると共に、現在の彼の實際が、忽ち問題になつてくる。そして、彼の世間並を拔けようとする傲慢に憤る人達は、その目標と實際との隔離の差を注意して、これを攻擊する事を喜ぶのである。彼がさうした高い標的を置く事は、それだけで、自分たちの現在を非難し、否定したものと受取つて、その侮辱を恕す事が出來ないからである。

×

生きるといふ事は、所詮、わるく云はれる事であるかも知れない。少しも自己を主張しない影の薄い生活は、果して生きると云へようか？　しかも自己の個性を濃厚に出して、自己の所信を斷行すれば、到底他人の非難惡罵から免れる事は出來ない。

「男子と生れたからには、人に憎まれる位な男にならなければ駄目だ。人に輕蔑され、憐憫されるやうな男になつては、もうおしまひだ」と云ふやうな意味の事を、誰かの口から聞いたやうな記憶がある。また「僕などは人に惡く言はれる度に、愈々自重の念を深くする。人が自分を謗るのは、自分の實力を認めるからだ」とは、堺枯川氏の言として傳聞した。いづれも十分に理由をもつた言葉であると思ふ。

實際、自分の價値を敎へてくれるものは、味方ではなくして、むしろ敵である。生ぬるい阿諛や、賞讃ではなくして、激烈な憎惡である、惡罵である。活動的な人々に聞けば、全く、そんな罵倒を受ける程、生甲斐を感ずる事はないと云つてゐる。相手をしてそれ位狂奔せしめる力が自分にあつたかと、はじめて自分の力を意識するとも云つてゐる。此の意味で、人は敵を愛すべきである。敵は友よりも自分を尊重してくれるものである。

×

人生は瞬間每に轉變する。そして誹謗も非難もすぐ消えてしまふ。褒貶は天を飛ぶ雲にすぎない。長く舊怨を結ん

で心を燒く愚痴にさへ陷らなければ、やがて敵もよき友である。昨日の友は今日の敵、今日の敵は明日の友、から思つてをれば、友もなく敵もない。憎むべきものもなく、愛すべきものもない。

×

愛あつて憎みあり、善あつて惡あり、勝あつて負あり。愛も憎みもなく、善も惡もなく、勝も負もない。融通無礙の心境まで行かねばいけないのだが、それはむづかしい。ただ、他人の褒貶に動かされないで、自ら信ずるところに直往邁進するだけの勇氣と信念とを抱懷するやうにならなければならぬ。無用の小事に齷齪としないだけの氣宇を有たねばならぬ。誹謗に堪へる力がそれである。

サア・ジョシュア・レノルッは、不快な事柄からは、すぐその心を轉じてしまふ事が出來たさうである。彼は惡評や罵倒などは問題にしなかつた。そんな事に頭をつひやしてゐるにしては、彼はあまりに多忙だつたのである。仕事、また仕事――その外には何もなかつたのだ。畫家が一刻でも刷毛をやすめてゐるといふのは、莫迦げた事だと彼は云つてゐる。我々もまたその點をサア・ジョシュアに學ばなければならない。自分の仕事を見出して、それに全身を打込むこと、――これが誹謗に堪へるの根源である。（大正十四年十二月）

隱れ家の歌

一昨年ごろだつたと思ふ。小石川の至道庵で、間宮英宗老師が臨濟錄を提唱せられた折りに、禪をやつてゐる友達にすすめられて、私も拜聽に出かけたことがある。その折り、一日、謠曲の放下僧について、老師は私たち門外漢にもよく分るやうな老婆心切な講話があつたが、中で「僧俗二つの道を離れ、姿言葉も人に似ぬ、其振舞を隱家と、思

ひ捨つれば安き身を、知らでなどかは迷ふらん」といふところに來ると、老師はその覇氣に富んだお聲で朗々とその文句を誦してから、自分はこの文句が好きで、これを誦すると、何とも云へない、涙のこぼれるやうな氣持がすると云はれた。そして、この隱家といふ事について、なかなかおもしろいお話があつた。私はその日歸ると、早速、近所の本屋から十年位も埃まみれになつて橫つてゐたらしい芳賀博士の『謠曲二百番』を買つて來て、放下僧を讀んでみたが、成程これは確かに禪僧の作らしく、禪宗の大意をわかりやすく說くのには手頃のもののやうに思はれた。が、とりわけ右の文句のところは、極く卑近な意味から云つても、世に生きるに苦しいエクセントリックな性格を授かつてゐるペシミズムの詩人の私に取つて、十分慰めにもなるし、またそれ以上に、或る安心立命を敎へてくれるものであつた。

間宮老師の說かれた事は、今よくは憶えてゐないが、その當時、自分の今やつてゐる仕事について、かなり迷つてゐた私には、非常にいい敎訓になつた。

この隱家といふ思想は、深く考へて行けば、どんなにでも深められる思想のやうに思はれるが、それを極く卑近にとつただけでも、私には意味がある。つまり、その隱家が、私にとつては、まづ、詩であり、文學である事を、私は直下に感得したのである。僧俗二つの道を離れ、姿言葉も人に似ぬ、其振舞を――詩を、文學を、なぜ今迄、自分はその隱家と思ひ捨て得なかつたのか？　安き身と知らで、いたづらに迷つた愚かさよ。

人間の顏はそのままで假面になるとは、誰れか佛蘭西あたりの皮肉なモラリストの言葉であつたと思ふ。それとは少し意味は違ふが、人間はその身その儘の姿の中に身を隱すことができる。自分の心が自分の隱家だ、ただ一つの達觀を得さへすれば――さういふ事も考へられる。が、ここで隱家といふのは、自分の心の安住の地といふほどの意味である。

その後見た夢窓國師の歌に、

見るほどは世のうき事も忘られて隱家となる山さくらかな

といふのがあつた。この歌などを見ると、隱家の意味は一層はつきりするだらうと思ふ。序に夢窓國師の歌について少し書いておきたい。

私のもつてゐる夢窓國師御詠には、わづかの數しか入つてゐないが、(天龍寺にはいい版があるとも聞いてゐる)それだけで見ても、私はこの人の歌を愛誦せずにゐられない。歌に限らず、總じてその人物が好きなのである。宗旨上の事は知らぬ。然し我々文學者の立場からみると、五山文學の大立物である義堂、絶海の師であるこの人は、禪宗の祖師中一番親しみのある人ではあるまいか。

夢窓國師の歌のうち、とりわけ好きな歌を少しばかり擧げてみよう。

かくせただ道をば柴の落葉にて我が住む宿と人にしらすな

おなじくは風にしられぬ世しもがなわが友となる隱れ家の花

ちればとて色はなげきの色もなしわがために憂き春の山風

かずならぬ身をばあるじと思はでや心のままに花ぞちりしく

まだこの外にもあるが、これ位にしておかう。ところで、これらの歌は、歌として見れば、それほどいいものではないかも知れぬ。所謂道歌風のものとして、歌壇の人々からはあまり喜ばれないものであらうと思ふ。私とても、夢窓國師の歌を歌壇に持出して、大發見でもしたやうな顏をしようといふのでは更々ない。ただ、序に一寸書いてみたかつただけである。

隱家はあり。

故郷はあり。

私はいろいろ迷ひに迷つたあげくに、やつぱりもとのふる巣に舞ひもどつたのである。聖書の中の放蕩息子のやうに、父の家へと歸つて來たのである。

これは一場の懺悔話にすぎなかつた。（大正十四年十一月）

老詩人の家

秋毎に、いつの年でも、心は冴えて朗かになる。しめやかに、靜かに、寂しい季節を味はふのである。今年は山で秋を迎へて、しかも、毎日々々、まはりの美しい自然にも親しむ事なしに、仕事を勵んでゐるうちに、いつか、十月の半ばもすぎた。都に歸ると、三四日は、ただぼんやりと、なす事もなく暮して、少し憂鬱に、何がなしにこの頃は、その考へ方も、心持も、幾分ニヒリスティックな方向に傾きすぎたのを、自分でもはつきり感ずる。或時は右に傾き、或時は左に傾く、その私はやむ事のない二元の爭鬪に惱む心である。不二のあこがれ、一元の調和と平靜とのアーヌングも、思へばなほ遥かな願ひのエリジウムである。

さうした間に、私はふと思ひ立つて、湘南の平塚海岸にある河井醉茗氏のお宅をおたづねしようと考へて、少し曇つた日ではあつたが、晝少し前に家を出た。それは最近、三十年の長い年月の間、一路詩のために殉じて來られたこの老詩人のために、その知友と後進とが集つて、その多年の辛勞と淸貧とをねぎらふべく、誕辰五十年の記念を祝賀する事になつてゐるので、その會の當日迄に一度お目にかかりたいと思つたのであるが、老詩人は仕事が東京にあるので、留守の日が多いから、必ず會へるかどうかは分らなかつた。が、私の目的は、それよりも、もう四年越しあの

海邊で病んでゐる、詩人のお孃さんを見舞つてあげたかつたのである。一度その病床をお見舞したいといふ事は、その長い間の思ひであつたのだ。詩人には、始終上京の都度、都合さへつけば、時々立寄つて頂けるので、度々お會ひしてゐるのだが、お孃さんとは、何と久しくお目にかからないでゐたことだらう。四五年前、まだ病みつかれないうちの、華やかな乙女の日の姿が、今でも私の目にはありありと浮ぶ。

稻子さんは――これがお孃さんの名である。――私のはじめて會つた時は、はじめて私の家へ訪ねて來て下すつたのは、十九歲位であつたらうか。色の白い方なので、その柔かな頰のあからみは、とりわけ明るくくつきりとしてゐたし、髮は黑く房々として、まことに芳紀と呼び妙齡と呼ぶ、あの全く芳ばしく妙へなる年頃の、若さに輝いた乙女は、ことによく肥つて、見るからに生々として、爽かであつた。それに、私の心を惹いたのは、その眼であつた――聰明な智的な光に輝いて、「知識を、知識を」と、絶えず前へ前へと望んでやまぬあこがれが、そこには見えてゐた。いい意味のモダン・ガアルらしく、批評的に批評的にと自分を敎養して行かうとする努力が、稻子さんにも强く現はれてゐた。さうした稻子さんの若い努力は、とりわけ語學に、露西亞文學に注がれ、また新しい文壇の思潮や詩歌の方へもそそがれてゐた。それはまだ、色さへわかぬかたい蕾の、やうやく葉の間からそれとわきまへられるに過ぎなかつたが、やがて、どんな花にか咲くことぞとの樂しい期待が、私（ひそか）に我知らぬ微笑みを誘ふのであつたのに、今、どんな彼女を見なければならぬであらうかと、私は車窓にもたれて、寂しい默想に沈んでゐた。

汽車が藤澤、辻堂と來ると、もうそこら一帶の砂地の眺めは、實にさわやかに、明るく展開してゐて、ここかしこに斷續する松林の中には、既にほほけた白い穗薄が、わが繪心を誘ひがほに靡いてゐる。その松林と薄の原との中にある砂濱特有の芋畑は、その赤く色づいた葉のチリチリした波立ちを動かせて、そこにはもう、赤い腰卷を見せてゐる娘たちがまじる一むれ、二むれの、とりいれの働き人が次々に見出された。稻にめぐまれぬこの土地にも、また捨

てがたいのは、この芋のとりいれである。

馬入川の上にとさしかかると、いつ見ても爽快なこの川の水の色である。海へ分け入る境目の廣い一線の上には、やや荒い波がしらが白くうねつてゐる。その遠近には、砂取り舟か、魚釣り舟か、かなり數多くの舟が出て、動いてゐるのもあり、とまつてゐるのもある。川を越してしまふと、もう平塚である。山手の側に向いたその停車場を出て廣場を右へ、古めかしい街道を曲つて、鐵道線路の踏切を越え、右へ入つて、ここの東海岸、佐々木病院分院へ行く道を歩いて行くと、下駄にさらさらとすれる砂の感じも淸く、ここら一帶の靜けさは、行くに從つて、深められてゆく。それやがて、松の林が、右にも左にも續いて、その中に瀟洒な小別莊が、そこにもここにも隱見するやうになつた。ここらのどの家にも、澤山のコスモスの花が、なよなよとこまやかなたわみの上に、すつきりと靜かに咲き亂れて、ここらの秋はこの花に、その粧ひの限りを盡すかとも思はれた。中には、そのかなり廣い前庭を一杯に、この花の彩りに蔽うて、廂に近く花々の搖いでゐるコスモスの家すらも見受けられた。その赤、白、淡紅色の色とりどりに、秋風にゆらぐ風情は、云ふに云へないなつかしい情趣で、このあたりに病を養つてゐる寂しい人々に取つて、この花がいかにふさはしく、またいかに貴く可愛いものとして、朝な夕なのつれづれに、えがたいものにいつくしみ眺められてゐるかが、そぞろに想ひやられるのであつた……

山羊の乳を賣つてゐる家のところまで來ると、路傍に二人の若い男が溫かい秋の陽を浴びて、何か睦まじさうに話し續けてゐる。その前を通りすぎて行くと、向うから、五十がらみのでつぷりと肥つた老夫人と、その息子らしい大學生との二人連れが、早足にやつて來て、こちらの胸に何かしら不安を殘して行つた。あまりに慌しい、憂鬱な樣子に思はれたからである。「どうしたのだらう、あの人々のみうちのものでも、どうかしたのかしら……」

少し行くと、もう幾分磯馴松の感じで、それが兩方から枝さしかはして、低く明るく圍んでゐる砂路の美しい一路

にとさしかかる。砂には松の葉がこぼれてゐる。一度見ると、復とは忘れないやうな路である。山の深い、そして高い、杉や檜の林とは、あの地底のやうな、ほの暗い山の路とは、すつかり違つた感じである。明るく、開けた氣分である。けれども、どんなに多くの病人が、それとは反對の、自然とは全く何のかかはりもない、おのれの惱みの中に沈んだ心をもつて、この路を歩いて行くのであらう。

もう直ぐかと思つても、なかなか遠い。やつと佐々木病院の分院が松間に見え出した。その病院の前から、ずつとその裏の方にと廻つて行くと、そこの小別莊の庭に彳んでゐた二人の若い女が、まじまじとこちらを見てゐる。さつきから私は、まるで自分も病人の一人ででもあるやうな、妙に沈んだ氣分になつてゐたが、それを見ると、あの女たちが屹度自分を病人だと思つて見たに違ひないといふ氣がした。私は、顏色が靑白いので、何だかひどく病身のやうに思はれる事などがよくあるので、さう思ふと、妙に氣がさした。

こんな風にして、深い砂を踏んで、松の木から松の木へ、まるで投げやりの小路を傳うて行くと、少し離れて山になつてゐる方へと曲る。山と云つても、それは砂丘の少し大きいのの上に、一杯に松が生えてゐるのであるが、目ざして行く老詩人の家は、その砂丘の松かげの家と聞いてゐるので、てつきりあれに違ひないと思つて見ると、實にいい家である。思ふにまさるいい家である。前にぐつと低地があつて、そこの畠には、蕎麥の白い花が咲いてゐる。そこら一帶の風致が、何とも云へずのびやかである。寂しいであらうとも思ふが、また羨ましい心持もする。醉茗氏がいつか「枯松葉を進ぜよう」といふ詩を書いてゐられた事があつて、そのあまりの枯淡味を驚いた事があるが、成程、ここに來てみると、實に、枯松葉と秋草の花との、云ふに云へない閑寂な世界である。

そして波の音……それは病院のむかうから既に聞えてゐた音で、どう、どう、どう、どう、といふ鈍い音だつたが、ここに來ると、はつきりとかう感ずる。「波の音が高い……」

家の横の草地の松かげに聲がして、子供が二人遊んでゐる。で、何心なくその方を見ると、その子供のそばに、あまり當てにして來なかつた主人の後姿が、しやがんで、何をしてゐるのか、一寸接木でもやつてゐるやうな恰好であつた。聲をかけると、前垂がけの姿の詩人は立上つて、そして、目をぢつと落着かせて、こちらを見て、この人の調子、どんな時でも同じやうな淡泊な、平靜な調子で云はれた。

「よく來て下すつた……」

「いい家ですね。」

「いや、どうも寂しいところで……」

さあさあと云はれて、玄關に入ると、足袋の中の砂がざらざらとする。そこで一旦足袋をぬいで、砂を落して、またはき直して、上に通つた。

三十分ほど、詩人の部屋で、いつものやうに、詩の話や今度出る記念詩集の話などをしてから、病人に會つて下さいと云はれるままに、案内されて、表の部屋、採光のいい、明るくて、感じの靜かな六疊のその部屋に通ると、そこには、緣に近くのべられた床の中に、稻子さんがぢつと仰向いて寢てゐるのであつた。白蠟のやうに透き通つた顏に、黑い睫毛がくつきりと影を投げてゐた。私の顏を見ると、その顏には嬉しげな色が動いて、病人は起き上るといふ。とめて見たが、やはり起きてもいいのだと云つて、起き上つて、そして、そのほつそりとなつたねまきのゆかたの肩に、紫の錦紗の模樣のある羽織をかけて、それからこちらに向いて、お辭儀をした。

「もつとやつれてゐるやうな氣がしてゐたが……」と私は思ひながら、目の前の稻子さんの顏や姿をぢつと見て、その思つたよりも元氣である事を喜んだ。あんなにむくむく肥つてゐた人が、よくこんなに瘦せて小さくなることができたものだと、曾つての面影を眼にゑがくと、しみじみと感じられはするけれども、私が想像して來た姿は、もつと

力の無い、衰へた姿であつたのだ。殊に、痩せてゐるとは云へ、靑ざめてゐるとは云へ、その精神的な靜かさ、淸らかさは、あだかも心靈ばかりのやうな純潔さは、丁度、みどり色の水晶のやうに透徹した氣分に冴えて見える。その病める人特有の淸らかな美に、私は惹入れられてしまつた。

「美しくなつた！」と、かう私は思はずにはゐられなかつた。それはボッティチェリか、又はダンテ・ロゼッテイのゑがいた或る女性の面影を偲ばせる、たましひがおもてにその儘透いて見えるやうな美しさで、とりわけその眼は――あの昔の豐かにふとつて、白くむくむくとしてゐた日のそれとは、ずつと違つた、ずつと高い、ずつと純化された情操に輝いてゐるのであつた。そして、私はそこに、病める人の緊張した生命感ばかりでなしに、また、此人の獨特の張りきつた、强い性格が見えるやうに思つた。

「近頃何かいい本をお讀みになりましたか？」と、稻子さんは訊いた。そして私の擧げる本の名を、眼を輝かして聞いてゐる。その知識慾は、一層旺んなやうに見えた。短時間の讀書は許されてゐるので、いろいろなものを讀んでゐるやうで、その中でも、或る美術批評家の最近の著書を非常に面白く讀んだといふ事や、また、この春おくつた私の詩集の批評を書いて見たいと思つてゐる事などを話したり、

「Ｋ――さんの最近の作は大變いいさうですが……」などと云つて、私の意見を訊いたりした。そこへ老詩人が入つて來て、

「一つ海に行つて見ませんか」と誘はれる儘に、私は病室を離れて、低い下駄を借りて、玄關から砂地に出た。老詩人は前垂をしめた上から、セルの羽織を着た姿で、太いステッキをさげて先に立つて、前の低地へとおりて行く。畠の中を左へ出ると、やがて松林の間に、一條のかなり廣い道が、濱へと導いてゐる。その道を行くと、私は故郷の海岸のあの砂道を想ひ起さずにはゐられなかつた。私が幾度も幾度も歩いた道、私の夢と涙とをそそいだ道、そして、私

の愛する男と女とが、その一つの死への戀へとあこがれた道を……
「今日は海が少し濁つてゐる……」といふ老詩人の言葉が、私をその瞑想から呼び醒ました。葭簀の風よけの切目から外へ出ると、廣い廣い砂濱である。右は大磯、左は馬入川の川口までであるが、この風よけから波打際までが隨分長い。二人はその波打際まで歩いて行つて、今日は特別荒いといふ波の白く捲き返る有様を、暫く眺めてゐた。やがて、老詩人は後を振返つて、大磯の後の黑い山、その右手に高まつてゐる大山、丹澤山、また、左に高く連つてゐる箱根の山、伊豆の山々は微かにそれとしか見えないが、箱根の山をあれが明神ヶ嶽、あれが何と、一々ステッキでさし示してくれた。その明神ヶ嶽の肩のところにかかつた橫雲は、紅に染められて、忽ち、そこの雲間から落日の影が金色に、ずつと波の上に長く落ちて來た。かへりみると、海のかなたに積み重なつてゐる雲の白い尖端も、その反映にほのかに紅く彩られて、その下の海の色は、夕影のためであらうが、既に秋すぎて冬の感じのやうに思はれた。
海から歸つてくると、まもなく、あかりがついた。奧樣のお給仕で、老詩人と一緒に、暖かい夕餐を頂いてから、また暫らく話して、やがて別れを告げて、また病室へ行つて、丁度起き上つて、蚊帳を吊つてゐた(まだ蚊がゐるのであらうか)稻子さんに別れの挨拶をして、その攝養をくれぐれも祈つてから、私は老詩人の家を出た。
薄や松の間の細い砂路は、もうすつかり暗かつた。そして、あちらこちらの松の木の間には、微かなあかりがちらほらと、暖かく、また寂しく見えてゐた。この廣い松と砂丘とのそこにもここにも、建ち散らばつてゐる別莊の、その一つ一つの中には、それぞれ病人が橫はつてゐるのだと考へると、私の心は壓しつけられるやうであつた。そして、私はふと、何といふ事もなしに、かの織田信長が馬上で吟じたといふ「人生五十年、化轉の中をくらぶれば、夢まぼろしの如くなり……」といふあの敦盛の謠の文句が口さきまで浮んで來た。そして、ニヒリストの絕望的勇氣……といふ一つの思想が、近頃の私の否定からの肯定の思想が、またあらたに思ひ起された。そして、この寂しい海邊の砂

丘のひとつ家の老詩人と、その病めるお嬢さんの上に、祝福のあらん事を、よき恵みのあらん事を祈りながら、私はその暗い路を町の方へと歩いて行つた。（大正十四年十月）

高原を想ふ

それは日本アルプスを見わたす桔梗ヶ原であらうか、もしくは淺間山の雄姿をちかく見上げる佐久の高原であらうか、或ひはまた駒ヶ嶽を傍らに、富士の高さに驚く富士見あたりの高地でもあらうか。爽かな清い空高く、冷たい風が吹きすぎて、杉の林や、白樺や落葉松の林や、樅の林などの並び、生ひしげる木々の奥ふかく、魂は小鳥のやうにあこがれてゆく、詩人の夢である。

「我れは行かまし、ハイランドへ」から歌つたのは、かの純朴なスコットランドの詩人ではなかつたか。

「我れは高原を愛す」から吟じたのは、若き日の獨歩であつたやうに思ふ。私もかういふ詩句が、時折り脣頭にのぼる。

「我が心は高原にあり……」と。

人はよくかういふ事を私にたづねる。「海がお好きですか、山がお好きですか」と。以前、私は、多分、海の方がいいといふ風に云つたやうに思ふ。海にちかい山陰道の町に生れて、小さい時から海への親しみの多かつた私は、山を知らなかつたからである。所が、近年兩三回遊んだ事のある信州の風光は、いたく山の美を、若くは高原の美を私に敎へてくれたといつてよい。とりわけ近年になつて、旅を好む癖をもつやうになつてからは、好んで山地の旅をする。そして少しづつでも、山登りをする。この春などは榛名の山々をめぐつて、心ゆくままに山路をふみわけ、人の通らぬ

谷間の小みちに迷ひ込んで、小鳥のやうに、岩間の淸水をむすんで飮んだりした。それも今は懷かしい思ひ出である。然し、高原は、單にその風光の淸爽によつて、私の目を喜ばすのみではなく、私にとつて望ましい一つの高い精神を、私に語つてくれるのだ。それは何と云はうか、眞摯の氣と云はうか、孤高な心と云はうか、それとも思索に倦まぬ向內性、獨逸人の所謂グリュウベルンのそれであるとも云はうか……考へたいものは山を喜ぶ。頭の淸澄を欲するものは森林を愛する。

高原の國、信州の地には、由來聰明な人が多い。沈着な人が多い。文壇にあつても、あの考へ深い島崎藤村氏に、私は山岳の氣を感ずる。その他、吉江喬松氏、窪田空穗氏、島木赤彥氏……どの人を見ても、一味の共通したものがあるやうな氣がする。詩人を見ても、何處か哲學者風だ。日夏耿之介氏のやうな特異な詩人も、そこから出た。それから婦人であるが、信州の生れだといふ婦人に、怜悧な人が多いのを發見したのは、昨今の事ではない。容貌といひ、ものごしといひ、理性的で、冷靜である。これは一面缺點になる場合もあらうか知れないが、然し、十分に長所であると思ふ。

一言に云へば、信州は賢い人の多い所である。そして眞面目で、深味のある人が……そして、そこには、落着いた着實な生活がある。讀書を愛する若い心がある。新しい知識を求めてやまぬ渴望がある。實際、信州には文學を愛好する人が多い。そして、生れながらの詩人といふやうな人が、隨所に見かけられる。私が信州への旅をいつも樂しく思ふ點は、それらの人を思ふからでもある。惠まれたる高原の若き人々よ。私はいつもかういふ事を、あなた達に望んでゐる。あなた達の各々にもつてゐる高原人らしい特徵、つまり獨立した氣象といふやうなもの、その自己の個性に忠實な所から出てくる飽くなき精進、また、冷靜な批判力、人生に直面しての冥想、自然への愛と觀察、さういふものの融合された獨自の藝術活動を十分に示して貰ひたいと。

曾つて私は藝術家の熱烈な意志を說いた。表皮より核心に徹せんがための孤獨の精神を高唱した。人々がもつと內面的になつて、かの「人間的に意味あるもの」に觸れん事を願つた。これは文壇からは何の反響もなく、むしろ生意氣として斥けられてしまつた。また、實際、生意氣であつたかも知れない。ところが、最近になつて、各方面から、曾つて五六年も前に私の說いたのと同じ意味の事が、眞面目な新進の人によつて叫ばれるやうになつた。これは喜ばしい事である。私自身として云へば、人生に適せぬ人間として人生に順應せんとする如く、文壇の一隅に、自分一人のささやかな營みを續けながら、勇ましい戰ひの叫びを聞いてゐようと思ふ、つまり、私は今、破壞的より調和的になつたのである。然し、曾てのその主張に、最も熱烈な共感を見せてくれた高原の國の人々は、今の私の調和的態度をも是認してくれるであらう。根本は依然として變る事なき高原的精神である……平原的低迷の上に、聳え立つ高俊の靈の象徵へのあこがれである。――こんな風の挨拶をもつて、私は高原藝術の誕生を祝したいと思ふ。（大正十四年九月）

文化と教養

先頃、或る婦人雜誌から「丸ビルの印象と批判」といふ題目について質問を受けたが、その質問の中に「ある意味で我國現代文明を代表してゐるといつてもよい丸ビル生活及び生活者」といふ言葉があつた。それを私は面白いと思つた。そして又、事實それに違ひないとも思つた。丸ビルは――丸の內ビルヂングをつづめて丸ビル、これ現代的の簡便主義である――いろんな意味で、現代文明の象徵といつていい。そして、その內部に勤めてゐる若い人達によつて、私たちは所謂新時代の傾向を容易く看取し得るのだ。

いつであつたか、私はさうした若い人達の中から、强盜をはたらいた靑年と、貞操を金錢に換へた若い女性とを出した事を、新聞紙上で讀んだ。が、その人達の大體の俸給の高を知つて、そのいかなる名家の令孃かと疑はれるきらびやかな裝身具や、氣の利いた瀟洒な若紳士然とした服裝を見るものは、この事實をもさして驚くべき事實としては受取らないであらう。もとより、丸ビルに通勤する若い人達の中に、堅實な方正な人々がないと云ふのではないが、あの氣分を呼吸してゐるうち、その中での比較的意志の薄弱な、道德的缺陷を有つてゐる人が、その現實と虛榮との破綻を、かうした形で暴露するに至つた事は、極めて當然の事であらう。それは責めるべき事ではない。むしろ現代の所謂文化の犧牲者として、氣の毒に思ふのである。

私は文化そのものを否定するものでは決してない。然し、現在の所謂文化が、自分の考へてゐるそれと、著しくその內容を異にしてゐる事を、頗る遺憾に思ふ。この數年來、文化生活といふ事が頻りに唱へられた。そして文化住宅、文化村、甚だしきは文化お召、文化鍋に至るまで、その文化ばやりのすさまじさは、一にも文化、二にも文化、文化ならでは夜も明けなかつた。しかも、その文化なるものの性質を吟味してみて、それが常にただ外形のみであり、形骸のみであつて、一向に內面的意義を有つてゐなかつた事を發見した時、いかに寂寥の感に堪へなかつたであらう。

現代人の心が、ひとへに外へ外へと向ひ、現實主義、物質主義に赴いて、精神生活がいかに閑却され、內部生命がいかに空虛になりつつあるかといふ事を、かの所謂文化生活なるもの程、端的に表明したものはない。科學の尊重はもとよりよし、科學知識の普及も喜ばしい。生活を快適にし、便利にするのも、もとより人間として望ましい事である。けれども、そのために內部が全く空虛にされ、精神的の墮落を將來するならば、そこに十分に考慮すべき問題が潜んではゐまいか。

一體、我國の維新以來の人心の傾向は、實利主義であつた。明治初年に、奈良の大寺を破却してかへりみず、不忍

池をさへ埋立てようと發議した。當時の有力者の精神は、繼續して現在に及び、愈その甚だしきを加へて來た。現に上高地の勝景を破毀して、發電所の貯水池にしようといふ企てなど、その露骨な現はれである。そして、この實利主義は、社會のあらゆる方面に瀰漫して、人心は目前の利を爭ひ、物質的の快樂をのみ追求して、その滿足のためには、何事をも敢て辭さうとはしない。かくて、內を空しくして外を飾り、質朴を嗤つて、輕薄を誇り、萬事見てくれの間に合せ主義をもつて、至極、お手輕に、輕便主義で、淺く氣輕にすまして行くのだ。

文化といふ名は美しいが、現在に於けるその內容は、要するにこの實利主義、簡便主義から一歩も出てゐないやうだ。實質なくして外觀を誇らうとする。凡ての根本的、永久的性質のものを捨てて、一時の間に合せの輕便主義で行かうとする。これが現代の所謂文化主義の實際である。

かの文部省案の漢字制限といふものが、この輕便主義の現はれではなかつたか。今度決定された新假名遣法とかいふものもまたその甚だしいものである。これに對しては有力な反對說が、國學者側の人々から擧げられたが、私もそれに同感である。かの何々委員なる人々が、この案を決定した理由は、要するに舊假名遣法は、子弟の學習が困難であるといふ一點に歸着するやうに思はれる。その親切は有難いわけであるが、然し、事實はどうであるか。聞くところによると、近時、學生の學力の低下は著しいものがあると云ふ。漢學の力の低下は云ふ迄もない事であるが、英語の學力さへもさうだと云ふに至つては、今更驚かずにはゐられない。そして、かうした時代に、文化々々と叫ばれる事は、二重に面白い現象である。

私は今の所謂文化なるものを好まない。然し、それは眞の文化を拒否しようと思ふからではない。反つてこれを重んずるからである。私は今の文化といふ言葉が、全然その意味を變へて、內面的意義をもつ事を望む。カルチュア、卽ち敎養こそ、文化の眞の意義でありたいと思ふ。敎養とは、單に外面的の修得ではなく、むしろ內面的の鍛錬である。

人間存在の意義を外部に置かないで內部に置く事である。虛榮を捨てて眞實に就く事である。要するに、人間としての完成のための努力に外ならない。

一體、今の時代ほど教養の深義の閑却されてゐる時代はあるまい。凡てがいい加減な、ごまかしの、西洋文明の皮相な模倣の時代であるから、止むを得ないのかも知れないが、最早さうした盲目的崇拜から目覺めていい時分ではあるまいか。歐羅巴に於いてさへも、既にシュペングラアのやうな人が、西歐文化の沒落を唱へてゐるのである。然し、西洋人が自己の文化を否定するのを見て、はじめて目が醒めるやうでは情ない事である。徒らにその形骸をのみ模するはまた危ない。我々はそれを脫して、獨自の文化を築かねばならぬ。それには、教養も教養、根本教養によつて、まづ自己の人格的完成に努めねばならぬ。そして、我々の根本教養は、思ふに東洋的傳統のそれに據るべきではあるまいか。（大正十四年三月）

沈默の思慕

×

高野山には、無言行者と云つて、もう何年も無言の行をつづけてゐる行者があつて、大變人の尊崇を受けてゐるといふことである。人間が本來、孤獨と沈默とに堪へられぬといふ弱點を有してゐることを考へれば、それだけでも、その行者が尊崇される理由は領けるが、殊に、あらゆる神祕道の奧儀が、この無言沈默の中に見出される事を理解すれば、その行の意義は更に一層明らかである。

我々が語りはじめる時、魂は沈默するとは、古い立派な言葉である。私達は時として、沈默のいかに尊いかを切に

感ずることがある。然し、ひとたび自分の生活を反省する時、沈默について語ることは、まことに氣恥かしい思ひがするのである。文學者の生活は、畢竟絶えざる饒舌の生活だからである。たとへ口ではどんなに沈默を守つてゐても、その筆は口に代つて喋るのだ。

一體、何のために、こんなに書きに書くのだらう。それは書かずにゐられないからである。ラスキンは「自分が物を書くのは、ただ自分の心の重荷を下して、再び自由の身にならんがためである」といふ意味の事を云つてゐる。たしかにそれは、一面、或る内部的な抑壓から自分を解放する事でもあると思ふ。丁度、自ら醫者となつて、心の放血をやるやうなものである。また、堰を切つて、水を落すやうなものであるとも云ひ得られよう。

だが、この事は、私一個にとつては、たとへ詩作上については云ひ得られるとしても、感想や論文の場合には、そのまま適用する事が出來ない。それは私自身、思想上の學童にすぎず、心境に於いても至つて未熟であるがためであつて、もとよりそこに堰を切つて放つやうな壯快味があらう筈はない。それはむしろ、哀れな瘦馬の喘ぎである。

全く、私がかうした感想を書くといふことは、他の人に何物かを與へるのではなくして、專ら自己敎養のためであると云はねばならぬ。卽ち、自分の考察を整理し、自分の境界を開展したいがためである。筆を持たないで、思索の道をすすめ得るほどに、强健な頭腦は有たないし、殊に、思索といふ言葉を用ゐるのは氣恥かしい程、ただ感想するに過ぎない身分であるが、その感想も書かなければ消えてしまふ泡沫のやうなものである。

そこで兎に角何か書くとする。ところで、問題はその後にある。いかに筆を持つことを自己敎養の道なのだと決定して見ても、さて、その書かれたものを見る時は、いつでもさうだが、實に言ひやうのない不滿の情が心に漲らすにはゐないのだ。それは自分の力の足りないのを今更に知るためでもあるが、もとよりそれは覺悟の前であるから、そんなに問題にはならないが、實にそれ以外に、もつと根本的の問題を反省させられるからである。

自分の云はうとした事は、その書かれない前には、非常に重大な事のやうに考へられる。その問題に、何とかしてはつきりした解決を與へなければならぬ。その考察をもつと推進め、もつと精緻にして、その行きづまりを打開しなければならぬ。さうした要求で筆を執つても、その書かれたものを見た時には、自分の所期通りの結果を收め得なかつた事の不滿は兎に角として、元來、その問題そのものが、つまらない瑣末事に過ぎなかつた事を見る。それが書かないでもすんだ事なのを知る。是非書かねばならない一番大切な事は、やつぱり書かれないで殘つてゐる事を悟る。大切な事はどうしても言へない、書かれない、言へば全く違つたものになり、書けばもう直ぐに嘘になる——これが私達が最後に感得する致命的な自覺である。ここに至つて、我々は人間性の嚴しい制限と相面するのである。

×

釋尊ですら、一生の倦まざる說法の後に、四十年一字不說と云はれた。不立文字の禪宗では、纔に語言あるも、既に第二義に墮すのである。思想としても、これ以上恐ろしいこれ以上深遠な思想はない。そして、それは嶮峻近づき難いものである。が、幾分かでもそれに近づくとともに、愈々その眞を認めざるを得ないものである。そして、その眞を認めれば認めるほど、ここに文字を弄する事によつて成立する文學者の職分といふものがあつて、しかもそれが自分の立脚地である事を思はずにはゐられない。そしてかの有名な碧巖の頌を想起せずにはゐられない。

江國春風吹不レ起。　鷓鴣啼在二深花裡一。
三級浪高魚化レ龍。　癡人猶戽夜塘水。

魚はすでに三級を超えて、龍と化し去つてゐるのに、なほそれをとらへようとして、夜塘の水をくんでゐる癡人——それが自分のさながらの姿であるやうな氣がしてならないのだ。

私が文學について、疑ひを抱いて來たのも、隨分久しい事である。そして、その疑ひは曾て私の著書の中にかなり

詳しく書いたから、ここに繰返す事はしないが、それは眞劍に人生の問題を考察する人々からは、正當に了解して貰へたものであつた。

廣く文學と云つても、詩もあり小說もある。が、殊に小說に至つては、最も多辯で、最も構成的なものである。小說の面白味は、それが眞理を語る事よりも、それが何物をも語らないところにあるとさへも云へよう。誇張して云へば、小說の面白味とは、究竟、無駄の面白味であるとさへも云へるかも知れない。ただし、無駄必ずしも無駄でないところに、人生の複雜味を認めなければならぬ。何物をも語らないとは、反面から云へば、凡てを語る事かも知れない。そこにまた小說の存在理由はあるのだが、それにしても「巧言令色、鮮矣仁」小說に對しては、この感を禁じ得ないものがある。たとへ、作者の人格と直接的に相關するところなくしても、なほ意義のあり得る事を見ても、およそ小說がいかなるものであるかが分る筈だ。

言葉多きは、實なし。語の簡なれば簡なるほど、味ひは深い。語多くして、意愈々少しの歎は、いつも私が切に感じてゐるところである。私が小說よりも詩の方を、はるかに高く評價してゐるのも、また一面、この理由からも來てゐる。そして、詩にあつても、それが短詩形であればあるほど含蓄深く、且つ永遠性を有すると思ふ。

私が年を逐うて、西洋の詩より東洋の詩を愛するやうになつたのは、外に理由も多々あるが、一つは彼の冗漫と煩瑣に煩はされて、此の簡潔の貴きを愈々覺えるからである。現在の詩壇には、概ね西歐の詩の模擬を事とするのに忙しくて、東洋の詩の深い味ひを全く理解しない人が多い。これが詩壇と、歌壇、俳壇等の全く風馬牛なる奇觀を呈するに至つた一つの理由であるやうに見える。

然し、詩人が眞に「詩」を知る日には、眞に「自己」を知る日には、日本在來の傳統がいかに貴いものであるかを自覺するであらう。短歌と俳句とが、いかに我々にとつて、謂はば骨髓にまで徹した詩形であるかを考へずにはゐら

れないであらう。私も短歌を離れて、既に十年を超え、俳句にははじめから全くの門外漢であつて、一時は偏見を以てこれに對した事もあつたけれど、此頃になつて、その眞の意義と眞の價値とをやや理解するに至つた。

私達詩人は、西歐の模擬を捨てて、古い傳統に歸らねばならない。そして現在の詩の散文化を救ひ、その虚脱と無味とを隱さんがための裝飾化を脱出せんがためには、この外に道のない事を私は信ずる。そして、この方向へと眼を轉ずるにつれて、文學への疑ひはその影を薄くする。文學を輝かしい宗敎的象徴にまで高めるものは、東洋的精神であるから。そこにこそ、詩と宗敎との渾一融合せる境地は存するからである。(大正十三年五月)

北陸への旅

×

何處へ行くといふあてもなく、自由氣儘に旅をしたい。誰にも知られず、ほんのインコグニトで。さう思つてゐるので、方向だけは信州ときめて家を出たが、それもやつと用意がととなふと直ぐ、汽車の時間表一つしらべもしないで、どうせ上野にさへ行けば、何處かへ出る汽車があるだらうと云ふ考へで、停車場の構内へ入つた。丁度折りよく小山長野行といふのが出るところだつた。まるで汽車の方で、自分の心組を察してくれたかのやうだつた。急いで切符を買ふ、と云ふ段になつて、一體何處へ？　と一寸まごつく。かうなると、いやでも應でも目的地を確定しなければならない。長野……上田……一寸考へて、上田にする。ひとまづ別所か田澤へときめたのだ。

駈け足で乘り込む。もうみんな乘り込んでしまつたあとなので、どうかと思つたが、幸ひさまで混んでもゐなかつた。この乘り込みが、既に一種の輕い冒險で、旅のさいさきも、まづこれで定まると云ふものだ。一體はじめての土

地へ行き當りばつたりの宿へ入つて行くのは、その結果が大半僥倖にかかはるところに、一種の冒險的氣分が伴ふものだが、この乘込みがその冒險の第一歩なのである。汽車の旅は必ずしも樂ではない。が、使ひふるしたトランクをさげて汽車に乘り込む氣分は、私は何がなしに好ましいのである。

×

久し振りに見た野の景色は、初夏である。そよそよ吹く夕風に車窓から首を出して、暮れ行く武藏野の雜木林の連りを無心に見入つてゐると、暫く覺えなかつた爽かな恍惚境に入つて行つた。高崎で日が暮れた。そして、汽車はそこで蚯蚓のやうに二つに斷れてしまふ。後の車臺から急いで前の方へ乘り換へる。いくら目的地を定めぬとは云つても、このまま小山なんぞへ連れて行かれては堪らない。

日が暮れては、外の景色も見えぬので、ゆつくり旅行案内をしらべて見る。上田につくのは十一時だ。これは切符を貰つた後で、既に氣が付いてゐたので、今は何處か途中に、小諸あたりにでも下車しようかと思つたのだが、旅行案内で、別所、靑木行の電車が、十一時半まであるといふのを發見したので、あぶなかしくは思ひながらも、上田に下りた。果して、そこで車夫にけんつくを喰つてしまつた。

「電車は九時半までしかございませんよ。それでも強つてと仰しやりや商賣ですからまゐることはまゐりますが、行つて御覽になつたところで駄目ですよ」

では、旅館へ曳いて行つて貰はうかと思つたが、やめてしまつた。去年の十一月に、この地の觀水亭といふに泊つて、冷たい一夜を送つた上に、近所に火事があつて夢を破られたりした記憶が、あまり愉快なものではなかつたので、驛で次の列車を待つことにした。それが、金澤行の急行で、一時でないと來ない、まだ二時間待たなければならない。十一時半の上りが出てしまふと、驛はガランとして、こんな時、こんな所にまごまごしてゐる、氣の利かない

旅客は自分一人だ。私は大分心細くなつて來た。そして、それから半時間ほどして、職人風の男が一人やつて來た時の嬉しさは、何とも形容の出來ないものであつた。私はその職人に聲をかけたい位であつた。けれども、その職人には、後から一人の女がついて入つて來て、別れるまでの間を、いろいろ身の上の事を話しては、涙を拭いたり笑つたりしてゐた。そして職人の方では、ただウンウンと頷いてゐるばかりだつた。多分何處かへ出稼ぎに行く男と見える。

たうとう汽車が來たが、急行列車に、途中の驛から、しかも午前一時頃に乘り込んだ人間の運命は悲慘なものだ。三等の客車を三臺見まはつても、一つも空席がないのだ。あるのだが、みな二人分の席を占領して、横になつていい氣持で寢込んでゐるから、どうすることも出來ない。仕方なしに、便所の前のところにうづくまつてゐた。やがて車掌が來たから二等にかへて貰はうと思つてゐると、彼は足を無遠慮に投げ出してゐた學生のところで、席をつくつてくれた。やつと腰はかけたものの眠れるどころでない。これで結局、午後七時の列車に乘つたと同じ結果になつた。そして上田で二時間待つただけが無鐵砲の罰となつたわけである。でも上田の驛で寒い目をしてゐるよりは、どんなにましだか知れなかつた。

×

直江津から少し外が明るくなつた。はじめて、越後の海を見た。左手はみんな山で、その山の下を汽車が通つてゐるのだが、鐵道と海岸とは相接してゐて、その僅かな空地に家が建つてゐる。つい波打際に、小さな家が並んでゐたりする。今にも波にさらはれはしないかと、あぶなつかしくてならない。故郷の方の廣い砂濱を見馴れたものには、珍しい景色である。そしてそれらの家の屋根には、みんな石が澤山のせてある。この石の事を「今にも頭の上に落ちて來やせんかと思つて、うかうか歩けもでけやしまへんで……」と、あとで歸京の車中で、大阪の商人が話してゐたが、全くそんな氣がする。親不知は、あつといふ間に過ぎてしまつた。トンネルの切れ目に、車窓のすぐ上に、一寸道が

見えたきりだ。
越中の川は、神通川をはじめ、水勢が急で、その淸冽なこと、一口飮んでみたい氣がする。海から見ると、その川が、みなかみまで白くずつと見渡されるさうだ。國全體が急勾配をなしてゐるのだ。左手の山々は、白く雪が條を印してゐる。立山、それから白山。だんだんと加賀路に入つて行くと、地勢がひらけて、いかにも豐かな、南國的なやはらかい情緖が漂つてゐる。車窓に近く、八重の山櫻が今をさかりと咲き誇つてゐたり、山の麓などに、桃の花が紅くつらなつてゐるのにも、春の名殘が偲ばれた。
金澤に八時に着いた、改札口を出ると、そこに澤山見てゐた出迎人の中で、一人の品のいい老婆が、つかつかと私のところへやつて來た、
「あなたは××さんぢやござんせんか」と聲をかけた。勿論、××さんぢやないが、それでも、これが金澤の私に與へた歡迎の辭であつたやうな氣がして、私は愉快な氣持になつて、一ぱし金澤通のやうな顏をして、驛の前からすぐ市内電車に乘込んだ。香林坊といふこの地での盛り場を通つて、公園前で電車を下りて、兼六公園に入る。大きな廣い公園で、櫻が池の面に眞つ白に散つてゐるし、躑躅、霧島躑躅が、紅く白く點綴して、藤棚には、紫の藤の花が、みごとに垂れてゐる。然し私には、公園よりも、公園の横の坂道の方が、いかにも舊城下らしくて面白かつた。
金澤は市全體がいかにも百萬石の城下らしくて、品位がある。一寸松江などに似た感じがする。
私は香林坊の方へと歩いて行きながら、誰にも知られず、誰にも會はないで、ほんとに獨りで、かうして見知らぬ街を歩いてゐるといふことを考へると、何がなしに樂しい心持になる。今は私も一個の「旅人」である、その意識がうれしい。

×

十一時すぎの汽車に乘つて、動橋まで行くと、そこから左の方には山代溫泉行きの電車が出るし、陸橋を渡つた右からは片山津行が出る。水田の間を二十分とかからないで、片山津に着く。

柴山潟はすぐ目の前にある。來てみると、それ程景色がいい方でもないが、海に近い平野と丘陵との中の湖水なのが面白く思はれる。私が長いこと片山津の名にあこがれてゐたのは、實にその湖水のためであつた。溫泉はその湖畔の水の中から湧くのである。鹽類泉で、內用の湯を一口のんでみたら、しほからくヒリヒリして、妙な味だつた。

私はわざと一番古風な宿に泊つた。格子も、天井も、柱も欄杆も、戸口も、みんな紅殼塗で、いかにも古風な溫泉宿といふ感じが私はなつかしかつた。片山津に着いた翌日から雨になつた。私は湯にひたつて、上つて來ては、雨の湖上を眺望したり、新聞を讀みながら眠つたりした。持つて行つた地形圖を頻りにひねくつてゐたものだから、宿のお婆さんが測量の技手と間違へたのも、愛嬌であつた。

かうして靜かな雨の二三日を私はすごした。

やつと雨があがつたので、その日の晝から藥師堂のある山にのぼつて、湖上を眺望した。かうして眺望すると、おもちやのやうな湖水である。彼方の海をかぎる一帶の丘陵と、此方の水田との間に、湖水は左右に帶のやうに連つて、靜かな大河のやうにも眺められる。

山には卯の花であらうか、白い花が澤山咲いてゐる。その新綠の山を歩いてゆくと、何とも云へぬいい氣持である。山はいつしか畠になつて、のびきつた菜種の花が黃色につらなつてゐたりした。山を下りて潟ぶちに出てみると、蘆が靑々と伸びて、その間に行々子が啼いてゐる。私は水のほとりに踞つて、暫らく默つて煙草をふかしながら、目の前の蘆の小舟を打つやはらかな波の音を聽いてゐた。舟は潟につらなつた水田にもうかんでゐる。

蘆の間に乘り捨てし舟による波のかたばかりなる音をば立てけり

風はまだ少し寒かつた。まだ、北陸の五月のはじめである。

偶感一つ、

「名勝と云はれるものは、あまり見たいとは思はない。それよりも、名もない一木一草に、自然の平等なはたらきを愛する。

人間も偉人とか天才とか云はれる人よりも、名もない平凡人に、ほんとの人間らしい温かさを見る。そして、それを愛せずにはゐられない。

自然も人間も、その眞のおもむきは、人に閑却されてゐるやうな他奇のない平凡の中にある。

閑却され、無視されるものの中に、眞の美と力とを見出したい。また見出し得られるであらう」

片山津に五日ほどゐた間に、仕事疲れでぼんやりしてゐた頭も大分はつきりして來た。讀むものとては新聞ばかりで、それも大阪と名古屋と金澤のとで、東京の新聞は見ようと思つても見られないのだから、こんな暢氣なことはない。湯にひたりながら、ぢつと眼をつぶつて、東京へ歸つてから書かうと思ふ作品のデテエルなどを考へてゐると、いつか眠くなつてくる。山代と山中をまはつて、それから歸京する事にきめて、今日は發つといふ朝になると、柴山潟のほとりがなつかしく、別れ難かつた。眺めやる湖上には朝日があたつて、ただ一隻漕ぎよる舟がその中に黑く、そのへさきにはねあがる波が白くきらめいてゐる。對岸の山は模糊としてゐる。この柴山潟のながめも、もう二三時間だとおもふと、殘り惜い氣がした。

×

朝、片山津を發つて山代に行く。電車は、半ば苗代をし、半ば紫雲英や菜種が紅く黃に彩つた加賀の平野を走る。電車線路にも、草が靑々と生えてゐる。半時間で山代に着く。

山代は平野の溫泉。眞中に總湯のある廣場を圍んで、十七軒の溫泉宿が、キチンと眞四角に並んでゐるのが古風である。

片山津で敎へられた宿に入る。そこには、三階には、客と云つては自分ひとりだ。欄杆のそばに煙草盆をもち出して、表を見下す。すぐ前が總湯で、その入口には、兩方の柱のそばに、菓子や果物を賣る店が出てゐる。見てゐると、あちらからもこちらからも、內湯のない宿屋の客が、ぞろぞろと出てくる。それがみんなお爺さんやお婆さんばかりで、大抵中氣らしく、中にはお婆さんの肩にすがつて行くお爺さんもある。

×

雨は時々降つた晴れたりした。その雨の合ひ間に、山代から山中へ行く。この邊では、みな女中が電車まで見送つてくれる。山中では二日とも雨にふりこめられた。

宿の二階に寢ころんで、二時間ほど、眞向うに見える雨の藥師山を眺めてゐた。靑々とした滿山の樹木の上に降りそそぐ雨が、一種の趣をもつてゐた。山と山との間を一條の溪流が貫いてゐる。その岸に湯が湧き、人家が出來たといふのが山中で、いかにも山の中の感が深いところだ。

山中や菊は手折らぬ湯のにほひ

芭蕉の句を思ひ出す。

山中には內湯がないので、外湯に行く。葦の湯といふのは、人造石の建物に、ステインドグラスをはめて、芭蕉の句が聯想させるあの古風なおもむきは何處にもなかつた。白鷺の湯といふのは、御殿づくりになつてゐて、家族湯なのであるが、湯が少いため、とりわけ溫度が低い。そんな中に一人で浸つてゐたのではつまらなかつたらうと、後で人に笑はれた。

翌日も雨はやまないので、宿の番傘をさして、小十町もある有名な蟋蟀橋を見に行く。誰も行つてゐるものはない。溪流の上にかざしてゐる若楓のみが、ひとり生々と垂れてゐる。溪流は淸冽だが、水が淺いので、それほど幽邃といふ氣分は出てゐない。ただその岩と岩との間に、魚の遊んでゐるのが、それかあらぬかに見えるのが爽かだつた。天氣のいい日だつたら、この蟋蟀橋から下流の黑谷橋まで、十町ほどの間を、船で下ると面白いのだが、今度の旅は、さういふ點では惠まれなかつた。もつとも北陸は一體に山陰などと同じ事で、雨が多いのでもあらうが、雨の片山津、雨の山代、雨の山中、まるで雨を見に行つたやうなものだ。詩をつくれば、雨景の詩のみとなつたであらう。けれども、雨の片山津、雨の山中、みなそれぞれの趣がある。天氣のいい日に來たら、その趣を知らないでしまつたらう。だから、いいのだ……と、こんなに私も、幾分かオプティミスティックな考へ方をするやうになつた。(大正十二年五月)

——第七卷『感想集』前篇了——

生田春月全集

第七卷

昭和六年一月二十日印刷
昭和六年一月廿九日發行

編輯者　生田花世
同　生田博孝
發行者　佐藤義亮

東京市牛込區矢來町七十一番地
發行所　新潮社
電話牛込（長）八〇五番・八〇六番・八〇七番・八〇八番・八〇九番
振替東京一七四二

印刷者　佐々木俊一
富士印刷株式會社
製本者　植木瀧藏